

248号住居跡出土遺物観察表

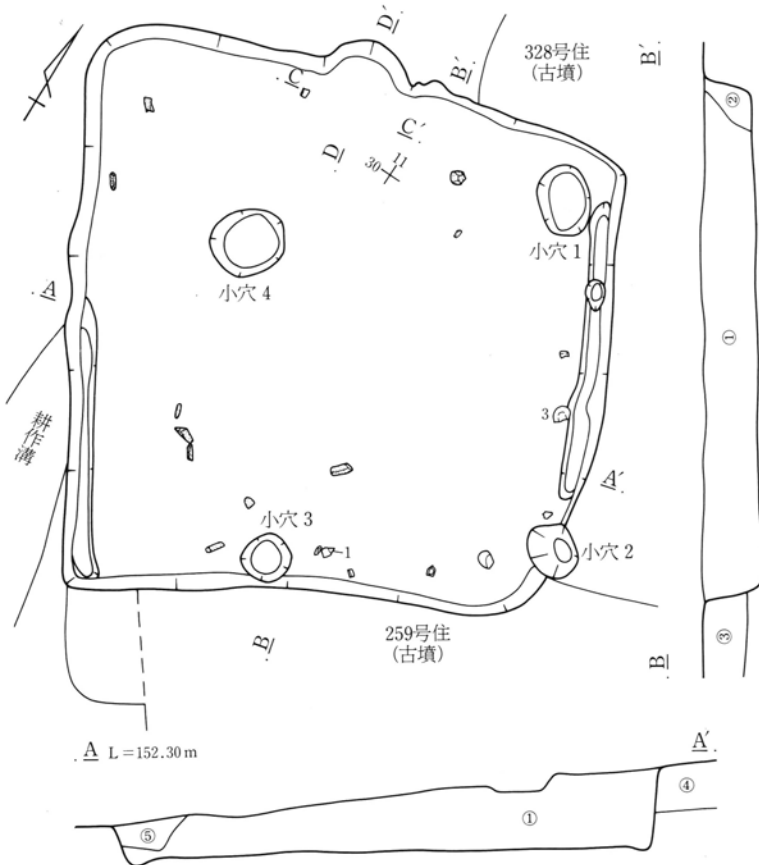
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考		
245-15	須恵器 蓋	床面+16 1/4残存	口(14.1) 高— 底—	①密 ②還元焰、硬質 ③浅黄橙色	天井部ヘラ削り。 カエリは短い。		
245-16 113	鉄製品 不明	覆土	長(3.3) 厚0.3	幅2.4 重3.4	用途及び名称不明。 側面が折り曲げられている。		
245-17 117	石製品 紡錘車	床面+9	径4.5/3.0 厚1.2	孔径0.7 重37.7	滑石片岩。広面と狭面は磨かれて光沢を持つ。 側面に中砥削りによる細い削痕が多量に残る。		
246-18 117	石製品 紡錘車	覆土	径8.9 厚1.5	孔径1.2 重123.2	砂岩。表面全体を削って滑らかにしている。 孔径が大きく紡錘車としては疑問である。		
遺物番号	図版番号	器種	法量(cm)(g)				石材・備考
19	126	こも編み石	長11.6	幅5.2	厚3.3	重305	緑簾緑泥片岩
20	126	こも編み石	長11.1	幅3.7	厚2.3	重130	絹雲母石墨片岩
21	126	こも編み石	長15.5	幅5.7	厚3.2	重520	緑泥片岩
22	126	こも編み石	長16.2	幅4.7	厚3.4	重355	緑簾緑泥片岩
23	126	こも編み石	長13.9	幅5.2	厚2.4	重260	点紋絹雲母石墨片岩
24	126	こも編み石	長13.4	幅5.0	厚2.4	重270	緑泥片岩
25	126	こも編み石	長12.1	幅3.6	厚3.0	重165	絹雲母石墨片岩
26	126	こも編み石	長12.0	幅3.8	厚3.5	重185	絹雲母石墨片岩
27	126	こも編み石	長13.8	幅5.8	厚3.3	重415	緑簾緑泥片岩

252号住居跡 (第247~249図、図版43・95・115)

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、30-11・12グリッドに位置する。

概要 本住居を含めて3軒が重複している。本住居は南側で古墳時代の259号住居を、東側で古墳時代の328号住居を床下部分まで掘り込んで造られている。3軒の重複関係は259→328→252号住居である。また西側壁面付近を耕作溝により床下部分まで掘り込まれている。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。小穴が4本掘られており、柱穴



の可能性も考えられるが疑問である。小穴1は貯蔵穴としての可能性もあるが、極めて浅いため貯蔵穴ではないと思われる。

規模 住居が歪んでおり西と東の壁面の長さが異なっている。東西4.32m、南北は西壁面部分で4.46m東壁面部分で約3.60mである。壁高は残りの良い東壁面部分で26cmである。小穴1は径54cm深さ8cm、小穴2は径46cm深さ18cm、小穴3は径38cm深さ42cm、小穴4は径60cm深さ25cmである。

- 252号住居跡
- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
  - ②暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
  - ③259号住居跡覆土
  - ④328号住居跡覆土
  - ⑤耕作溝覆土

第247図 252号住居跡実測図

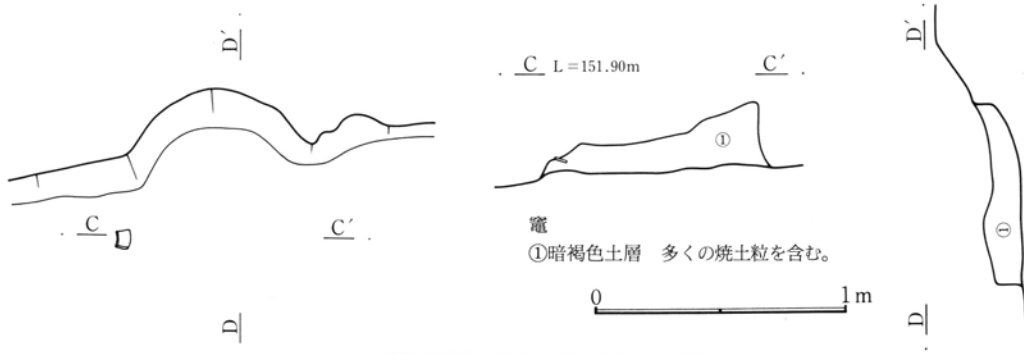
第4章 奈良時代の遺構と遺物

遺物 図示できた遺物は土師器の甕、坏、白玉の4点である。

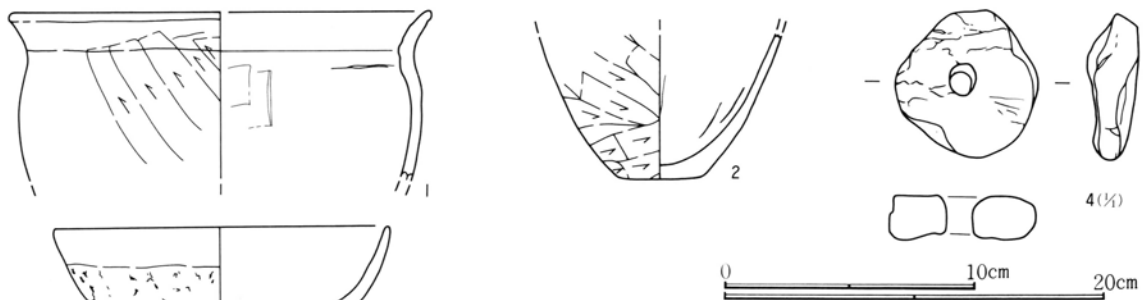
(竈)

位置 住居北壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

概要 残りが悪く壁面を掘り込んでいる煙道部は残っていたが、袖部分は残っていない。竈覆土中より多くの焼土粒が出土している。規模は不明である。



第248図 252号住居跡竈実測図



第249図 252号住居跡出土遺物実測図

252号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
249-1	土師器 甕	床面+26 口縁部破片	口(21.8) 高・底-	①やや粗、1~2mmの片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質。③橙色	胴部外面ヘラ削り、多くの砂粒が目立つ。
249-2	土師器 甕	床面+36 底部破片	底 4.0 口・高一	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質。③橙色	底面と胴部強いヘラ削り。器肉は薄く削られている。
249-3 95	土師器 坏	床面+8 口縁部3/4 他完形	口 13.2 高 4.4 底 -	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、軟質。③にぶい橙色	底面ヘラナデ。体部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。胎土がやや粉状を呈している。
249-4 115	石製品 白玉	床面直上	径 1.9 厚 0.6	孔径 0.3 重 3.9	滑石片岩。横面は磨かれたように光沢を持つ。端部を磨耗している。

253号住居跡 (第250~252図、図版43・95・96)

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、30・31-12・13グリッドに位置する。

概要 本住居を含めて4軒が重複している。本住居は西側で古墳時代の328号住居と259号住居を、床下部分まで掘り込んでおり、南東コーナー部分で平安時代の320号住居により覆土上面を掘り込まれている。4軒の重複関係は259→328→253→320号住居である。また住居中央部分を南北方向に耕作溝により床下部分まで掘り込まれている。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。柱穴や貯蔵穴は掘られていない。床面中央部に床下土坑と思われる掘り込みが確認された。

規模 住居が歪んでおり西と東の壁面の長さが異なっている。東西3.55m、南北は西壁面部分で3.68m、東



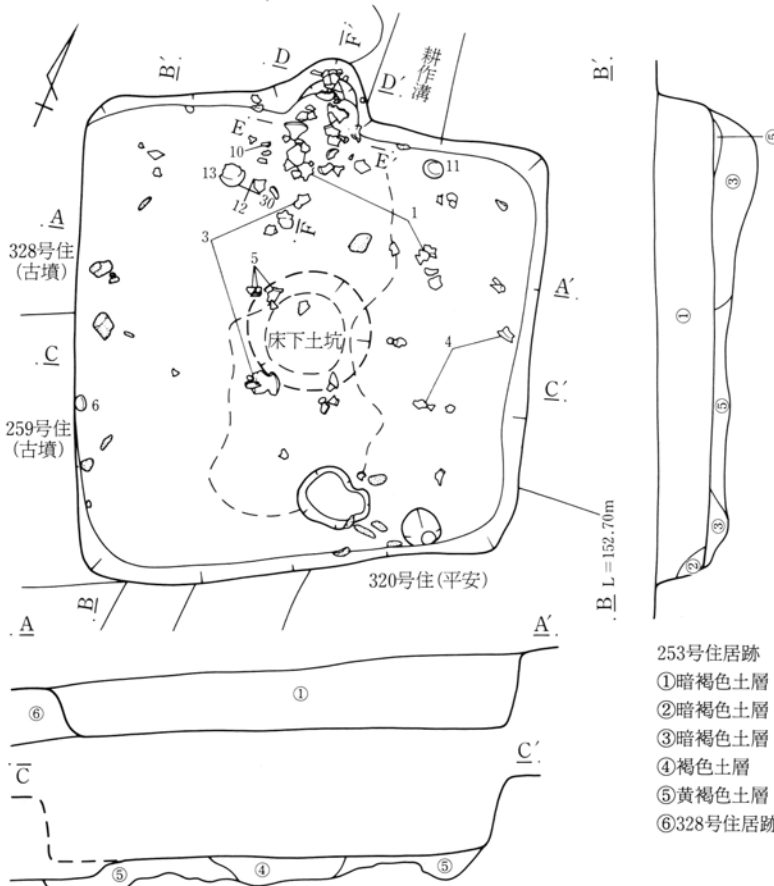
壁面部分で約3.20mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で58cmである。

遺物 竈内から土師器の甕の破片が多く出土している。線刻をもつ須恵器の蓋が目される。

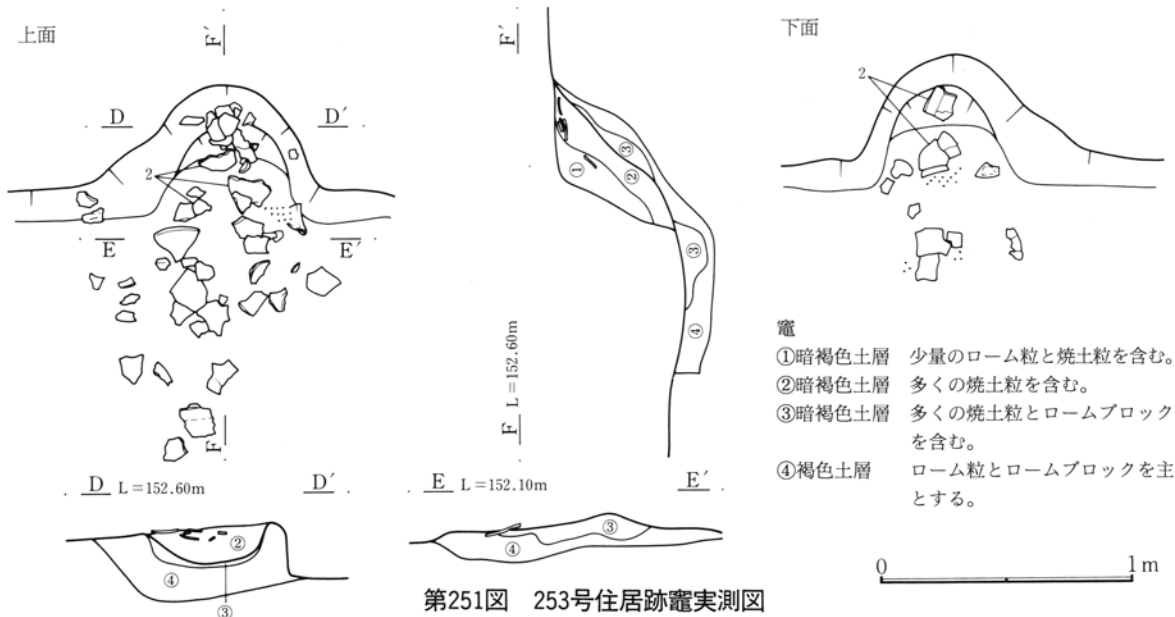
床下 床面中央部分の床下に径101cm深さ27cmの床下土坑が掘られている。

(竈)

位置 住居北壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。



第250図 253号住居跡実測図



第251図 253号住居跡竈実測図

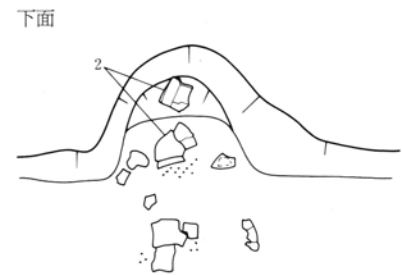
概要 残りの悪い竈であり、壁面を掘り込んでいる煙道部は残っているが、袖部分は残っていない。しかし竈内から燃焼部付近にかけて多くの甕が割れた状態で出土している。1枚の平面図では表現できないため上面と下面の2枚の平面図を用いて表現した。

規模 煙道部方向不明、燃焼部幅46cmである。

253号住居跡

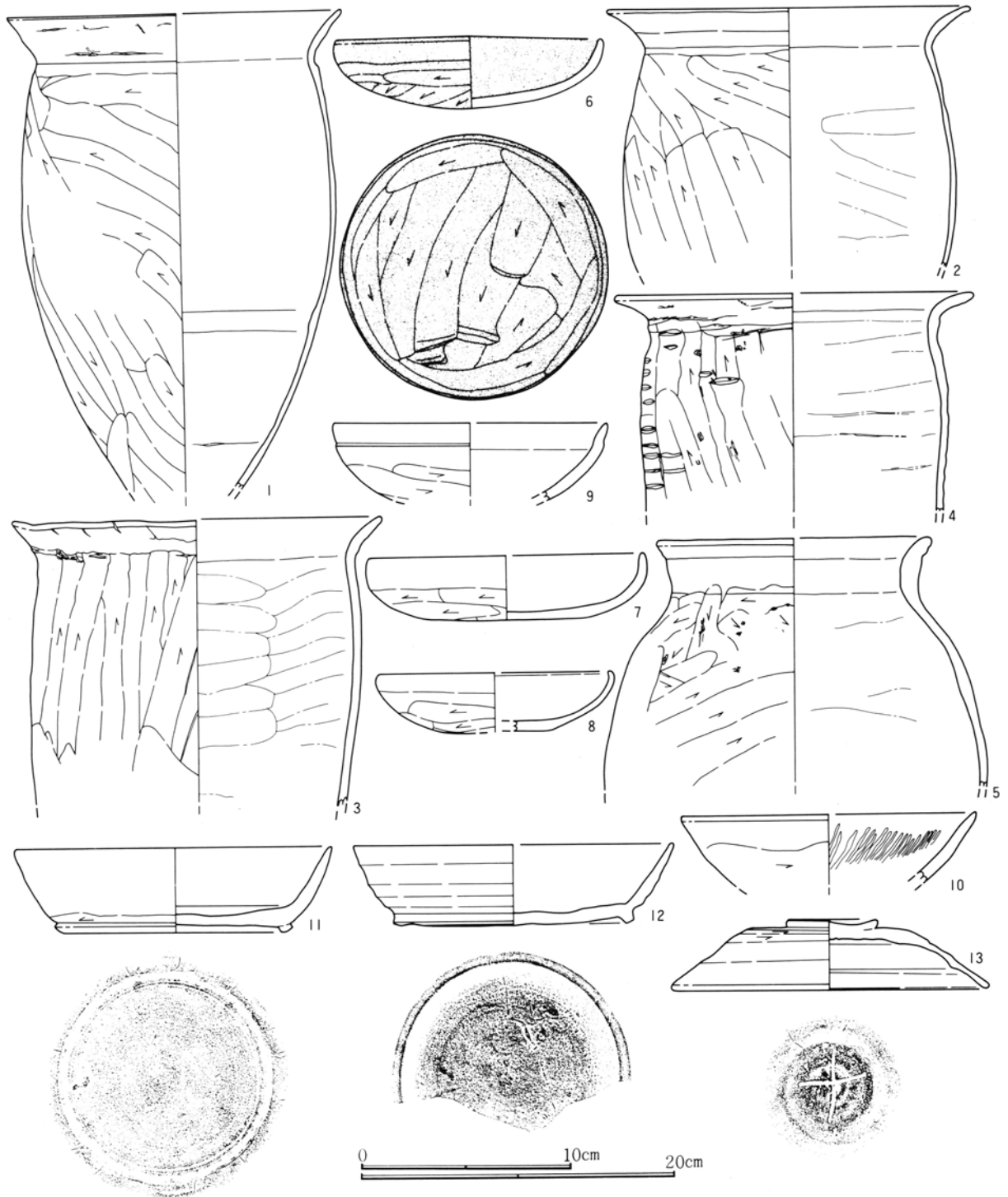
- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのロームブロックを含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒と少量のロームブロックを含む。
- ④褐色土層 ロームブロックと暗褐色土の混入層。
- ⑤黄褐色土層 少量の焼土粒と多くのロームブロックを含む。
- ⑥328号住居跡覆土

0 2m



- 竈
- ①暗褐色土層 少量のローム粒と焼土粒を含む。
  - ②暗褐色土層 多くの焼土粒を含む。
  - ③暗褐色土層 多くの焼土粒とロームブロックを含む。
  - ④褐色土層 ローム粒とロームブロックを主とする。

0 1m



第252図 253号住居跡出土遺物実測図

253号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
252-1 95	土師器 甕	床面直上 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{2}$	口(21.5) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 胴部内面に肉厚の違いから明瞭な接合痕が残る。 内外面に少量の黒斑あり。
252-2 96	土師器 甕	床面+26 口縁部 $\frac{1}{3}$ 胴部 $\frac{1}{3}$	口23.0 高— 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を多 く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部中央に浅い一条の沈線あり。 内面ナデにて器表面密。
252-3 96	土師器 甕	床面直上 口縁部 $\frac{1}{3}$	口(23.2) 高・底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質。 ③橙色	胴部外面ヘラナデ、砂粒の移動少なく器表面比較的密。 内面ナデにて器表面密。

253号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
252-4 96	土師器 甕	床面+32 口縁部 $\frac{1}{5}$	口(22.4) 高— 底—	①密、1mm前後の赤色粒と1mm以下の赤の雲母粒含む。②酸化焰、硬質。③にぶい褐色	胴部外面強いヘラ削り、削りの単位明瞭。 内面ナデにて器表面密。
252-5 96	土師器 壺	床面直上 胴部上半 $\frac{1}{3}$	口(17.2) 高— 底—	①粗、1~2mmの砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラナデ、砂粒や粘土の移動は認められるが 少ない。 内面ナデ。
252-6 95	土師器 坏	床面+22 完形	口12.7 高3.5 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、胎土が硬質でヘラの単位明瞭。 表面全体に黒漆の痕跡が残る。
252-7	土師器 坏	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.0) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③明褐色	底面ヘラ削り。 内面ナデ。 口縁部横ナデ、口縁部の器肉が厚い。
252-8	土師器 坏	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口(11.0) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
252-9	土師器 坏	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.0) 高— 底—	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	底面ヘラ削り、砂粒が移動し器表面やや粗い。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
252-10	土師器 坏	床面+33 小破片	口(14.0) 高— 底—	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	体部ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内側器表面密。 内面に多くの暗文。
252-11 96	須恵器 高台付坏	床面+5 完形	口15.0 高4.1 底10.3	①密、多くの小さな白色粒を含む ②還元焰、硬質 ③灰色	底面ていねいな回転ヘラ削り。 高台も貼り付け後ていねいに削り込んでいる。
252-12	須恵器 高台付坏	覆土 口縁部 $\frac{1}{4}$ 底部 $\frac{1}{2}$	口(15.2) 高3.8 底11.4	①密、気泡化した1~2mmの黒色粒を含む。②還元焰、硬質 ③表面灰色、断面灰青色	底面回転ヘラ削り。 高台は貼付後周辺部を含めて削り込んでいる。 ていねいなつくりである。
252-13 96	須恵器 蓋	床面+8 口縁部 $\frac{1}{2}$ 他ほぼ完形	口15.0 高— 底—	①密、砂粒ほとんど確認されず ②還元焰、軟質 ③表面黒褐色、断面灰白色	摘みはボタン状で低い。 天井部ヘラ削り。内側天井部にXの刻印。 カエリは低くわずかである。

## 254号住居跡 (第253~255図、図版44・96・113・117・118)

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、29・30-17・18グリッドに位置する。

概要 本住居を含めて4軒が重複している。本住居は西側で古墳時代の255号住居を床下部分まで掘り込み、平安時代の249号住居により覆土を掘り込まれている。東側では平安時代の257号住居と重複しており、竈上面を257号住居により削られている。4軒の重複関係は255→254→249、254→257号住居である。また住居北側壁面部分と東壁面部分を耕作溝により掘り込まれ竈が壊されている。竈は東壁面に新東竈と旧東竈が、また北壁面に旧北竈が造られている。2個の旧竈は燃焼部の大部分が取り外され、掘り込まれた壁面に痕跡を留めていた。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。柱穴や貯蔵穴は掘られていない。床面中央部に小穴が3本掘られており、大きな2本は床下土坑と考えられる。

規模 東西4.21m、南北4.12mである。壁高は残りの良い南壁面部分で31cmである。小穴1は径48cm深さ67cm、小穴2は径68cm深さ27cm、小穴3は径102cm深さ21cmである。

遺物 土師器の甕・鉢・坏、須恵器の坏・蓋等が出土している。鎌と紡錘車が注目される。

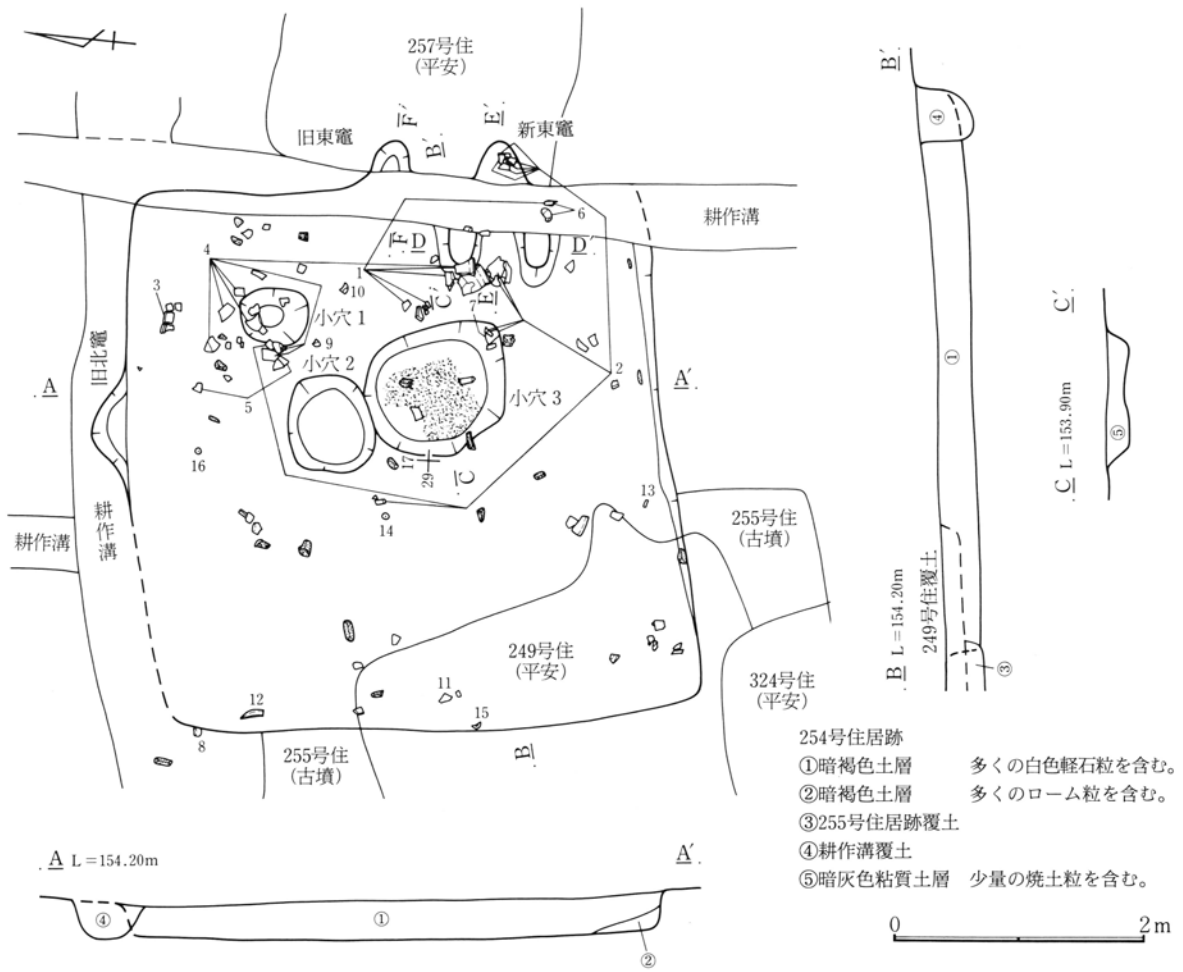
## (新東竈)

位置 住居東壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

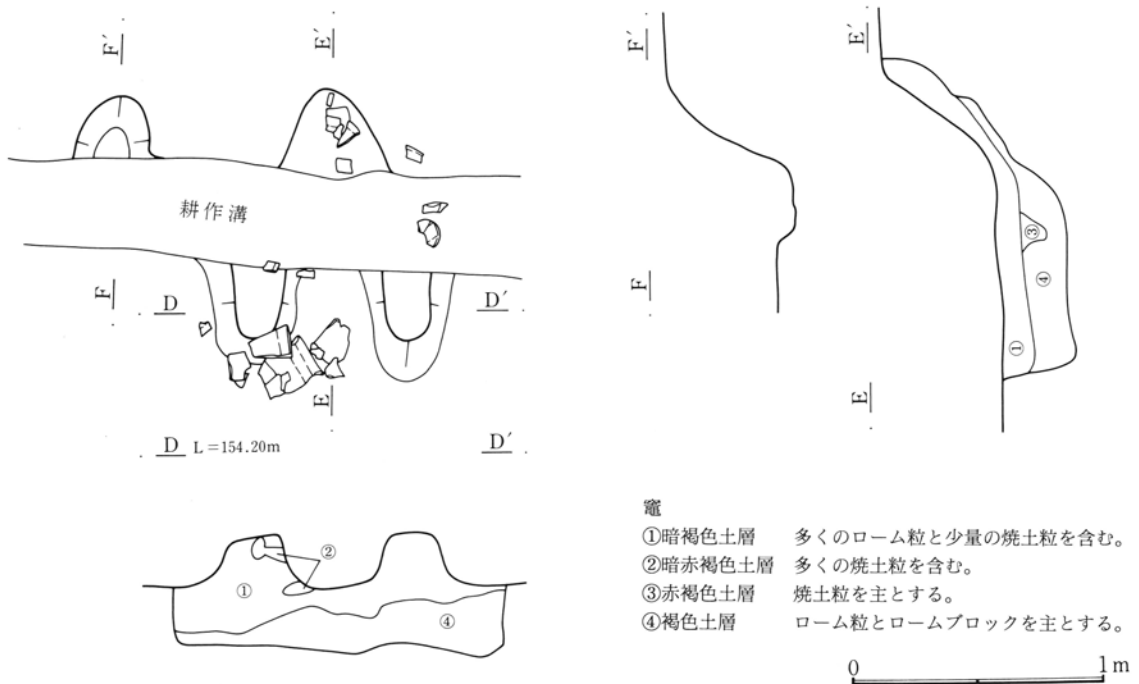
概要 燃焼部を耕作溝により削られており、残りの悪い竈である。袖部分は残っていたが、状態は悪い。煙道部や燃焼部から多くの甕の破片が出土している。

規模 煙道部方向112cm、燃焼部幅38cmである。

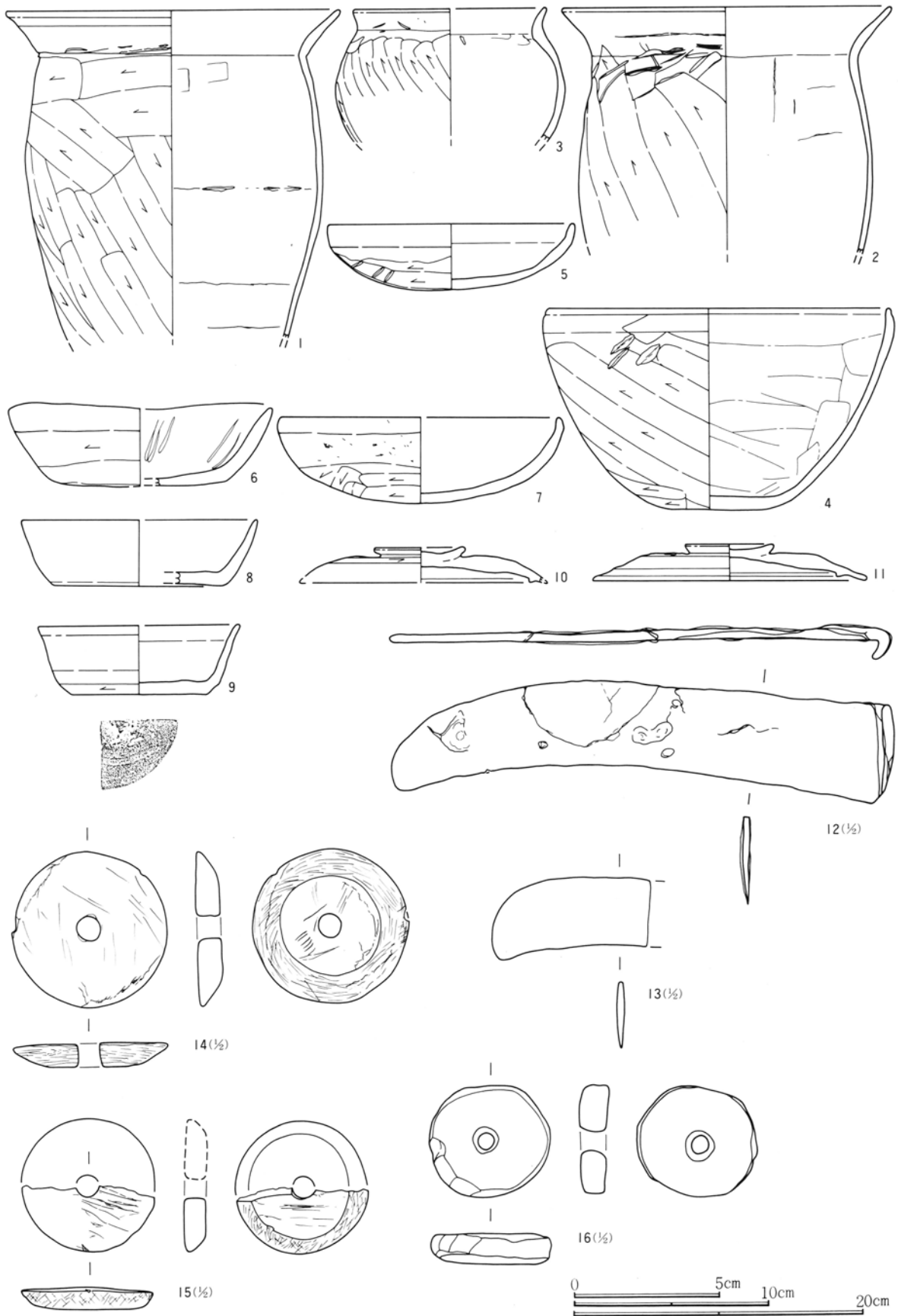
第4章 奈良時代の遺構と遺物



第253図 254号住居跡実測図



第254図 254号住居跡竈実測図



第255図 254号住居跡出土遺物実測図

第4章 奈良時代の遺構と遺物

254号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
255-1 96	土師器 甕	床面-5 口縁部 $\frac{3}{5}$ 胴部 $\frac{1}{5}$	口 23.0 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色、一部黒褐色	胴部外面へら削り。 口縁部との境に削りによる段を持つ。 胴部内面に3箇所接合痕あり。
255-2 96	土師器 甕	床面+4 口縁部完形 胴部 $\frac{1}{5}$	口 21.6 高 — 底 —	①密、1mm前後の砂粒と赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へら削り、多くの砂粒が目立つ。 内面ナデにて器表面密。
255-3 96	土師器 小型甕	床面+26 $\frac{1}{5}$ 残存	口(13.4) 高 — 底 —	①密、1~2mmの砂粒と赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	胴部外面へら削り、削りの単位は明瞭である。 内面ナデにて器表面密。 頻繁に使用されていた痕跡を残す。
255-4 96	土師器 鉢	床面+7 口縁部 $\frac{1}{5}$ 底部完形	口 23.5 高 14.0 底 6.5	①密、1mm以下の赤色粒を多量に含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部外面へら削り。 口縁部は細く直立している。
255-5 96	土師器 坏	床面+8 $\frac{1}{5}$ 残存	口 12.7 高 3.4 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	底面へら削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにより器表面密でやや光沢を持つ。
255-6 96	土師器 坏	床面-5 口縁部 $\frac{1}{2}$ 底部完形	口(13.8) 高 — 底 —	①密、1~2mmの赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	底面と体部へら削り。 内側器表面が少し粗れているが多くの暗文が確認される。
255-7	土師器 坏	床面+8 $\frac{1}{5}$ 残存	口(14.8) 高 4.4 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。
255-8	須恵器 坏	床面+22 $\frac{1}{5}$ 残存	口(12.2) 高(3.4) 底(9.0)	①密、少量の片岩粒を含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面へら削り。
255-9	須恵器 坏	床面+18 $\frac{1}{5}$ 残存	口(10.4) 高 3.5 底(6.8)	①密 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面へら切り後へら調整。 体部下端へら削り。 底面中央にへら切り時凸状部が残る。
255-10	須恵器 蓋	床面+10 口縁部欠 他 $\frac{1}{4}$	口 — 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③外面橙色、内面にぶい黄褐色	天井部へら削り。 摘みは低くていねいな整形である。 破片ではあるが全体にていねいなつくりである。
255-11 96	須恵器 蓋	床面+16 $\frac{1}{5}$ 残存	口 14.0 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③褐色、断面灰色	天井部右回転へら削り。 摘みは短く内傾している。
255-12 113	鉄製品 鎌	床面+50	長 17.4 幅 3.5 厚 0.3 重 59.5		鎌の完形品である。刃の目減りがほとんどないため、あまり使用されていないものと思われる。
255-13 113	鉄製品 鎌	床面直上	長(5.4) 幅 2.4 厚 0.3 重 10.7		鎌の先端部分と思われる。 錆化が進行して残りが悪い。
255-14 117	石製品 紡錘車	床面+2	径 4.5/3.5 孔径 0.8 厚 0.8 重 36.2		滑石片岩。広面と狭面は磨かれて光沢を持つ。側面は仕上げ砥に近い目の細かいもので削られている。
255-15 117	石製品 紡錘車	床面+7	径 4.5/3.3 孔径 — 厚 0.7 重 13.3		滑石片岩。表面はていねいに磨かれており加工痕不明。 薄い紡錘車である。
255-16 118	石製品 紡錘車	床面+22	径 4.2 孔径 0.6 厚 1.1 重 19.7		砂岩。形がゆがんでいる。中央の穿孔も両側からV字状に穿けられているため紡錘車としては疑問。

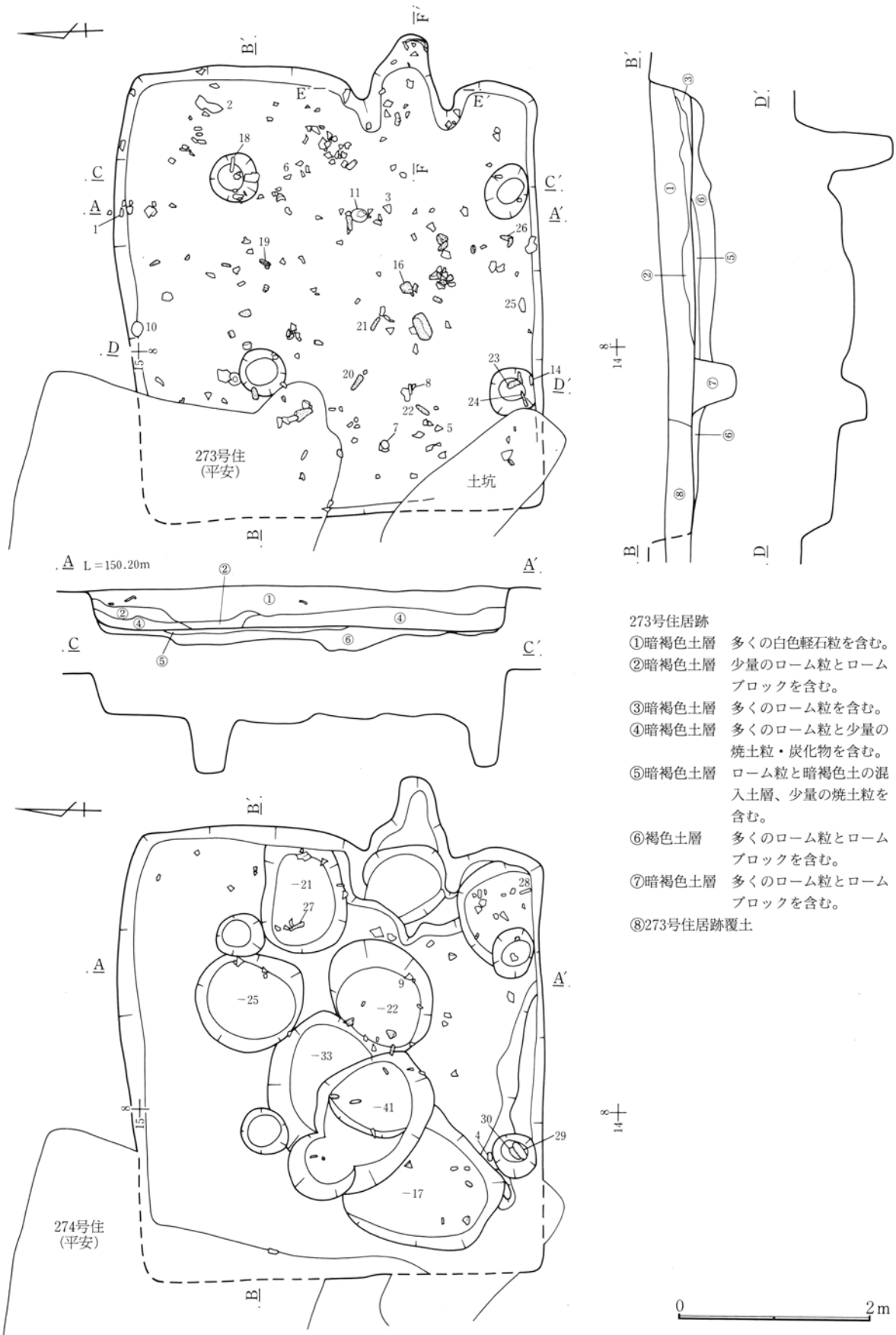
273号住居跡 (第256~259図、図版44・96・97・114・121・126)

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、15-8・9グリッドに位置する。

概要 本住居を含めて3軒が重複している。本住居は北西部分で平安時代の274号住居と重複しており、274号住居により壁面と床面上の覆土が掘り取られている。また南西コーナー部分を土坑により床下部分まで掘り込まれている。またこの土坑の北側付近に壊されてプランの明確でない平安時代の229号住が本住居の覆土を掘り込んで造られている。3軒の新旧関係は273→274、273→229号住居である。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。位置的に少し不自然であるが、柱穴が4本掘られている。貯蔵穴は掘られていない。

規模 東西4.72m、南北4.42mである。壁高は残りの良い東壁面部分で47cmである。柱穴1は径48cm深さ61cm、柱穴2は径44cm深さ72cm、柱穴3は径46cm深さ48cm、柱穴4は径50cm深さ70cmである。



273号住居跡

- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量のローム粒とロームブロックを含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
- ④暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒・炭化物を含む。
- ⑤暗褐色土層 ローム粒と暗褐色土の混入土層、少量の焼土粒を含む。
- ⑥褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ⑦暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ⑧273号住居跡覆土

第256図 273号住居跡・床下実測図

第4章 奈良時代の遺構と遺物

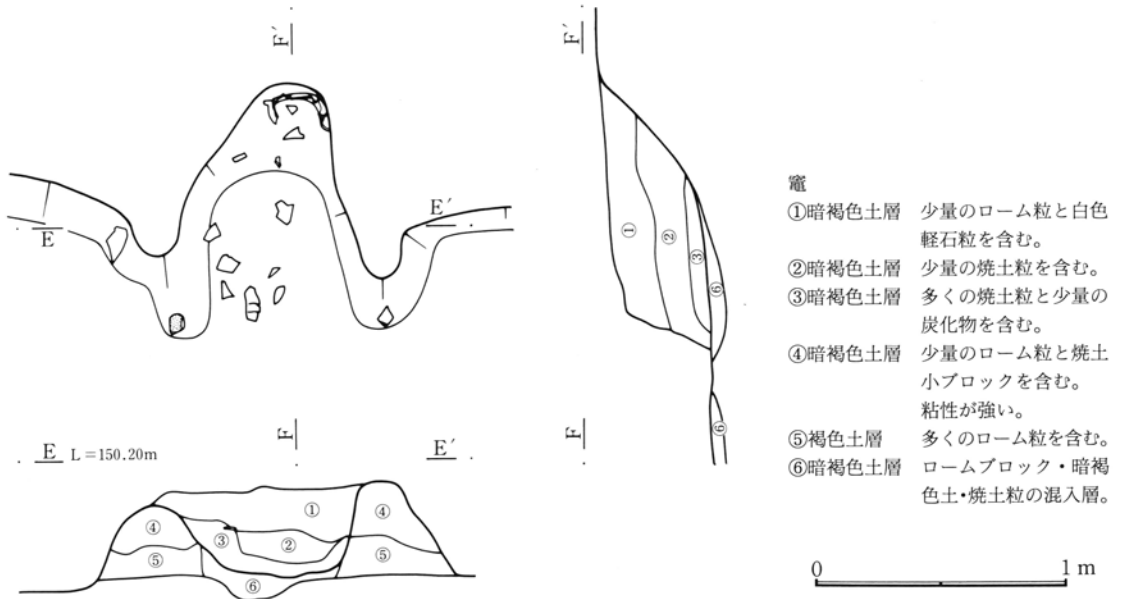
遺物 破片が大量に出土している。

(竈)

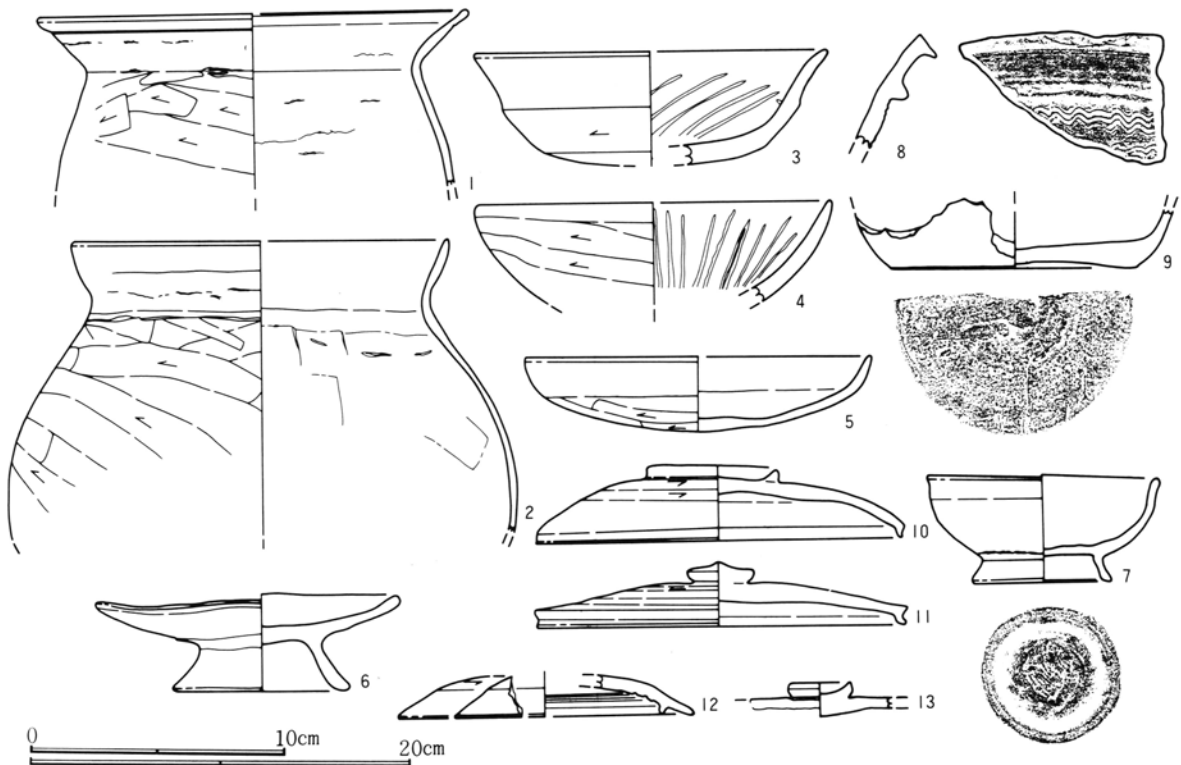
位置 住居東壁面に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

概要 両袖部分は粘性の強い暗褐色土で造られている。袖石や天井石等は出土しない。袖部分の残りは比較的良好である。燃烧部や煙道部の残りは良好ではなく、竈内から遺物の出土も少ない。燃烧部床面付近を中心に多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道部方向101cm、燃烧部幅48cmである。

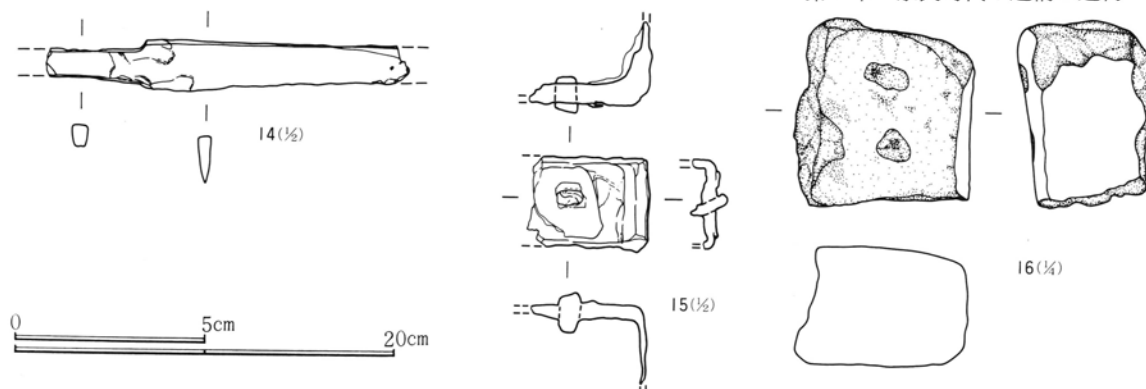


第257図 273号住居跡竈実測図



第258図 273号住居跡出土遺物実測図(1)





第259図 273号住居跡出土遺物実測図(2)

273号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
258-1	土師器 甕	床面+16 1/2残存	口(23.0) 高 — 底 —	①密 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部ヘラ削り。 口縁部に輪積痕が残る。 口縁部中央に一条の凹線あり。
258-2 96	土師器 甕	床面+11 口縁部1/2 胴部1/2	口(19.8) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部中段に輪積の痕跡。 内面ナデにて器表面密。
258-3	土師器 坏	床面+20 小破片	口(13.8) 高 — 底 —	①密 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	外面は雑であるが、内面は光沢を持つほど面を整えている。 内面に多くの暗文。
258-4	土師器 坏	床面-15 口縁~ 体部1/2	口(14.0) 高 — 底 —	①やや粗、1~2mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③褐色	内側全面ヘラ磨きで光沢を持つ。その後多くの暗文が描かれている。 外面ヘラ削りにより砂粒が目立つ。
258-5	土師器 坏	床面+7 口縁~ 底部1/2	口(13.6) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りであるがヘラの単位明瞭でない。 全体に器表面が粗れている。
258-6 96	土師質 高台付皿	床面+21 1/2残存	口 11.9 高 3.5 底 7.0	①密、1mm前後の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	高台の高さが一定でなく皿の中央からずれた位置に高台が貼り付いている。雑なつくりである。 黒斑は全く認められない。
258-7 96	土師質 塊	床面+21 完形	口 9.0 高 4.3 底 5.4	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面糸切り痕。 全体に少しゆがんでいる。
258-8	須恵器 甕	床面+19 口縁部破片	口 — 高 — 底 —	①やや粗、1~2mmの片岩粒を少量含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	口縁部に2本の断面が三角形の凸帯をめぐらし、その下に櫛描き波状文。
258-9	須恵器 坏	床面+7 底部1/2	口 — 高 — 底 9.6	①やや粗、1mm前後の砂粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰白色	底面ヘラ切り後ナデ調整。
258-10 97	須恵器 蓋	床面+15 ほぼ完形	口 14.4 高 — 底 —	①密、1~2mmの砂粒を少量含む ②還元焰、硬質 ③灰色	天井部右回転ヘラ削り。 摘みは断面が三角形で短い。 口縁端部は短く下方に折れている。
258-11 97	須恵器 蓋	床面+4 口縁一部欠 他完形	口 14.5 高 — 底 —	①密、1mm前後の石英粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③灰白色	天井部ヘラ削り。 摘みは擬宝珠状で低い。 口縁端部は爪先立状である。器高が低い。
258-12	須恵器 蓋	覆土 小破片	口(11.7) 高 — 底 —	①密、少量の白色粒を含む ②還元焰、硬質 ③灰色	天井部ヘラ削り。 カエリは長く、いねいに整形されている。
258-13	須恵器 蓋	掘り方覆土 摘部のみ	口 — 高 — 底 —	①密、小さな白色粒を多く含む ②還元焰、硬質 ③灰色	摘みは小さく、いねいに整形されている。
259-14 114	鉄製品 刀子	床面-1	長 9.6 幅 1.3 厚 0.4 重 7.2		刀子の茎と刀身部分である。棟区部分は良好に残る。 錆化は著しいが残りは比較的良好である。
259-15 114	鉄製品 角金具	覆土	長 (3.2) 幅 1.5 厚 0.3~1.0 重 8.9		角金具と思われる。側面から釘が打ち込まれている。 錆は層状をなしている。
259-16 121	石製品 砥石	床面+28	長 9.9 幅 9.4 厚 6.4 重 770.0		砥石としては一面のみ使用されている。 他の側面に2個の打痕あり。

第4章 奈良時代の遺構と遺物

273号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	図版番号	器種	法	量(cm)(g)				石材・備考
17	126	こも編み石	長 14.0 幅 4.7 厚 3.4 重 320					緑簾緑泥片岩
18	126	こも編み石	長 14.0 幅 4.3 厚 2.5 重 235					点紋絹雲母石墨片岩
19	126	こも編み石	長 13.4 幅 4.1 厚 3.6 重 285					緑簾緑泥片岩
20	126	こも編み石	長 15.0 幅 5.0 厚 3.3 重 400					絹雲母石墨片岩
21	126	こも編み石	長 15.2 幅 4.5 厚 1.7 重 245					緑簾緑泥片岩
22	126	こも編み石	長 13.9 幅 5.2 厚 2.6 重 275					点紋絹雲母石墨片岩
23	126	こも編み石	長 14.6 幅 4.7 厚 2.1 重 200					緑簾緑泥片岩
24	126	こも編み石	長 13.6 幅 4.6 厚 3.6 重 325					絹雲母石墨片岩
25	126	こも編み石	長 13.5 幅 7.4 厚 3.5 重 485					絹雲母石墨片岩
26	126	こも編み石	長 13.0 幅 5.0 厚 3.3 重 360					絹雲母石墨片岩
27	126	こも編み石	長 10.5 幅 4.7 厚 2.6 重 270					点紋緑泥片岩
28	126	こも編み石	長 11.9 幅 3.9 厚 3.6 重 240					点紋絹雲母石墨片岩
29	126	こも編み石	長 17.0 幅 5.5 厚 2.4 重 350					緑簾緑泥片岩
30	126	こも編み石	長 14.0 幅 5.4 厚 2.0 重 290					点紋石墨緑泥片岩

299号住居跡 (第260～262図、図版44・45・97・118)

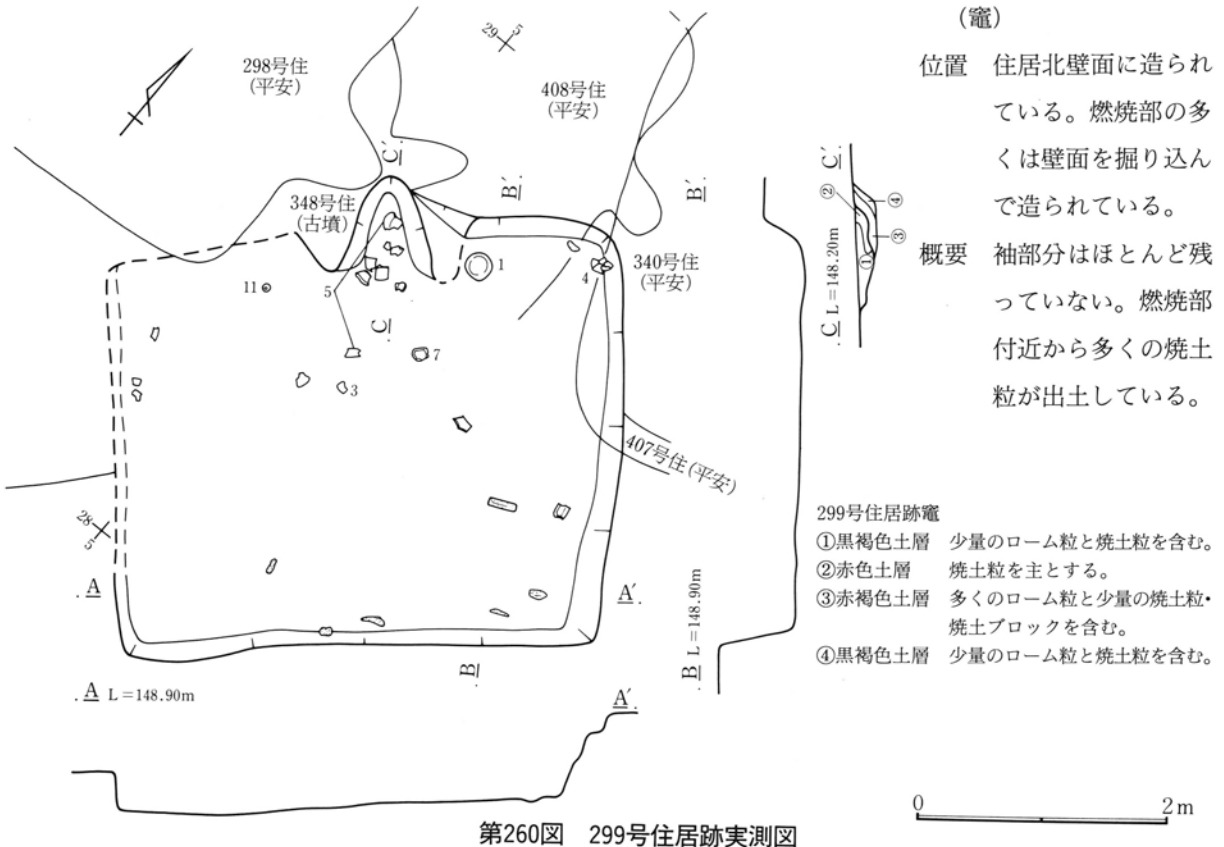
位置 本住居跡は第5次調査区にあり、28-6グリッドに位置する。

概要 西に向かって低くなるなだらかな傾斜面で、一部黒色土を掘り込む12軒の竪穴住居が複雑に重複している住居群であり、調査は非常に困難であった。本住居は直接には6軒の重複であり、竈を含めて残りは悪い。新旧関係は348(古墳時代6世紀後半)→299(奈良時代8世紀前半)→340(平安時代9世紀中頃)→298(平安時代9世紀後半)→407(平安時代10世紀前半)→408(平安時代10世紀後半)号住居の順である。重複関係については第261図を参照。

構造 残りの悪い床面はロームではなく粘性の強い灰白色土で造られている。貯蔵穴や柱穴はない。

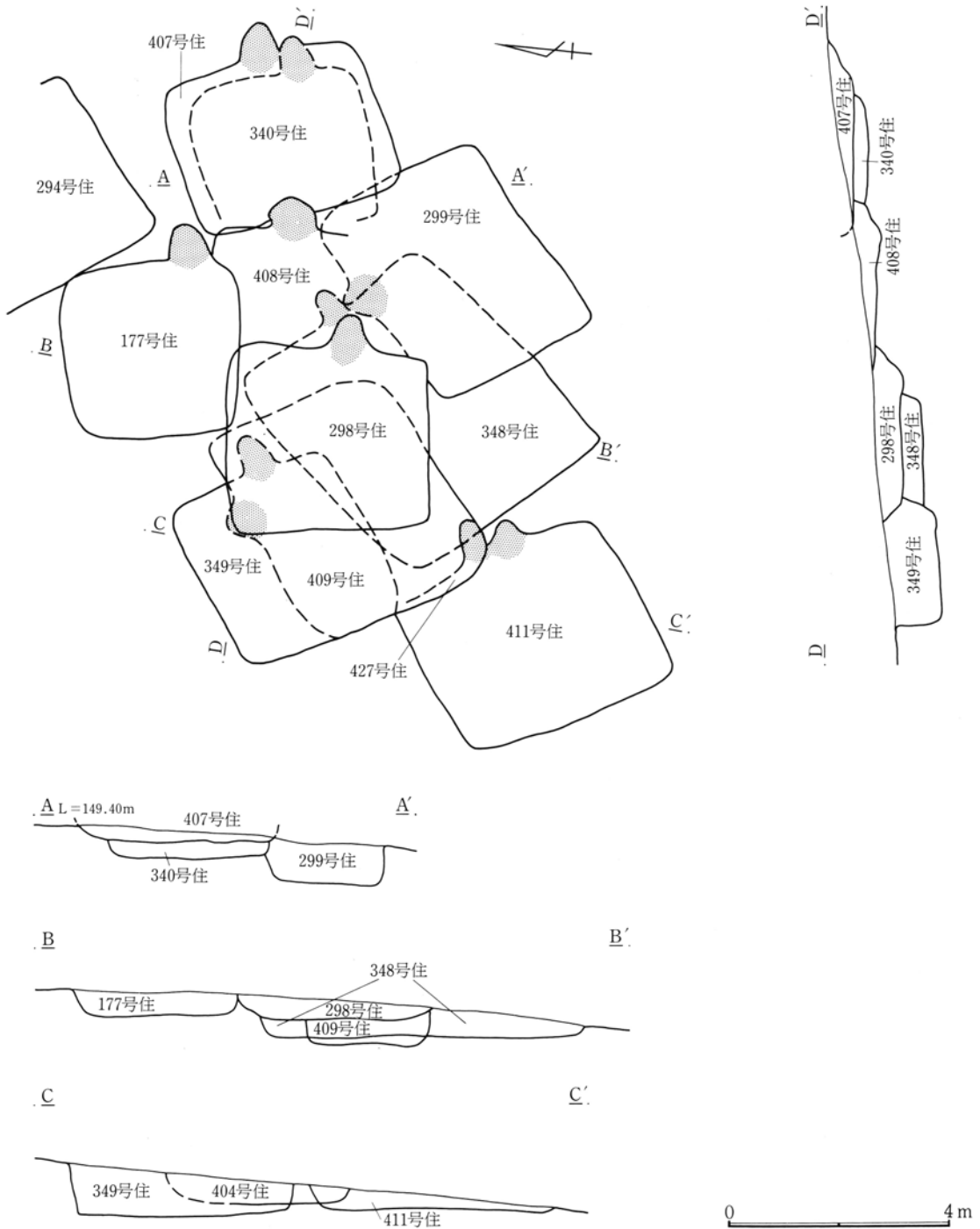
規模 東西3.60m、南北3.40mである。壁高は残りの良い東壁面部分で81cmである。

遺物 破片は大量に出土している。線刻をもつ須恵器の坏と紡錘車が注目される。

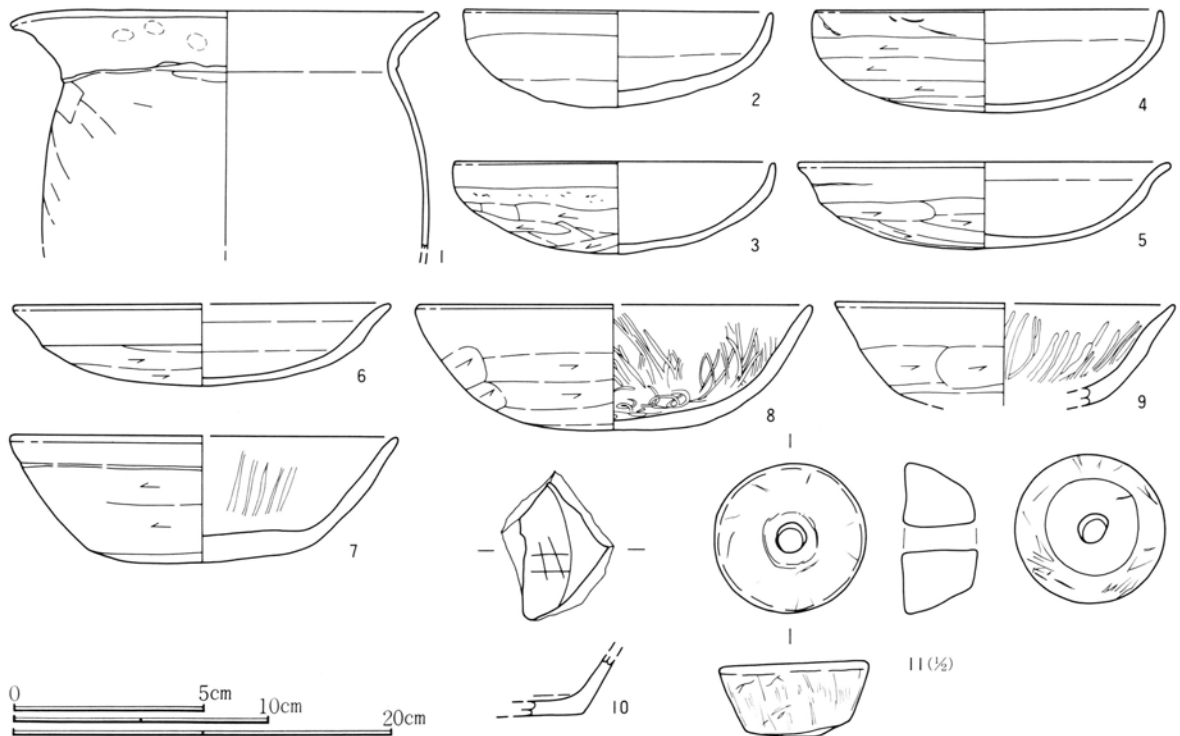


各住居跡の所属年代を整理すれば次のようになる。

- ◎古墳時代……348号住居跡（矢田遺跡VI報告済）411号住居跡（今回報告）
- ◎奈良時代……299・349・409号住居跡（今回報告）
- ◎平安時代……177・294・298・340・407・408号住居跡（矢田遺跡II報告済）
- ◎時期不明……427号住居跡（今回報告）



第261図 299号住居跡周辺遺構重複関係図



第262図 299号住居跡出土遺物実測図

299号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
262-1 97	土師器 甕	床面直上 口縁部完形 胴部 $\frac{1}{2}$	口 22.0 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へら削り。 削られていない口縁部との境に段を持つ。 口縁部に指頭圧痕。
262-2 97	土師器 坏	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口 12.0 高 3.7 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。 口縁部横ナデ。 器表面が内外面とも剝落して粗れている。
262-3 97	土師器 坏	床面+2 $\frac{2}{3}$ 残存	口 12.4 高 3.6 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。 体部ナデ。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
262-4 97	土師器 坏	床面+13 $\frac{1}{2}$ 残存	口 13.4 高 4.0 底 —	①密、少量の角閃石を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へら削り、削りの単位は明瞭でない。 口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。
262-5 97	土師器 坏	竈内 $\frac{1}{2}$ 残存	口 14.4 高 3.4 底 —	①密、少量の角閃石粒を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へら削り、削りの単位は明瞭でない。 口縁部横ナデ。 内外の器表面全体が粗れている。
262-6	土師器 皿型坏	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口(14.8) 高 — 底 —	①密、少量の角閃石を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り、小さな砂粒が多く移動している。 内面ナデにて器表面密。
262-7 97	土師器 坏	床面直上 口縁部 $\frac{1}{2}$ 底部完形	口(15.2) 高 4.9 底 —	①密、2~3mmの砂粒と赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部へら削り、胎土が粉状を呈しており削りの単位不明瞭。 内面に暗文の痕跡。
262-8	土師器 坏	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口(15.6) 高 4.9 底(4.8)	①密、1~2mmの砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色、底面黒色	底面と体部外面へら削り。 内面に部分的に格子状を呈する暗文と螺旋の暗文。
262-9	土師器 坏	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口(14.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	底面と体部外面へら削り。 内面に多くの放射状暗文。
262-10	須恵器 坏	覆土 小破片	口 — 高 — 底 —	①密、1mm以下の石英粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面へら削りと思われる。 内側底面に「井」の線刻あり。
262-11 118	石製品 紡錘車	床面-15	径 4.0/2.9 厚 1.9	孔径 0.8 重 47.7	滑石片岩。表面全体が磨かれて光沢を持つ。 側面に削りの単位を示す稜線なし。

315号住居跡 (第263~267図、図版45・97・118・121・126・127)

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、15・16-10グリッドに位置する。

概要 住居の掘り込みは浅かったが、他の遺構との重複のない比較的良好な住居である。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックの混入した土で造られている。少量の焼土粒も混入している。柱穴が4本掘られており、貯蔵穴が竈の右側に掘られている。

規模 東西4.96m、南北4.90m、壁高は残りの良い南壁面部分で67cmである。貯蔵穴は径46cm深さ24cmである。柱穴1は径36cm深さ51cm、柱穴2は径40cm深さ31cm、柱穴3は径36cm深さ49cm、柱穴4は径54cm深さ81cmである。

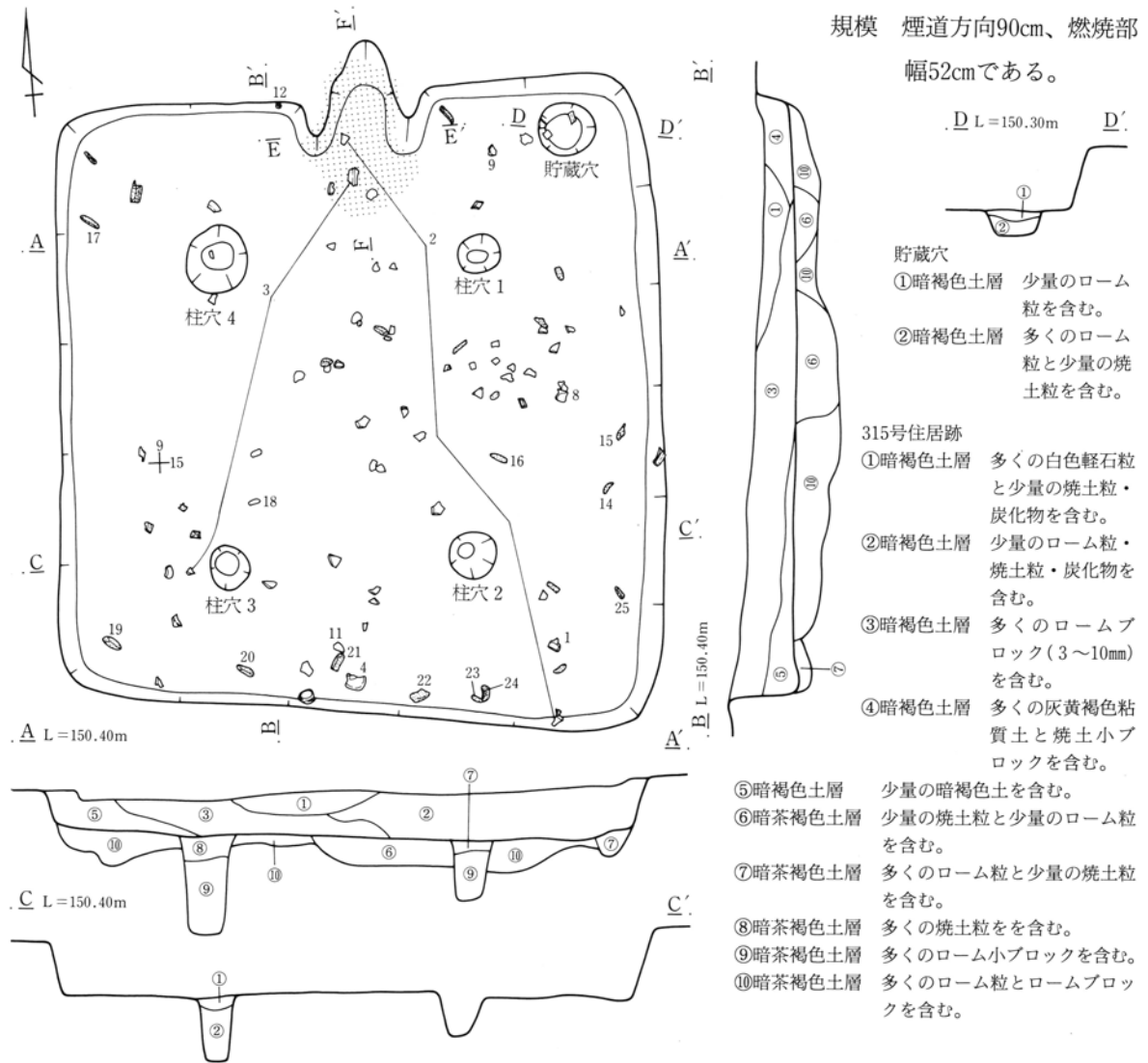
床下 多くの床下土坑が掘られている。

遺物 破片は大量に出土している。紡錘車と砥石が目される。

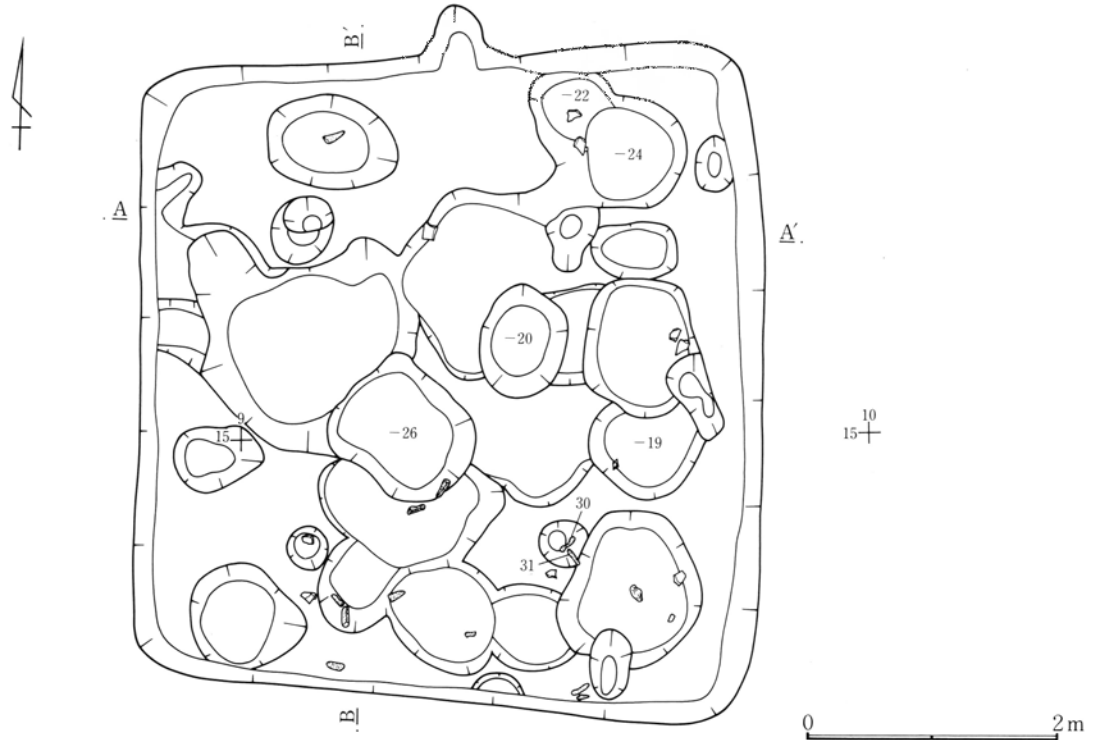
(竈)

位置 住居北壁面に造られている。燃焼部の多くは壁面を掘り込んで造られている。

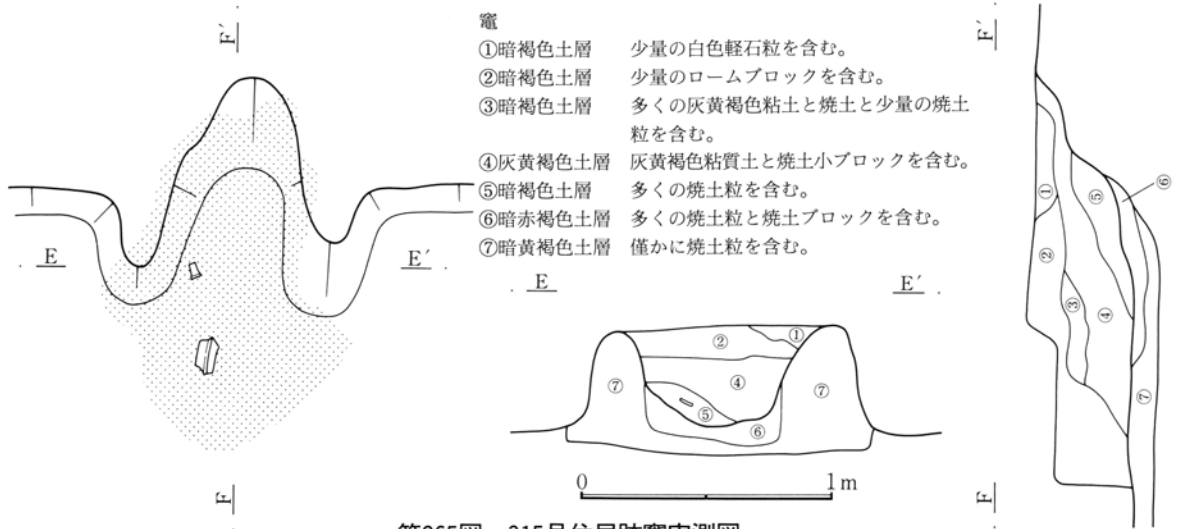
概要 袖部分は暗黄褐色土を用いて造られている。袖石や天井石等は使われていないようである。燃焼部床面付近より多くの焼土粒が出土しているが、遺物の出土量はわずかである。



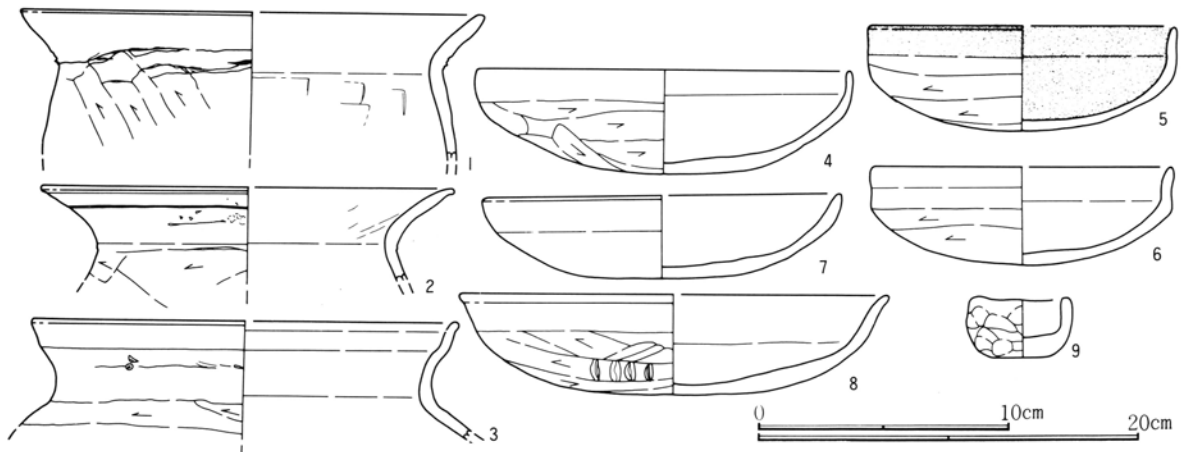
第263図 315号住居跡実測図



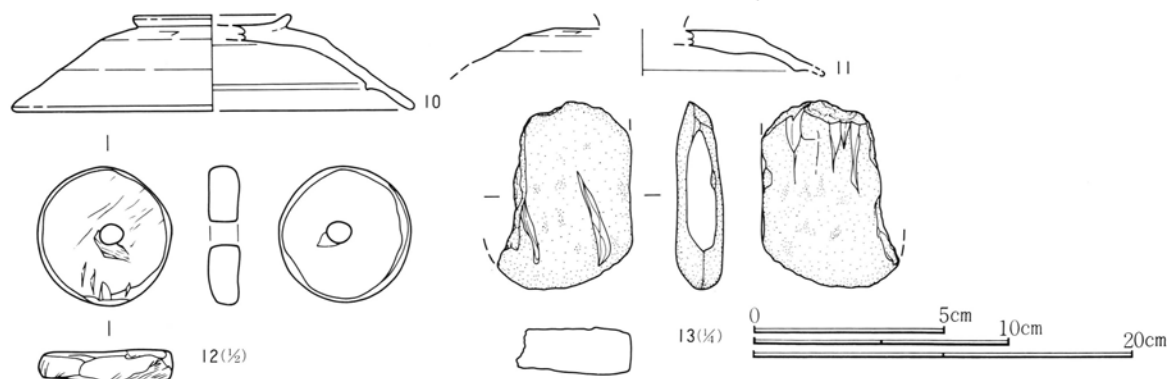
第264図 315号住居跡床下実測図



第265図 315号住居跡竈実測図



第266図 315号住居跡出土遺物実測図(1)



第267図 315号住居跡出土遺物実測図(2)

315号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考		
266-1	土 師 器 甕	床面+3 口縁部 $\frac{1}{3}$ 胴上部 $\frac{1}{3}$	口(24.2) 高 — 底 —	①やや粗、2~3mmの砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい黄褐色	胴部ヘラ削り。 口縁部にヘラが当たり凹部多くあり。		
266-2	土 師 器 甕	床面+14 口縁小片	口(22.2) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	胴部ヘラ削り。 口縁部に明瞭な輪積痕が残る。		
266-3	土 師 器 甕	床面-2 小破片	口(21.5) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部ヘラ削り。 口縁部横ナデ。		
266-4 97	土 師 器 坏	床面-56 ほぼ完形	口 14.7 高 4.1 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底面ヘラ削り、ヘラの単位は比較的明瞭である。		
266-5 97	土 師 器 坏	竈内 $\frac{1}{3}$ 残存	口(11.9) 高 4.2 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、砂粒の移動は少なく器表面の粗れは少ない。口縁部内側~内側底面の器表面密。 口縁部外面~内側底面黒漆の痕跡あり。		
266-6	土 師 器 坏	竈内 $\frac{1}{3}$ 残存	口(11.6) 高 3.8 底 —	①密、小さな赤色粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	底面ヘラ削り、器表面比較的密でヘラ削りの単位不明瞭。		
266-7 97	土 師 器 坏	床面+22 $\frac{1}{3}$ 残存	口(13.9) 高 3.3 底 —	①密、胎土がやや粉状を呈する ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りと思われるが、胎土が粉状を呈しておりヘラ削りの単位不明。 器表面全体がやや粗れている。		
266-8 97	土 師 器 坏	床面+9 $\frac{1}{3}$ 残存	口(16.6) 高 4.0 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。全体に雑な感じの作りである。 器肉の厚さにバラツキがある。		
266-9 97	土 師 器 手捏ね	床面直上 完形	口 3.6 高 2.4 底 2.2	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	底面ヘラ削り。 体部外面ヘラナデにより器表面密でやや光沢を持つ。 内面やや雑なナデ。		
267-10	須 恵 器 蓋	覆土 小片	口(15.7) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず ②還元焰、軟質 ③灰色	天井部ヘラ削り。 カエリは低くやや雑に貼り付けてある。 摘みも低い。		
267-11	須 恵 器 蓋	床面+62 $\frac{2}{3}$ 残存	口 — 高 — 底 —	①密 ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	天井部右回転ヘラ削り。 カエリは小さく低い。 酸化焰焼成であるが作りは全体にいいである。		
267-12 118	石 製 品 紡錘車	覆土	径 3.6 孔径 0.6 厚 0.8 重 15.8		材質不明。 表面密で工具痕ほとんど確認できない。		
267-13 121	石 製 品 砥石	覆土	長 10.8 幅 7.0 厚 2.4 重 178.0		砂岩。 砥石として使用されているのは1側面のみである。		
遺物番号	図版番号	器 種	法 量(cm)(g)				石 材 ・ 備 考
14	126	こも編み石	長 11.9	幅 4.1	厚 1.5	重 120	点紋緑泥片岩
15	126	こも編み石	長 11.7	幅 4.1	厚 3.3	重 205	緑簾緑泥片岩
16	126	こも編み石	長 13.6	幅 4.0	厚 1.7	重 145	緑簾緑泥片岩
17	126	こも編み石	長 12.2	幅 3.7	厚 1.7	重 120	緑簾緑泥片岩
18	126	こも編み石	長 15.9	幅 4.5	厚 2.8	重 350	絹雲母石墨片岩
19	126	こも編み石	長 12.2	幅 3.0	厚 2.2	重 140	絹雲母石墨片岩
20	126	こも編み石	長 13.1	幅 3.1	厚 3.0	重 200	絹雲母石墨片岩

第4章 奈良時代の遺構と遺物

315号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	図版番号	器種	法	量(cm)(g)				石材	備考
21	126	こも編み石	長 10.9 幅 4.8 厚 3.3 重 280					石墨緑泥片岩	
22	126	こも編み石	長 13.8 幅 5.8 厚 4.0 重 490					点紋絹雲母緑泥片岩	
23	126	こも編み石	長 11.0 幅 3.1 厚 2.7 重 150					緑簾緑泥片岩	
24	127	こも編み石	長 13.5 幅 5.2 厚 1.8 重 205					緑簾緑泥片岩	
25	127	こも編み石	長 9.7 幅 3.5 厚 2.0 重 110					石墨緑泥片岩	
26	127	こも編み石	長 12.9 幅 3.8 厚 2.4 重 200					緑簾緑泥片岩	
27	127	こも編み石	長 10.6 幅 4.0 厚 2.6 重 150					絹雲母石墨片岩	
28	127	こも編み石	長 12.7 幅 4.5 厚 2.7 重 235					絹雲母石墨片岩	
29	127	こも編み石	長 14.3 幅 4.0 厚 4.5 重 370					絹雲母石墨片岩	
30	127	こも編み石	長 13.4 幅 3.9 厚 3.0 重 200					点紋絹雲母石墨片岩	
31	127	こも編み石	長 14.2 幅 4.1 厚 2.3 重 200					緑簾緑泥片岩	
32	127	こも編み石	長 14.7 幅 5.1 厚 3.6 重 300					凝灰岩	
33	127	こも編み石	長 12.7 幅 4.7 厚 3.1 重 280					絹雲母石墨片岩	

322号住居跡 (第268～270図、図版45・97・118・121・127)

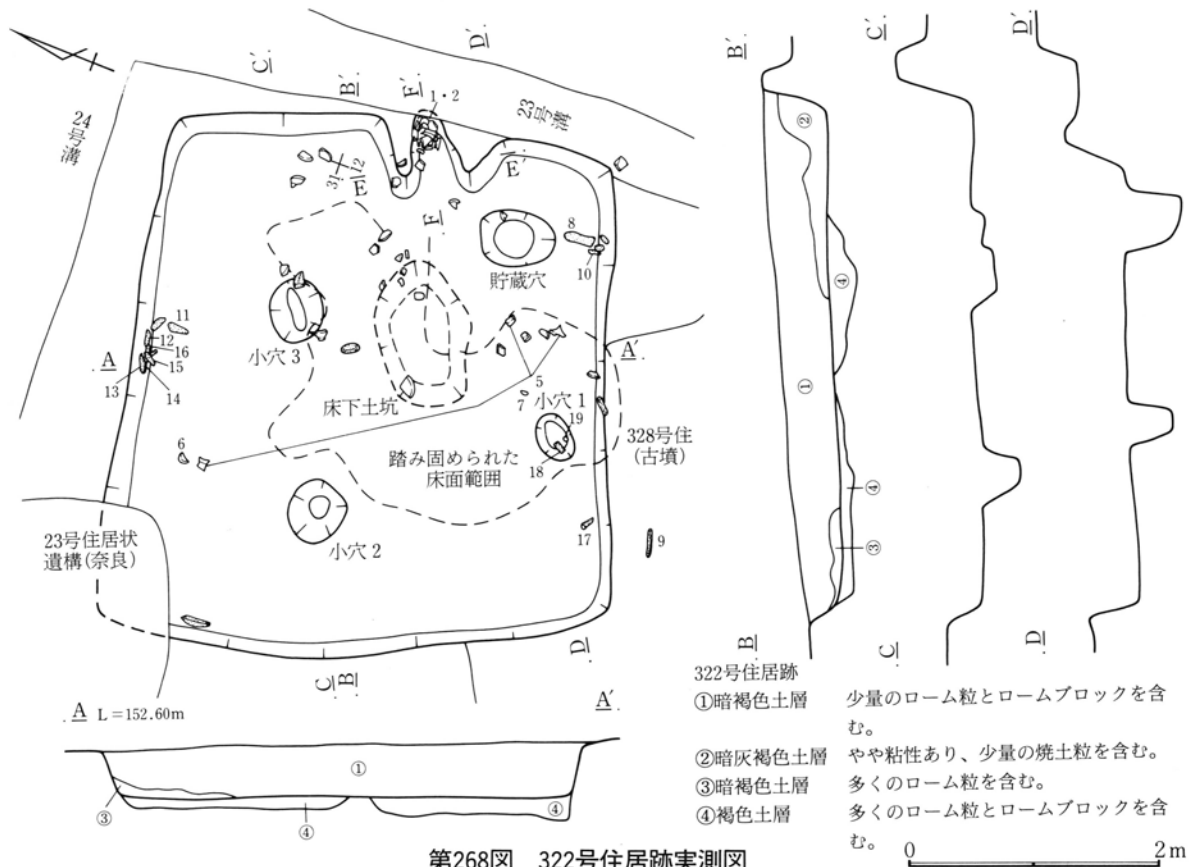
位置 本住居跡は第5次調査区にあり、31・32-12グリッドに位置する。

概要 本住居を含めて3軒の住居や住居状遺構が重複している。北西コーナー部分で23号住居状遺構により、床下部分まで掘り込まれており、南西部分で古墳時代の328号住居を床下部分まで掘り込んでいる。新旧関係は328号住居→322号住居→23号住居状遺構である。また東壁面と一部重複するように23号溝が掘られており、竈の煙道部が削り取られている。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックの混入した土で造られている。貯蔵穴が竈の右側に掘られているが、明瞭な柱穴は掘られていない。床面に3本の小穴が掘られている。

規模 東西4.26m、南北4.01m、壁高は残りの良い北東コーナー部分で58cmである。貯蔵穴は径62cm深さ52cmである。小穴1は径39cm深さ39cm、小穴2は径50cm深さ39cm、小穴3は径50cm深さ12cmである。

床下 竈手前部分に床下土坑が掘られている。規模は116×62cm深さ20cmである。



第268図 322号住居跡実測図



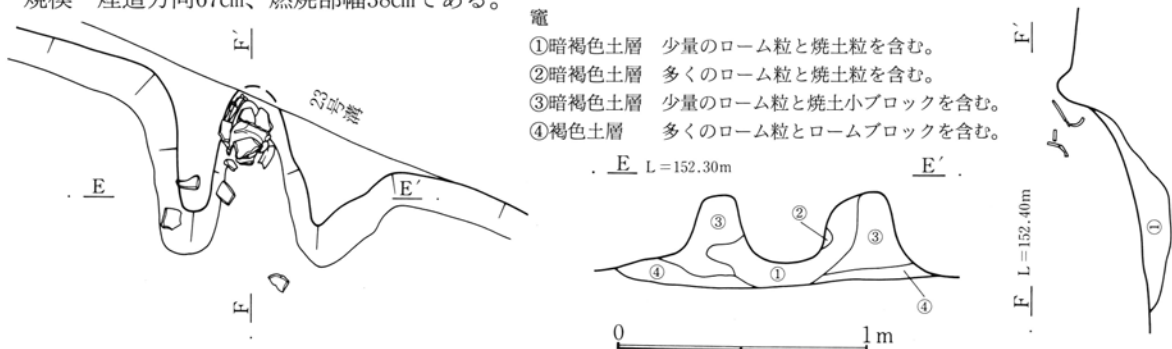
遺物 竈煙道部より甕の口縁が、また北壁面中央部よりまとまってこも編み石が出土している。砥石や紡錘車も注目される。

(竈)

位置 住居東壁面に造られている。燃烧部の多くは壁面を掘り込んで造られている。

概要 煙道部分を23号溝により掘り込まれている。袖部分の残りは比較的良好で、少量のローム粒を含む暗褐色土を用いて造られている。袖石や天井石等は使われていないようである。煙道部から多くの甕の破片が出土している。竈内や壁面部分からの焼土粒の出土量は少ない。

規模 煙道方向67cm、燃烧部幅38cmである。



第269図 322号住居跡竈実測図



第270図 322号住居跡出土遺物実測図

第4章 奈良時代の遺構と遺物

322号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考		
270-1 97	土師器 甕	床面+24 1/4残存	口 21.8 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り。口縁部に輪積痕と指頭圧痕が残る。内面ナデにて器表面密。口縁部は削られていないが器肉が薄い。		
270-2	土師器 甕	床面+24 口縁部1/4	口(23.8) 高 — 底 —	①密 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削りで器肉を薄くしている。		
270-3 97	土師器 甕	覆土 口縁~肩部 1/4残存	口(22.4) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、軟質 ③外面明赤褐、内面にぶい黄褐色	胴部外面ヘラ削り、ヘラ削りにより頸部に段を持つ。内面ナデにて器表面密。		
270-4	土師器 甕	掘り方 1/4残存	口(21.6) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③赤褐色	胴部外面ヘラ削り、口縁部との境に段を持つ。内面ナデにて器表面密。		
270-5	土師器 小型甕	床面直上 口縁~肩部 1/4残存	口(12.4) 高 — 底 —	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③灰褐色	胴部外面ヘラ削り。内面ヘラの整形痕。		
270-6 97	土師器 小型甕	床面直上 1/4残存	口(11.6) 高 — 底 —	①密、1~2mmの砂粒と赤色粒を含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色、内面黒色	胴部外面ヘラ削り、削りの単位は明瞭である。内側全面黒色で、口縁部断面までも黒色である。頻繁に使用されていた痕跡を残す。		
270-7 118	石製品 紡錘車	床面+19	径 4.0/2.1 孔径 0.6 厚 1.5 重 34.6		滑石片岩。広面と狭面は目の細い線状の削痕。側面は目の粗い荒砥削り。		
270-8 121	石製品 砥石	床面-3	長 26.0 幅 9.6 厚 9.0 重 2940.0		2側面を砥石として使用している。1側面中央に深いU字状の砥ぎ減りにより出来たと思われる溝あり。		
遺物番号	図版番号	器種	法量(cm)(g)				石材・備考
9	127	こも編み石	長 22.0	幅 4.2	厚 2.2	重 410	点紋緑泥片岩
10	127	こも編み石	長 14.3	幅 4.6	厚 2.1	重 200	絹雲母石墨片岩
11	127	こも編み石	長 17.7	幅 6.0	厚 3.7	重 490	絹雲母石墨片岩
12	127	こも編み石	長 14.5	幅 7.2	厚 2.5	重 470	緑簾緑泥片岩
13	127	こも編み石	長 16.7	幅 5.5	厚 4.5	重 450	流紋岩
14	127	こも編み石	長 16.6	幅 5.9	厚 2.5	重 335	絹雲母石墨片岩
15	127	こも編み石	長 16.3	幅 4.5	厚 1.7	重 200	絹雲母石墨片岩
16	127	こも編み石	長 16.1	幅 6.2	厚 2.9	重 480	絹雲母石墨片岩
17	127	こも編み石	長 12.6	幅 5.2	厚 2.9	重 290	絹雲母石墨片岩
18	127	こも編み石	長 18.1	幅 6.3	厚 4.1	重 620	点紋緑泥片岩
19	127	こも編み石	長 13.7	幅 6.1	厚 3.6	重 400	絹雲母石墨片岩

323号住居跡 (第271~273図、図版46)

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、30-17グリッドに位置する。

概要 本住居を含めて3軒の住居と重複している。3軒とも奈良時代に属する住居である。北側で247号住居により、南側を248号住居により床下部分まで掘り込まれている。住居の掘り込みも浅く非常に残りの悪い住居である。

構造 僅かに残っている床面は多くのローム粒とロームブロックの混入した土で造られている。柱穴や貯蔵穴は不明であり、小穴が5本掘られていた。

規模 住居規模は不明である。壁高は残りの良い南東コーナー部分で33cmである。小穴1は径30cm深さ67cm、小穴2は径36cm深さ78cm、小穴3は径38cm深さ82cm、小穴4は径45cm深さ72cm、小穴5は径41cm深さ66cmである。

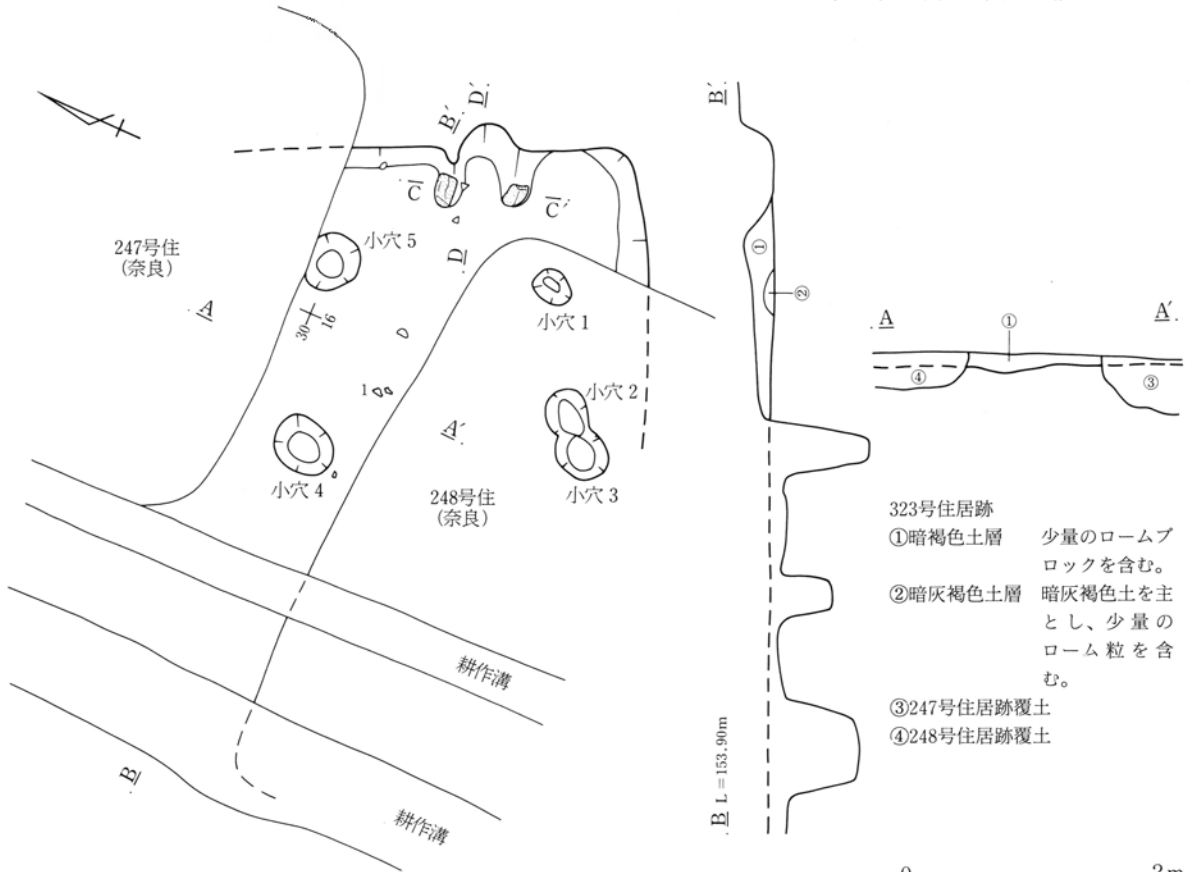
遺物 出土量は少なく、図示した須恵器の蓋以外は土師器甕の胴部8片である。

(竈)

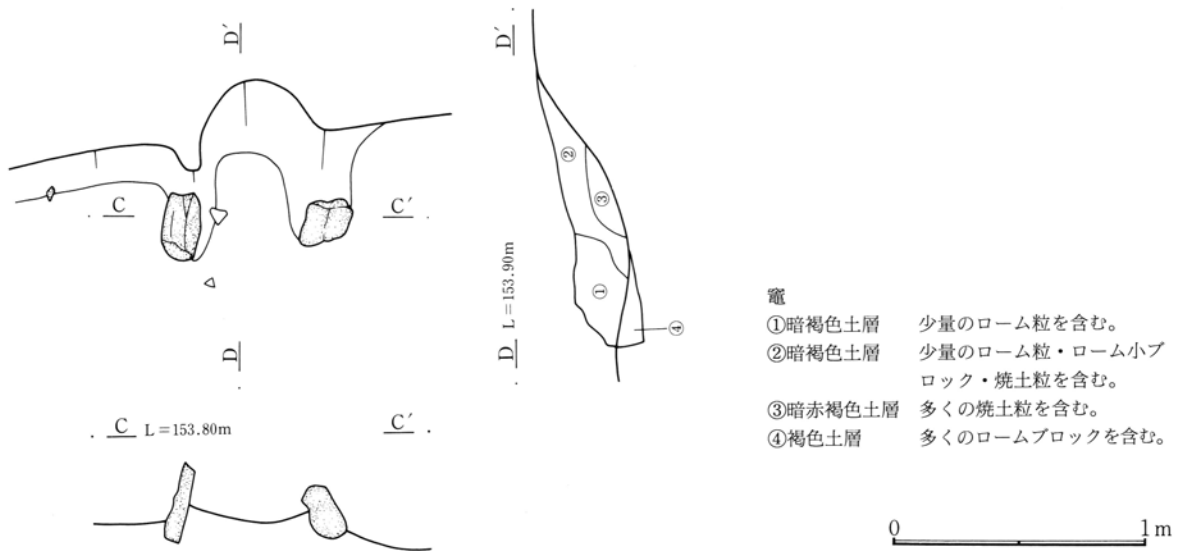
位置 住居東壁面に造られている。焼成部の多くは壁面を掘り込んで造られている。

概要 袖部分の土は残りが悪いが、左右の袖石は内側に傾いた状態で出土している。天井石は出土していない。焼成部奥壁部分から多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向68cm、焼成部幅48cmである。



第271図 323号住居跡実測図



第272図 323号住居跡竈実測図



第273図 323号住居跡出土遺物実測図

323号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
273-1	須恵器 蓋	床面-6 1/3残存	口 - 高 - 底 -	①密、小さな白色粒を含む ②還元焰、硬質、焼締 ③灰色	天井部ヘラ削り。 摘みは天井部に凹線を刻んだ後に貼り付けてある。 摘みと蓋部分の胎土は異なっている。

第4章 奈良時代の遺構と遺物

336号住居跡 (第274~276図、図版46・97・114・121)

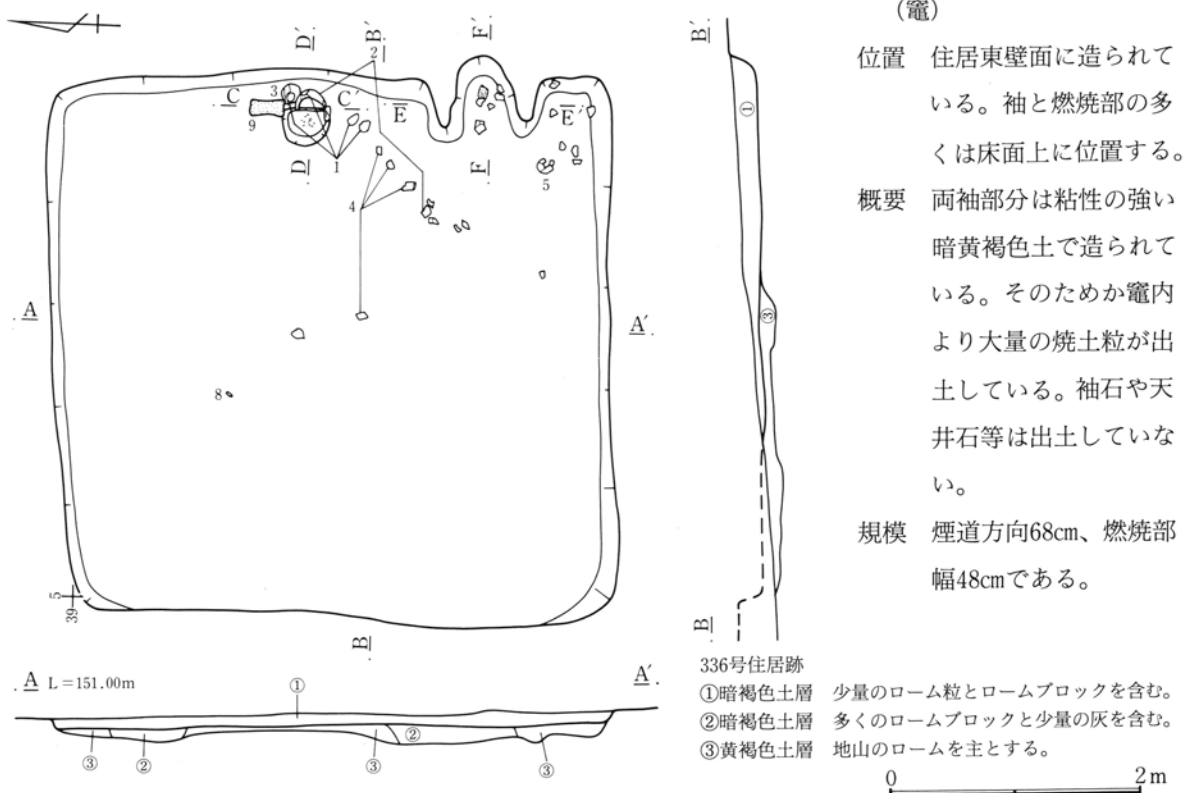
位置 本住居跡は第5次調査区にあり、39-6グリッドに位置する。

概要 残りが悪く掘り込みの浅い住居である。地形の低い西側は壁面が残っておらず床下調査により住居範囲の確認をおこなった。

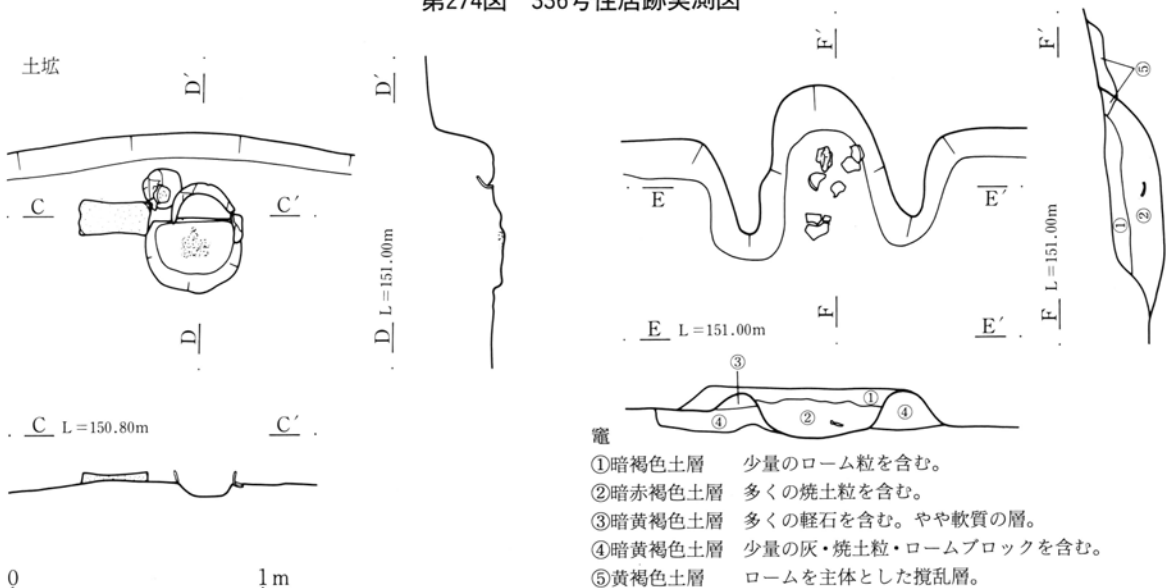
構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。柱穴や貯蔵穴は掘られていない。

規模 東西4.28m、南北4.45mである。壁高は残りの良い東壁面部分で26cmである。

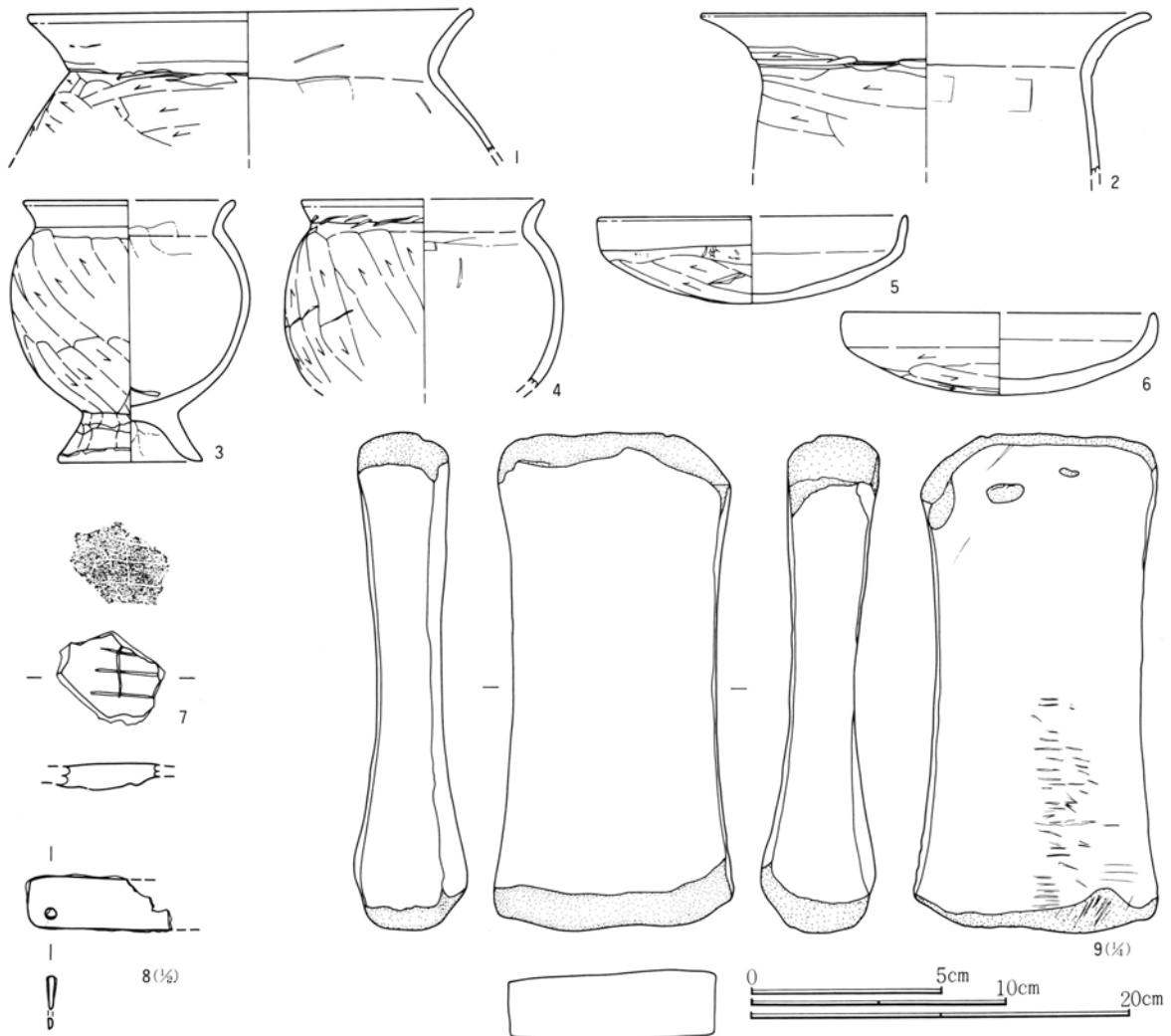
遺物 出土量は少ないが、線刻をもつ土器と砥石が注目される。



第274図 336号住居跡実測図



第275図 336号住居跡土塚・竈実測図



第276図 336号住居跡出土遺物実測図

336号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
276-1	土 師 器 壺	床面直上 口縁～肩部 ほぼ完形	口 24.0 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③外面赤褐色、内面黒褐色	胴部外面ヘラ削り、口縁部との境に段を持つ。 内面ナデにて器表面密。
276-2 97	土 師 器 甕	床面直上 口縁小片	口(23.8) 高・底—	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③赤褐色	胴部横方向ヘラ削りで器肉は薄く仕上げられている。
276-3 97	土 師 器 台付小型 甕	床面直上 胴部 $\frac{3}{4}$ 台部 $\frac{1}{4}$	口(11.4) 高 13.9 底 7.7	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラナデ、砂粒の移動は少ない。 脚部外面ヘラナデ。 内面ナデにて指頭圧痕あり。
276-4 97	土 師 器 小型甕	床面+4 $\frac{3}{4}$ 残存	口(12.9) 高・底—	①密、1mm前後の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り、削りは深くヘラの単位明瞭。
276-5 97	土 師 器 坏	床面+3 $\frac{3}{4}$ 残存	口(12.1) 高 3.4 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、砂粒の移動少なくヘラ削りの単位明瞭でない。 内側器表面密。
276-6 97	土 師 器 坏	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口(12.2) 高 3.3 底 —	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面ヘラ削り、1mm以下の砂粒が移動し器表面やや粗い。 内側底面中央の器表面が剥落している。
276-7	土 師 器 不明	覆土 小破片	口 — 高・底—	①密、1mm前後の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③赤褐色	内面に線刻あり。
276-8 114	鉄 製 品 不明	床面-4	長 (3.8) 幅 1.4 厚 0.2 重 2.4		名称及び用途不明。
276-9 121	石 製 品 砥 石	床面+1	長 26.1 幅 13.0 厚 3.6 重 2800.0		流紋岩。砥石の完形品である。 4側面を砥石として使用している。

341号住居跡 (第277・278図、図版46・97・118)

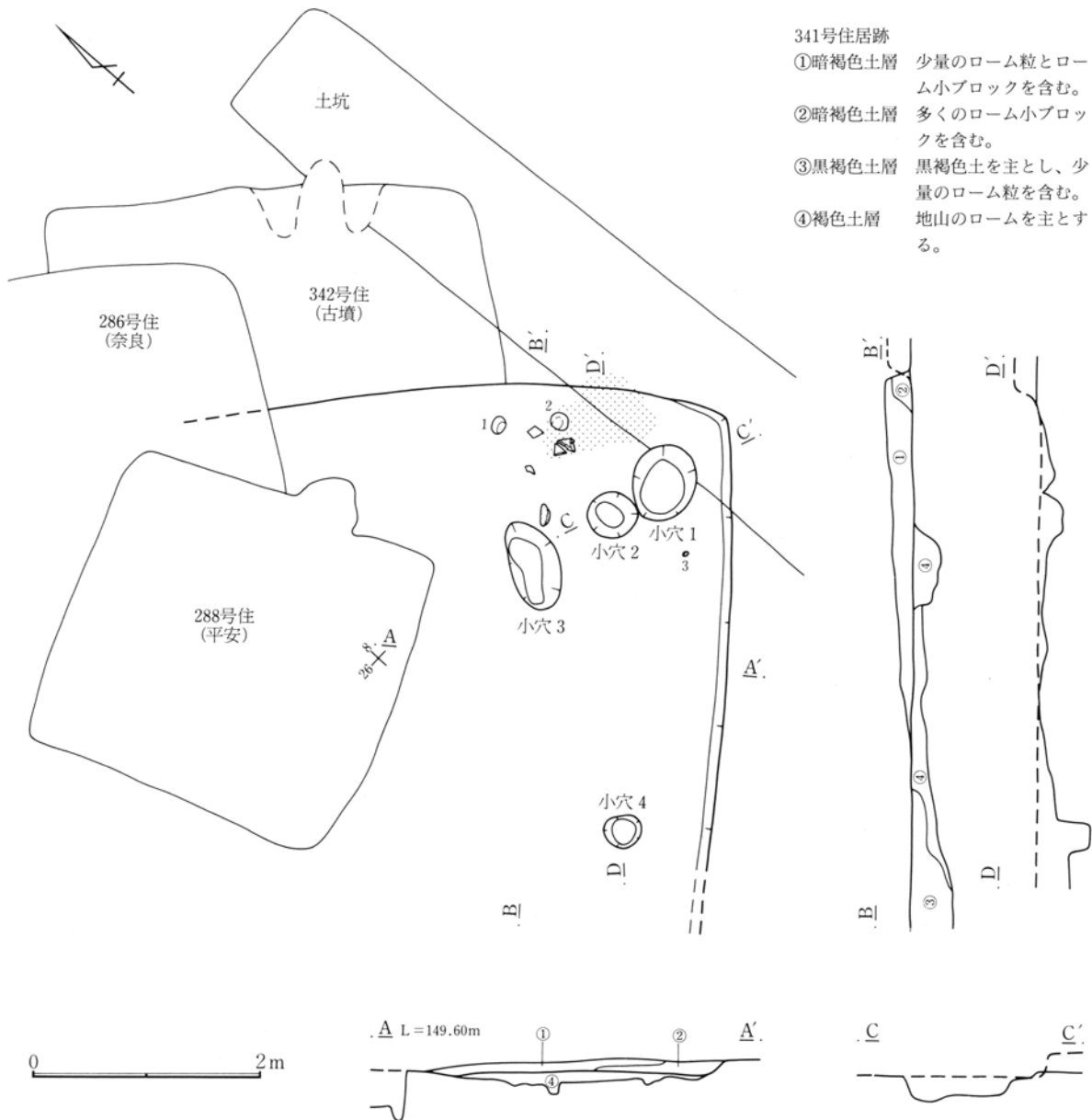
位置 本住居跡は第5次調査区にあり、26・27-9グリッドに位置する。

概要 4軒の重複している住居の中の1軒である。北側で古墳時代の342号住居と奈良時代の286号住居を掘り込み、平安時代の288号住居により床下部分まで深く掘り込まれている。新旧関係は342→286→341→288号住居の順である。また東側に長方形の細長い土坑が掘られており、重複部分が床面まで掘り込まれている。住居西側部分は残っていない。竈は残っていないため不明である。

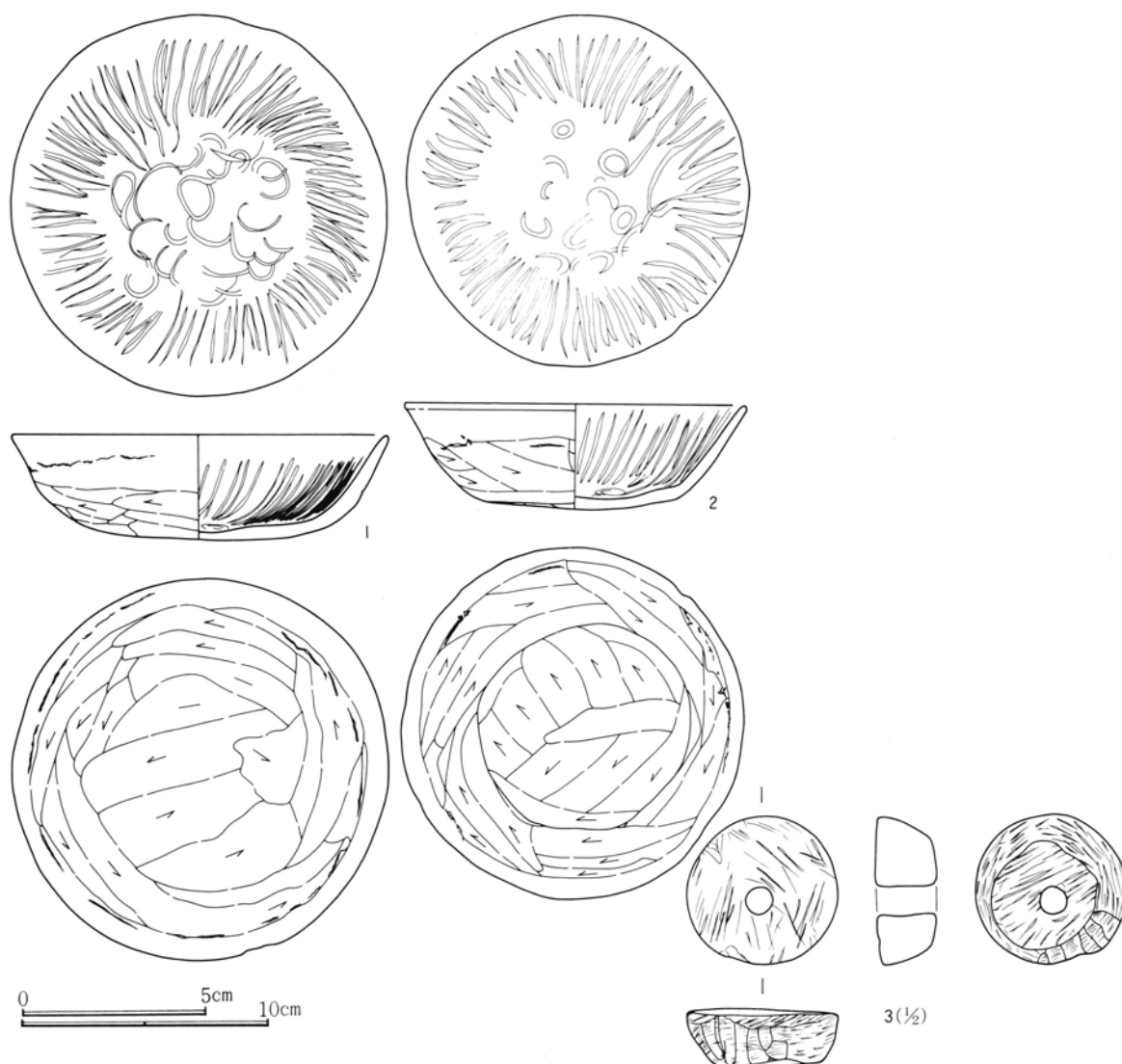
構造 僅かに残っている床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。北東コーナー部分に貯蔵穴とも思える掘り込みが確認されたが、柱穴同様明らかでないため小穴として扱う。

規模 住居規模は不明である。壁高は残りの良い東壁面部分で20cmである。小穴1は径64cm深さ17cm、小穴2は径42cm深さ23cm、小穴3は径80×45cm深さ25cm、小穴4は径32cm深さ48cmである。

遺物 出土量は僅かである。紡錘車が出土している。



第277図 341号住居跡実測図



第278図 341号住居跡出土遺物実測図

341号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
278-1 97	土師器 坏	床面+15 完形	口 15.4 高 4.3 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部ヘラ削り。口縁部に輪積痕。 内面に放射状と明瞭でないが螺旋状の暗文あり。 黒斑なし。ていねいなつくりである。
278-2 97	土師器 坏	床面+12 完形	口 14.1 高 4.2 底 8.5	①密、1mm以下の砂粒と赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部外面ヘラナデ。器表面密。 内面に多くの放射状暗文。螺旋状暗文は不明部分多い。 黒斑全く認められず。
278-3 118	石製品 紡錘車	床面直上	径 4.1/2.8 孔径 0.8 厚 1.7 重 45.3		広面と狭面荒砥削り。 側面荒砥削り、一部鉄製刃物により削られている。

349号住居跡 (第279~282図、図版46・47・98・118・120)

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、28-4・5グリッドに位置する。

概要 西に向かって低くなるなだらかな傾斜面で、一部黒色土を掘り込む12軒の竪穴住居が複雑に重複している住居群であり、調査は非常に困難であった。本住居は直接には5軒の重複である。新旧関係は411→409→349→298号住居の順である。これらの住居の中で最も深く掘り込んでいたため残りは良好である。重複関係については第261図を参照。

構造 床面は多くローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

第4章 奈良時代の遺構と遺物

規模 東西3.72m、南北3.23mである。壁高は残りの良い北壁面部分で72cmである。

遺物 破片が大量に出土している。竈煙道部の甕、線刻をもつ須恵器の坏、紡錘車、分銅等注目できる遺物が多い。

(竈)

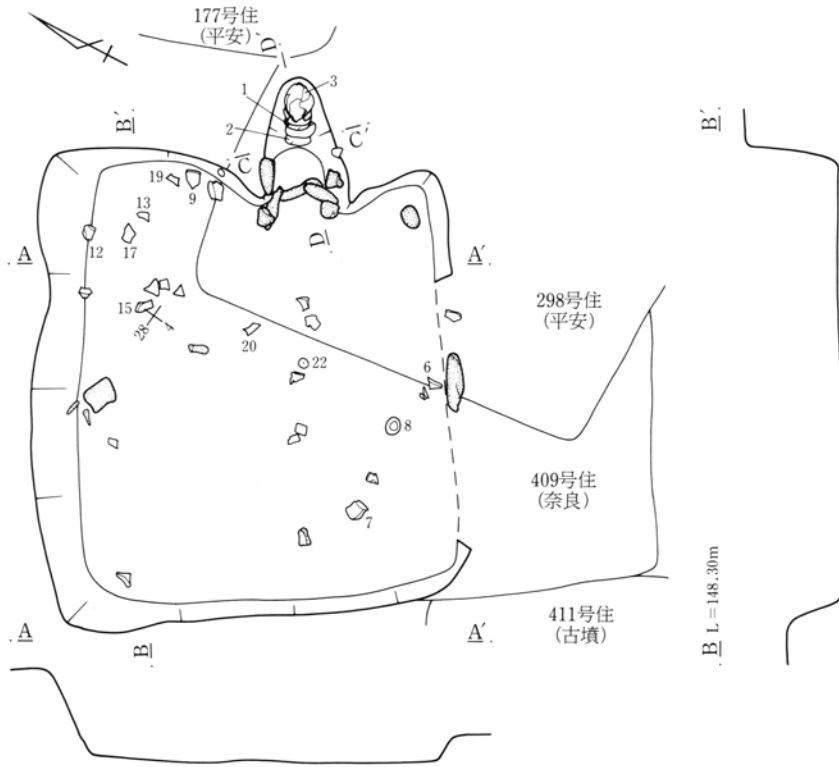
位置 住居東壁面に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

概要 両袖部分にそれぞれ3個の袖石と思われる石が倒れた状態で、天井石と思われる石が左右の袖石に挟

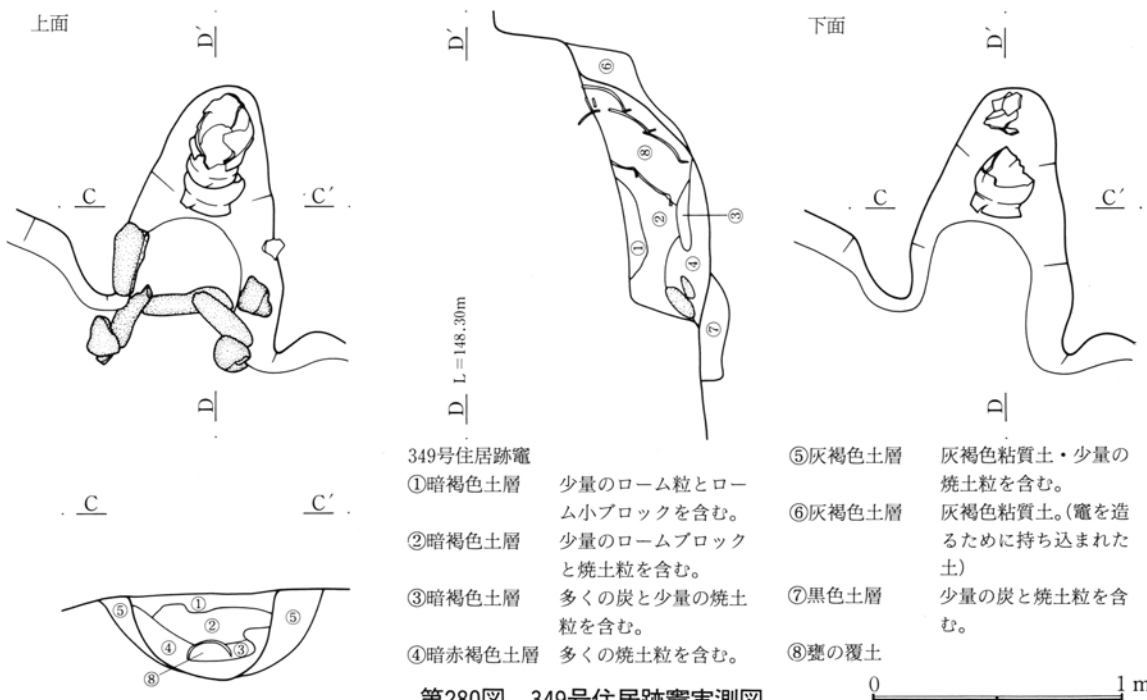
まれたような状態で焚口部分に落ちている。煙道部は甕3個が口縁部を下にして連結した状態で煙道としている。支脚石や燃烧部の甕は残っていないが、全体的には残りの良い竈である。

規模

煙道方向113cm、燃烧部幅56cmである。



第279図 349号住居跡実測図



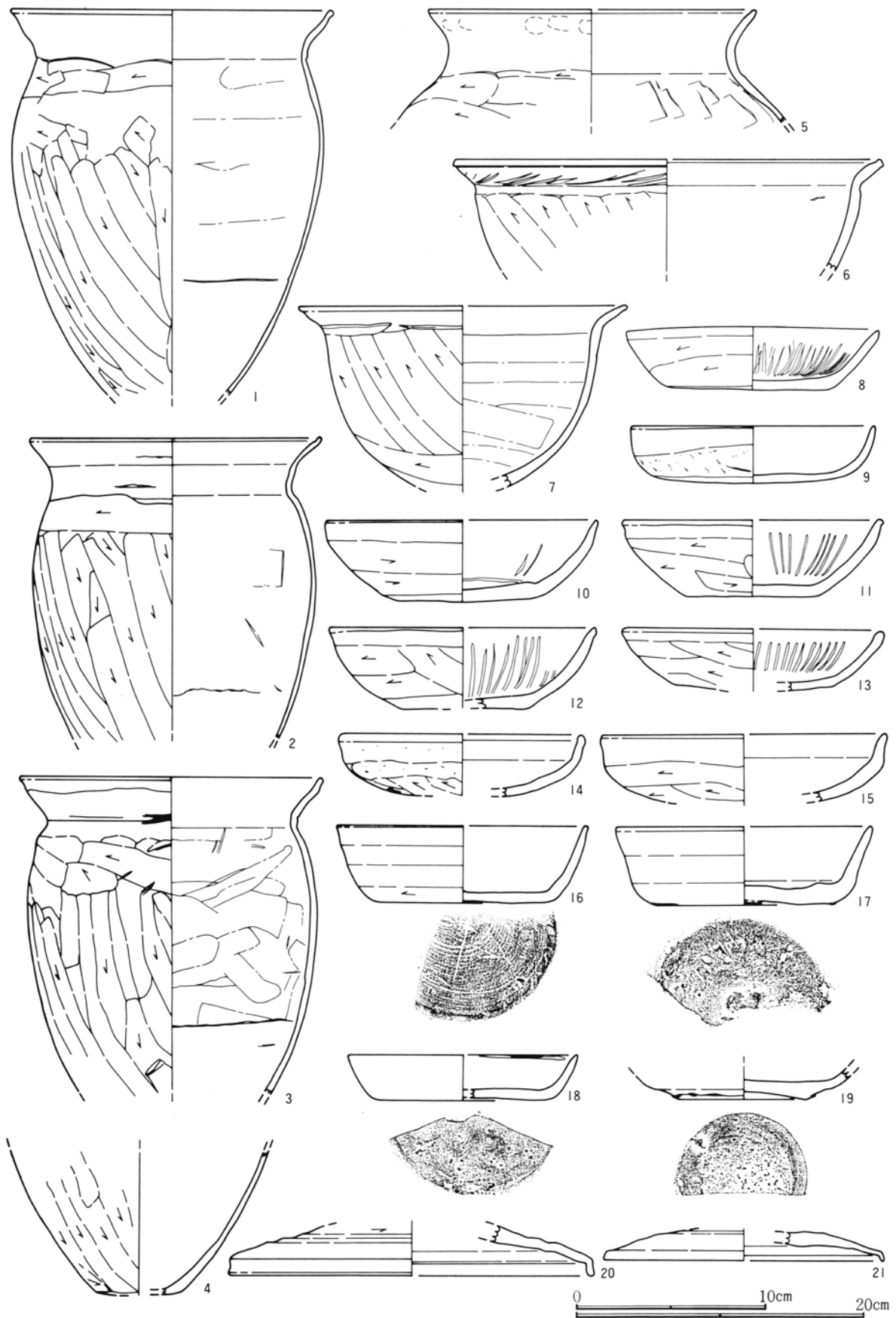
349号住居跡竈

- ①暗褐色土層 少量のローム粒とローム小ブロックを含む。
- ②暗褐色土層 少量のロームブロックと焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くの炭と少量の焼土粒を含む。
- ④暗赤褐色土層 多くの焼土粒を含む。

- ⑤灰褐色土層 灰褐色粘質土・少量の焼土粒を含む。
- ⑥灰褐色土層 灰褐色粘質土。(竈を造るために持ち込まれた土)
- ⑦黒色土層 少量の炭と焼土粒を含む。
- ⑧甕の覆土

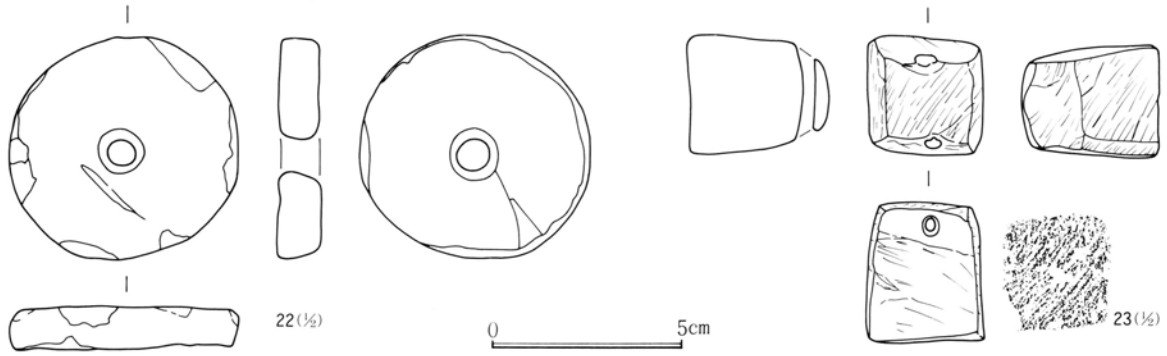
第280図 349号住居跡竈実測図





第281図 349号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 奈良時代の遺構と遺物



第282図 349号住居跡出土遺物実測図(2)

349号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
281-1 98	土 師 器 甕	床面+3 1/2残存	口 22.4 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へら削り、削られていない口縁部との境に段を持つ。
281-2 98	土 師 器 甕	床面+12 口縁~ 胴下半1/4	口 20.5 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へら削り。 口縁部に輪積の痕跡が残る。 胴部内側ナデにて器表面密。
281-3 98	土 師 器 甕	床面+21 口縁~ 胴下半1/4	口 21.2 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へら削り。 口縁部横ナデ。 胴下半部にわずかな段を伴う接合痕あり。
281-4	土 師 器 甕	覆土 胴下半1/3 底部1/2	口 — 高 — 底 (6.0)	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③褐色	底面と胴部へら削り。
281-5	土 師 器 甕	覆土 1/2残存	口(22.8) 高 — 底 —	①密、少量の雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄橙色	胴部へら削り。 口縁部にわずかに指頭圧痕あり。
281-6	土 師 器 鉢	床面+28 破片	口(30.0) 高 — 底 —	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部へら削り。 口縁部にへらの圧痕多くあり。
281-7	土 師 器 鉢	床面+3 胴上半1/2	口(23.0) 高 — 底 —	①密、小さな雲母粒を大量に含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部へら削り、へらが口縁部にあたり工具痕あり。
281-8 98	土 師 器 坏	床面+11 完形	口 13.2 高 3.3 底 8.6	①密、1~2mmの砂粒と片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削りと思われるが不明。体部へら削り。 内面に多くの暗文が描かれているが残りが悪い。 内外面の器表面が粗れている。
281-9 98	土 師 器 坏	床面-4 口縁部1/2 底部1/2	口 12.8 高 3.0 底 —	①密、わずかに角閃石を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色、一部黒色	底面へら削り。体部ナデ。 内面ナデにて器表面密。 内外の表面全体に黒漆と思われる痕跡が残る。
281-10 98	土 師 器 坏	覆土 口縁部1/3 底部1/3	口(14.2) 高 4.3 底 8.6	①密、1~3mmの赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削りの痕跡が残るが明瞭でない。 体部へら削り、内面に暗文の痕跡が残る。 内外面の器表面がやや粗れている。
281-11	土 師 器 坏	覆土 1/2残存	口(13.4) 高 4.0 底 —	①密、少量の白色粒を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	底面~体部外面へら削り。 内面に多くの暗文あり。
281-12	土 師 器 坏	床面+43 1/2残存	口(14.0) 高 — 底 —	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③外面黒褐色、内面にぶい橙色	底面と体部へら削り、へらの単位は明瞭である。 内面に多くの暗文あり。
281-13	土 師 器 坏	床面+40 1/2残存	口(13.6) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底部と体部へら削り、へらの単位は比較的明瞭。 内面に多くの暗文あり。
281-14	土 師 器 坏	覆土 1/2残存	口(12.4) 高 — 底 —	①密、小さな砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	底面へら削り、小さな砂粒が移動し器表面がやや粗い。 全体に歪んでいる。
281-15	土 師 器 坏	床面+8 1/2残存	口(15.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。 口径が大きく器肉の厚い坏である。

349号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
281-16	須恵器 坏	覆土 1/2残存	口(13.0) 高 3.0 底(9.0)	①密、少量の黒色粒を含む ②還元焰、硬質 ③緑白色	底面糸切り後、ほぼ全面にわたり回転ヘラ削り。 体部下半ヘラ削り。
281-17	須恵器 坏	床面+47 口縁部1/4 底部1/2	口(13.2) 高 — 底 9.2	①密、1mm以下の長石粒を多く含む。 ②還元焰、軟質 ③灰白色	底面ヘラ切り後、ナデ整形。 底面中央部にヘラ切り時の凸部分あり。 全体に白色の強い軟質な感じである。
281-18	須恵器 坏	覆土 1/2残存	口(12.1) 高 — 底(9.4)	①密、内外表面に多くの自然釉 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面ヘラ切り後、ていねいにヘラやナデにより整形し、 ヘラ切りの痕跡をほとんど消している。 固く焼き締めてある。口縁部内側に重焼痕あり。
281-19	須恵器 坏	床面-11 底部1/3	口 — 高 — 底 6.6	①密、気泡状の黒色粒を少量含む ②還元焰、硬質 ③灰色	底面中央に自然釉が堆積し切り離し技法不明。 底面周辺ヘラ削り。 均整のとれた器形を呈している。
281-20	須恵器 蓋	床面+28 1/2残存	口(18.9) 高 — 底 —	①やや粗、2~3mmの片岩粒を少量含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	天井部ヘラ削り。
281-21	須恵器 蓋	覆土 1/2残存	口(14.5) 高 — 底 —	①やや粗、少量の片岩粒を含む ②還元焰、硬質 ③灰白色	天井部ヘラ削り。 口縁端部は短くわずかに外側に開く。
282-22 118	石製品 紡錘車	床面+33	径 6.0 孔径 0.9 厚 1.2 重 50.0		砂岩。表面全体を削って加工している。 少し歪んでいる。
282-23 120	分銅型 石製品	覆土 完形	高 3.6 広横 3.2 狭横 3.0 孔径 0.5 重 61.0		砥沢石。荒砥削りにより整形されている。 底面はやや凹状を呈する。完形品である。

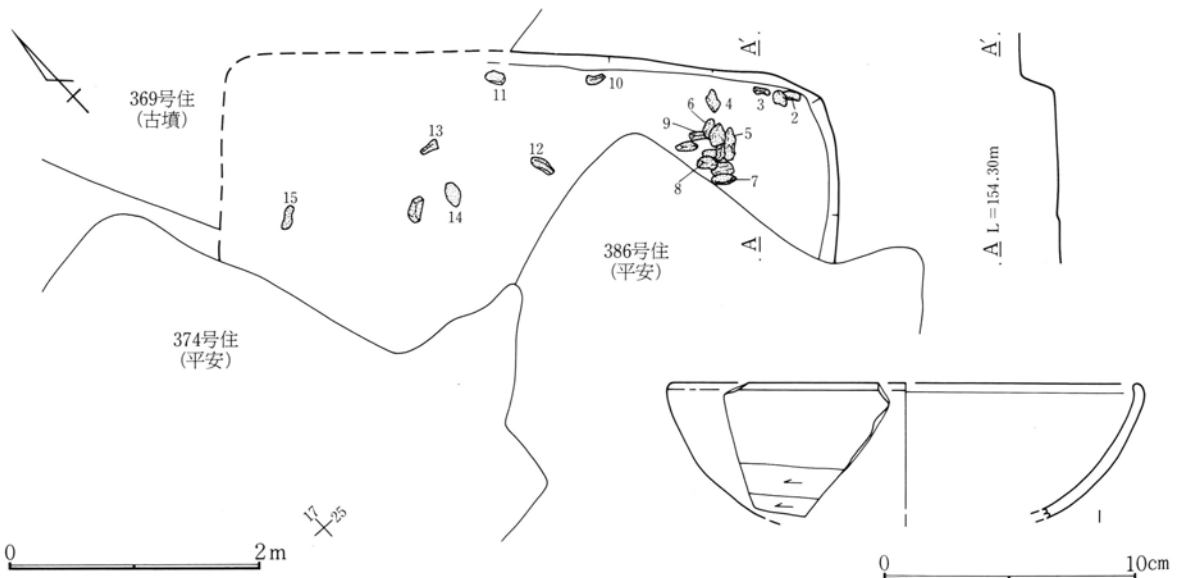
373号住居跡 (第283図、図版47・127)

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、25・26-18グリッドに位置する。

概要 本住居を含めて4軒が重複している。北西部分で古墳時代の369号住居と重複しており、本住居が369号住居の床面付近まで掘り込んでいる。南側と西側を平安時代の386号住居と374号住居により床下部分まで掘り込まれている。このように残りの悪い住居であり、竈をはじめとして柱穴や貯蔵穴も不明である。

規模 東西方向は推定4.40m、南北は不明である。壁高は残りの良い北東コーナー部分で20cmである。

遺物 出土量は少なく、図示できたのは坏の破片1点である。こも編み石が多く出土している。



第283図 373号住居跡・出土遺物実測図

第4章 奈良時代の遺構と遺物  
373号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考		
283-1	土師器 坏	覆土 破片	口(18.5) 高・底一	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	体部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。 口唇部は内側に折り曲げられている。		
遺物番号	図版番号	器種	法量(cm)(g)				石材・備考
2	127	こも編み石	長 14.1	幅 7.1	厚 3.5	重 475	絹雲母石墨片岩
3	127	こも編み石	長 13.0	幅 7.2	厚 3.2	重 440	閃緑岩
4	127	こも編み石	長 11.0	幅 6.8	厚 4.0	重 450	点紋絹雲母石墨片岩
5	127	こも編み石	長 17.7	幅 6.5	厚 4.3	重 660	緑簾緑泥片岩
6	127	こも編み石	長 15.8	幅 9.3	厚 3.3	重 685	点紋緑泥片岩
7	127	こも編み石	長 16.8	幅 7.3	厚 3.4	重 680	点紋緑泥片岩
8	127	こも編み石	長 15.2	幅 9.0	厚 3.0	重 570	絹雲母石墨片岩
9	127	こも編み石	長 12.2	幅 5.7	厚 3.0	重 315	緑簾緑泥片岩
10	127	こも編み石	長 14.7	幅 5.7	厚 4.4	重 515	絹雲母石墨片岩
11	127	こも編み石	長 12.2	幅 8.2	厚 4.4	重 710	絹雲母石墨片岩
12	127	こも編み石	長 15.1	幅 7.8	厚 2.7	重 435	絹雲母石墨片岩
13	127	こも編み石	長 15.2	幅 6.0	厚 1.9	重 300	絹雲母石墨片岩
14	127	こも編み石	長 15.1	幅 8.0	厚 2.9	重 465	点紋絹雲母石墨片岩
15	127	こも編み石	長 15.1	幅 6.1	厚 3.0	重 420	輝岩

378住居跡 (第284~286図、図版47)

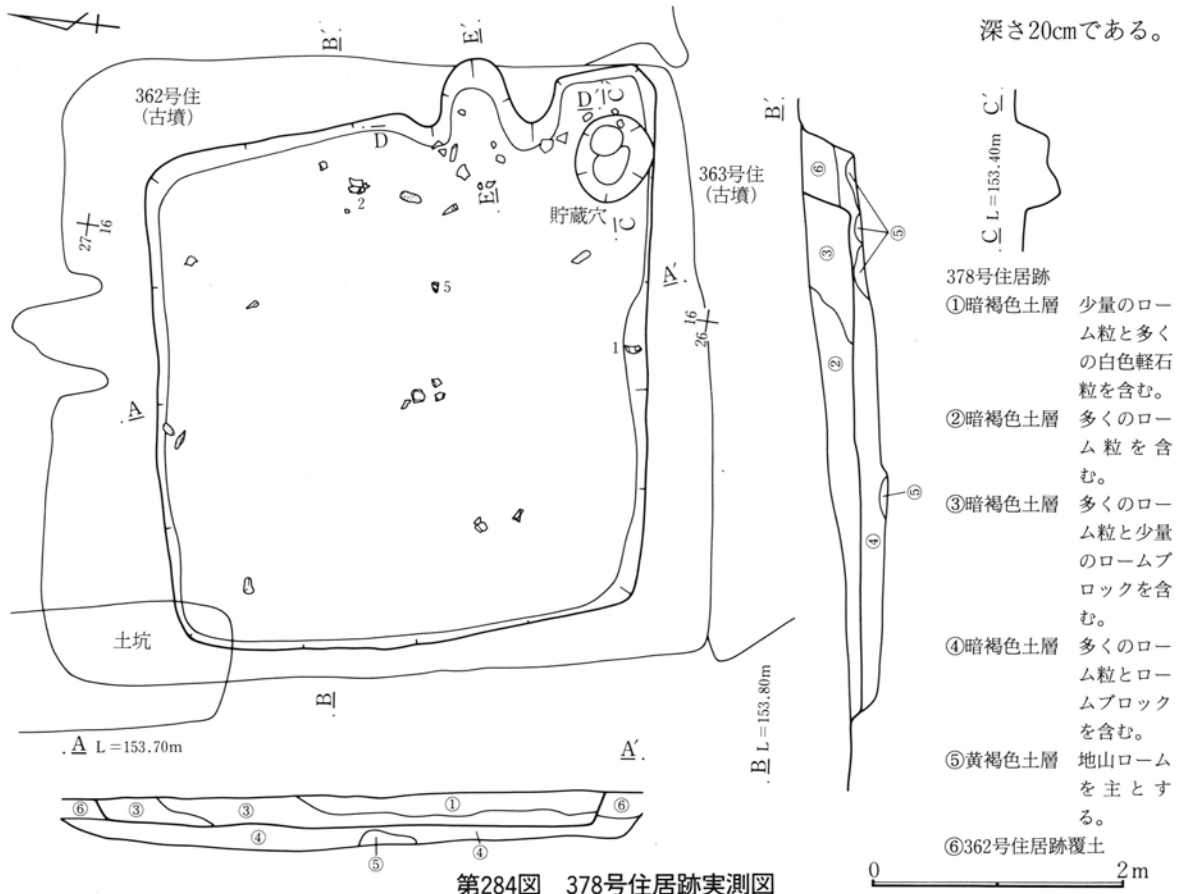
位置 本住居跡は第5次調査区にあり、27-16・17グリッドに位置する。

概要 3軒重複の住居で、本住居は古墳時代の362号住居の覆土を掘り込んで造られている。南側部分では本住居と362号住居が古墳時代の363号住居を掘り込んでいる。このように3軒の中では本住居が最も新しい。北西コーナー部分は土坑により掘り込まれている。

構造 床面は多くローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。貯蔵穴が竈の右側に掘られているが、柱穴は掘られていない。この貯蔵穴は363号住居の柱穴4とほぼ同じ位置である。

規模 東西4.36m、南北3.80mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で48cmである。貯蔵穴は径69cm

深さ20cmである。



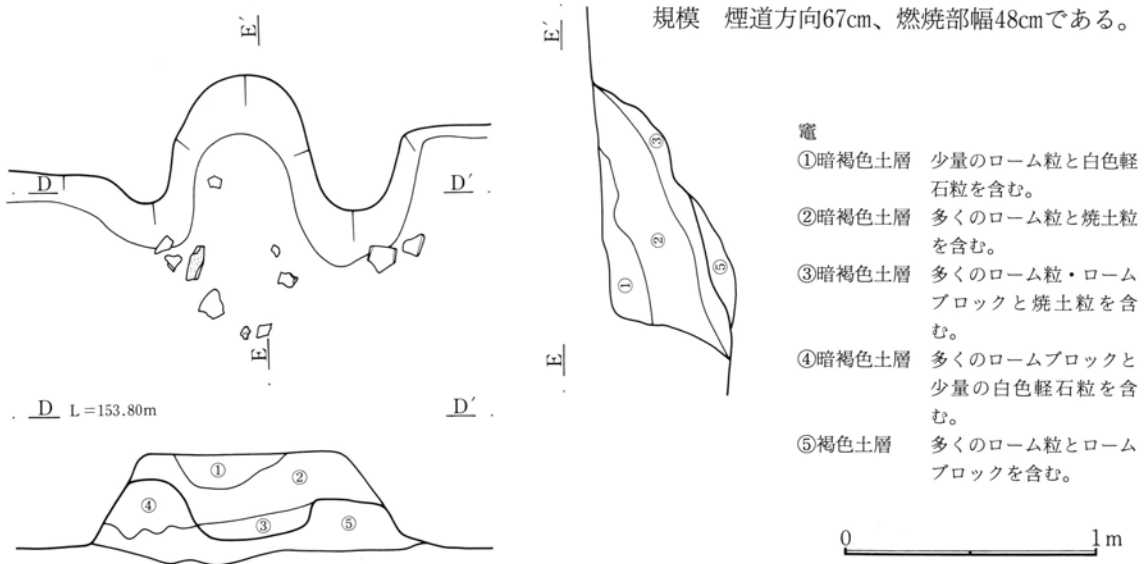
第284図 378号住居跡実測図

遺物 出土量は少ない。

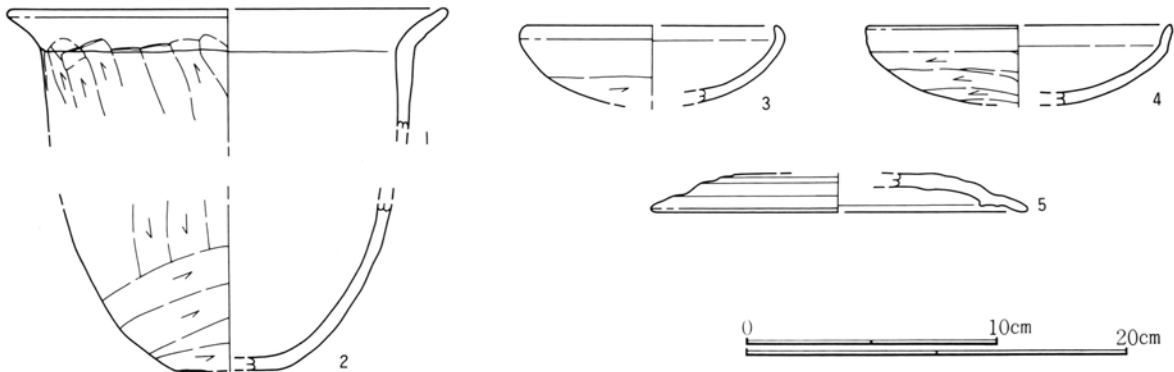
(竈)

位置 住居東壁面に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 残りは良好でない。袖は多くのロームブロックを用いて造られている。燃烧部を中心に多くの焼土粒が出土している。



第285図 378号住居跡竈実測図



第286図 378号住居跡出土遺物実測図

378号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
286-1	土師器 甕	床面+7 1/2残存	口(22.5) 高— 底—	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	胴部ヘラ削り。 口縁部にヘラの圧痕あり。
286-2	土師器 甕	床面+4 底部片	口— 高— 底(5.6)	①粗、1~3mmの片岩粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底面ナデ。胴部外面ヘラ削りにより、多くの砂粒が移動し器表面が粗い。 内面ナデ。
286-3	土師器 坏	貯蔵穴覆土 1/2残存	口(9.7) 高— 底—	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胎土が密でヘラ削りが浅いため削りの単位不明瞭である。
286-4	土師器 坏	覆土 破片	口(12.0) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、砂粒の移動少なく器表面密。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 胎土がやや粉状を呈する。
286-5	須恵器 蓋	床面+7 破片	口(14.8) 高— 底—	①密 ②還元焰、硬質 ③外面にぶい橙色、断面灰色	天井部ヘラ削り。 カエリはていねいにつくられている。 全体につくりがていねいである。

第4章 奈良時代の遺構と遺物

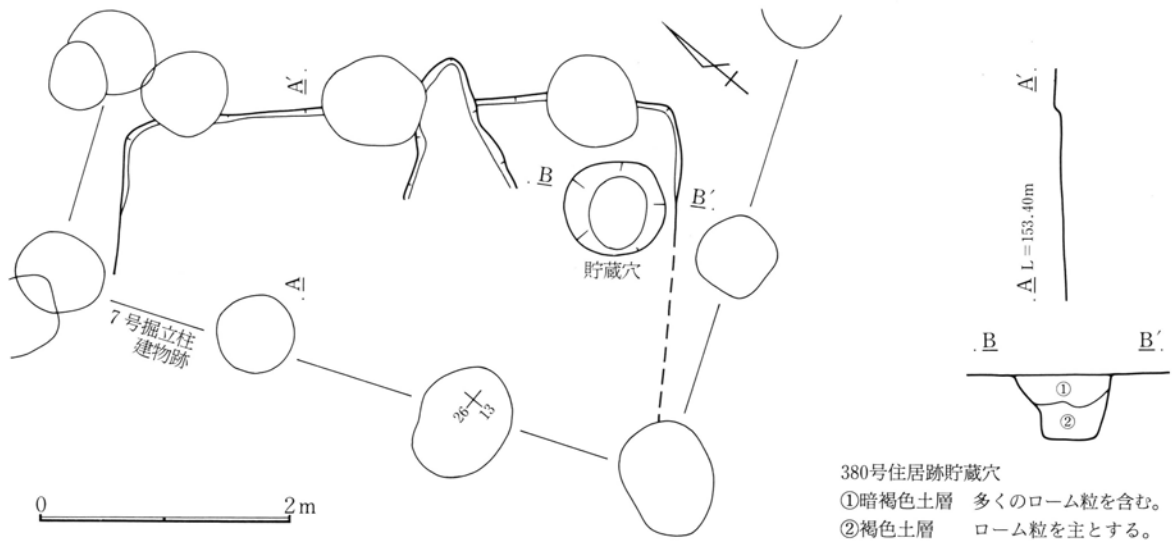
380号住居跡 (第287・288図)

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、27-14グリッドに位置する。

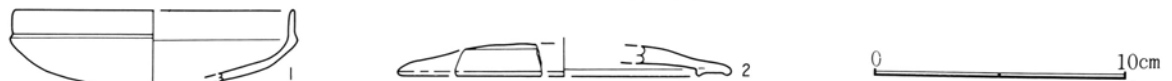
概要 残りの極めて悪い住居であり、竈の造られている東側部分がかろうじて残っているが、西側部分は削られて残っていない。住居周辺に多くの小穴が掘られ、また7号掘立柱建物跡が本住居を取り囲むように造られている。竈と思われる痕跡が東壁面に残っているが、焼土粒は少ない。竈の右側に貯蔵穴が掘られている。柱穴は掘られていない。

規模 東西不明、南北4.43mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で10cmである。貯蔵穴は径82cm深さ51cmである。竈の規模は残りが悪く不明である。

遺物 破片は多く出土しているが、図示できたのは2点である。



第287図 380号住居跡実測図



第288図 380号住居跡出土遺物実測図

380号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
288-1	土師器 坏	覆土 小破片	口(11.0) 高・底一	①密 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削りであるが、へらの単位や方向不明。
288-2	須恵器 蓋	覆土 小破片	口(13.0) 高・底一	①密、少量の白色粒を含む ②還元焰、硬質 ③表褐灰、裏灰色	カエリは内側に傾いている。

381号住居跡 (第289~292図、図版47・48・98・114・127)

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、25-16・17グリッドに位置する。

概要 3軒重複の住居で、本住居は古墳時代の385号住居の西側大部分の覆土を掘り込んでおり、また平安時代の377号住居により本住居の西側部分は床下部分まで深く掘り込まれている。3軒の新旧関係は385→381→377号住居である。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。竈の右側に貯蔵穴が掘られている。小穴が3本掘られているが、柱穴にするにはやや配置が不自然であるため小穴として扱った。

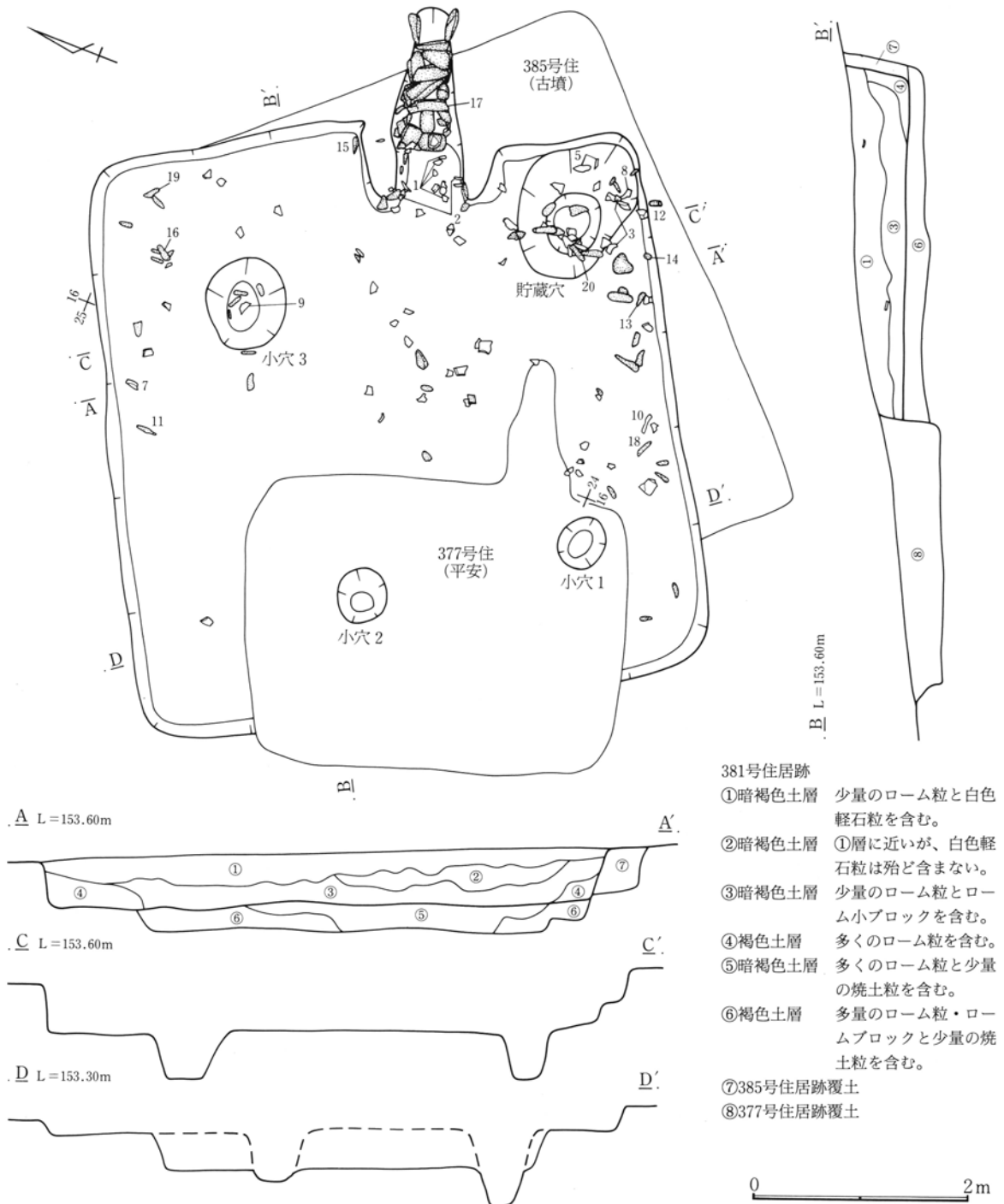
規模 東西5.45m、南北5.28mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で52cmである。貯蔵穴は径90cm深さ40cm、小穴1は径49cm深さ65cm、小穴2は径52cm深さ45cm、小穴3は径85cm深さ45cmである。

遺物 破片の出土量が多い。竈内より多くの石が出土している。鎌の出土が注目される。

(竈)

位置 住居東壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 焚口部分は左右の袖石がほぼ据えられた状態で立っており、袖石の手前に接して1個の石がそれぞれ出土している。天井石は竈周辺部や床面部分を含めて残っていない。燃焼部の側面左側に側壁の石が2個残っていたが右側面には残っていない。おそらく使用時には右側面にも側壁の石が使われていたものと思われる。煙道部は左右に側石を立てて、天井部に石を載せたトンネル状に造られ、ロームを主とした土で覆われている。天井に載せた石の多くは崩れ落ちていたが、全体に残りが良好で使用時

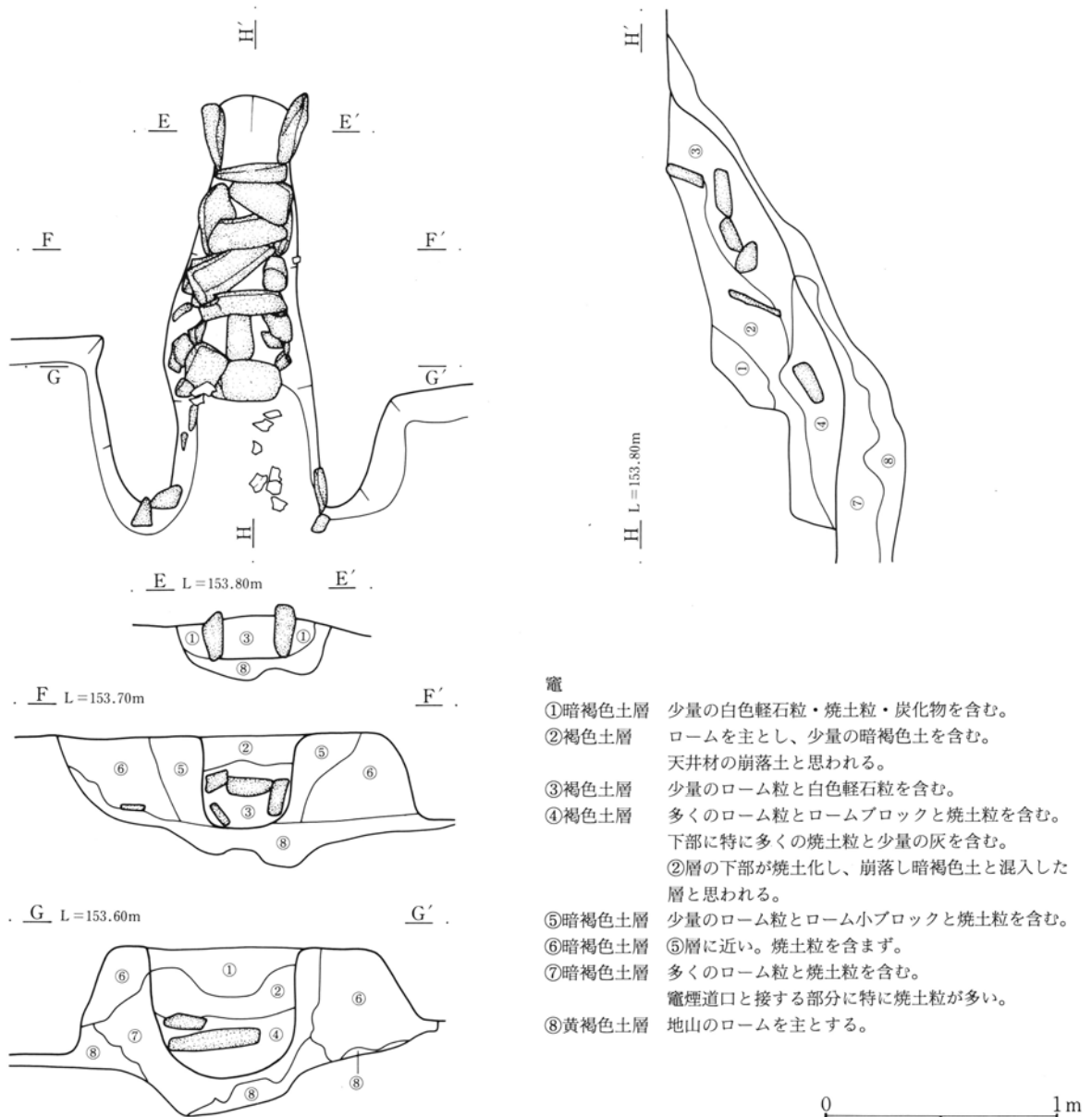


第289図 381号住居跡実測図

第4章 奈良時代の遺構と遺物

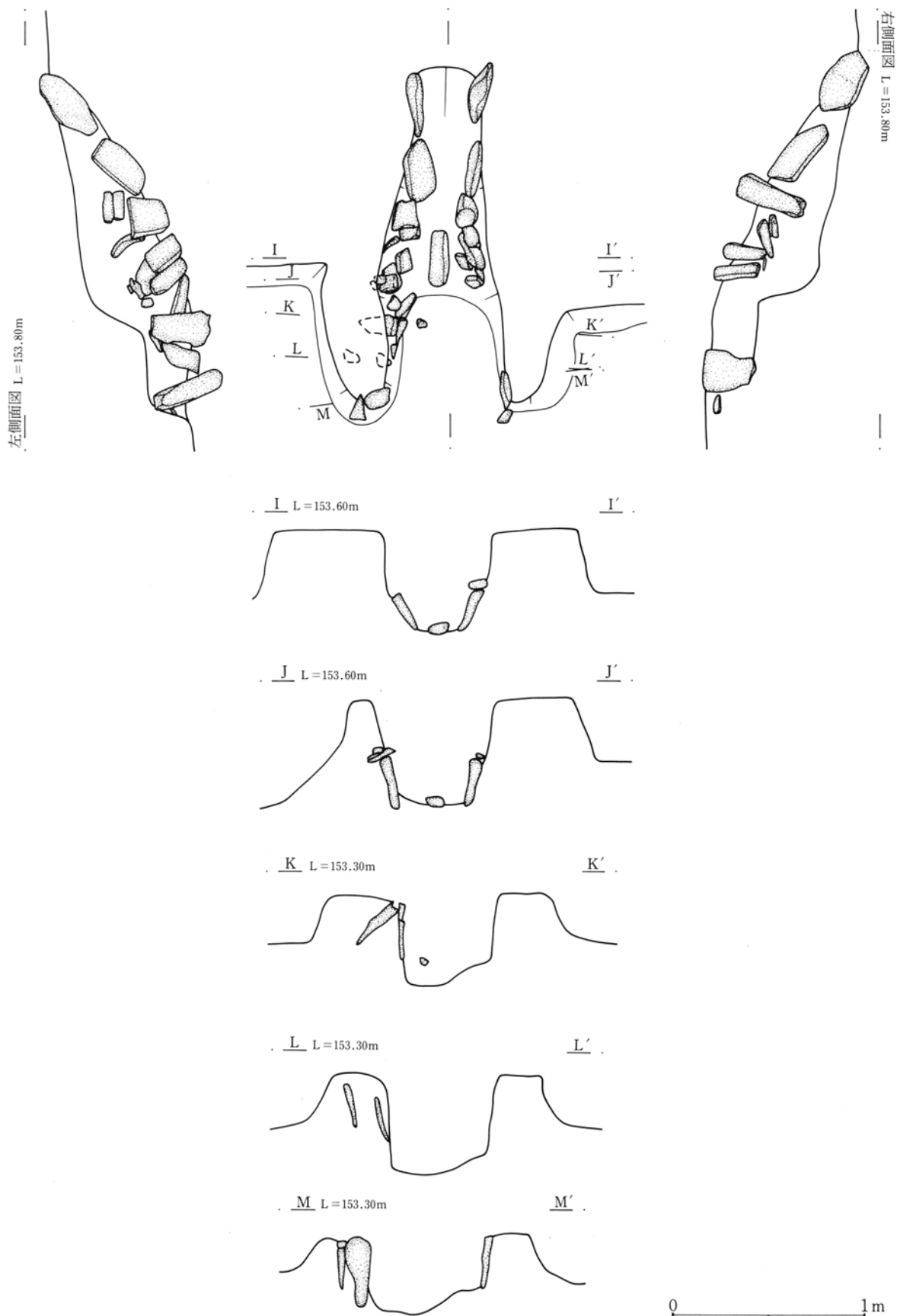
の状態を良く留めている。調査段階で煙道部左側面に8個の側壁石、右側面に6個の側壁石が、また天井石は6個残っている。天井石を覆っていた土はロームを主とした土であり、住居覆土とは明らかに異なる。煙道部が造られるとき、天井部分を覆っていた土である。煙道部天井石の崩壊とともにずり落ちたものとも思われる。燃焼部から多くの焼土粒が出土し、特に④層下部に多い。また床面付近も焼けており多くの焼土粒が出土している。このような状況をもとに大胆に想定復元を試みた。煙道部の天井石を本来載せられていたであろう位置に載せ、燃焼部の右側壁の石を3個と支脚石と天井石を追加し、平面図と断面図を作成してみた。おそらくこのような状態で竈は造られ、使用されなくなった段階で甕を外し、焚口天井石と支脚石を取り去り、さらに右側壁石3個を抜き去り、竈として使えなくなる状態、つまり竈の機能を停止させ住居と共に放棄されたことが考えられる。

規模 煙道方向180cm、燃焼部幅56cmである。

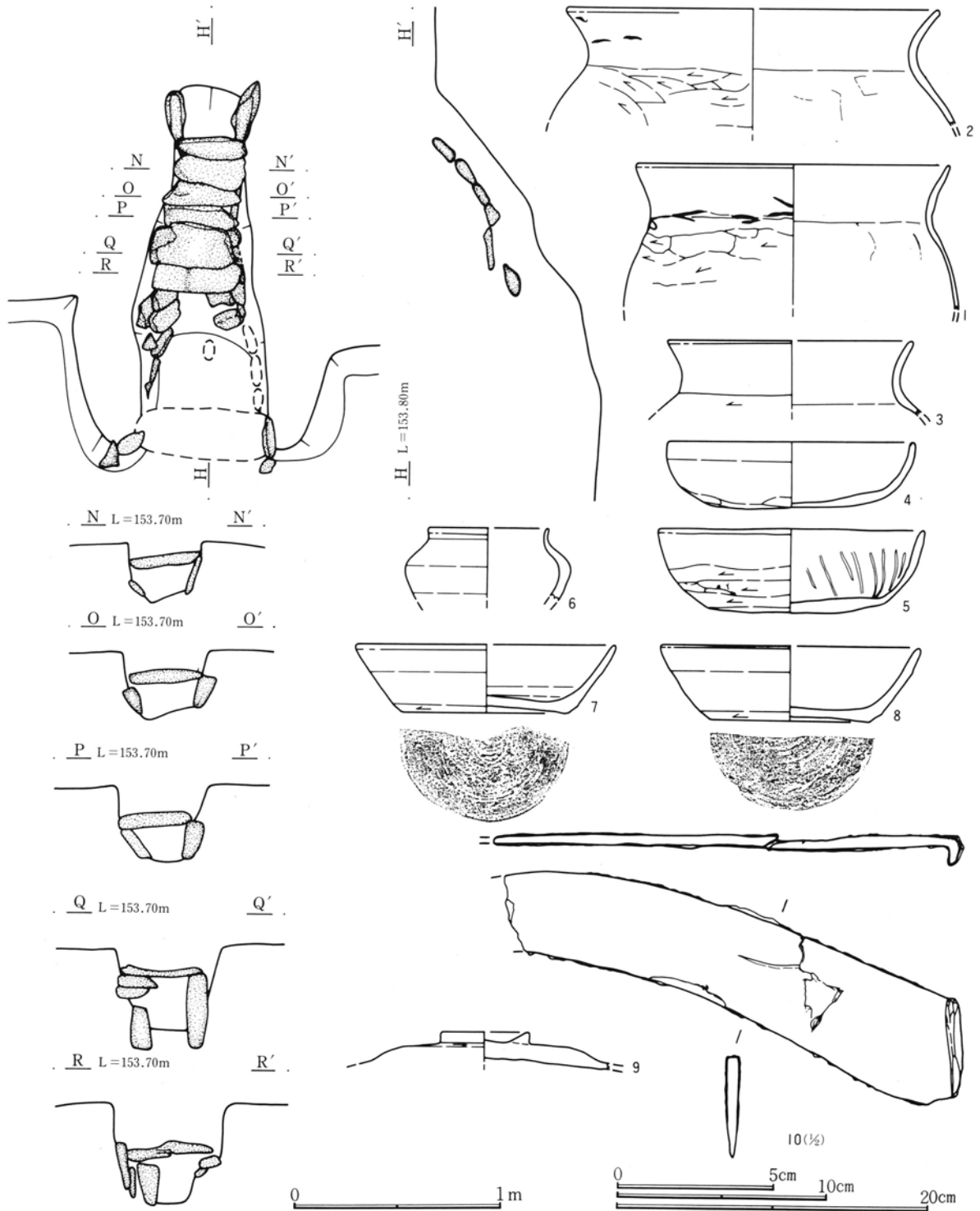


第290図 381号住居跡竈実測図(1)





第291図 381号住居跡竈実測図(2)



第292図 381号住居跡竈想定復元図・出土遺物実測図

381号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
292-1 98	土 師器 甕	床面+2 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{2}$	口 20.2 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面へラ削り、小さな砂粒が多く移動している。 内面ナデにて器表面密。
292-2	土 師器 壺	床面+22 小破片	口 (24.2) 高 — 底 —	①密、1~2mmの赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面へラ削り、小さな砂粒が多く移動している。 内面ナデにて器表面密。

381号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考		
292-3	土師器 甕	床面+8 1/2残存	口(16.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部ヘラ削り。口縁部横ナデ。器表面全体がやや粗れている。		
292-4 98	土師器 坏	覆土 完形	口 11.7 高 3.2 底 —	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。		
292-5 98	土師器 坏	床面+16 1/2残存	口 12.8 高 4.0 底 8.2	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部ヘラ削り。口縁部内側に左上から右下方向の暗文あり、この方向の暗文はめずらしい。内側底面に暗文は認められない。		
292-6	須恵器 小型短頸 壺	覆土 口縁～ 体部破片	口(7.6) 高 — 底 —	①密、1～3mmの砂粒を少量含む ②還元焰、硬質 ③灰白色	内外器表面回転によるナデにより器表面密。		
292-7 98	須恵器 坏	床面+13 口縁部1/2 底部1/2	口(12.5) 高 3.3 底(8.0)	①密、1～2mmの長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面中央系切り痕、周辺部回転ヘラ削り。体部下半ヘラ削り。		
292-8 98	須恵器 坏	床面+19 口縁部1/2 底部1/2	口(12.6) 高 3.6 底(7.7)	①密、1～2mmの長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰白色	底面中央系切り痕、周辺部回転ヘラ削り。体部下半ヘラ削り。		
292-9	須恵器 蓋	床面+9 摘部～ 体部1/2	口 — 高 — 底 —	①密、少量の片岩粒を含む ②還元焰、硬質 ③灰色	天井部ヘラ削り。摘みは輪状で断面が三角形を呈する。		
292-10 114	鉄製品 鎌	覆土	長 15.2 幅 3.8 厚 0.4 重 53.8		先端部分を欠損しているが他の部分の残りは良好。柄の付く部分はほぼ直線に折り曲げられている。		
挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)(g)				石材・備考
11	127	こも編み石	長 14.0	幅 4.0	厚 2.5	重 190	絹雲母石墨片岩
12	127	こも編み石	長 16.6	幅 6.0	厚 2.7	重 365	絹雲母石墨片岩、両側面打ち欠かれた凹状
13	127	こも編み石	長 14.4	幅 4.4	厚 2.3	重 180	絹雲母石墨片岩
14	127	こも編み石	長 13.4	幅 6.0	厚 3.4	重 465	緑簾緑泥片岩
15	127	こも編み石	長 13.4	幅 4.8	厚 2.9	重 265	絹雲母石墨片岩
16	127	こも編み石	長 14.1	幅 4.6	厚 2.2	重 260	緑簾緑泥片岩
17	127	こも編み石	長 13.0	幅 4.8	厚 3.1	重 310	緑簾緑泥片岩
18	127	こも編み石	長 15.7	幅 3.8	厚 3.7	重 360	緑簾緑泥片岩
19	127	こも編み石	長 14.3	幅 4.3	厚 3.2	重 220	絹雲母石墨片岩
20	127	こも編み石	長 16.4	幅 5.5	厚 3.5	重 530	緑簾緑泥片岩

390号住居跡（第293～296図、図版48・98・99）

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、37-13・14グリッドに位置する。

概要 東側で古墳時代の389号住居と、また南側で古墳時代の388号住居と重複している。本住居が389号住居の床下部分まで、388号住居のほぼ床面まで掘り込んでいる。このように本住居が最も新しい。本住居の竈は389号住居の覆土を掘り込んで造られているため、389号住居の覆土と竈を造っている土との区別が困難で良い状態での調査はできなかった。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。貯蔵穴と柱穴はない。

規模 東西2.38m、南北3.30mである。壁高は残りの良い北壁面部分で15cmである。

遺物 竈右袖手前より鉢や坏が重なって出土している。

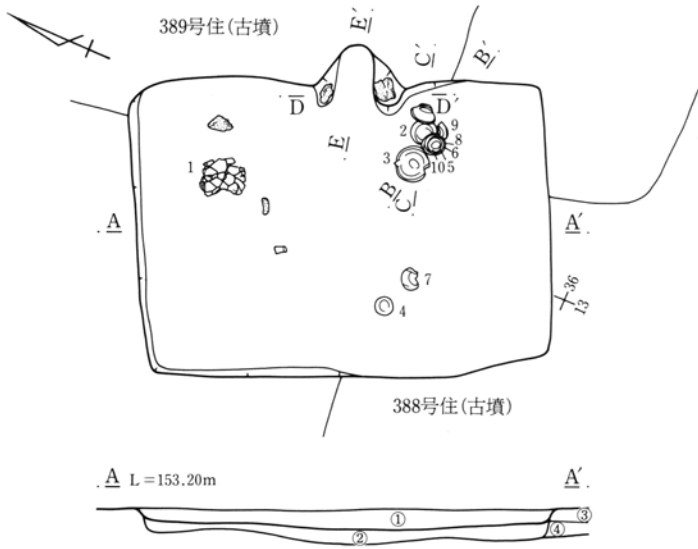
（竈）

位置 住居東壁面に造られている。

概要 残りが悪く不明な点が多いが、住居が小さいためか袖の一部が床面上に位置し、燃焼部の多くは壁面を掘り込んで造られていたようである。焚口部分に大きな両袖石がほぼ使用時の状態を保つかのよう立っていた。他に石は出土していない。竈内に焼土粒の出土は少ない。

規模 煙道方向55cm、燃焼部幅37cmである。

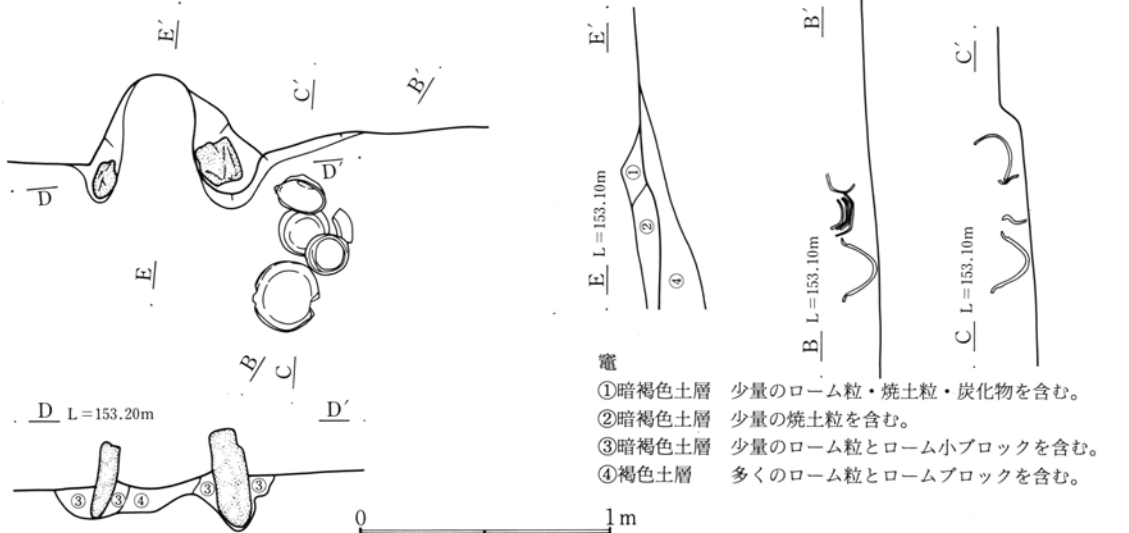
第4章 奈良時代の遺構と遺物



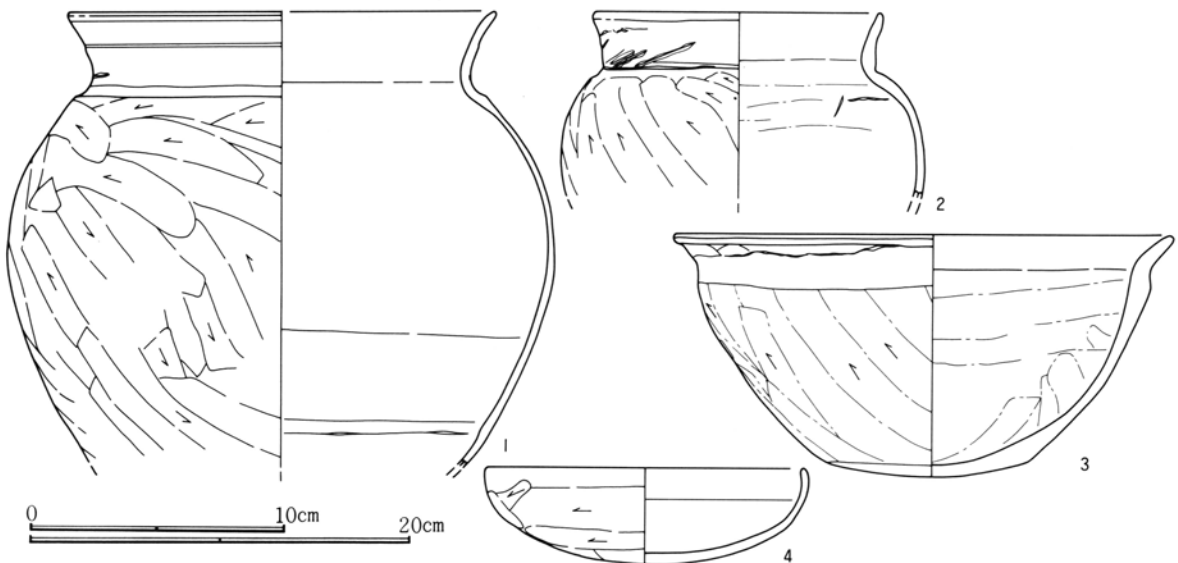
390号住居跡

- ①暗褐色土層 少量のローム粒を含む。
- ②暗褐色土層 やや多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ③388号住居跡覆土
- ④388号住居跡床下覆土

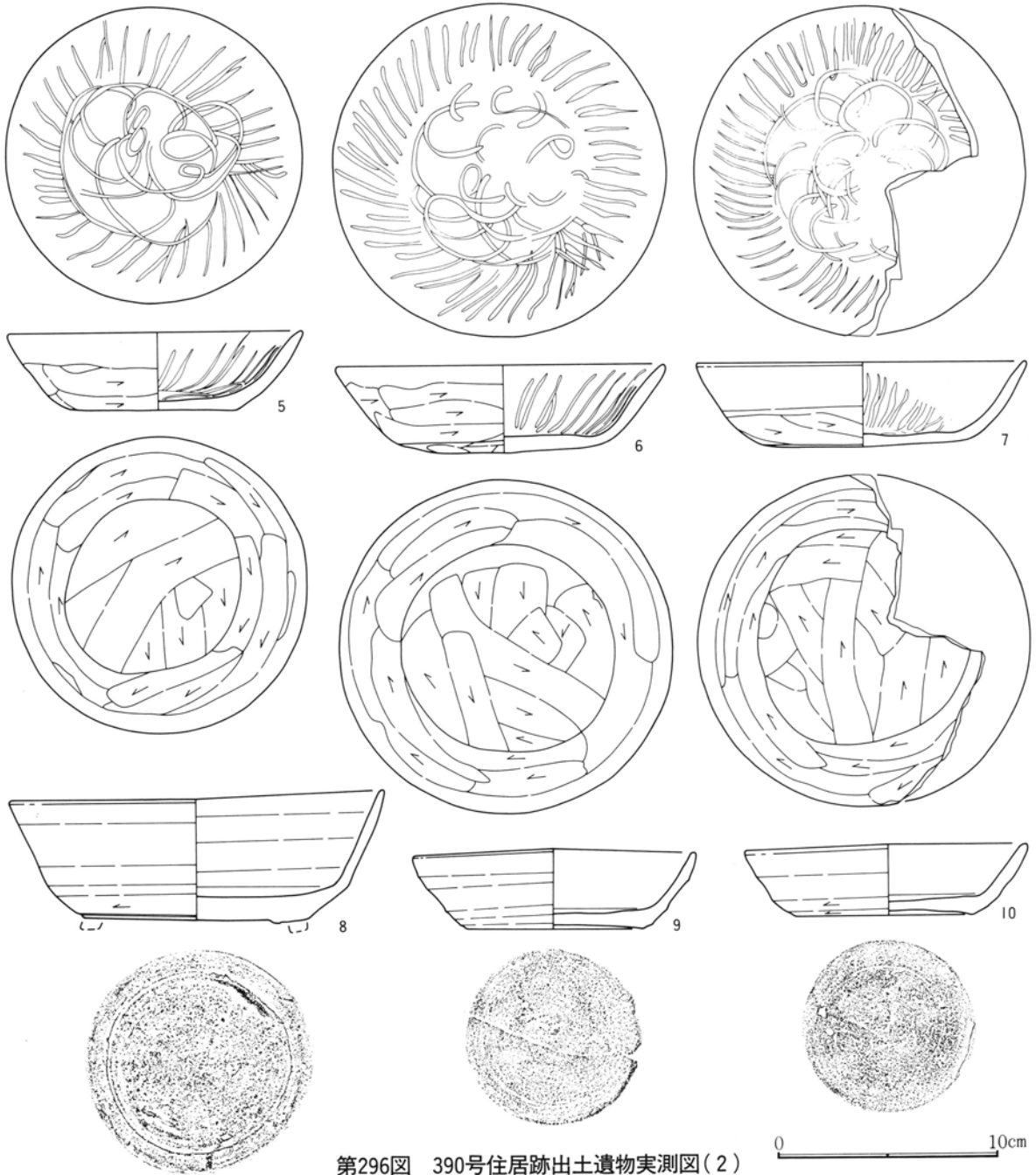
第293図 390号住居跡実測図



第294図 390号住居跡竈実測図



第295図 390号住居跡出土遺物実測図(1)



第296図 390号住居跡出土遺物実測図(2)

390号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
295-1 98	土 師 器 甕	床面+6 口縁部¼ 胴部½	口(22.4) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へら削り。 口縁部中段に1条の沈線あり。 胴下部に肉厚の違う明瞭な接合痕あり。
295-2 98	土 師 器 甕	覆土 口縁~胴上 部ほぼ完形	口 15.4 高 — 底 —	①密、1~2mmの砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へら削り、削りの単位は明瞭である。 口縁部にへらの当たった痕跡多く残る。
295-3 99	土 師 器 鉢	覆土 口縁一部欠 他完形	口 26.3 高 12.7 底 10.4	①密、2~4mmの長石粒と片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部外面へらナデ、砂粒の移動は少ない。 内面ナデにて器表面密。
295-4 98	土 師 器 坏	床面+3 完 形	口 12.6 高 3.9 底 —	①密、全体に粉状を呈する ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り、胎土が粉状を呈しへらの単位不明瞭。

第4章 奈良時代の遺構と遺物

390号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
296-5 98	土師器 坏	覆土 完形	口 13.2 高 3.6 底 8.0	①やや粗、1~2mmの赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面に放射状と螺旋状の暗文。
296-6 98	土師器 坏	覆土 完形	口 14.8 高 4.0 底 9.7	①やや粗、1~2mmの赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラナデ、砂粒の移動はほとんどない。 体部ヘラ削り。 内面に放射状と螺旋状の暗文。
296-7 99	土師器 坏	床面+2 %残存	口 14.8 高 3.8 底 9.5	①やや粗、1~2mmの赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	底面ヘラナデ、砂粒の移動はほとんどない。 体部ヘラ削り。 内面に放射状と螺旋状の暗文。
296-8 99	須恵器 埴	覆土 ほぼ完形	口 16.9 高 — 底 10.2	①密、1~2mmの長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰白色	底面右回転糸切り痕、高台がそっくりはずれている。 体部下半回転ヘラ削り。 少しゆがんでいるが、ていねいにつくられている。
296-9 99	須恵器 坏	覆土 完形	口 12.8 高 8.0 底 3.6	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②還元焰、軟質 ③灰色	底面全面にわたり右回転ヘラ削り。 体部下半右回転ヘラ削り。
296-10 99	須恵器 坏	覆土 完形	口 12.7 高 3.2 底 8.0	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②還元焰、硬質 ③灰白色	底面全面にわたり右回転ヘラ削り。 体部下半右回転ヘラ削り。

392号住居跡 (第297~300図、図版48・49・99・114)

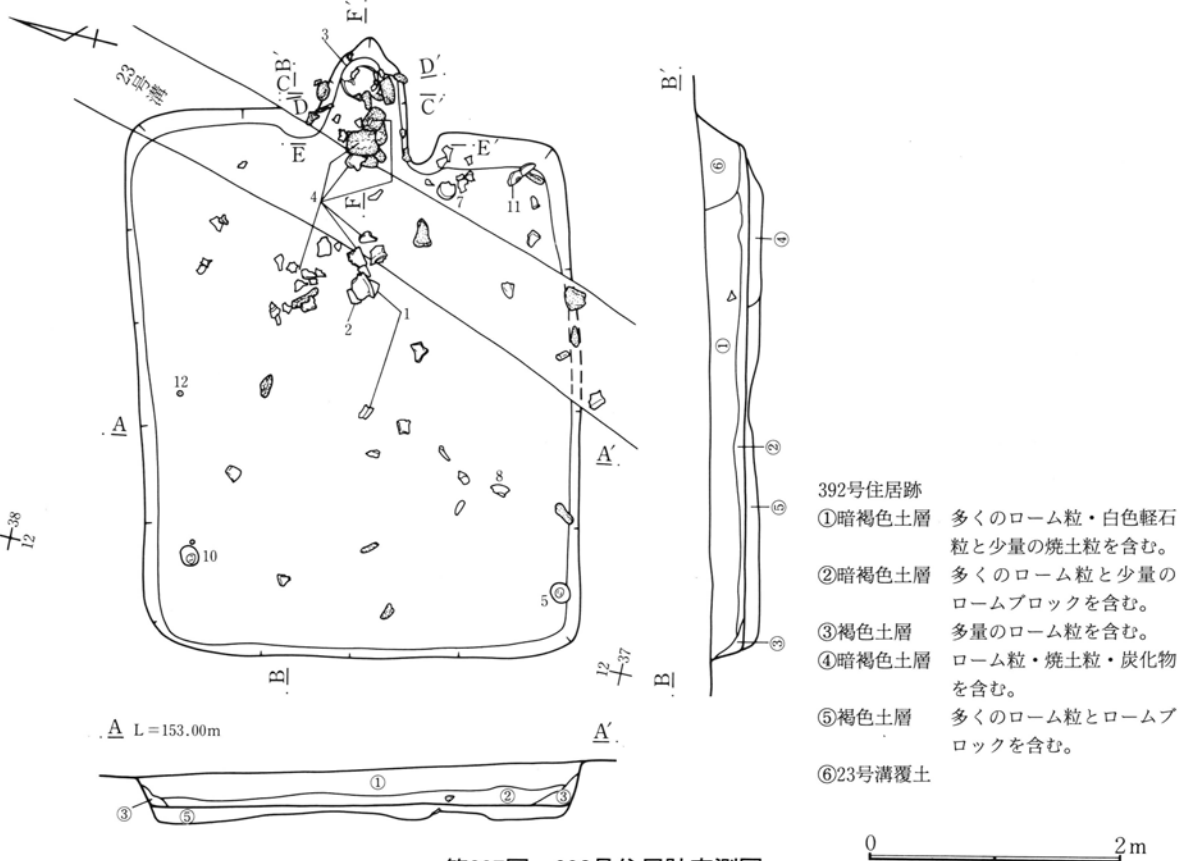
位置 本住居跡は第5次調査区にあり、38-13グリッドに位置する。

概要 ほぼ南北方向を耕作溝により覆土を掘り込まれているが、残りは比較的良好である。

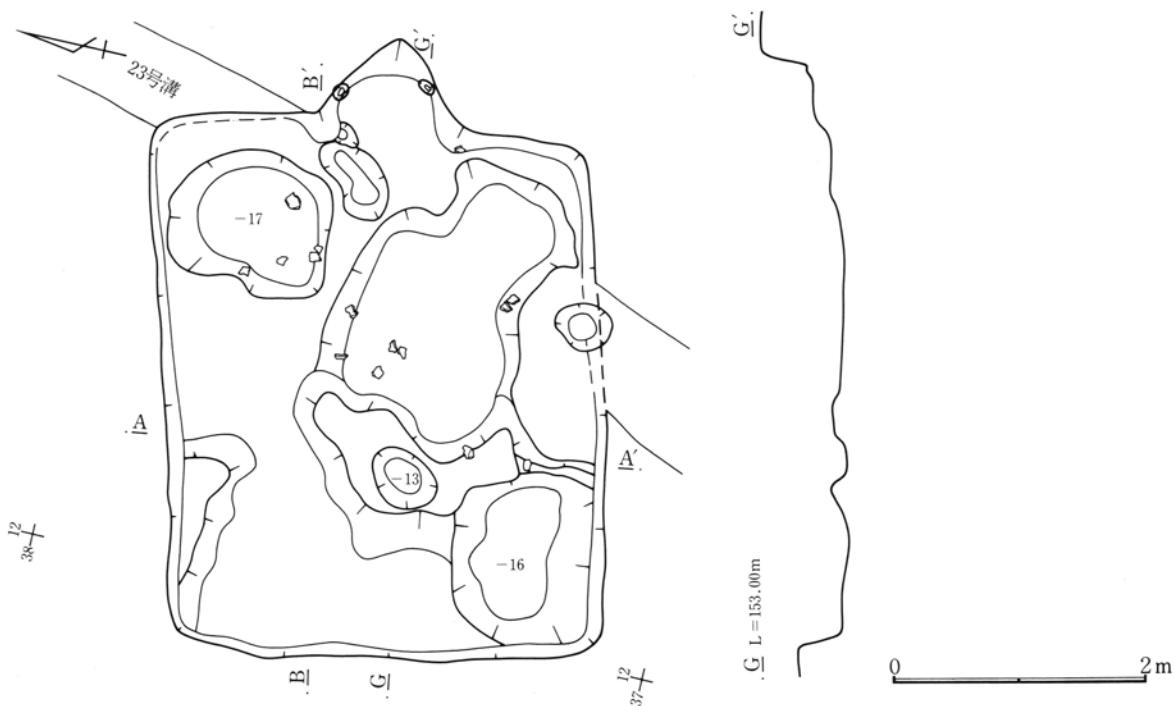
構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。貯蔵穴と柱穴はない。

規模 東西4.35m、南北3.50mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で42cmである。

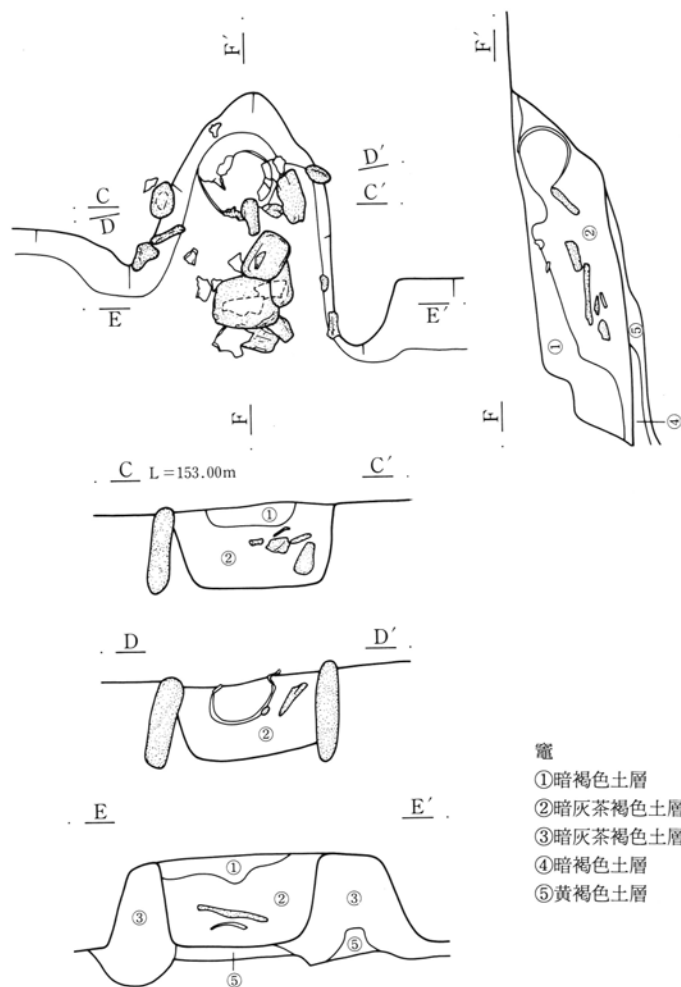
遺物 土師器甕の胴部片の出土量が多い。竈内より石や土器が多く出土している。



第297図 392号住居跡実測図



第298図 392号住居跡床下実測図



(竈)

位置 住居東壁面に造られている。住居が小さいためか袖の一部が床面上に位置するが、燃烧部の大部分は壁面を掘り込んで造られている。

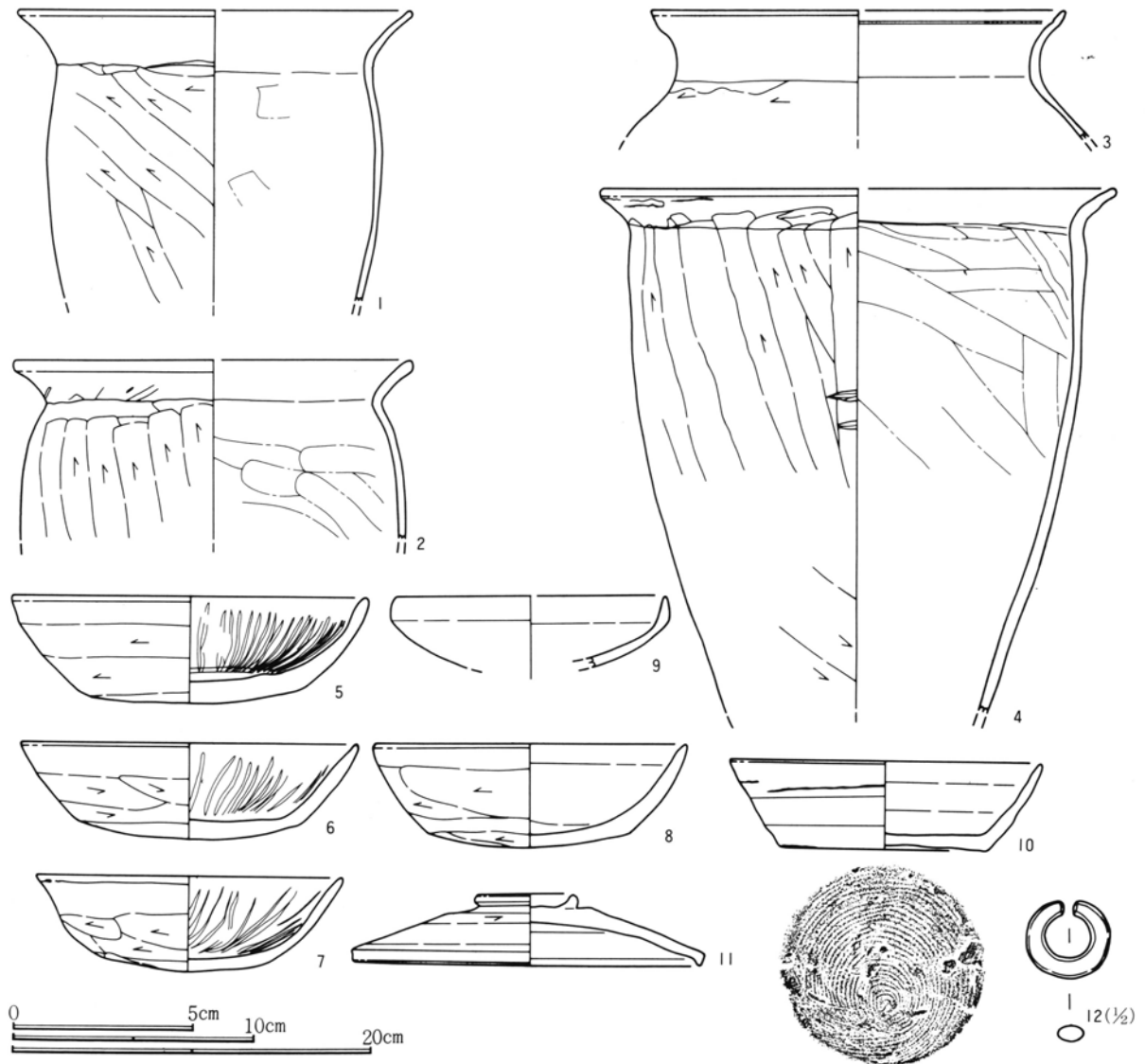
構造 焚口部分に袖石は残っていないが、燃烧部左右の側壁部分にそれぞれ3個の細長い石が立った状態で出土している。さらに竈内に多くの石が捨てられたような状態で出土し、煙道部の傾斜面に甕の大きな破片が置かれたような状態で出土している。

規模 煙道方向106cm、燃烧部幅61cmである。

竈

- ①暗褐色土層 少量のローム粒と白色軽石粒を含む。
- ②暗灰茶褐色土層 多くの焼土粒と少量のローム粒・灰を含む粘土質である。
- ③暗灰茶褐色土層 少量のローム粒と焼土粒を含む粘土質である。
- ④暗褐色土層 少量のローム粒と多くのロームブロックを含む。
- ⑤黄褐色土層 地山のロームを主とする。

第299図 392号住居跡竈実測図



第300図 392号住居跡出土遺物実測図

392号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
300-1	土師器 甕	床面+5 口縁部1/4 胴部1/2	口(22.2) 高— 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部ヘラ削り、削られていない頸部との境にわずかに段を持つ。 内側器表面の多くが剝離して粗れている。
300-2	土師器 甕	床面+10 1/4残存	口(22.4) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部ヘラ削り、砂粒の移動少なく器表面比較的密。 内面ナデにて器表面密。
300-3	土師器 甕	竈内 口縁部1/2	口(23.0) 高— 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部内側上部に1条の浅い沈線。
300-4 99	土師器 甕	床面直上 1/2残存	口(28.6) 高— 底—	①密、2~3mmの赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面強いヘラ削り、削りの単位明瞭。 口縁部に輪積痕が残る。
300-5 99	土師器 坏	床面+20 ほぼ完形	口14.8 高4.5 底—	①密、1~2mmの赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部ヘラ削り。内側底面周辺に浅い1条の沈線あり。 内側器表面の多くに斑点状の剝離あり。 内面全面に多くの暗文。
300-6 99	土師器 坏	覆土 1/4残存	口14.0 高4.0 底—	①密、1~2mmの砂粒と赤色粒を含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部外面ヘラ削り。特に内側の器表面が斑点状に剝離している。多くの暗文が描かれている。 内外面の器表面がやや粗れている。



392号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
300-7 99	土器 器 坏	床面+6 口縁部 $\frac{1}{2}$ 底部完形	口 12.8 高 4.0 底 -	①密、1~2mmの赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部へら削り。内面ナデであるが器表面が粗れている。内面に多くの暗文が描かれている。内側器表面が粗れているため暗文は明瞭でない。
300-8 99	土器 器 坏	床面+6 $\frac{3}{4}$ 残存	口(13.0) 高(4.3) 底 -	①密、3~5mmの赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面~体部へら削り、胎土が粉状で削りの単位不明瞭。内面に暗文は描かれていない。
300-9	土器 器 坏	覆土 破片	口(11.4) 高 - 底 -	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	表面が粗れているためへら削りの単位不明。
300-10 99	須恵器 器 坏	床面+5 ほぼ完形	口 13.0 高 3.5 底 8.5	①密、少量の片岩粒を含む ②還元焰、硬質 ③灰色	底面糸切り後無調整。 やや雑なつくりである。
300-11 99	須恵器 蓋	床面+23 ほぼ完形	口 14.6 高 3.0 底 -	①密、3~5mmの長石粒を少量含む。②還元焰、硬質 ③灰オリーブ色	天井部へら削り。ツマミはリング状で低い。端部は折りで短い。天井部3箇所刃物により表面が削られている。
300-12 114	銅製品 耳環	床面+12	長 2.2 幅 2.4 厚 0.7 重 10.9		表面金メッキ。メッキが多くの部分に残っている。素地は青銅である。

399号住居跡 (第301~304図、図版49・99)

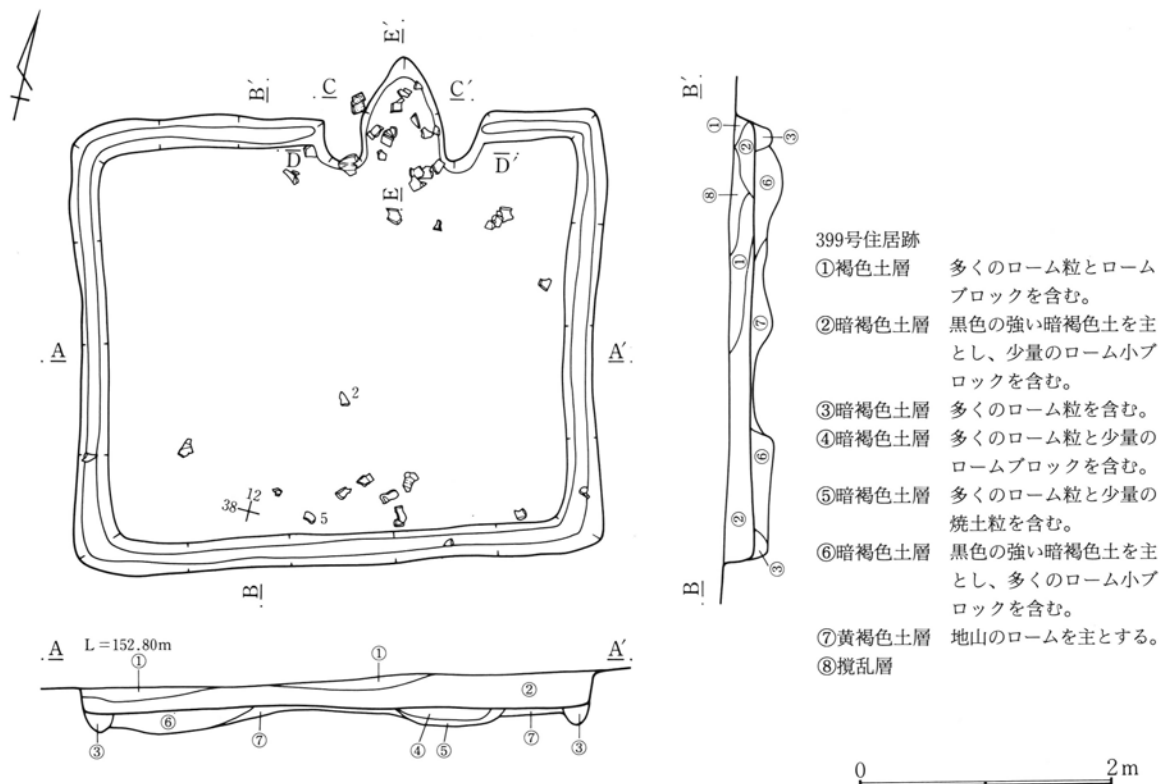
位置 本住居跡は第5次調査区にあり、39-12・13グリッドに位置する。

概要 明瞭な周溝の確認された、比較的残りの良好な住居である。

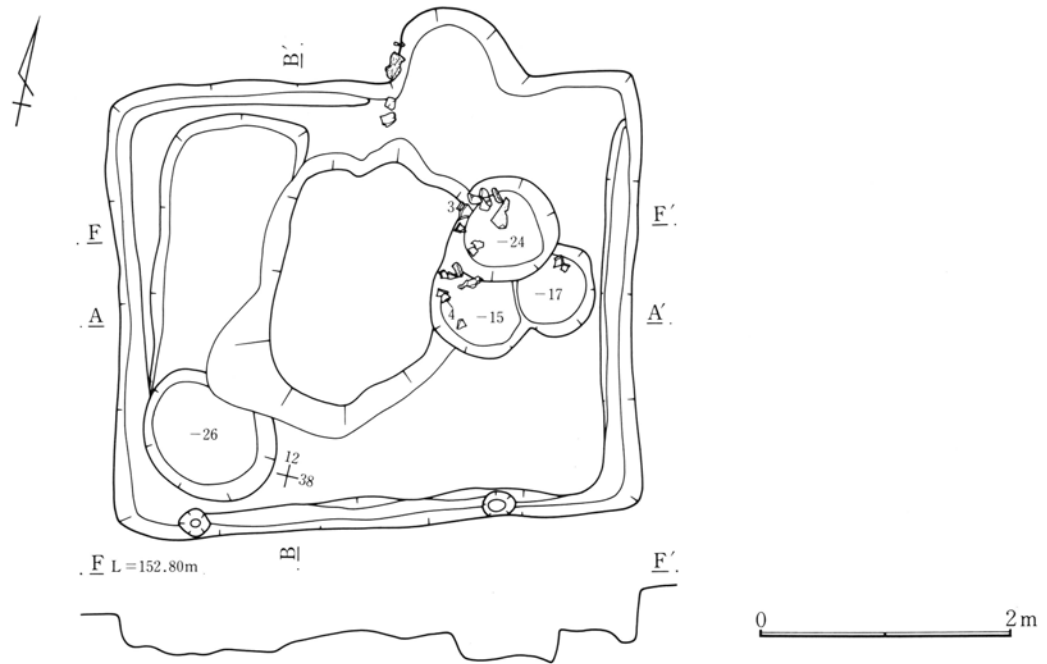
構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。竈部分以外の壁面下に明瞭な周溝が確認された。貯蔵穴と柱穴は掘られていない。

規模 東西4.26m、南北3.50mである。壁高は残りの良い東壁面部分で34cmである。周溝は幅26cm深さ13cmである。

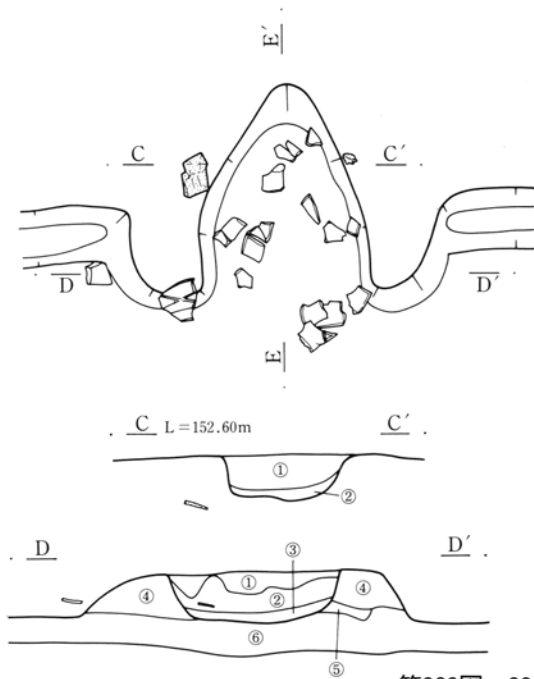
遺物 竈内より土器片が出土している。



第301図 399号住居跡実測図



第302図 399号住居跡床下実測図



第303図 399号住居跡竈実測図

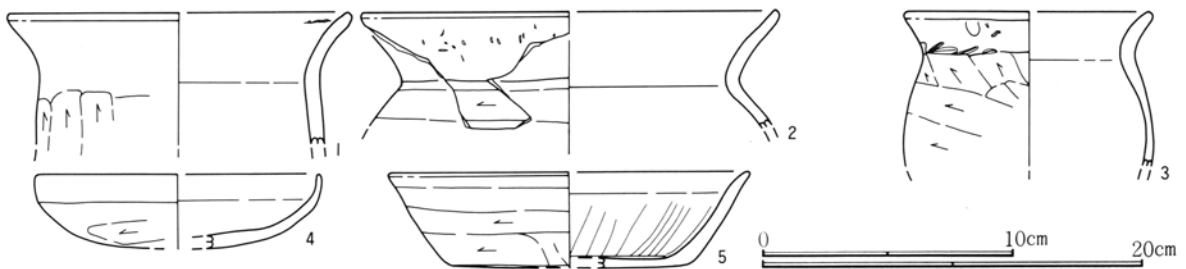
(竈)

位置 住居北壁面に造られている。住居が小さいためか燃烧部の多くは壁面を掘り込んで造られている。

構造 竈内より多くの甕の破片は出土したが、袖石や天井石等は出土していない。燃烧部や煙道部の床面付近から大量の焼土粒が出土している。

規模 煙道方向86cm、燃烧部幅63cmである。

- 竈
- ①暗褐色土層 少量のローム粒と白色軽石粒を含む。
  - ②灰黄褐色粘質土層 ローム粒を主とし、多くの焼土粒を含む。
  - ③暗赤褐色土層 多量のローム粒と少量の灰を含む。
  - ④暗褐色土層 灰黄褐色粘質土を多量に含む。
  - ⑤暗赤褐色土層 多くの焼土粒と少量のローム粒を含む。
  - ⑥暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。



第304図 399号住居跡出土遺物実測図

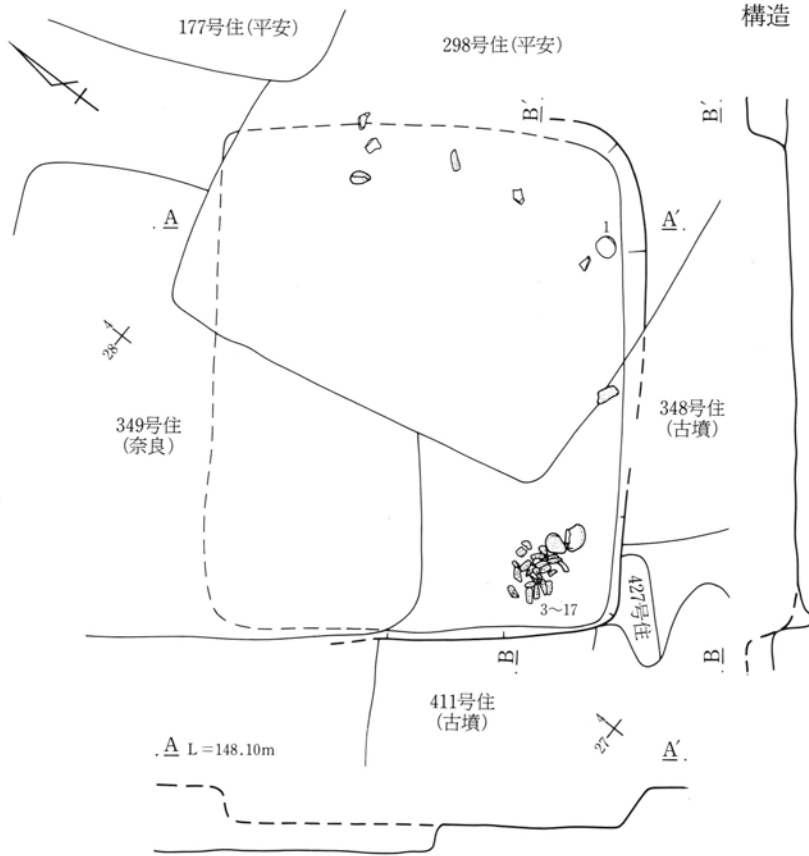
399号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
304-1	土師器 甕	竈掘り方 1/4残存	口(18.3) 高— 底—	①粗、1~3mmの砂粒を多く、片 岩粒を少量含む。②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り。内面ナデ。 内外面とも多くの砂粒が目立つ。 中型の甕と思われる。
304-2	土師器 甕	床面+9 小破片	口(22.0) 高— 底—	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	肩部ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 全体に器肉がやや厚い。
304-3	土師器 甕	床面-9 1/2残存	口(13.0) 高— 底—	①密、1~2mmの赤色粒を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り。 器表面の粗れは少ない。 数多く火に掛けられた痕跡を示す。
304-4	土師器 坏	床面-9 1/2残存	口(11.3) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、削りの単位不明瞭。
304-5 99	土師器 坏	床面+1 1/2残存	口— 高— 底—	①密、1mm以下の赤色粒を多く含 む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 口縁部内側は細い工具による暗文。 内側底面の暗文は不明。

409号住居跡 (第305・306図、図版49・99・409)

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、28-4・5グリッドに位置する。

概要 西に向かって低くなるなだらかな傾斜面で、一部黒色土を掘り込む12軒の竪穴住居が複雑に重複している住居群であり、調査は非常に困難であった。本住居は直接には5軒の重複である。住居の北東部分は奈良時代の349号住居により床下部分まで深く掘り込まれている。竈は削り取られた北壁面か残りの悪い東壁面の可能性があるが、確認できなかった。重複住居の新旧関係は348→411→409→349→298号住居の順である。重複関係については第261図を参照。



構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。貯蔵穴や柱穴は確認できない。おそらく掘られていないものと思われる。

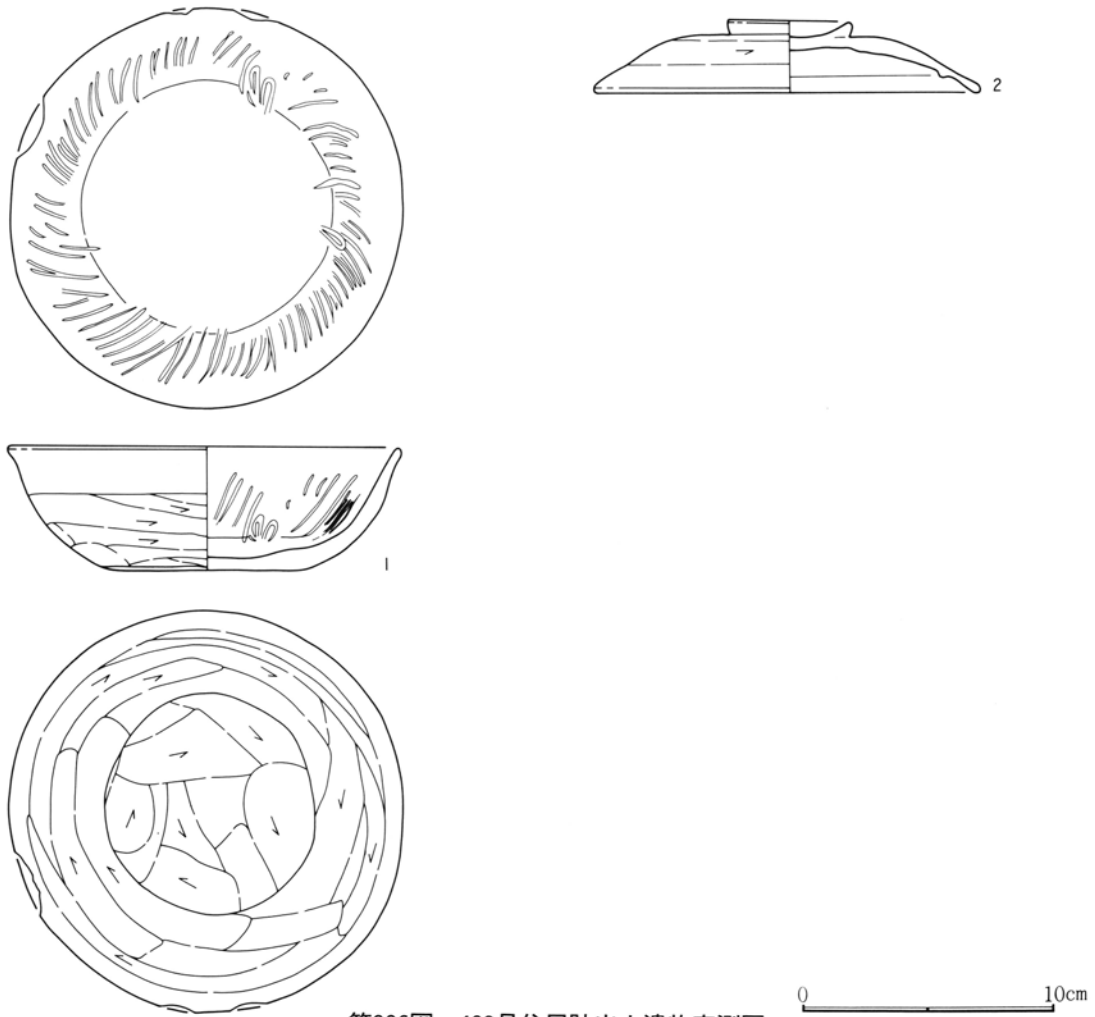
規模 東西南北とも不明である。壁高は残りの良い南東コーナー部分で43cmである。

遺物 破片は多く出土しているが、図示できたのは2点である。北西コーナー部分よりこも編み石が数多く出土している。



第305図 409号住居跡実測図

第4章 奈良時代の遺構と遺物



第306図 409号住居跡出土遺物実測図

409号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm)(g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考		
306-1 99	土師器 坏	床面+5 完形	口 15.4 高 4.9 底 -	①密、1~2mmの砂粒と赤色粒を含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部外面へラ削り。 口縁部に放射状暗文。		
306-2 99	須恵器 蓋	覆土 1/2残存	口 15.0 高 - 底 -	①密、1~2mmの砂粒を少量含む ②還元焰、軟質 ③灰色	天井部へラ削り。摘みはリング状。 カエリは低い。 口縁部外面に黒漆状の物が付着。		
遺物番号	図版番号	器種	法量(cm)(g)				石材・備考
3	127	こも編み石	長 11.1	幅 5.8	厚 1.5	重 145	絹雲母石墨片岩
4	127	こも編み石	長 9.5	幅 4.2	厚 1.6	重 100	絹雲母石墨片岩
5	127	こも編み石	長 12.3	幅 4.8	厚 2.6	重 215	点紋絹雲母石墨片岩
6	127	こも編み石	長 11.1	幅 4.2	厚 2.9	重 200	緑簾緑泥片岩
7	127	こも編み石	長 10.7	幅 4.3	厚 2.7	重 210	緑簾緑泥片岩
8	127	こも編み石	長 11.2	幅 3.8	厚 2.9	重 150	点紋緑泥片岩
9	127	こも編み石	長 12.5	幅 4.7	厚 2.4	重 230	石墨緑泥片岩
10	127	こも編み石	長 10.1	幅 4.1	厚 2.6	重 170	絹雲母石墨片岩
11	127	こも編み石	長 10.1	幅 4.5	厚 3.1	重 165	緑簾緑泥片岩
12	127	こも編み石	長 13.3	幅 4.1	厚 2.4	重 190	絹雲母石墨片岩
13	127	こも編み石	長 9.4	幅 4.4	厚 1.9	重 110	絹雲母石墨片岩
14	127	こも編み石	長 12.4	幅 4.5	厚 2.3	重 210	絹雲母石墨片岩
15	127	こも編み石	長 14.0	幅 4.5	厚 2.2	重 180	絹雲母石墨片岩
16	127	こも編み石	長 9.2	幅 3.3	厚 1.6	重 75	絹雲母石墨片岩
17	127	こも編み石	長 10.0	幅 4.1	厚 1.5	重 80	絹雲母石墨片岩

413住居跡 (第307~309図、図版49・99)

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、35-6・7グリッドに位置する。

概要 本住居を含めて3軒の住居が重複しており、その3軒を縦断するように2本の耕作溝により床下部分まで掘られている。本住居は414号住居の北東部分を床下まで掘り込み、412号住居により南壁面部分の覆土を掘り込まれている。新旧関係は414→413→412号住居である。

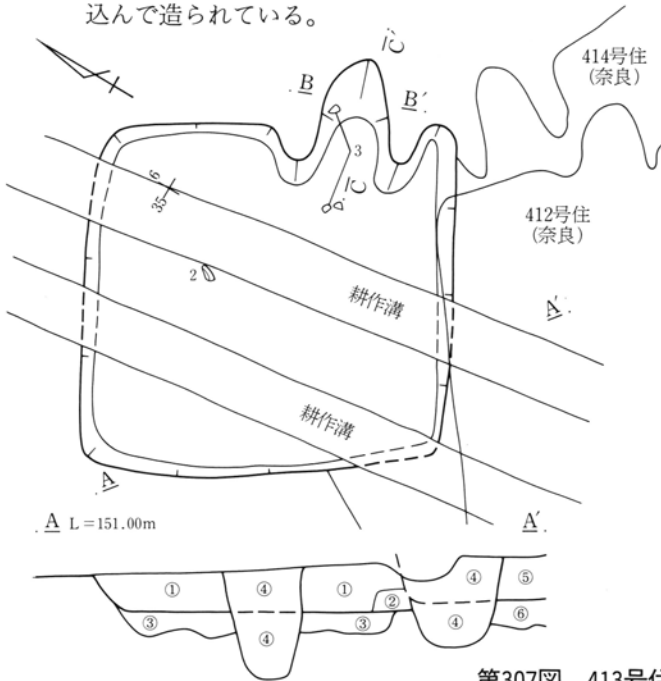
構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。住居規模が小さいためか貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模 東西2.80m、南北2.94mである。壁高は残りの良い竈左袖付近で45cmである。

遺物 出土量は全体に少なく、破片を含めた総数で50片である。

(竈)

位置 住居東壁面に造られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置し、燃焼部の一部が壁面を掘り込んで造られている。



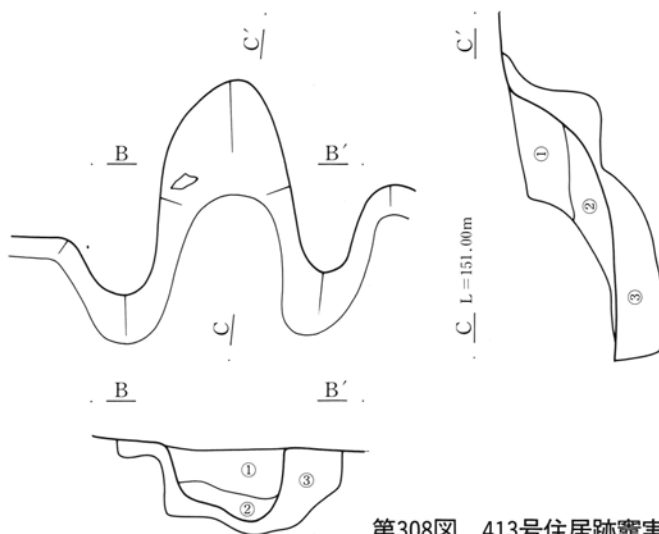
構造 袖は暗褐色土を用いて造られており、袖石等の出土はない。燃焼部床面付近から多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向102cm、燃焼部幅46cmである。

413号住居跡

- ①暗灰褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
- ②暗黄褐色土層 多くのローム粒を含む。
- ③暗黄褐色土層 多くのロームブロックを含む。
- ④耕作溝覆土
- ⑤412号住居跡覆土
- ⑥412号住居跡床下覆土

第307図 413号住居跡実測図



竈

- ①暗褐色土層 少量のローム粒とロームブロックを含む。
- ②暗赤褐色土層 多くの焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

第308図 413号住居跡竈実測図



第309図 413号住居跡出土遺物実測図

413号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
309-1	土 師 器 甕	竈内 口縁 $\frac{1}{4}$	口(21.0) 高・底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へラ削り。口縁部横ナデ。胴部内面にへらの圧痕あり。
309-2	土 師 器 甕	床面+20 口縁 $\frac{1}{2}$	口(20.0) 高— 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を含む。②酸化焰、硬質 ③内面にふい赤褐色、外面赤褐色	胴部外面横方向へラ削り。器肉を薄く仕上げている。口縁部中段に輪積痕あり。
309-3 99	土 師 器 坏	竈内 口縁~底部 $\frac{3}{4}$ 残存	口 12.7 高 3.4 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り、砂粒の移動は少ない。
309-4	須 恵 器 坏	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口・高一 底 (7.3)	①やや粗、2~3mmの片岩粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰色	底面右回転へラ削り。

429号住居跡 (第310図、図版49・99)

位置 本住居跡は第9次調査区にあり、42-11グリッドに位置する。

概要 北側の浅い低地に向かうなだらかな傾斜面に位置し、低地までの間には他の住居は造られていない。

残りが悪く掘り込みの浅い住居であり、北側部分の壁面は残っていない。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。住居規模が特に小さいためか柱穴や貯蔵穴は掘られていない。

規模 東西2.48m、南北2.18mである。壁高は残りの良い南西コーナー部分で11cmである。

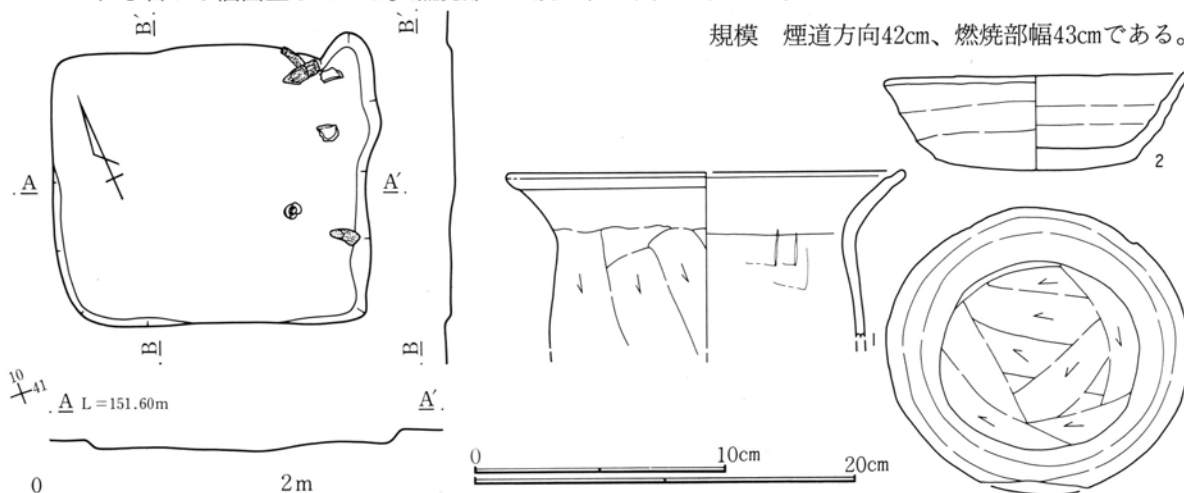
遺物 出土量は全体に少なく、破片を含めた総数で31片である。

(竈)

位置 北東コーナー部分の壁面を掘り込んで造られている。

構造 住居規模同様に非常に小さな竈であり残りも悪い。左袖付近と東壁面に接して、竈に使われたと思われる石が3個出土している。燃烧部から焼土粒の出土は少ない。

規模 煙道方向42cm、燃烧部幅43cmである。



第310図 429号住居跡・出土遺物実測図

429号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
310-1	土師器 甕	床面直上 口縁1/4	口(20.8) 高・底—	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部幅の広いヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。内面にヘラの圧痕あり。
310-2 99	須恵器 坏	床面+3 ほぼ完形	口 12.0 高 3.7 底 8.0	①密 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面手持ヘラ削り。 口縁部にロクロ痕少ない。 全体に少しゆがんでいる。

431号住居跡 (第311~313図、図版50・100・121)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、59・60-11グリッドに位置する。

概要 本住居を含め3軒の住居が重複している。本住居は古墳時代の432号住居の北西部分を床下部分まで深く掘り込み、平安時代の430号住居により南西部分を掘り込まれている。新旧関係は432→431→430号住居である。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。貯蔵穴は竈右側に掘られているが、柱穴は掘られていない。

規模 東西3.9m、南北4.80mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で41cmである。貯蔵穴は径48cm深さ32cmである。

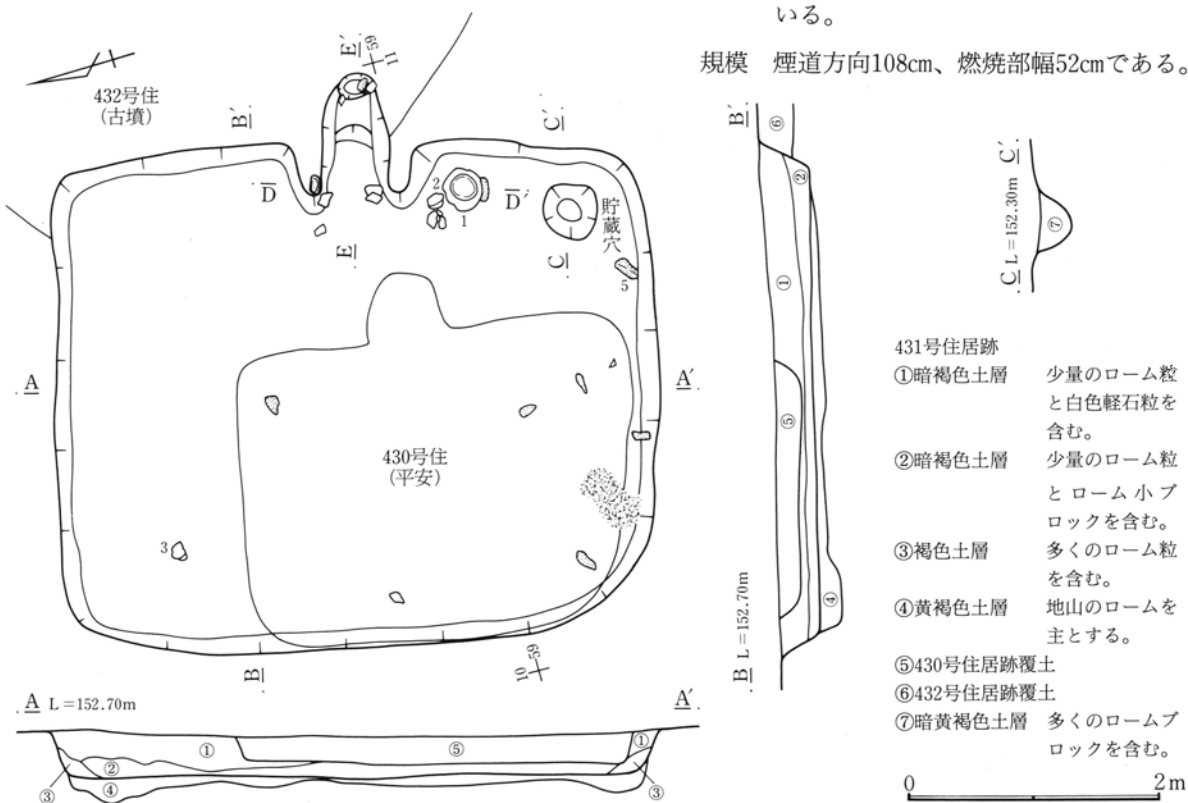
遺物 竈右袖付近より甕と坏が出土している。砥石が目目される。

(竈)

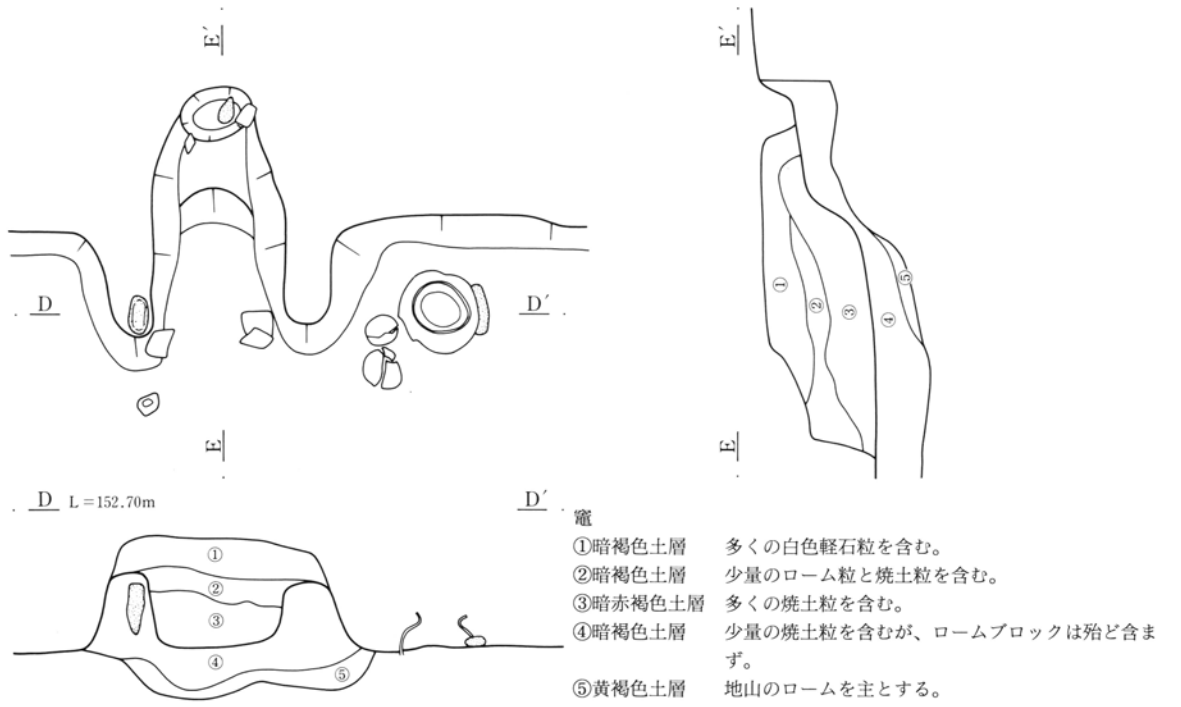
位置 東壁面ほぼ中央部を掘り込んで造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置し、燃烧部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

構造 左袖部分に細長い袖石が1個、ほぼ直立した状態で使われている。他に石は出土していない。ロームの少ない暗褐色土を多く用いて袖部分は造られていた。燃烧部覆土を中心に多くの焼土粒が出土している。

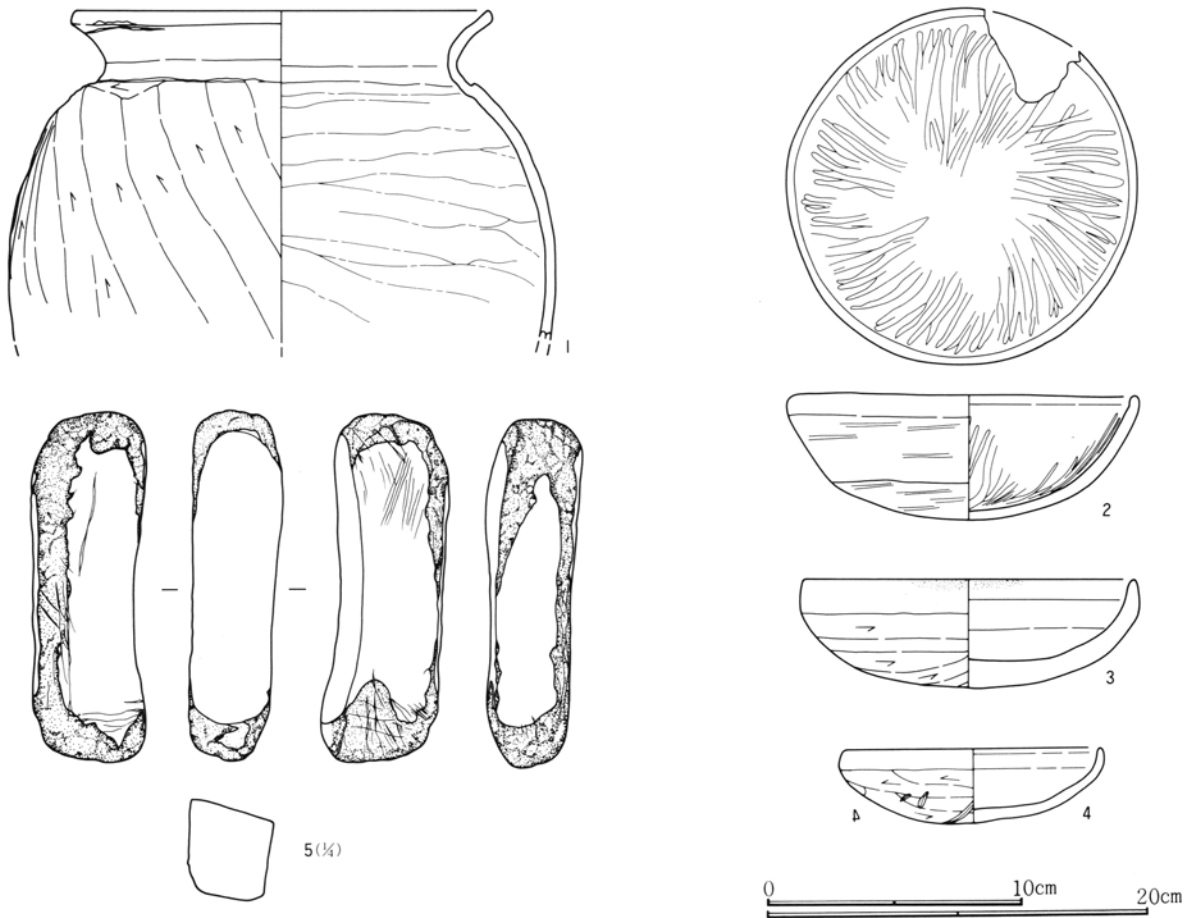
規模 煙道方向108cm、燃烧部幅52cmである。



第311図 431号住居跡実測図



第312図 431号住居跡竈実測図



第313図 431号住居跡出土遺物実測図



431号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
313-1 100	土師器 甕	床面直上 胴~口縁部 1/2残存	口 22.3 高 — 底 —	①粗、5~8mmの大きな砂粒や片 岩粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部ヘラナデ、砂粒の移動はほとんどなく器表面の粗 れは少ない。 胴部と頸部との境に沈線を持つ。
313-2 100	土師器 坏	床面直上 口縁一部欠 他完形	口 13.8 高 4.9 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を含 む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面~体部外面の器表面密で磨かれている。 内面に多くの暗文。
313-3	土師器 坏	床面+20 口縁小破片 底部1/2	口(13.6) 高 4.3 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③浅黄橙色	底面ヘラ削りと思われるが、胎土が密で削りの単位不 明。内側底面の器表面が粗れている。 口縁部内外面に吸炭による黒斑あり。
313-4 100	土師器 坏	覆土 完形	口 10.3 高 3.0 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。削りの単位は比較的明瞭である。 内面ナデにて器表面密。 黒斑全く認められず。
313-5 121	石製品 砥石	床面直上	長 18.4 厚 4.4 幅 5.4 重 760		流紋岩。4側面を砥石として使用している。 自然面に細く鋭利な刃物で付けられた傷が多く残る。

436号住居跡 (第314図、図版50)

位置 本住居跡は第9次調査区にあり、40・41-10グリッドに位置する。

概要 北側の浅い低地に向かうなだらかな傾斜面に位置し、低地までの間には429号住居が1軒あるだけである。429号住居同様に残りが悪く掘り込みの浅い住居であり、竈の造られている南東部分以外は床面や壁面は残っていない。竈手前の床面付近に多くの焼土粒が出土している。図示できる遺物はなかったが、破片より8世紀前期と判断した。

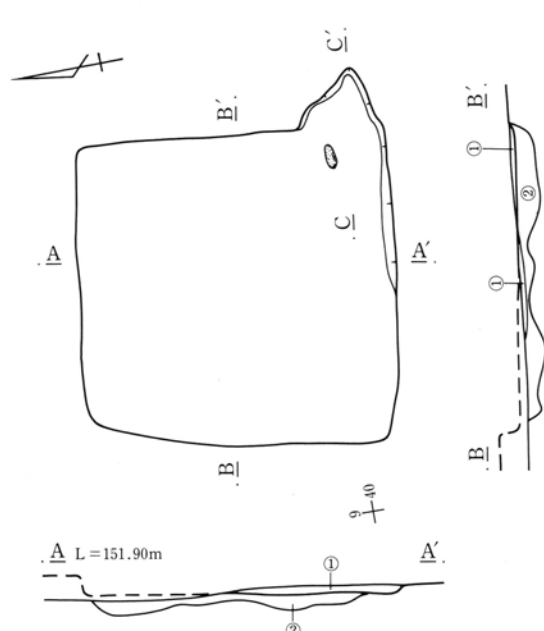
構造 僅かに残った床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。柱穴や貯蔵穴は掘られていない。

規模 東西南北とも明確でないが、床下調査により規模は確認できた。東西2.48m、南北2.54mである。壁高は残りの良い竈付近で10cmである。

遺物 土師器の坏と甕の破片が2片出土しているだけである。

(竈)

位置 南東コーナー部分の壁面を掘り込んで造られている。



構造 住居規模同様に非常に小さな竈であり残りも悪い。燃烧部から焼土粒の出土も少ない。

規模 煙道方向48cm、燃烧部幅は不明である。

436号住居跡

- ①黒褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ②暗黄褐色土層 地山のロームを主とする。

竈

- ①黒褐色土層 ローム粒を少量含む。
- ②暗褐色土層 ローム粒・焼土粒・炭化物を含む。
- ③黄褐色土層 地山のロームを主とする。

第314図 436号住居跡実測図

0 2m

438号住居跡 (第315~317図、図版50・100)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、57・58-17グリッドに位置する。

概要 西側で古墳時代の445号住居と重複しており、本住居が445号住居の南東部分を床下部分まで深く掘り込んでいます。

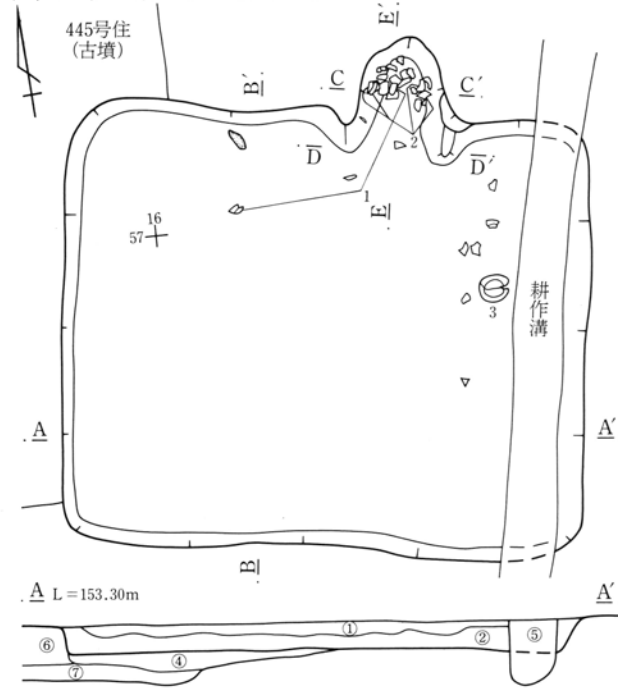
構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした固い土で造られている。柱穴や貯蔵穴は掘られていない。

規模 東西4.20m、南北3.50mである。壁高は残りの良い南壁面部分で27cmである。

遺物 竈内より土器の破片が出土している。

(竈)

位置 北壁東寄りの壁面を掘り込んで造られている。



構造 残りが悪く両袖の大部分と、燃烧部の覆土上部は削られて、住居の覆土に近い土が堆積している。袖石等は出土していない。燃烧部奥壁付近から多くの烧土粒が出土している。

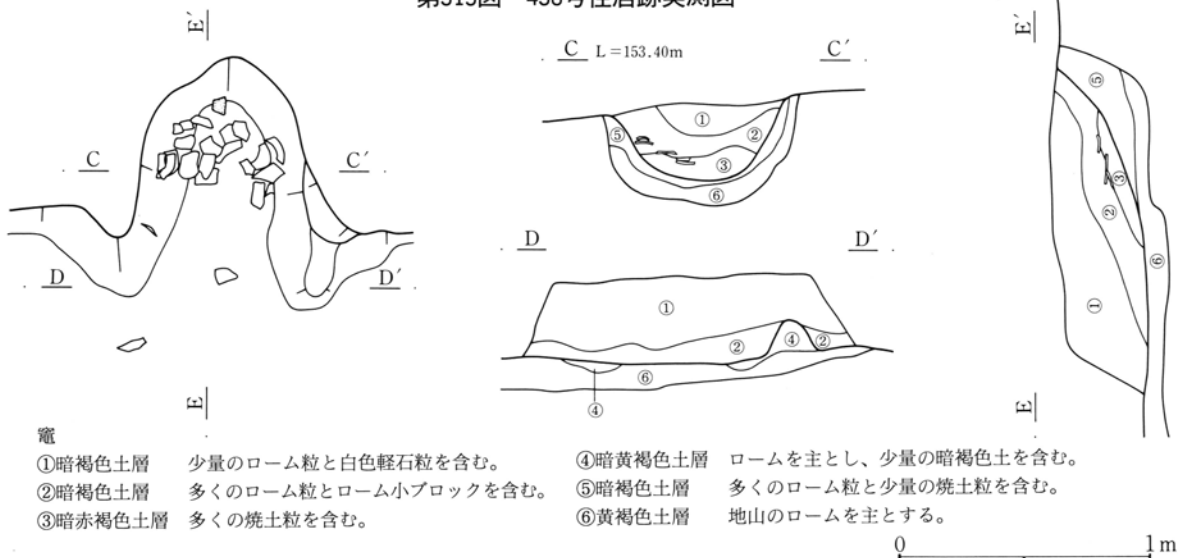
規模 煙道方向95cm、燃烧部幅57cmである。

438号住居跡

- ①暗褐色土層 少量のローム粒と白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量のローム粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
- ④暗黄褐色土層 ローム粒とロームブロックを主とし固い。
- ⑤耕作溝覆土
- ⑥445号住居跡覆土
- ⑦445号住居跡床下覆土

0 2m

第315図 438号住居跡実測図

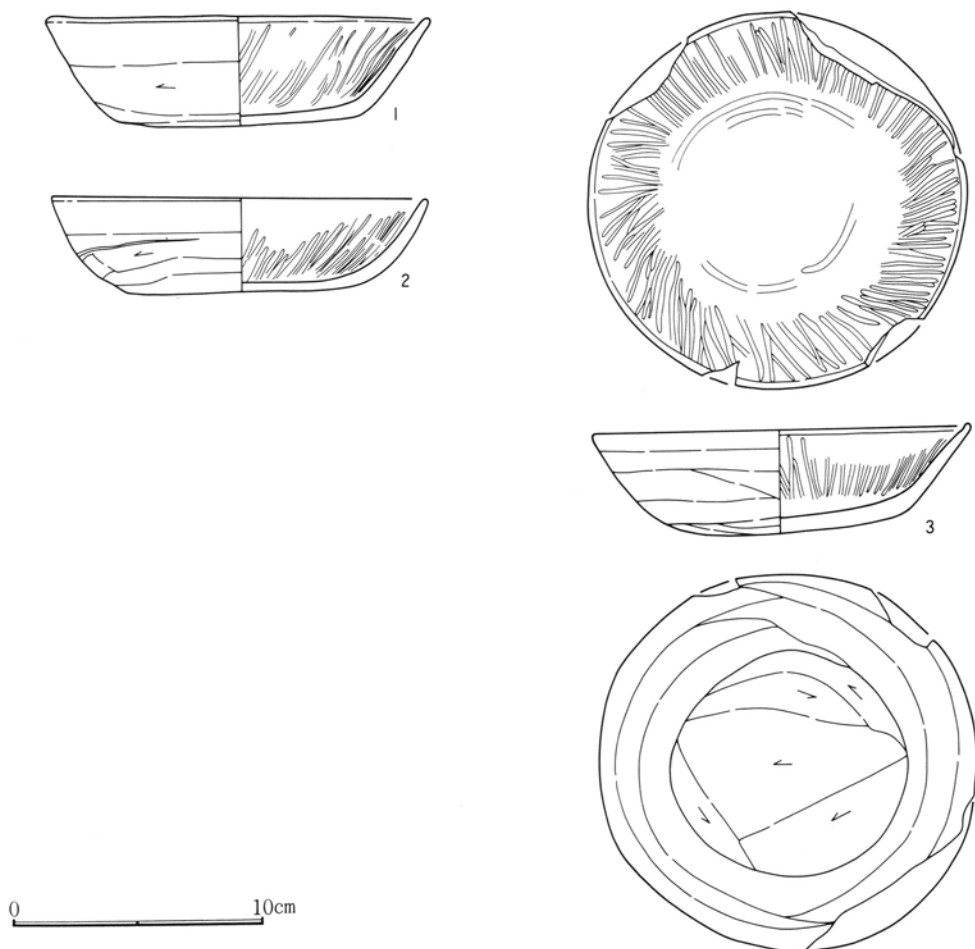


竈

- ①暗褐色土層 少量のローム粒と白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ③暗赤褐色土層 多くの烧土粒を含む。
- ④暗黄褐色土層 ロームを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ⑤暗褐色土層 多くのローム粒と少量の烧土粒を含む。
- ⑥黄褐色土層 地山のロームを主とする。

0 1m

第316図 438号住居跡竈実測図



第317図 438号住居跡出土遺物実測図

438号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
317-1 100	土師器 坏	床面直上 1/2残存	口 15.2 高 4.3 底 9.5	①密、1~2mmの赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へら削り。内面ナデにて器表面密であるが、部分的に剝離している。 内面に多くの暗文が描かれている。
317-2 100	土師器 坏	床面直上 1/2残存	口 14.7 高 3.8 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③赤褐色	底面と体部外面へら削り。内側口縁部と体部に密な暗文が描かれている。内側底面に暗文なし。 全体がわずかに吸炭により黒色気味である。
317-3 100	土師器 坏	床面直上 口縁部1/2 他完形	口 15.0 高 4.0 底 —	①密、1~2mmの赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部外面へら削り。体部と口縁部外側は磨かれてわずかに光沢を持つ。内面に放射状暗文。 内側底面周辺に円状の暗文あり。

439号住居跡 (第318~320図、図版50・51・100・121)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、57-19・20グリッドに位置する。

概要 南側で同じ奈良時代の440号住居と重複しており、本住居が440号住居の北側部分と新北竈を掘り込んでいる。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。竈の右側に貯蔵穴が掘られているが、柱穴は掘られていない。竈手前部分に床下土坑が掘られている。

規模 東西3.84m、南北3.58mである。壁高は残りの良い東壁面部分で35cmである。貯蔵穴は径72cm深さ24cm、床下土坑は径74cm深さ27cmである。

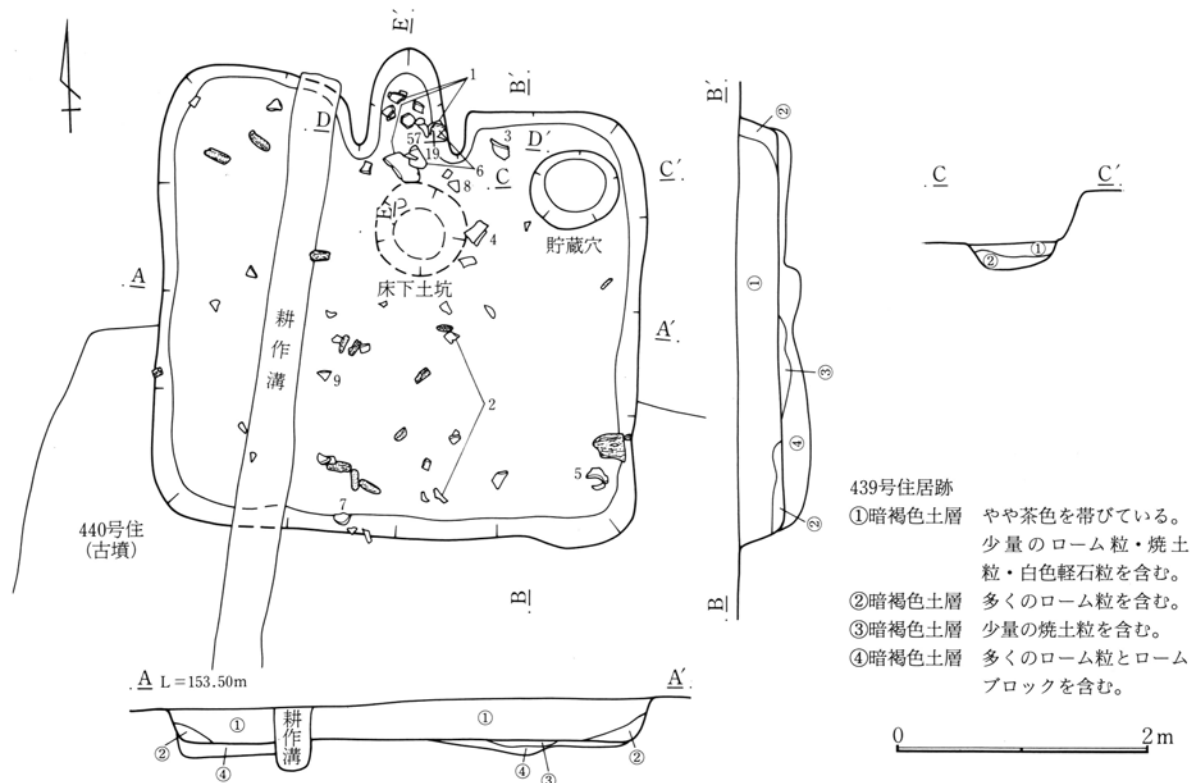
遺物 破片の出土量が多い。竈内より甕や坏が出土している。

(竈)

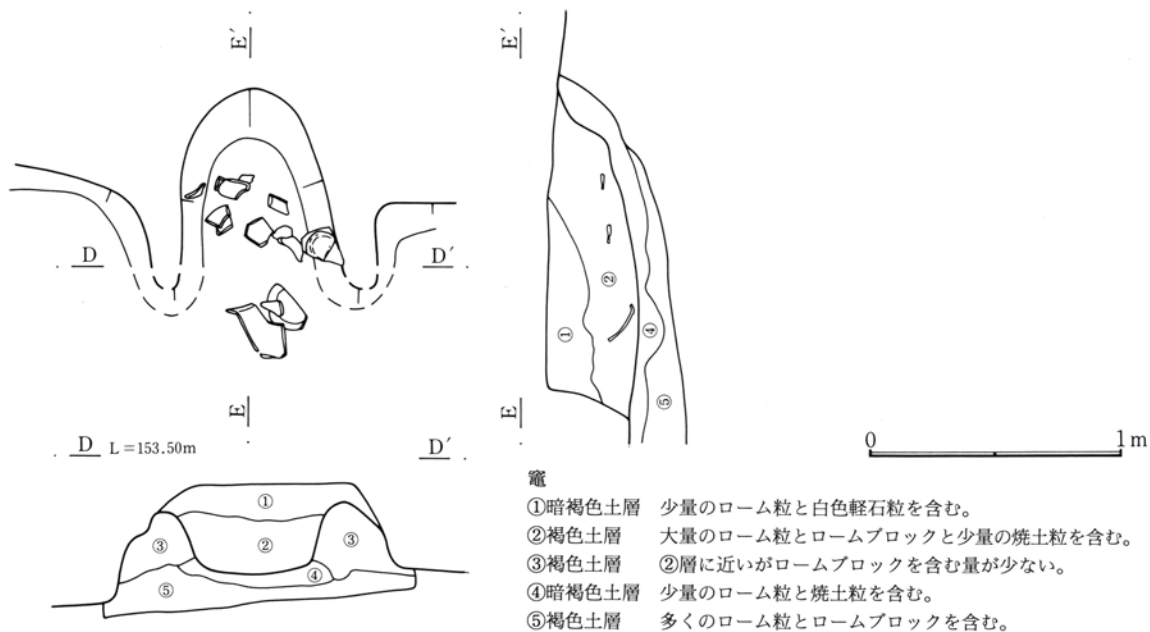
位置 北壁面を掘り込んで造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置し、燃烧部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

構造 少量のローム粒を含む土で袖部分は造られている。竈内より多くの焼土粒が出土している。

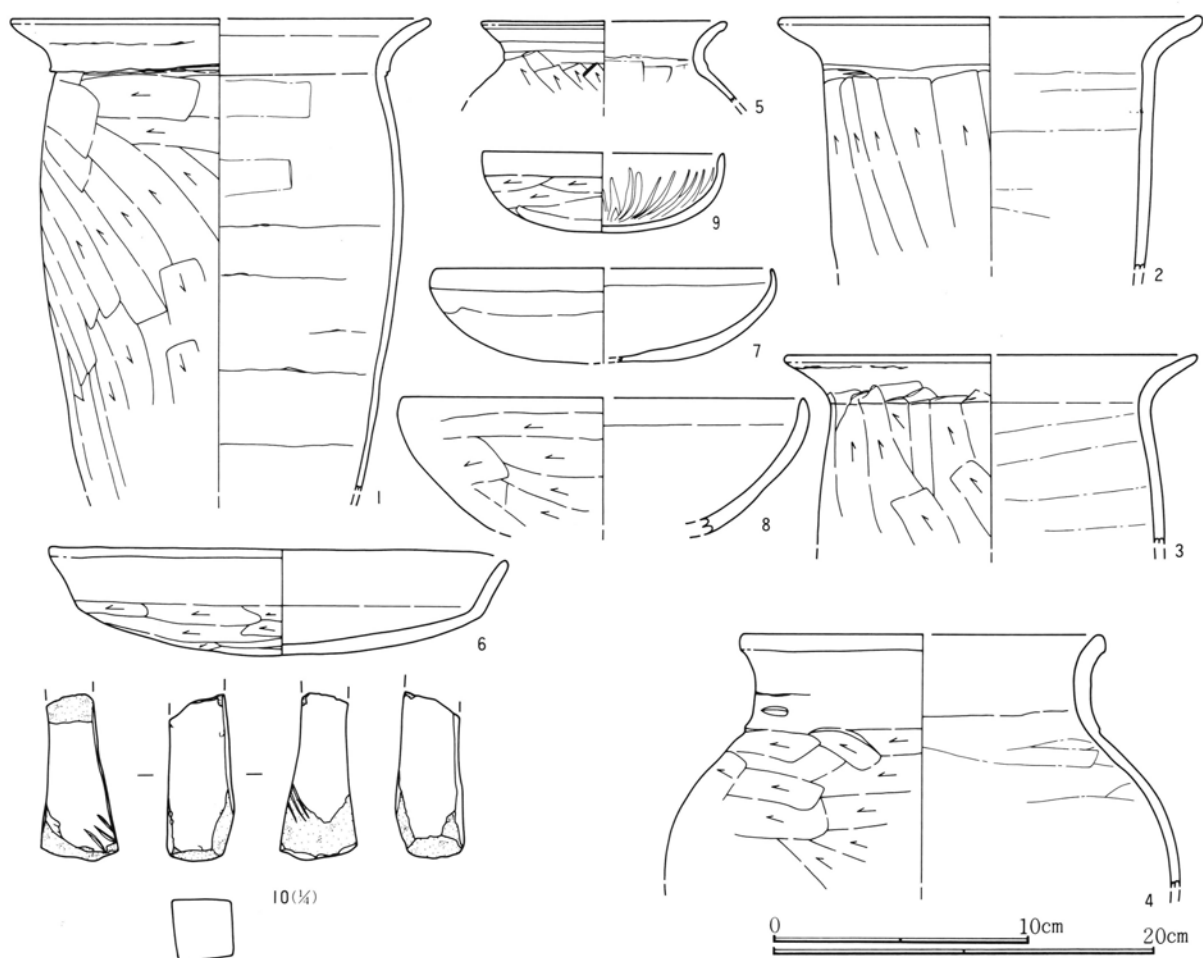
規模 煙道方向推定90cm、燃烧部幅57cmである。



第318図 439号住居跡実測図



第319図 439号住居跡竈実測図



第320図 439号住居跡出土遺物実測図

439号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
320-1	土師器 甕	竈内 口~胴1/2	口(20.8) 高— 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい黄褐色	胴部外面ヘラ削り。削られていない口縁部との境に深い段を持つ。 胴部内側下半に接合による肉厚部分が一周。
320-2	土師器 甕	床面+5 胴上半1/4	口(22.0) 高・底—	①密、2~3mmの片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部ヘラ削り。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
320-3	土師器 甕	床面+15 胴上部1/2	口(22.0) 高・底—	①密、多くの雲母粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
320-4	土師器 甕	床面+5 胴上半1/4	口(19.4) 高— 底—	①やや粗、2~3mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面の粗れが少ない。内面ナデにて器表面密。 口唇部は丸く肉厚に仕上げている。
320-5	土師器 小型甕	床面+8 口縁部1/2	口(12.9) 高・底—	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③赤褐色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。胴部内側の頸部にヘラの圧痕あり。
320-6 100	土師器 坏	竈内 ほぼ完形	口 18.0 高 4.2 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面比較的密。
320-7 100	土師器 坏	床面+22 1/2残存	口(13.5) 高(3.7) 底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りと思われるが器表面が粗れており不明。 底部中央の器肉が極端に薄くなっている。 黒斑全く認められず。
320-8	土師器 坏	床面+25 1/2残存	口(16.0) 高・底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。
320-9	土師器 坏	床面-9 1/2残存	口(9.6) 高 3.1 底—	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内側内面に多くの放射状ヘラ磨き。
320-10 121	石製品 砥石	覆土	長 (8.7) 幅 3.2 厚 4.0 重 162.0		流紋岩。4側面を砥石として使用している。

447号住居跡 (第321～323図、図版51・100)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、58-18・19グリッドに位置する。

概要 南側で平安時代の457号住居と重複しており、本住居は457号住居により覆土を床面近くまで掘り込まれている。しかし新旧関係を間違えて掘り進め、土層断面での切り合い関係の確認はできなかった。床面中央部付近から多くの炭が出土している。他の部分からの出土はないため、消失家屋ではないと思われる。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。竈の左側に貯蔵穴が掘られているが、柱穴は掘られていない。

規模 東西3.71m、南北3.13mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で35cmである。貯蔵穴は径72cm深さ24cmである。

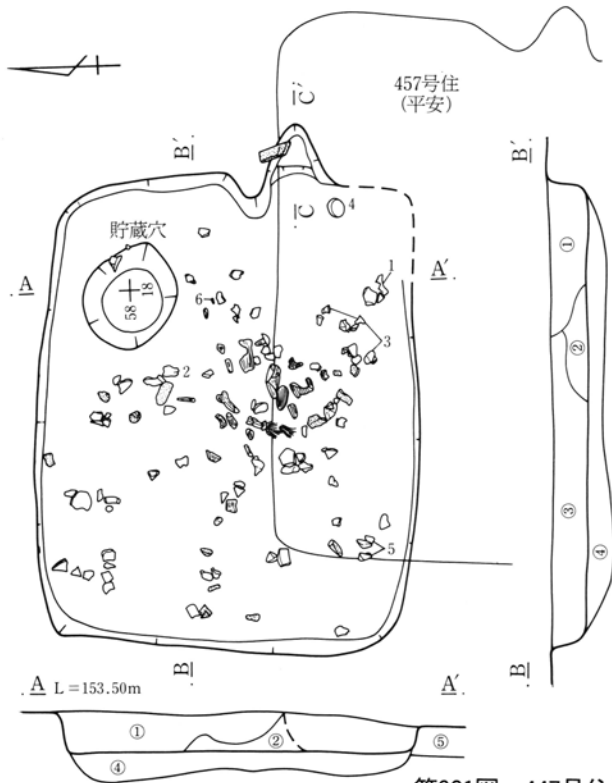
遺物 破片が多く出土している。

(竈)

位置 東壁面を掘り込んで造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置し、燃烧部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

構造 残りの悪い竈である。袖部分は少量のローム粒を含む土で造られている。竈内より少量の焼土粒が出土している。

規模 煙道方向75cm、燃烧部幅は不明である。

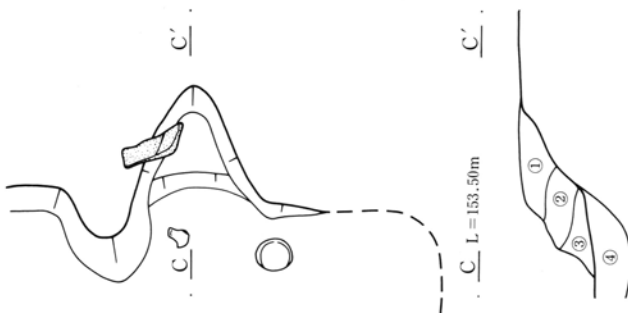


第321図 447号住居跡実測図

447号住居跡

- ①暗褐色土層 少量のローム粒と白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量のローム粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
- ④褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ⑤457号住居跡覆土

0 2m

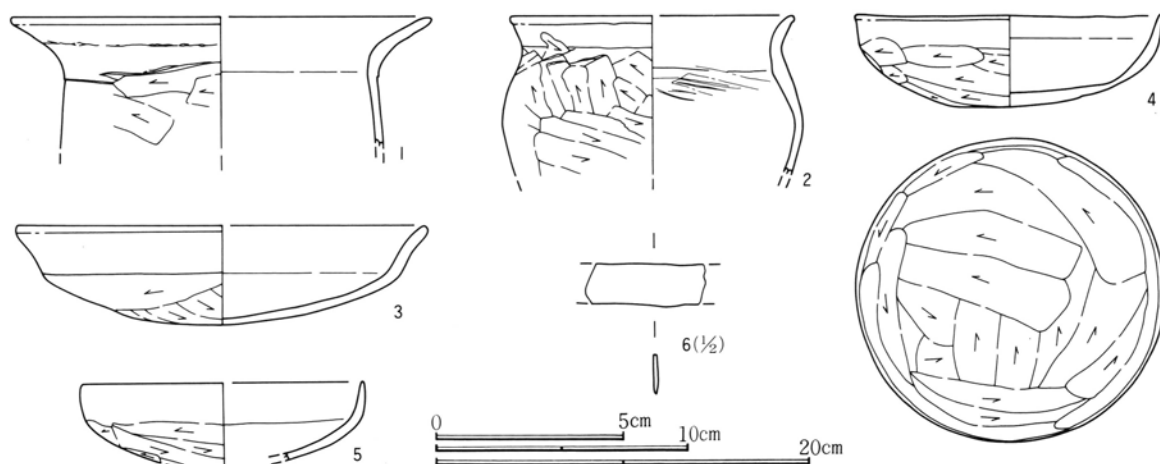


第322図 447号住居跡竈実測図

竈

- ①暗褐色土層 少量のローム粒・焼土粒・白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 やや多くの焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くのロームブロックと少量の焼土粒を含む。
- ④褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

0 1m



第323図 447号住居跡出土遺物実測図

447号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
322-1	土師器 甕	床面-6 口縁部 $\frac{1}{4}$	口(22.0) 高— 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質③にぶい赤褐色	胴部横方向ヘラ削り。削られていない頸部との境に段を持つ。口縁部中段に輪積痕あり。
322-2	土師器 甕	床面-9 口縁~胴部	口(14.8) 高— 底—	①密②酸化焰、硬質③表面と断面にぶい赤褐色	胴部外面ヘラナデ。砂粒の移動少なく器表面密。内面ナデにて器表面密。内側内面吸炭による黒色。
322-3	土師器 坏	床面+12 口縁部 $\frac{1}{5}$ 底部 $\frac{2}{3}$	口(16.0) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む②酸化焰、硬質③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。内外面に少し吸炭あり。
322-4 100	土師器 坏	床面+9 完形	口11.8 高3.5 底—	①密、多くの雲母粒を含む②酸化焰、硬質③橙色	底面ヘラ削り。小さな砂粒が移動し器表面やや粗い。
322-5	土師器 坏	床面+5 $\frac{1}{4}$ 残存	口(11.0) 高・底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む②酸化焰、硬質③橙色	底面ヘラ削り。ヘラの単位明瞭。内面ナデにて器表面密。
322-6	鉄製品 鉄片	床面+30	長(3.1) 幅1.1 厚0.1 重2.3		名称及び用途不明。錆化がいちじるしい。

455号住居跡 (第324~326図、図版51・100)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、59・60-20グリッドに位置する。

概要 北側2/3の範囲を平安時代の454号住居と重複しており、本住居は454号住居により床面に近い覆土部分を深く掘り込まれている。ほぼ中央部分の直径約50cm幅の範囲の床面が焼土化していた。西の壁面部分を土坑により床下部分まで深く掘り込まれている。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模 東西3.56m、南北3.53mである。壁高は残りの良い東壁面部分で42cmである。

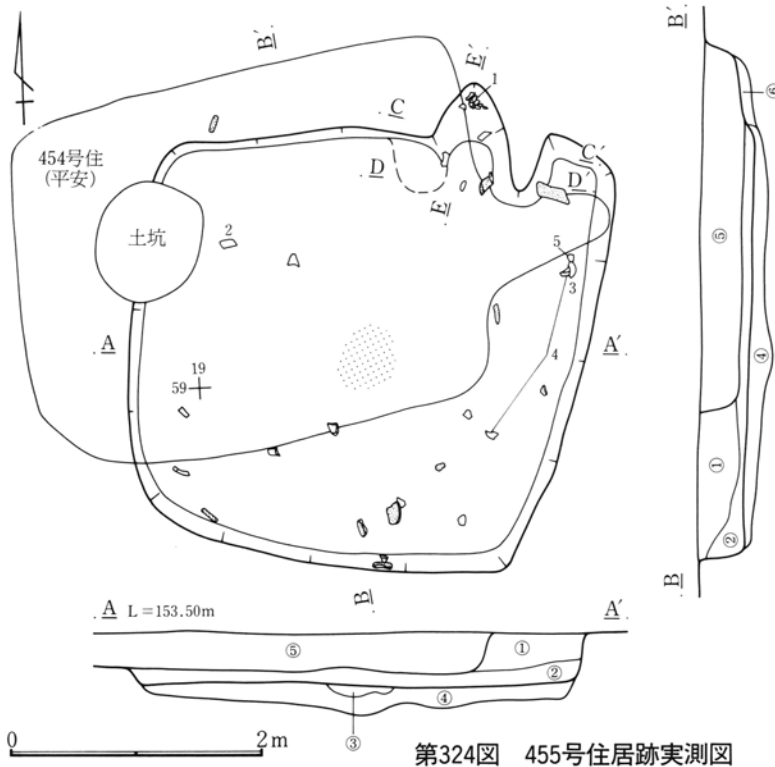
遺物 甕・甑・坏が出土している。

(竈)

位置 北壁面を掘り込んで造られている。袖と焼成部の多くは床面上に位置し、焼成部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。平安時代の454号住居により左袖と焼成部の左側の上半部分を削られており残りは悪い。

構造 右袖石がほぼ据えられた状態で残っているが、左袖部分は削られて残っていない。右袖の外側に細長い石が出土している。焼成部覆土中より多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向90cm、焼成部幅は不明である。



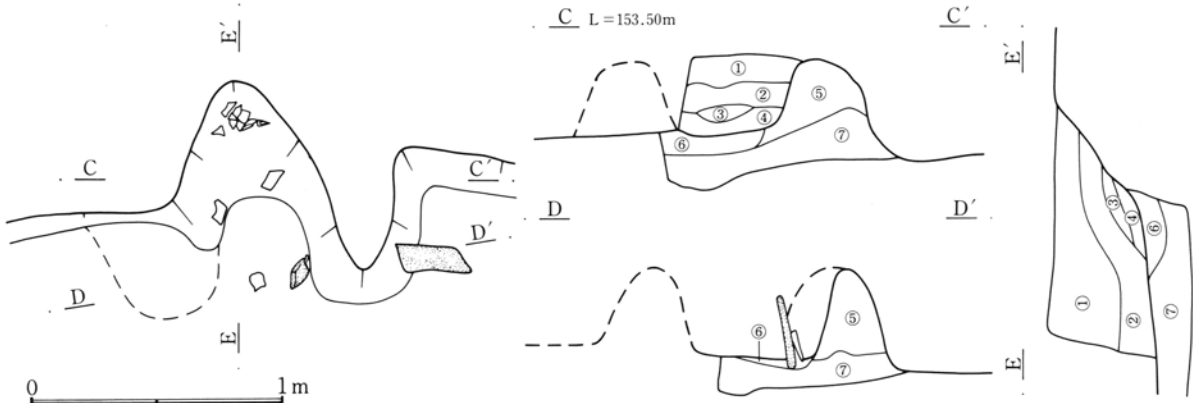
第324図 455号住居跡実測図

455号住居跡

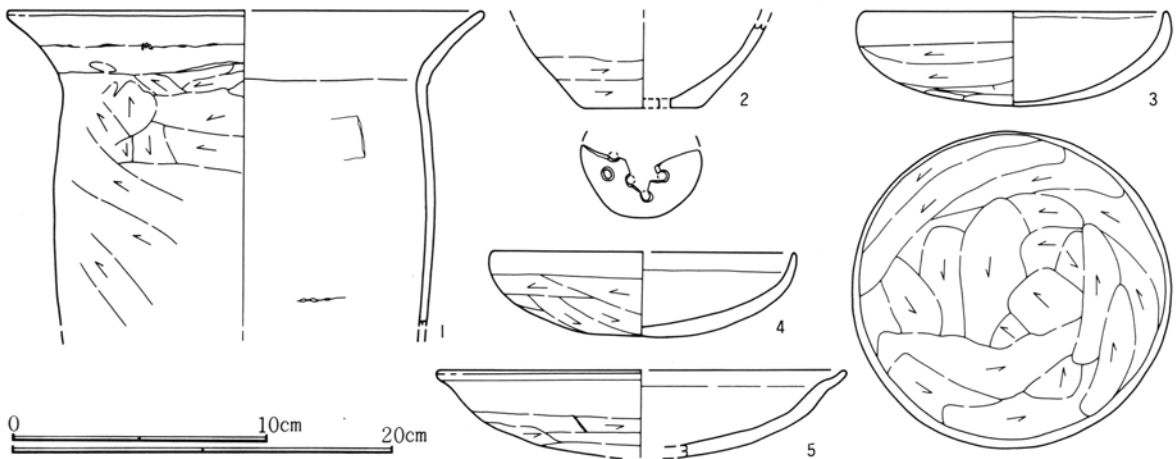
- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒とローム粒を含む。
- ②暗褐色土層 ①層に比較してローム粒の含有量少なく黒色が強い。
- ③赤色土層 焼土粒を主体とし、少量の炭化物を含む。
- ④褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ⑤454号住居跡覆土
- ⑥454号住居跡床下覆土

竈

- ①暗褐色土層 少量の白色軽石粒・ローム粒・焼土粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量のローム粒と焼土粒を含む。
- ③赤褐色土層 多くの焼土粒を含む。
- ④褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ⑤暗褐色土層 少量の白色軽石粒とローム粒を含む。
- ⑥暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
- ⑦褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。



第325図 455号住居跡竈実測図



第326図 455号住居跡出土遺物実測図



455号住居跡出土遺物観察表

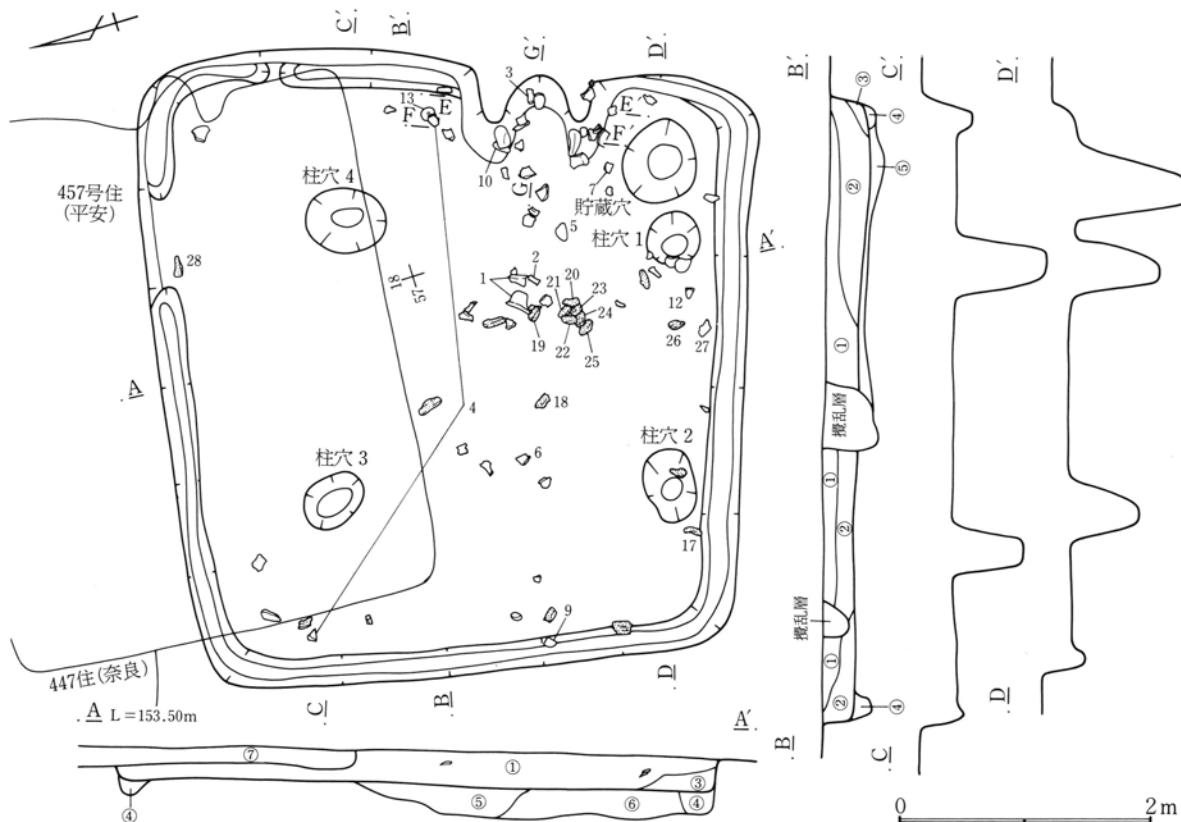
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
326-1	土師器 甕	床面+35 口縁部1/4 胴上部1/2	口(24.4) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部ヘラ削り。口縁部横ナデ。削られていない口縁部との境に段を持つ。全体に少し歪んでいる。
326-2	土師器 甕	床面-5 胴下半1/2 底部1/2	口— 高— 底(6.2)	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底部に小穴を多く持つ甕である。内外の器表面は密に仕上げている。
326-3 100	土師器 坏	床面-5 完形	口12.0 高3.7 底—	①密、粉状を呈する ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、削りの単位は明瞭である。口縁部～内面の器表面密。吸炭は全く認められない。
326-4	土師器 坏	床面-5 1/2残存	口(11.9) 高3.3 底—	①密、2～3mmの赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。器表面やや粗い。内面ナデにて器表面密。赤色粒や2～3mmの白色粒が目立つ。
326-5	土師器 坏	床面+4 1/2残存	口(15.9) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動はほとんどなし。内面ナデにて器表面密。

458号住居跡 (第327～330図、図版51・52・100・115・118・121・127)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、57・58-18・19グリッドに位置する。

概要 北側で平安時代の457号住居と重複しており、本住居は457号住居により覆土を床面近くまで掘り込まれている。周溝が竈付近以外の壁面の下に掘られている。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。竈の右側に貯蔵穴が、また床面に柱穴が4本掘られている。



458号住居跡

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と少量の白色軽石粒を含む。
- ②黒褐色土層 少量のローム粒を含み、粘性が強い。
- ③黒褐色土層 多くのローム粒を含む。
- ④暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
- ⑤暗褐色土層 多くのローム粒と少量のローム小ブロックを含む。
- ⑥暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ⑦457号住居跡覆土

第327図 458号住居跡実測図

第4章 奈良時代の遺構と遺物

規模 東西5.00m、南北4.90mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で30cmである。貯蔵穴は径64cm深さ89cmである。柱穴1は径40cm深さ68cm、柱穴2は径55cm深さ54cm、柱穴3は径51cm深さ56cm、柱穴4は径62cm深さ72cmである。周溝は幅25cm深さ17cmである。

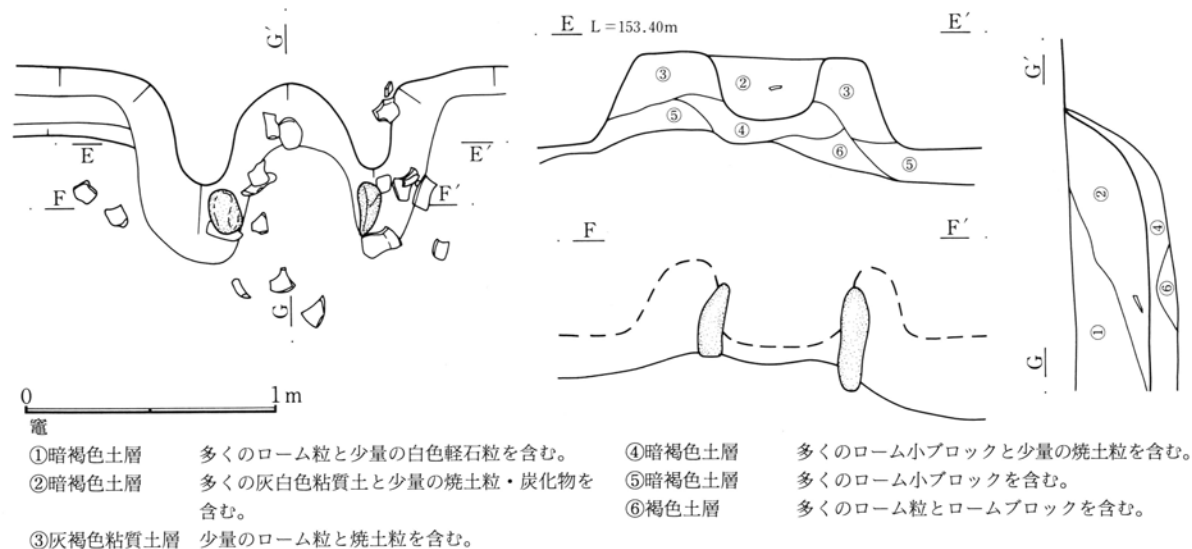
遺物 甕や坏のほかにも白玉・紡錘車・砥石が、またまとまってこも編み石が出土している。

(竈)

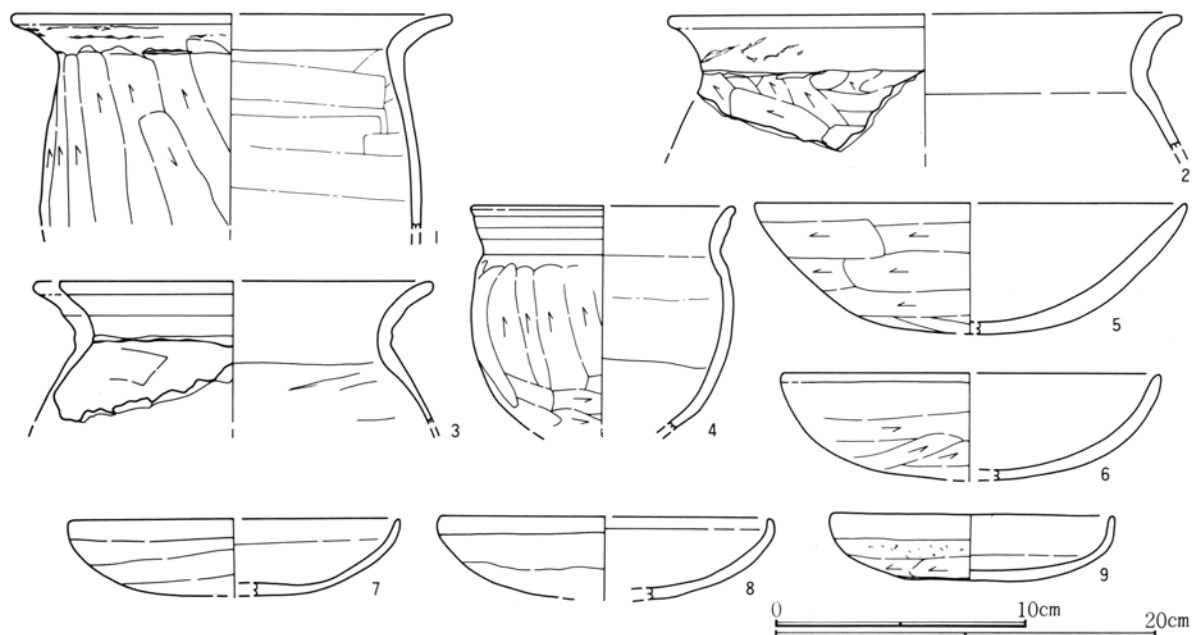
位置 東壁面を掘り込んで造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置し、燃烧部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

構造 両袖石がほぼ垂直に立った状態で残っており、ほぼ使用時の状態に近いと思われる。袖石以外には大きな石の出土はない。袖部分は少量のローム粒を含む灰褐色粘質土で造られている。竈内より焼土粒の出土は多くない。

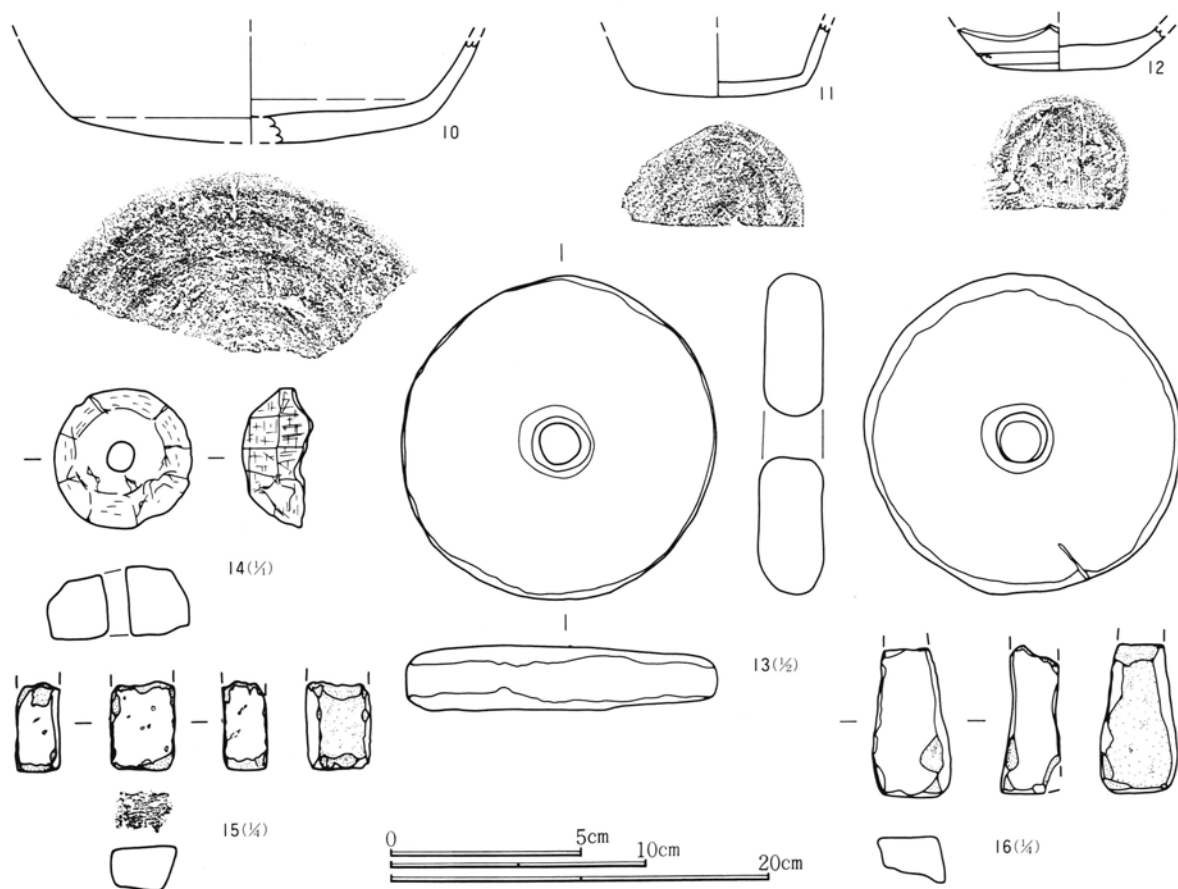
規模 煙道方向73cm、燃烧部幅46cmである。



第328図 458号住居跡竈実測図



第329図 458号住居跡出土遺物実測図(1)



第330図 458号住居跡出土遺物実測図(2)

458号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
329-1 100	土師器 甕	床面+23 1/4残存	口(23.0) 高— 底—	①密、2~3mmの赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面強いヘラ削りで、幅広い削りの単位明瞭。 内面ナデにて器表面密。
329-2	土師器 壺	床面+26 口縁部1/4	口(26.8) 高— 底—	①密、大量の雲母粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部横ナデ、内面ナデにて器表面密。
329-3	土師器 甕	床面+5 口縁部小片	口(20.8) 高— 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	肩部ヘラ削りと思われるが、器表面が粗れており、削りの単位不明。
329-4 100	土師器 小型甕	覆土 1/4残存	口(13.8) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面強いヘラ削り、削りの単位明瞭。 内面ナデにて器表面密。 頻繁に使われていた様子を示す。
329-5	土師器 坏	床面直上 1/4残存	口(16.0) 高— 底—	①密、1~2mmの赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面~体部ヘラ削り。 口縁部横ナデ、内面ナデにて器表面密。 全体に器肉が厚い。
329-6	土師器 坏	床面+10 1/4残存	口(14.8) 高— 底—	①密、1~2mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面にぶい赤褐色、外面黒色	底面ヘラ削り。 口縁部横ナデ、内面ナデにて器表面密。
329-7	土師器 坏	床面-24 1/4残存	口(12.8) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 角閃石を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りと思われるが不明瞭。 口縁部横ナデ。 内外器表面が粗れている。
329-8	土師器 坏	覆土 1/4残存	口(13.0) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削りと思われるが削りの単位不明瞭。 内面ナデ。 器表面全体が粗れている。
329-9 100	土師器 坏	床面-3 3/4残存	口10.9 高2.6 底—	①密、多くの雲母粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。 ヘラ削りの単位不明瞭。 内外面とも器表面全体が粗れている。

第4章 奈良時代の遺構と遺物

458号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考		
330-10	須恵器 盤	床面直上 底部 $\frac{1}{4}$ 残存	口 — 高 — 底 —	①やや粗、2～4mmの片岩粒を含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面右回転ヘラ削り。 内側底面磨耗している。		
330-11	須恵器 坏	貯蔵穴 胴～底部 $\frac{1}{2}$	口 — 高 — 底 6.9	①密、少量の白色粒を含む。 ②還元焰、硬質 ③灰黄色	底面手持ちヘラ削りで丸味のある底部に仕上げている。		
330-12	須恵器 坏	床面-8 底部 $\frac{3}{8}$ 残存	口 — 高 — 底 5.5	①密、1～2mmの片岩粒を少量含む。 ②還元焰、硬質 ③内面白色、外面暗灰色と灰色	底面手持ちヘラ削り。		
330-13 118	紡錘車型 石製品	床面-11	径 8.5 孔径 1.1 厚 1.6 重 144.8		砂岩。表面全体が加工されている。加工の方法は不明。 孔径が大きく、紡錘車ではないと思われる。		
330-14 115	石製品 白玉	床面+3	径 1.8 孔径 0.4 厚 0.9 重 4.6		滑石片岩。側面の上半はノミを用いて削り、下半は荒砥削りと思われる。		
330-15 121	石製品 砥石	掘り方覆土	長 (4.6) 幅 2.4 厚 2.4 重 60		砥石の破片である。 3側面を砥石として使用している。		
330-16 121	石製品 砥石	掘り方覆土	長 (7.7) 幅 4.0 厚 2.4 重 92.5		3側面を砥石として使用している。 残りの1面は自然面。		
遺物番号 図版番号	器種	法	量(cm)(g)				石材・備考
17	127	こも編み石	長 11.7	幅 6.0	厚 3.1	重 310	絹雲母石墨片岩
18	127	こも編み石	長 13.0	幅 6.5	厚 3.4	重 320	絹雲母石墨片岩
19	127	こも編み石	長 12.2	幅 6.3	厚 3.2	重 325	絹雲母石墨片岩
20	127	こも編み石	長 12.6	幅 5.3	厚 3.8	重 330	点紋絹雲母石墨片岩
21	127	こも編み石	長 11.0	幅 5.8	厚 3.3	重 280	絹雲母石墨片岩
22	127	こも編み石	長 12.4	幅 5.1	厚 4.3	重 485	緑簾緑泥片岩
23	127	こも編み石	長 10.4	幅 5.3	厚 3.1	重 270	点紋緑泥片岩
24	127	こも編み石	長 11.8	幅 5.4	厚 4.8	重 460	点紋絹雲母石墨片岩
25	127	こも編み石	長 10.9	幅 6.5	厚 3.4	重 340	点紋絹雲母石墨片岩
26	127	こも編み石	長 10.4	幅 6.1	厚 3.2	重 285	絹雲母石墨片岩
27	127	こも編み石	長 12.3	幅 4.3	厚 3.9	重 305	緑泥片岩
28	127	こも編み石	長 13.7	幅 5.9	厚 2.7	重 300	絹雲母石墨片岩

473号住居跡 (第331～334図、図版52・100・114・121)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、59・60-6グリッドに位置する。

概要 北側部分は調査区域外であり、その部分の調査はできなかった。東側で古墳時代の472号住居と重複している。重複部分が狭い範囲であることや、その部分の一部に攪乱土坑が掘られていることにより、新旧関係は明確でないが、調査の結果472号住居を重複部分で床下まで掘り込んでいる。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。貯蔵穴が竈の右側に、また位置が少し不自然であるが柱穴が4本床面に掘られている。

規模 東西4.35m、南北4.57mである。壁高は残りの良い東壁面部分で36cmである。貯蔵穴は径72cm深さ47cm、柱穴1は径50cm深さ84cm、柱穴2は径36cm深さ68cm、柱穴3は径53cm深さ81cm、柱穴4は径62cm深さ61cmである。

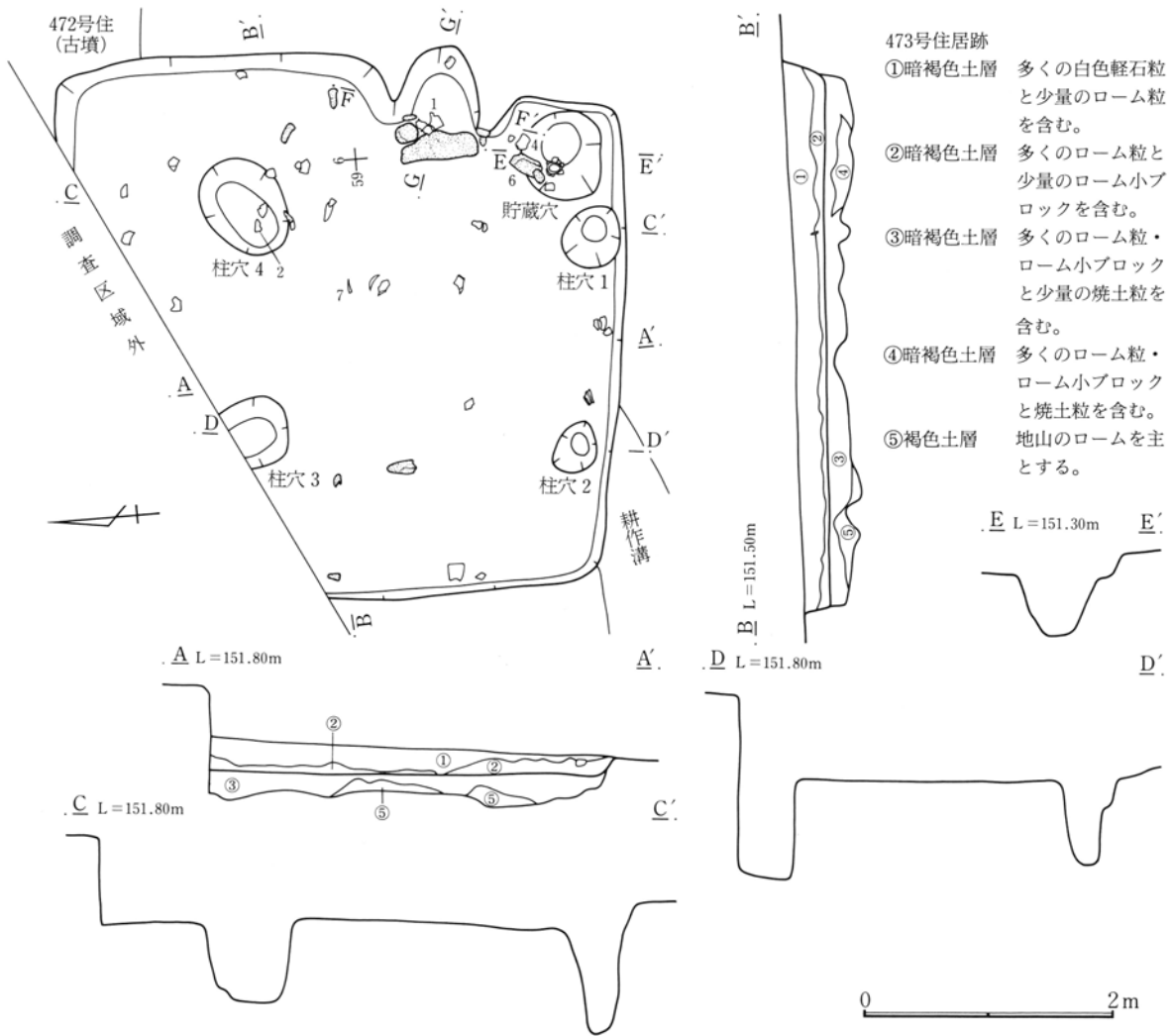
遺物 破片は多く出土している。刀子や砥石が目される。

(竈)

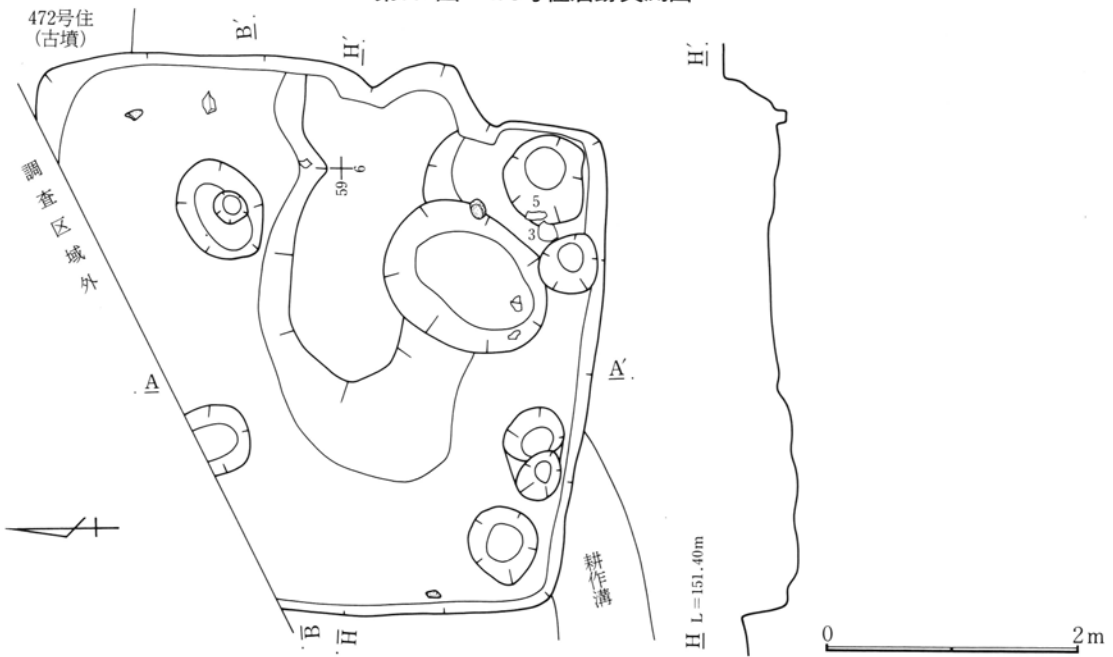
位置 東壁面南寄りを掘り込んで造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置し、燃焼部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

構造 焚口の両袖石がほぼ使用された状態で、また天井石が焚口手前の床面上に落ちた状態で出土した。袖部分はロームをほとんど含まない黒褐色土で造られている。竈内より多くの焼土粒が出土している。

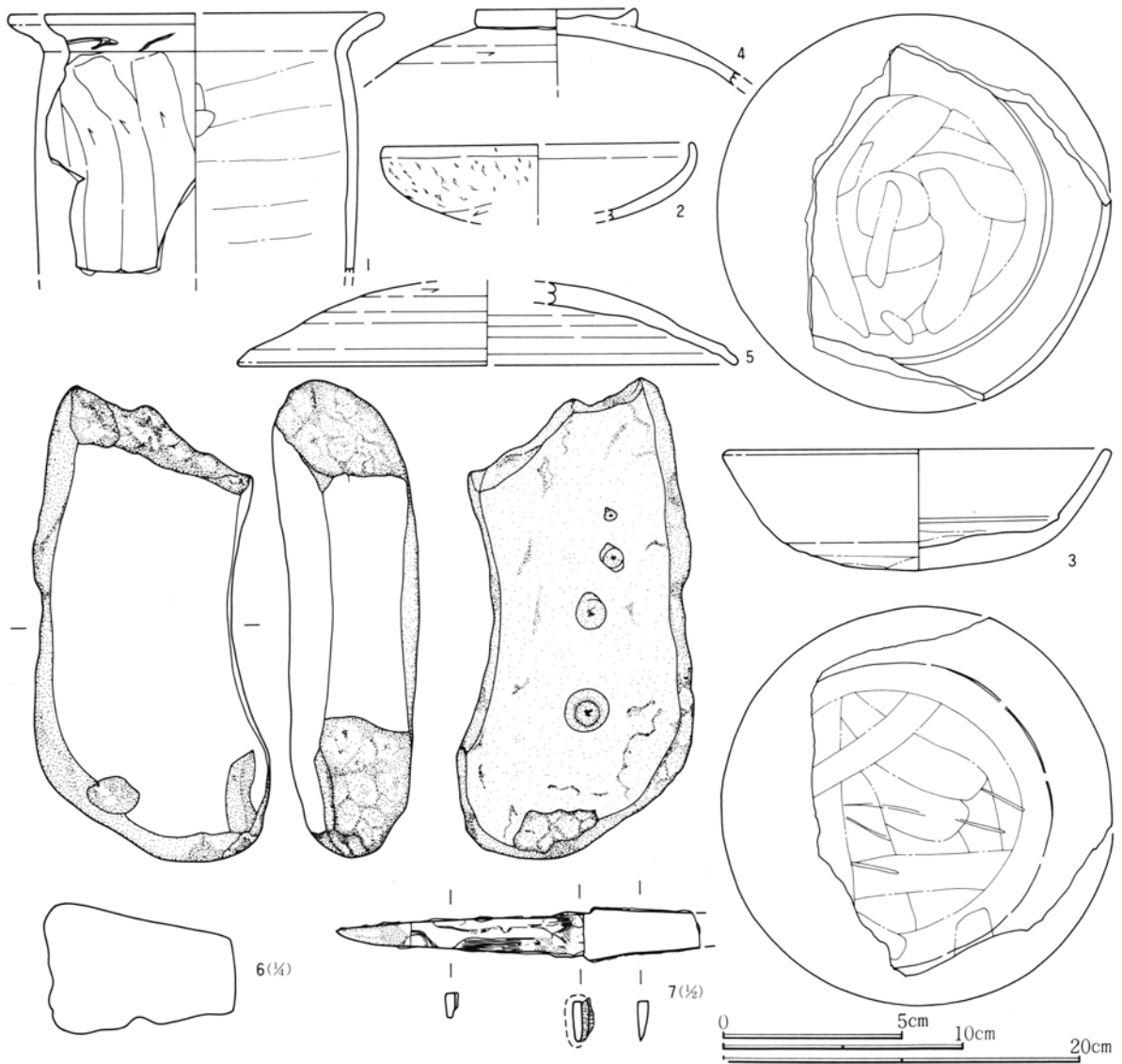
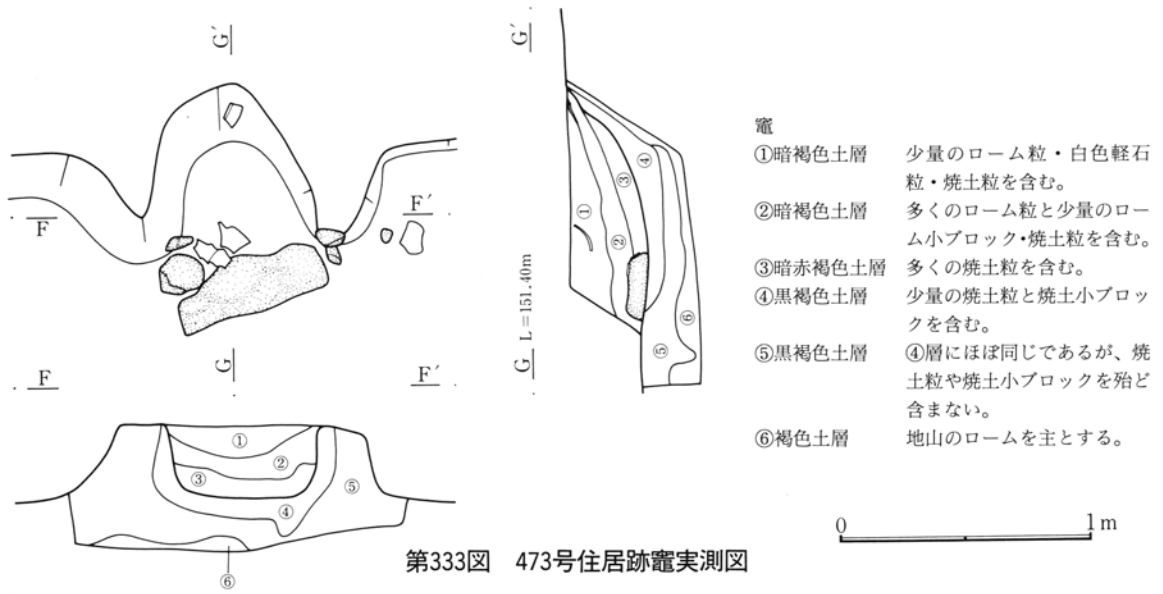
規模 煙道方向66cm、燃焼部幅56cmである。



第331図 473号住居跡実測図



第332図 473号住居跡床下実測図



473号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
334-1	土師器 甕	床面+25 口縁部~胴 上半1/2	口(20.8) 高— 底—	①やや粗、1~2mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質③褐灰色	胴部外面へら削り、削りは深く単位は明瞭。口縁部にへらの工具痕。内外面の多くの部分が吸炭により黒色を呈している。
334-2	土師器 坏	床面+12 1/6残存	口(12.6) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を含む。②酸化焰、硬質③にぶい赤褐色	底面中央部はへら削りと思われるがへらの単位ほとんど不明。底部外縁にへら削りなし。
334-3 100	須恵器 坏	床面-11 1/4残存	口 16.4 高 5.0 底—	①やや粗、2~3mmの砂粒を多く含む。②還元焰、硬質③灰色	底部内外面ナデ。底部周辺に1条の凹線あり。口縁部に右回転クロコ痕あり。底部の器肉が厚い。
334-4	須恵器 蓋	床面+2 摘部~体部1/2	口— 高— 底—	①密、発泡した黒色粒を多く含む②還元焰、硬質③灰色	天井部へら削り。摘みは大きくていねいに貼り付けてある。
334-5	須恵器 蓋	床面-11 口縁部~胴 部1/4	口(20.8) 高— 底—	①やや粗、1~3mmの片岩粒を含む。②還元焰、硬質③灰色	天井部右回転へら削り。口縁端部は強く下方へ折り曲げられていない。
334-6 121	石製品 砥石	床面直上	長 26.8 幅 13.2 厚 7.4 重 3270.0		砂岩。縄文時代の石皿を砥石として転用したものと思われる。砥石としては2側面が使用されている。
334-7 114	鉄製品 刀子	床面+6	長 10.1 幅 1.5 厚 0.7~0.3 重 7.3		縁金具があり、その内部まで木質あり、呑口に作られている。金具は座の板金を伴とする。

487号住居跡 (第335~337図、図版52・115・118)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、68-26グリッドに位置する。

概要 南東部分で同じ奈良時代の488号住居と重複しており、本住居が488号住居の覆土上面を掘り込んでいる。竈も488号住居覆土中に造られている。土坑が西側に掘られており、その部分は床面まで掘り込まれている。重複関係については第94図を参照。

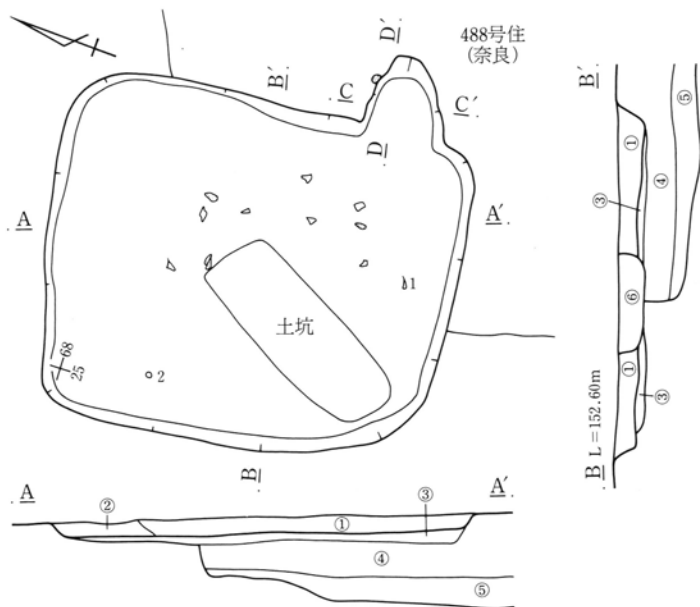
構造 重複していない部分の床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。重複部分の床面はローム粒を多く含む粘質の土で造られている。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模 東西2.87m、南北3.28mである。壁高は残りの良い北西コーナー部分で68cmである。

遺物 紡錘車が出土している。

(竈)

位置 東壁面南寄りを掘り込んで造られている。袖部分は床面上に位置するが、燃烧部と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。



概要 ロームを掘り込まないで488号住居の覆土を掘り込んで造られているためか、確認がやや困難であった。また焼土粒の出土は極めて少ない。

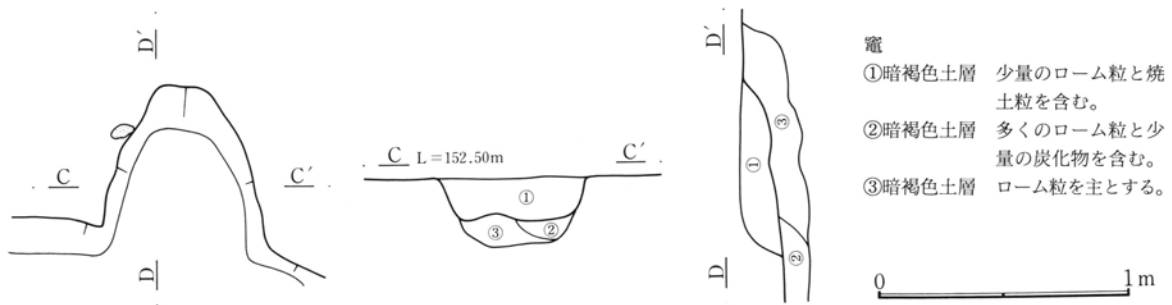
規模 煙道方向65cm、燃烧部幅52cmである。

- 487号住居跡
- ①暗褐色土層 少量のローム粒と白色軽石粒を含む。
  - ②暗褐色土層 やや多くのローム粒を含む。
  - ③暗褐色土層 多くのローム粒を含む。やや粘質である。
  - ④488号住居跡覆土
  - ⑤488号住居跡床下覆土
  - ⑥土坑覆土

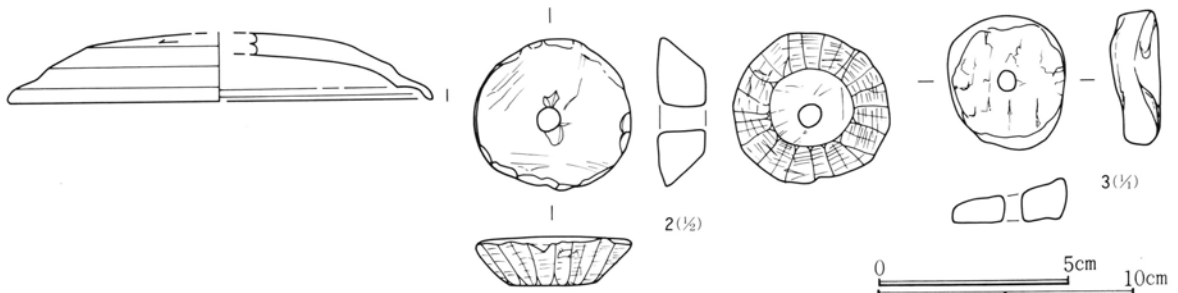
第335図 487号住居跡実測図

0 2m

第4章 奈良時代の遺構と遺物



第336図 487号住居跡竈実測図



第337図 487号住居跡出土遺物実測図

487号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
337-1	須恵器 蓋	床面直上 1/4残存	口(16.8) 高 — 底 —	①密、1~2mmの長石粒を多く含む。②還元焰、硬質③灰色	天井部ヘラ削り。 カエリはわずかに痕跡を残す程度である。
337-2 118	石製品 紡錘車	床面+1	径 4.1/2.3 厚 1.2	孔径 0.6 重 28.4	蛇紋岩。広面は自然面。狭面にわずかな加工痕。 側面は鉄製刃物により幅狭く削られている。
337-3 115	石製品 白玉	覆土	径 1.8/1.5 厚 0.6	孔径 0.2 重 2.9	滑石片岩。横面に明瞭な荒砥削り痕は認められない。

488号住居跡 (第338~340図、図版52・53・100)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、68-26グリッドに位置する。

概要 北西部分で同じ奈良時代の487号住居と重複しており、487号住居により覆土上面を掘り込まれている。しかし本住居の掘り込みが深いため、残りは良好である。重複関係については第94図を参照。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。貯蔵穴が竈の右側に掘られているが、柱穴は掘られていない。

規模 東西3.66m、南北4.86mである。壁高は残りの良い西壁面中央部分で54cmである。貯蔵穴は径42cm深さ48cmである。

床下 床下土坑が2本重複して掘られている。床下土坑1は深さ25cm、床下土坑2は深さ21cmである。

遺物 甕や坏が出土している。

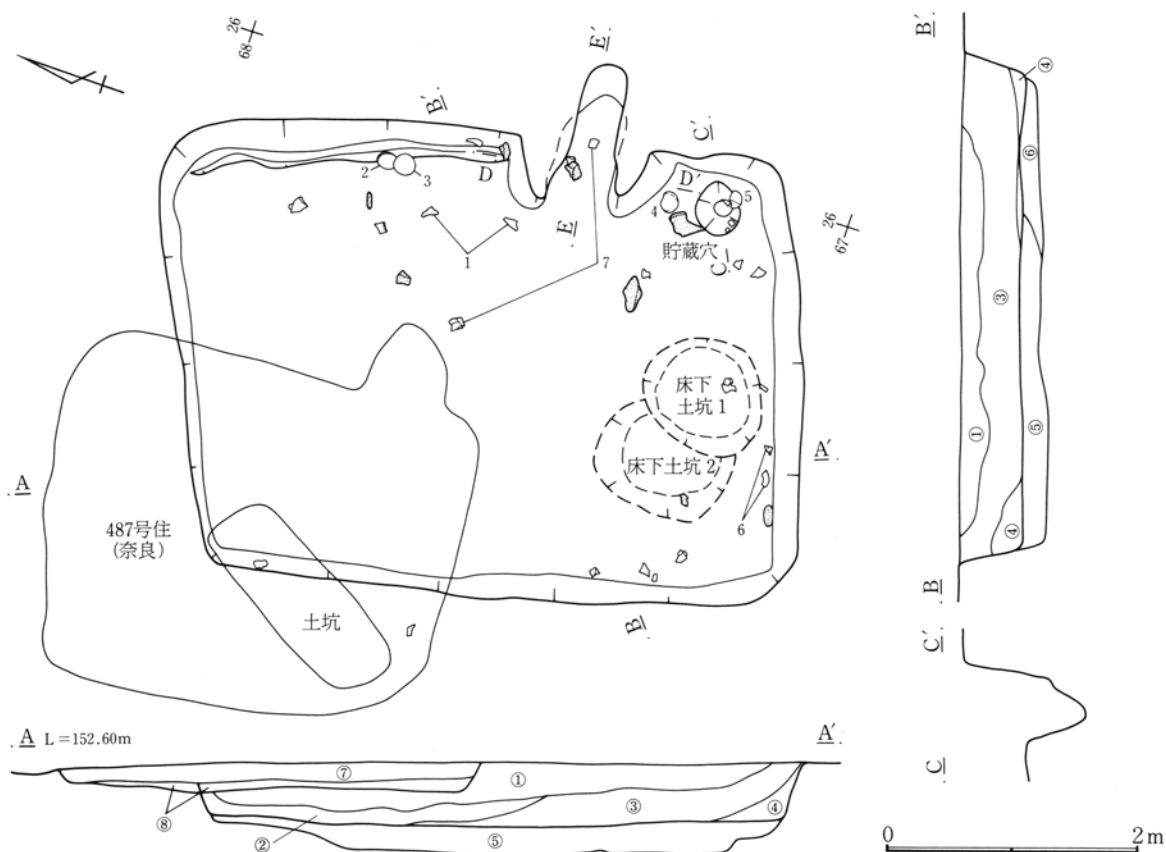
(竈)

位置 東壁面南寄りを掘り込んで造られている。袖部分は床面上に位置するが、燃烧部と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

概要 ロームを深く掘り込んで造られており、燃烧部から煙道部にかけての上部が少し残っている。竈内より小さな石が1つ出土しているが、袖石や支脚石等の出土はない。燃烧部付近に多く焼土粒が出土している。

規模 煙道方向118cm、燃烧部幅48cmである。

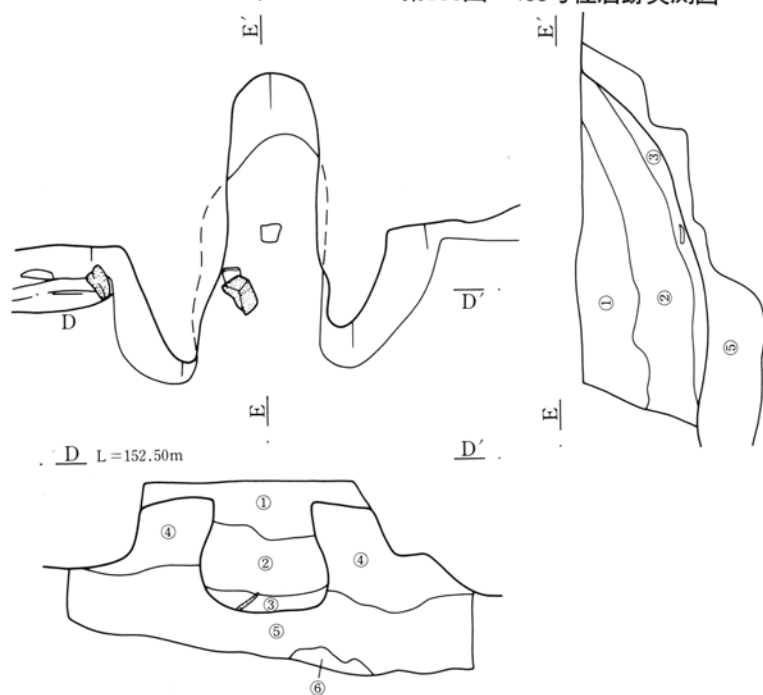




488号住居跡

- ①暗褐色土層 少量のローム粒と白色軽石粒を含む。⑦層より明るい。
- ②暗褐色土層 少量のローム粒とローム小ブロックを含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ④褐色土層 多くのローム粒を含む。
- ⑤褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ⑥黄褐色土層 地山のロームを主とする。
- ⑦487号住居跡覆土
- ⑧487号住居跡床下覆土

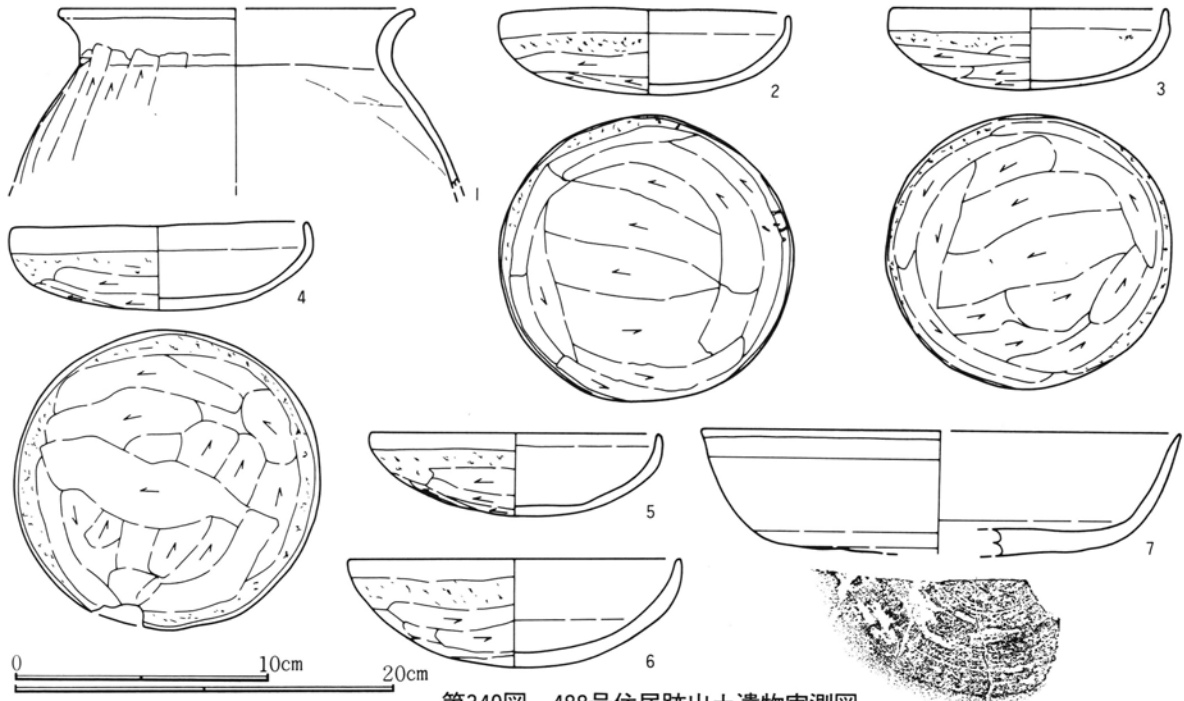
第338図 488号住居跡実測図



竈

- ①暗褐色土層 多くのローム小ブロックと少量の焼土粒を含む。
- ②暗褐色土層 より多くのローム粒とローム小ブロックと少量の焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くの焼土粒と少量の灰を含む。
- ④灰褐色土層 少量の灰褐色土・焼土粒・ローム粒を含む。
- ⑤暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックと少量の焼土粒を含む。
- ⑥黄褐色土層 地山のローム粒を主とする。

第339図 488号住居跡竈実測図



第340図 488号住居跡出土遺物実測図

488号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
340-1	土 師 器 壺	床面+10 口縁部 $\frac{1}{4}$ 胴部 $\frac{1}{2}$	口(19.0) 高 — 底 —	①粗、1~3mmの砂粒を多く、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り、多くの砂粒が移動し器表面粗い。内面ナデで器表面密。内面にも3mm前後の砂粒や片岩粒が目立つ。
340-2 100	土 師 器 坏	床面+3 完形	口 11.1 高 3.3 底 —	①密、少量の角閃石を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色、一部黒褐色	底面ヘラ削り。体部ナデ。内面ナデにて器表面密。底部外面の約 $\frac{2}{3}$ が吸炭により黒褐色。
340-3 100	土 師 器 坏	床面+3 完形	口 11.0 高 3.2 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。内面ナデにて器表面密。底部外面の約 $\frac{2}{3}$ 吸炭により黒褐色。
340-4 100	土 師 器 坏	床面+2 ほぼ完形	口 11.8 高 3.3 底 —	①密、少量の角閃岩を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、削りの単位は比較的明瞭である。内面ナデにて器表面密。底面にわずかな吸炭による黒褐色。
340-5 100	土 師 器 坏	床面+2 口縁一部欠 他完形	口 11.5 高 3.3 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、削りの単位は明瞭でない。内面ナデにて器表面密。黒斑全く認められず。
340-6	土 師 器 坏	床面直上 $\frac{2}{3}$ 残存	口 13.2 高 4.3 底 —	①密、1~2mmの砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄褐色	底面ヘラ削り、削りの単位は明瞭である。体部ナデ。内面ナデにて器表面密。
340-7	須 恵 器 坏	床面+3 口縁部 $\frac{1}{4}$ 底部 $\frac{1}{2}$	口(19.0) 高 — 底(12.6)	①密、1~2mmの長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰白色	底面右回転ヘラ切りの痕跡、ヘラ切り後再調整なし。内面縦横方向のナデ。

490号住居跡 (第341~343図、図版53・100・101・114・128)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、62・63-21グリッドに位置する。

概要 多くの住居が密集している地域であり、重複関係も複雑である。本住居は他の3軒と重複しており、最も新しい時期の住居である。住居の大部分が古墳時代の491号住居と重複しており、491号住居を床下部分まで掘り込んでいる。また竈の煙道部と住居の南東コーナー部分で古墳時代の460・489号住居と僅かに重複しており、その部分を掘り込んでいるが、範囲は明瞭に確認することができない。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。床下調査により浅い掘り込みも確認されたが、明瞭な貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模 東西3.19m、南北3.40mである。壁高は残りの良い西壁面中央部分で41cmである。

遺物 竈内より石や土器が、北壁付近にまとまってこも編み石が出土している。鉄類も多い。

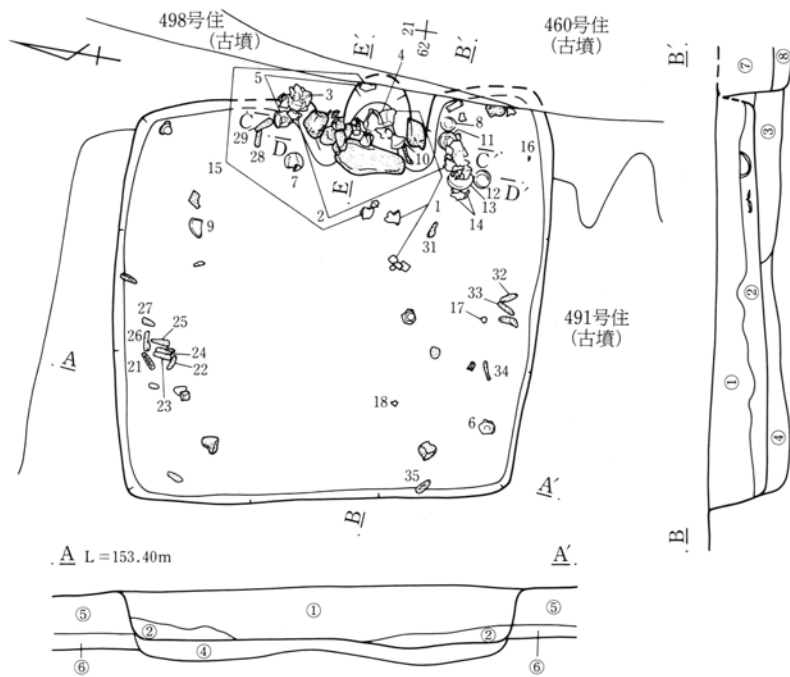
(竈)

位置 東壁面を掘り込んで造られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置し、燃焼部の一部と煙道部が壁面を掘り込んでいる。

構造 焚口の両袖石、風化してほとんど残っていない天井石、燃焼部の右側、さらに左袖部分には2個の石が埋め込まれている。このように多くの石を用いて竈が造られている。燃焼部覆土を中心に多く焼土

粒が出土している。

規模 煙道方向推定76cm、燃焼部幅54cmである。

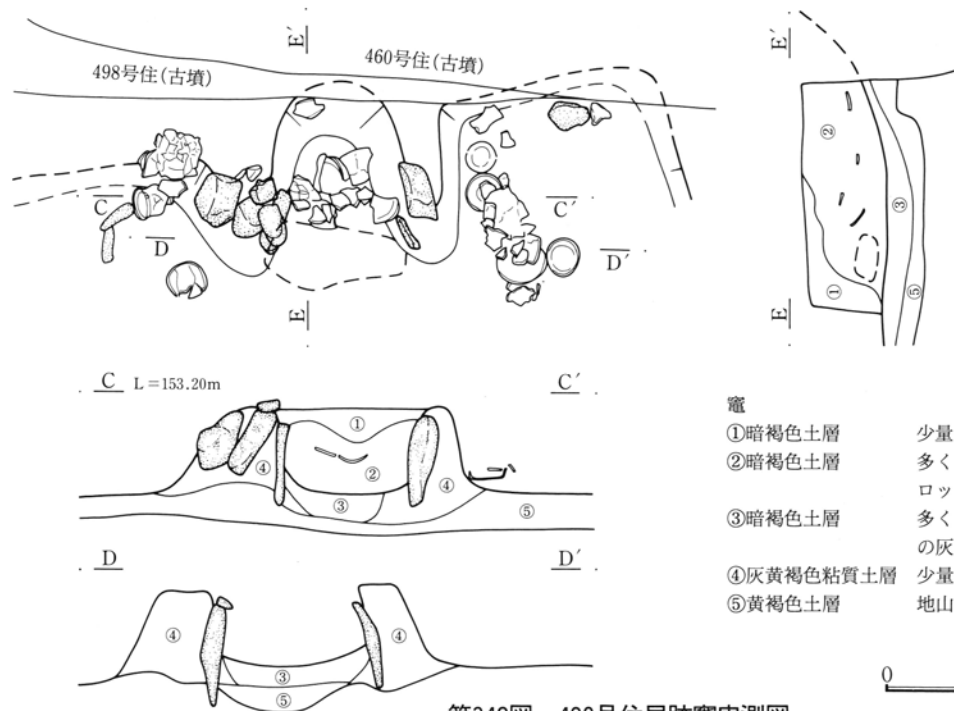


490号住居跡

- ①暗褐色土層 少量の白色軽石粒とローム粒を含む。
- ②暗褐色土層 やや多くのローム粒を含む。
- ③暗褐色土層 ローム粒・粘土・焼土粒・炭化物を含む。
- ④褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ⑤491号住居跡覆土
- ⑥491号住居跡床下覆土
- ⑦460号住居跡覆土
- ⑧460号住居跡床下覆土

0 2m

第341図 490号住居跡実測図

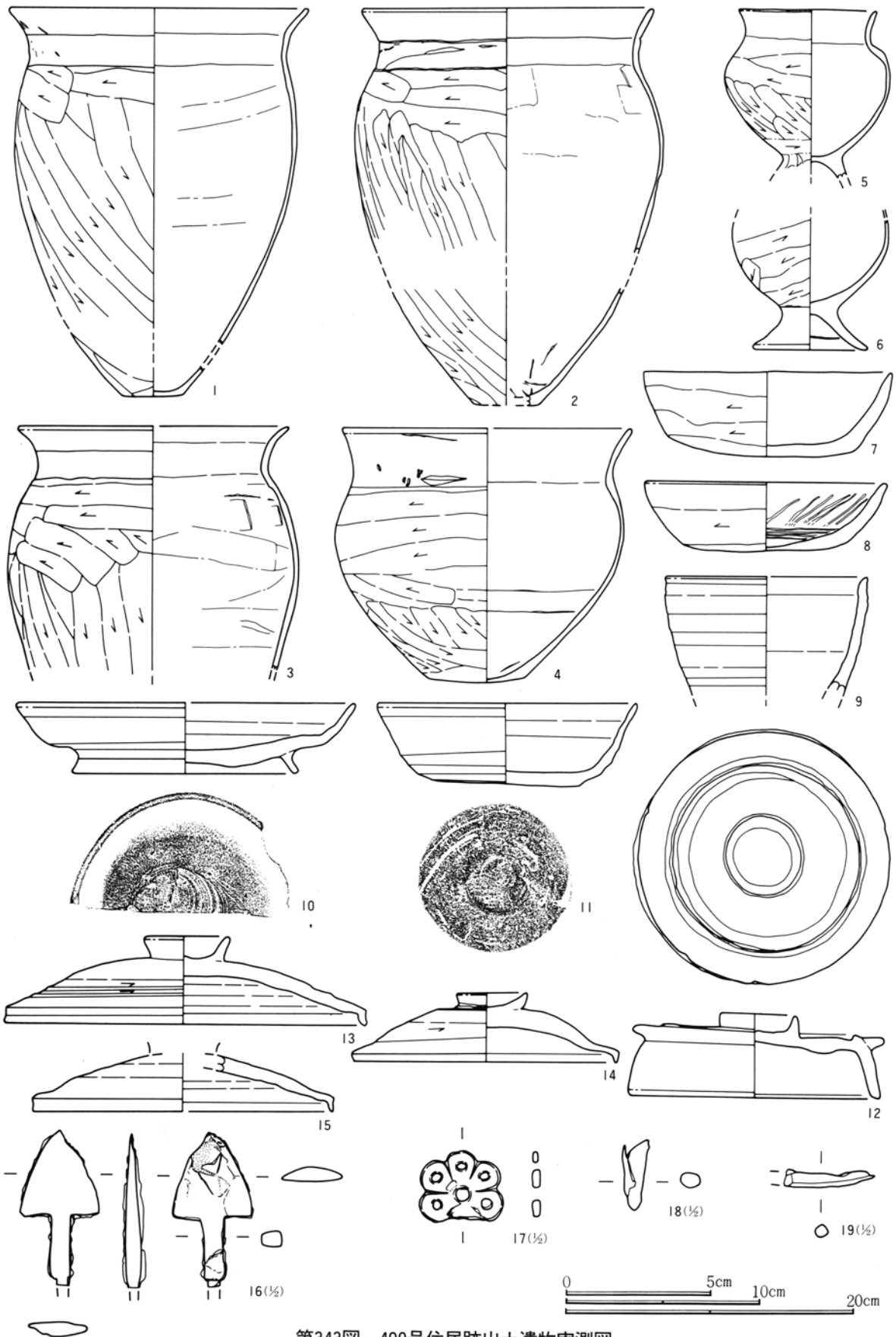


竈

- ①暗褐色土層 少量の軽石粒とローム粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くの焼土粒と少量の焼土小ブロックを含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒・焼土粒と少量の灰を含む。
- ④灰黄褐色粘質土層 少量の焼土粒を含む。
- ⑤黄褐色土層 地山のロームを主とする。

0 1m

第342図 490号住居跡竈実測図



第343図 490号住居跡出土遺物実測図

490号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考			
343-1 100	土師器 甕	床面+10 図上復元 ほぼ完形	口 21.0 高(27.0) 底 4.4	①密 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部ヘラ削りで器表面全体を薄く仕上げている。 内面ナデで器表面密。 底部分と胴上半～口縁は図上接合復元。			
343-2 101	土師器 甕	床面+10 図上復元 ほぼ完形	口 20.2 高(27.5) 底(4.5)	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③褐色	底面と胴部ヘラ削り、特に胴部の器肉を薄く仕上げて いる。口縁部はコの字状を呈する。 胴下半～底部と胴中央～口縁部は図上接合復元。			
343-3 101	土師器 甕	床面+23 口縁部1/2 胴部1/4	口(18.9) 高 — 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を多く含 む。 ②酸化焰、硬質 ③赤褐色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。			
343-4 101	土師器 甕	竈内 1/2残存	口(20.2) 高 17.7 底 6.7	①密、1mm以下の小さな砂粒を多 く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部～胴外面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。			
343-5 101	土師器 台付小型 甕	床面+10 ほぼ完形 台下部欠	口 9.5 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。 部分的に器表面が剥落している。			
343-6 100	土師器 台付小型 甕	床面+8 胴部～上部	口 — 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	上部横ナデ。 胴部外面ヘラ削り。 内面ナデにて器表面密。			
343-7 101	土師器 坏	床面+4 ほぼ完形	口 12.8 高 4.4 底 10.0	①密、1mm前後の赤色粒を少量含 む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ヘラ削り。 内面に暗文と思われる痕跡をわずかに残すが不明。器 表面全体が粉状を呈し粗れている。			
343-8 101	土師器 坏	床面+8 完形	口 12.4 高 3.6 底 8.7	①密、1mm前後の赤色粒を少量含 む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ヘラ削り。内側口縁部～体部放射 状暗文。内側底部周辺横方向ヘラ磨き。 器表面全体の胎土がやや粉状を呈する。			
343-9	須恵器 鉢	床面+23 口縁部1/2 胴部1/4	口(14.0) 高 — 底 —	①密 ②還元焰、硬質 ③断面赤褐色、表面灰色	外面にほぼ一定の間隔で浅い凹線あり。 内面に降灰による大量の自然釉。			
343-10 101	須恵器 盤	床面+26 1/2残存	口(17.5) 高 3.7 底 11.6	①密、1mm以下の小さな白色粒を 少量含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面中央糸切痕、周辺部回転ヘラ削り。 高台の貼り付けはいいねいである。 全体にいいねいなつくりである。			
343-11 101	須恵器 坏	床面+4 完形	口 13.4 高 4.2 底 7.7	①粗、1～3mmの少量の片岩粒を 含む。 ②還元焰、硬質 ③灰白色、口縁部外面黒色	底面中央に糸切りの痕跡。 底面周辺部右回転ヘラ削り。 体部～口縁部にクロロ目あり。			
343-12 101	須恵器 蓋	床面+10 完形	口 12.9 高 — 底 —	①密、1mm以下の白色粒を多く含 む。 ②還元焰、硬質 ③灰黄色	天井部に右回転ヘラ削りの痕跡を残すが、他はすべて 回転を伴うナデによる整形。 天井部周辺に多くのひびが入っている。			
343-13 101	須恵器 蓋	床面+9 口縁一部欠 ほぼ完形	口 18.8 高 — 底 —	①やや粗、1～2mmの片岩粒を多 く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	体部～天井部右回転ヘラ削り。 天井部に焼成時にできたと思われる亀裂が入ってい る。			
343-14 101	須恵器 蓋	床面+5 ほぼ完形	口 13.6 高 — 底 —	①密、1～2mmの片岩粒を含む。 ②還元焰、硬質 ③灰白色	体部右回転ヘラ削り。 全体につくりが雑で部分的に粘土が層状に剥がれてい る。			
343-15	須恵器 蓋	床面+16 1/2残存	口 15.6 高・底—	①粗、1～2mmの片岩粒を多く含 む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	天井部にヘラ削りなし。			
343-16 114	鉄製品 鉄鏃	覆土	長 5.4 幅 2.8 厚 0.5 重 11.6		鉄鏃の茎、頸、鏃身部である。 錆化は進行している。			
343-17 114	鉄製品 飾金具	床面+13	長 2.4 幅 2.9 厚 0.2 重 3.0		鉄製の飾金具と思われる。 残りは良好である。			
343-18	鉄製品 鉄鏃	覆土	長 (2.5) 幅 0.9 厚 0.5 重 1.6		小さな鉄片である。 名称及び用途不明。錆化がいちじるしい。			
343-19	鉄製品 鉄片	覆土	長 (3.2) 幅 0.5 厚 0.4 重 2.1		名称及び用途不明。 断面形は方形であったと思われる。			
遺物番号	図版番号	器種	法量(cm)(g)				石 材	備 考
20	128	こも編み石	長 14.7	幅 4.2	厚 3.4	重 320	絹雲母石墨片岩	
21	128	こも編み石	長 14.5	幅 4.0	厚 2.6	重 190	点紋絹雲母石墨片岩	
22	128	こも編み石	長 13.5	幅 3.7	厚 2.3	重 170	絹雲母石墨片岩	
23	128	こも編み石	長 15.2	幅 3.6	厚 3.5	重 270	点紋緑泥片岩	
24	128	こも編み石	長 12.3	幅 3.5	厚 2.2	重 150	点紋絹雲母石墨片岩	
25	128	こも編み石	長 13.7	幅 3.7	厚 2.0	重 160	緑簾緑泥片岩	
26	128	こも編み石	長 15.7	幅 3.7	厚 2.6	重 225	緑簾緑泥片岩	

第4章 奈良時代の遺構と遺物

490号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	図版番号	器種	法	量(cm)(g)				石 材	備 考
27	128	こも編み石	長 12.6 幅 4.1 厚 2.0 重 170					点紋絹雲母石墨片岩	
28	128	こも編み石	長 14.8 幅 5.5 厚 2.4 重 255					緑簾緑泥片岩	
29	128	こも編み石	長 15.3 幅 5.1 厚 2.9 重 310					緑簾緑泥片岩	
30	128	こも編み石	長 15.9 幅 3.2 厚 2.1 重 160					絹雲母石墨緑泥片岩	
31	128	こも編み石	長 11.1 幅 3.3 厚 2.3 重 125					緑泥片岩	
32	128	こも編み石	長 12.9 幅 4.1 厚 2.0 重 180					絹雲母石墨片岩	
33	128	こも編み石	長 13.9 幅 3.6 厚 3.3 重 220					点紋絹雲母石墨片岩	
34	128	こも編み石	長 14.8 幅 2.8 厚 1.7 重 110					緑泥片岩	
35	128	こも編み石	長 14.1 幅 4.7 厚 2.4 重 220					点紋緑泥片岩	

493号住居跡 (第344~346・348図、図版53・54・101・114・115・128)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、63・64-21グリッドに位置する。

概要 多くの住居が密集している地域である。本住居は古墳時代の494号住居と重複しており494号住居を床下部分まで深く掘り込んで造られている。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。貯蔵穴が竈の右側に掘られているが、柱穴は掘られていない。

規模 東西3.11m、南北3.40mである。壁高は残りの良い南東コーナー中央部分で68cmである。貯蔵穴は径65cm深さ23cmである。

遺物 破片の出土量が多いが、図示できた土器は土師器の甕1点と坏2点のみである。

(竈)

位置 東壁面を掘り込んで造られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置し、燃焼部の一部と煙道部が壁面を掘り込んでいる。

構造 残りの悪い竈である。左袖部分に袖石と思われる大きな石が出土しているが、右袖部分は削られて残っていない。燃焼部床面付近に多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向119cm、燃焼部幅42cmである。

494号住居跡 (第344・345・347・349図、図版26・116)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、63・64-20・21グリッドに位置する。

概要 多くの住居が密集している地域である。本住居は奈良時代の493号住居と重複しており493号住居により住居の大部分を床下部分まで深く掘り込まれている。また南側で古墳時代の491号住居と僅かに重複しており、本住居がその部分を掘り込んでいる。また東側部分の土が乱れており、調査が困難であった。住居形態が少し不自然であるため、部分的に調査の間違いのあった所も存在すると思われる。

構造 残されている床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模 東西4.56m、南北推定3.20mである。壁高は残りの良い竈付近で42cmである。

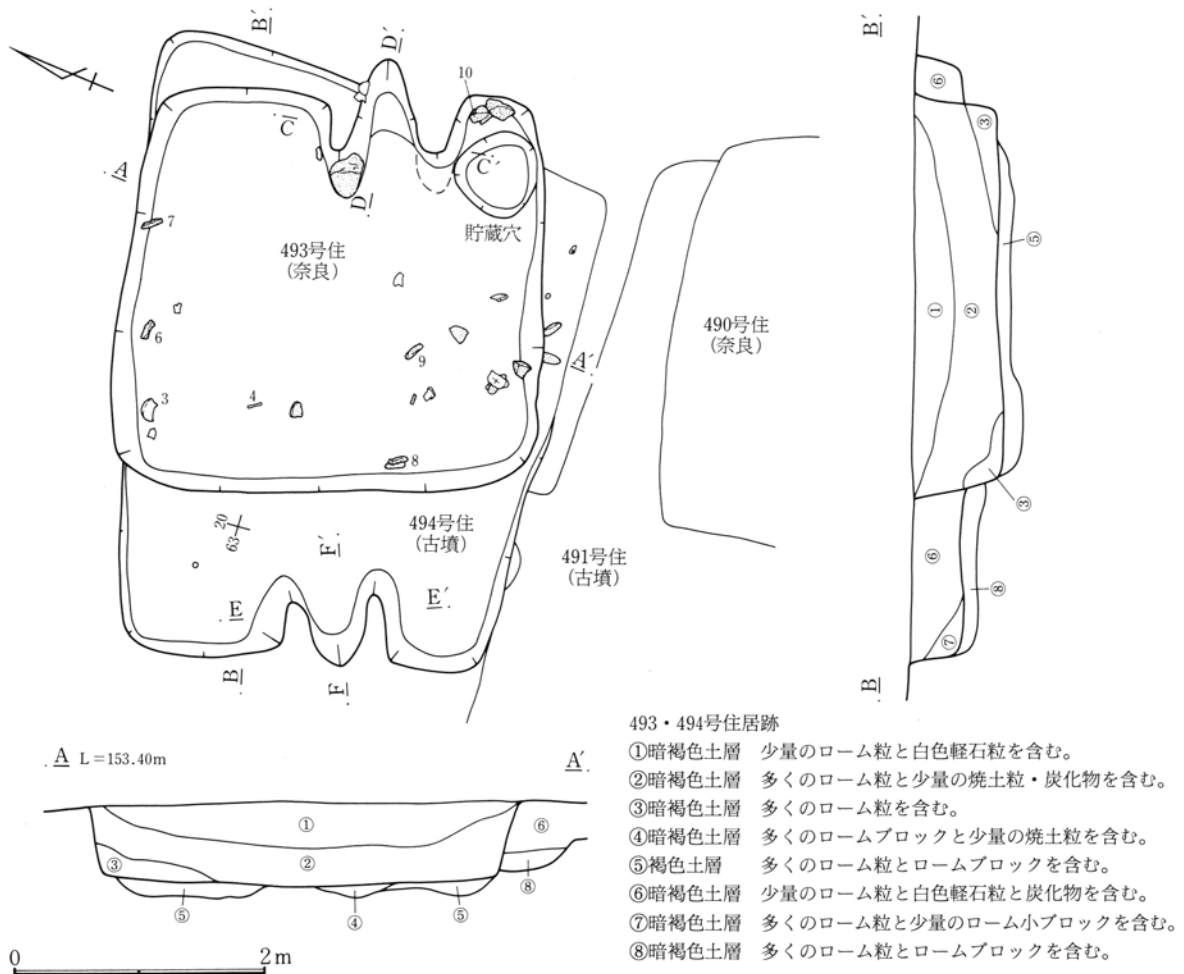
遺物 全体に出土量は少なく、破片を含め総数50片である。紡錘車の未製品が出土している。

(竈)

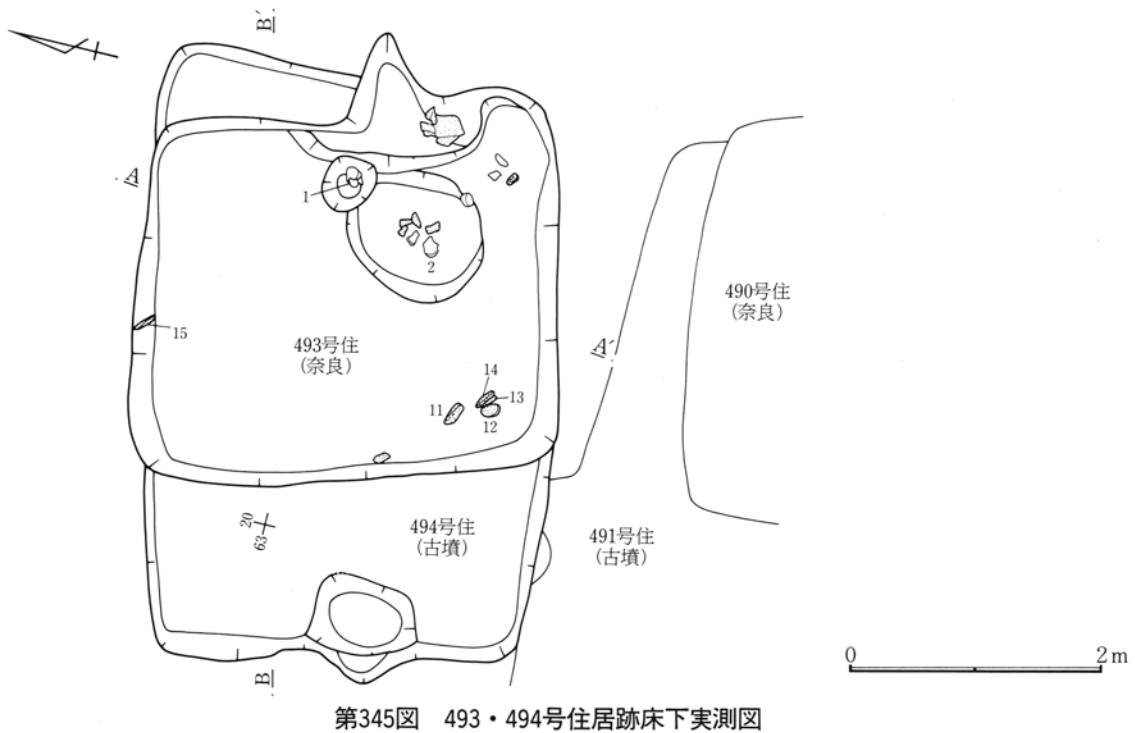
位置 西壁面を掘り込んで造られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置し、煙道部が壁面を掘り込んでいる。

構造 袖部分は暗茶褐色粘質土で造られており、袖石等の出土はない。燃焼部床面付近から多くの焼土粒が出土している。

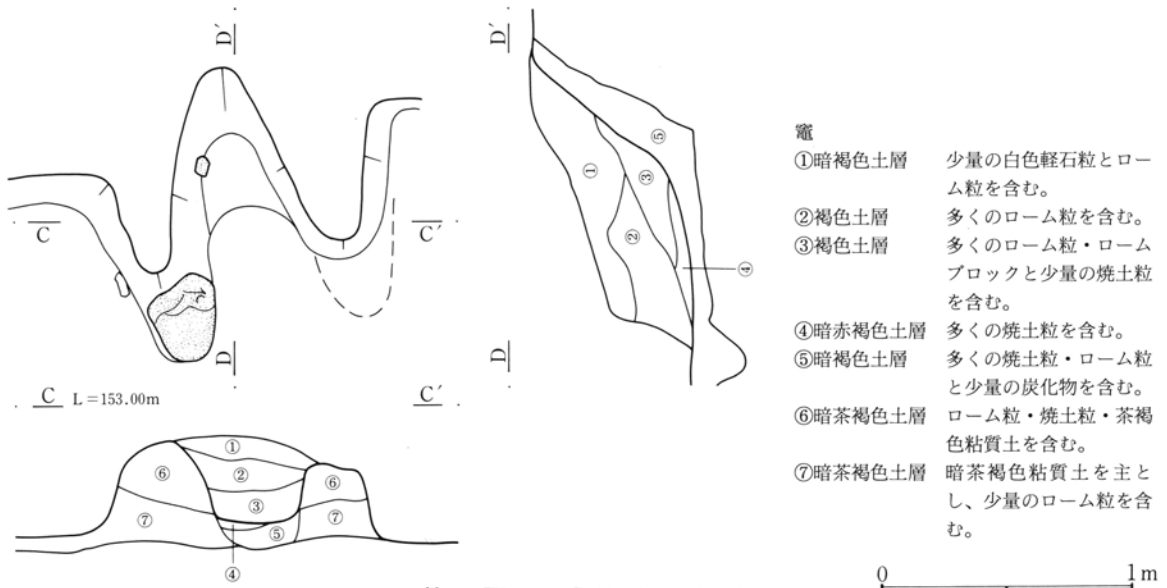
規模 煙道方向72cm、燃焼部幅44cmである。



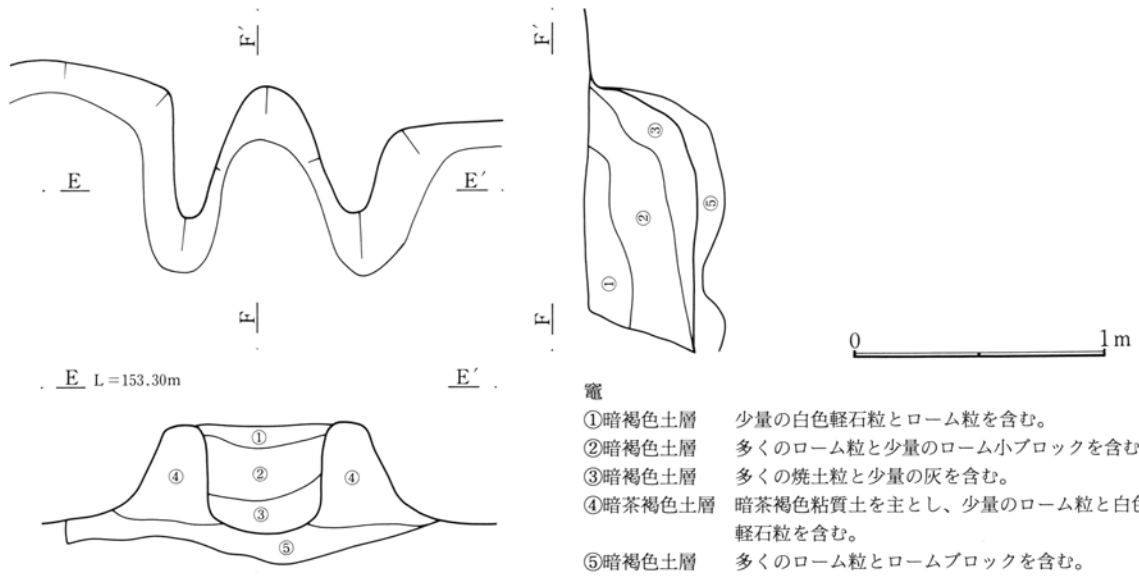
第344図 493・494号住居跡実測図



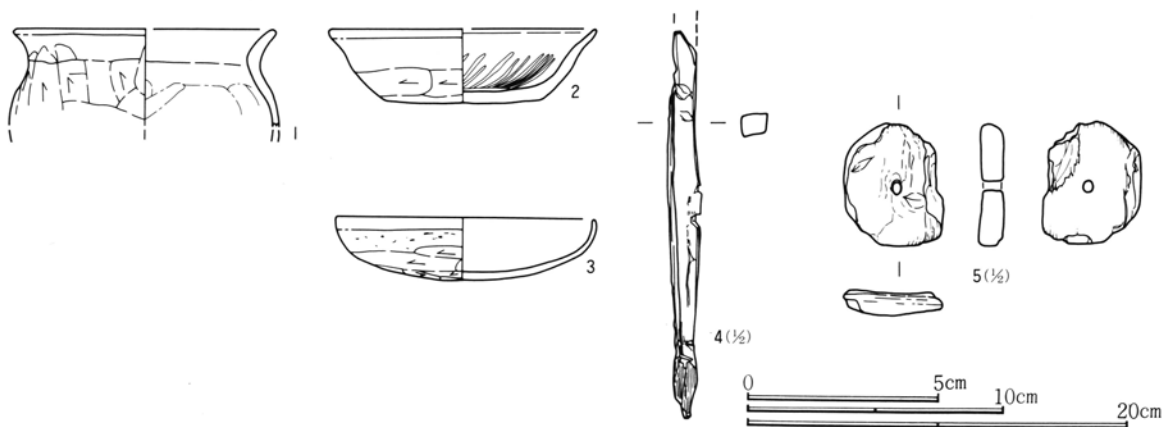
第4章 奈良時代の遺構と遺物



第346図 493号住居跡竈実測図

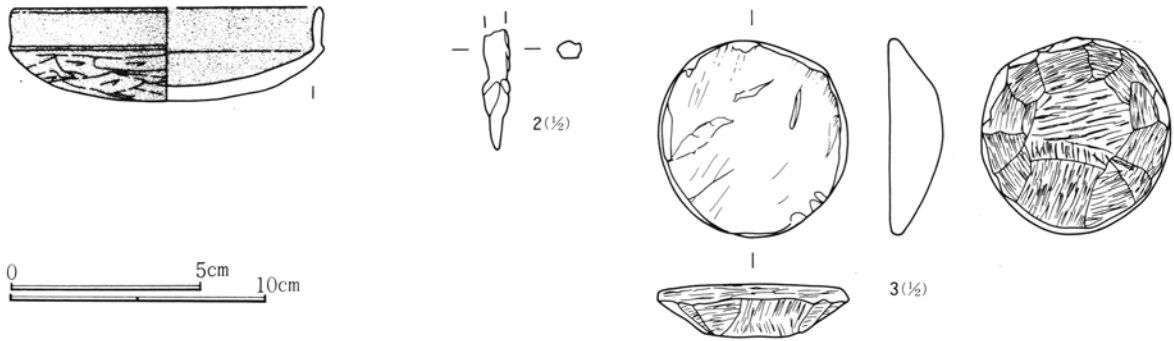


第347図 494号住居跡竈実測図



第348図 493号住居跡出土遺物実測図





第349図 494号住居跡出土遺物実測図

493号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考		
348-1	土 師 器 甕	床面-17 口縁部~ 胴部1/4	口(14.0) 高 — 底 —	①密、1~2mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へら削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。		
348-2 101	土 師 器 坏	床面-19 1/2残存	口(14.0) 高 3.9 底 9.0	①やや粗、1~2mmの砂粒を少量 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。 体部下半へら削り。 内面に多くの暗文。		
348-3 101	土 師 器 坏	床面+14 3/4残存	口 13.6 高 3.3 底 —	①密、多くの雲母粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り、削りの単位は細く砂粒の移動は少ない。 口縁~内側底面ナデ。		
348-4 114	鉄 製 品 茎 子	床面+6	長 10.3 幅 1.0 厚 0.6 重 10.0		茎が太いため疑問も残るが鉄製の茎部分と思われる。 下端に木質部が残る。		
348-5 115	石 製 品 白 玉	覆土	長 3.2 幅 (2.4) 孔径 0.2 重 10.0		滑石片岩。側面はよく磨かれている。上下面は自然面。 幅の大きな白玉である。		
遺物番号	図版番号	器 種	法 量(cm)(g)				石 材 ・ 備 考
6	128	こも編み石	長 16.3	幅 5.7	厚 2.1	重 280	絹雲母石墨片岩
7	128	こも編み石	長 15.9	幅 4.0	厚 2.3	重 240	点紋緑泥片岩
8	128	こも編み石	長 16.0	幅 6.8	厚 2.9	重 480	緑泥片岩
9	128	こも編み石	長 17.8	幅 4.6	厚 4.5	重 480	緑色硅質板岩
10	128	こも編み石	長 17.5	幅 6.0	厚 2.6	重 470	緑簾緑泥片岩
11	128	こも編み石	長 15.4	幅 4.8	厚 2.8	重 290	絹雲母石墨片岩
12	128	こも編み石	長 13.4	幅 7.5	厚 3.7	重 680	緑泥片岩
13	128	こも編み石	長 15.0	幅 4.4	厚 3.3	重 295	点紋緑泥片岩
14	128	こも編み石	長 17.8	幅 6.2	厚 3.3	重 625	点紋緑泥片岩
15	128	こも編み石	長 17.1	幅 5.1	厚 2.3	重 360	点紋絹雲母石墨片岩

494号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
349-1	土 師 器 坏	床面+5 1/4残存	口(12.2) 高 3.7 底 —	①密、1~2mmの赤色粒を多く含 む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色、一部黒色	底面へら削り、砂粒の移動少なく器表面密。 口縁部外側~内面黒漆。 底部外面吸炭。
349-2	鉄 製 品 鉄 鏝	床面+19	長 (3.2) 幅 0.7 厚 0.5 重 1.6		鉄鏝の茎下端部分とも思われるが名称及び用途不明。
349-3 116	石 製 品 紡 錘 車	床面+28	径 5.0/2.5 孔径 — 厚 1.4 重 49.6		紡錘車の未製品と思われる。広面は自然面、狭面は荒 砥削り、側面は鉄製ノミにより削られている。

496号住居跡 (第350~352図、図版54・101・118)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、72-24グリッドに位置する。

概要 北西部分は調査区域外となっており、住居北西コーナー部分は調査できなかった。住居の西側部分で  
497号住居と重複しており、497号住居の床面に近い覆土の大部分を掘り込んで住居が造られている。

構造 重複していない部分の床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られており、重複部  
分はやや多くのロームを含む土で造られている。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

第4章 奈良時代の遺構と遺物

規模 東西3.05m、南北2.62mである。壁高は残りの良い南壁面部分で28cmである。

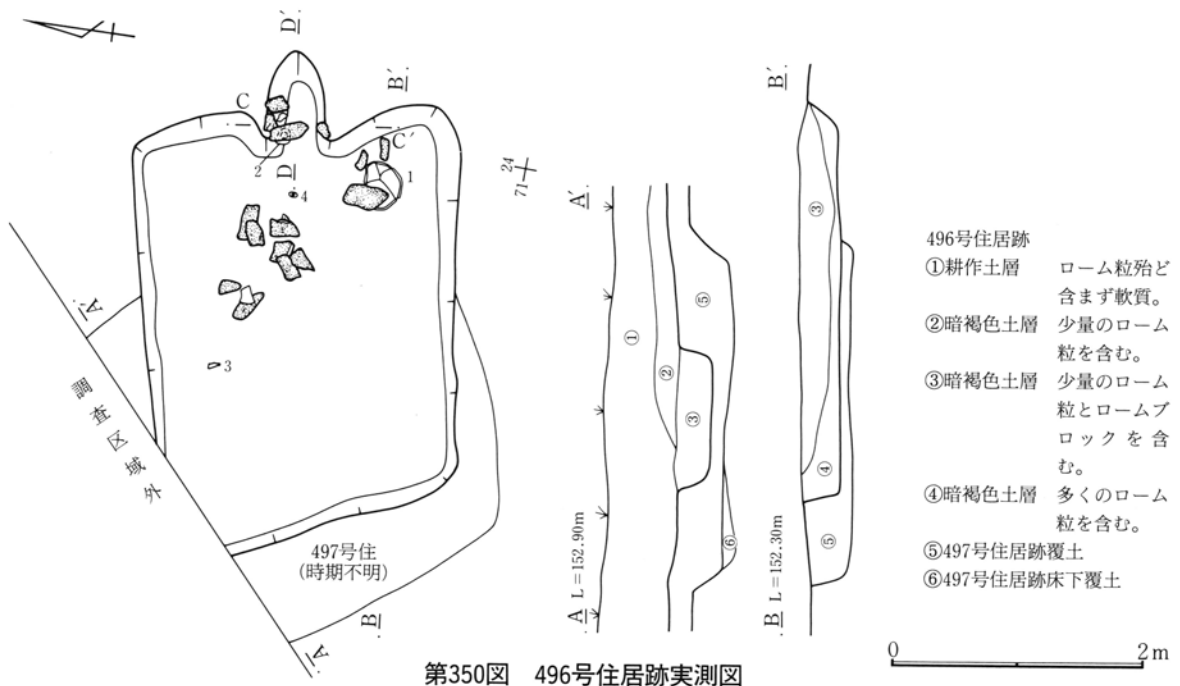
遺物 石が多く出土している。鎌や紡錘車が注目される。

(竈)

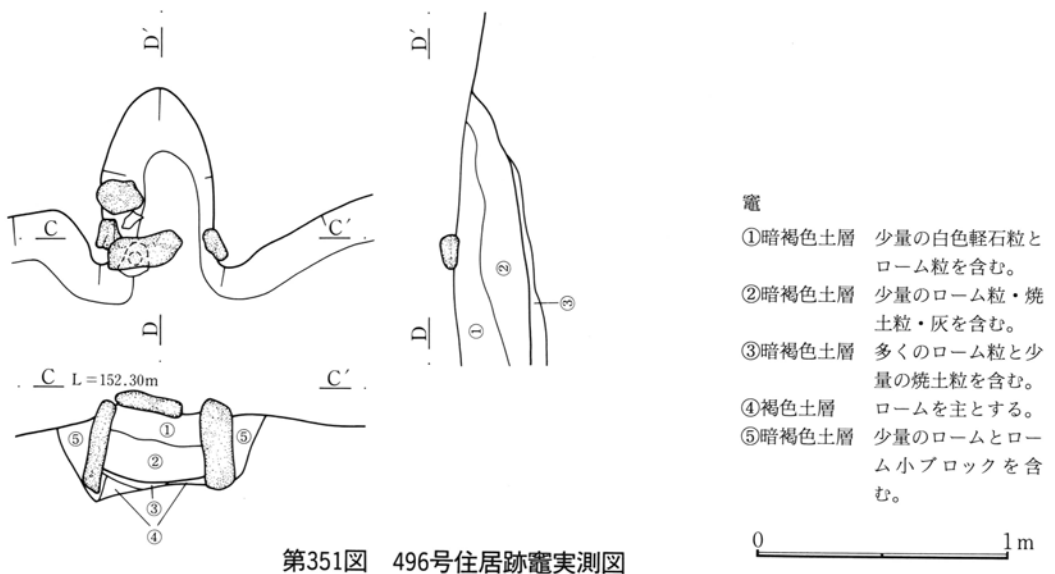
位置 東壁面を掘り込んで造られている。住居が小さいためか焚口部分は床面上に位置するが、燃焼部の多くと煙道部が壁面を掘り込んでいる。

構造 竈内や竈手前の床面から多くの石が出土しているため、石を多く使用して造られている竈と思われる。焚口の両袖石がほぼ据えられた状態で残っている。袖石の上に石が載っていたが、やや短く天井石とは特定できない。床面に散乱している大きな石の中に含まれているものと思われる。竈内から焼土粒の出土は少ない。

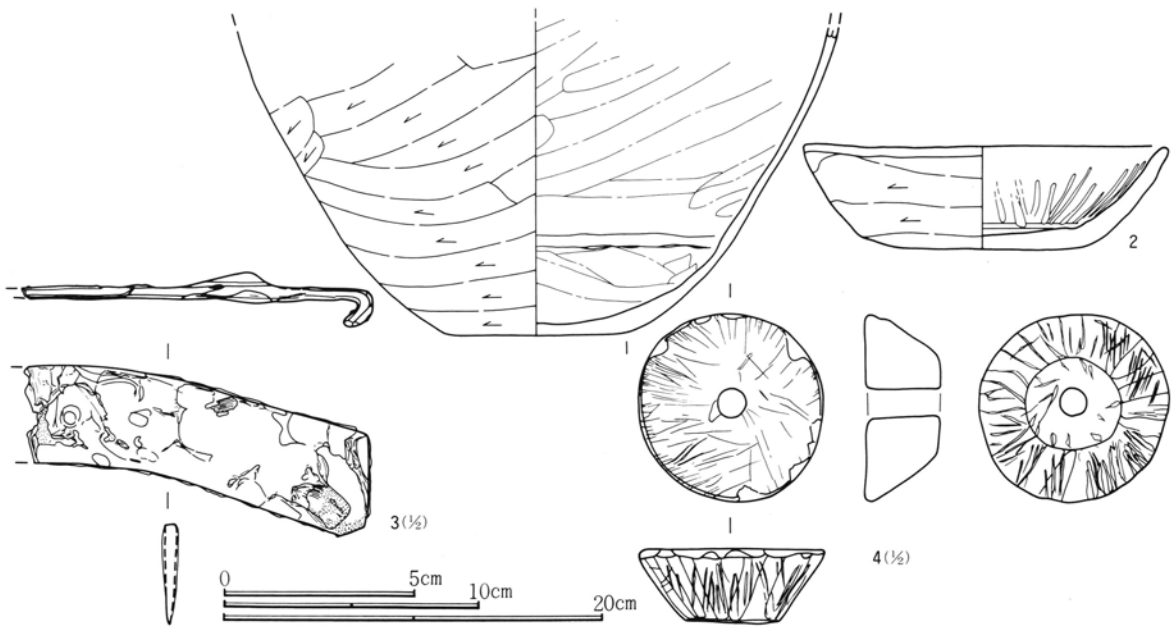
規模 煙道方向85cm、燃焼部幅38cmである。



第350図 496号住居跡実測図



第351図 496号住居跡竈実測図



第352図 496号住居跡出土遺物実測図

496号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
352-1	土 師 器 壺	床面-35 胴下~底部 ほぼ完形	口 — 高 — 底 —	①密、1~2mmの砂粒を大量に含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面ナデで削りの痕跡なし。内面ナデ。胴部外面へら削り、砂粒の移動少なく器表面密。胴下半部に肉厚部分が1周、接合の痕を示す。
352-2 101	土 師 器 坏	床面直上 1/2残存	口 14.1 高 4.1 底 9.2	①やや粗、1~2mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。体部下半へら削り。口縁部~内側底面ナデにより器表面密。内面に多くの暗文あり。
352-3 114	鉄 製 品 鎌	床面+22	長 (8.9) 幅 2.6 厚 0.4 重 29.6		先端約半分が欠損、他の部分の残りは良好である。柄の付く部分の上部分を強く内側に折り曲げている。
352-4 118	石 製 品 紡 錘 車	床面+3	径 5.0/2.5 孔径 0.7 厚 1.9 重 64.4 滑石片岩		広面、狭面は磨かれて光沢を持つ。側面は鉄製工具で細長く削った後に工具で浅く乱雑に削っている。

507号住居跡 (第353~355図、図版54・55・101・102)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、55-28グリッドに位置する。

概要 北東部分で古墳時代の666号住居とまた南東部分で古墳時代の504号住居と重複している。いずれの住居よりも本住居が新しく、他の2軒を床下部分まで深く掘り込んでいる。3軒の新旧関係は666→504→507号住居である。また住居中央部分を水道管理設に伴い床下部分まで深く掘り込まれ、水道管の両側を33・34号溝があり、本住居の覆土上面が掘り込まれている。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを含む堅い土で造られている。貯蔵穴が竈の右側に、また柱穴は住居中央ではなくやや南側に片寄った位置に4本掘られている。

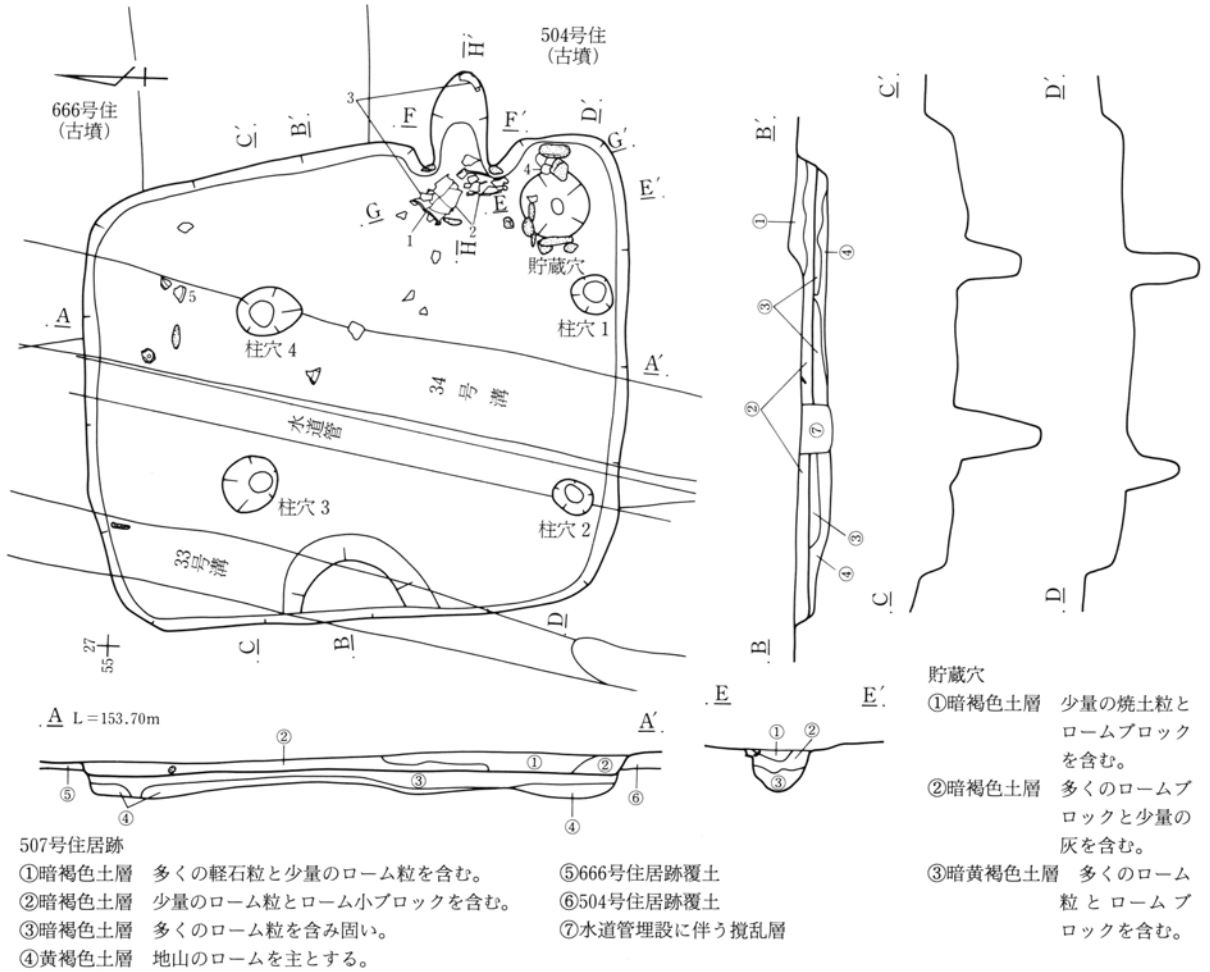
規模 東西3.60m、南北4.32mである。壁高は残りが良く他の住居と重複していない東壁面部分で19cmである。貯蔵穴は径54cm深さ50cm、柱穴1は径34cm深さ73cm、柱穴2は径32cm深さ58cm、柱穴3は径44cm深さ85cm、柱穴4は径52cm深さ67cmである。

遺物 竈内及び手前部分から甕の破片が多く出土している。

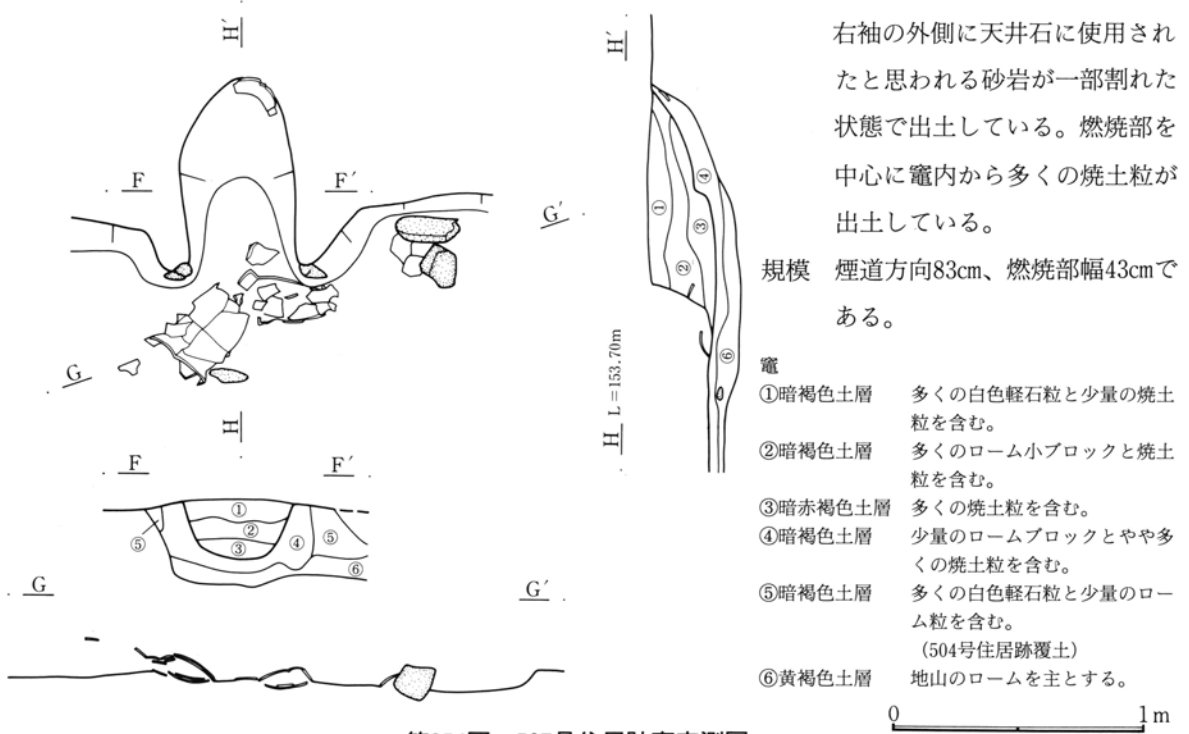
(竈)

位置 東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。焚口部分と燃焼部の多くが床面上に造られており、燃焼部の一部と煙道部が壁面を掘り込んでいる。

構造 504号住居の暗褐色土の覆土を掘り込んで竈が造られている。両袖石がほぼ据えられた状態で出土し、



第353図 507号住居跡実測図



第354図 507号住居跡竈実測図



第355図 507号住居跡出土遺物実測図

507号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
355-1 101	土師器 甕	床面直上 ほぼ完形	口 22.2 高 34.7 底 4.5	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラナデ、砂粒の移動ほとんどみられない。 胴部内面中央部下に接合痕。 胴部外面下半に多くの粘土の付着あり。
355-2 102	土師器 甕	床面直上 胴部 $\frac{1}{2}$ 他ほぼ完形	口 21.8 高 33.3 底 5.2	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り、小さな砂粒が多く移動している。 内面ナデにて器表面密。
355-3 102	土師器 甕	床面直上 口縁部 $\frac{1}{2}$ 底部 $\frac{1}{2}$	口 19.6 高(30.0) 底 5.0	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面～胴部外面ヘラ削り、頸部で削られていない部分との境に段を持つ。 口縁部に輪積痕。図土復元。
355-4	土師器 坏	床面+5 口縁部 $\frac{1}{4}$ 底部 $\frac{1}{2}$	口(10.7) 高 3.6 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、削りの単位不明瞭。 内面ナデにて器表面密。
355-5	土師器 坏	床面+8 $\frac{1}{2}$ 残存	口(17.6) 高 — 底 —	①密、2～3mmの赤色粒と長石粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③赤褐色	底面ヘラ削り後、全面ヘラ磨き。 内側底面に縦と横方向の暗文状の磨き。 503住の2とほぼ同じ。

516号住居跡 (第356～358図、図版55・102)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、59-26・27グリッドに位置する。

概要 古墳時代の506号住居と重複しており、本住居は506号住居の北東部分を床下まで深く掘り込んで造られている。住居東側部分は南北方向の32号溝により床下部分まで掘り込まれている。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを含む土で造られている。小さな貯蔵穴が竈の左側に掘られている。床下調査によって多くの小穴が確認されたが、明確な柱穴は確認できなかった。

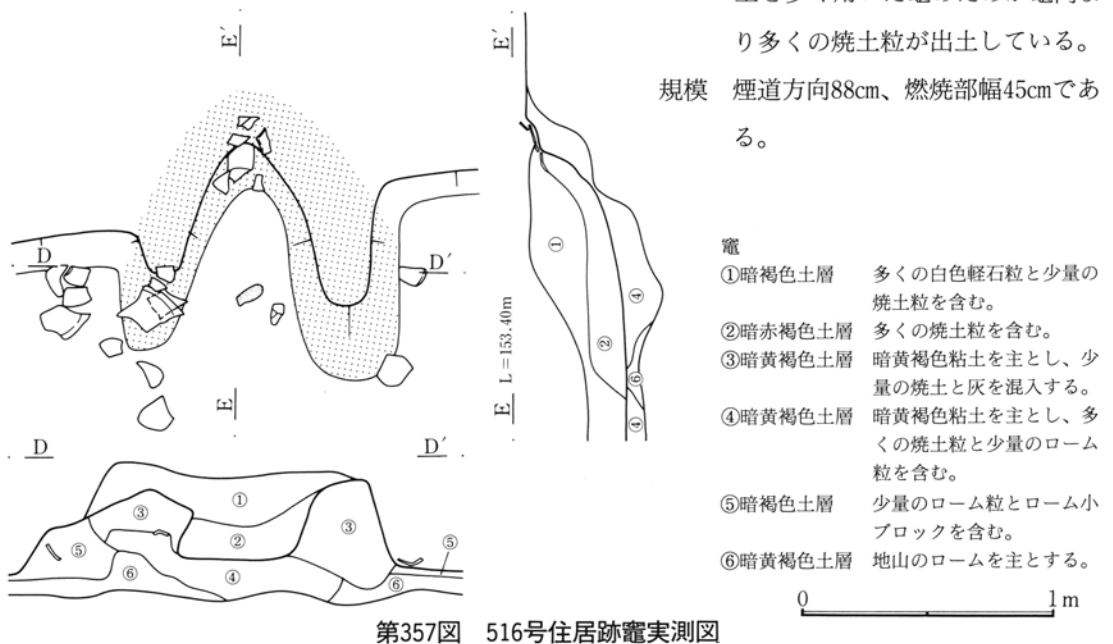
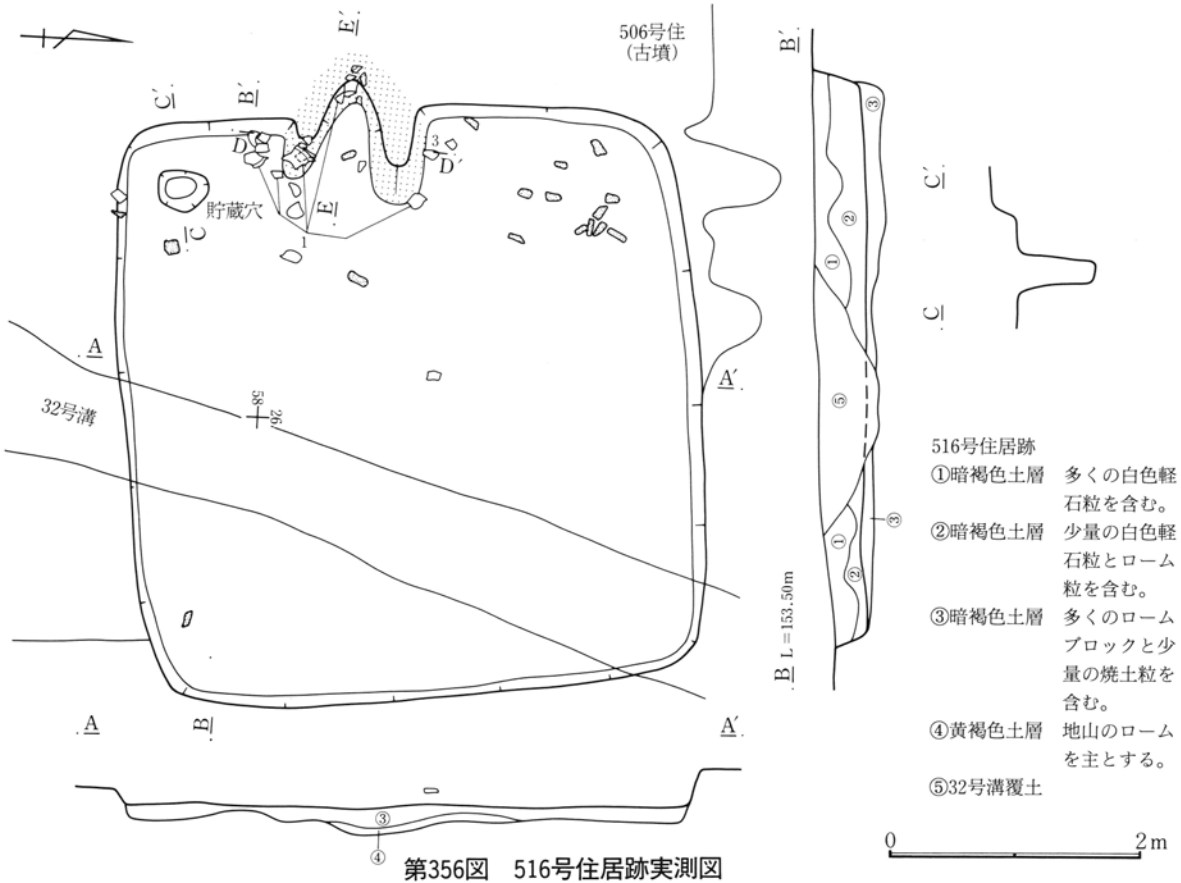
規模 東西4.52m、南北4.50mである。壁高は残りが良い北西コーナー部分で37cmである。貯蔵穴は径42cm深さ64cmである。

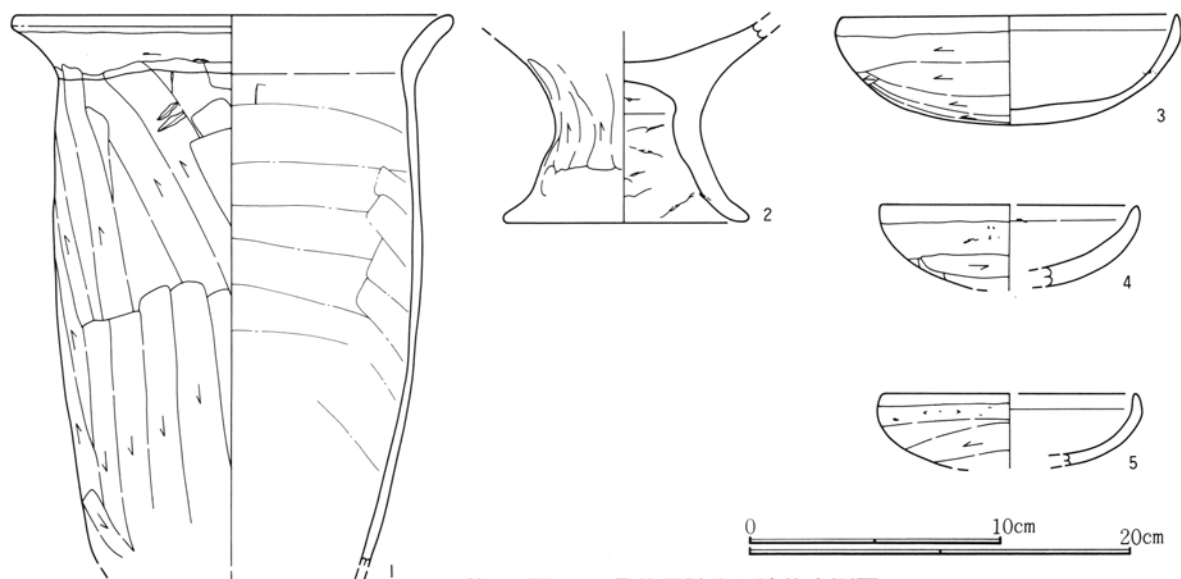
遺物 竈付近から破片が多く出土している。

(竈)

位置 西壁面の南寄りを掘り込んで造られている。焚口部分と燃烧部の多くが床面上に造られており、燃烧部の一部と煙道部が壁面を掘り込んでいる。

構造 506号住居の覆土では竈を造るのに適さないためか、あらかじめ506号住居の覆土を掘り込み、暗黄褐色粘土を持ち込み、その粘土を掘り込んで竈が造られている。袖石や天井石等は出土していない。粘





第358図 516号住居跡出土遺物実測図

516号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
358-1 102	土師器 甕	竈内 口～胴上完 胴下半½	口 23.5 高 — 底 —	①粗、2～3mmの砂粒を多量に含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラナデ、砂粒の移動少なく器表面比較的密。 内面ナデにて器表面密。
358-2	土師器 高 坏?	覆土 坏底～脚完 形	口 — 高 — 脚径9.5	①粗、2～3mmの砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	胎土が粗く器肉が厚いため高坏としては疑問も残るが、坏内側底面の器表は密である。
358-3 102	土師器 坏	竈内 ½残存	口 13.2 高 4.3 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色、一部黒色	底面ヘラ削り、削りの単位比較的明瞭。 内面ナデにて器表面密。
358-4	土師器 坏	覆土 ½残存	口(10.0) 高・底—	①密、2～3mmの赤色粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。内側底面ナデにて器表面密。 雲母粒を多く含む。
358-5	土師器 坏	覆土 ½残存	口(10.2) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底面弱いヘラ削り、削りの単位不明瞭。 内面ナデにより器表面密。

522号住居跡 (第359～361図、図版55・102・128)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、60-13・14グリッドに位置する。

概要 南端部分で古墳時代の523号住居と重複しており、本住居は523号住居の北側部分を床下まで深く掘り込んで造られている。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを含む土で造られている。床下調査によっても貯蔵穴や柱穴は掘られていない。南側の床面下に大きな床下土坑が掘られている。

規模 東西3.65m、南北3.75mである。壁高は残りが良い北東コーナー部分で51cmである。

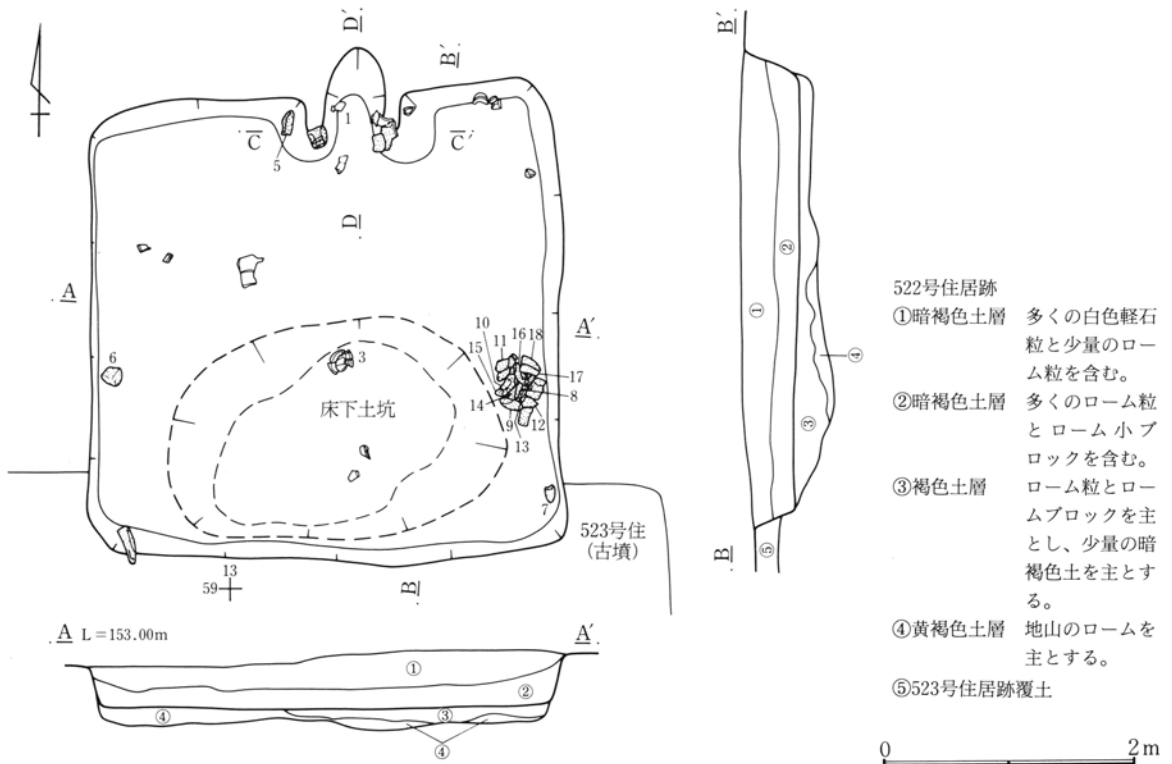
遺物 東壁付近からこも編み石がまとまって出土している。

(竈)

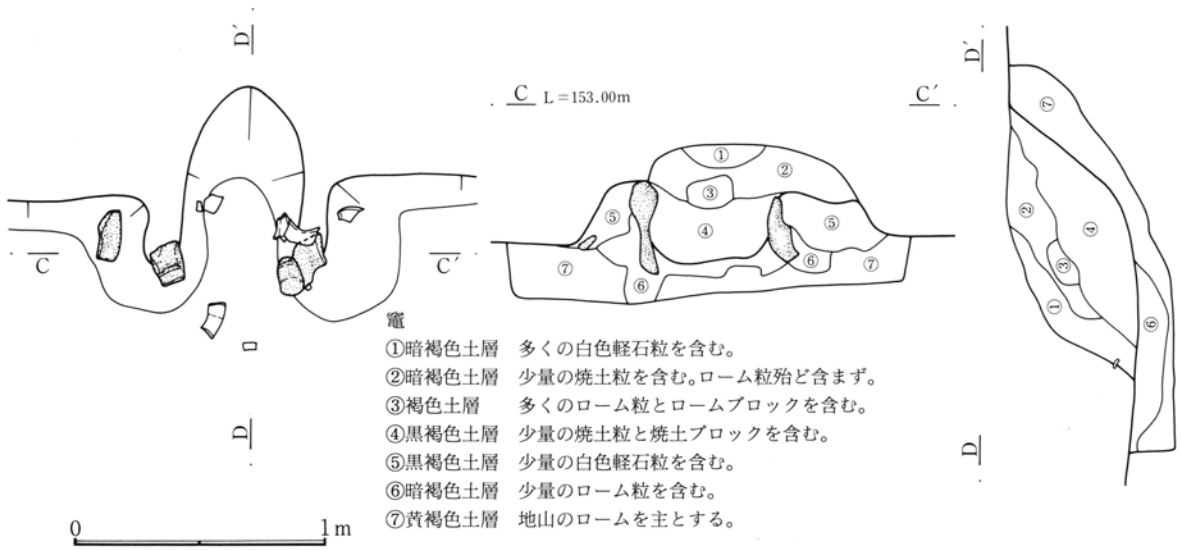
位置 北壁面のやや東寄りを掘り込んで造られている。焚口部分と燃焼部の多くが床面上に造られており、燃焼部の一部と煙道部が壁面を掘り込んでいる。

構造 黒褐色土を主に用いて竈が造られており、ローム粒やロームブロックは多くは使われていない。両袖石がほぼ使用時の状態で出土している。ほかに石は左袖石の外側に薄い小さな石が1個出土しているだけである。ロームや粘質土がほとんど使われていないためか竈内より焼土粒の出土は少ない。

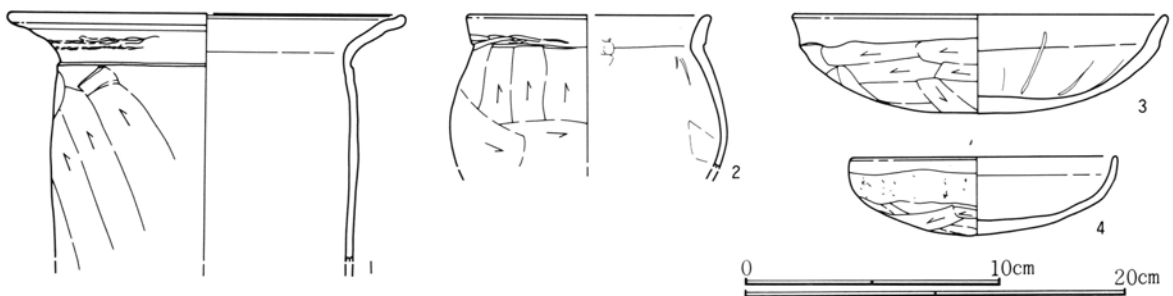
規模 煙道方向88cm、燃焼部幅45cmである。



第359図 522号住居跡実測図



第360図 522号住居跡竈実測図



第361図 522号住居跡出土遺物実測図



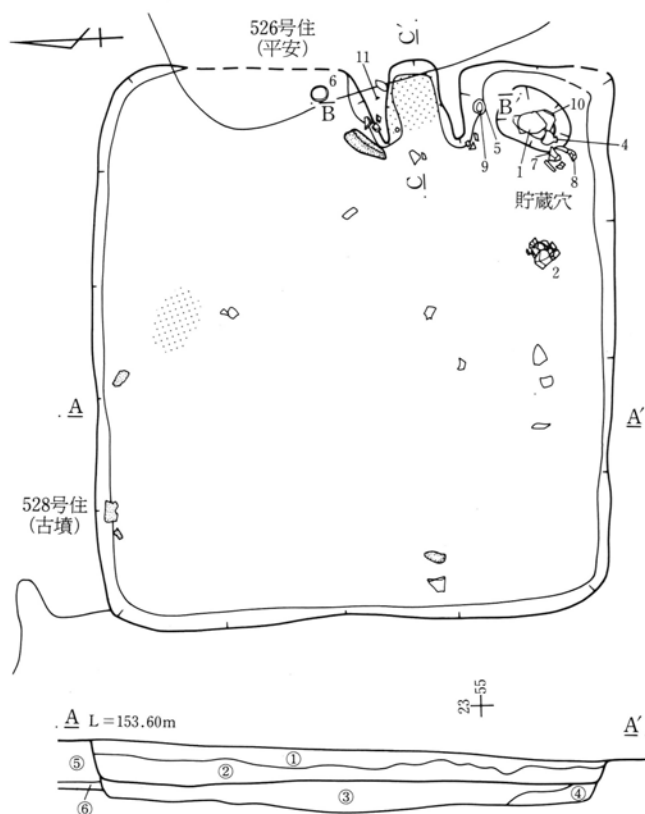
522号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
361-1	土師器 甕	床面+6 1/2残存	口(21.0) 高・底一	①密、1mm以下の砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部ヘラ削り。胴部と口縁部との境に段を持つ。内外面とも多くの砂粒が目立つ。
361-2	土師器 小型甕	竈掘り方 口縁~体部	口(12.6) 高・底一	①やや粗、1~2mmの砂粒を多く含む②酸化焰、硬質③外面黒褐色	内面赤褐色。胴部外面ヘラ削り。削られていない口縁部との境に段を持つ。内側器表面密。
361-3 102	土師器 坏	床面+2 1/2残存	口 14.8 高 3.9	①密、1~2mmの赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質③にぶい赤褐色	底面ヘラ削り。 内面にV字状の工具を用いた放射状の刻目文様。
361-4 102	土師器 坏	床面+24 1/2残存	口 10.4 高 3.1	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。内面ナデにて器表面密。黒斑全く認められず。
遺物番号	図版番号	器種	法	量(cm)(g)	石 材 ・ 備 考
5	128	こも編み石	長 15.5 幅 7.2 厚 3.5 重 490		絹雲母石墨片岩
6	128	こも編み石	長 13.8 幅 6.7 厚 4.1 重 535		点紋絹雲母石墨片岩、片側面凹状を呈す。
7	128	こも編み石	長 13.0 幅 6.1 厚 3.6 重 345		絹雲母石墨片岩
8	128	こも編み石	長 17.5 幅 7.3 厚 3.1 重 660		緑簾緑泥片岩
9	128	こも編み石	長 17.3 幅 6.9 厚 4.1 重 760		緑簾緑泥片岩
10	128	こも編み石	長 17.0 幅 7.8 厚 3.5 重 575		絹雲母石墨片岩
11	128	こも編み石	長 15.5 幅 8.0 厚 3.4 重 710		点紋絹雲母石墨片岩
12	128	こも編み石	長 13.8 幅 5.0 厚 4.6 重 515		緑泥片岩
13	128	こも編み石	長 13.6 幅 4.8 厚 3.1 重 305		点紋絹雲母石墨片岩
14	128	こも編み石	長 11.7 幅 5.5 厚 4.0 重 430		石墨絹雲母片岩
15	128	こも編み石	長 17.5 幅 7.9 厚 2.7 重 585		絹雲母石墨片岩
16	128	こも編み石	長 15.9 幅 6.6 厚 3.6 重 515		絹雲母緑簾緑泥片岩
17	128	こも編み石	長 15.5 幅 6.7 厚 4.7 重 590		砂岩
18	128	こも編み石	長 16.7 幅 7.2 厚 4.6 重 630		砂岩

527号住居跡 (第362~364図、図版56・102・118)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、55・56-24グリッドに位置する。

概要 北側で古墳時代の528号住居と重複しており、本住居は528号住居の南側部分を床下まで深く掘り込んで造られている。また東側で平安時代の526号住居と重複しており、竈を含む東側部分を床面近くまで



掘り込まれている。北壁中央部分に近い床面に楕円形に焼土化した部分が残っている。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを含む土で造られている。貯蔵穴は掘られているが、床下調査によっても柱穴は確認できなかった。

規模 東西4.48m、南北4.12mである。壁高は残りの良い北西コーナー部分で30cmである。貯蔵穴は径59cm、深さ41cmである。

- 527号住居跡
- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒と少量のローム粒を含む。
  - ②暗褐色土層 少量のローム粒とロームブロックを含む。
  - ③褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
  - ④黄褐色土層 より多くのローム粒とロームブロックを含む。
  - ⑤528号住居跡覆土
  - ⑥528号住居跡床下覆土

第362図 527号住居跡実測図

0 2m

第4章 奈良時代の遺構と遺物

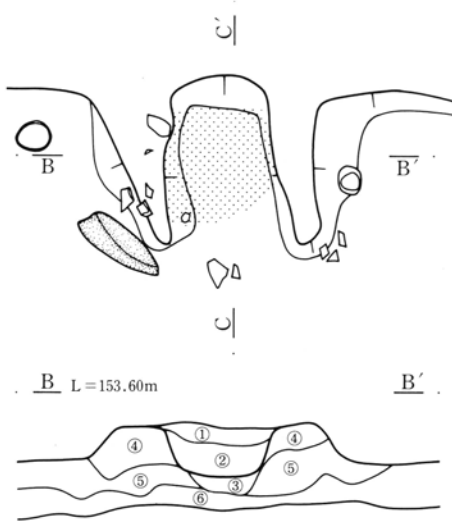
遺物 貯蔵穴内より土器が多く出土している。紡錘車が注目される。

(竈)

位置 東壁面のやや南寄りを掘り込んで造られている。燃烧部の一部から煙道部にかけて平安時代の526号住居により削られて残りが悪い。燃烧部の多くは床面上に位置している。

構造 暗褐色土を主に用いて竈が造られており、ローム粒やロームブロックは多くは使われていない。袖石等も出土していない。ロームや粘質土がほとんど使われていないためか、竈内より焼土粒の出土は少ない。

規模 煙道方向不明、燃烧部幅39cmである。

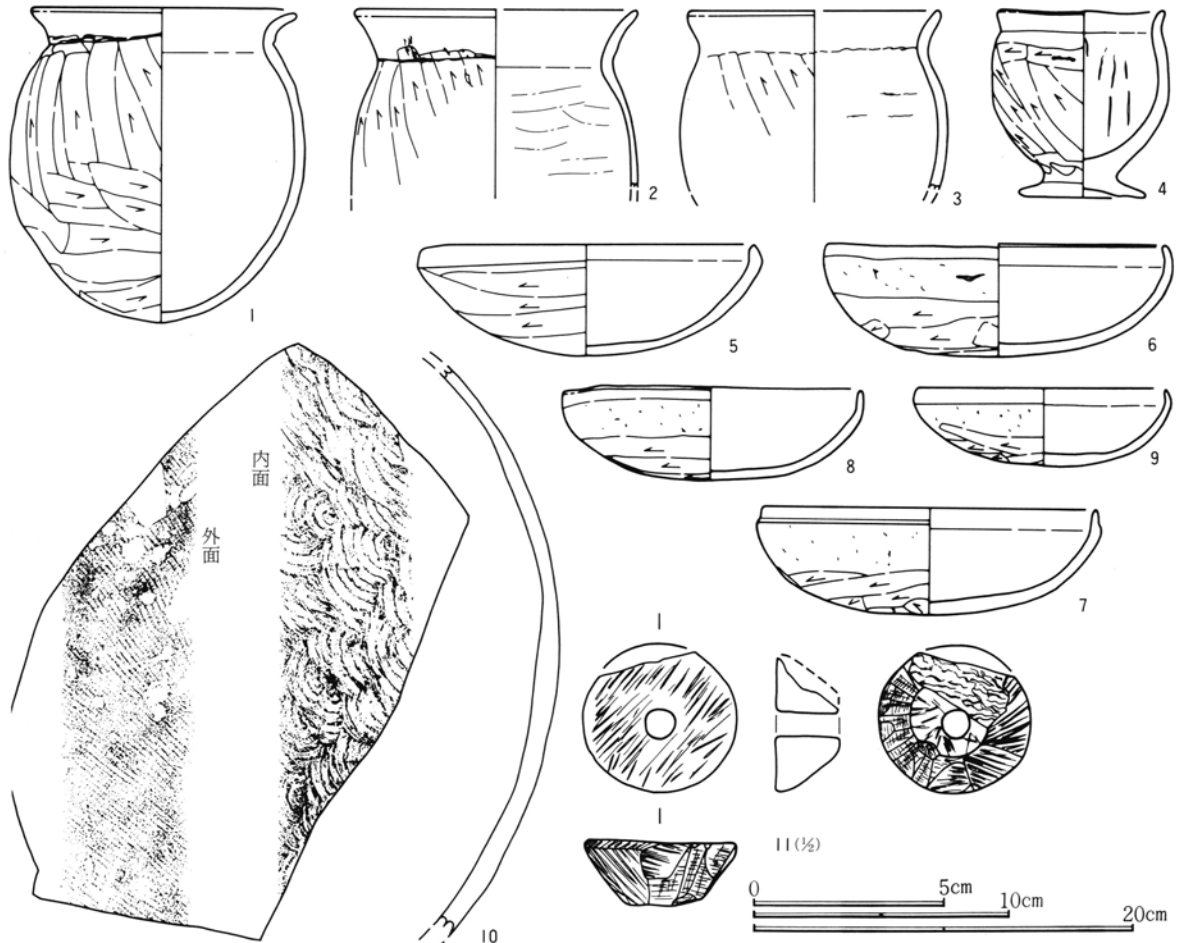


竈

- ①暗褐色土層 少量のローム粒とロームブロックを含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ④暗褐色土層 少量の焼土ブロックを含む。
- ⑤暗褐色土層 多くのロームブロックと少量の焼土粒を含む。
- ⑥褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

0 1m

第363図 527号住居跡竈実測図



第364図 527号住居跡出土遺物実測図

527号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
364-1 102	土師器 小型甕	床面-2 ほぼ完形	口 13.6 高 16.7 底 -	①密、1mm以下の砂粒と片岩粒を多く含む。②酸化焰、硬質③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り、小さな砂粒が移動し器表面やや粗い。 内面ナデにて器表面密。
364-2	土師器 甕	床面直上 口~胴上1/2	口(14.9) 高・底-	①粗、1~3mmの砂粒を大量に含む②酸化焰、硬質③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り、多くの砂粒が目立ち器表面粗い。 内面ナデにて器表面密。
364-3	土師器 小型甕	覆土・ 口縁~胴上 部1/2	口(13.2) 高 - 底 -	①粗、1~3mmの片岩粒を多く含む。②酸化焰、硬質③内面黒褐色、外面赤褐色と黒褐色混	胴部外面ヘラ削り。口縁~胴部内側ナデにより器表面密であるが、多くの片岩粒が目立つ。 内外面吸炭により黒褐色を呈する。
364-4 102	土師器 台付小型 甕	床面直上 高台1/2欠 他完形	口 8.8 高 9.9 底 -	①密、1mm以下の砂粒を多く含む②酸化焰、硬質③にぶい赤褐色	台部ナデ。甕胴部外面ヘラナデ。 内面ナデにて器表面密。 実用品として使用されていた痕跡を残す。
364-5 102	土師器 坏	床面-2 完形	口 13.2 高 4.5 底 -	①密、1mm以下の砂粒を少量含む、やや粉状。②酸化焰、硬質③橙色	底面ヘラ削り、胎土が密で削りの単位不明瞭。 内面ナデにて器表面密。
364-6 102	土師器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 13.4 高 4.5 底 -	①密、角閃石をやや多く含む。②酸化焰、硬質③橙色	底面ヘラ削りであるが、内外面ともに器表面が粗れている。削りの単位は明瞭でない。
364-7 102	土師器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 13.0 高 4.2 底 -	①密、1mm以下の砂粒を少量含む②酸化焰、硬質③橙色	底面ヘラ削り、砂粒の移動少なく器表面比較的密である。内面ナデにて器表面密。 黒斑全く認められず。
364-8 102	土師器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 11.8 高 3.7 底 -	①密、1mm以下の砂粒を少量含む②酸化焰、硬質③橙色	底面ヘラ削り、削りの単位は明瞭でない。 体部ナデ。内面ナデにて器表面密。 黒斑認められず。
364-9 102	土師器 坏	床面-2 完形	口 9.8 高 3.0 底 -	①密、1mm以下の砂粒を少量含む②酸化焰、硬質③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。 内面ナデにて器表面密。 黒斑全く認められず。
364-10	須恵器 甕	床面-2 胴部片	口 - 高・底-	①粗、1~2mmの砂粒を少量含む②酸化焰、硬質③淡黄色	内面青海波文。 外面平叩目。
364-11 118	石製品 紡錘車	床面+16	径 4.2/2.2 孔径 0.7 厚 1.7 重 30.4		滑石片岩。広面荒砥削り、狭面にやや放射状の線刻。 側面刃物による細長い削り、その後約半分荒砥削り。

543号住居跡（第365~367図、図版56・102・543）

位置 本住居跡は第9次調査区にあり、53-15グリッドに位置する。

概要 5軒の住居が重複している住居群中の1軒である。本住居が最も新しく掘り込みも深い。東側で奈良時代の546号住居を、西側で古墳時代の544・547号住居をまた南側で古墳時代の545号住居を床下部分まで深く掘り込んでいる。5軒の新旧関係は544→547→545→546→543号住居である。新旧の竈が東壁面に造られている。北側の竈は袖部分が床面上に残っているが、南側の竈は袖部分がはずされて残っていない。そこで北側の竈を新東竈、南側の竈を旧東竈と呼称する。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを含む土で造られている。柱穴や貯蔵穴は掘られていない。床下調査により3本の床下土坑が掘られていることが確認された。床面からの深さを数値で記した。

規模 東西4.44m、南北3.90mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で49cmである。

遺物 旧東竈内より土師器の甕や坏の破片が出土している。紡錘車が注目される。

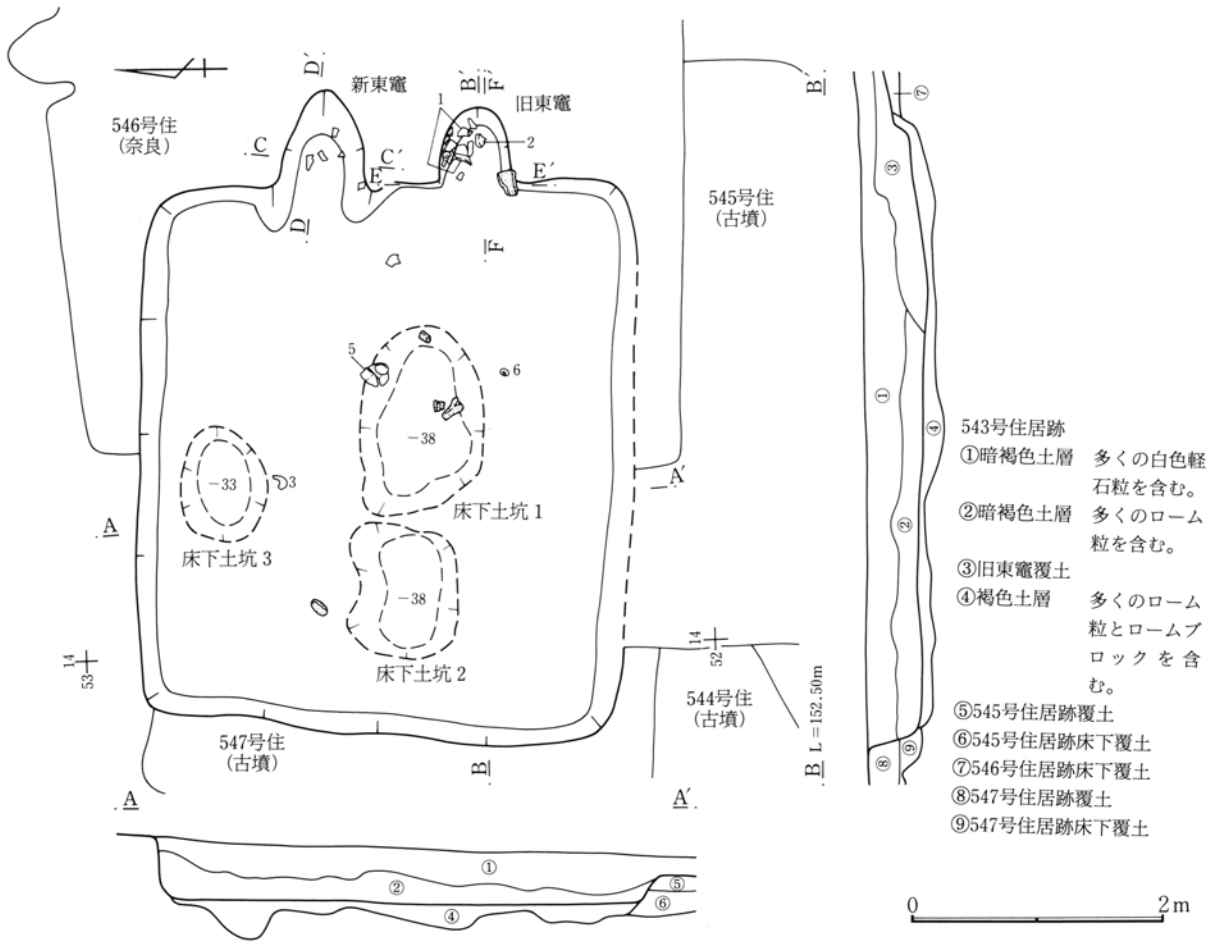
（新東竈）

位置 東壁面の北側を掘り込んで造られている。焚口部分は床面上に位置するが、燃烧部の多くは壁面を掘り込んで造られている。

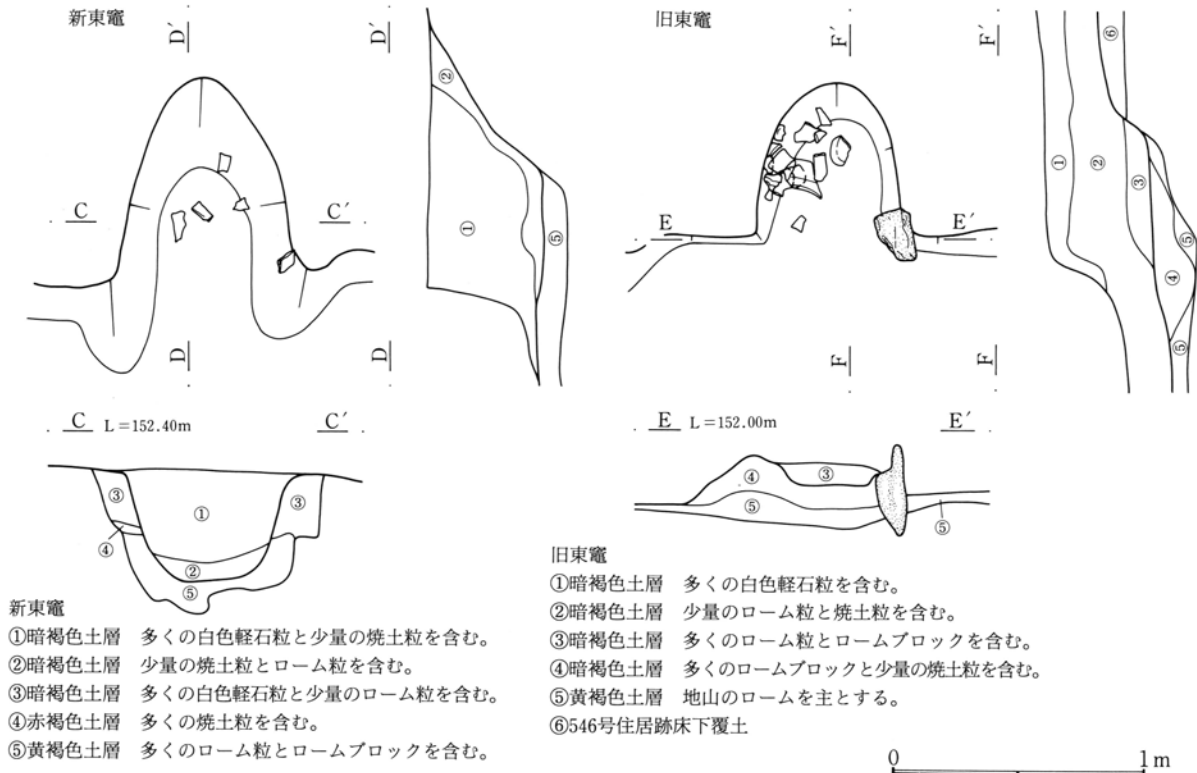
構造 546号住居の覆土を掘り込んで竈が造られているため、竈全体でローム粒を含む量が少ない。その部分に粘土質の土を持ち込むような特別なことは行っていない。袖石等は使われていない。ロームや粘質土がほとんど使われていないためか、竈内より焼土粒の出土は少ない。

規模 煙道方向115cm、燃烧部幅56cmである。

第4章 奈良時代の遺構と遺物



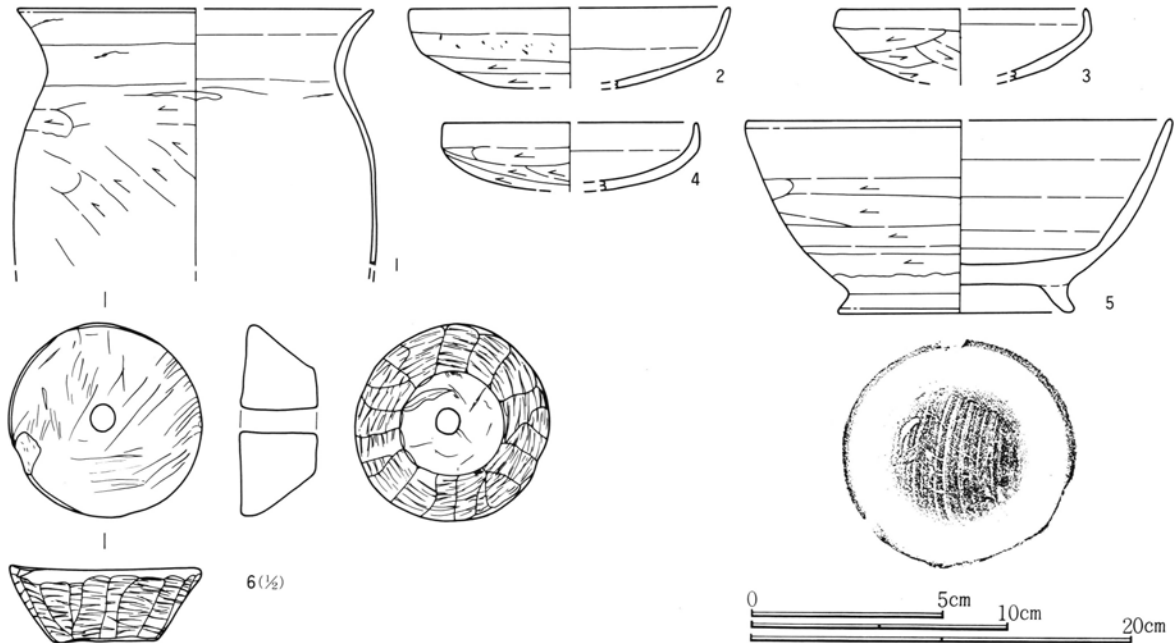
第365図 543号住居跡実測図



第366図 543号住居跡新東竈・旧東竈実測図

(旧東竈)

概要 東壁面の南側を掘り込んで造られている。床面上に位置する袖部分と燃烧部の一部は削り取られて残っていない。546号住居の覆土を掘り込んで竈が造られているため 竈全体でローム粒を含む量は少ない。しかし燃烧部床面付近から多くのローム粒やロームブロックが出土しているため、天井部分には多くのロームが使用されていたものと思われる。右袖がほぼ据えられた状態で出土しているが、左袖石は残っていない。竈内より焼土粒の出土は少ない。



第367図 543号住居跡出土遺物実測図

543号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
367-1 102	土師器 甕	竈内 口縁～胴部 1/2	口(18.7) 高— 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
367-2	土師器 坏	竈内 1/2残存	口(12.8) 高— 底—	①密、多くの角閃石を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、削りの単位不明瞭。 内面ナデ。 器表面全体が粗れている。
367-3 102	土師器 坏	床面+12 口縁部1/2 底部1/4	口(9.8) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む、角閃石含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、削りの単位比較的明瞭。 内面ナデにて器表面密。
367-4	土師器 坏	覆土 小破片	口(10.2) 高— 底—	①密 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、ヘラの単位は比較的明瞭である。
367-5 102	須恵器 埴	床面直上 口縁部1/2 底部完形	口(16.9) 高 7.5 底 9.3	①密、1mm以下の長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面静止糸切痕。高台は細く高い。 体部外面ヘラ削り。 内側底面と体部との境にわずかに段を持つ。
367-6 118	石製品 紡錘車	床面+27	径 5.1/2.8 孔径 0.6 厚 1.9 重 71.8		広面と狭面とも磨かれて光沢を持つ。 側面は荒砥削り。

546号住居跡 (第368～370図、図版56・57・103・128)

位置 本住居跡は第9次調査区にあり、53-15・16グリッドに位置する。

概要 5軒の住居が重複している住居群中の1軒である。本住居は直接には4軒の住居と重複している。南東部分で古墳時代の548号住居を、また南西部分で古墳時代の545号住居を床下部分まで掘り込んでいる。そして西側部分を奈良時代の543号住居により床下部分まで深く掘込まれている。4軒の新旧関係

第4章 奈良時代の遺構と遺物

は548→545→546→543号住居である。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを含む土で造られている。貯蔵穴は掘られていないが、柱穴は4本掘られている。

規模 東西5.00m、南北5.13mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で41cmである。柱穴1は径47cm深さ60cm、柱穴2は径49cm深さ73cm、柱穴3は径56cm深さ83cm、柱穴4は径35cm深さ56cmである。

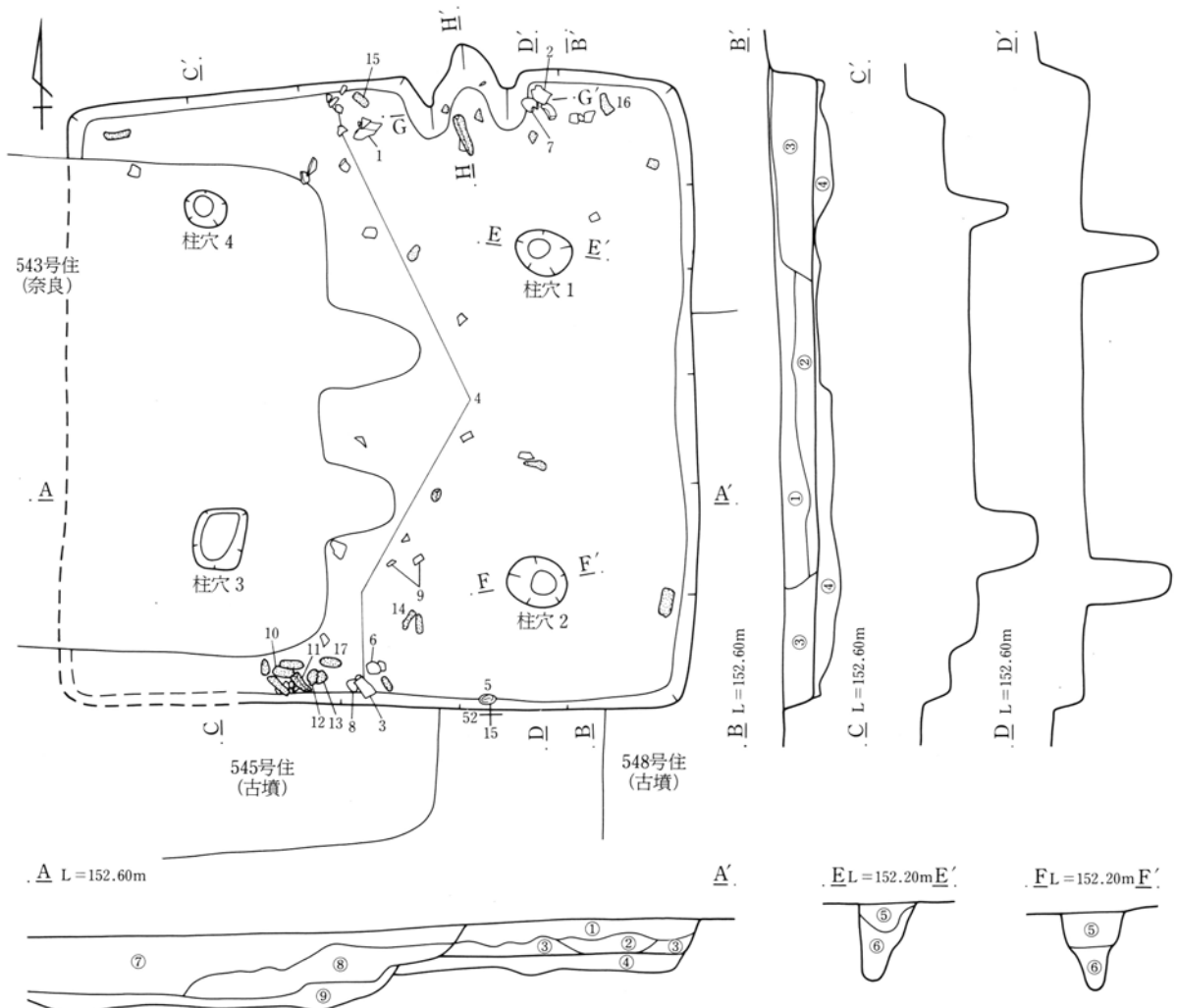
遺物 南壁付近からこも編み石がまとまって出土している。

(竈)

位置 北壁面を掘り込んで造られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 焚口部分から細長い石が出土しているが、天井石ではない。ほかに小さな石も出土しているが、袖石や天井石等は出土していない。多くのローム粒とロームブロックを含む土で造られている。燃焼部床面付近から多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向72cm、燃焼部幅41cmである。



546号住居跡

①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。

②暗褐色土層 多くのローム粒を含む。

③褐色土層 多量のロームブロックとローム粒を含む。

④褐色土層 多くのロームブロックを含む。

⑤暗褐色土層 多くのローム粒と少量の茶褐色土を含む。

⑥褐色土層 ロームブロックを主とする。

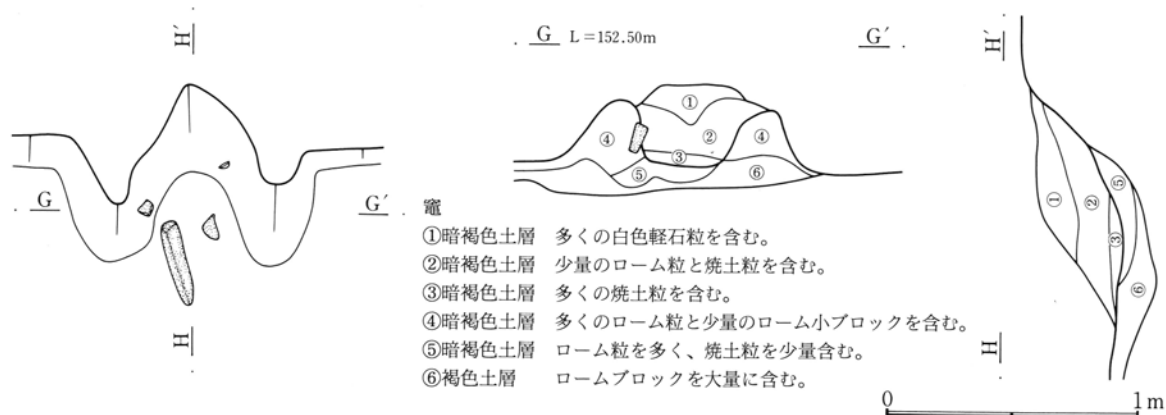
⑦543号住居跡覆土

⑧543号住居跡覆土

⑨543号住居跡床下覆土

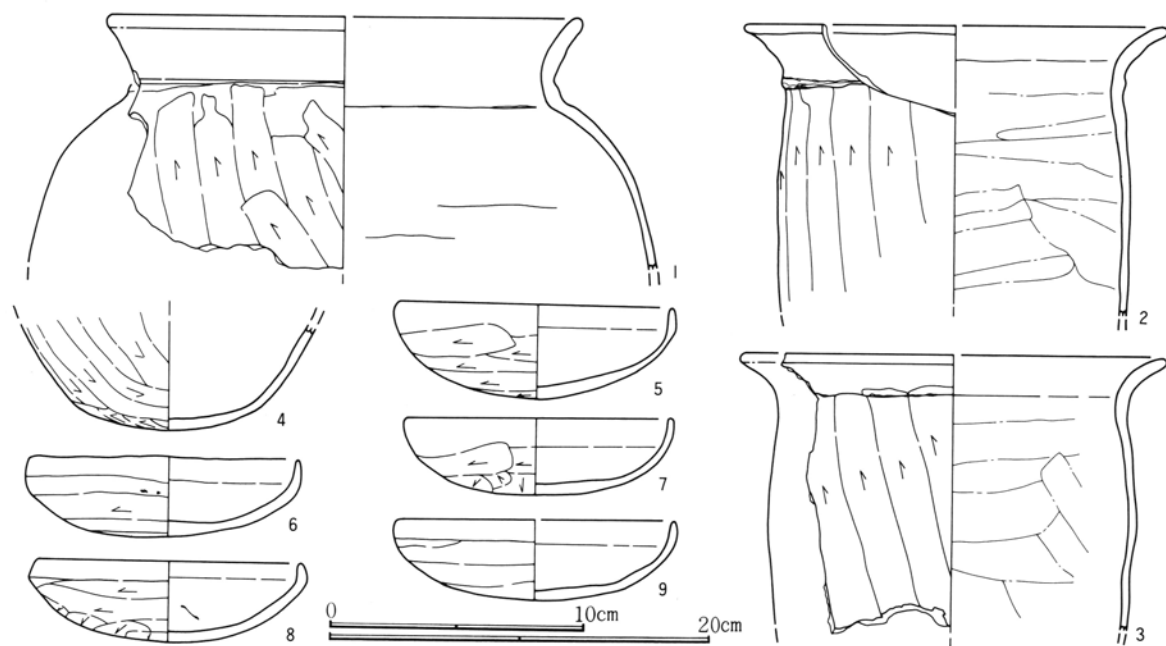
第368図 546号住居跡実測図

0 2m



- 竈
- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
  - ②暗褐色土層 少量のローム粒と焼土粒を含む。
  - ③暗褐色土層 多くの焼土粒を含む。
  - ④暗褐色土層 多くのローム粒と少量のローム小ブロックを含む。
  - ⑤暗褐色土層 ローム粒を多く、焼土粒を少量含む。
  - ⑥褐色土層 ロームブロックを大量に含む。

第369図 546号住居跡竈実測図



第370図 546号住居跡出土遺物実測図

546号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
370-1	土 師器 甕	床面+8 口~胴部 $\frac{1}{4}$	口(25.0) 高・底一	①密、1mm前後の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密であるが粗れている。
370-2	土 師器 甕	床面直上 口~胴上 $\frac{1}{4}$	口(22.0) 高・底一	①粗、2~3mmの砂粒多く赤色粒 少量含む。②酸化焰、硬質③褐色	胴部外面へら削り。口縁部との境に段を持つ。内面ナデにて器表面密。
370-3	土 師器 甕	床面+4 口~胴上 $\frac{1}{4}$	口(22.0) 高・底一	①粗、2~3mmの砂粒大量に含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面へら削り、多くの砂粒が目立つが、移動は少ない。内面ナデにて器表面密。
370-4	土 師器 甕	床面直上 胴下半~ 底部 $\frac{1}{2}$	口 — 高 — 底 —	①密、1~2mmの砂粒を多く、赤 色粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③暗赤褐色	底面と胴部外面へら削り、多くの砂粒が移動し器表面やや粗い。内面ナデにて器表面密。 外面の多くの部分に吸炭が認められる。
370-5	土 師器 坏	床面+8 完形	口 10.7 高 3.7	①密、多くの雲母粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り、削りの単位は比較的明瞭。
370-6	土 師器 坏	床面直上 完形	口 10.5 高 3.2	①密、多くの雲母粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り、削りの単位は比較的明瞭。
370-7	土 師器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 10.4 高 3.1	①密、多くの雲母粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底面へら削り、砂粒の移動は少なく器表面比較的密。 内外面に黒漆と思われる痕跡あり。
370-8	土 師器 坏	床面+2 $\frac{3}{4}$ 残存	口 10.3 高 3.2	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。器表面やや粗い。 口縁~内側底面器表面密。
370-9	土 師器 坏	床面直上 口 $\frac{1}{2}$ ・底 $\frac{3}{4}$	口(10.9) 高 3.2	①密、1mm以下の砂粒を多く含み、 角閃石含む②酸化焰、硬質③褐色	底面へら削りであるが削りの単位不明瞭。 内外の器表面が粗れている。

第4章 奈良時代の遺構と遺物

546号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	図版番号	器種	法	量(cm)(g)				石材・備考
10	128	こも編み石	長 17.0 幅 5.6 厚 5.0 重 565					砂岩
11	128	こも編み石	長 18.4 幅 8.2 厚 4.2 重 860					絹雲母石墨片岩
12	128	こも編み石	長 15.9 幅 6.7 厚 4.8 重 580					点紋絹雲母石墨片岩
13	128	こも編み石	長 15.4 幅 6.1 厚 3.8 重 605					緑簾緑泥片岩
14	128	こも編み石	長 14.8 幅 5.9 厚 3.2 重 500					緑簾緑泥片岩
15	128	こも編み石	長 16.2 幅 6.9 厚 6.6 重 830					点紋絹雲母緑泥片岩
16	128	こも編み石	長 18.4 幅 7.4 厚 3.4 重 680					緑簾緑泥片岩
17	128	こも編み石	長 14.6 幅 7.8 厚 3.6 重 680					緑簾緑泥片岩

550号住居跡 (第371・372図、図版57)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、98・99—22グリッドに位置する。

概要 調査区北西端部分に位置し、道路の拡張に伴う狭い範囲の調査で確認された。竈を含む北側部分の調査であり、南側は調査区域外のため調査できなかった。小さな住居である。図示できる遺物はなかったが、破片より8世紀前期の遺構と判断した。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを含む土で造られている。床下部分に小穴が1本掘られているが、貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模 東西2.41m、南北方向は不明である。壁高は残りの良い北西コーナー部分で26cmである。小穴は径38cm深さ46cmである。

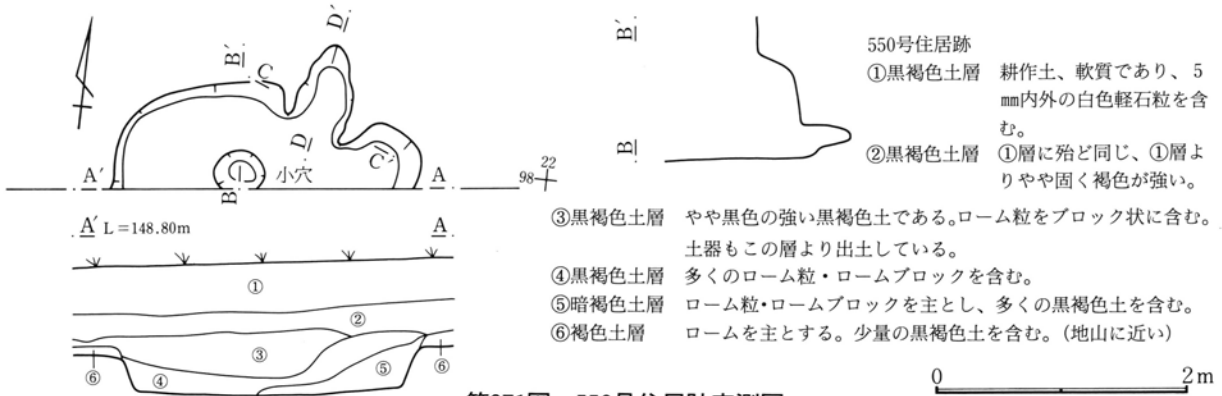
遺物 坏の口縁部がわずかに1片出土しているだけである。

(竈)

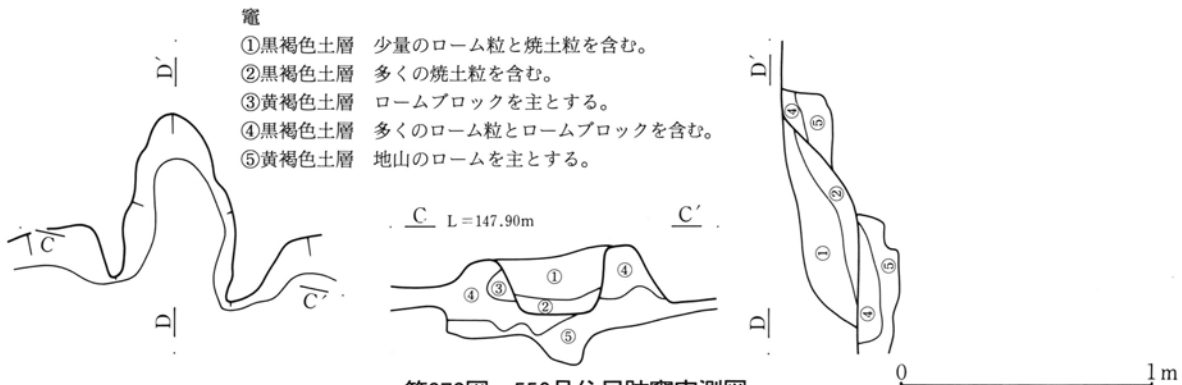
位置 北壁面を掘り込んで造られている。住居が小さいためか焚口部分は床面上に位置するが、燃烧部の多くは壁面を掘り込んで造られている。

構造 竈はロームを多く含む土で造られており、袖石等は出土していない。燃烧部床面付近から多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向73cm、燃烧部幅38cmである。



第371図 550号住居跡実測図



第372図 550号住居跡竈実測図



551号住居跡 (第373~375図、図版57・103・118)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、70-24・25グリッドに位置する。

概要 4軒の住居が重複している住居群中の1軒である。本住居は直接には3軒の住居と重複している。住居の大部分は古墳時代の553号住居を床下部分まで深く掘り込んで造られている。北東コーナー部分を平安時代の554号住居により覆土上面を掘り込まれているが、掘り込みが浅いため住居はほとんど壊されていない。3軒の新旧関係は553→551→554号住居である。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを含む土で造られている。貯蔵穴は掘られていないが、柱穴は4本掘られている。

規模 東西4.20m、南北3.86mである。壁高は残りの良い西壁面部分で76cmである。柱穴1は径44cm深さ71cm、柱穴2は径60cm深さ70cm、柱穴3は径50cm深さ46cm、柱穴4は径40cm深さ61cmである。

遺物 甕や坏が出土している。紡錘車が注目される。

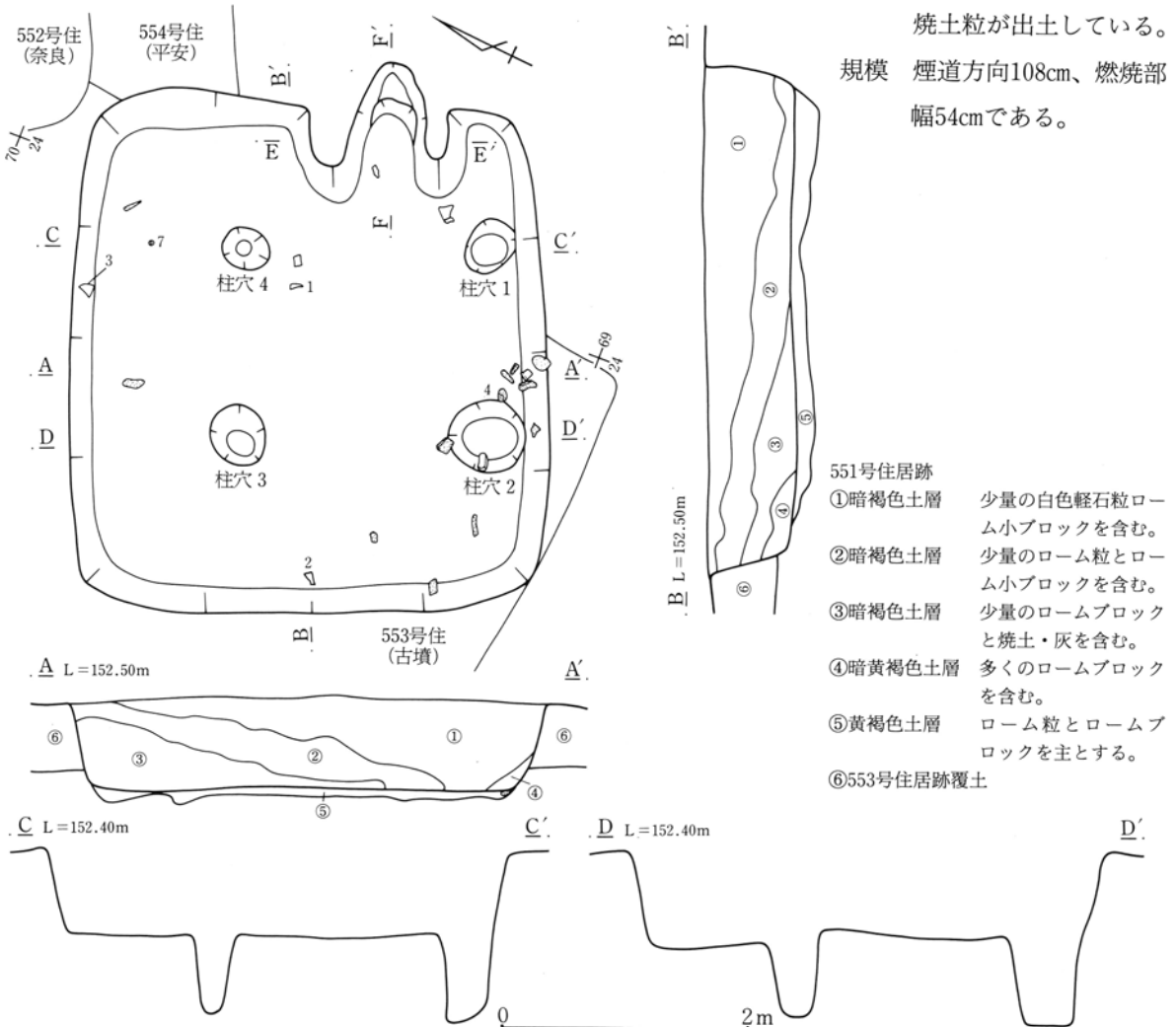
(竈)

位置 東壁面を掘り込んで造られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 暗灰褐色の粘質土を多く用いて竈が築かれている。竈内の天井部崩落土や袖部分からこの粘質土が多く出土している。袖石等を使用されていないようである。粘質土が多く使用されていたためか多くの

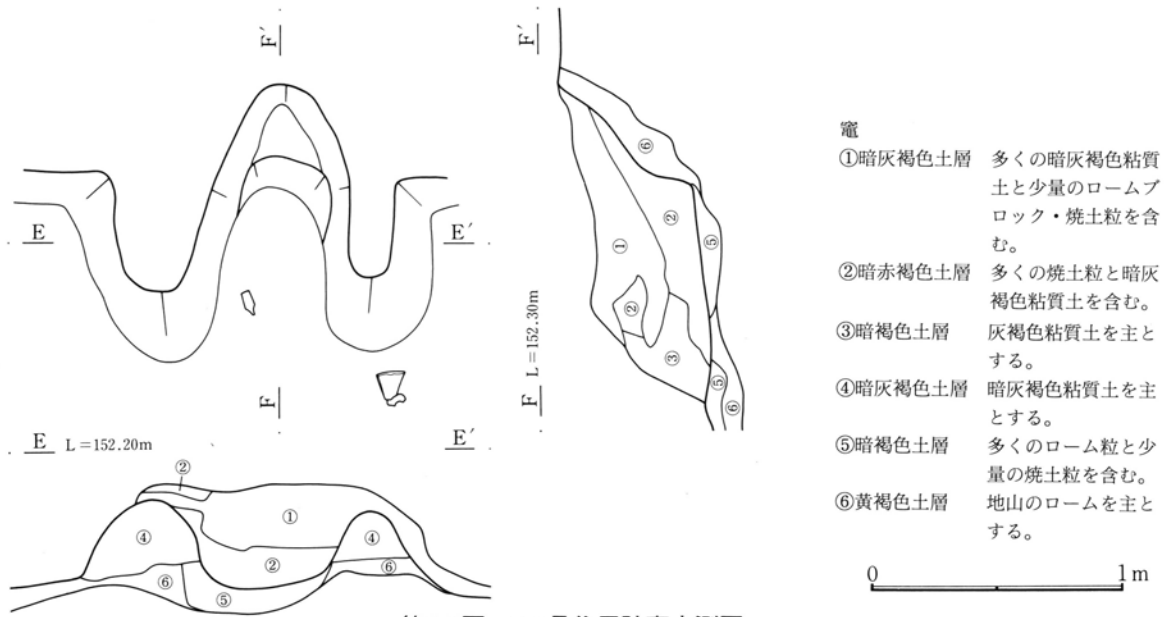
焼土粒が出土している。

規模 煙道方向108cm、燃焼部幅54cmである。

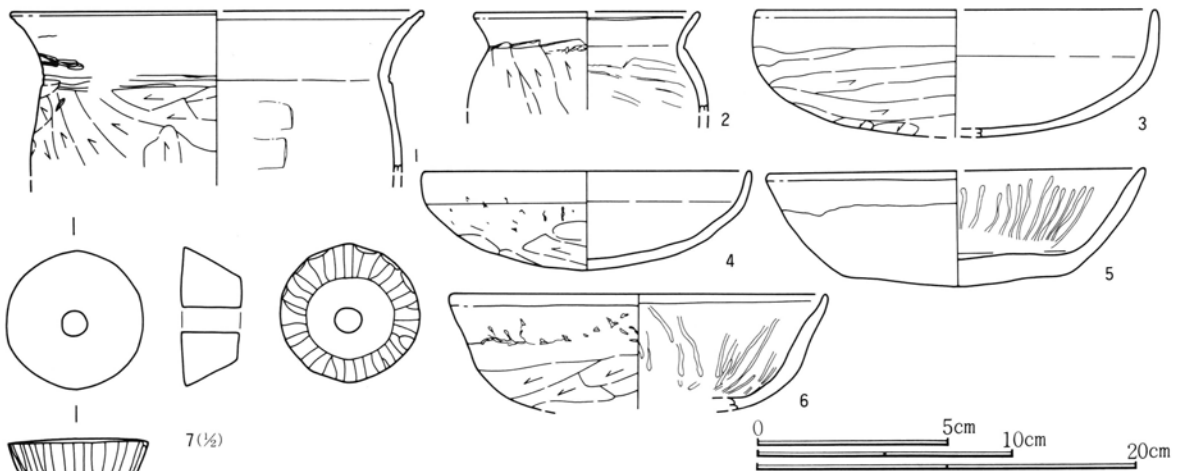


第373図 551号住居跡実測図

第4章 奈良時代の遺構と遺物



第374図 551号住居跡竈実測図



第375図 551号住居跡出土遺物実測図

551号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
375-1 103	土師器 甕	床面+50 口~胴上1/2	口(21.6) 高・底-	①密、1mm以下の砂粒と雲母粒含む②酸化焰、硬質③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り。頸部に2条の沈線あり。内面ナデにて器表面密。
375-2	土師器 小型甕	床面+55 口縁部1/2	口(11.7) 高・底-	①やや粗、2~3mmの砂粒や赤色粒含む。②酸化焰、硬質③赤褐色	胴部外面ヘラ削り、砂粒の移動は少ないが器表面全体が粗れている。内面ナデ。
375-3	土師器 坏	床面+28 1/2残存	口(15.6) 高- 底-	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。黒斑全く認められず。
375-4 103	土師器 坏	床面+5 口縁一部欠 他完形	口(12.8) 高3.8 底-	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質③橙色	底面ヘラ削り、削りの単位は不明瞭。内面ナデにて器表面密。黒斑認められず。
375-5	土師器 坏	覆土 口縁部1/2 底部1/2	口(14.8) 高4.5 底-	①密、1~2mmの砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質③にぶい橙色	底面と体部外面ヘラ削り。口縁部~体部内側に放射状暗文。内側底面に螺旋状と思われる暗文の痕跡あり。
375-6	土師器 坏	掘り方 1/2残存	口(14.8) 高- 底-	①密、1~2mmの砂粒を多く含む②酸化焰、硬質③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ、輪積の痕跡が残る。内面に多くの暗文あり。
375-7 118	石製品 紡錘車	床面+2	径 3.7/2.4 孔径 0.7 厚 1.6 重 29.7		滑石片岩。広面狭面とも磨かれて光沢を持つ。側面は鉄製刃物により幅狭く削られている。

552号住居跡 (第376~378図、図版57・58・103・114・119)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、71-24・25グリッドに位置する。

概要 4軒の住居が重複している住居群中の1軒である。本住居は直接には3軒の住居と重複している。西側部分で古墳時代の553号住居を床下部分まで深く掘り込んで造られている。南側を平安時代の554号住居により覆土上面を掘り込まれているが、掘り込みが浅いため住居はほとんど壊されていない。3軒の新旧関係は553→552→554号住居である。竈手前部分に床下土坑が掘られている。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを含む土で造られている。竈の右側に貯蔵穴が重複するような状態で掘られている。新旧関係はあると思われるが明らかでない。柱穴は掘られていない。

規模 東西4.20m、南北4.12mである。壁高は残りの良い南壁面部分で50cmである。床下土坑は径136cm深さ35cmである。

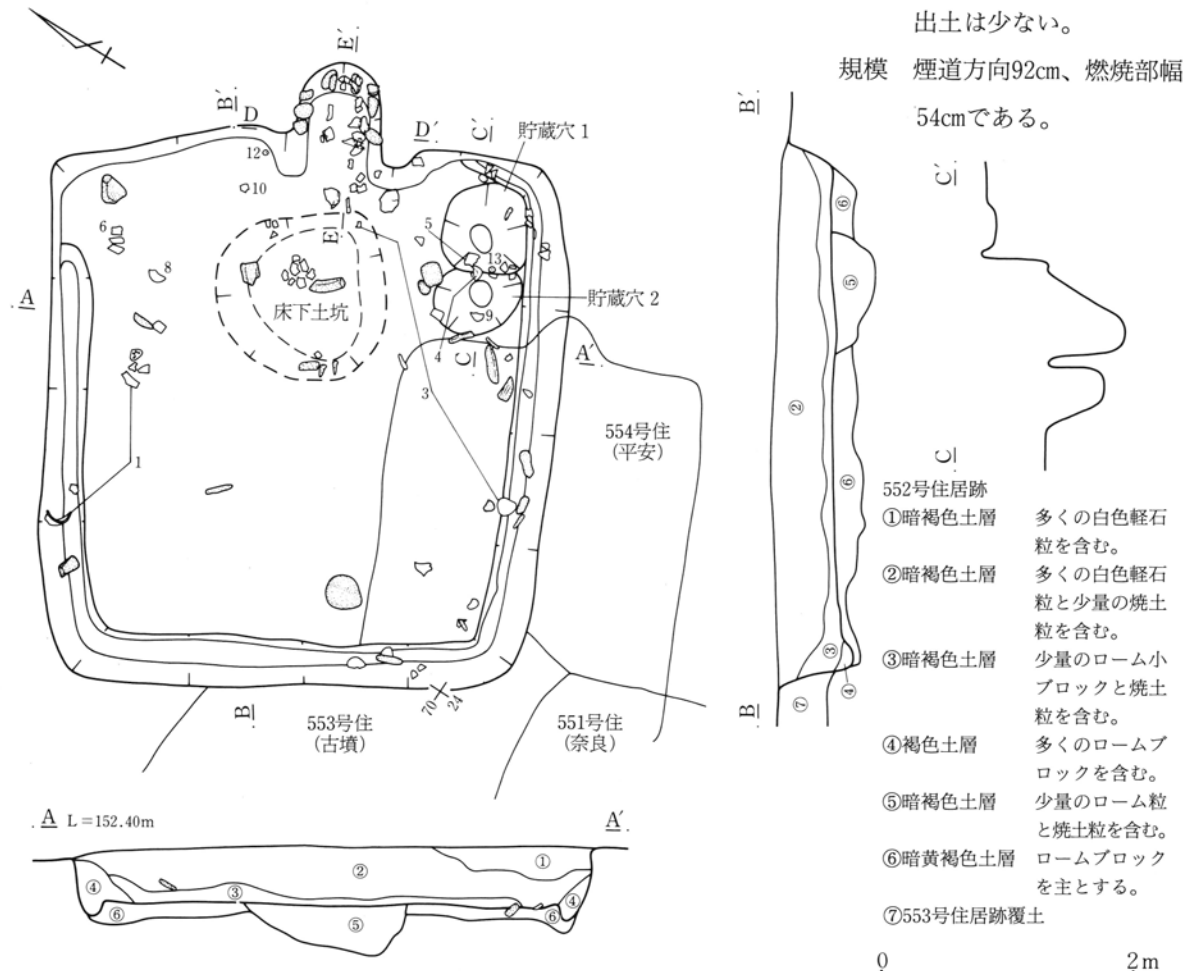
遺物 甕や坏が出土している。甕の破片が多い。紡錘車2点が注目される。

(竈)

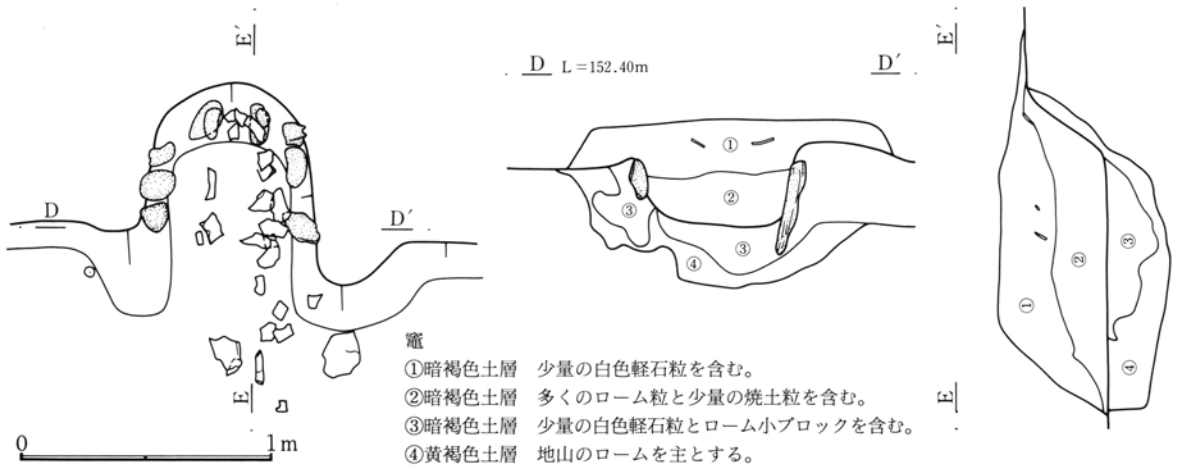
位置 東壁面を掘り込んで造られている。焚口部分は床面上に位置するが、燃烧部の多くは壁面を掘り込んで造られている。

構造 焚口部分は壊されているためか、燃烧部の左右の側壁に細長い石がそれぞれ3個、また奥壁部分に2個の石がほぼ据えられた状態で出土している。このように多くの石を用いて造られた竈であるが、袖石や天井石は出土していない。おそらくはずされて残っていないものと思われる。竈内から焼土粒の出土は少ない。

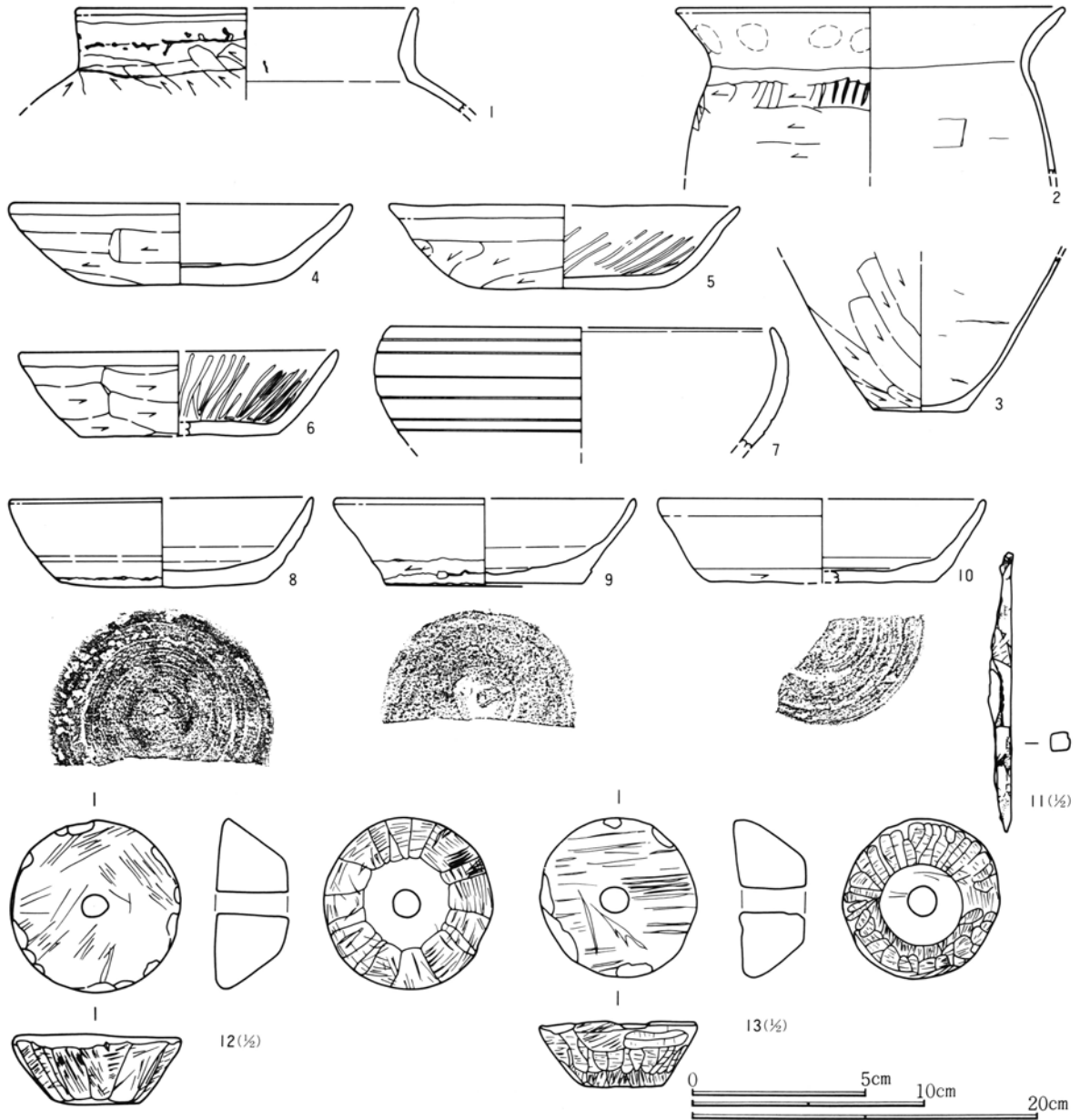
規模 煙道方向92cm、燃烧部幅54cmである。



第376図 552号住居跡実測図



第377図 552号住居跡竈実測図



第378図 552号住居跡出土遺物実測図

552号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
378-1	土師器 甕	床面+26 口縁部 $\frac{1}{2}$	口(19.8) 高— 底—	①密、1~2mmの砂粒と赤色粒を含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部に明瞭な輪痕が残る。 内面ナデにて器表面密。
378-2 103	土師器 甕	覆土 $\frac{2}{3}$ 残存	口22.3 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部横ナデ、多くの指頭圧痕が残る。 胴部内面やや粗い。
378-3	土師器 甕	床面-1 底部完形 胴下半 $\frac{2}{3}$	口— 高— 底5.4	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③黒褐色	底面と胴下半強いヘラ削り、削りの単位は明瞭である。 内面ナデにて器表面密。 器肉が薄く削られている。
378-4 103	土師器 坏	床面-23 $\frac{1}{2}$ 残存	口(14.6) 高3.5 底8.6	①密、1~2mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 内面ナデ。 器表面が粗れており、暗文は確認できない。
378-5 103	土師器 坏	床面+21 $\frac{1}{2}$ 残存	口(15.0) 高3.6 底8.5	①密、多くの雲母粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面ヘラ削り。 体部下半ヘラ削り。 内面に多くの暗文あり。
378-6	土師器 坏	床面+9 $\frac{1}{4}$ 残存	口(13.9) 高3.6 底(8.6)	①密、1~3mmの砂粒を多く、赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③赤褐色	底面と体部外面ヘラ削り。 内側口縁部と体部に暗文。 内側底面に螺旋状暗文の痕跡あり。
378-7	須恵器 鉢	覆土 口縁部 $\frac{1}{6}$	口(22.0) 高・底—	①密、2~3mmの片岩粒を少量含む。②還元焰、硬質 ③灰色	胴部外面に多くの浅い凹状沈線が描かれている。
378-8 103	須恵器 坏	床面+34 $\frac{2}{3}$ 残存	口(13.0) 高— 底—	①やや粗、1~2mmの石英粒を大量に含む。②還元焰、硬質 ③灰白色	底面右回転糸切痕。 底部周辺部の器肉が厚い。 器表面全体に多くの石英粒が目立つ。
378-9 103	須恵器 坏	床面-37 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.0) 高3.7 底(8.4)	①密、1mm前後の石英粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰白色	底面ヘラ切り後右回転ヘラ削り。 体部下端右回転ヘラ削り。
378-10	須恵器 坏	床面+3 $\frac{1}{4}$ 残存	口(14.0) 高3.6 底(9.8)	①やや粗、1~2mmの片岩粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰色	底面左回転ヘラ調整。 体部下端左回転ヘラ削り。
378-11 114	鉄製品 鉄鎌	覆土	長 8.1 幅 0.7 厚 0.5 重 6.5		鉄鎌の茎部分と思われる。部分的に錆化が進んでいるが、全体に残りが良い。
378-12 119	石製品 紡錘車	床面+18	径 5.0/2.4 孔径 0.7 厚 2.1 重 71.6		蛇紋岩。両面とも磨かれ光沢を持つ。側面は横方向の荒砥削り、少量の縦方向の荒砥削り、ノミ削り痕あり。
378-13 119	石製品 紡錘車	床面-37	径 4.6/2.4 孔径 0.7 厚 2.0 重 59.4		滑石片岩。広面と狭面荒砥削り。側面は荒砥削り後、鉄製工具による細長い削り。

555号住居跡 (第379~381図、図版58)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、76-27・28グリッドに位置する。

概要 3軒の住居と重複しており、さらに西側は調査区域外であるため住居の一部が調査できただけである。古墳時代の556号住居を床下部分まで掘り込み、西側を奈良時代の557号住居により床面に近い覆土を掘り込まれている。3軒の新旧関係は556→555→557号住居である。竈が東壁面に造られているが、半分以上調査区域外であり十分な調査はできなかった。袖石等は出土していない。竈内より焼土粒の出土も少ない。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを含む土で造られている。貯蔵穴や柱穴は不明である。

規模 東西南北とも不明である。壁高は残りの良い南東コーナー部分で23cmである。

遺物 破片を含め出土量は少ないが、紡錘車が注目される。

557号住居跡 (第379・380・382図、図版58・103・119)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、75・76-27グリッドに位置する。

概要 3軒の住居と重複しており、さらに西側は調査区域外であるため住居の一部が調査できただけである。本住居は東側で古墳時代の556号住居と奈良時代の555号住居を床下部分まで掘り込んでいる。3軒の新旧関係は556→555→557号住居である。南側に9号井戸が掘られており、南壁面の一部が掘り込まれ

第4章 奈良時代の遺構と遺物

ている。

**構造** 床面は多くのローム粒とロームブロックを含む土で造られている。床下に小さな小穴が掘られているが、貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

**規模** 東西南北とも不明である。壁高は残りの良い南東コーナー部分で20cmである。

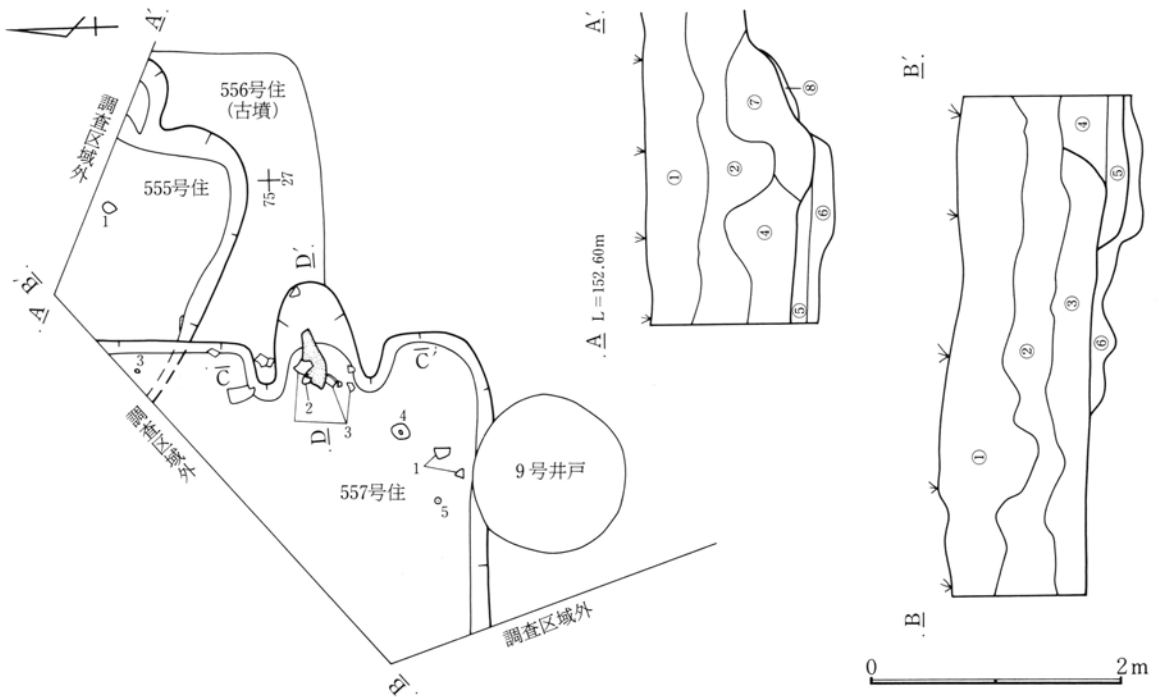
**遺物** 紡錘車出土している。

(竈)

**位置** 東壁面を掘り込んで造られている。焚口部分と燃烧部の多くは床面上に位置する。

**構造** 天井石が燃烧部床面に落ち込むような状態で出土したが、ほかに袖石等の石は出土していない。竈内から焼土粒の出土は少ない。

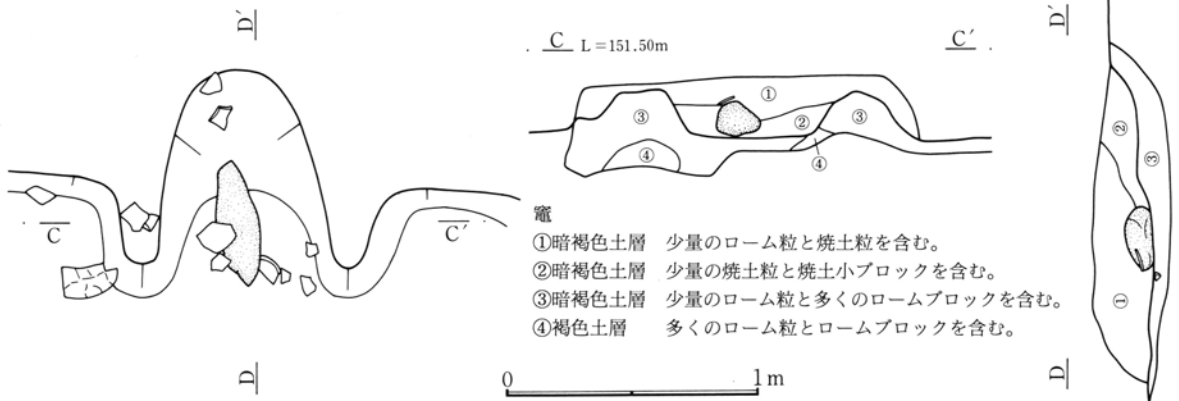
**規模** 煙道方向88cm、燃烧部幅58cmである。



555・557号住居跡

- ①耕作土
- ②暗褐色土層 少量の白色軽石粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒と少量のローム小ブロックを含む。
- ④暗褐色土層 ③層に近いが、黒色が濃い。
- ⑤褐色土層 多くのローム粒を含む。
- ⑥褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ⑦暗褐色土層 多くのロームブロックと少量の焼土粒及び灰を含む。
- ⑧褐色土層 ロームを主とし、少量の焼土粒を含む。

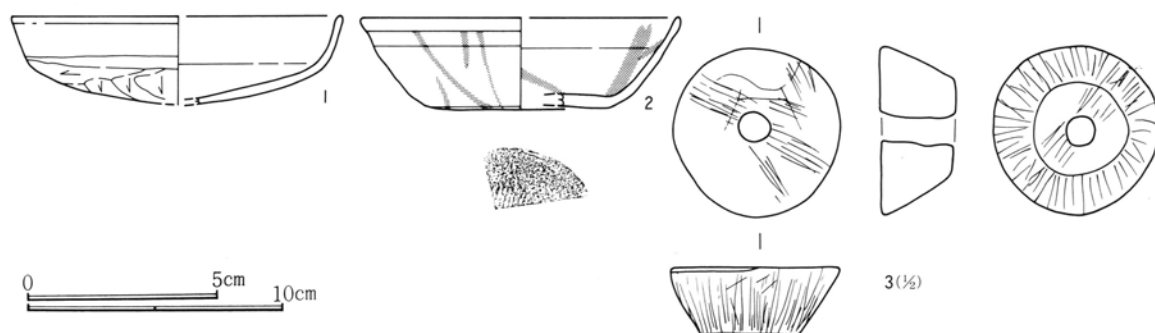
第379図 555・557号住居跡実測図



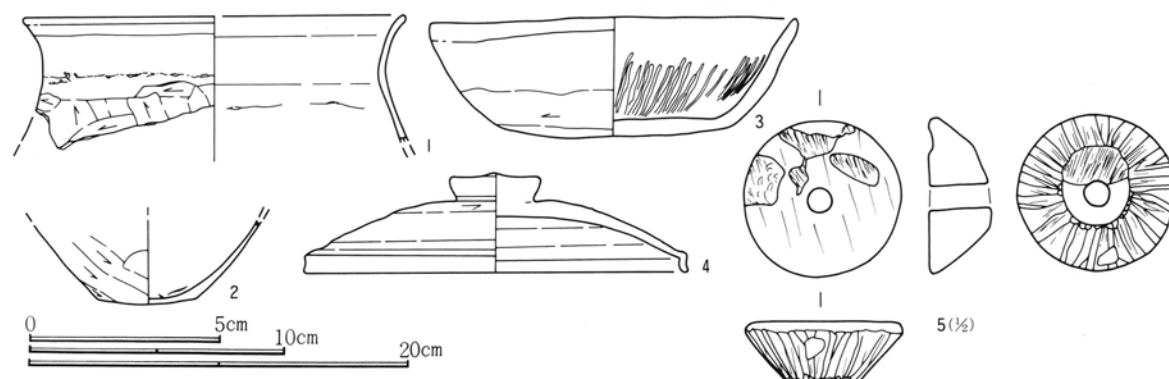
竈

- ①暗褐色土層 少量のローム粒と焼土粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量の焼土粒と焼土小ブロックを含む。
- ③暗褐色土層 少量のローム粒と多くのロームブロックを含む。
- ④褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

第380図 557号住居跡竈実測図



第381図 555号住居跡出土遺物実測図



第382図 557号住居跡出土遺物実測図

555号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
381-1	土師器 杯	床面+20 1/3残存	口(12.8) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底面ヘラ削り、砂粒の移動少ない。削りの単位不明瞭。
381-2	須恵器 杯	覆土 1/4残存	口(12.4) 高— 底(7.5)	①密、砂粒ほとんど確認されない ②酸化焰、硬質 ③灰色	底面回転糸切り後、底部周辺ヘラ削り。 内外面に多くのヒダスキ状の吸炭あり。
381-3 119	石製品 紡錘車	床面+24	径 4.4/2.5 孔径 0.7 厚 2.0 重 51.2		表面全体が鉄製刃物により削られている。細かいキズは 荒砥削りでなく刃物で削った時のものと思われる。

557号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
382-1	土師器 甕	床面+16 口縁部1/3	口(20.0) 高・底—	①密、1mm以下の砂粒を多く赤色粒 を少量含む②酸化焰、硬質③橙色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
382-2	土師器 甕	床面+28 胴下半1/2	口・高一 底 5.2	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③暗褐色	底面と胴部外面ヘラ削り。内面ナデ。 外面の多くの部分に吸炭が認められる。
382-3 103	土師器 杯	床面+19 ほぼ完形	口 14.3 高 4.7 底 9.2	①やや粗、1~2mmの砂粒を少量 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部下半ヘラ削り。 器面全体が粗れている。 内側に多くの暗文あり。
382-4 103	須恵器 蓋	床面+11 3/4残存	口 14.8 高— 底—	①密、砂粒ほとんど含まず ②還元焰、軟質 ③灰白色	天井部ヘラ削り。 摘みはボタン状でいねいに貼り付けてある。
382-5 119	石製品 紡錘車	床面+22	径 4.1/1.8 孔径 0.6 厚 1.6 重 33.3		滑石片岩。両面とも一部欠損。側面鉄製刃物により幅 狭く削られている。上下面は磨かれて光沢を持つ。

559号住居跡 (第383~385図、図版59・103・114・115・128)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、74・75-30グリッドに位置する。

概要 3軒の住居と重複しており最も新しい段階の住居である。本住居は北側で古墳時代の558号住居の多くをまた西側で古墳時代の561号住居の壁面と床面の一部を床下部分まで掘り込んで造られている。3軒の新旧関係は561→558→559号住居である。

第4章 奈良時代の遺構と遺物

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを含む土で造られている。貯蔵穴は掘られていないが、柱穴は4本掘られている。

規模 東西3.90m、南北3.85mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で28cmである。柱穴1は径42cm深さ48cm、柱穴2は径42cm深さ53cm、柱穴3は径31cm深さ46cm、柱穴4は径58cm深さ61cmである。

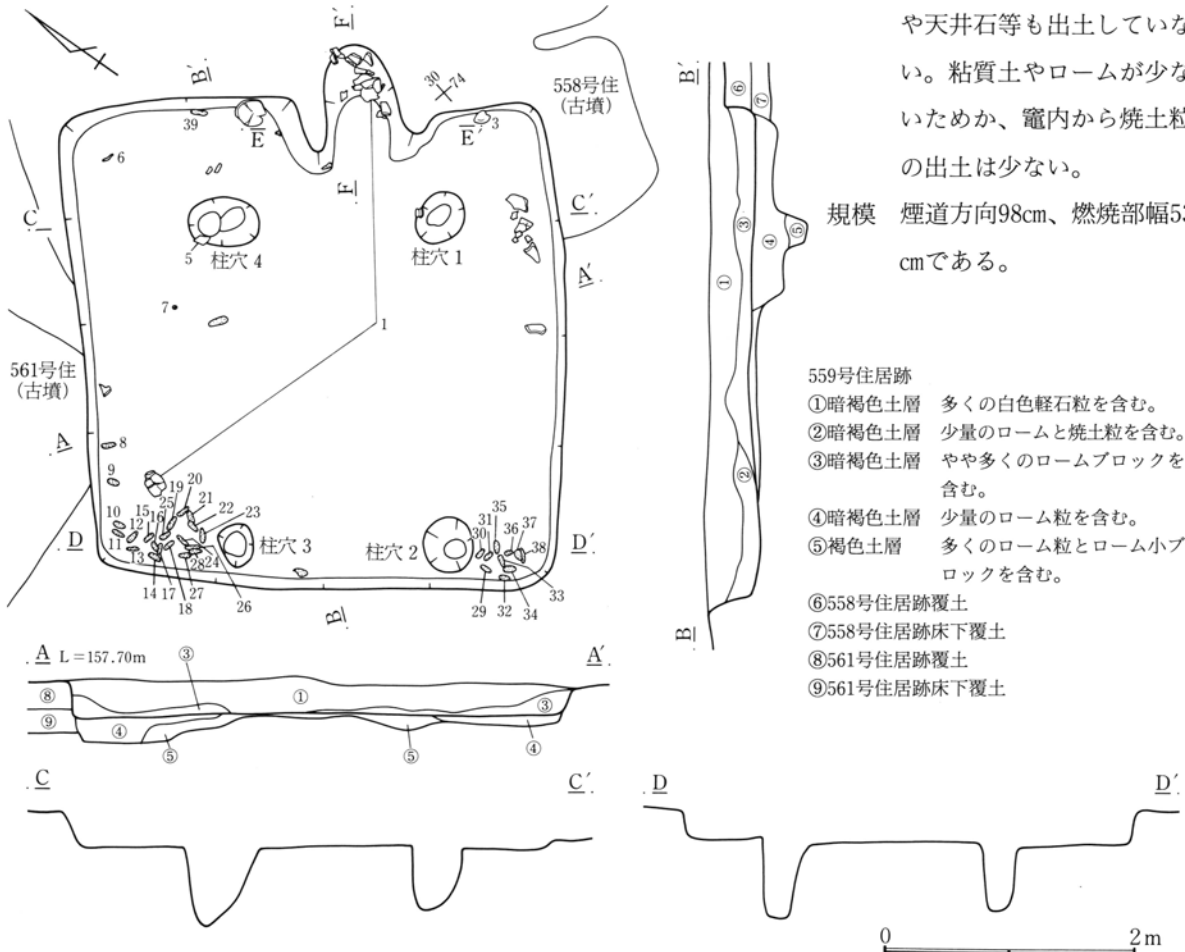
遺物 破片の出土量が多い。南西コーナーと南東コーナーにまとまってこも編み石が出土している。

(竈)

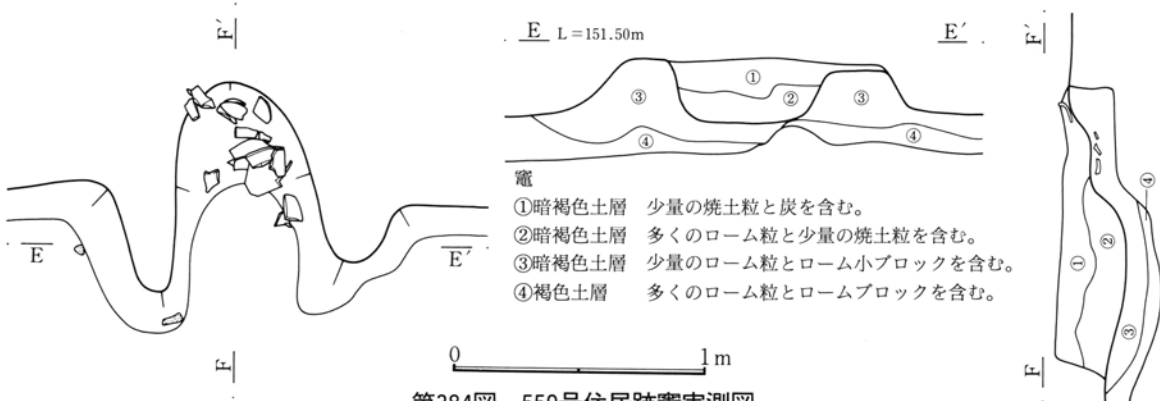
位置 北壁面を掘り込んで造られている。焚口部分と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 558号住居の覆土を掘り込んで造られているが、粘質土等を持ち込んでいる痕跡は認められない。袖石や天井石等も出土していない。粘質土やロームが少ないためか、竈内から焼土粒の出土は少ない。

規模 煙道方向98cm、燃烧部幅53cmである。

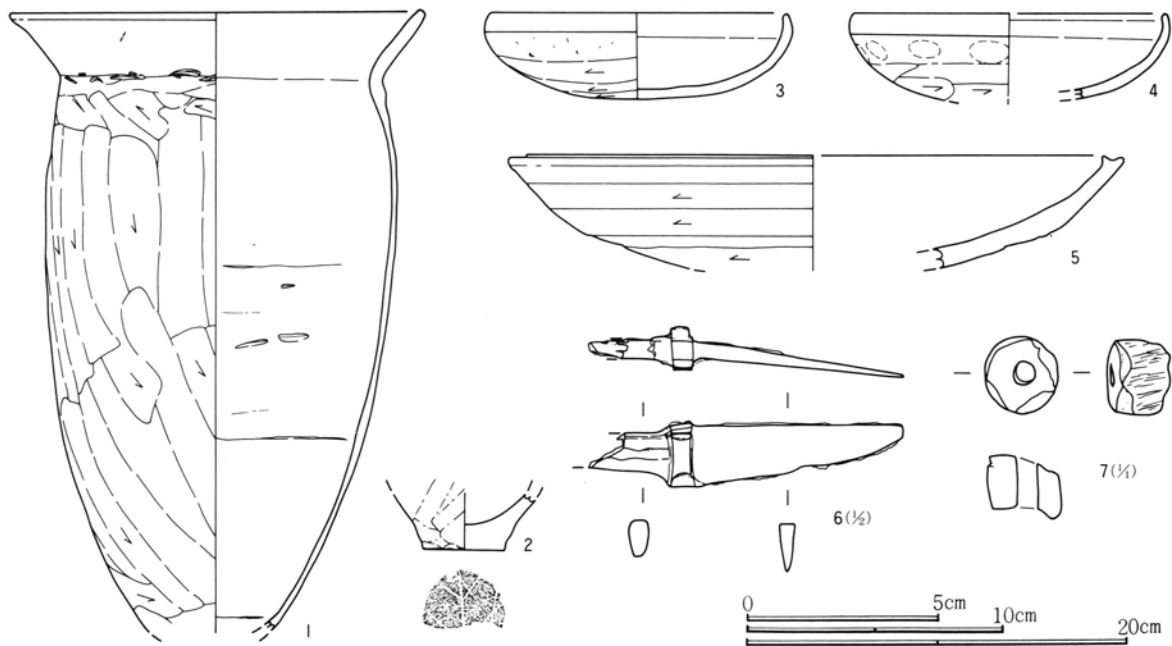


第383図 559号住居跡実測図



第384図 559号住居跡竈実測図





第385図 559号住居跡出土遺物実測図

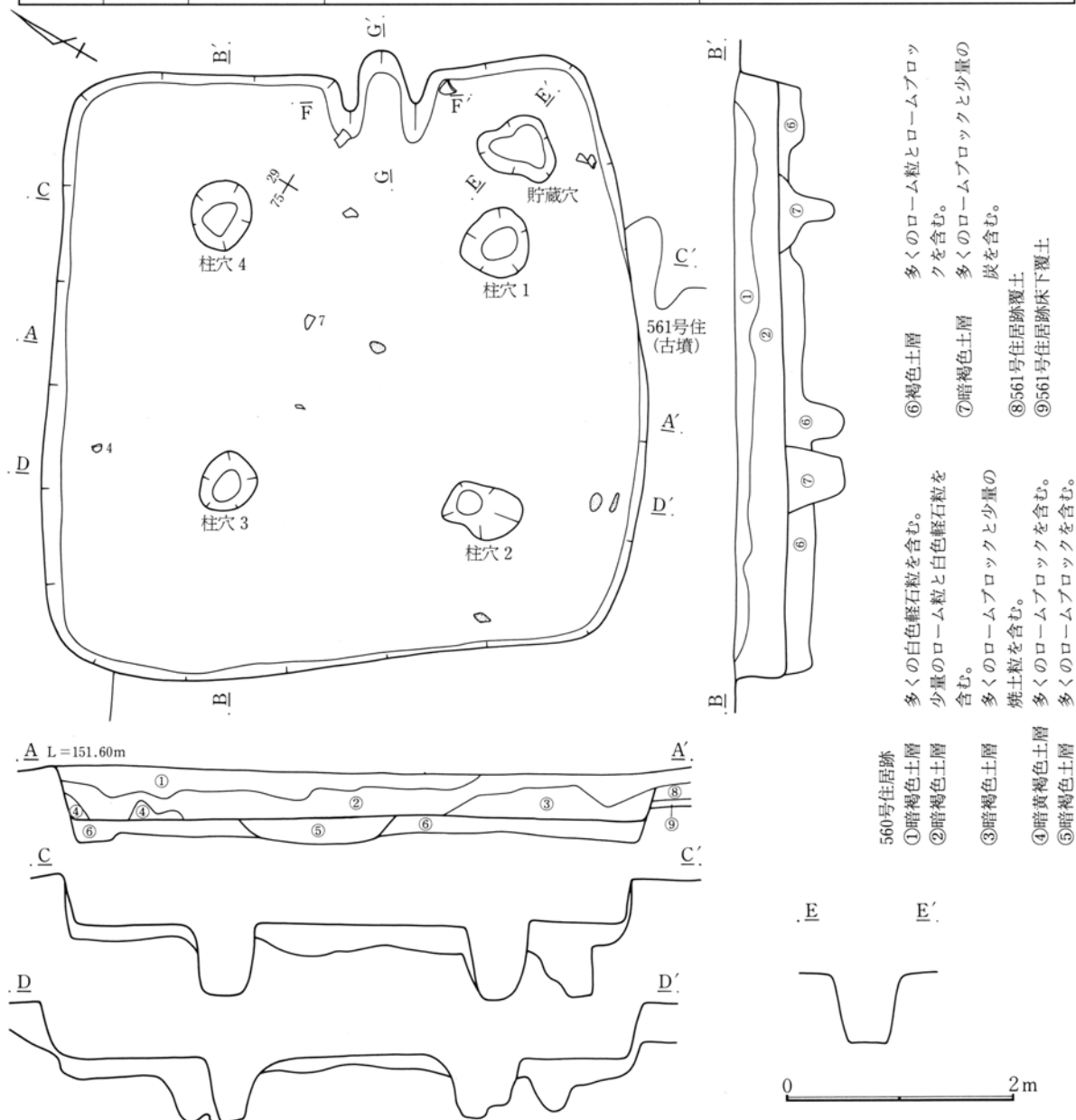
559号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考		
385-1 103	土 師器 甕	床面+5 口 $\frac{2}{3}$ ・胴 $\frac{1}{5}$	口 22.0 高・底一	①密、1mm以下の白色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り、削りの幅が広く単位明瞭。口縁部のみ器内が厚い。		
385-2	土 師器 甕	掘り方覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口・高一 底 4.2	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄橙色	底面に木葉痕。 胴部内外面ナデ。		
385-3 103	土 師器 坏	床面直上 $\frac{3}{4}$ 残存	口 11.6 高 3.4	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質③明赤褐一部黒色	底面ヘラ削り。体部ナデ。 内面に黒漆に似た黒色物が斑点状に付着。		
385-4	土 師器 坏	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口(12.2) 高・底一	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部に多くの指頭圧痕。 内面ナデにて器表面密。		
385-5	須惠器 盤	床面+26 $\frac{1}{2}$ 残存	口(24.1) 高・底一	①密、少量の片岩粒を含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面ヘラ削り。口唇部内側つまみ出しにより外側より高くなっている。		
385-6 114	鉄製品 刀子	床面直上	長 (8.3) 厚 0.4~0.5	幅 1.5~1.7 重 11.8	刀子の茎部分の一部と刀身及び寶金具が残っている。		
385-7 115	石製品 白玉	床面+6	径 1.0 厚 0.8	孔径 0.3 重 1.8	滑石片岩。横断面形は少しゆがんでいるがほぼ円形。 側面は荒砥削り。上下面は一部再調整。		
遺物番号	図版番号	器種	法量(cm)(g)				石材・備考
8	128	こも編み石	長 9.7	幅 1.8	厚 2.5	重 105	絹雲母石墨片岩
9	128	こも編み石	長 9.2	幅 3.1	厚 1.5	重 70	絹雲母石墨片岩
10	128	こも編み石	長 9.8	幅 3.9	厚 1.6	重 90	絹雲母石墨片岩
11	128	こも編み石	長 9.3	幅 3.6	厚 2.0	重 95	緑簾緑泥片岩
12	128	こも編み石	長 11.4	幅 3.8	厚 1.3	重 120	緑簾緑泥片岩
13	128	こも編み石	長 10.5	幅 4.2	厚 1.7	重 100	絹雲母石墨片岩
14	128	こも編み石	長 9.4	幅 3.5	厚 2.1	重 100	緑簾緑泥片岩
15	128	こも編み石	長 9.5	幅 3.5	厚 1.7	重 85	緑簾緑泥片岩
16	128	こも編み石	長 9.5	幅 3.7	厚 2.5	重 140	緑簾緑泥片岩
17	128	こも編み石	長 9.3	幅 3.7	厚 1.8	重 100	緑簾緑泥片岩
18	128	こも編み石	長 9.7	幅 4.2	厚 2.0	重 120	点紋緑泥片岩
19	128	こも編み石	長 11.6	幅 4.0	厚 1.3	重 100	緑簾緑泥片岩
20	128	こも編み石	長 10.8	幅 3.9	厚 2.4	重 135	絹雲母石墨片岩
21	128	こも編み石	長 10.0	幅 4.5	厚 1.5	重 95	絹雲母石墨片岩
22	128	こも編み石	長 10.7	幅 3.3	厚 2.4	重 110	絹雲母石墨片岩
23	128	こも編み石	長 9.3	幅 3.5	厚 1.7	重 90	緑簾緑泥片岩
24	128	こも編み石	長 10.7	幅 3.8	厚 1.7	重 105	絹雲母石墨片岩
25	128	こも編み石	長 10.1	幅 2.7	厚 2.0	重 100	緑簾緑泥片岩
26	128	こも編み石	長 9.6	幅 3.1	厚 2.4	重 95	絹雲母石墨片岩
27	128	こも編み石	長 8.8	幅 4.1	厚 1.4	重 120	緑簾緑泥片岩

第4章 奈良時代の遺構と遺物

559号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	図版番号	器種	法 量(cm)(g)				石 材	備 考
28	128	こも編み石	長 10.0	幅 2.8	厚 2.0	重 90	緑簾緑泥片岩	
29	128	こも編み石	長 8.8	幅 4.6	厚 1.3	重 85	絹雲母石墨片岩	
30	128	こも編み石	長 10.3	幅 4.9	厚 1.3	重 120	緑簾緑泥片岩	
31	128	こも編み石	長 9.3	幅 3.0	厚 2.8	重 110	緑簾緑泥片岩	
32	128	こも編み石	長 8.4	幅 3.5	厚 2.2	重 80	点紋緑泥片岩	
33	128	こも編み石	長 8.3	幅 3.4	厚 1.9	重 90	緑簾緑泥片岩	
34	128	こも編み石	長 10.3	幅 5.4	厚 1.4	重 145	緑簾緑泥片岩	
35	128	こも編み石	長 9.4	幅 4.8	厚 2.2	重 135	緑簾緑泥片岩	
36	128	こも編み石	長 8.2	幅 3.3	厚 1.8	重 70	緑簾緑泥片岩	
37	128	こも編み石	長 8.9	幅 4.1	厚 2.5	重 115	絹雲母石墨片岩	
38	128	こも編み石	長 10.6	幅 2.9	厚 1.8	重 95	絹雲母石墨片岩	
39	128	こも編み石	長 8.8	幅 4.0	厚 1.7	重 100	緑泥片岩	
40	128	こも編み石	長 10.2	幅 4.1	厚 2.0	重 130	緑簾緑泥片岩	
41	128	こも編み石	長 10.8	幅 5.0	厚 1.9	重 170	絹母石墨片岩	
42	128	こも編み石	長 9.8	幅 3.3	厚 1.8	重 110	点紋緑泥片岩	
43	128	こも編み石	長 8.9	幅 4.2	厚 1.7	重 110	緑簾緑泥片岩	
44	128	こも編み石	長 9.7	幅 3.7	厚 1.5	重 75	緑簾緑泥片岩	



560号住居跡 (第386~389図、図版59・103)

位置 本住居跡は7次調査区にあり、75・76-29・30グリッドに位置する。

概要 南側で古墳時代の561号住居と重複しており561号住居を床下部分まで掘り込んで住居が造られている。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを含む土で造られている。形がやや不自然ではあるが、貯蔵穴が竈の右側に、柱穴は4本掘られている。

規模 東西5.30m、南北5.25mである。壁高は残りの良い北壁面部分で45cmである。貯蔵穴は径52cm深さ57cmである。柱穴1は径53cm深さ62cm、柱穴2は径40cm深さ52cm、柱穴3は径48cm深さ62cm、柱穴4は

径52cm深さ61cmである。

床下 床下調査により多くの小穴が確認された。柱穴1~3に接して数個の小穴が掘られていた。恐らく柱の立て替えが行われたものと思われる。

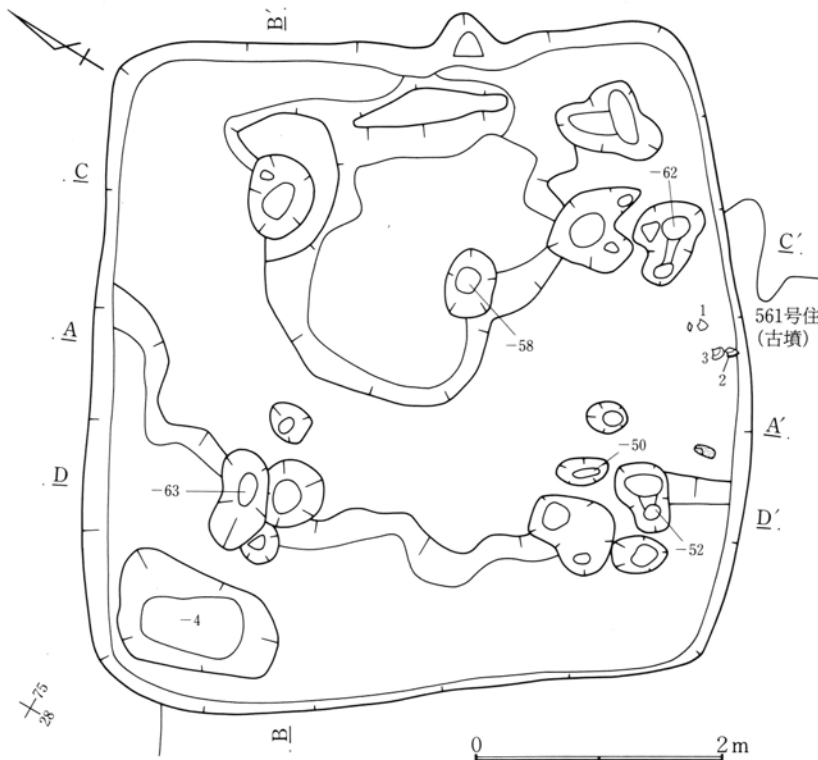
遺物 甕や坏が出土している。破片の出土量は大量である。

(竈)

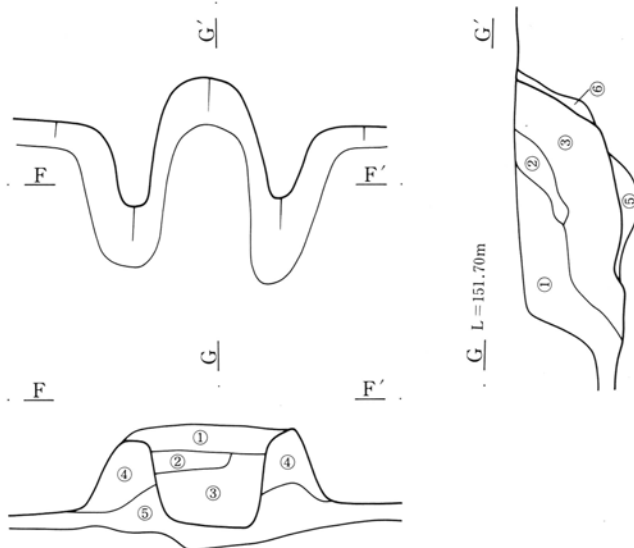
位置 東壁面を掘り込んで造られている。焚口部分と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 暗褐色土を用いて造られており、袖石や天井石等は出土していない。竈内から多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向80cm、燃烧部幅43cmである。



第387図 560号住居跡床下実測図

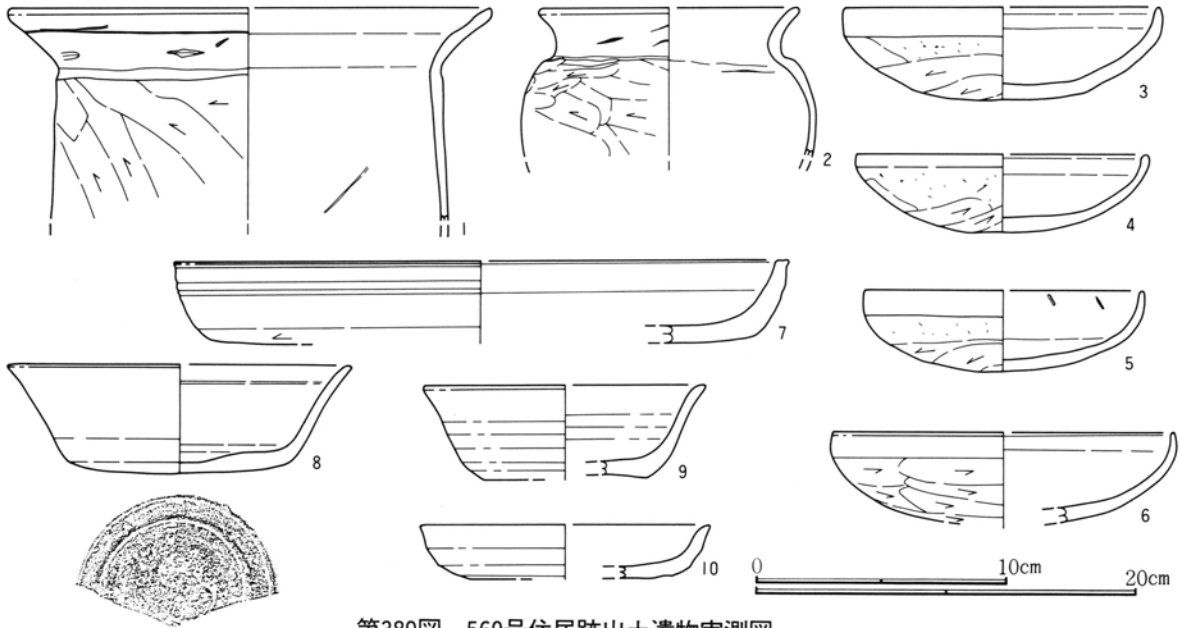


竈

- ①暗褐色土層 少量の白色軽石粒と焼土粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量のローム粒とやや多くの焼土粒を含む。
- ③暗赤褐色土層 多くの焼土粒と少量の炭を含む。
- ④暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ⑤暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ⑥黄褐色土層 地山のロームを主とする。

第388図 560号住居跡竈実測図

第4章 奈良時代の遺構と遺物



第389図 560号住居跡出土遺物実測図

560号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
389-1	土師器 甕	床面+30 1/2残存	口(25.0) 高— 底—	①密、小さな雲母粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色、内側黒色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 口縁部外側に1条の凹線あり。 胴部内側吸炭により黒色を呈している。
389-2 103	土師器 甕	床面+20 1/2残存	口(13.4) 高— 底—	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③外面にぶい赤褐色、内面黒褐色	胴部外面幅の狭いヘラ削り。 内面ナデで吸炭により黒褐色を呈している。 少し歪んでいる。
389-3 103	土師器 坏	床面+11 1/2残存	口(12.4) 高3.6 底—	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、削りの単位は明瞭でない。 内面ナデにて器表面密。 黒斑認められず。
389-4	土師器 坏	床面+20 口縁部1/5 底部1/5	口(11.4) 高3.0 底—	①密、少量の角閃石を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。 内面ナデにて器表面密。
389-5	土師器 坏	覆土 1/2残存	口(11.0) 高3.2 底—	①密、1~3mmの長石粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。 内面ナデにて器表面密。
389-6	土師器 坏	覆土 小破片	口(13.5) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、削りの単位は明瞭でない。 内面ナデにて器表面密。
389-7	須恵器 盤	床面+30 破片	口(24.0) 高— 底(21.0)	①密、1~3mmの片岩粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	盤の破片と思われる。 底面と体部下端手持ヘラ削り。 口唇部が凹状を呈する。
389-8	須恵器 坏	掘り方 1/2残存	口(13.2) 高4.3 底8.0	①密、多くの1mm以下の白色粒を含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面右回転ヘラ調整。 体部下端にヘラ削りなし。 口縁部内側にわずかな沈線あり。
389-9	須恵器 坏	覆土 1/2残存	口(11.0) 高(3.6) 底(6.3)	①粗、約1mmの片岩粒を多く含む ②還元焰、硬質 ③灰色	底面ヘラ削り。 体部下端ナデ。 口縁部がわずかに外反する。
389-10	須恵器 坏	覆土 1/2残存	口(10.4) 高(2.1)	①粗、1mm前後の片岩粒を少量含む。 ②還元焰、硬質 ③灰白色	底面ヘラ削り。

565号住居跡 (第390~392図、図版59・60・103・104)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、84-42グリッドに位置する。

概要 4軒の住居と重複しており、住居東側は調査区域外である。北側で古墳時代の591号住居と南側で古墳時代の566・567号住居と重複しており、本住居が床下部分まで深く掘り込んでいる。住居の中央から西側にかけて奈良時代の593号住居により床下部分まで深く掘り込まれている。5軒の新旧関係は591

→567→566→565→593号住居である。

**構造** 床面は多くのローム粒とロームブロックを含む土で造られている。柱穴は掘られておらず、貯蔵穴は調査区域内には認められない。

**規模** 東西不明、南北4.75mである。壁高は残りの良い北壁面部分で47cmである。

**遺物** 竈内やその周辺より、甕や坏が出土している。

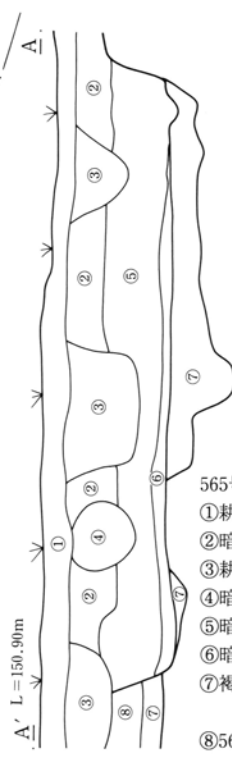
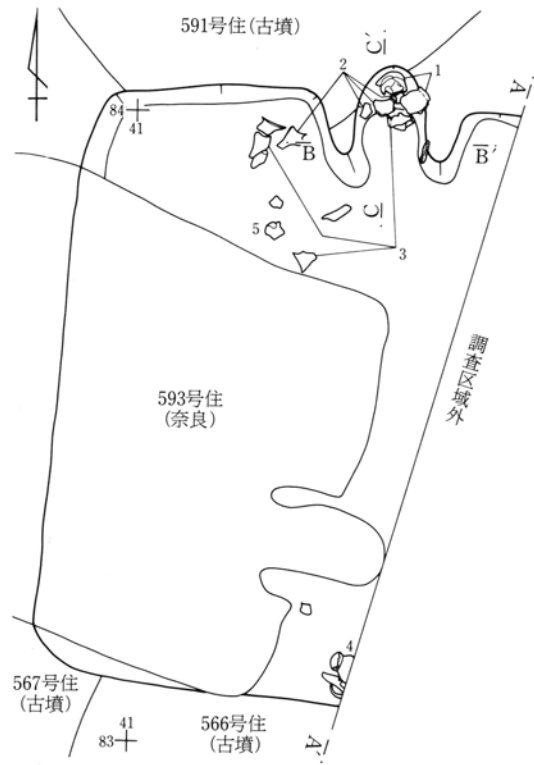
(竈)

**位置** 北壁面を掘り込んで造られている。焚口部分と燃烧部の多くは床面上に位置する。

**構造** 右袖石が燃烧部に傾いてはいるが、ほぼ据えられた状態で出土している。左袖石は残っていない。袖

部分は灰色粘質土を多く用いて造られている。煙道部に底部を欠損しているが他は完形の甕が口縁部を下にして据えるような状態で出土している。煙道として使用した甕と思われる。粘質土やロームが使われているためか、竈内から多くの焼土粒が出土している。

**規模** 煙道方向96cm、燃烧部幅56cm。

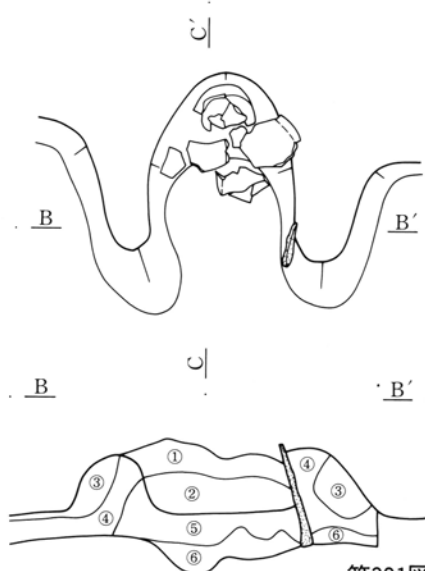


565号住居跡

- ①耕作土
- ②暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
- ③耕作溝覆土
- ④暗褐色土層 少量の焼土粒を含む。
- ⑤暗褐色土層 少量のローム粒を含む。
- ⑥暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ⑦褐色土層 ロームブロックを主とし、少量の暗褐色土焼土粒を含む。
- ⑧566号住居跡覆土

第390図 565号住居跡実測図

0 2m

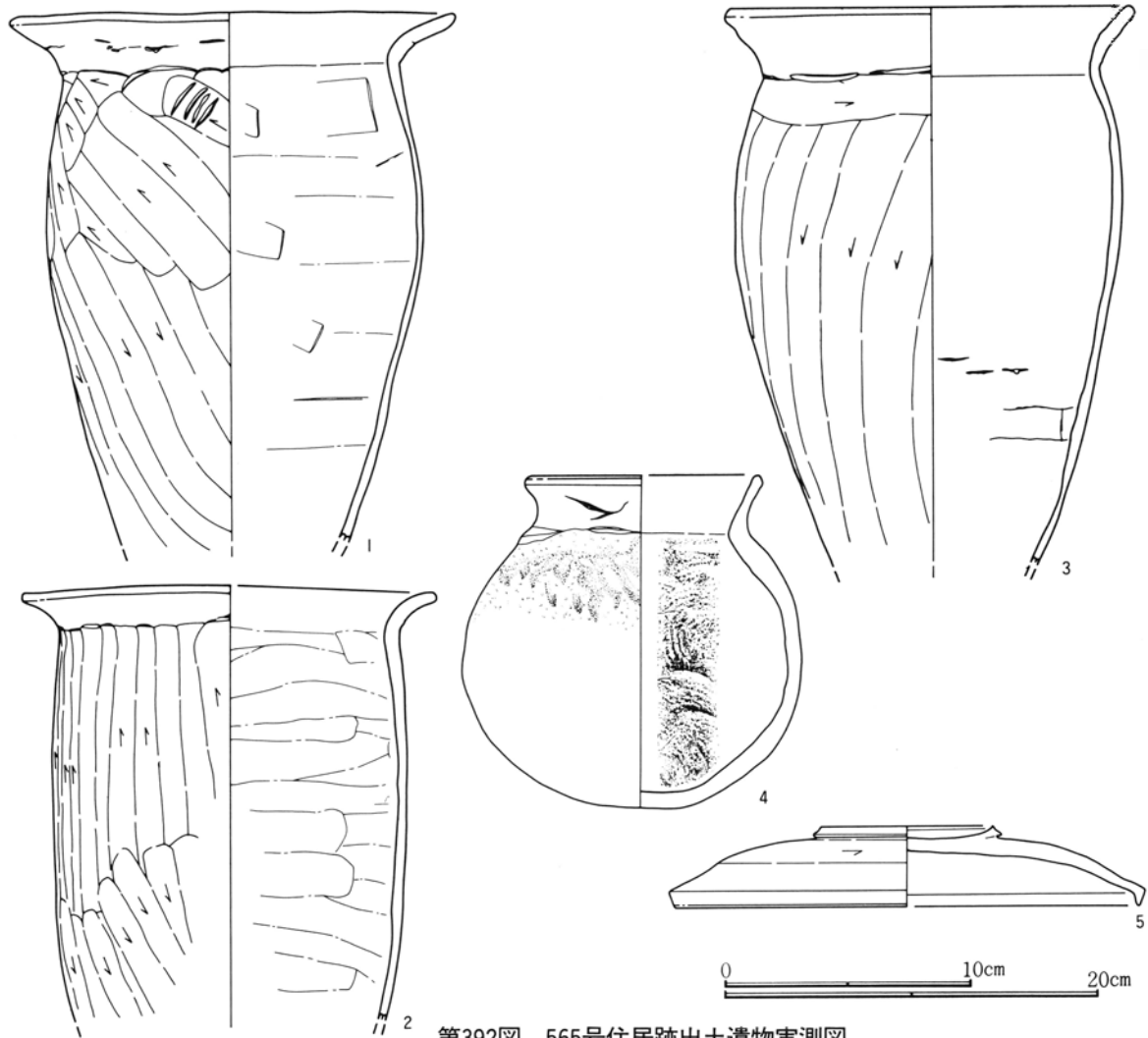


竈

- ①暗褐色土層 少量のロームブロック・灰色粘質土と少量の焼土粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くの焼土粒と少量の灰を含む。
- ③褐色土層 ロームブロックを大量に含む。
- ④暗褐色土層 多くの灰色粘質土と少量の焼土粒を含む。
- ⑤褐色土層 多くのロームブロックと少量の焼土粒を含む。
- ⑥暗黄褐色土層 地山のロームを主とし、僅かに焼土粒を含む。

第391図 565号住居跡竈実測図

0 1m



第392図 565号住居跡出土遺物実測図

565号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
392-1 103	土師器 甕	床面+6 胴下端欠 他ほぼ完形	口 24.1 高 28.1 底 —	①密、1mm以下の砂粒と雲母粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。 削られていない口縁部との境に段を持つ。 内面ナデにて器表面密。
392-2 104	土師器 甕	床面+26 口~胴上部 完形、下部 $\frac{2}{3}$	口(22.2) 高 — 底 —	①やや粗、2~3mmの砂粒と片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。砂粒が移動し器表面やや粗い。 内面ナデにて器表面密。 全体に器肉が厚い。
392-3 104	土師器 甕	床面+3 口縁~胴下 半 $\frac{2}{3}$	口 21.8 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラナデ。砂粒の移動ほとんどなし。 内面ナデにて器表面密。 黒斑ほとんど認められず。
392-4 103	須恵器 甕	床面+6 口縁部 $\frac{1}{2}$ 他完形	口(12.3) 高 17.8 底 —	①密、1mm前後の長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質、焼締 ③灰色	底面~胴部外面ナデ。内面青海波文の痕跡あるが、ナデにより大部分消している。 口縁部内側、肩部、内側底面に自然釉。
392-5 103	須恵器 蓋	床面+7 $\frac{1}{2}$ 残存	口(18.6) 高 — 底 —	①密、1mm以下の石英粒を大量に含む。 ②還元焰、硬質 ③灰白色	天井部ヘラ削り。摘みは径が大きく低く端部が鋭利につくられている。口縁部は折り、リング状の摘みとしては大きい部類である。

571号住居跡 (第393・394図、図版60・104)

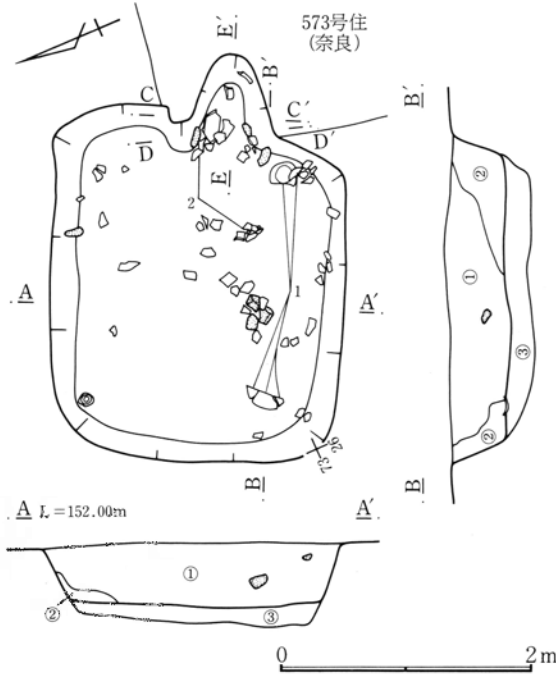
位置 本住居跡は第7次調査区にあり、73・74-27グリッドに位置する。

概要 東側で奈良時代の573号住居と重複しており、本住居の竈が573号住居の北西コーナー部分を掘り込んでいる。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを含む土で造られている。柱穴や貯蔵穴は掘られていない。床下土坑が掘られている。

規模 東西2.63m、南北2.35mである。壁高は残りの良い南壁面部分で48cmである。床下土坑の深さは第116図を参照。

遺物 破片の出土量が多いが、図示できたのは土師器の甕2点のみである。



(竈)

位置 東壁面に位置している。住居が小さいため袖部分は床面上に位置するが、燃烧部の多くは壁面を深く掘り込んで造られている。

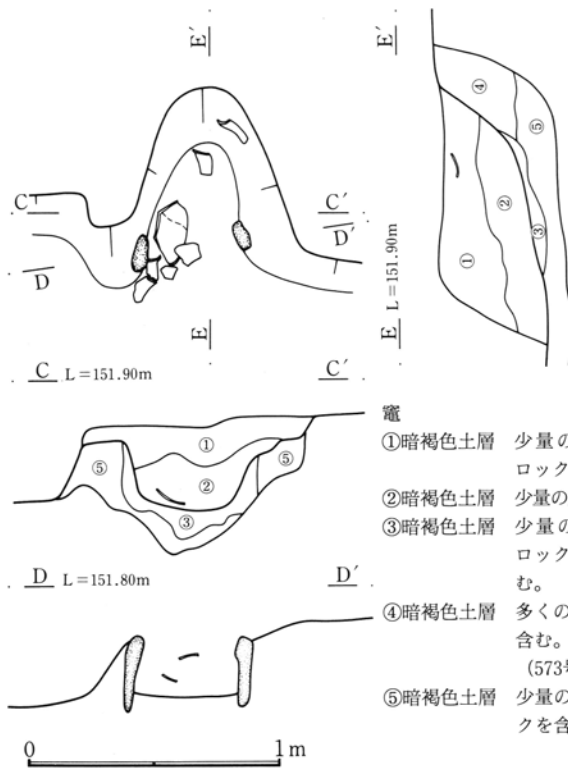
構造 左右の袖石がほぼ使用時の状態で残っている。右袖の下にも石が出土しているが、天井石は出土していない。573号住居の覆土を掘り込んで造られているが、粘質土等は特に使われてはおらず、少量のローム粒を含む土で造られている。竈内から焼土粒の出土は少ない。

規模 煙道方向80cm、燃烧部幅46cmである。

571号住居跡

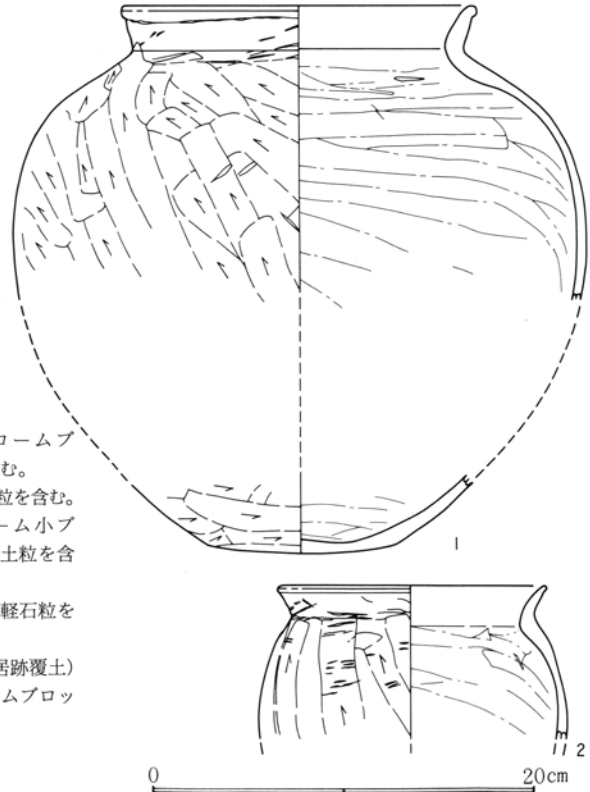
- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒と少量のローム小ブロックを含む。
- ②暗褐色土層 ①層に近いが、ロームブロックを含む量が僅かに多い。
- ③暗褐色土層 少量のローム粒とローム小ブロックを含む。

第393図 571号住居跡実測図



竈

- ①暗褐色土層 少量の小ロームブロックを含む。
- ②暗褐色土層 少量の焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 少量のローム小ブロックと焼土粒を含む。
- ④暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。(573号住居跡覆土)
- ⑤暗褐色土層 少量のロームブロックを含む。



第394図 571号住居跡竈・出土遺物実測図

571号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
394-1 104	土師器 甕	床面直上 口～体上部 1/4と底部片	口 18.5 高(29.0) 底 9.5	①密、1mm前後の赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へラ削り、砂粒の移動ほとんどなく器表面比較的密。内面ナデにて器表面密。 上半部と底部の接点はないため図上復元。
394-2 104	土師器 甕	床面直上 1/2残存	口 13.8 高 — 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を大量に2～4mmの片岩粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	胴部外面へラ削り、砂粒の移動は少ない。 内面ナデにて器表面密。

572号住居跡 (第395～397図、図版60・104)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、72・73—27・28グリッドに位置する。

概要 北側で古墳時代の573号住居と重複しており、本住居が573号住居の覆土上面を掘り込んでいる。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを含む土で造られている。573号住居覆土上の床面は明確でない場所も多い。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。床下土坑が掘られている。

規模 東西2.38m、南北3.38mである。壁高は残りの良い南西コーナー部分で33cmである。床下土坑の深さは第116図を参照。

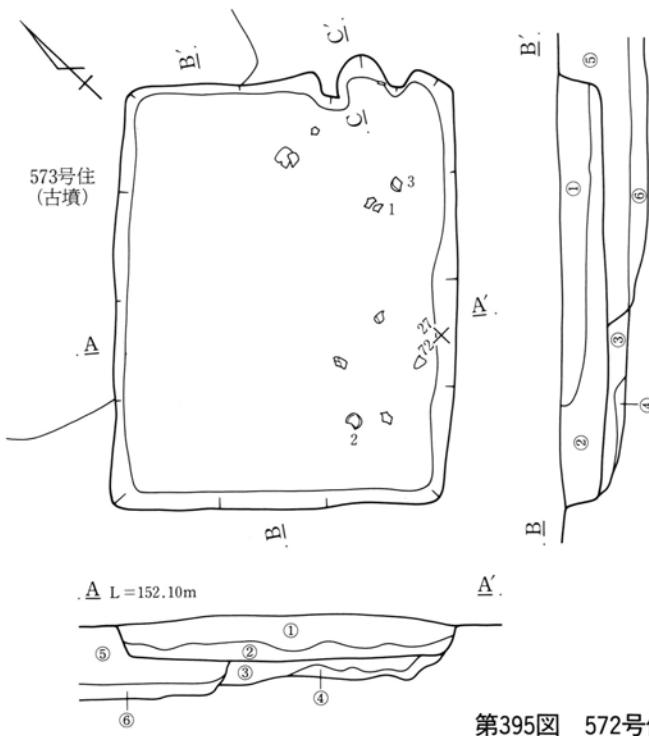
遺物 線刻をもつ土師器の坏が出土している。

(竈)

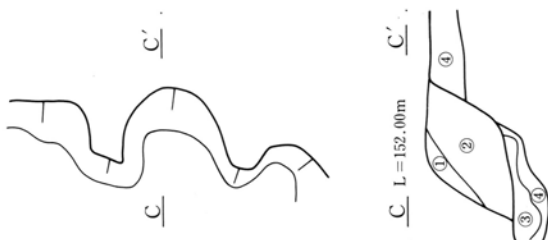
位置 東壁面の南寄りに造られている。焚口と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 小さな竈であり残りが悪く、袖石等は全く出土していない。袖部分からローム粒の出土は少なく、竈内からの焼土粒の出土も少ない。

規模 煙道方向38cm、燃焼部幅41cmである。



第395図 572号住居跡実測図



第396図 572号住居跡竈実測図

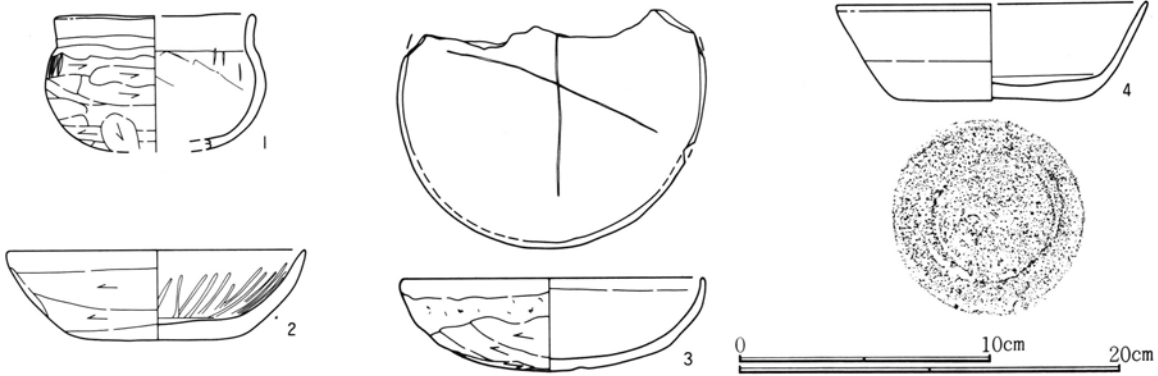
572号住居跡

- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量の白色軽石粒とローム粒を含む。
- ③褐色土層 多くのロームブロックを含む。
- ④暗黄褐色土層 地山のロームを主とする。
- ⑤173号住居跡覆土
- ⑥173号住居跡床下覆土

竈

- ①暗褐色土層 少量の白色軽石粒とローム粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量の焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 少量のローム粒・ロームブロック・焼土粒を含む。
- ④暗褐色土層 多くのロームブロックを含む。





第397図 572号住居跡出土遺物実測図

572号住居跡出土遺物観察表

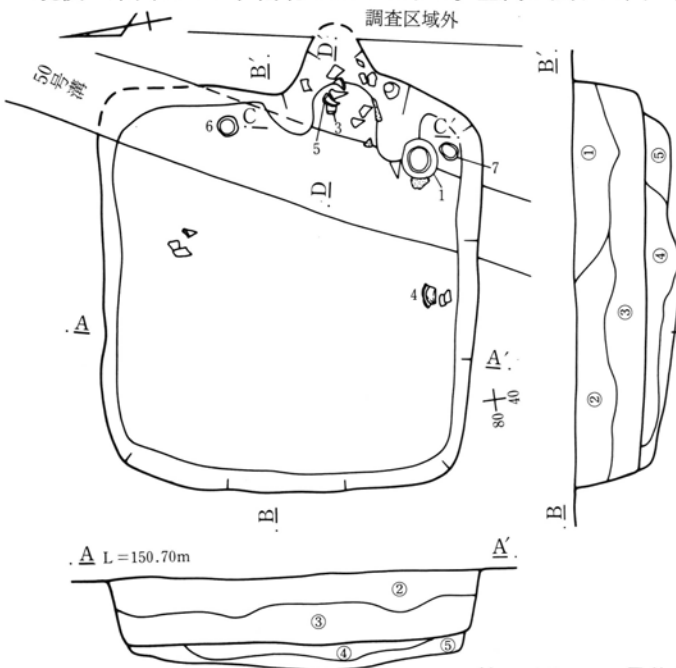
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
397-1 104	土師器 小型甕	床面-4 3/4残存	口(10.6) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面~胴部外面へラ削り、削りの単位は明瞭である。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
397-2 104	土師器 坏	床面+8 ほぼ完形	口11.6 高3.5 底7.0	①やや粗、1~2mmの砂粒を少量 含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面削りと思われるが器表面密でへラ削りの単位不明。 内面に多くの暗文あり。
397-3 104	土師器 坏	床面+9 3/4残存	口11.8 高3.7 底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り、削りの単位は明瞭でない。 体部ナデ。内面ナデにて器表面密。 黒斑認められず。内面に線刻あり。
397-4 104	須恵器 坏	覆土 口縁部4/5 底部完形	口(12.0) 高3.8 底7.5	①密、1mm以下の長石粒を大量に 含む。②還元焰、硬質 ③灰褐色	底面右回転へラ削り。 固く焼締られている。 内面に降灰によると思われる自然釉が大量に附着。

577号住居跡 (第398~400図、図版61・104)

位置 本住居跡は第8次調査区にあり、81-41グリッドに位置する。

概要 東側に位置する竈煙道先端部分は調査区域外となっている。また東側覆土上面を50号溝により削られている。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模 東西3.18m、南北2.98mである。壁高は残りの良い南壁面部分で44cmである。



遺物 竈内より土師器の甕や坏が出土している。  
破片の出土量が多い。

(竈)

位置 東壁面を掘り込んで造られている。両袖  
部分と燃烧部の多くは床面上に位置する。  
構造 袖石を含めて石材は出土していない。袖  
部分はローム粒やロームブロックを少量

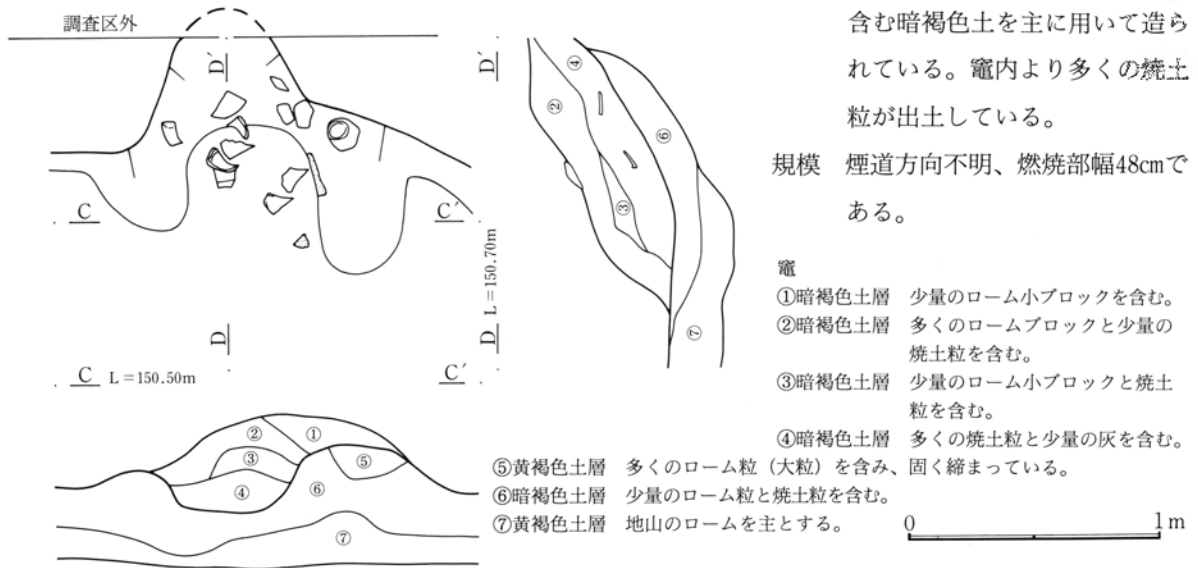
577号住居跡

- ①黒褐色土層 多くの白色軽石粒とロームブロックを含む。  
(50号溝覆土)
- ②暗褐色土層 多くの白色軽石粒と少量のローム小ブ  
ロックを含む。
- ③暗褐色土層 多くのロームブロックと少量の焼土粒・灰  
を含む。
- ④褐色土層 多くのロームブロックとローム粒を含む。
- ⑤暗黄褐色土層 地山のロームを主とする。

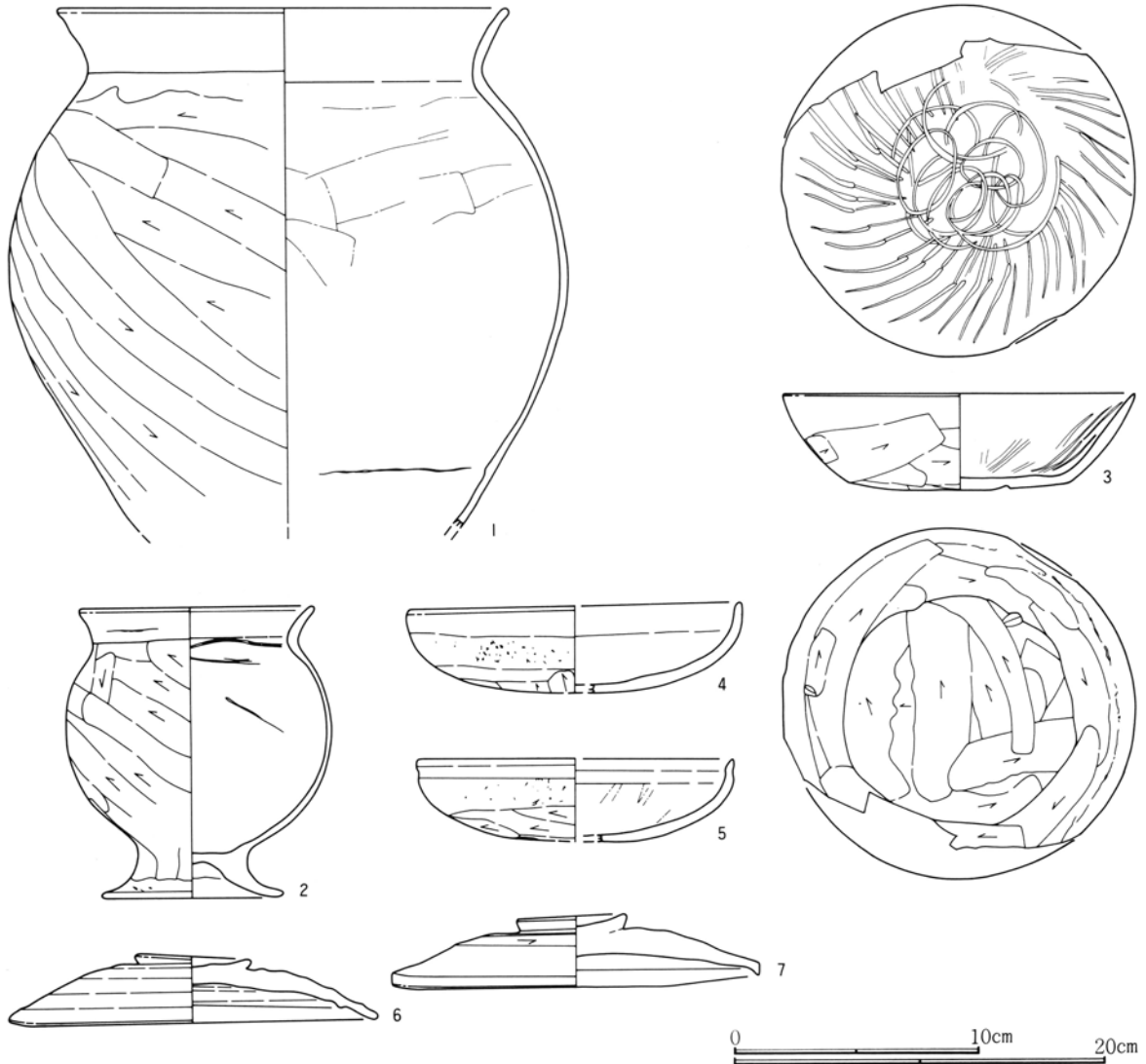
第398図 577号住居跡実測図



第4章 奈良時代の遺構と遺物



第399図 577号住居跡竈実測図



第400図 577号住居跡出土遺物実測図

577号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
400-1 104	土 師 器 甕	床面直上 口~胴ほぼ 完形	口 24.0 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部へラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
400-2 104	土 師 器 台付小型 甕	覆土 %残存	口 12.5 高 15.7 底 9.5	①密、1mm以下の砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	台部~胴部外面へラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
400-3 104	土 師 器 坏	竈内 口縁部% 底部完形	口 14.3 高 4.0 底 9.0	①密、1~2mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	底部と体部へラ削り。削りの単位は明瞭である。 内面に幅の広い工具にて全面暗文。
400-4 104	土 師 器 坏	床面+19 %残存	口(13.4) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面中央へラ削り。周辺部ナデ。 内面ナデにて器表面密。 固い焼成である。
400-5 104	土 師 器 坏	竈内 %残存	口(12.6) 高 — 底 —	①密、1mm前後の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面中央へラ削り。周辺部ナデ。内面ナデにて器表面密。
400-6 104	須 恵 器 蓋	床面+5 口縁一部欠 損、他完形	口 15.0 高 — 底 —	①密、1mm以下の石英粒を含む。 ②還元焰、軟質 ③灰色	外面全体が粗れている。摘みは低い。 カエリも低く、端部でなく内側に付く。
400-7 104	須 恵 器 蓋	床面+24 ほぼ完形	口 15.0 高 — 底 —	①やや粗、1~2mmの石英粒を多く含む。 ②還元焰、硬質、焼締 ③灰白色	天井部へラ削り。摘みは低く口縁端部は短い折り。

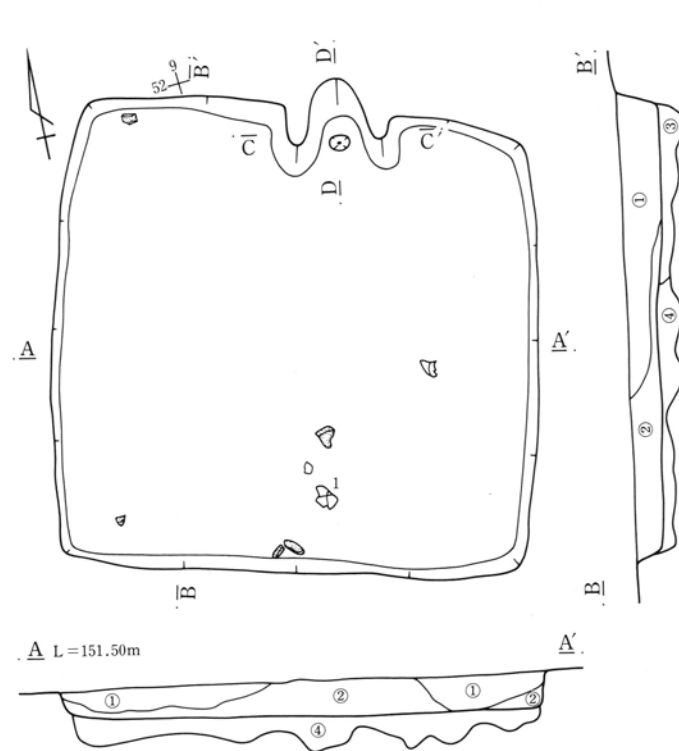
583号住居跡 (第401~404図、図版61・104・120)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、52-9・10グリッドに位置する。

概要 他の遺構と重複していない比較的残りの良い住居である。床下調査によって小穴は多く確認されたが、貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模 東西3.87m、南北3.74mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で41cmである。

遺物 破片を含め出土量は少なく、図示できた遺物も2点のみである。



(竈)

位置 北壁面を掘り込んで造られている。  
両袖部分と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 袖石を含めて石材は出土していない。  
袖部分は多くのローム粒や少量のロームブロックを含む暗褐色土を主に用いて造られている。竈内より多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向73cm、燃焼部幅43cmである。

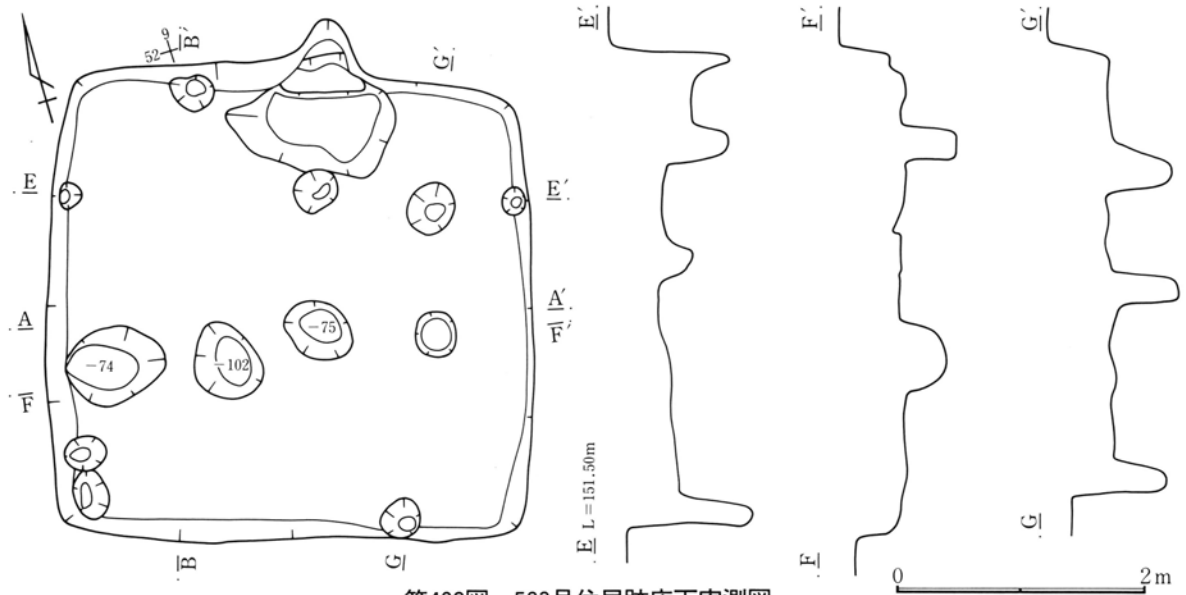
583号住居跡

- ①暗褐色土層 僅かにローム粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量のローム粒とロームブロックを含む。
- ③暗褐色土層 僅かにローム粒とローム小ブロックを含む。
- ④褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

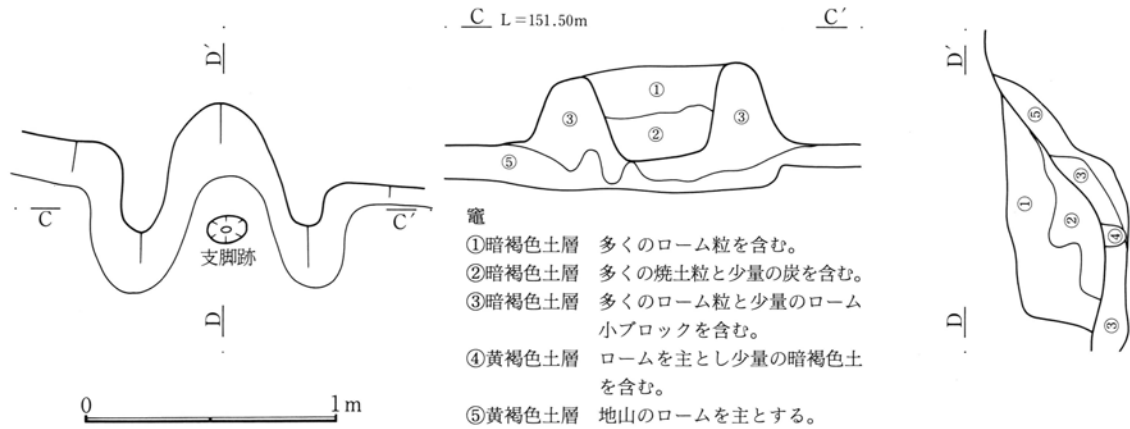
第401図 583号住居跡実測図



第4章 奈良時代の遺構と遺物



第402図 583号住居跡床下実測図



- 竈
- ①暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
  - ②暗褐色土層 多くの焼土粒と少量の炭を含む。
  - ③暗褐色土層 多くのローム粒と少量のローム小ブロックを含む。
  - ④黄褐色土層 ロームを主とし少量の暗褐色土を含む。
  - ⑤黄褐色土層 地山のロームを主とする。

第403図 583号住居跡竈実測図



第404図 583号住居跡出土遺物実測図

583号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
404-1 104	土 師 器 坏	床面+10 口縁一部欠 他完形	口 10.1 高 2.7 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り、胎土が粉状で削りの単位不明瞭。 黒斑認められず。
404-2 120	石 製 品 有孔板状	覆土 破 片	幅 3.5 厚 0.7	孔径 0.5 重 13.5	頁岩。細長い板状の石製品であり中央部に孔径0.5cmの小穴が穿孔されている。

593号住居跡 (第405~408図、図版61・105・114)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、84-41・42グリッドに位置する。

概要 3軒の住居と重複しており、本住居が最も新しく奈良時代の565号住居を床下部分まで深く掘り込んで

いる。3軒の新旧関係は566→565→593号住居である。

**構造** 床面は多くのローム粒とロームブロックを含む土で造られている。竈右側に小さな貯蔵穴が掘られている。小穴は3本掘られているが、柱穴は掘られてない。竈手前部分に床下土坑が掘られている。

**規模** 東西3.62m、南北3.42mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で64cmである。小穴1は径38cm深さ48cm、小穴2は径38cm深さ32cm、小穴3は径43cm深さ47cmである。床下土坑は径150cm×111cm深さ17cmである。

**遺物** 竈内より底部を欠損した甕が多く出土している。

(竈)

**位置** 東壁面を掘り込んで造られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置する。

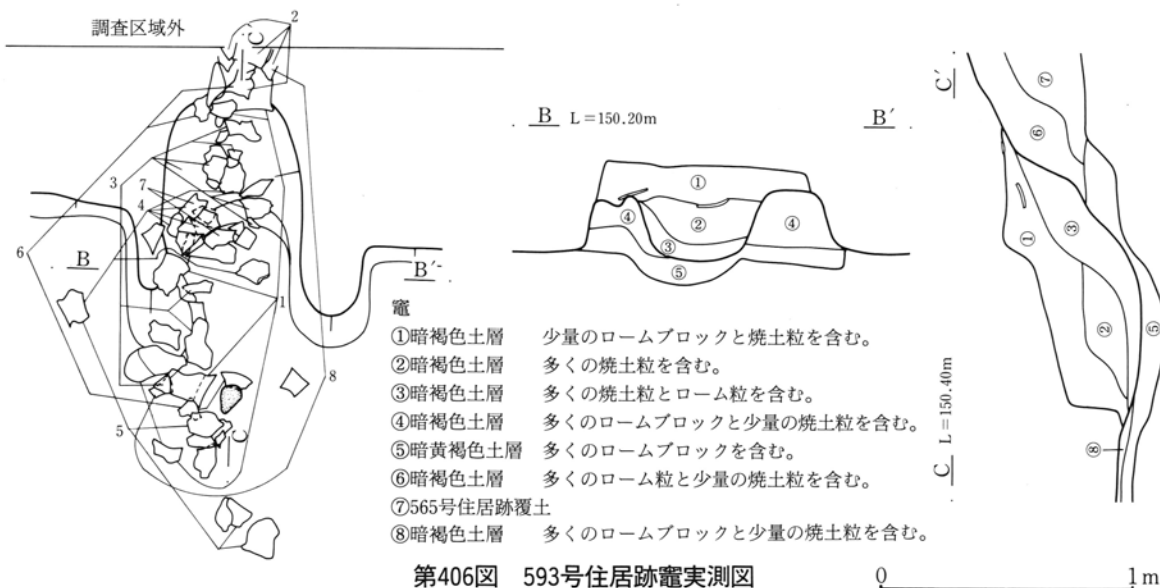
**構造** 袖石や天井石等の石は出土していない。左袖部分から煙道部にかけて甕が多く出土している。甕はさ

らに調査区域外にも伸びているため、煙道として多くの甕が使用されていたものと思われる。竈内から多くの焼土粒が出土している。

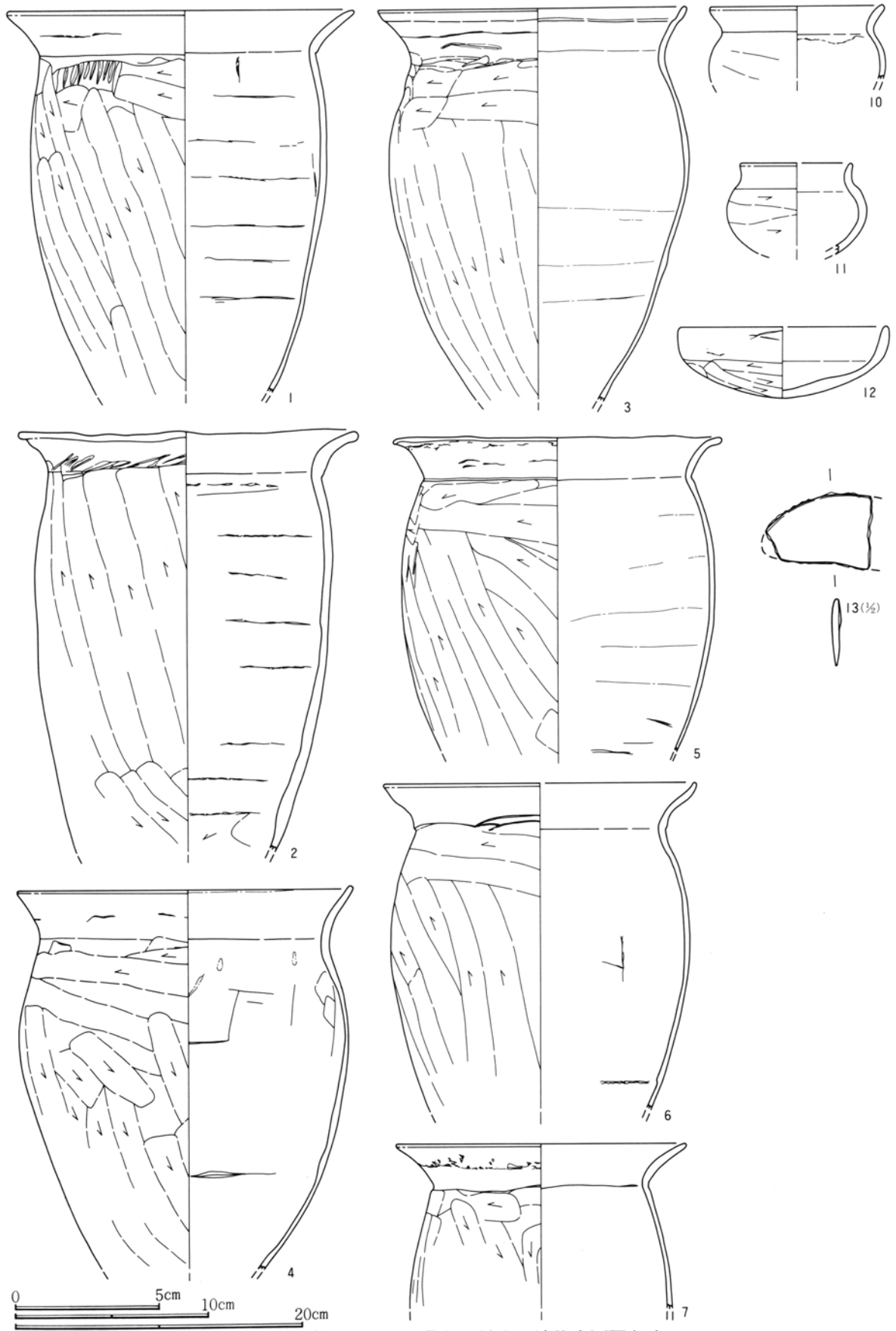
**規模** 煙道方向98cm、燃焼部幅46cmである。



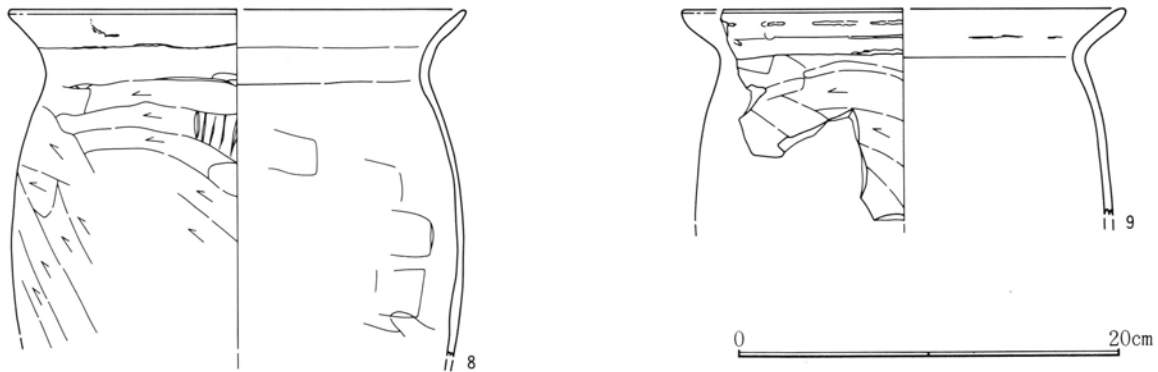
第405図 593号住居跡実測図



第406図 593号住居跡竈実測図



第407図 593号住居跡出土遺物実測図(1)



第408図 593号住居跡出土遺物実測図(2)

593号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
407-1 105	土師器 甕	竈内 口~胴上完 胴下部3/4	口 24.4 高 — 底 —	①密、少量の雲母粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部ヘラ削り。横方向のヘラ削りは少ない。 胴部内面に輪積の痕跡が残る。
407-2 105	土師器 甕	竈内 口~胴上1/2 胴下部1/4	口 23.9 高 — 底 —	①やや粗、2~3mmの砂粒と片岩 粒を含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。削りの単位は明瞭でない。 口縁部との境に削りによる段を持つ。 胴部に輪積の痕跡が残る。
407-3 105	土師器 甕	竈内 1/2残存	口 21.6 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多 く含む。赤色粒含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り。多くの小さな砂粒が移動している。 口縁部中央に輪積痕。 内面ナデにて器表面密。
407-4 105	土師器 甕	竈内 口~胴上完 胴下部3/4	口 23.5 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多 く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り。小さな砂粒が多く移動している。 口縁部外面に輪積痕。
407-5 105	土師器 甕	竈内 口縁部3/4 胴部1/2	口 22.8 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多 く含む。 ②酸化焰、硬質 ③黒褐色、一部橙色	胴部外面ヘラ削り。頸部に低い段を持つ。 口縁部は波状で水平でない。 内外面吸炭により黒褐色部分が多い。
407-6	土師器 甕	床面+15 口縁部1/2 胴部1/2	口(20.1) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多 く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部ヘラ削り。 口縁部との境に段を持つ。 内側胴下半に接合痕。
407-7 105	土師器 甕	床面+20 口縁部3/4 胴部1/2	口 20.4 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多 く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 口縁部中央に輪積痕。
408-8 105	土師器 甕	床面+13 口~胴1/2	口(24.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多 く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 輪積痕の痕跡が残る。 内面ナデにて器表面密。
408-9	土師器 甕	覆土 口縁部1/4	口(23.5) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多 く含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部ヘラ削り。口縁部横ナデ。 口縁上部に輪積痕あり。 内面ナデにて器表面密。
407-10	土師器 小型甕	覆土 口縁部完形 胴上部1/4	口 12.2 高 — 底 —	①密、2~3mmの赤色粒を多く含 む。 ②酸化焰、硬質 ③褐色	胴部外面ヘラ削りと思われるが、器表面が粗れており 不明。内面ナデにて器表面密。
407-11	土師器 小型甕	覆土 1/2残存	口(8.0) 高 — 底 —	①密、少量の角閃石を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。
407-12	土師器 坏	覆土 口縁部1/2 底部1/2	口(11.0) 高 3.7 底 —	①密、多くの角閃石を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動は少ない。 口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。
407-13 114	鉄製品 鎌	覆土	長 (3.7) 厚 0.3	幅 2.6 重 5.8	鎌の先端部分と思われる。 錆化が進行している。

594号住居跡 (第409~411図、図版61)

位置 本住居跡は、第7次調査区にあり、86-37グリッドに位置する。

概要 西側部分は調査区域外となっている。小さな住居であり、貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

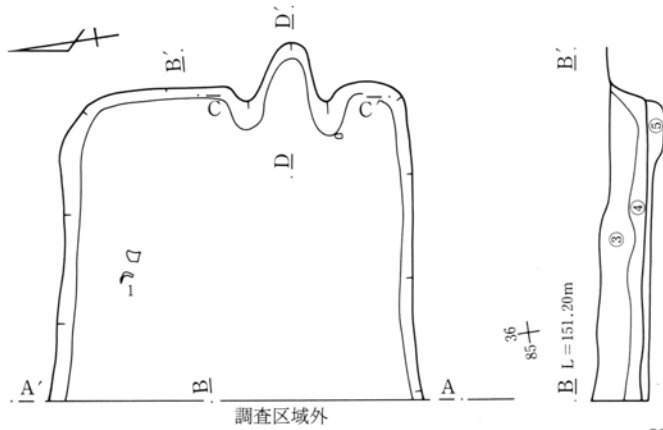
規模 東西不明、南北2.80mである。壁高は残りの良い北壁面部分で35cmである。

第4章 奈良時代の遺構と遺物

遺物 図示できたのは小型甕の口縁部片1点のみである。

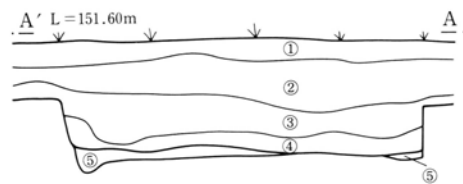
(竈)

位置 東壁面を掘り込んで造られている。住居が小さいためか、焚口部分は床面上に位置するが、燃焼部の多くは壁面を掘り込んで造られている。



構造 ローム粒やロームブロックを少量含む暗褐色土を主に用いて竈は造られている。石類は使われていないようである。燃焼部壁面は僅かに焼土化していたが、竈内から出土し焼土粒は少量である。

規模 煙道方向65cm、燃焼部幅46cmである。

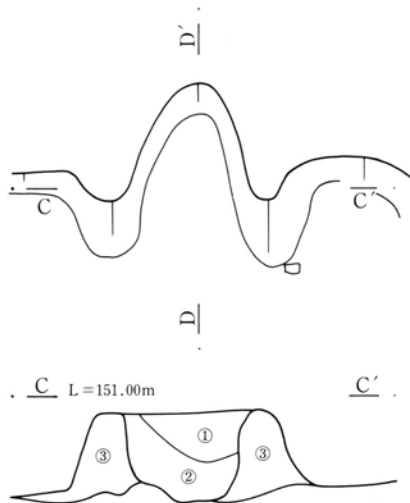


594号住居跡

- ①耕作土
- ②暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
- ③暗褐色土層 少量のローム粒・焼土粒を含む。
- ④暗褐色土層 多くのローム小ブロックと少量の焼土粒を含む。
- ⑤暗黄褐色土層 ロームブロックとローム粒を主とする。

第409図 594号住居跡実測図

0 2m

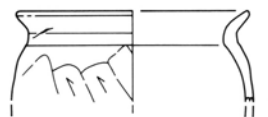


竈

- ①暗褐色土層 少量の焼土粒とローム小ブロックを含む。
- ②暗褐色土層 ①層に近いがやや多くの焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 少量のローム粒とロームブロックを含む。

第410図 594号住居跡竈実測図

0 1m



第411図 594号住居跡出土遺物実測図

0 20cm

594号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
411-1	土 甕 器 甕	床面+3 口縁~肩	口(12.0) 高 - 底 -	①密、2~3mmの赤色粒をわずかに含む。 ②酸化焰、硬質 ③褐色	胴部ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。 頻繁に使われたためか磨耗がはげしい。



598号住居跡 (第412・413図、図版62)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、91・92—42・43・44グリッドに位置する。

概要 南東部分は調査区域外となっている。北側に表土を掘り込んで造られた県道があり、県道に向かって表土が削られているために住居覆土上面が削られている。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。図示できる遺物はなかったが、破片より8世紀前期の遺構と判断した。

規模 東西4.40m、南北方向不明である。壁高は残りの良い西壁面部分で15cmである。

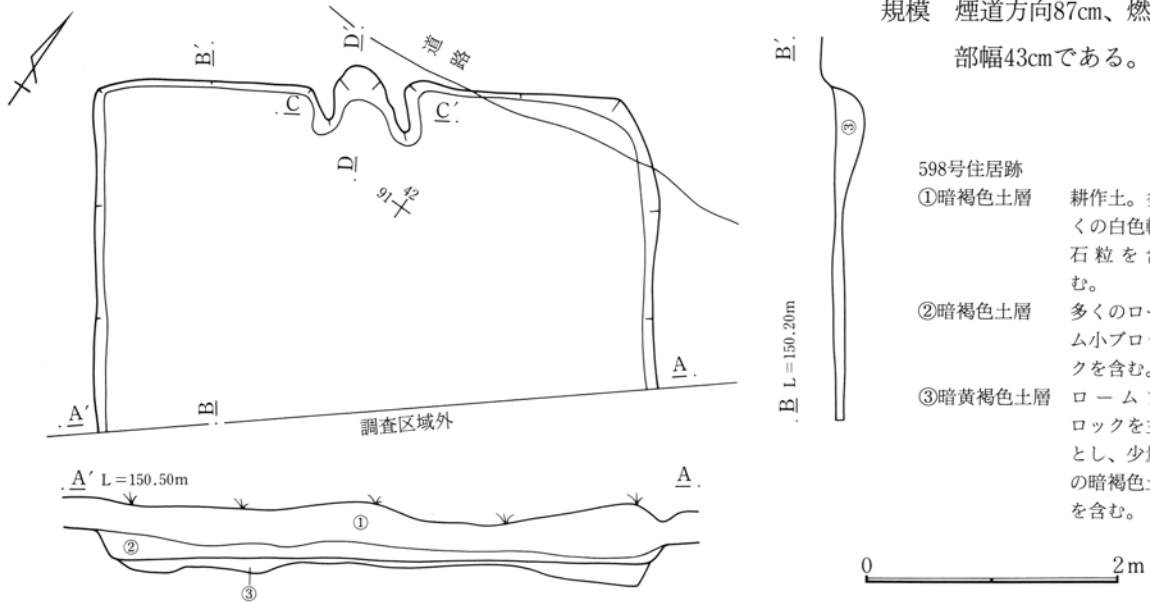
遺物 土師器甕の口縁部1片が出土しているだけである。

(竈)

位置 北壁面を掘り込んで造られている。両袖部分と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 住居同様に残りの悪い竈である。袖石を含めて石材は出土していない。袖部分はローム粒やロームブロックを含む暗褐色土を主に用いて造られている。竈内より焼土粒がまとまって出土している。

規模 煙道方向87cm、燃烧部幅43cmである。

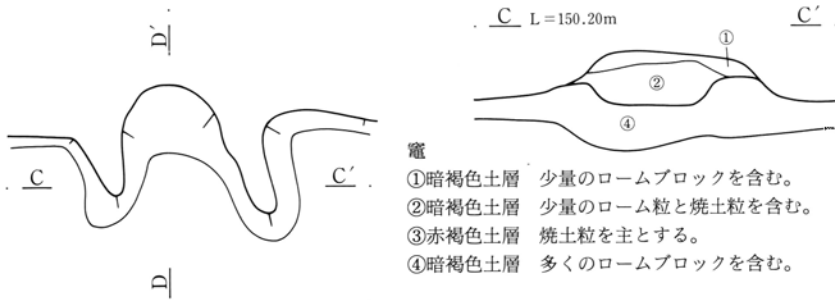


598号住居跡

- ①暗褐色土層 耕作土。多くの白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム小ブロックを含む。
- ③暗黄褐色土層 ロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。

0 2m

第412図 598号住居跡実測図



竈

- ①暗褐色土層 少量のロームブロックを含む。
- ②暗褐色土層 少量のローム粒と焼土粒を含む。
- ③赤褐色土層 焼土粒を主とする。
- ④暗褐色土層 多くのロームブロックを含む。

第413図 598号住居跡竈実測図

0 1m

599号住居跡 (第414～416図、図版62・105・106)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、94—23グリッドに位置する。

概要 東側壁面部分は調査区域外となっている。小さな住居であり、貯蔵穴は掘られているが、柱穴は掘られていない。住居中央の床下2箇所から粘土が少量ながら出土している。

規模 東西不明、南北3.40mである。壁高は残りの良い南壁面部分で72cmである。貯蔵穴は径68×50cm深さ

第4章 奈良時代の遺構と遺物

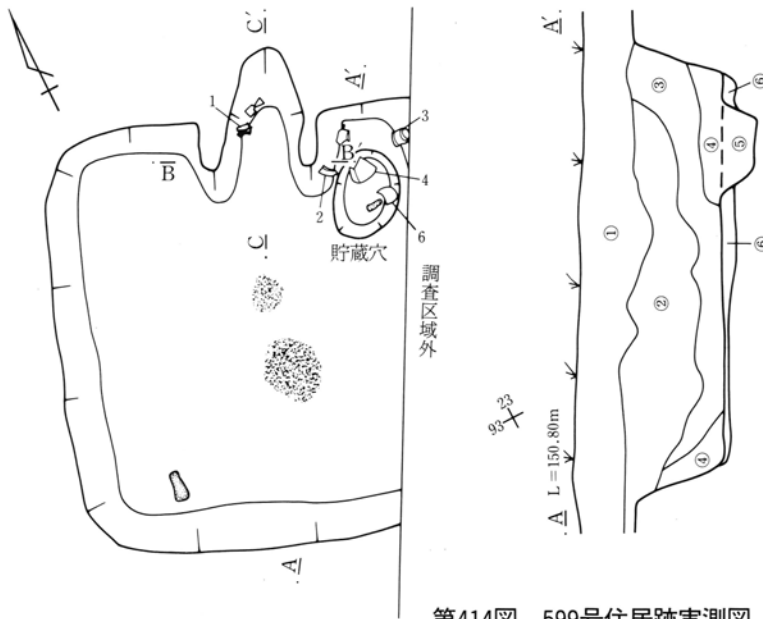
28cmである。

遺物 平安時代の墨書土器が混入している。

(竈)

位置 北壁面を掘り込んで造られている。焚口部分は床面上に位置するが、燃烧部の多くは壁面を掘り込んで造られている。

構造 ローム粒やロームブロックを少量含む暗褐色土を主に用いて造られている。石類は使われていないようである。煙道部先端部分が僅かに焼土化している。燃烧部床面に近い覆土中から多くの焼土粒が出土している。



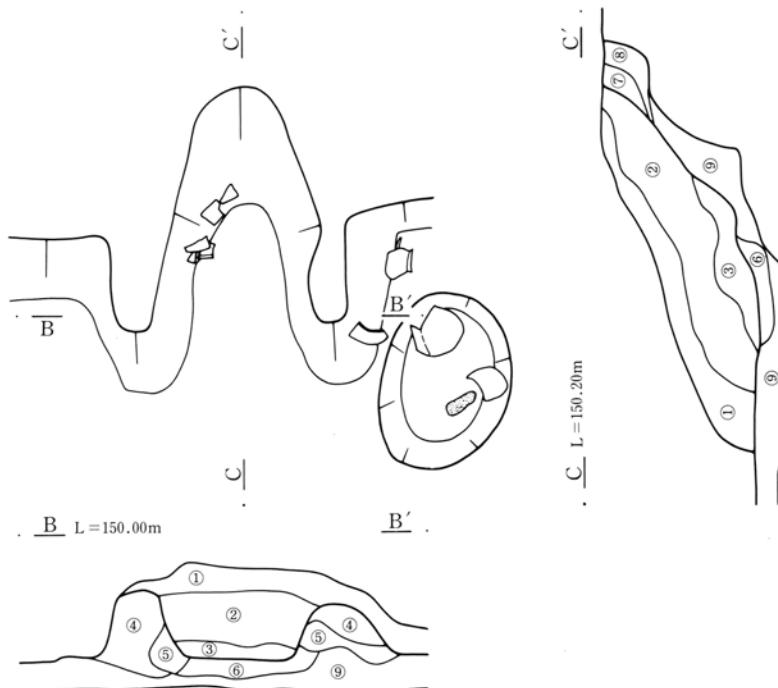
規模 煙道方向118cm、燃烧部幅54cmである。

599号住居跡

- ①暗褐色土層 耕作土。多量に白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量の白色軽石粒とローム小ブロックを含む。
- ③暗褐色土層 多くのロームブロックを含む。
- ④暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ⑤暗褐色土層 多くの焼土粒と焼土ブロックを含む。
- ⑥黄褐色土層 地山のロームを主とする。

0 2m

第414図 599号住居跡実測図

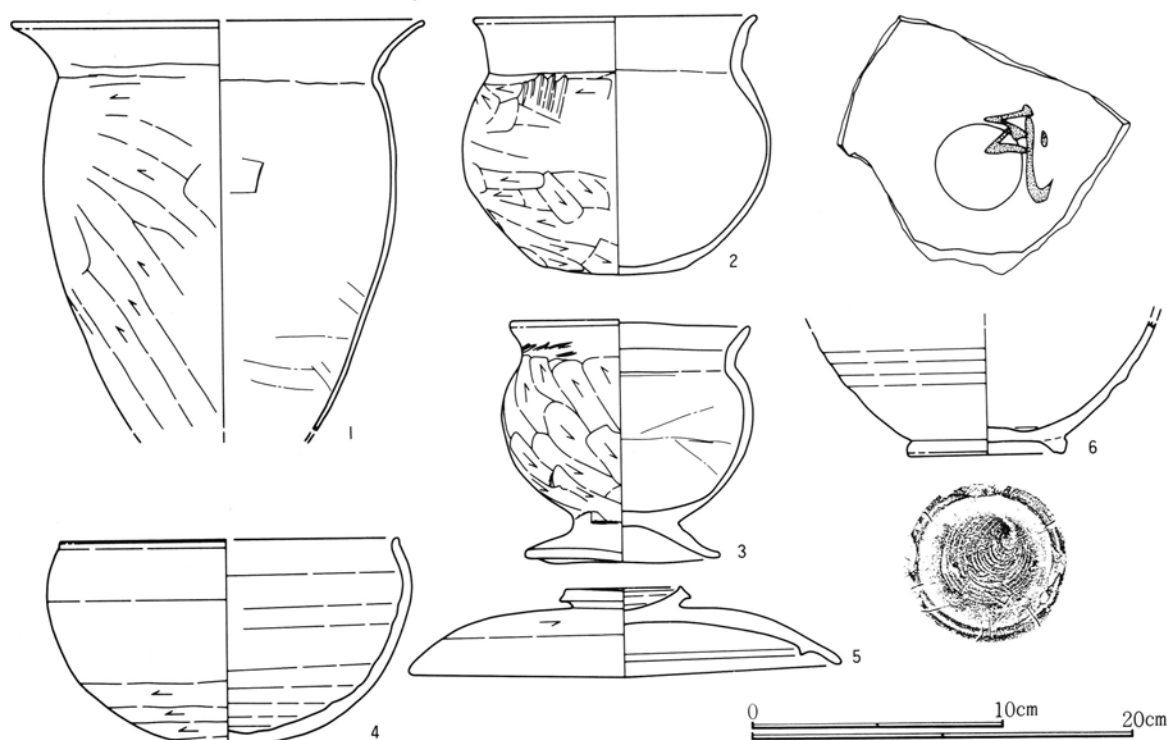


竈

- ①暗褐色土層 少量の白色軽石粒とローム粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ③暗赤褐色土層 多くの焼土粒を含む。
- ④暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ⑤暗褐色土層 少量のローム粒を含む。
- ⑥暗褐色土層 少量のローム粒と焼土粒を含む。
- ⑦暗赤褐色土層 多くの焼土粒を含む。
- ⑧暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
- ⑨暗黄褐色土層 地山のロームを主体とし、少量の暗褐色土を含む。

0 1m

第415図 599号住居跡竈実測図



第416図 599号住居跡出土遺物実測図

599号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
416-1	土師器 甕	床面+12 口縁部 $\frac{1}{4}$ 他 $\frac{1}{2}$	口(22.0) 高— 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。指頭圧痕の痕跡が残る。
416-2 105	土師器 小型甕	床面+14 $\frac{1}{2}$ 残存	口 14.8 高 13.5 底 7.0	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部外面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。
416-3 105	土師器 台付小型甕	床面+3 ほぼ完形	口 12.4 高 12.8 底 10.2	①密、多くの雲母粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	台部横ナデ。胴部外面へら削り。頸部にへらの当たった痕跡あり。内面ナデにて器表面密。少しゆがんでいる。
416-4 106	須恵器 鉢	床面+8 口縁部 $\frac{1}{2}$ 他 $\frac{1}{3}$	口(17.6) 高 10.6 底—	①密、1mm以下の長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底部外面へら削り。口縁部は短く内傾後直立気味に立ち上がる。ていねいなつくりである。
416-5 105	須恵器 蓋	覆土 口縁一部欠 他完形	口 17.0 高— 底—	①密、1~2mmの石英粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰白色	天井部へら削り。摘みは断面が菱形を呈し端部をていねいに仕上げている。カエリは低いがていねいに作り出している。
416-6 106	須恵器 塊	床面+1 口縁下部 $\frac{1}{2}$ 底部完形	口— 高— 底 6.0	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②還元焰、軟質 ③浅黄色	底面右回転糸切り。高台の貼り付けは雑。内側底面に「武」と思われる墨書あり。

605号住居跡 (第417・418図、図版62・106・129)

位置 本住居跡は第10次調査区にあり、46・47-71・72グリッドに位置する。

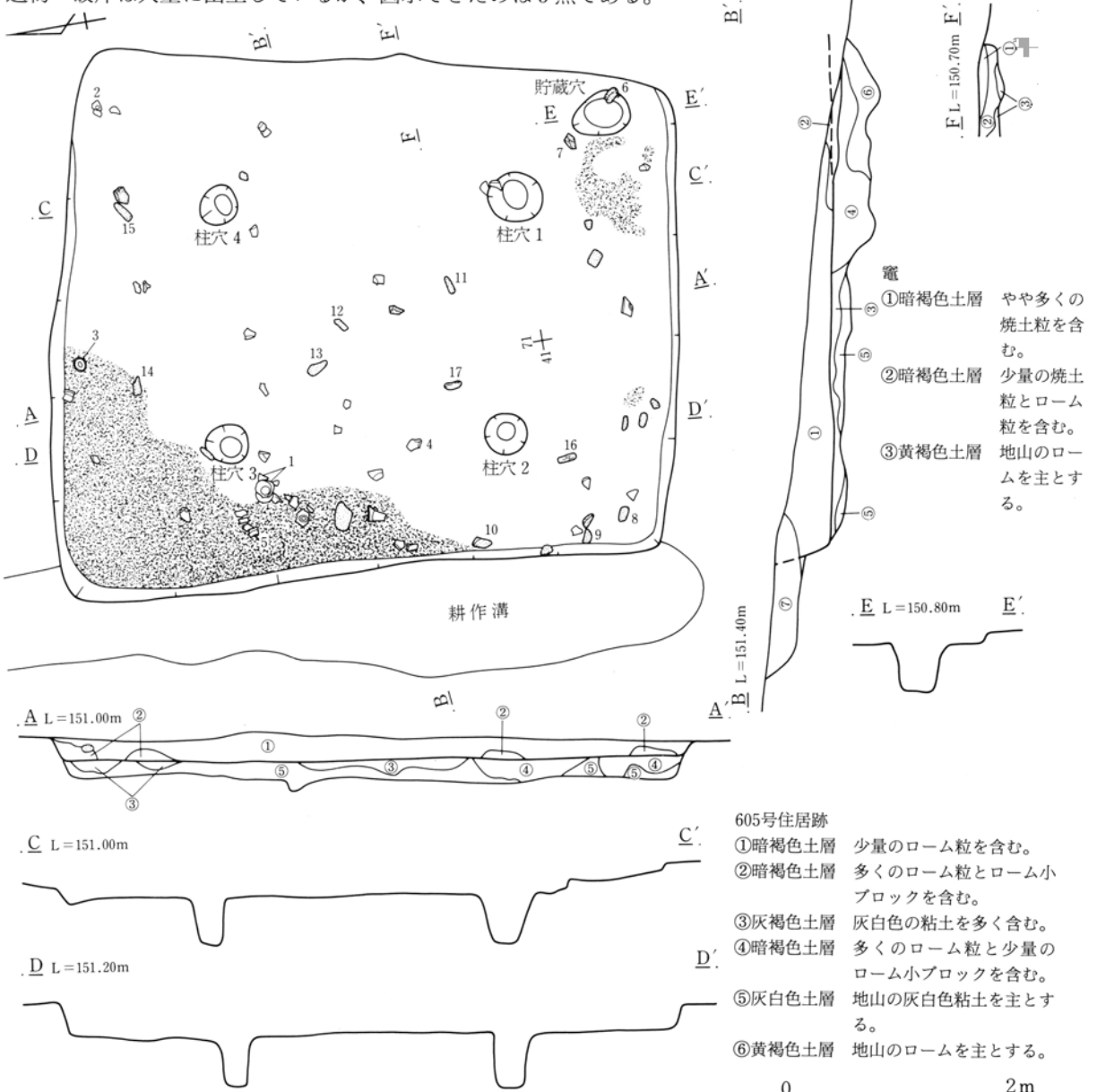
概要 東側が谷地となる傾斜面に位置し、住居西側は残っているが、東側の壁面と床面及び竈は残っていない。竈右側に灰白色粘土が多く持ち込まれている。住居はロームを掘り抜きローム下の灰白色粘土層を一部掘り込んで造られている。竈は東壁面に造られているが、上面の多くは削られて下部分が僅かに残っただけである。

構造 床面はローム粒とロームブロックを多く含む土で造られているが、灰白色粘土を多く含む土も用いられている。竈右側に貯蔵穴がまた床面に柱穴が4本掘られている。

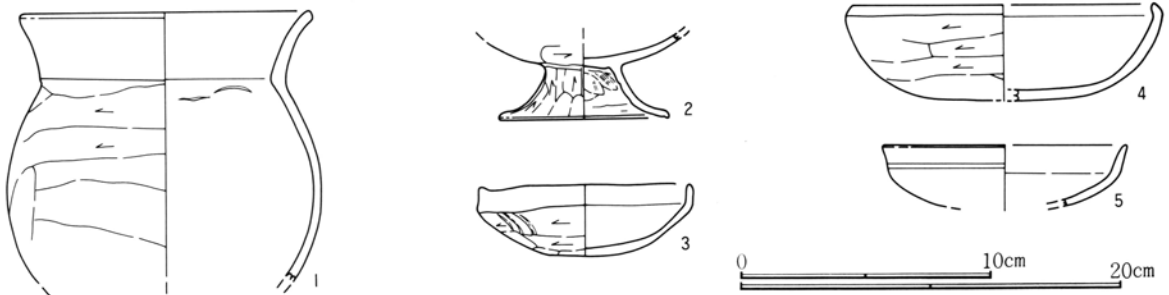
第4章 奈良時代の遺構と遺物

規模 東西4.72m、南北5.56mである。壁高は残りの良い南壁面部分で24cmである。貯蔵穴は径45cm深さ53cmである。柱穴1は径48cm深さ57cm、柱穴2は径38cm深さ45cm、柱穴3は径36cm深さ46cm、柱穴4は径34cm深さ69cmである。

遺物 破片は大量に出土しているが、図示できたのは5点である。



第417図 605号住居跡実測図



第418図 605号住居跡出土遺物実測図

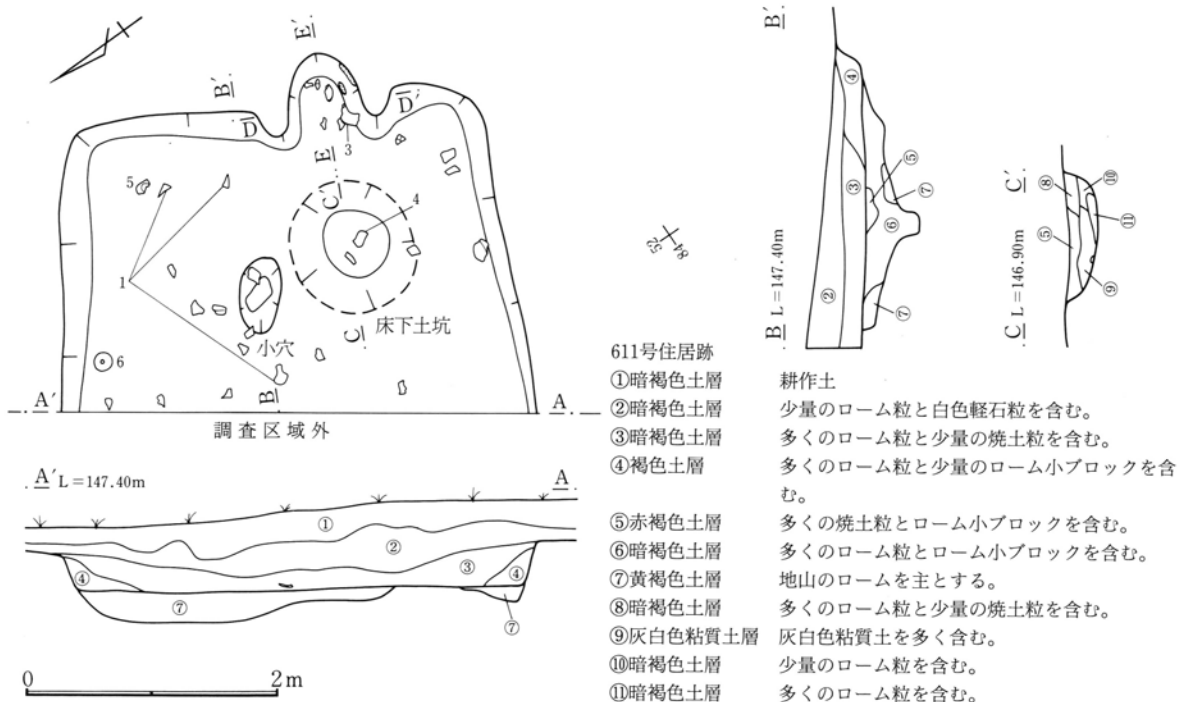
605号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考		
418-1 106	土師器 甕	床面+26 口縁部完形 胴部 $\frac{1}{2}$	口 15.0 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へラナデ。 器表面が粗れており削りの単位明瞭でない。		
418-2	土師器 高坏	床面+2 坏底部 $\frac{1}{2}$ 脚部 $\frac{1}{2}$	口 — 高 — 底 9.0	①密、1~2mmの赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	脚外面及び坏底面へラ削り。 脚内面ナデ。 坏内側の器表面粗れている。		
418-3 106	須恵器 坏	床面+20 完形	口 11.3 高 3.8 底 —	①密、角閃石を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り、削りの単位は明瞭でない。 内面ナデにて器表面密。 黒斑は全く認められず。少しゆがんでいる。		
418-4	土師器 坏	床面+8 $\frac{1}{2}$ 残存	口(16.2) 高(5.0) 底 —	①密、小さな雲母粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り、削りの単位は明瞭でない。 口縁部は短く内傾している。		
418-5	土師器 坏	床面+27 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削りと思われるが削りの単位不明。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。		
挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)(g)				石材・備考
6	129	こも編み石	長 14.0	幅 7.2	厚 3.0	重 390	絹雲母石墨片岩
7	129	こも編み石	長 14.4	幅 6.1	厚 2.9	重 360	緑簾緑泥片岩
8	129	こも編み石	長 13.1	幅 7.4	厚 2.8	重 440	緑簾緑泥片岩
9	129	こも編み石	長 14.1	幅 6.7	厚 2.6	重 400	点紋緑泥片岩
10	129	こも編み石	長 16.5	幅 8.0	厚 6.5	重 620	絹雲母石墨片岩
11	129	こも編み石	長 15.7	幅 6.0	厚 4.9	重 600	絹雲母石墨緑泥片岩
12	129	こも編み石	長 12.0	幅 5.5	厚 3.7	重 370	緑簾緑泥片岩
13	129	こも編み石	長 16.4	幅 6.9	厚 2.7	重 380	緑簾緑泥片岩
14	129	こも編み石	長 15.0	幅 6.0	厚 3.6	重 420	絹雲母石墨片岩
15	129	こも編み石	長 17.9	幅 6.4	厚 3.1	重 460	絹雲母石墨片岩
16	129	こも編み石	長 15.0	幅 7.1	厚 3.6	重 630	絹雲母石墨片岩
17	129	こも編み石	長 15.6	幅 5.7	厚 7.5	重 430	緑簾緑泥片岩

611号住居跡 (第419~421図、図版62・106)

位置 本住居跡は第8次調査区にあり、85-53グリッドに位置する。

概要 西側壁面部分は調査区域外となっている。小さな住居であり、貯蔵穴や柱穴は掘られていない。住居



第419図 611号住居跡実測図

第4章 奈良時代の遺構と遺物

中央の床下に床下土坑と小穴が掘られており、床下土坑の中から灰白色粘質土が出土している。

規模 東西不明、南北3.52mである。壁高は残りの良い南壁面部分で36cmである。床下土坑は径100cm深さ22cm、小穴は径56×30cm深さ30cmである。

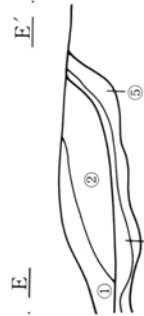
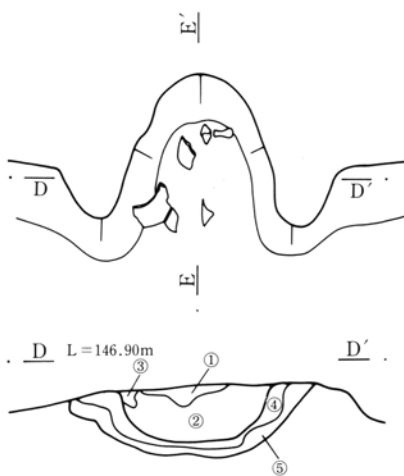
遺物 土師器の甕や坏、須恵器の坏や蓋が出土している。

(竈)

位置 東壁面を掘り込んで造られている。両袖部分は床面上に位置するが、燃烧部の多くは壁面を掘り込んで造られている。

構造 ローム粒やロームブロックを少量含む暗褐色土を主に用いて造られている。石類は使われていないようである。燃烧部覆土中から多くの焼土粒が出土している。

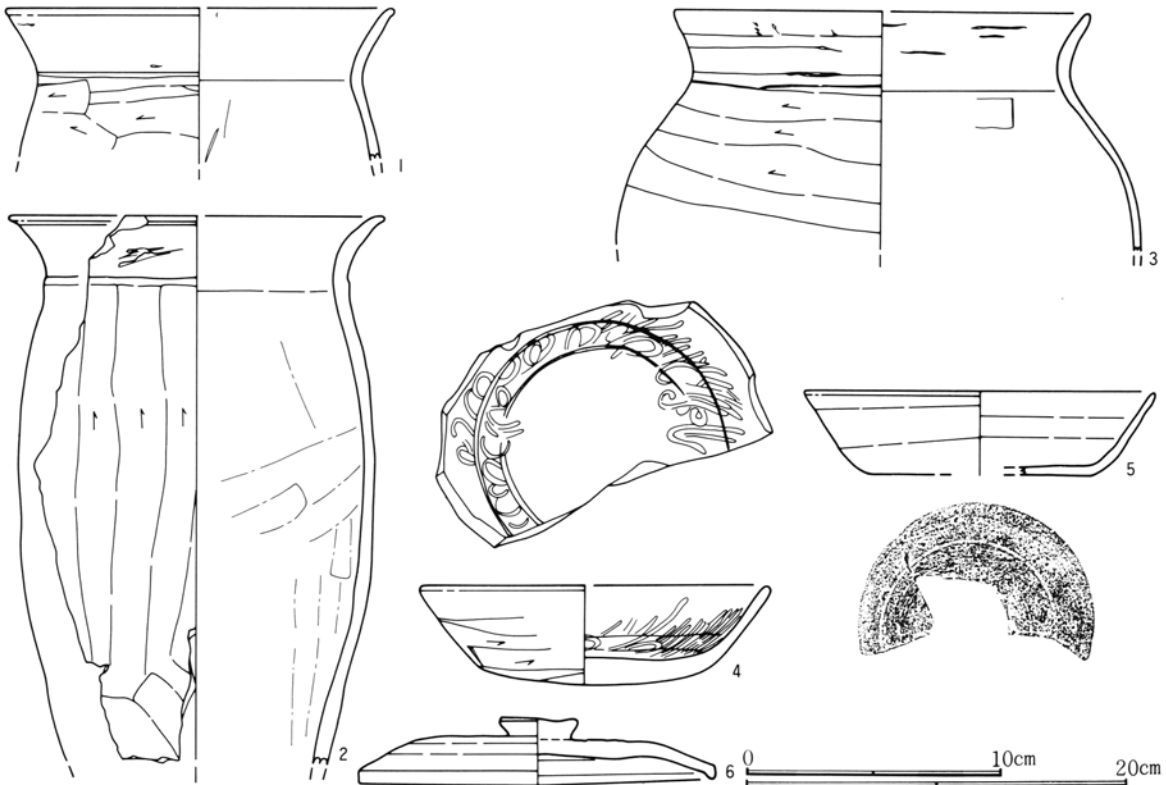
規模 煙道方向73cm、燃烧部幅56cmである。



- 竈
- ①暗褐色土層 少量の白色軽石粒を含む。
  - ②暗褐色土層 少量の焼土ブロックを含む。
  - ③赤褐色土層 多くの赤色粒と焼土ブロックを含む。
  - ④暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
  - ⑤黄褐色土層 地山のロームを主とする。

第420図 611号住居跡竈実測図

0 1m



第421図 611号住居跡出土遺物実測図

611号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
421-1	土師器 甕	床面+7 口縁部 $\frac{1}{2}$	口(20.4) 高— 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒と雲母粒を含む。②酸化焰、硬質 ③外面にぶい黄橙色、内面褐色	胴部外面へラ削り、小さな砂粒が移動し器表面粗い。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
421-2	土師器 甕	覆土 口縁~胴 $\frac{1}{2}$	口(19.8) 高— 底—	①粗、2~3mmの長石粒や片岩粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	胴部外面へラ削り、多くの砂粒が移動し器表面が粗い。 内面ナデにて器表面密。 内面にも大きな砂粒が目立つ。
421-3	土師器 甕	竈内 口縁~体 $\frac{1}{4}$	口(22.0) 高— 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒と雲母粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色。	胴部外面へラ削り。 口縁部に輪積痕が残る。 内面ナデにて器表面密。
421-4	土師器 坏	床面+11 口縁部 $\frac{1}{2}$ 底部 $\frac{1}{4}$	口(14.0) 高4.0 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部外面へラ削り。 内面ナデにて器表面密。 多くの暗文が描かれている。
421-5 106	須恵器 坏	床面+7 $\frac{1}{2}$ 残存	口13.8 高— 底(9.0)	①密、1mm前後の長石粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰色	底面中央に糸切り痕、周辺部右回転へラ削り。 底面はほぼ水平である。全体に器肉が薄い。
421-6 106	須恵器 蓋	床面+6 完形	口14.0 高— 底—	①やや粗、1~3mmの長石粒を含む。②還元焰、硬質 ③灰色	天井部にへラ切りと思われる痕跡が残る。 端部の折りは短く器肉が厚い。

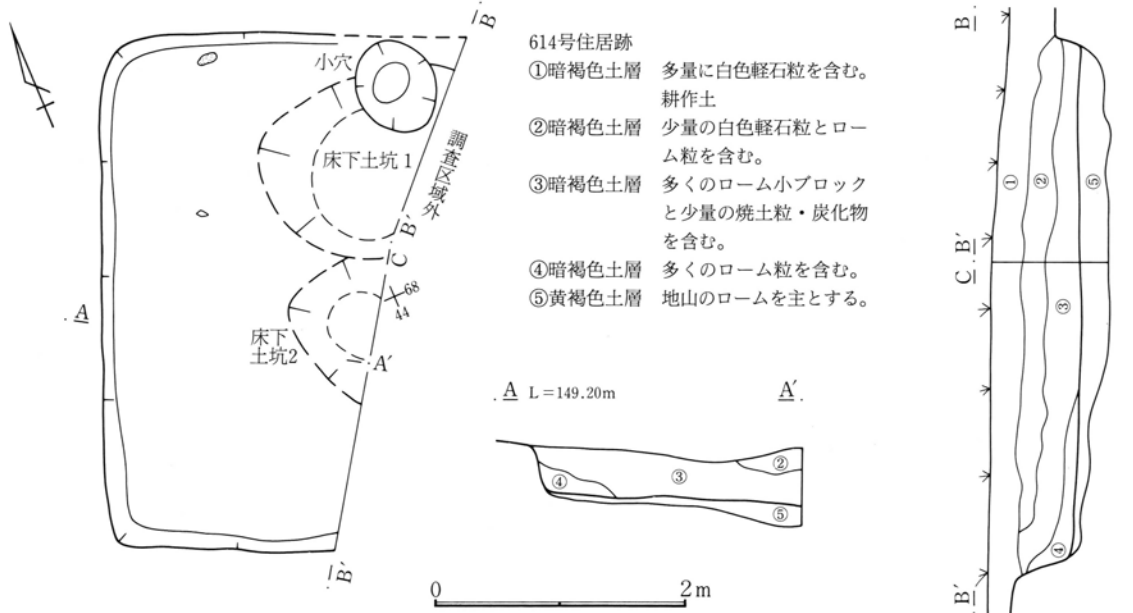
614号住居跡 (第422・423図、図版63)

位置 本住居跡は第10次調査区にあり、68・69-44・45グリッドに位置する。

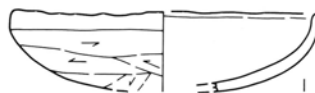
概要 東壁面部分は調査区域外となっている。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。竈も調査区域外に造られているためか確認できない。床下土坑2本と小穴1本が掘られている。

規模 東西不明、南北4.12mである。壁高は残りの良い南西コーナー部分で55cmである。床下土坑1は深さ21cm、床下土坑2は深さ22cm、小穴は径61cm深さ32cmである。

遺物 図示できたのは土師器の坏1点である。



第422図 614号住居跡実測図



第423図 614号住居跡出土遺物実測図

614号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
423-1	土師器 坏	覆土 1/4残存	口(12.0) 高— 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにて特に器表面密。 内面に黒漆と思われる痕跡あり。

616号住居跡 (第424~426図、図版63・106・119・121)

位置 本住居跡は第8次調査区にあり、71-44・45グリッドに位置する。

概要 西北部分は調査区域外となっている。谷地に近い低地となっており、床面の状態は良好ではない。小穴は多く掘られているが、貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模 東西3.68m、南北4.72mである。壁高は残りの良い南壁面部分で29cmである。

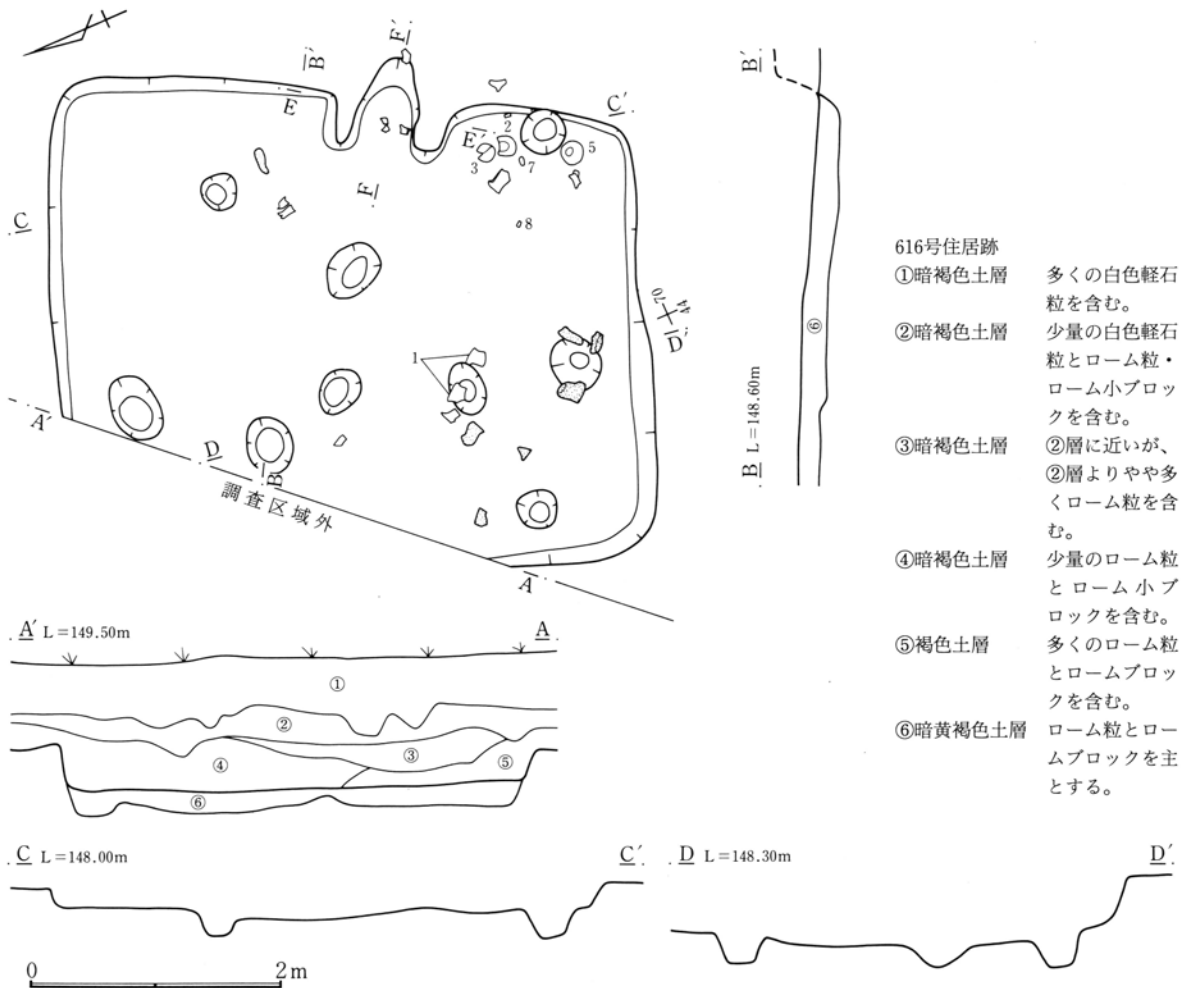
遺物 紡錘車と砥石が出土している。

(竈)

位置 東壁面を掘り込んで造られている。両袖部分は床面上に位置するが、燃烧部の多くは壁面を掘り込んで造られている。

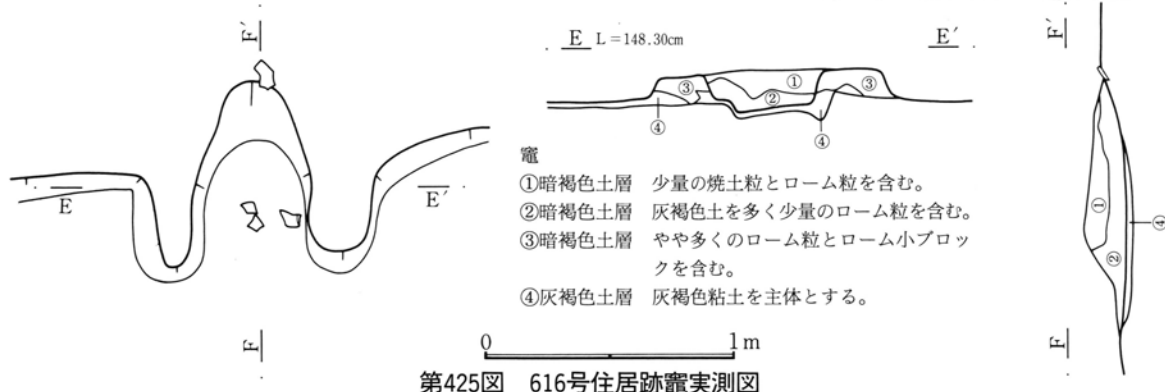
構造 ローム粒やロームブロックをやや多く含む暗褐色土を主に用いて造られている。石類は使われていないようである。竈内より焼土粒の出土は少ない。

規模 煙道方向78cm、燃烧部幅44cmである。

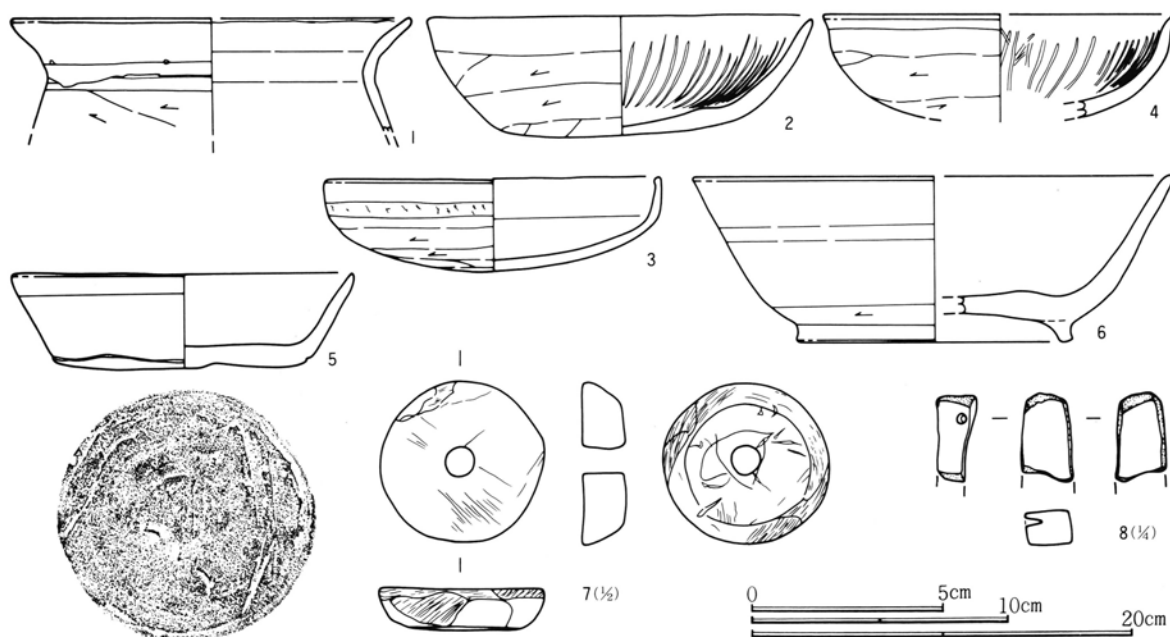


第424図 616号住居跡実測図





第425図 616号住居跡竈実測図



第426図 616号住居跡出土遺物実測図

616号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
426-1	土師器 甕	床面+13 口~頸部½	口(21.0) 高— 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へら削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。 コの字状口縁の甕である。頸部の器肉が厚い。
426-2 106	土師器 坏	床面-7 口縁部¾ 底部完形	口 15.2 高 4.7 底—	①密、1~3mmの赤色粒と片岩粒をわずかに含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色、一部黒褐色	底面と体部外面へら削り。 内面に多くの暗文。 体部外面の一部に黒斑あり。
426-3 106	土師器 坏	床面-8 ¾残存	口 13.2 高 3.6 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③褐色	底面へら削り。体部ナデ。 内面ナデにて器表面密でやや光沢を持つ。 内外面ともに吸炭による黒褐色。
426-4	土師器 坏	竈覆土 口½・底½	口(14.0) 高・底—	①密、1~2mmの赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質③にぶい橙色	底面と体部外面へら削り。 内面に多くの暗文が描かれている。
426-5 106	須恵器 坏	床面-16 完形	口 13.4 高 3.7 底 10.0	①粗、1mm前後の長石粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰白色	底面へら切り後手持へら調整。 底部の器肉が厚い。
426-6 106	須恵器 埴	覆土 口縁部¾ 底部½	口(19.0) 高— 底(10.4)	①密、1mm前後の砂粒ほとんど含まず。②還元焰、硬質 ③灰色	底部回転へら削り。 高台は高くていねいに貼り付けてある。 体部下半へら削り。内側底面磨耗している。
426-7 119	石製品 紡錘車	床面-1	径 4.3/3.3 厚 1.1 孔径 0.7 重 36.7		滑石片岩。広面磨かれて光沢を持つ。側面中砥削り。 狭面ノミの工具痕わずかに残すが磨かれて光沢を持つ。
426-8 121	石製品 砥石	床面-5	長 (4.3) 厚 2.8 幅 2.6 重 36.6		流紋岩。砥石の小破片である。4側面を砥石として使用している。穿孔は未貫通である。

617号住居跡 (第427~429図、図版63・106・115・119)

位置 本住居跡は第8次調査区にあり、77-43グリッドに位置する。

概要 南部分は調査区域外となっている。西壁部分が外側に開き平面形がやや不自然であるが、一軒の住居である。床下土坑は3本掘られているが、貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

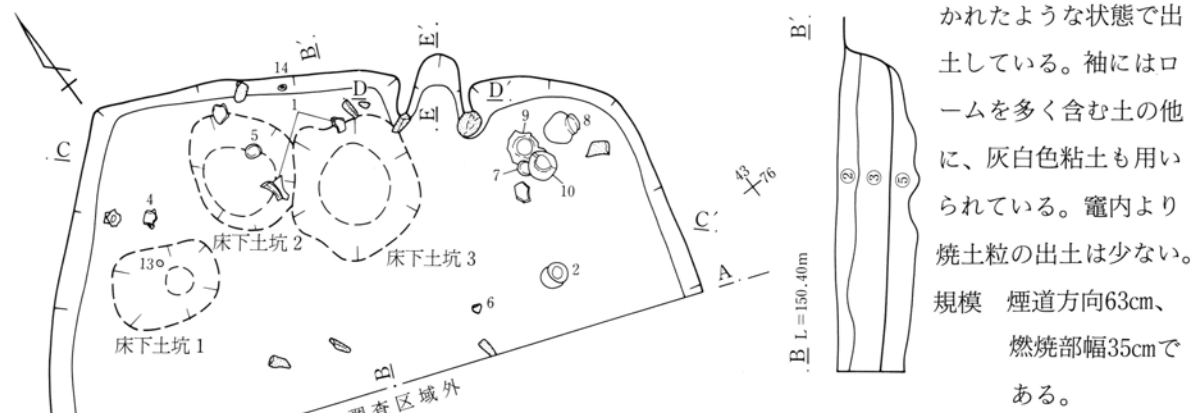
規模 形がやや不自然であるため大きさは不明である。壁高は残りの良い南西壁面部分で54cmである。床下土坑1は径88×52cm深さ32cm、床下土坑2は径100cm深さ37cm、床下土坑3は径103cm深さ31cmである。

遺物 土師器の甕や坏、須恵器の甕や坏が出土している。紡錘車2点が注目される。

(竈)

位置 北壁面を掘り込んで造られている。両袖部分と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 両袖石が出土し左袖石は深く長く床面に掘り込まれているが、右袖石は浅く土で造られた袖の上に置

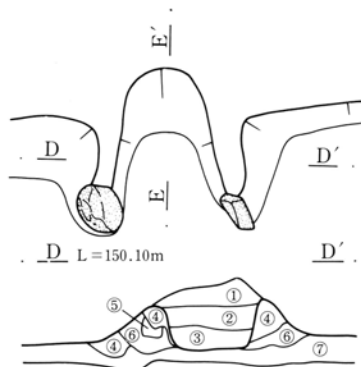


617号住居跡

- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量の白色軽石粒とローム小ブロックを含む。
- ③暗褐色土層 少量のローム小ブロックと焼土粒を含む。
- ④褐色土層 多くのローム粒・ローム小ブロックを含む。
- ⑤暗褐色土層 多くのロームブロックを含む。
- ⑥暗褐色土層 ⑤層より多くのロームブロックとローム粒を含む。
- ⑦黄褐色土層 地山のロームを主とする。

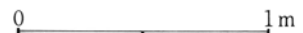


第427図 617号住居跡実測図

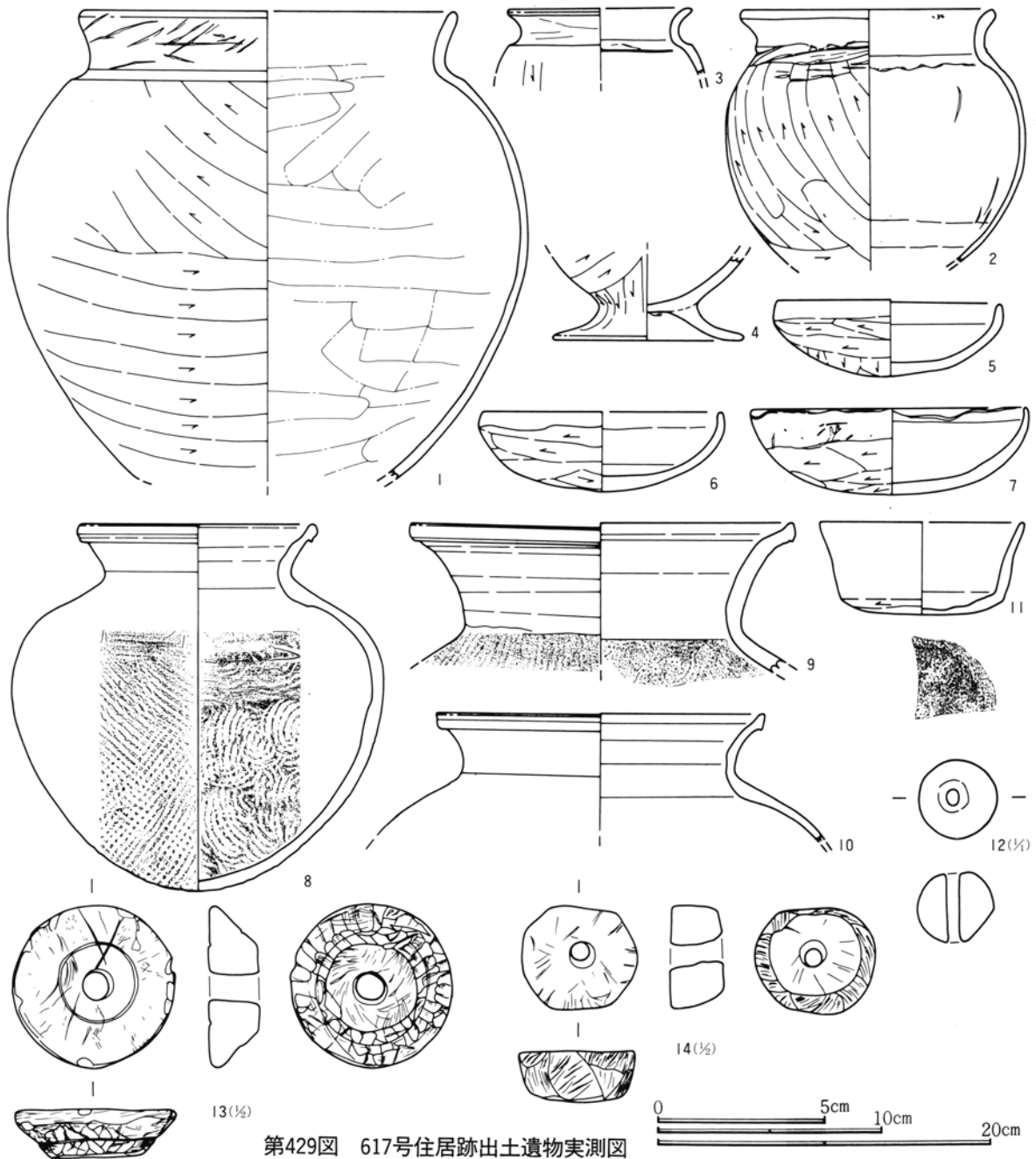


竈

- ①暗褐色土層 少量の白色軽石粒を含む。  
(根により攪乱を受けている)
- ②暗褐色土層 少量の焼土粒とローム粒を含む。
- ③暗褐色土層 少量の焼土粒と焼土ブロックを含む。
- ④暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ⑤灰白色土層 灰白色粘土を主とする。
- ⑥褐色土層 ④層に近いが、より多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ⑦黄褐色土層 地山のロームを主とする。



第428図 617号住居跡竈実測図



第429図 617号住居跡出土遺物実測図

617号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
429-1 106	土器 甕	床面+17 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{2}$	口(23.0) 高— 底—	①密、1~3mmの片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へら削り、砂粒の移動は少ない。 口縁部外面にへらの当たった痕跡が多く残る。
429-2 106	土器 甕	床面直上 図示部分ほ ぼ完形	口15.1 高— 底—	①密、2~3mmの片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へら削り、器表面の粗れは少ない。 削られていない口縁部との境に小さな段を持つ。
429-3	土器 小型甕	覆土 口縁部 $\frac{1}{2}$	口(11.0) 高— 底—	①粗、1~2mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③暗赤褐色	胴部外側へら削りと思われるが器表面の多くが剝離しているため不明。内面ナデにより器表面密。 頻繁に火を受けて使用されている。
429-4	土器 台付甕	床面直上 胴下半~脚 $\frac{1}{2}$	口— 高— 底(11.5)	①密、1mm以下の砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③暗赤褐色	台部横ナデ。甕外面へら削り、小さな砂粒が移動し器表面やや粗い。 台部に多くの黒斑が認められる。

第4章 奈良時代の遺構と遺物

617号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
429-5 106	土師器 坏	床面直上 完形	口 10.0 高 3.5 底 -	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、砂粒の移動少ない。 内面ナデにて器表面密。 黒斑全く認められず。
429-6 106	土師器 坏	床面-11 1/2残存	口(10.6) 高 3.6 底 -	①密、少量の角閃石を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、器表面がやや粗れており削りの単位は明瞭でない。 黒斑全く認められず。
429-7 106	土師器 坏	床面+9 口縁一部欠 他完形	口 12.3 高 3.9 底 -	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	底面ヘラ削り。体部ナデ。内面ナデにて器表面密。 内側器表面斑点状に剝離。 底部外面吸炭による黒斑。
429-8 106	須恵器 甕	床面+15 ほぼ完形	口 13.8 高 22.0 底 -	①密、1mm前後の砂粒含まず。 ②還元焰、硬質、焼締 ③灰白色	底面～口縁部まで平行叩き、肩部～口縁部はカキ目状の整形により叩き目をほとんど消している。内側底面～口縁部青海波文。
429-9 106	須恵器 甕	床面+12 口縁部1/5 肩部1/3	口 19.4 高 - 底 -	①密、1mm以下の長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質、焼締 ③灰色	胴部外面平行叩き、内面青海波文、痕跡はいずれとも浅い。 肩部に厚い自然釉が付着している。
429-10 106	須恵器 甕	床面+10 口縁部完形	口 22.6 高・底-	①密、1～2mmの長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	口縁端部は鋭利に削り出されている。
429-11	須恵器 坏	覆土 1/4残存	口(9.0) 高 4.1 底 -	①密、1mm以下の小さな白色粒を含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面手持ヘラ削り。底部内側に同心円状の凹部あり。 口縁部凸状の整形痕なし。 器肉の薄い小さな坏である。
429-12 115	土製品 土玉	覆土 完形	径 1.2 厚 1.0 孔径 0.2 重 2.3		上下面がやや平らになっている。 全体にゆがんでいる。
429-13 119	石製品 紡錘車	床面+48	径 4.8/2.7 厚 1.4 孔径 0.8 重 51.5	滑石片岩	広面中央の孔を囲み円形の沈線。側面中央に段持つ、整形は刃物による。狭面目の細かい砥石により整形。
429-14 119	石製品 紡錘車	床面-7	径 3.5/2.7 厚 1.5 孔径 0.5 重 33.4	滑石片岩	広面荒砥削り後磨き。側面荒砥削りで器表面特に粗い。狭面荒砥削り後磨き。中央の孔は直線でない。

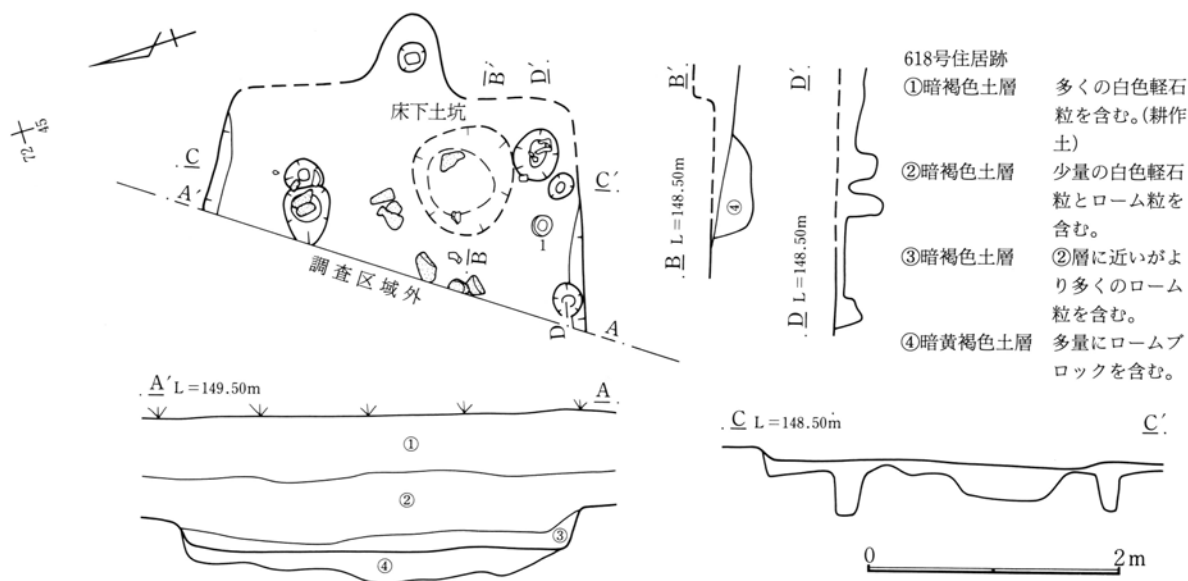
618号住居跡 (第430・431図、図版64・106)

位置 本住居跡は第8次調査区にあり、72-45グリッドに位置する。

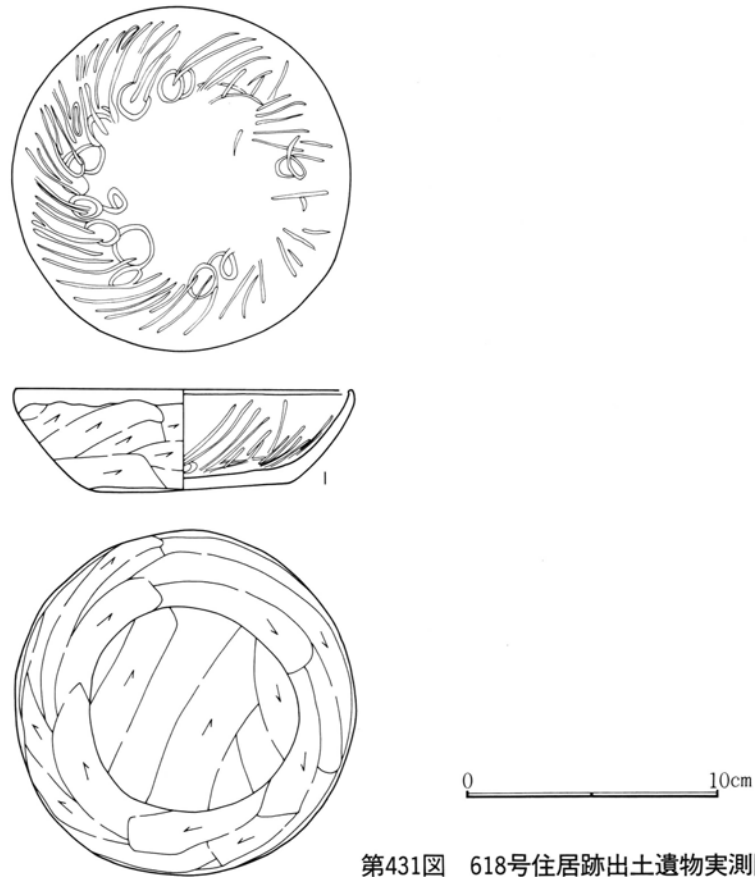
概要 西北部分は調査区域外となっている。谷地に近い低地となっており低い東側の床面と竈部分は残りが悪い。貯蔵穴が竈の右側に、また床下に多くの小穴が掘られているが、柱穴は掘られていない。竈が東壁面に掘られているが、残りが悪く僅かに痕跡を留める程度である。焼土粒の出土も僅かである。

規模 東西不明、南北3.00mである。壁高は残りの良い南西壁面部分で35cmである。床下土坑は径78cm深さ28cmである。

遺物 図示できたのは土師器の坏1点のみである。



第430図 618号住居跡実測図



第431図 618号住居跡出土遺物実測図

618号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
431-1 106	土師器 坏	床面+7 完形	口 13.0 高 3.9 底 8.3	①密、少量の片岩粒と赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部外面へラ削り、削りの単位は比較的明瞭。内面に多くの暗文あり。

627号住居跡 (第432～434図、図版64・107)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、69・70—33グリッドに位置する。

概要 3軒の住居と重複しており本住居が最も新しい。南側で古墳時代の631号住居と奈良時代の628号住居を床下部分まで掘り込み、西側部分をほぼ南北方向に走る35・44号溝により覆土上面が削られている。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを含む土で造られている。竈の右側に貯蔵穴が、また柱穴は4本掘られている。床下土坑が2本掘られている。

規模 東西4.43m、南北4.17mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で50cmである。貯蔵穴は径46cm深さ79cm、柱穴1は径44cm深さ71cm、柱穴2は径42cm深さ62cm、柱穴3は径35cm深さ69cm、柱穴4は径51cm深さ65cmである。床下土坑1は径172cm深さ27cm、床下土坑2は径132×92cm深さ28cmである。

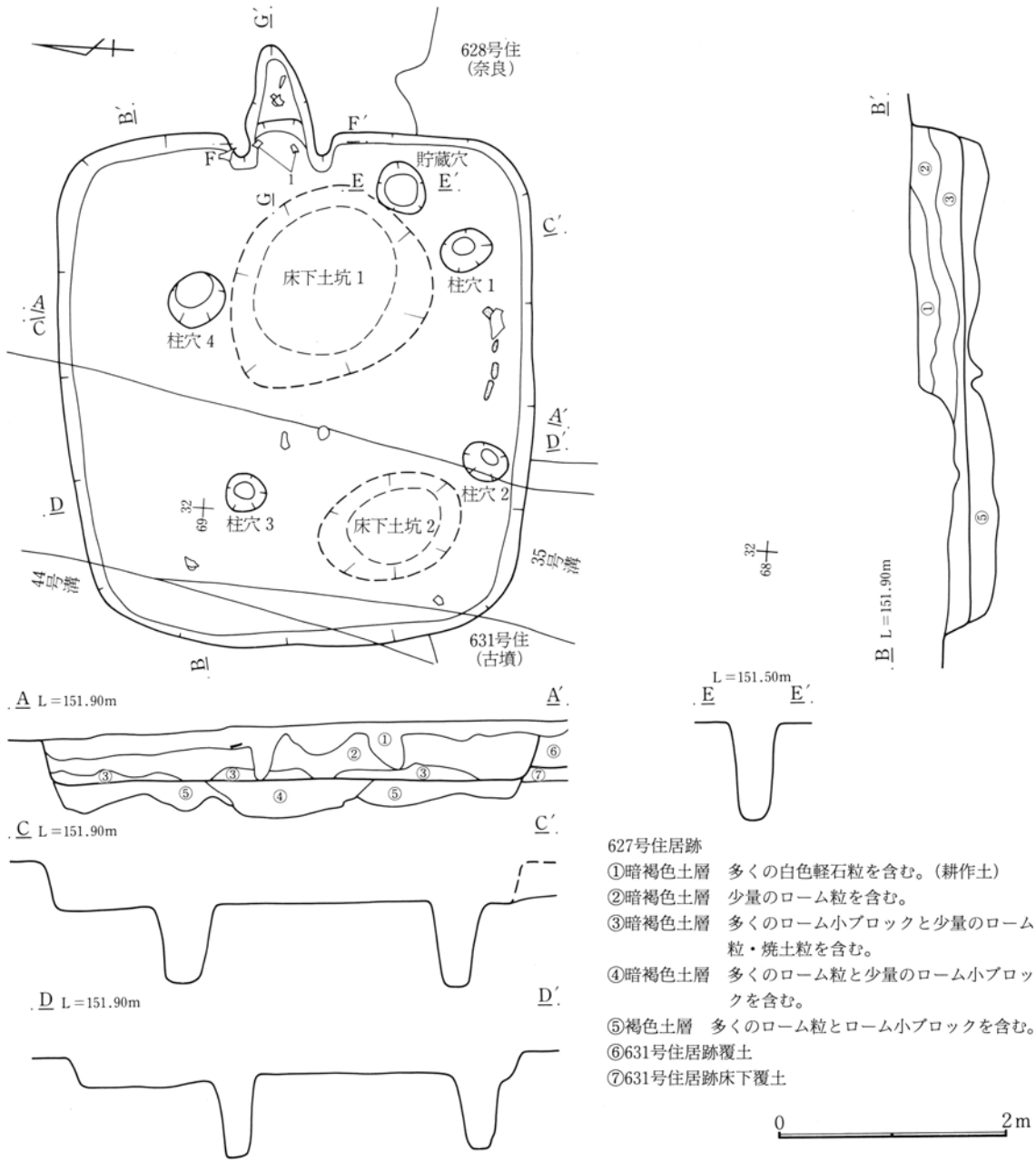
遺物 破片は大量に出土しているが、図示できたのは土師器の甕と坏の3点である。

(竈)

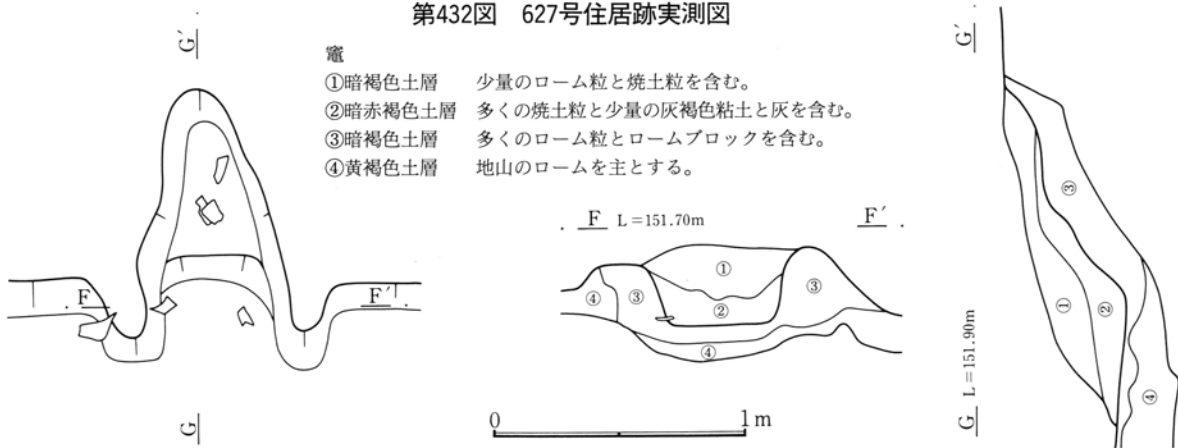
位置 東壁面を掘り込んで造られている。焚口部分と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 竈内から少量ではあるが灰褐色粘土が出土しているため粘土も少し用いて造られた竈と思われる。袖石等の石は全く出土していない。竈内より多くの焼土粒が出土している。

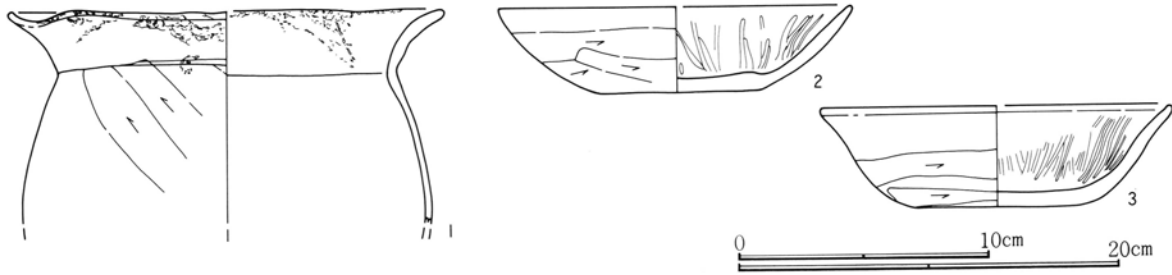
規模 煙道方向108cm、燃烧部幅48cmである。



第432図 627号住居跡実測図



第433図 627号住居跡竈実測図



第434図 627号住居跡出土遺物実測図

627号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
434-1 107	土師器 甕	竈内 口縁部½ 胴上部½	口(22.4) 高— 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色、一部赤灰色	胴部外面へら削り。 口縁部内外面は高熱を受けて胎土及び付着物が気泡化している。
434-2	土師器 坏	覆土 口縁部½ 底部½	口(13.9) 高3.3 底—	①密、1~2mmの砂粒が多く赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部外面へら削り。 内面に多くの暗文が描かれている。
434-3	土師器 坏	覆土 小破片	口(13.5) 高4.0 底—	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③内面橙色、外面黒色	底面と体部外面へら削り。 内面に多くの暗文が描かれている。 外側の底面と体部は吸炭により黒色を呈している。

628号住居跡 (第435~439図、図版64・65・107・114・119)

位置 本住居跡は第8次調査区にあり、68・69-33・34グリッドに位置する。

概要 4軒の住居と重複している。西側部分で古墳時代の631号住居を床下部分まで掘り込んでおり、また北西部分は奈良時代の627号住居により床下部分まで掘り込まれている。さらに南西コーナー部分は平安時代の630号住居により床面に近い覆土と壁面を掘り込まれている。4軒の新旧関係は631→628→627→630号住居である。東側部分をほぼ南北方向に走る34号溝により覆土上面が削られている。また水道管工事により床下部分まで深く掘り込まれている。新東竈が東壁面に造られているほかに北壁面にも燃焼部分が取り外されて壁面に煙道部の残る状態で北旧竈が確認された。また新東竈の右袖部分の下から別の竈の煙道部の一部が確認された。そこには煙道部に使われたと思われる口縁部を下にした甕の破片が出土している。新東竈は旧東竈を取り壊して造られてものと思われる。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを含む土で造られていた。新東竈の右側に貯蔵穴が掘られているが、旧北竈の右側には掘られていない。柱穴は4本掘られている。

規模 東西5.95m、南北6.04mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で53cmである。貯蔵穴は径68cm深さ79cm、柱穴1は径59cm深さ80cm、柱穴2は径42cm深さ82cm、柱穴3は径62cm深さ78cm、柱穴4は径42cm深さ71cmである。

遺物 新旧の竈内や貯蔵穴内及びその周辺より土師器の甕や坏、須恵器の坏や蓋等が多く出土している。

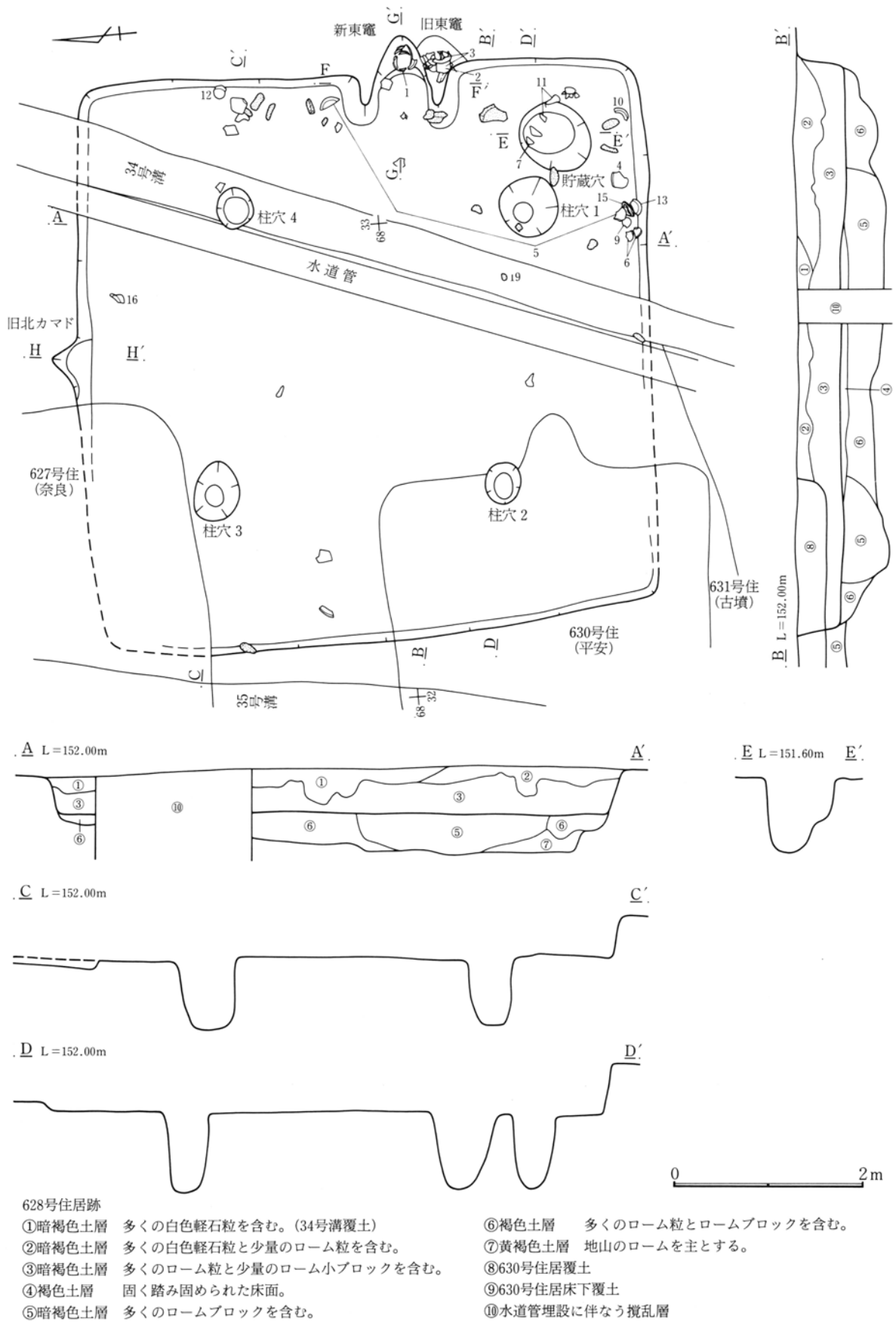
(新東竈)

位置 東壁面を掘り込んで造られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 右袖石が残っているが左袖石は残っていない。煙道部から口縁部を下にした甕が出土しており、煙道または煙突として使われていたものと思われる。竈内から灰褐色粘土が多く出土しているため粘土を多く用いて造られた竈と思われる。竈内より多くの焼土粒が出土している。

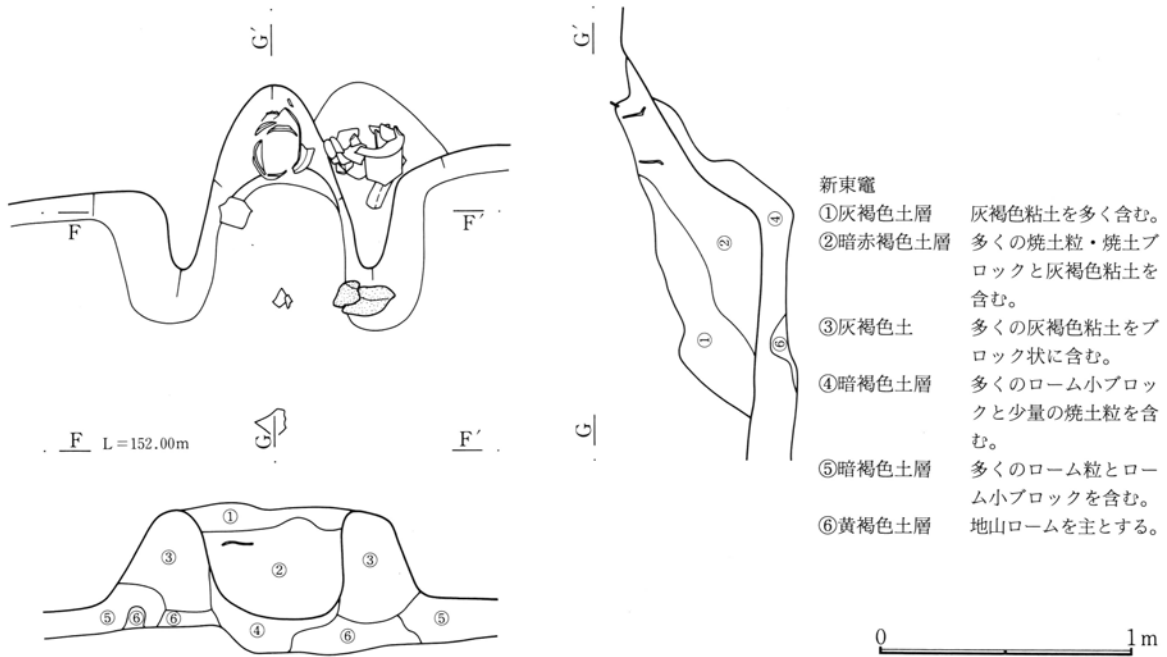
規模 煙道方向93cm、燃焼部幅53cmである。

第4章 奈良時代の遺構と遺物

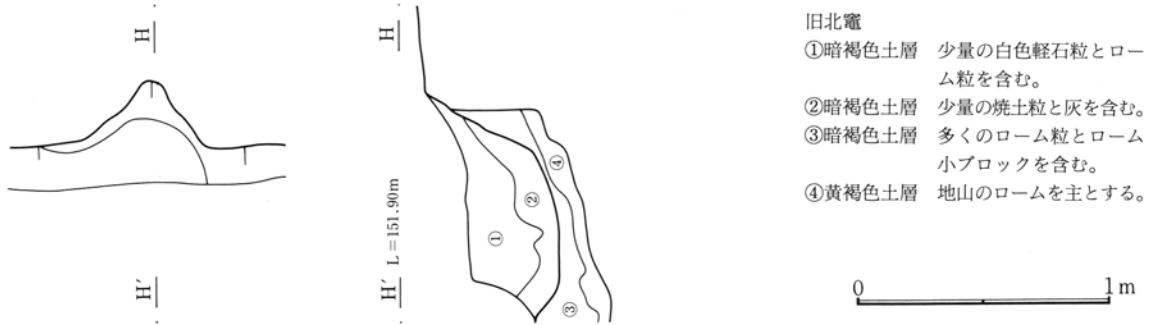


第435図 628号住居跡実測図

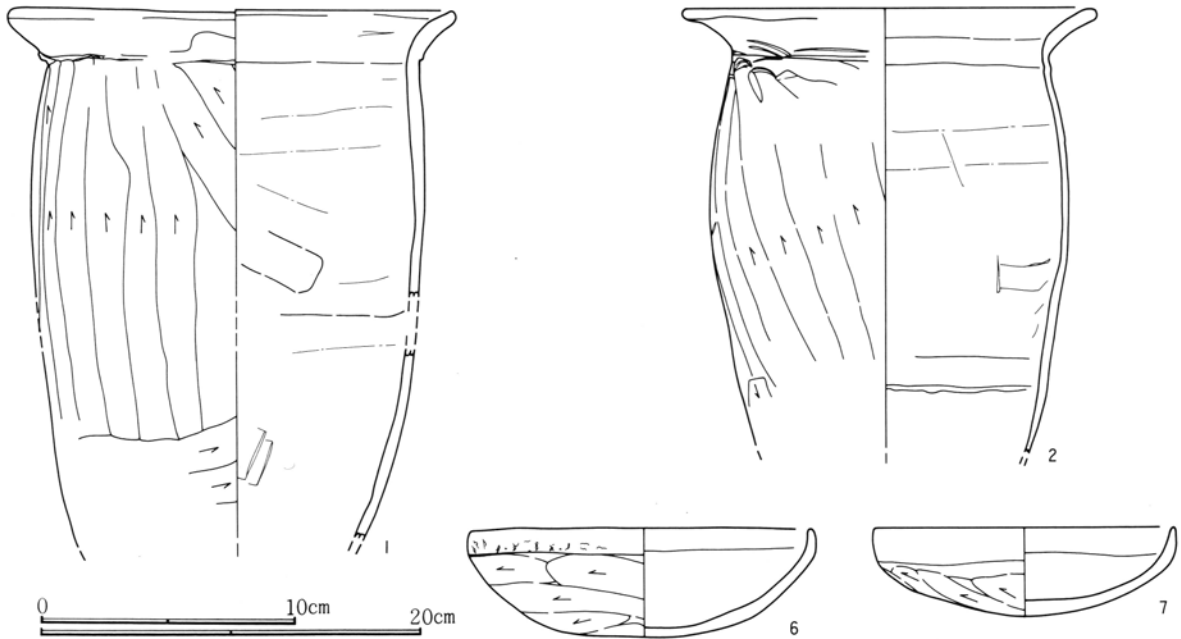




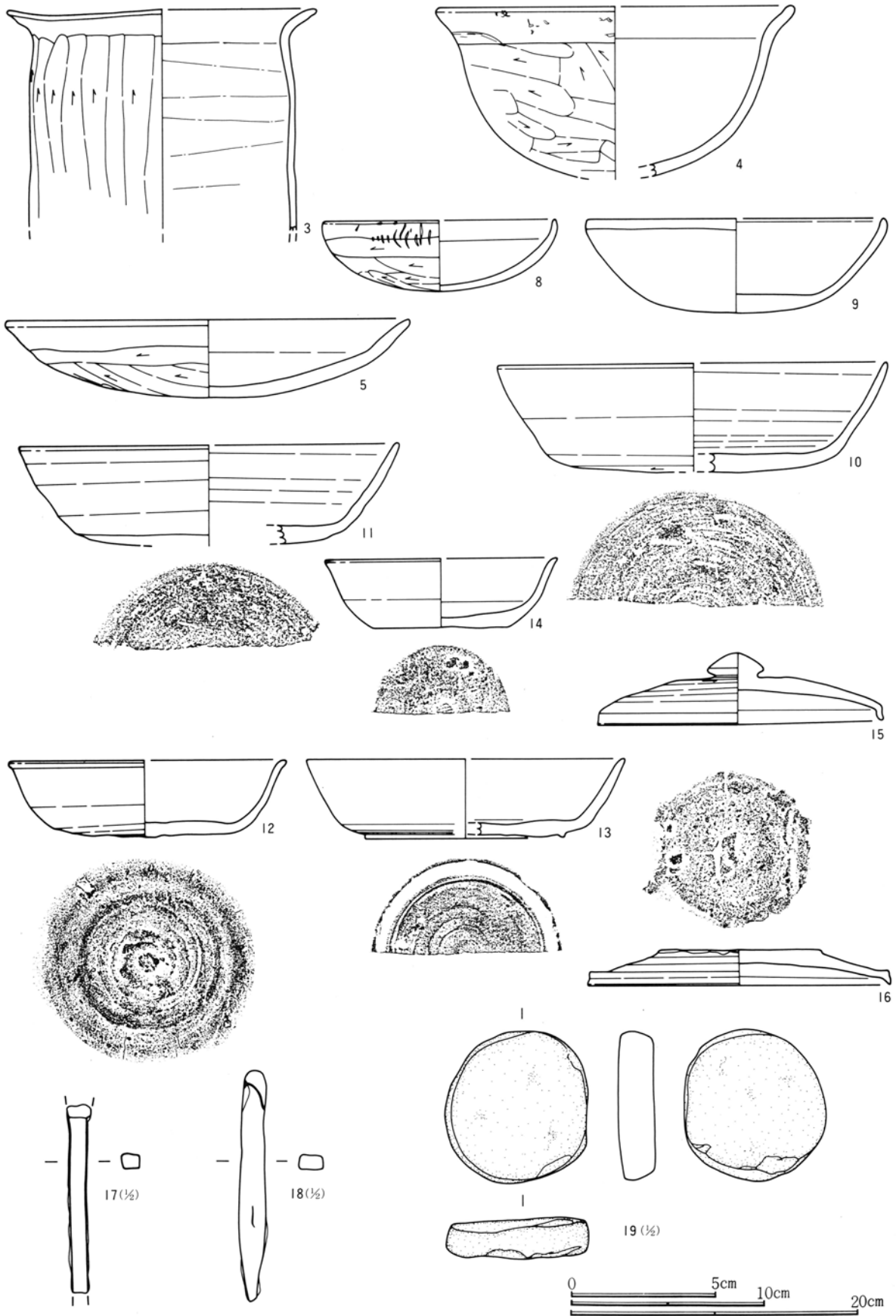
第436図 628号住居跡新東竈実測図



第437図 628号住居跡旧北竈実測図



第438図 628号住居跡出土遺物実測図(1)



第439図 628号住居跡出土遺物実測図(2)

628号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
438-1 107	土師器 甕	竈内 口～胴上完 下部½	口 23.5 高 — 底 —	①密、2～3mmの片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面へら削り、削られていない口縁部との境に段を持つ。 内面ナデにて器表面密。
438-2 107	土師器 甕	竈内 ¾残存	口 21.4 高 — 底 —	①密、1～3mmの赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へら削りで器肉を特に薄くしている。 削られていない口縁部との境に段を持つ。
439-3 107	土師器 甕	竈内 口縁部½ 胴部½	口(23.8) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③外面橙色、内面にぶい赤褐色	胴部外面へら削り、削られていない口縁部との境に段はない。 内面ナデにて器表面密。
439-4	土師器 深鉢	床面+3 口縁～体部 ¾残存	口(26.5) 高 — 底 —	①密、多量の小さな雲母粒を含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へら削り、砂粒の移動少ない。 内面ナデにて器表面密。
439-5 107	土師器 皿型杯	床面+6 ¾残存	口 20.6 高 4.0 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へら削り、削りの単位は明瞭である。 内面に黒漆に似た黒色物が多く付着している。
438-6 107	土師器 杯	床面+12 ¾残存	口 13.2 高 4.2 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へら削り、器表面がやや粗れており削りの単位は明瞭でない。内面に黒色粒が少量付着。 底部外面吸炭による炭黒色。
438-7 107	土師器 杯	床面-24 ¾残存	口 11.6 高 3.5 底 —	①密、少量の角閃石を含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り、小さな砂粒や粘土がササラ状に移動し器表面やや粗い。 黒斑全く認められず。
439-8 107	土師器 杯	掘り方 ¾残存	口(11.8) 高 3.6 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色、底部外面黒色	底面へら削り、削りの単位は明瞭でない。 内面に黒色物が薄く付着している。 底部外面吸炭による黒色。
439-9	土師器 杯	床面直上 口縁部½ 底部完形	口(15.3) 高 4.9 底 —	①密、多量の雲母粒を含み光沢を持つ。②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底面～体部へら削りであるが、器表面密で削りの単位不明。 口縁部～内側底面の器表面特に密。
439-10 107	須恵器 杯	床面直上 口縁部¾ 底部½	口(20.1) 高 — 底(12.8)	①やや粗、1～2mmの長石粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰白色	底面右回転へら削り、多くの砂粒が移動し器表面粗い。
439-11	須恵器 杯	床面-13 ¾残存	口(19.6) 高 — 底(13.5)	①やや粗、1～2mmの長石粒を多く含む。②還元焰、硬質、焼締 ③灰色	底部右回転へら削り。 口縁部に3本のロクロ目が残る。
439-12 107	須恵器 杯	床面直上 口縁部¾ 底部完形	口(14.2) 高 4.0 底 —	①密、1mm以下の小さな長石粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③褐灰色	底面へら切り後無調整。 全体に器肉が薄い。 口縁部がわずかに外反する。
439-13 107	須恵器 杯	床面+18 ¾残存	口(16.4) 高(4.1) 底(10.2)	①密、1mm以下の白色粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰色	底面右回転へら削り。 低い高台は削り出している、ていねいな作りである。 内側底面は使用により磨耗している。
439-14	須恵器 杯	掘り方覆土 口縁～底部 ¾	口(12.0) 高(3.6) 底(7.0)	①密、1mm以下の白色粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰色	底面へら削り。 中央部に凸状部あり。 器表面全体が密である。
439-15 107	須恵器 蓋	床面+15 完形	口 14.8 高 — 底 —	①密、1mm以下の長石粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰色	天井部右回転へら削り。 宝珠ツマミは高く大きい。 天井部の器肉が厚い。
439-16 107	須恵器 蓋	床面-17 ¾残存	口 15.6 高 — 底 —	①やや粗、1mm以下の長石粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰色	天井部へら切り、切り離した後ほとんど無調整。
439-17 114	鉄製品 鉄鏃	覆土	長 (6.7) 幅 0.7 厚 0.5 重 4.6		鉄鏃の頸部と思われる。 断面長方形を呈し、残りは比較的良好である。
439-18 114	鉄製品 不明	覆土	長 (8.0) 幅 1.0 厚 0.5 重 14.7		器種及び用途不明。 断面長方形で残りは比較的良好である。
439-19 119	石製品 紡錘車	床面+3	径 5.2/4.9 孔径 — 厚 1.4 重 46.8 凝灰質砂岩		広・狭面磨かれて整形痕不明。側面も良く磨かれている。中央に穿孔されていない。やや形が不定形。

634号住居跡 (第440~442図、図版65・114)

位置 本住居跡は第8次調査区にあり、62・63-32グリッドに位置する。

概要 他の遺構と重複していない規模の小さな住居である。南東コーナーから貯蔵穴にかけての床面に、平らで大きな石が5枚敷かれたような状態で出土している。床面は多くのローム粒とローム粒を含む土で造られている。竈の右側に貯蔵穴が掘られているが、柱穴は掘られていない。深い床下土坑が多く掘られている。

規模 東西3.46m、南北3.02mである。壁高は残りの良い南壁面部分で28cmである。貯蔵穴は径60cm深さ32cmである。

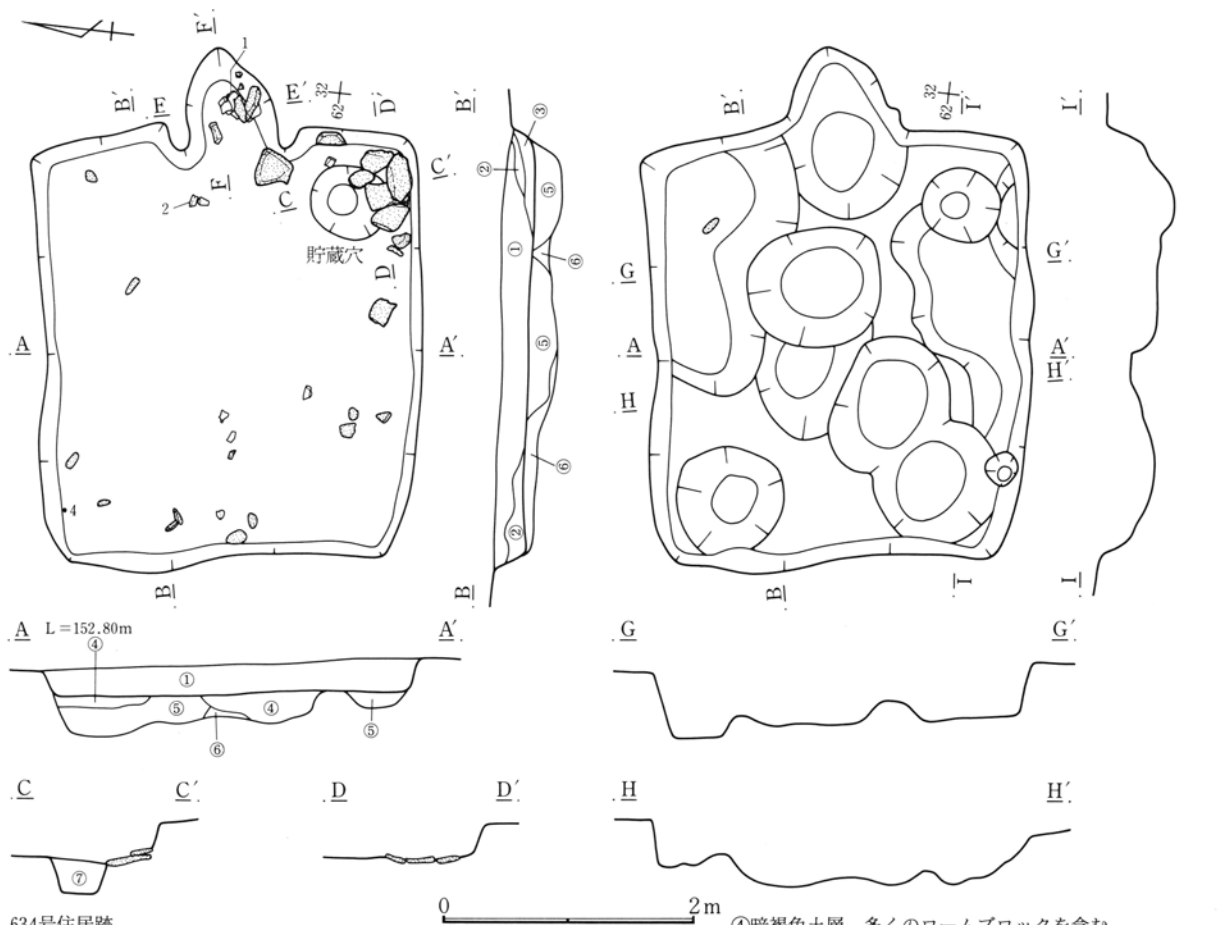
遺物 竈内や貯蔵穴付近から石が多く出土している。

(竈)

位置 東壁面を掘り込んで造られている。焚口部分は床面上に位置するが、燃烧部の多くと煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

構造 右袖手前部分に平らで大きな石が出土しているが、袖石は出土していない。竈内から焚口の天井石に用いることが可能な大きさの細長い石が、少し小さな石とともに出土している。竈内よりの焼土粒の出土は少量である。

規模 煙道方向96cm、燃烧部幅62cmである。



634号住居跡

①暗褐色土層 多くの白色軽石粒と少量のローム小ブロックを含む。

②暗褐色土層 少量のローム粒とローム小ブロックを含む。

③暗褐色土層 少量のローム粒とローム小ブロックと焼土小ブロックを含む。

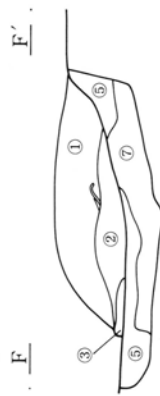
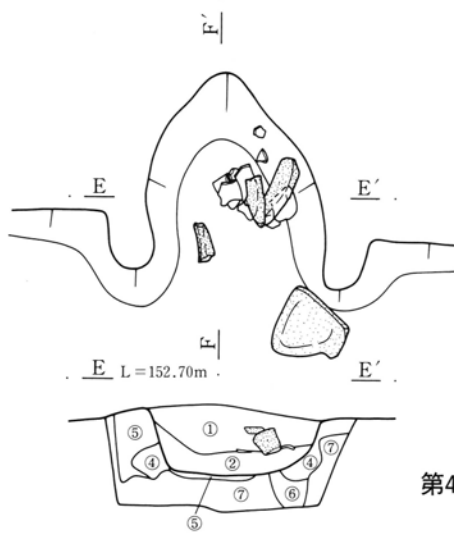
④暗褐色土層 多くのロームブロックを含む。

⑤暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。

⑥黄褐色土層 地山のロームを主とする。

⑦褐色土層 少量のローム粒とローム小ブロックを含む。

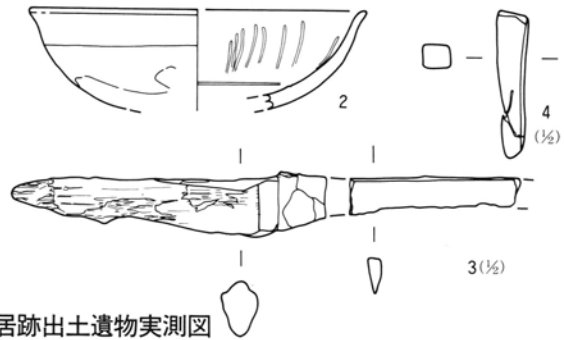
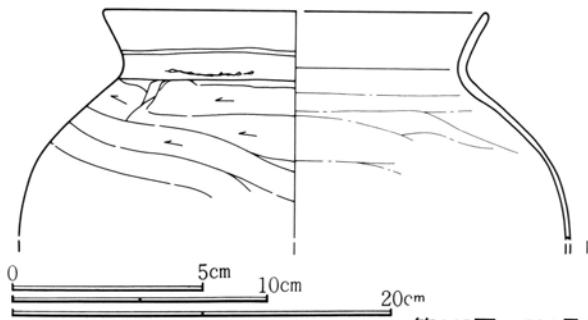
第440図 634号住居跡・床下実測図



- 竈
- ①暗褐色土層 少量のローム粒と焼土粒を含む。
  - ②暗褐色土層 多くのローム粒・ローム小ブロックと少量の焼土粒を含む。
  - ③黒褐色土層 多くの炭と少量の焼土粒を含む。
  - ④暗赤褐色土層 多くの焼土粒を含む。
  - ⑤暗褐色土層 少量のローム粒を含む。
  - ⑥褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
  - ⑦暗黄褐色土層 地山のロームを主とする。

第441図 634号住居跡竈実測図

0 1m



第442図 634号住居跡出土遺物実測図

634号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
442-1	土師器 甕	竈内 口~胴上1/2	口(25.0) 高・底一	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質③赤褐色	胴部外面へラ削り。口縁部横ナデ。頸部に輪積痕と思われる痕跡が残る。
442-2	土師器 坏	床面+2 1/2残存	口(11.9) 高・底一	①密、粉状を呈する。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削りと思われるが削りの単位不明瞭。内面に暗文の痕跡が残る。
442-3 114	鉄製品 刀子	覆土	長 (13.5) 幅 1.0~1.5 厚 0.3~0.9 重 (14.6)		刀子の茎部分と刃部である。
442-4 114	鉄製品 釘	覆土	長 (3.9) 幅 0.8 厚 0.6 重 6.0		釘の下部と思われる。断面は長方形。下端部は欠損していないと思われる。

639号住居跡 (第443~445図、図版66・107)

位置 本住居跡は第8次調査区にあり、57・58-29・30グリッドに位置する。

概要 南側で古墳時代の640号住居と重複しており、本住居が640号住居の北端部分を床下部分まで掘り込んでいる。南西部分を土坑により、また住居中央部分を東西方向の41号溝により床下部分まで深く掘り込まれている。柱穴や貯蔵穴は掘られていない。

規模 東西4.18m、南北4.10mである。壁高は残りの良い竈右壁部分で20cmである。

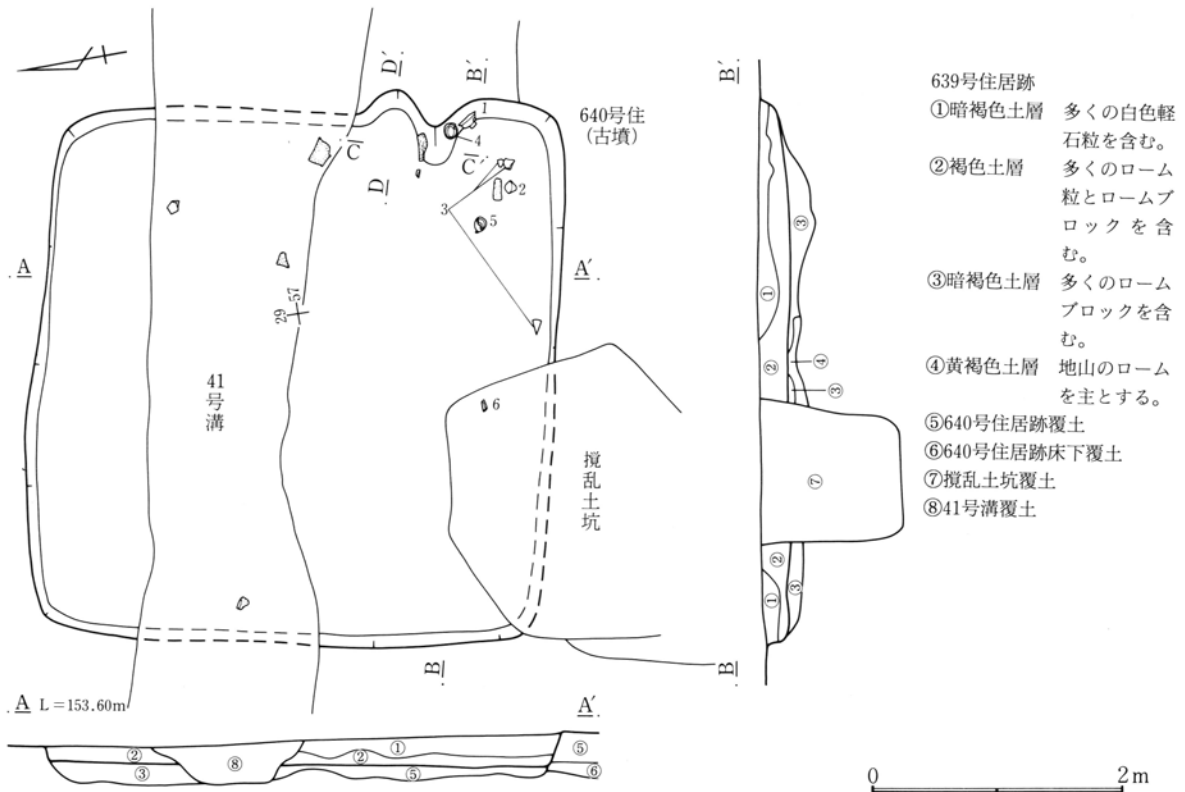
遺物 竈右袖付近より土師器の甕や坏が出土している。

(竈)

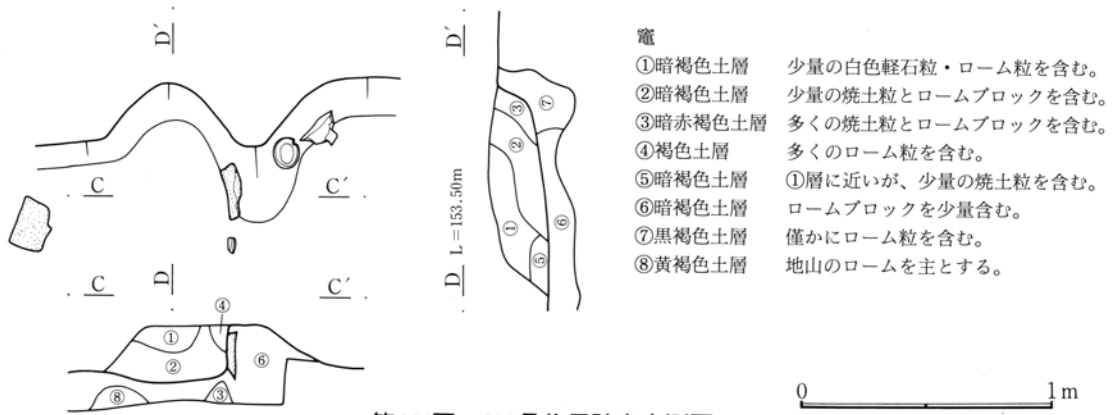
位置 東壁面を掘り込んで造られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 全体に残りが悪くまた左袖部分の上部が41号溝により削られており残っていない。右袖石が残っているが左袖石は残っていない。煙道部付近から多くの焼土粒が出土しているが、全体に焼土粒の量は少ない。規模も残りが悪く不明である。

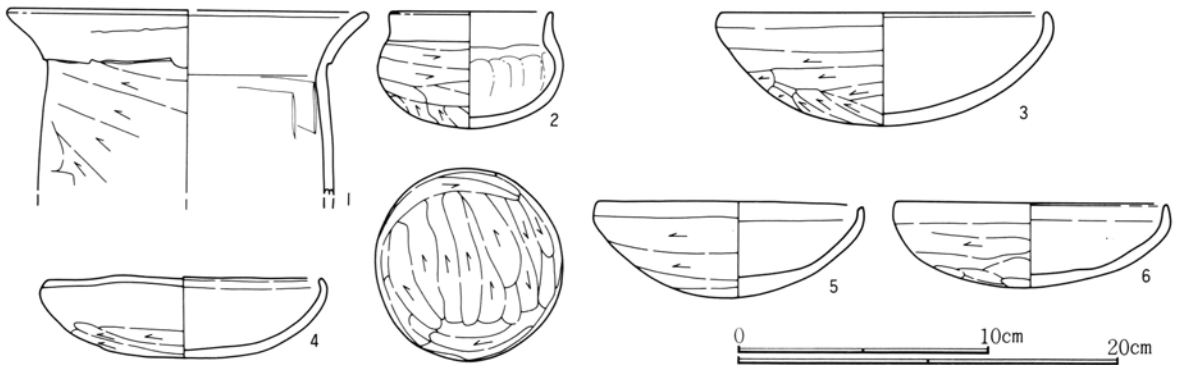
第4章 奈良時代の遺構と遺物



第443図 639号住居跡実測図



第444図 639号住居跡竈実測図



第445図 639号住居跡出土遺物実測図

639号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
445-1	土師器 甕	床面+12 口~頸破片	口(19.0) 高 — 底 —	①密、多くの雲母粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面強いヘラ削り、口縁部との境に部分的に段を持つ。
445-2 107	土師器 小型壺	床面-12 完形	口 8.8 高 6.1 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、削りの単位は明瞭である。 口縁~内面ナデにて器表面密。 底部外面中央部吸炭により黒色を呈する。
445-3 107	土師器 坏	床面直上 %残存	口 12.8 高 4.5 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、胎土が硬く削りの単位は明瞭である。 内面ナデにて器表面密、光沢を持つ。 黒斑全く認められず。
445-4 107	土師器 坏	竈内 完形	口 10.8 高 3.2 底 —	①密、多くの角閃石を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、砂粒の移動は少ない。 体部ナデ。 短い口縁部が内屈している。
445-5 107	土師器 坏	床面+11 完形	口 10.5 高 3.8 底 —	①密、角閃石を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、内面ナデにて器表面密。 底部の器肉が厚い。 黒斑全く認められず。
445-6 107	土師器 坏	床面-8 %残存	口 10.7 高 3.4 底 —	①密、角閃石をわずかに含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、削りの単位不明瞭。内面ナデ。 器表面全体が少し粗れている。 黒斑は認められない。

641号住居跡 (第446~448図、図版66・107)

位置 本住居跡は第8次調査区にあり、84-40・41グリッドに位置する。

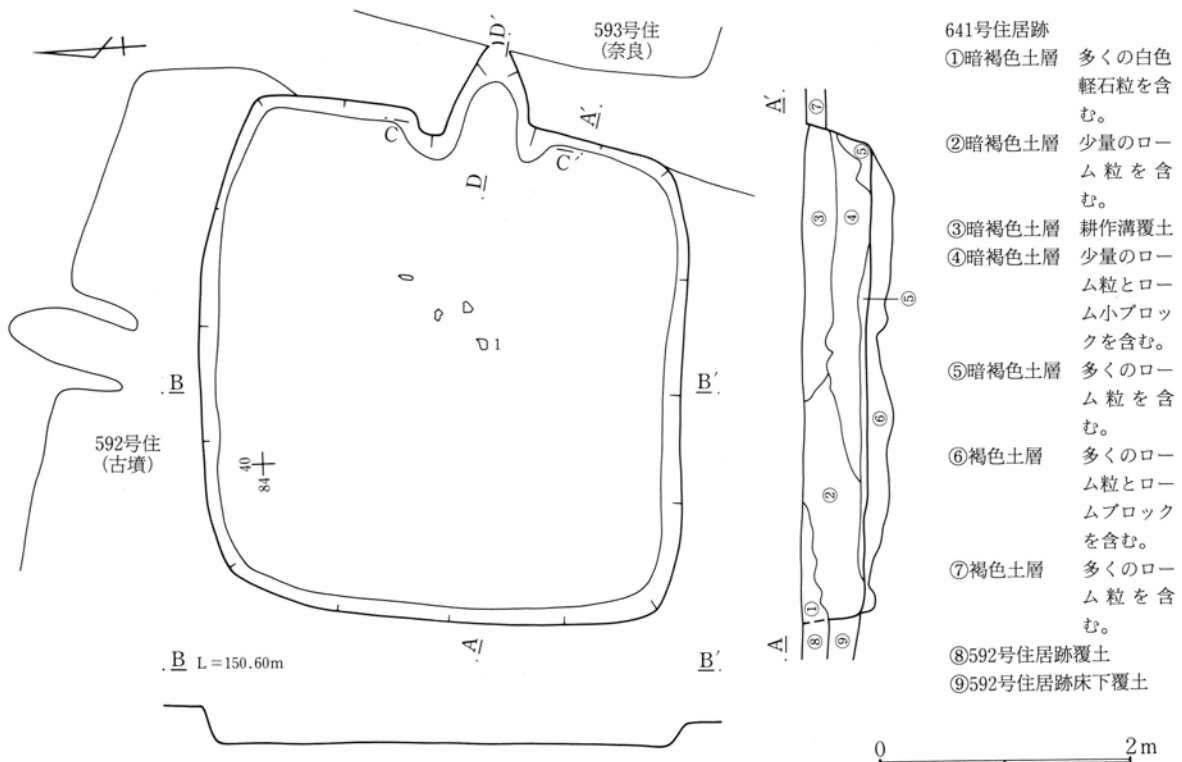
概要 住居の大部分は古墳時代の592号住居を床下部分まで掘り込んで造られている。東側では奈良時代の593号住居と竈の煙道先端部で重複している。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

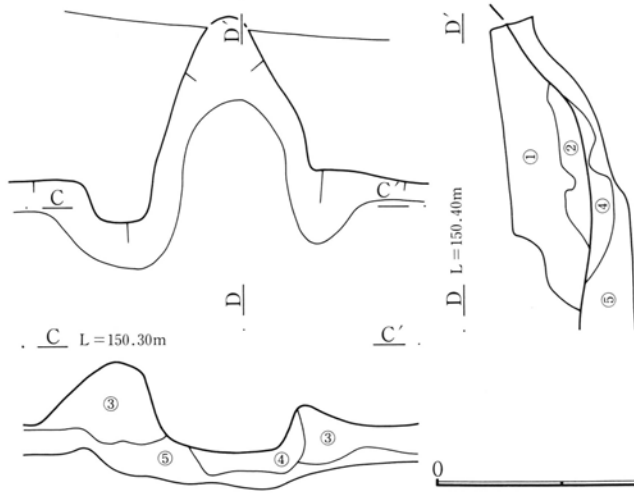
規模 東西4.03m、南北3.86mである。壁高は残りの良い北壁面部分で30cmである。

遺物 破片は多いが、図示できたのは2点である。

(竈)

位置 東壁面を掘り込んで造られている。焚口部分と燃烧部の多くは床面上に位置する。



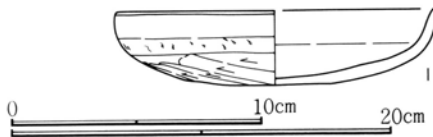


第447図 641号住居跡竈実測図

構造 残りの悪い竈であり特に右袖部分の状態が悪い。袖は少量のロームを含んだ土で造られている。燃烧部覆土からの焼土粒の出土は少なく、燃烧部床下部分からやや多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向推定103cm、燃烧部幅58cmである。

- 竈
- ①暗褐色土層 少量のローム粒と焼土粒と多くのロームブロックを含む。
  - ②暗褐色土層 やや多くの焼土粒と多くのロームブロックを含む。
  - ③暗褐色土層 少量のローム小ブロックを含む。
  - ④暗褐色土層 やや多くの焼土粒を含む。
  - ⑤褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。



641号住居跡出土遺物観察表

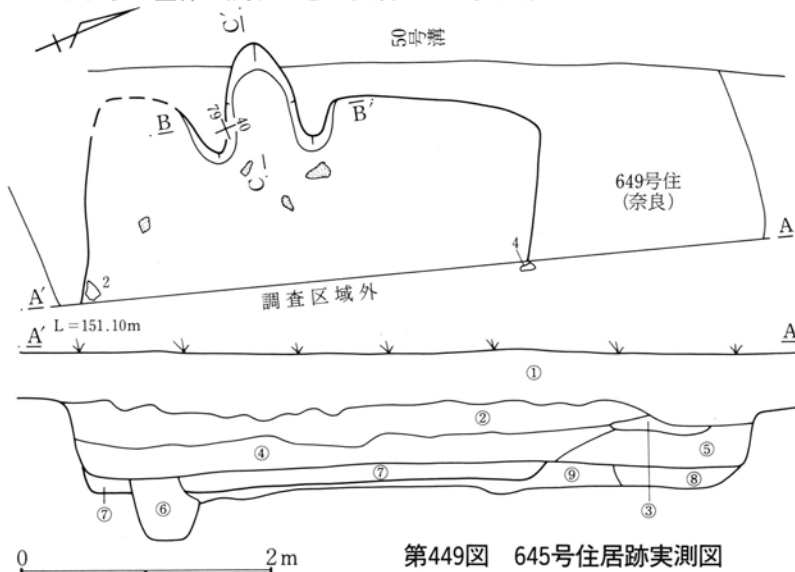
第448図 641号住居跡出土遺物実測図

挿図番号 図版番号	土器種別 器	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
448-1 107	土師器 坏	床面-2 2/3残存	口(12.4) 高 2.9 底 -	①密、少量の角閃石を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り、削りの単位は明瞭である。 体部ナデ。内面ナデにて器表面密。 黒斑認められず。
448-2 107	須恵器 壺	覆土 胴部2/3 底部1/2	口 - 高 - 底(11.6)	①密、1mm以下の長石粒をわずかに含む。 ②酸化焰、硬質、焼締 ③灰色	底部外面へラ削り。 体部下端へラ削り。 高台は太く短く、ていねいに貼り付けてある。

645号住居跡 (第449~451図、図版66・107)

位置 本住居跡は第8次調査区にあり、79・80-41グリッドに位置する。

概要 同じ奈良時代の649号住居と重複しており、649号住居が本住居の床上約10cmのところまで掘り込んで造られている。煙道部付近の上部は50号溝が掘られており、住居東側は調査区域外となっている。このように全体に残りの悪い住居である。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。



第449図 645号住居跡実測図

- 645号住居跡
- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
  - ②暗褐色土層 少量のローム粒を含む。
  - ③暗灰褐色土層 少量の粘土と焼土粒を含む。
  - ④暗褐色土層 ②層に近いが、より多くのローム粒と少量のローム小ブロックを含む。
  - ⑤暗褐色土層 ④層に近いが、少量の焼土粒を含む。
  - ⑥暗褐色土層 少量のローム粒とローム小ブロックを含む。
  - ⑦褐色土層 多くのローム粒とロームブロックと少量の焼土粒を含む。
  - ⑧褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
  - ⑨黄褐色土層 地山のロームを主とする。



規模 東西不明、南北3.58mである。壁高は残りの良い竈付近で8cmである。

遺物 破片の出土量が多い。

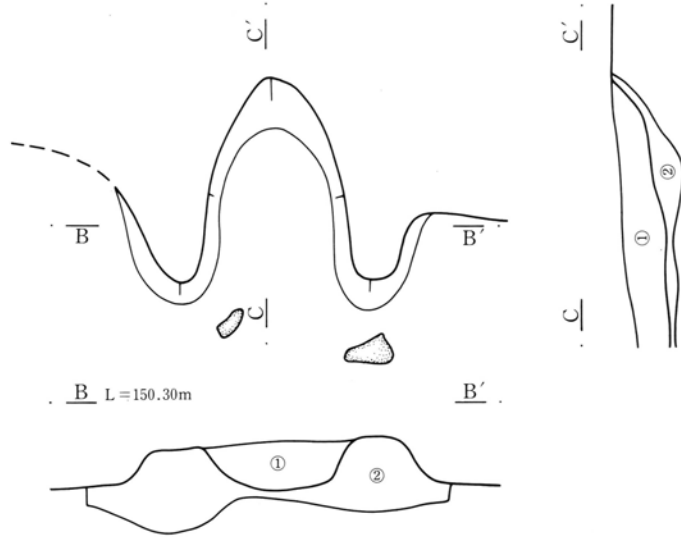
(竈)

位置 西壁面を掘り込んで造られている。燃烧部の多くは壁面を掘り込んで造られている。

構造 上部分は649号住居により削られているため残りが悪い。袖は多くのローム粒と少量のロームブロック

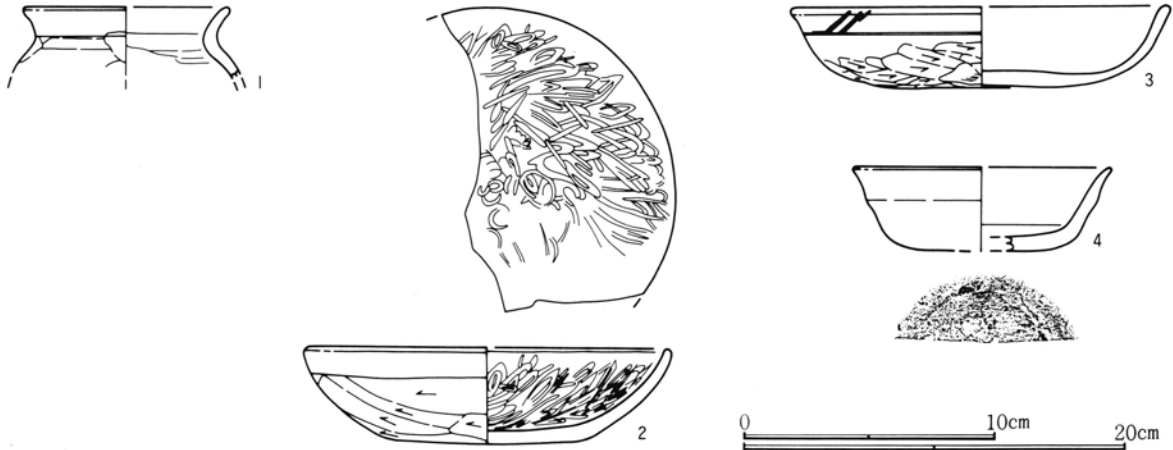
を含んだ土で造られている。全体に竈内から焼土粒の出土は少ない。

規模 煙道方向91cm、燃烧部幅51cmである。



竈  
①暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。  
②暗褐色土層 多くのローム粒と少量のローム小ブロックを含む。

第450図 645号住居跡竈実測図



第451図 645号住居跡出土遺物実測図

645号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
451-1	土 師器 小型甕	覆土 口縁1/2	口(10.6) 高 - 底 -	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③内面にふい赤褐色、外面暗赤褐色	胴部外面へラ削り、器表面が粗れており削りの単位不明瞭。 内面ナデにて器表面密。
451-2 107	土 師器 坏	床面+2 1/2残存	口(14.0) 高 3.8 底 -	①密、多くの雲母粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にふい赤褐色	底面と体部外面へラ削り。 内面は全体に磨かれた後に全面にわたり暗文風の文様あり。
451-3	土 師器 坏	覆土 1/2残存	口(14.8) 高 3.2 底 -	①密、1mm以下の赤色粒をわずかに含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラナデ、磨かれたように光沢を持ち器表面密。 内面ナデ。
451-4	須恵器 坏	床面-25 1/2残存	口(10.0) 高 - 底 -	①密、1mm以下の長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質、焼締 ③灰色	底面手持へラ削り。 口縁部外側中央にわずかな稜線あり。

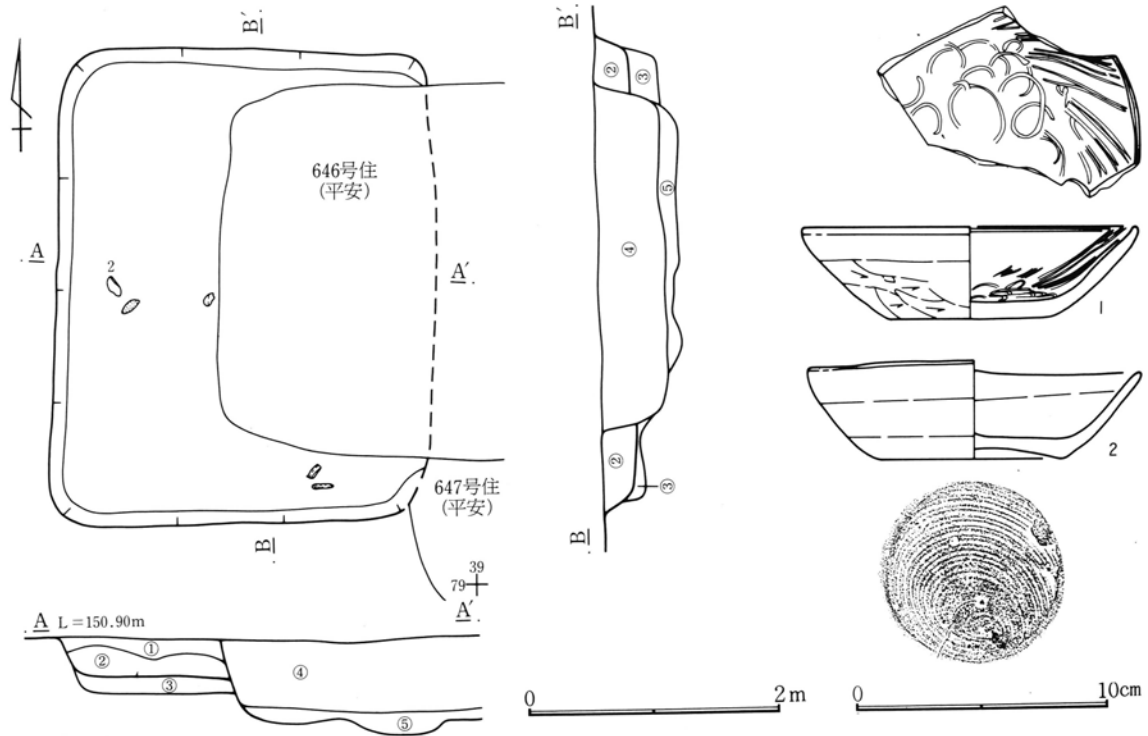
648号住居跡 (第452図、図版66・107)

位置 本住居跡は第8次調査区にあり、80-39グリッドに位置する。

概要 東側で平安時代の646号住居と重複しており、646号住居によってその部分は床下部分まで深く掘り込まれている。柱穴は掘られていない。竈は646号住居により削り取られているためか残っていない。

規模 東西3.00m、南北3.78mである。壁高は残りの良い北東コーナーの壁面部分で34cmである。

遺物 図示できたのは坏2点だけである。



648号住居跡

①暗褐色土層 少量のローム粒を含む。

②褐色土層 多くのローム粒と少量のローム小ブロックを含む。

③褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。

④646号住居跡覆土

⑤646号住居跡床下覆土

第452図 648号住居跡・出土遺物実測図

648号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
452-1	土師器 坏	覆土 口縁部1/2 底部1/2	口(13.0) 高 3.6 底 —	①密、1~2mmの赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部外面へラ削り。 内側器表面密。 内面に放射状と螺旋状の暗文あり。
452-2 107	須恵器 坏	床面+15 完形	口 13.0 高 3.9 底 7.0	①密、1mm以下の小さな白色粒を大量に含む。 ②還元焰、硬質 ③灰白色	底面右回転糸切り痕。 底部周辺回転へラ削りによる再調整。

649号住居跡 (第453・454図、図版66・107・108・114)

位置 本住居跡は第8次調査区にあり、79・80-40・41グリッドに位置する。

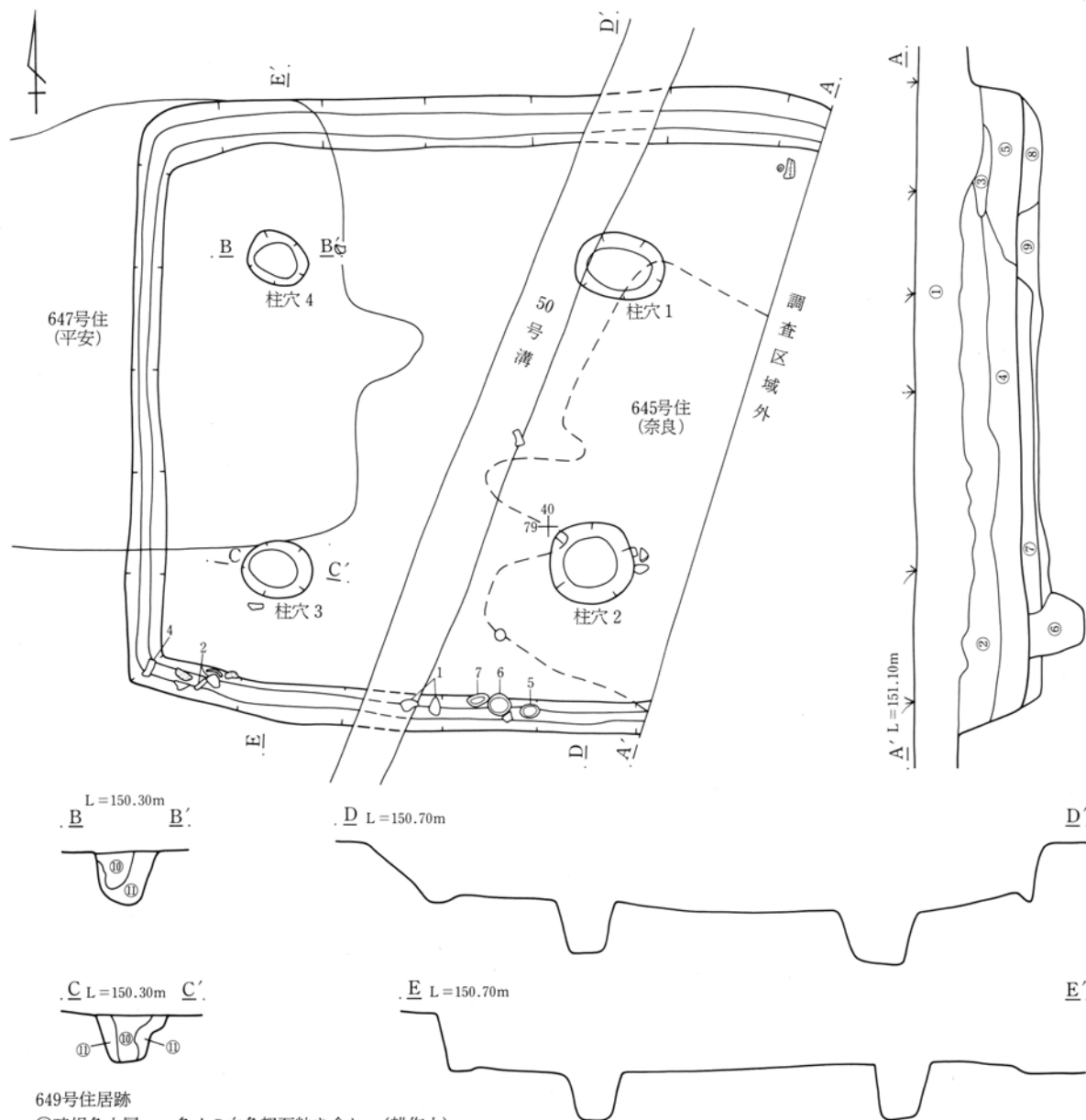
概要 同じ奈良時代の645号住居と重複しており、本住居が645号住居を床上約10cmのところまで掘り込んで造られている。東側では平安時代の647号住居と重複しておりその部分の覆土上面は掘り込まれている。住居ほぼ中央部の覆土を50号溝が掘り込んでおり、住居東側は調査区域外となっている。このように全体に残りの悪い住居である。竈は調査区域外の東壁面に造られているためか、確認できない。竈の想定される部分の土層に少量の焼土粒が確認されている。

構造 床面や床下調査により位置的に見て柱穴と思われる掘り込みが4本確認された。他にも多くの小穴が

掘られているが、貯蔵穴は不明である。

規模 東西不明、南北5.45mである。壁高は残りの良い南壁面部分50cmである。柱穴1は径56cm深さ45cm、柱穴2は径68cm深さ56cm、柱穴3は径48cm深さ39cm、柱穴4は径68cm深さ56cmである。

遺物 甕や坏の破片が大量に出土している。鉄類の出土が注目される。

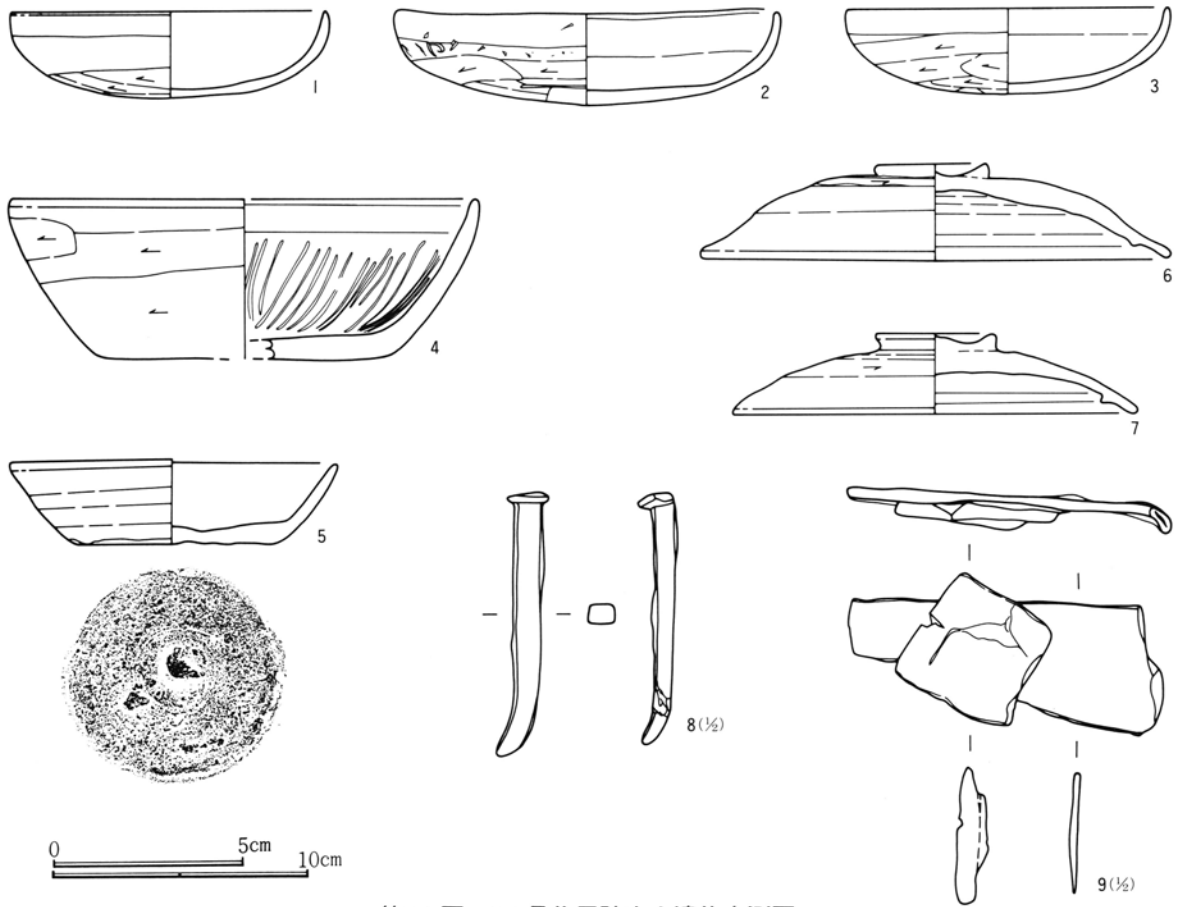


649号住居跡

- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。(耕作土)
- ②暗褐色土層 少量のローム粒を含む。
- ③暗灰褐色土層 少量の粘土と焼土粒を含む。
- ④暗褐色土層 ②層に近いが、より多くのローム粒と少量のローム小ブロックを含む。
- ⑤暗褐色土層 ④層に近いが、少量の焼土粒を含む。
- ⑥暗褐色土層 少量のローム粒とローム小ブロックを含む。
- ⑦645号住居跡覆土
- ⑧褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ⑨黄褐色土層 地山のロームを主とする。
- ⑩暗褐色土層 ロームブロックを僅かに含む。
- ⑪暗褐色土層 ロームブロックを多く含み焼土粒を僅かに含む。

第453図 649号住居跡実測図

第4章 奈良時代の遺構と遺物



第454図 649号住居跡出土遺物実測図

649号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
454-1 107	土師器 坏	床面+5 完形	口 12.4 高 3.4 底 —	①密、角閃石を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り、器表面が粗れており削りの単位不明瞭。 底部外面に黒斑。
454-2 107	土師器 坏	床面+17 ほぼ完形	口 15.0 高 3.6 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③灰褐色	底面へら削り。体部ナデ。 内面に黒漆と思われる黒色物付着。 底部外面のほぼ全面黒斑により黒色。
454-3 108	土師器 坏	覆土 残存	口 12.7 高 3.4 底 —	①密、角閃石を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り、削りの単位は明瞭でない。 内面ナデにて器表面密。
454-4 108	土師器 坏	床面+10 口～底部欠	口(18.2) 高 — 底(11.7)	①密、2～3mmの赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部外面へら削り。内面に多くの放射状暗文。 黒斑全く認められず。 胎土が粉状を呈している。
454-5 108	須恵器 坏	床面直上 完形	口 12.7 高 3.3 底 8.4	①やや粗、1mm前後の長石粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰色	底面へら切り、切り離し後無調整。 多くの長石粒が目立つ。
454-6 108	須恵器 蓋	床面直上 完形	口 18.4 高 — 底 —	①密、1mm以下の石英粒と長石粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰白色	天井部へら削り。摘みは中央部に薄い円板状の粘土を貼り付け、端部を削り仕上げている。 カエリは低く小さい。内側は重ね焼痕あり。
454-7 108	須恵器 蓋	床面直上 端部一部欠 他完形	口 15.8 高 — 底 —	①密、片岩粒を少量含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	天井部右回転へら削り。 摘みは円板を貼り付け端部を整形している。 カエリは短く内側に鋭利に傾く。
454-8 114	鉄製品 釘	覆土	長 (7.0) 幅 0.7 厚 0.5 重 9.9		釘のほぼ完形品である。 使用のためか下端部が曲がっている。
454-9 114	鉄製品 鎌	覆土	長 — 幅 — 厚 — 重 32.9		鎌の一部である。 他の鉄製品が付着している。

655号住居跡 (第455~458図、図版67・108・114・119・120・121)

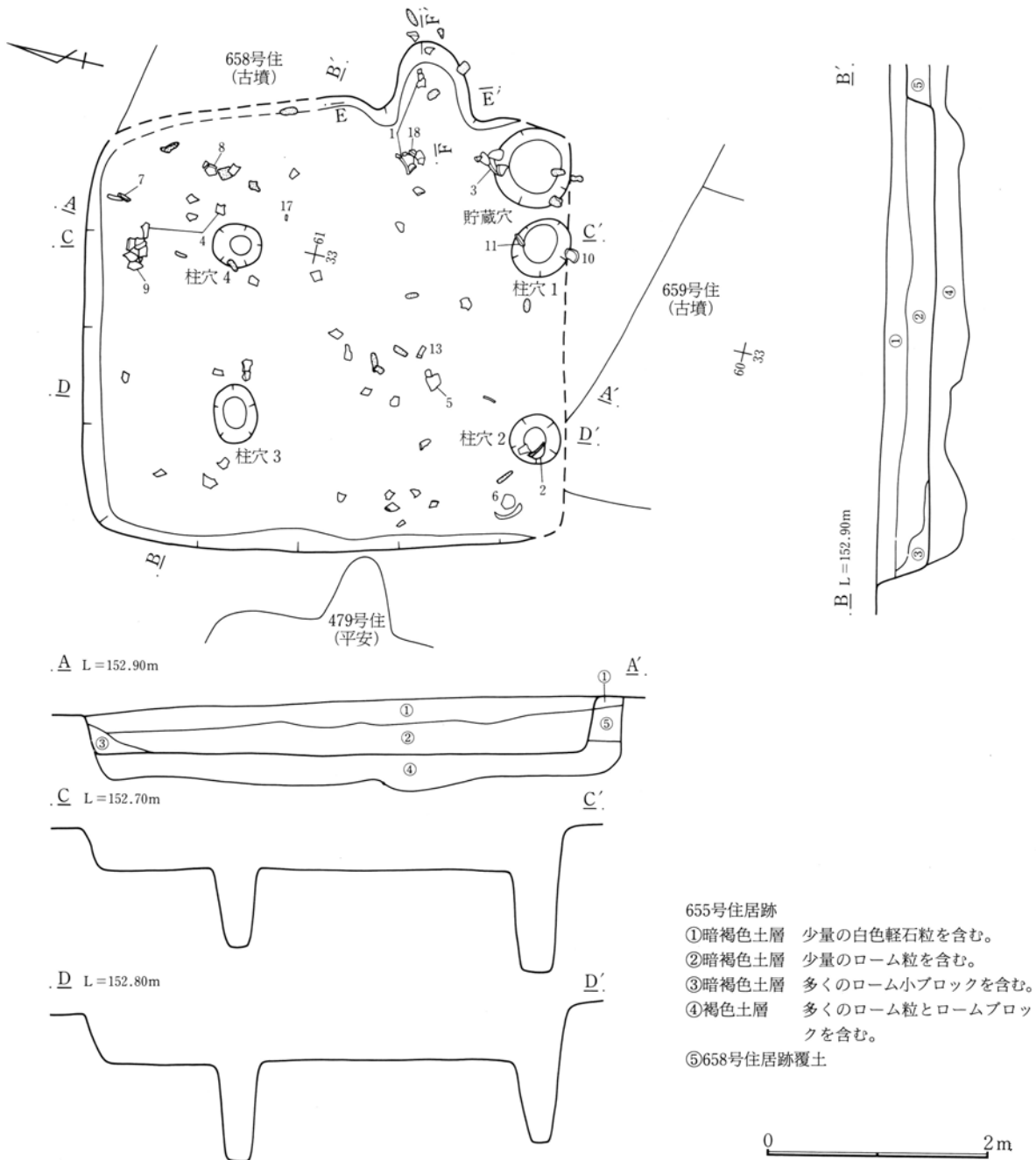
位置 本住居跡は第8次調査区にあり、61・62-33・34グリッドに位置する。

概要 東側で古墳時代の658号住居と、また南側で古墳時代の659号住居と重複しており、本住居が2軒の住居を床下部分まで掘り込んでいる。2軒と重複している南壁面部分の住居範囲は確認できない。

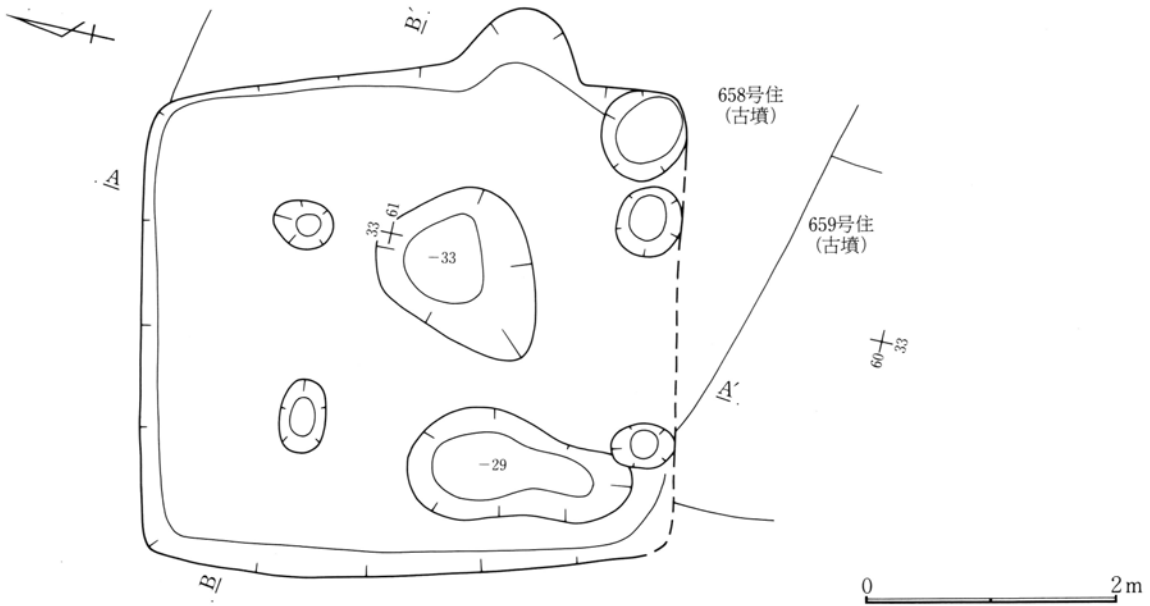
構造 竈右側に貯蔵穴が、床面には柱穴が4本掘られている。

規模 東西3.76m、南北4.36mである。壁高は残りの良い南壁面部分で56cmである。貯蔵穴は径68cm深さ32cm、柱穴1は径52cm深さ90cm、柱穴2は径44cm深さ68cm、柱穴3は径40cm深さ90cm、柱穴4は径46cm深さ71cmである。

床下 床下土坑が2本掘られている。床面からの深さは図上で示した。



第455図 655号住居跡実測図



第456図 655号住居跡床下実測図

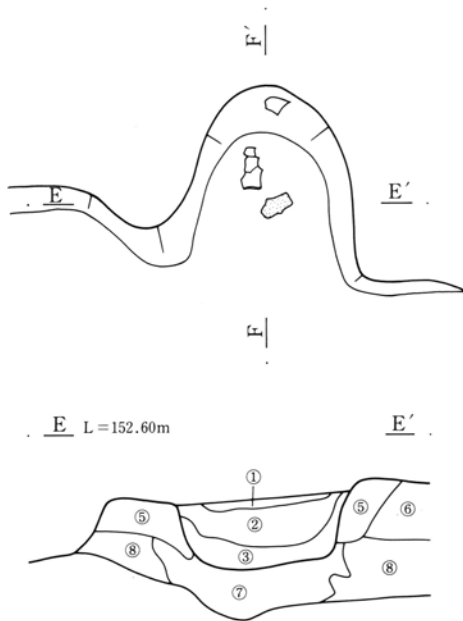
遺物 甕や坏の破片が大量に出土している。鉄類や紡錘車、砥石の出土が注目される。

(竈)

位置 東壁面に位置する竈は、658号住居の覆土と床下覆土を掘り込んで造られている。焚口部分と燃烧部の多くは床面上に位置し、燃烧部の一部と煙道部が壁面を掘り込んで造られている。

構造 658号住居の軟弱な覆土を掘り込み灰褐色粘質土を埋めて造られている。袖石等は使われていないようである。燃烧部床面付近の覆土から多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向83cm、燃烧部幅64cmである。



竈

- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量の焼土粒とローム粒を含む。
- ③暗赤褐色土層 多くの焼土粒とローム粒を含む。
- ④褐色土層 ローム粒とロームブロックを主とする。
- ⑤灰褐色粘質土層 灰褐色粘質土を主とし、少量の灰白色粘土を含む。
- ⑥暗褐色土層 658号住居跡覆土
- ⑦暗褐色土層 多くのロームブロックと少量の焼土小ブロックを含む。
- ⑧暗褐色土層 658号住居跡床下覆土



第457図 655号住居跡竈実測図



第458図 655号住居跡出土遺物実測図

第4章 奈良時代の遺構と遺物

655号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
458-1 108	土 師 器 甕	床面+10 1/2残存	口(23.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面橙色、外面にふい赤褐色	胴部外面ヘラ削り、小さな砂粒が目立つ。 内面ナデにて器表面密。
458-2	土 師 器 壺	床面+5 口~胴部1/4	口(19.8) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな雲母粒を多量に含む。 ②酸化焰、硬質 ③にふい橙色	胴部外面ヘラ削り、砂粒の移動は少ない。 口唇部中央がやや凹状を呈する。 内面ナデ。
458-3	土 師 器 甕	床面直上 1/2残存	口(18.4) 高・底—	①密、多くの雲母粒を含む。 ②酸化焰、硬質。 ③にふい褐色	胴部外面ヘラ削り。器表面密。 口縁部上端細くつまみ上げている。
458-4	土 師 器 小型甕	床面+4 口~頸部1/2	口 12.2 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面にふい黄褐色、外面灰褐色	胴部外面ヘラ削り、小さな砂粒が移動し器表面やや粗い。内面ナデにて器表面密。 口縁部外側の器表面の一部が剥離している。
458-5 108	土 師 器 坏	床面+3 1/2残存	口 16.2 高 5.4 底 —	①密、少量の角閃石を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、削りが細かく単位不明瞭。 内面放射状と小さな螺旋状暗文。
458-6 108	土 師 器 坏	床面+8 口縁一部欠	口 13.0 高 4.8 底 —	①密、1~3mmの赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にふい橙色	底面ヘラ削りと思われるが器表面が粗れており削りの単位ほとんど不明。 内面に暗文と思われる痕跡が残る。
458-7 108	土 師 器 坏	床面+26 1/2残存	口(14.2) 高 — 底 —	①やや粗、1~2mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、軟質 ③にふい橙色	底面ヘラ削り。体部外面ナデ。 内面に暗文なし。 全体に雑なつくりである。
458-8 108	土 師 器 坏	床面+20 口縁部1/2 底部1/2	口(13.2) 高 3.9 底 —	①密、少量の角閃石を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。削りの範囲は狭い。 内面は平らでなく凸凹状を呈する。 黒斑は認められず。
458-9 108	土 師 器 坏	床面+15 1/2残存	口(13.6) 高( 3.5) 底( 7.0)	①密、小さな雲母粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にふい橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 口縁部に輪積痕。 内面に放射状と螺旋状の暗文。
458-10 108	土 師 器 坏	床面-6 口縁部1/2 底部1/2	口(13.1) 高 3.2 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③にふい褐色	底面ヘラ削り。 体部ナデ。 内面に黒漆。
458-11	須 恵 器 皿	床面-30 底部のみ	口 — 高 — 底 10.8	①密、1mm前後の長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質、焼締 ③褐灰色	底面回転ナデ整形。低い高台が削り出しによりつくられている。底部内面ナデ。 全体にゆがんでいる。
458-12 108	須 恵 器 蓋	床面+20 口縁一部欠	口 13.4 高 — 底 —	①密、1mm前後の砂粒ほとんど含まず。 ②還元焰、硬質 ③灰色	天井部ヘラ削り。摘みは円板状の粘土を貼り付け端部は丸く仕上げている。 カテリはすべて削り取られている。
458-13	須 恵 器 蓋	床面+50 摘完形 他1/2	口 — 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	天井部右回転ヘラ削り。 摘みは低い。 口縁端部は鶴首状を呈する。
458-14 114	鉄 製 品 鉄 斧	覆土	長 5.4 幅 3.7 厚 1.5 重 53.6		鉄斧の完形品である。 残りは良好である。
458-15 114	鉄 製 品 刀 子	覆土	長 (6.1) 幅 1.3~2.8 厚 0.4 重 14.2		大きな刀子の茎と刀身部と思われる。 錆化が進んでおり残りが悪い。
458-16	石 製 品 紡 錘 車	覆土	径(3.5)/(2.5) 孔径(0.6) 厚 1.1 重 12.8		滑石片岩。広面狭面共に磨かれている。 側面細い削り痕。
458-17 121	石 製 品 砥 石	床面直上	長 (6.3) 幅 3.9 厚 3.0 重 134.9		流紋岩。 4側面を砥石として使用している。
458-18 120	石 製 品 有孔飾石	床面+12	長 3.3 幅 2.3 厚 0.7 重 6.2		砂岩。 飾石と思われるが用途や名称不明。

665号住居跡 (第459~460図、図版67・108)

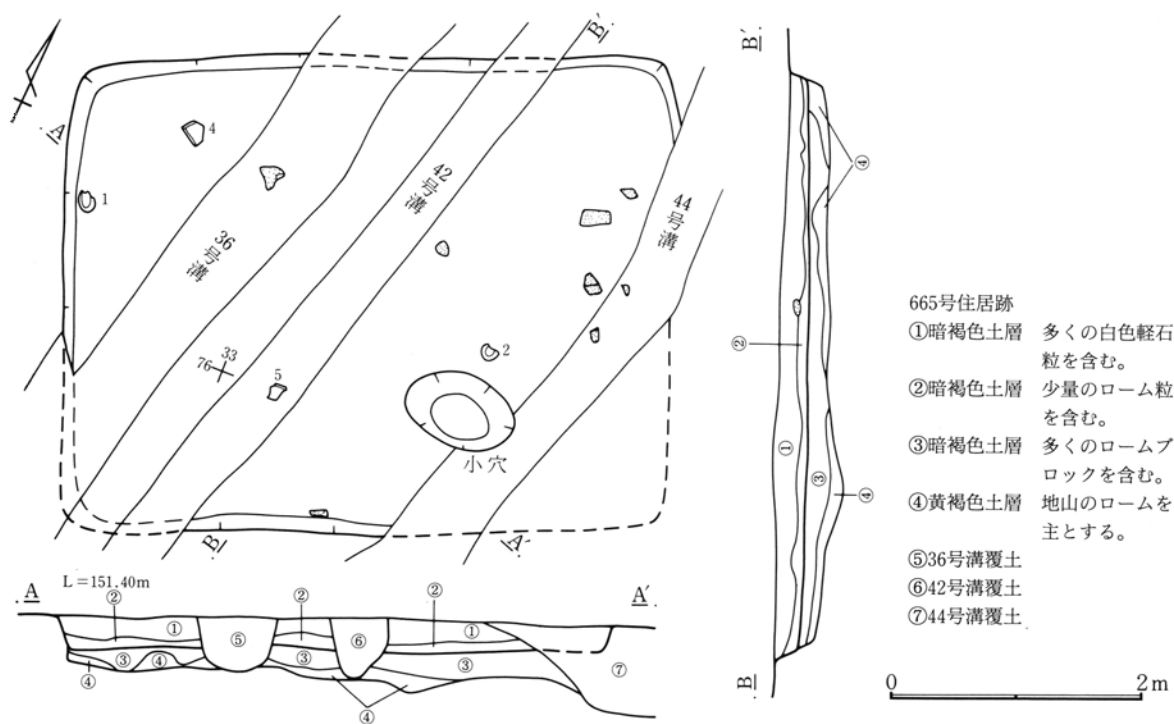
位置 本住居跡は第8次調査区にあり、76・77-33・34グリッドに位置する。

概要 南北方向の3本の溝により床下部分まで深く掘り込まれている。小穴が1本掘られているが、貯蔵穴や柱穴は掘られていない。竈は造られていたと思われるが不明である。

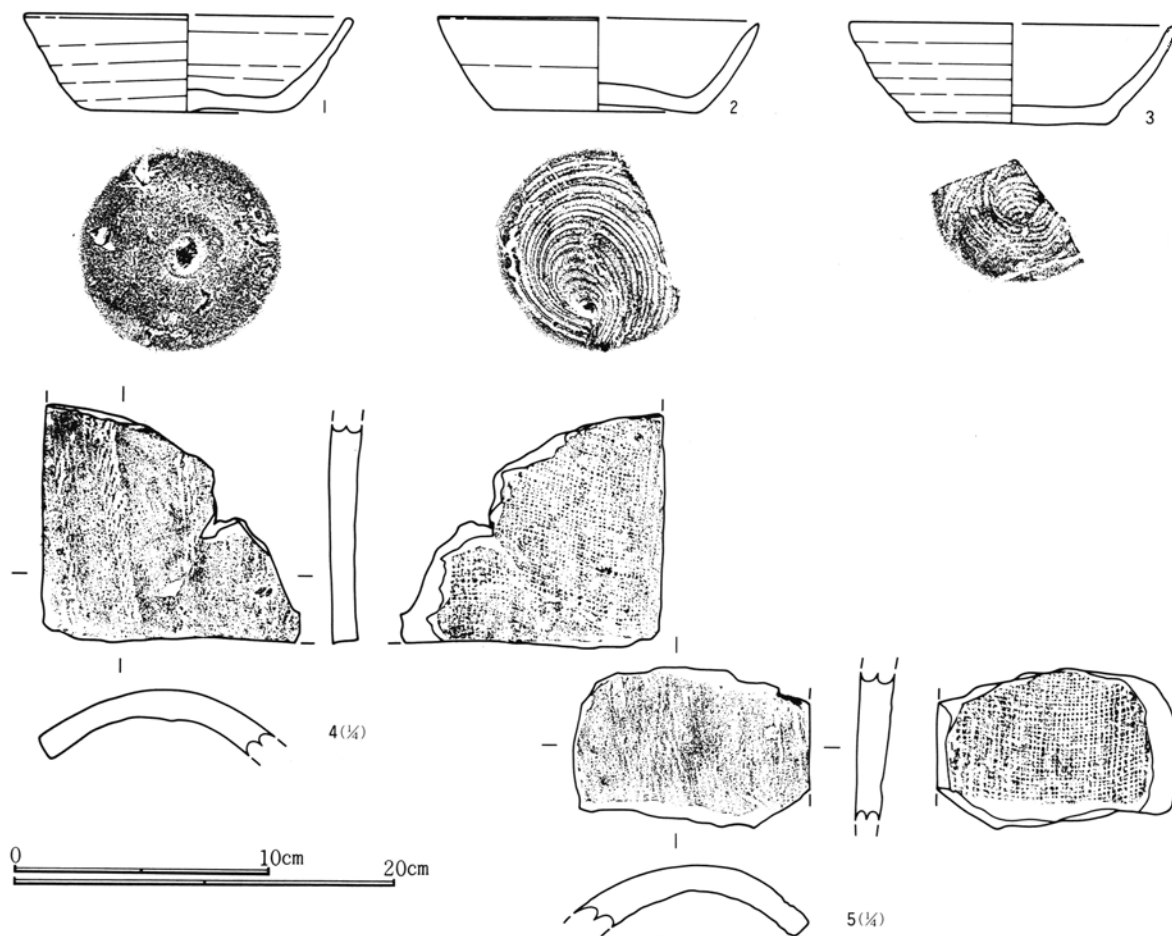
規模 東西4.82m、南北3.68mである。壁高は残りの良い南壁面部分で26cmである。小穴は径85×55cm深さ56cmである。

遺物 甕、坏、瓦等が出土している。図示できたのは須恵器の坏と瓦である。





第459図 665号住居跡実測図



第460図 665号住居跡出土遺物実測図

665号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
460-1 108	須恵器 坏	床面+6 口縁部 $\frac{1}{2}$ 底部完形	口(13.0) 高 3.8 底 7.8	①密、1mm前後の長石粒を少量含む。②還元焰、硬質 ③灰白色	底面ヘラ切り、切り離した後回転ヘラ削りでわずかに再調整。
460-2 108	須恵器 坏	床面+3 口縁部 $\frac{1}{2}$ 底部 $\frac{1}{2}$	口(12.6) 高 3.6 底(8.0)	①密、1~2mmの長石粒を多く含む。②還元焰、軟質 ③灰白色	底面右回転糸切り痕。 底部中央の器肉が厚く盛り上がっている。
460-3	須恵器 坏	掘り方覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口(12.6) 高 3.9 底 7.4	①密、②還元焰、硬質 ③灰白色	底面糸切り後周辺部手持ヘラ削り。 底部器肉の厚さはほぼ一定である。
460-4	丸瓦	床面+12 破片	— —	①密、1~2mmの長石粒を含む。 ②還元焰、硬質。③青黒色	凹面布目、凸面縄叩き。 固く焼き締められている。
460-5	丸瓦	床面+6 破片	— —	①密、1~2mmの長石粒多く含む ②酸化焰、硬質。③表面暗赤褐色	断面赤褐色。凹面布目。凸面縄叩き。 固く焼き締められている。

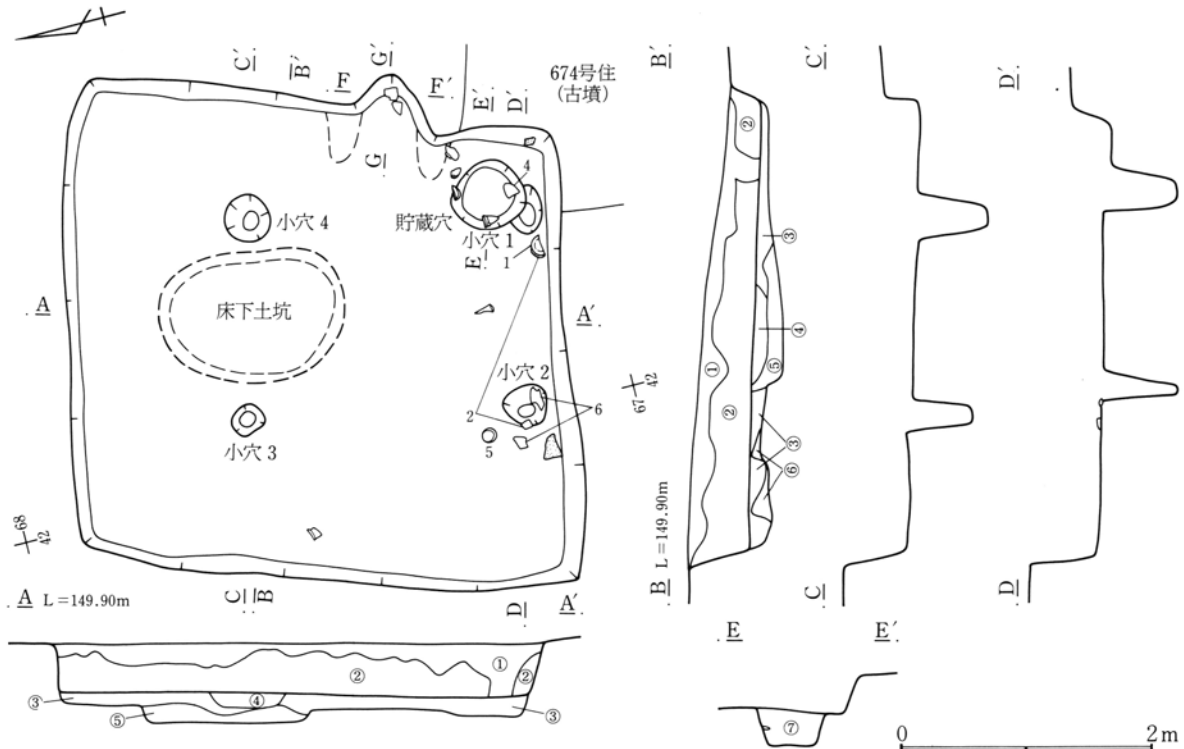
671号住居跡 (第461~463図、図版67・108)

位置 本住居跡は第8次調査区にあり、68-43グリッドに位置する。

概要 南東コーナー部分で古墳時代の674号住居と重複しており、本住居が674号住居を床下部分まで掘り込んでいる。竈の右側に貯蔵穴がまた小穴が4本掘られているが、明確な柱穴は確認できない。床面中央部に床下土坑が掘られており、中から多くの暗灰褐色粘土が出土している。

規模 東西3.82m、南北3.92mである。壁高は残りの良い西壁面部分で58cmである。貯蔵穴は径56cm深さ37cm、小穴1は径38cm深さ59cm、柱穴2は径36cm深さ59cm、柱穴3は径26cm深さ49cm、柱穴4は径40cm深さ60cmである。床下土坑は径145×102cm深さ19cmである。

遺物 全体の出土量は少ない。

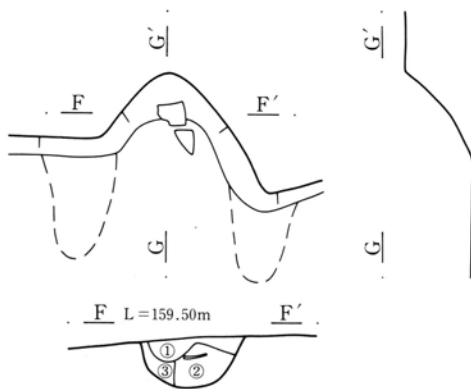


671号住居跡

- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム小ブロックを含む。
- ③褐色土層 多くのローム粒とロームブロックと少量の焼土粒と炭化物を含む。

- ④褐色土層 ローム粒とロームブロックを主とする。
- ⑤暗灰褐色土層 多くの暗灰褐色粘土とロームブロックを含む。
- ⑥黄褐色土層 地山のロームを主とする。
- ⑦暗褐色土層 少量の粘土・焼土粒・炭化物を含む。

第461図 671号住居跡実測図



(竈)

位置 東壁面を掘り込んで造られている。燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 残りが悪く袖部分は残っていない。焼土粒の出土も少ない。

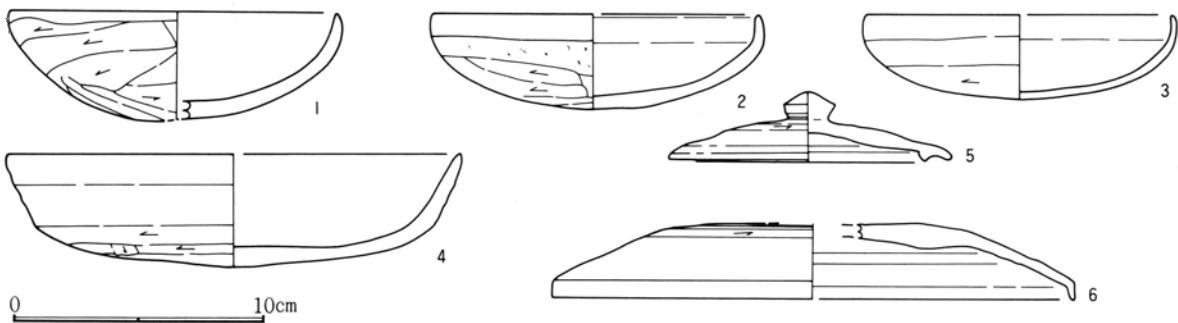
規模 煙道方向、燃烧部幅とも不明である。

竈

- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量の焼土粒と多くのローム小ブロックを含む。
- ③暗黄褐色土層 多くのロームブロックを含む。



第462図 671号住居跡竈実測図



第463図 671号住居跡出土遺物実測図

671号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
463-1 108	土師器 坏	床面+8 ½残存	口 12.6 高 — 底 —	①密、少量の角閃石を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面へら削り。焼成が固く金属音がする。 内面ナデにより器表面密。
463-2 108	土師器 坏	床面-4 ½残存	口(12.6) 高 3.7 底 —	①密、少量の角閃石を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り、削りの単位は明瞭である。 体部ナデ。内面ナデにて器表面密。 黒斑全く認められず。
463-3 108	土師器 坏	掘り方覆土 口縁部½ 底部½	口(12.0) 高 3.3 底 —	①密、少量の角閃石を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削りであるが、器表面がやや粗れており削りの単位不明瞭。 黒斑全く認められず。
463-4	須恵器 坏	床面+36 ¼残存	口(17.6) 高 4.4 底 —	①密、1~2mmの長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面中央ナデ。周辺部右回転へら削り。 口縁部回転ナデ。 底部中央がやや肉厚となっている。
463-5 108	須恵器 蓋	床面+4 完形	口 11.0 高 — 底 —	①密、1~2mmの長石粒を少量含む。 ②還元焰、硬質、焼締 ③灰色	天井部へら削り。 摘みは端部を鋭利に摘み出している。 カエリは口縁端部より下に出る。
463-6	須恵器 蓋	床面直上 ½残存	口(20.4) 高 — 底 —	①やや粗、1~3mmの長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰白色	天井部幅広いへら削り。 天井部内側平行方向のナデ。

701号住居跡 (第465図、図版67・108)

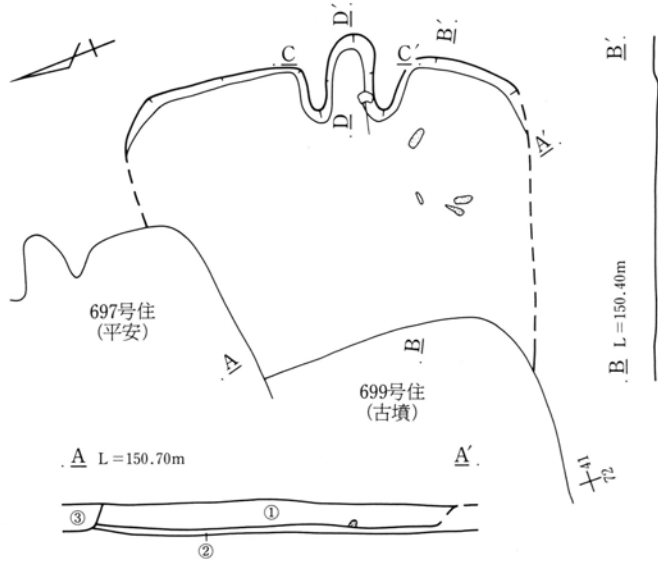
位置 本住居跡は第10次調査区にあり、42-73グリッドに位置する。

概要 西側で古墳時代の699号住居と平安時代の697号住居と重複している。本住居は残りが悪く西側の住居範囲は残っていない。そのため重複関係は明らかでない。東側は小さな谷地となっており、本住居より東側の谷地部分に住居は造られていない。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模 東西不明、南北3.18mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で12cmである。

遺物 破片は出土しているが、図示できたのは土師器の坏2点である。

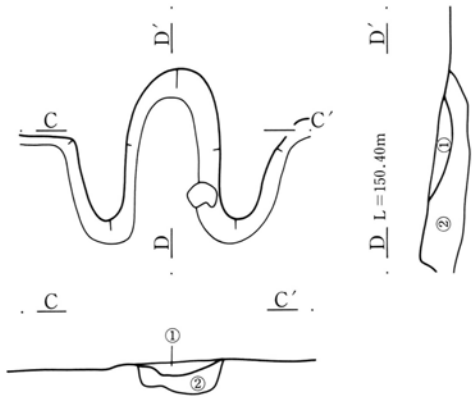
第4章 奈良時代の遺構と遺物



第464図 701号住居跡実測図

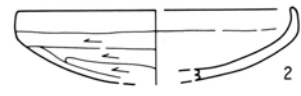
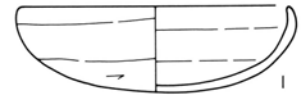
(竈)  
 位置 東壁面を掘り込んで造られている。  
 燃烧部の多くは壁面を掘り込んで造られていた。  
 構造 残りが悪く燃烧部分より上の部分はほとんど残っていない。燃烧部から烧土粒の出土は僅かである。  
 規模 煙道方向、燃烧部幅とも不明である。

701号住居跡  
 ①暗褐色土層 少量の白色軽石粒を含む。  
 ②黄褐色土層 地山のロームを主とする。  
 ③697号住居跡覆土



第465図 701号住居跡竈・出土遺物実測図

竈  
 ①暗褐色土層 少量の烧土粒を含む。  
 ②暗褐色土層 少量の烧土粒とローム小ブロックを含む。

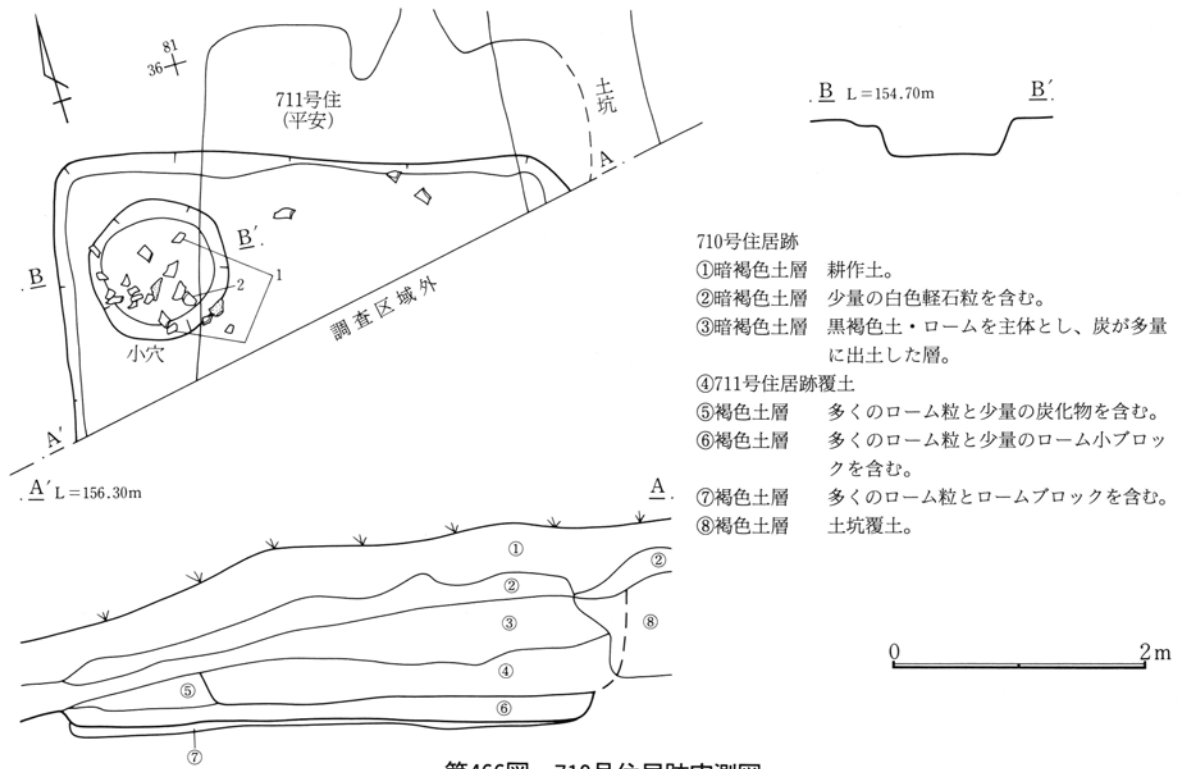


701号住居跡出土遺物観察表

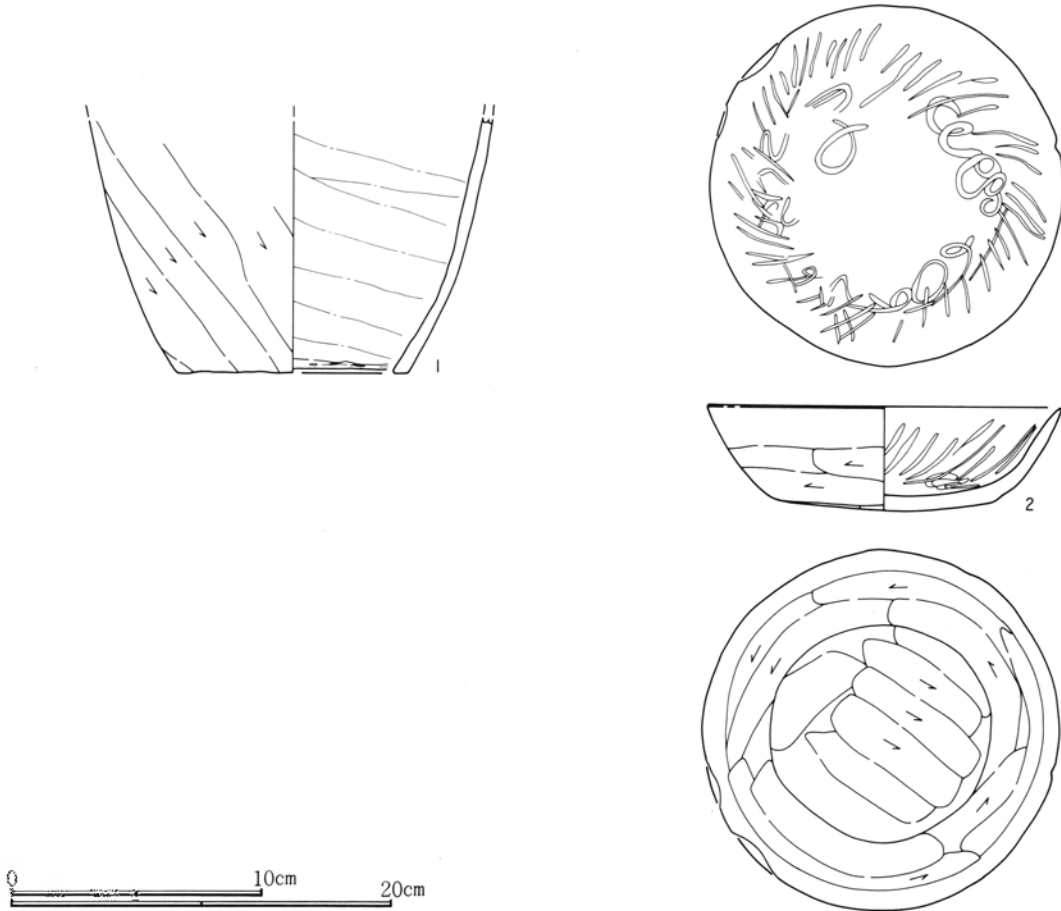
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②烧成 ③色调	成・整形技法の特徴・備考
465-1 108	土 師 器 坏	竈内 ほぼ完形	口 10.5 高 3.4 底 -	①密、少量の角閃石を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りであるが、器表面がやや粗れており削りの単位不明瞭。 黒斑全く認められず。
465-2	土 師 器 坏	掘り方覆土 1/4残存	口(10.8) 高 - 底 -	①1mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りと思われるが不明瞭。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。

710号住居跡 (第466・467図、図版67・108)

位置 本住居跡は第11次調査区にあり、38-81・82グリッドに位置する。  
 概要 東側で平安時代の711号住居と重複しており、711号住居により覆土上面を掘り込まれている。また東端部分で細長い土坑と重複しており覆土上面の一部が削られている。また南側は調査区域外となっている。竈は他に壁面には造られていないため、調査区域外の東壁面に造られているものと思われる。柱穴も不明であるが、貯蔵穴に似た小穴が北西コーナー部分に掘られている。  
 規模 東西4.06m、南北不明である。壁高は残りの良い東壁面部分で38cmである。小穴は径180cm深さ28cmである。  
 遺物 全体に僅かの出土量しかなく、破片を含めて総数15点である。



第466図 710号住居跡実測図



第467図 710号住居跡出土遺物実測図

710号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
467-1	土師器 甕	床面-13 胴~底部1/3	口・高一 底(12.0)	①密、多くの小さな雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③明褐色	胴部外面へら削り。下端部内側へら削り。 内面ナデにて器表面密。
467-2 108	土師器 坏	床面-22 ほぼ完形	口 13.8 高 4.1 底 8.6	①密、1mm以下の赤色粒を多量に 含む。②酸化焰、硬質 ③明黄褐色	底面と体部外面へら削り。 内面に放射状と螺旋状の暗文あり。

713号住居跡 (第468~471図、図版67・68・108・119・121)

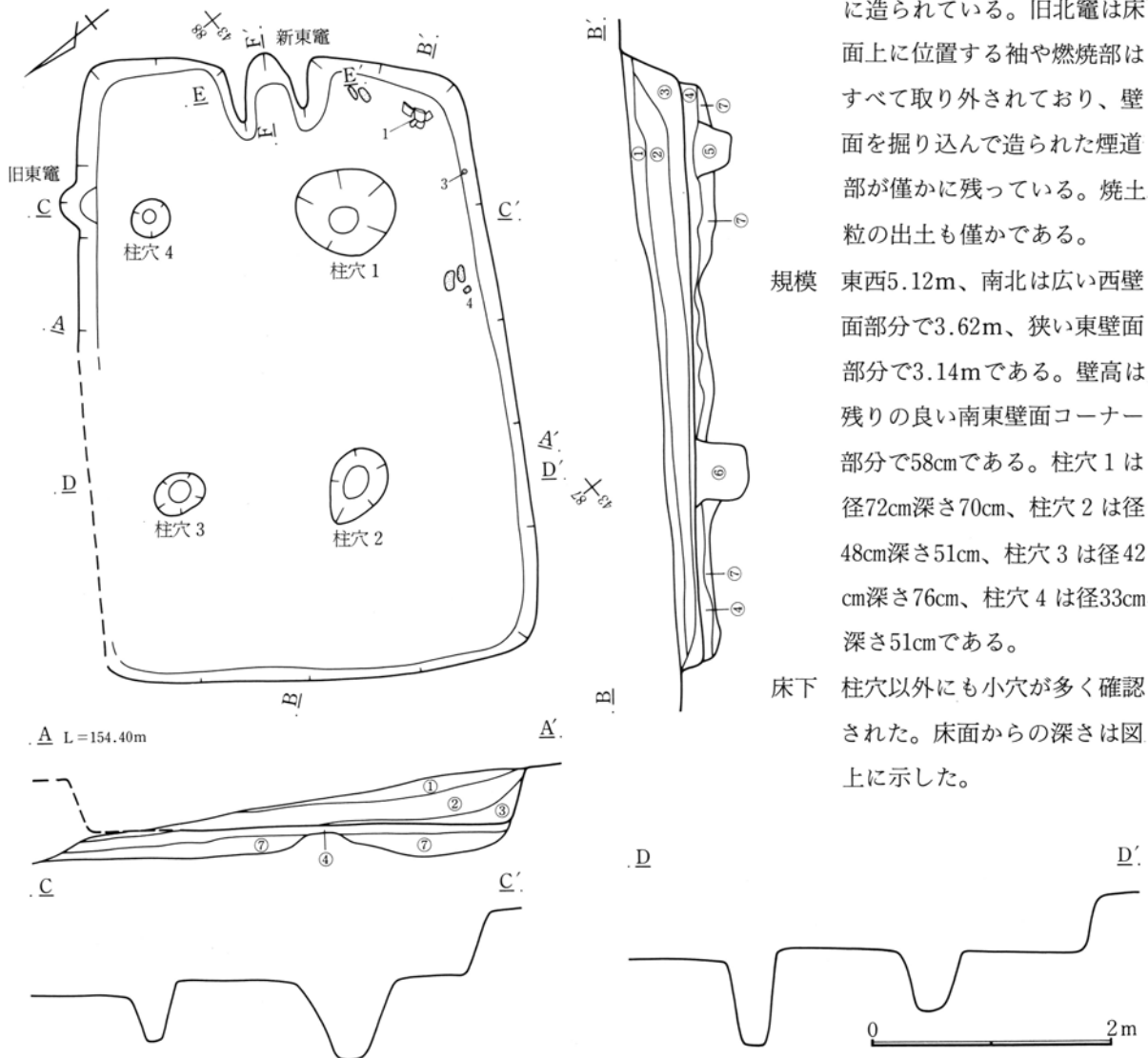
位置 本住居跡は第11次調査区にあり、44-88グリッドに位置する。

概要 北側の低くなる傾斜面に位置し、北側の壁面と床面の一部は残っていない。西壁面側が広く東壁面側の狭い不定形な形をしている。床面調査の段階で明瞭な柱穴は確認できなかったが、床下調査により柱穴と思われる小穴が4本確認できた。貯蔵穴は掘られていない。新東竈が東壁面に旧北竈が北壁面に

に造られている。旧北竈は床面上に位置する袖や燃焼部はすべて取り外されており、壁面を掘り込んで造られた煙道部が僅かに残っている。焼土粒の出土も僅かである。

規模 東西5.12m、南北は広い西壁面部分で3.62m、狭い東壁面部分で3.14mである。壁高は残りの良い南東壁面コーナー部分で58cmである。柱穴1は径72cm深さ70cm、柱穴2は径48cm深さ51cm、柱穴3は径42cm深さ76cm、柱穴4は径33cm深さ51cmである。

床下 柱穴以外にも小穴が多く確認された。床面からの深さは図上に示した。

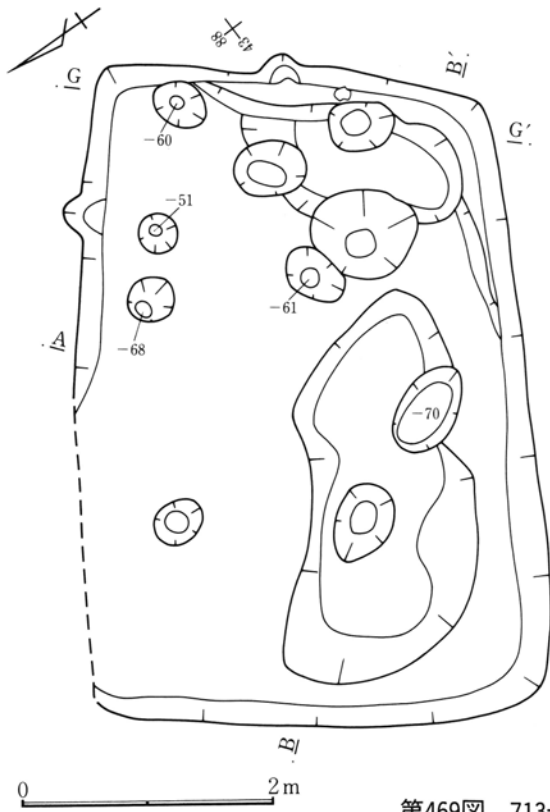


713号住居跡

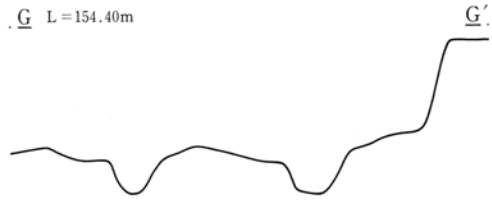
- ①暗褐色土層 少量の白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量のローム小ブロックを含むが、色調は①層より暗い。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒を含む。

- ④褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ⑤暗褐色土層 少量の炭を混入している。
- ⑥暗褐色土層 少量のローム粒を含む。
- ⑦黄褐色土層 地山のロームを主とする。

第468図 713号住居跡実測図



第469図 713号住居跡床下実測図



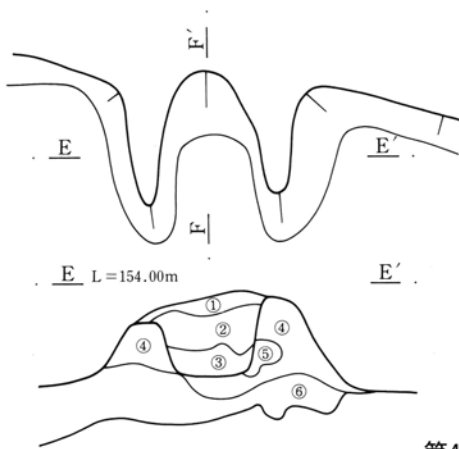
遺物 出土量は少ない。紡錘車が注目される。

(新東竈)

位置 東壁面を掘り込んで造られている。袖部分と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 袖石等は出土していない。袖の一部から灰白色粘土が出土しているため、粘土とロームを混ぜた土で竈は造られていたものと思われる。燃烧部から焼土粒の出土は少ない。

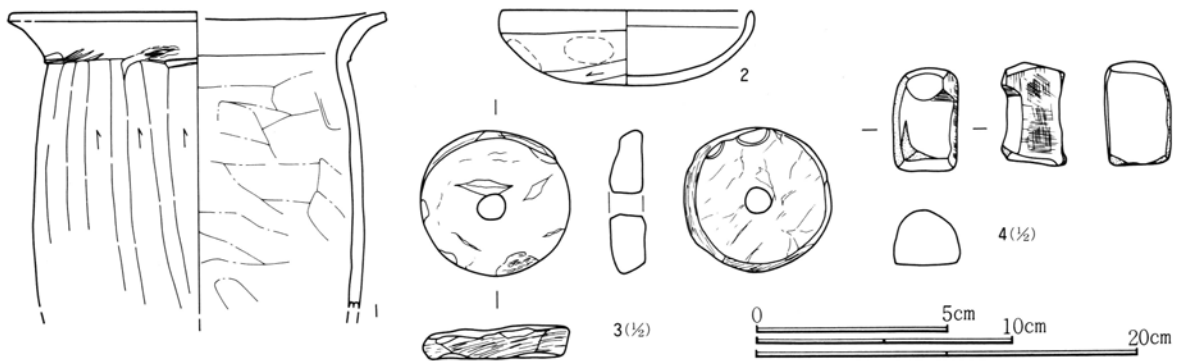
規模 煙道方向71cm、燃烧部幅38cmである。



第470図 713号住居跡竈実測図

竈

- ①暗褐色土層 少量の白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量のローム粒と焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 ②層より多く焼土粒を含む。
- ④暗褐色土層 少量のローム粒とローム小ブロックを含む。
- ⑤暗灰色土層 多くの粘土と少量の焼土粒を含む。
- ⑥褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む



第471図 713号住居跡出土遺物実測図

713号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
471-1 108	土師器 甕	床面+1 1/4残存	口(20.0) 高— 底—	①密、1~2mmの片岩粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面強いヘラ削り、削りの単位は明瞭である。 口縁部との境に多くの段を持つ。 内面に強いナデの痕跡を多く残す。
471-2 108	土師器 坏	竈覆土 1/2残存	口 9.9 高 3.0 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。 体部ナデ。 器表面全体が粗れている。
471-3 119	石製品 紡錘車	床面+15 完形	径 4.0/3.4 孔径 0.7 厚 0.8 重 22.3		滑石片岩。広面と狭面自然石。側面は刃物と荒砥削り。 やや不自然な形をしているが完形品と思われる。
471-4 121	石製品 不明	床面+1	長 5.2 幅 3.3 厚 2.9 重 87.6		用途及び名称不明。砥石を再加工して何らかの製品を作る途中のものと思われる。

717号住居跡 (第472~476図、図版68・108・109)

位置 本住居跡は第11次調査区にあり、42-81グリッドに位置する。

概要 西側が低くなる傾斜面に位置し、西壁面と床面の一部は残っていない。新北竈と旧東竈が造られている。旧東竈は床面に位置する袖部分と燃烧部は取り外されている。壁面を掘り込んで造られている煙道部には土師器の甕が口縁部を下にして煙道として使用されている。新北竈の右側には貯蔵穴が掘られているが、旧竈の右側には掘られていない。柱穴も掘られていない。

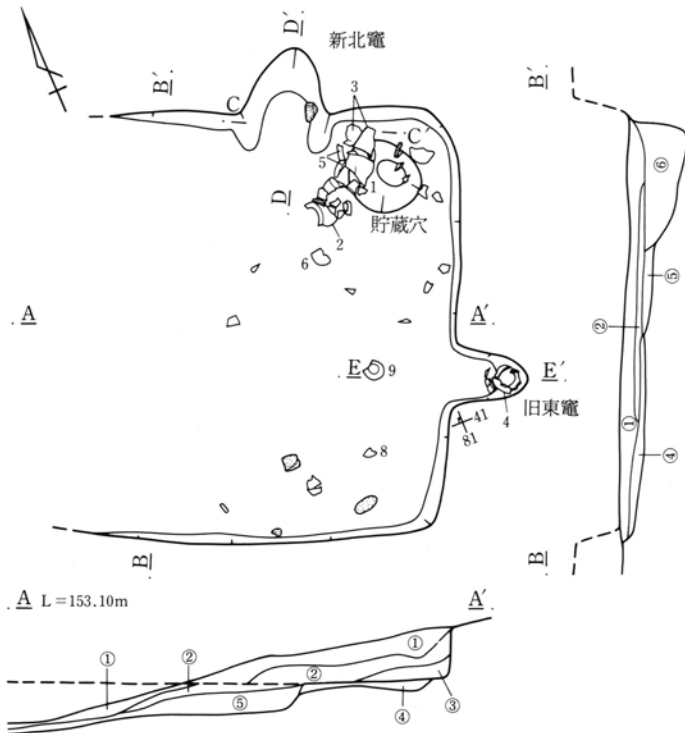
規模 東西不明、南北3.42mである。壁高は残りの良い南東壁面コーナー部分50cmである。貯蔵穴は径55cm 深さ20cmである。

床下 住居中央及び北面コーナー部分に床下土坑が掘られている。床面からの深さは図上で示した。

遺物 貯蔵穴周辺より甕や坏が出土している。

(新北竈)

位置 北壁面を掘り込んで造られている。燃烧部の一部は壁面を掘り込んで造られている。



構造 全体に残りが悪く、袖部分は一部しか残っていない。燃烧部から石が1つ出土しているが、袖石ではないと思われる。竈はロームを多く含む土で造られているが、表土が浅く植物の根により全体に攪乱を受け、全体が軟質なロームとなっている。燃烧部から焼土粒の出土は少ない。

規模 煙道方向85cm、燃烧部幅56cmである。

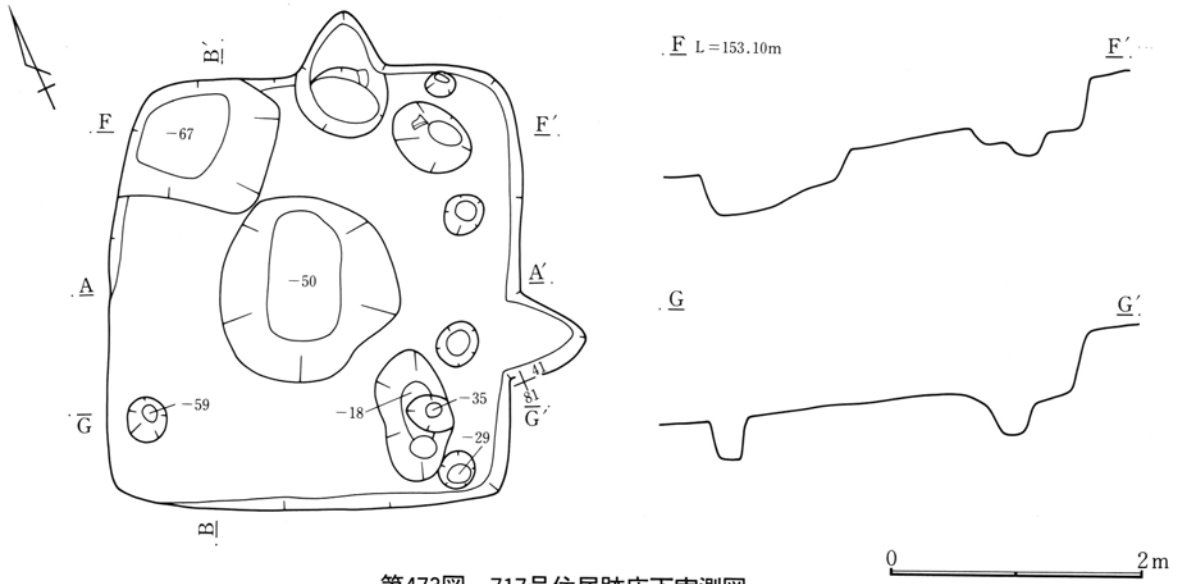
717号住居跡

- ①暗褐色土層 少量の白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒・炭化物を含む。
- ③暗褐色土層 ②層に近いがより多くのローム粒を含む。
- ④黄褐色土層 地山のロームを主とする。
- ⑤褐色土層 ロームを主とし、少量の粘土を含む。
- ⑥暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。軟質

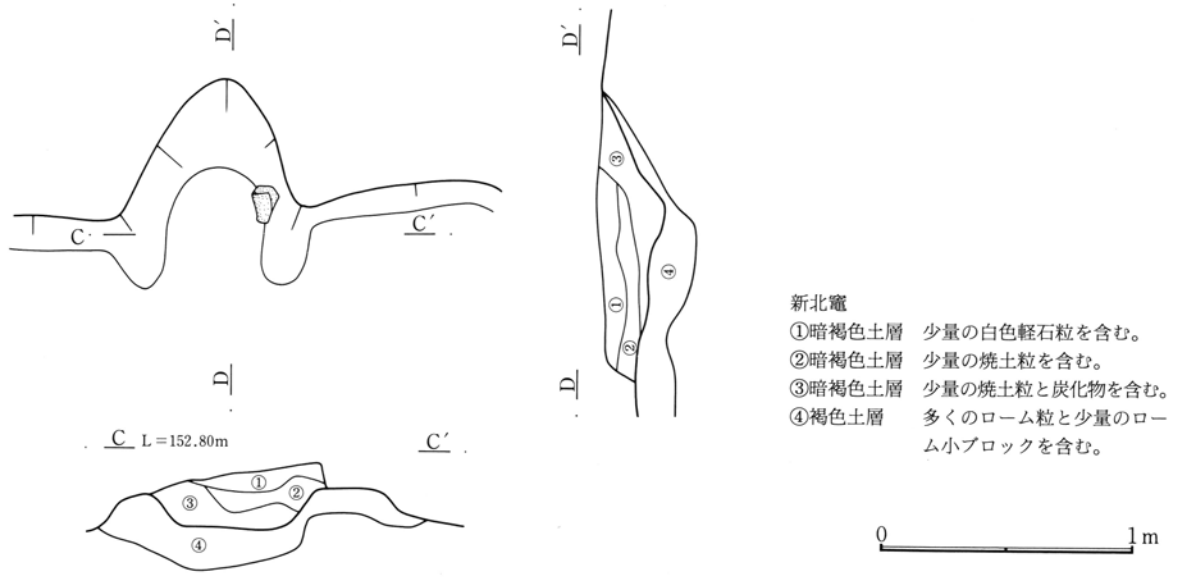
第472図 717号住居跡実測図

0 2m





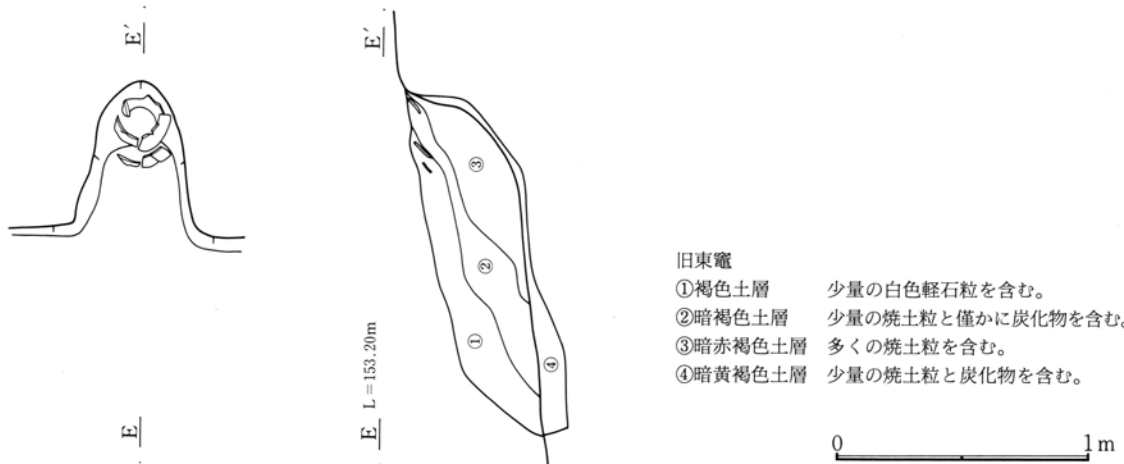
第473図 717号住居跡床下実測図



新北竈

- ①暗褐色土層 少量の白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量の焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 少量の焼土粒と炭化物を含む。
- ④褐色土層 多くのローム粒と少量のローム小ブロックを含む。

第474図 717号住居跡新北竈実測図



旧東竈

- ①褐色土層 少量の白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量の焼土粒と僅かに炭化物を含む。
- ③暗赤褐色土層 多くの焼土粒を含む。
- ④暗黄褐色土層 少量の焼土粒と炭化物を含む。

第475図 717号住居跡旧東竈実測図



717号住居跡出土遺物観察表 第476図 717号住居跡出土遺物実測図

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
476-1 108	土師器 甕	床面+5 口縁部完形 胴部 $\frac{1}{2}$	口 23.6 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を大量に含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へラ削り。口縁部に輪積痕がわずかに残る。内面ナデにて器表面密。胴下半部の器表面が剝離している。
476-2 109	土師器 甕	床面+10 口~胴上完 下半 $\frac{1}{2}$	口 22.0 高 — 底 —	①密、小さな雲母粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へラナデ、砂粒の移動は少ない。胴部外面下半へラ削り。器肉が全体に厚い。
476-3 109	土師器 甕	床面+5 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴上部 $\frac{1}{2}$	口 23.0 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多量に含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面へラ削り、削られていない口縁部との境に段を持つ。口縁部中央に輪積痕。
476-4 109	土師器 甕	竈内 口縁部完形 胴下半 $\frac{1}{2}$	口 21.8 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③にふい褐色	胴部外面へラナデ、砂粒の移動は少ない。内面ナデにて器表面密。胴部の器肉が薄い。
476-5	土師器 甕	床面+5 口~頸部 $\frac{1}{2}$	口 23.7 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面へラ削り。口縁部中段に輪積痕が残る。内側器表面の多くが剝離している。口縁上部内側にわずかな凹状部あり。
476-6 109	土師器 坏	床面+8 $\frac{1}{2}$ 残存	口(15.6) 高 5.6 底 —	①密、少量の角閃石を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。口縁部の多くが少しづつ欠損している。内面に暗文風の文様あり。

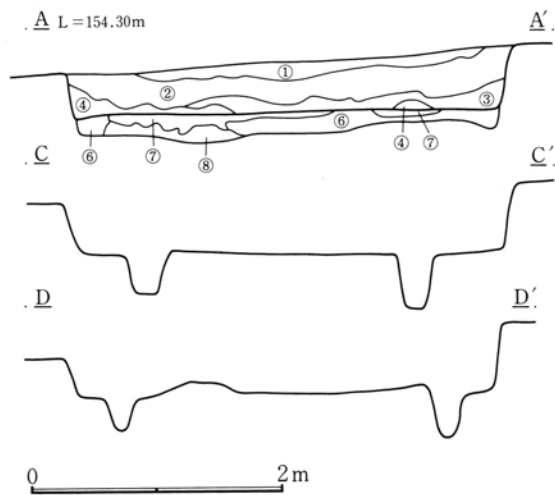
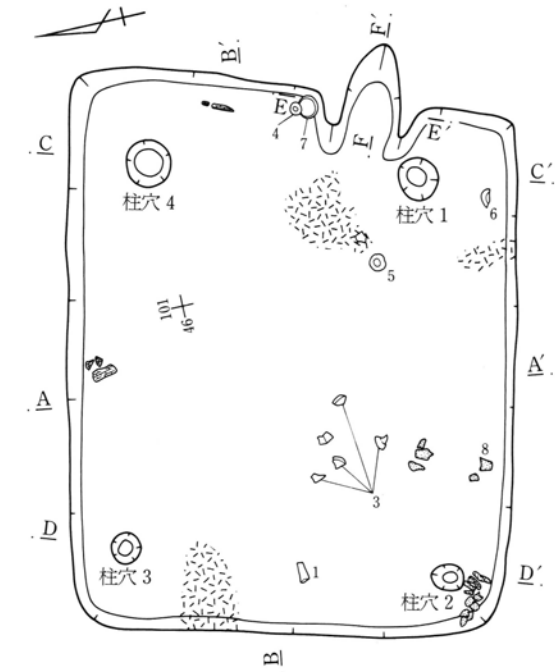
717号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
476-7	土師器 坏	覆土 口~底部1/4	口(14.6) 高(3.7) 底—	①密、1mm以下の砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。 口縁部横ナデ。 内側器表面の多くが剥離している。
476-8 109	土師器 坏	床面+2 1/2残存	口(11.0) 高3.2 底—	①密、少量の角閃石を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りと思われるが、器表面の多くが剥離しており削りの単位不明瞭。 底面吸炭により黒色。
476-9 109	須恵器 坏	床面+18 ほぼ完形	口11.7 高4.2 底7.2	①やや粗 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面ヘラ切り、切り離し後ナデ等により再調整。 底面に窯体の一部が付着。
476-10	須恵器 蓋	掘り方覆土 1/2残存	口(12.5) 高— 底—	①密、1mm以下の長石粒を多く含む。②還元焰、硬質、焼締 ③灰色	天井部右回転ヘラ削り。 口縁端部は折り。

727号住居跡 (第477~479図、図版68・109・121)

位置 本住居跡は11次調査区にあり、46・47-101・102グリッドに位置する。

概要 調査区の最も東側に位置し、本住居より東側には第12次調査区の743号住居が1軒造られているだけである。4隅のコーナーに近い位置に柱穴が掘られているが、貯蔵穴は掘られていない。粉状になった



炭が床面よりやや高い位置で3箇所まとまって出土している。

規模 東西4.45m、南北3.75mである。壁高は残りの良い南東壁面コーナー一部分で57cmである。柱穴1は径33cm深さ45cm、柱穴2は径22cm深さ35cm、柱穴3は径25cm深さ30cm、柱穴4は径36cm深さ53cmである。遺物線刻をもつ須恵器の蓋が出土している。

(竈)

位置 東壁面の南寄りに造られている。燃焼部の一部は壁面を掘り込んで造られている。

構造 ロームを主とする土で造られ、少量の粘土を用いている。燃焼部より多くの焼土粒が出土している。

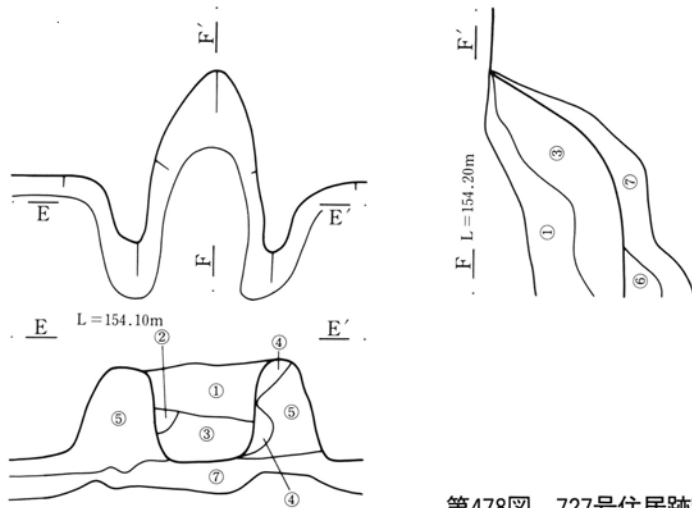
規模 煙道方向90cm、燃焼部幅40cmである。

727号住居跡

- ①暗褐色土層 少量の白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量のローム粒を含む。
- ③暗褐色土層 少量の白色粘土ブロックと炭化物を含む。
- ④褐色土層 少量のローム粒とやや多くの炭化物を含む。
- ⑤褐色土層 少量の炭化物と焼土粒を含む。
- ⑥褐色土層 少量の粘土小ブロックとローム粒を含む。
- ⑦黄褐色土層 ロームブロックを主とする。(貼り床)
- ⑧黄褐色土層 ローム粒とロームブロックを主とする。

第477図 727号住居跡実測図

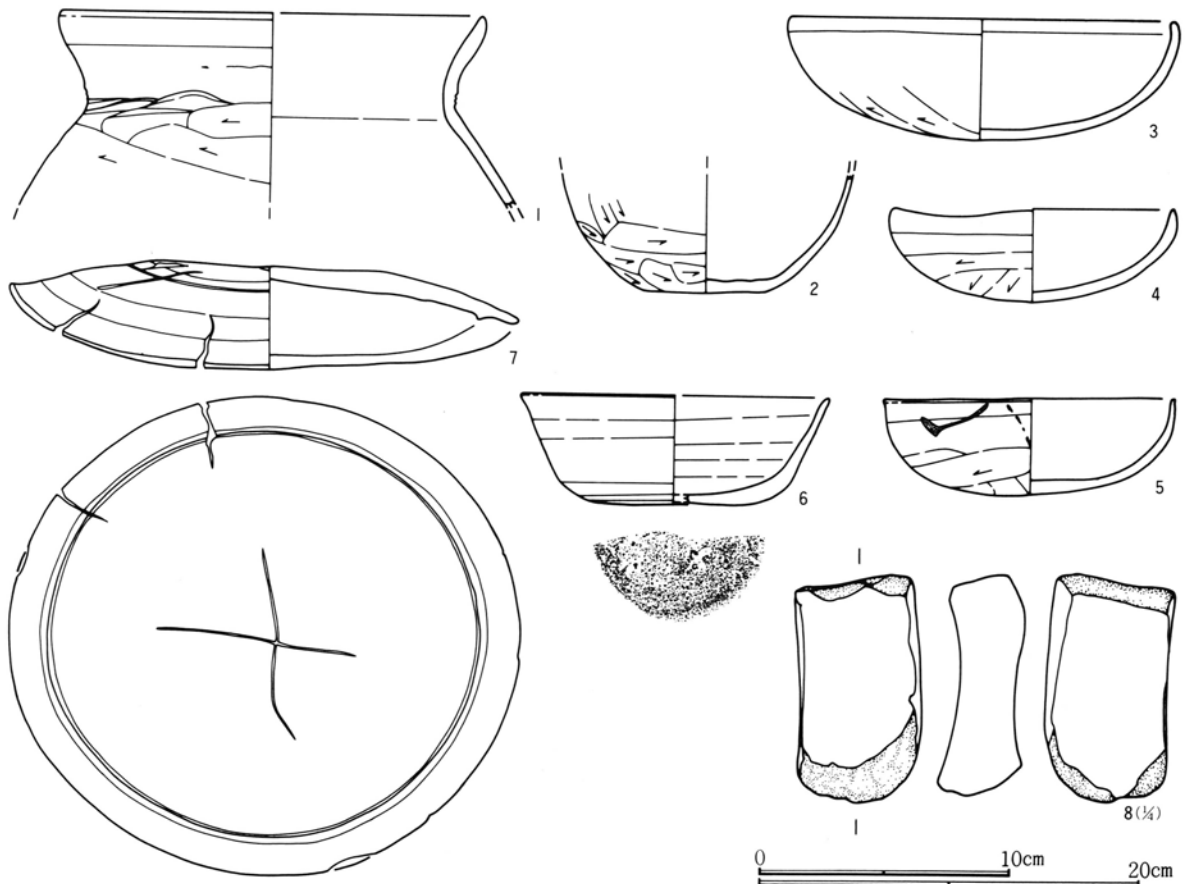
第4章 奈良時代の遺構と遺物



- 竈
- ①褐色土層 少量のローム粒とローム小ブロックを含む。
  - ②赤褐色土層 多くの焼土粒を含む。
  - ③褐色土層 多くの焼土粒と少量の炭化物を含む。
  - ④暗赤褐色土層 多くの焼土粒を含む。
  - ⑤灰褐色土層 ロームを主とする。
  - ⑥暗褐色土層 少量のローム粒と焼土粒を含む。
  - ⑦黄褐色土層 地山のロームを主とする。

第478図 727号住居跡竈実測図

0 1m



第479図 727号住居跡出土遺物実測図

727号住居跡出土遺物観察表

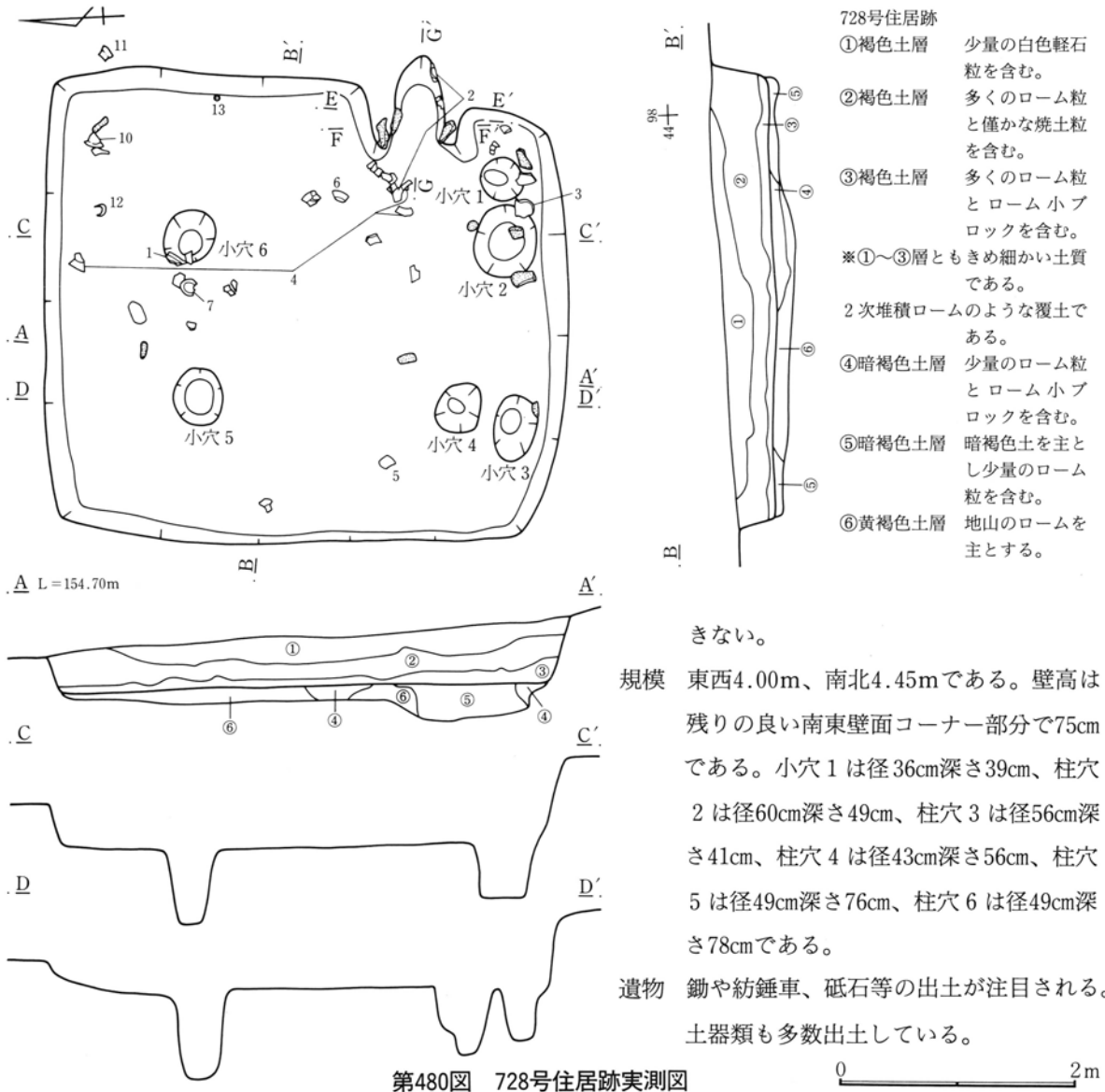
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
479-1	土師器 壺	床面直上 口～頸破片	口(22.0) 高・底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へら削り。 口縁部にへらにより削られた段が多く残る。
479-2	土師器 甕	覆土 胴下半～ 底部½	口— 高— 底6.5	①密、少量の黒色雲母粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③灰褐色	底面と胴部外面へら削り、小さな砂粒が移動しへら削りの単位明瞭。胴部の器肉が薄い。 内側の胴部と底部の器表面が剝離している。
479-3 109	土師器 坏	床面+2 ほぼ完形	口14.8 高4.7 底—	①密、少量の角閃石を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削りと思われるが、器表面が粗れており削りの単位不明瞭。 黒斑全く認められず。

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
479-4 109	土師器 坏	床面直上 完形	口 10.8 高 3.7 底 —	①密、少量の片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り、器表面密で砂粒の移動ほとんどなし。 黒斑全く認められず。
479-5 109	土師器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 11.2 高 3.7 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へら削り。体部ナデ。 口縁部に墨書あり。 器表面全体が密で磨かれたようである。
479-6 109	須恵器 坏	床面-15 1/2残存	口(12.0) 高 — 底(6.6)	①密、1mm前後の長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面へら削り、切り離した後へら等によりわずかに再調整。 多くの長石粒が目立つ。
479-7 109	須恵器 蓋	床面直上 完形	口 22.0 高 — 底 —	①密、1mm以下の石英粒と長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質、焼締。 ③灰白色	天井部へら削り、切り離した後ナデ等により再調整。 摘みは短い。内面に「×」の線刻あり。 全体にひどくゆがんでいる。
479-8 121	石製品 砥石	床面直上	長 (11.7) 幅 6.3 厚 3.0 重 440.0		流紋岩。短いがほぼ完形であると思われる。 4側面を砥石として使用している。

728号住居跡 (第480~483図、図版68・69・109・114・119・121)

位置 本住居跡は第11次調査区にあり、45-98グリッドに位置する。

概要 調査区の最も東側に位置する住居である。小穴は6本掘られているが、明確な貯蔵穴と柱穴は確認で



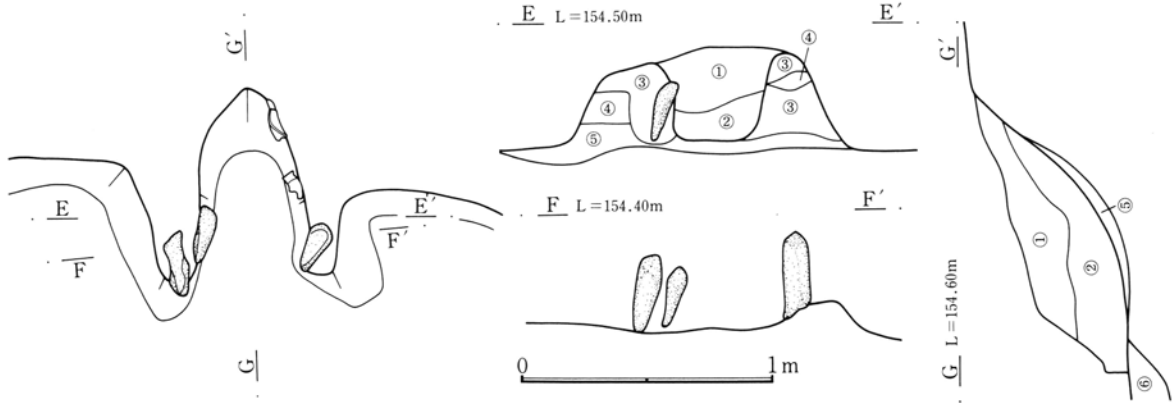
第4章 奈良時代の遺構と遺物

(竈)

位置 東壁面の南寄りに造られている。燃烧部の一部は壁面を掘り込んで造られている。

構造 左袖石が2個、右袖石が1個、ほぼ据えられた状態で出土している。天井石は出土していない。袖部分は少量のローム粒を含む土で造られている。燃烧部より少量の焼土粒が出土している。

規模 煙道方向89cm、燃烧部幅40cmである。

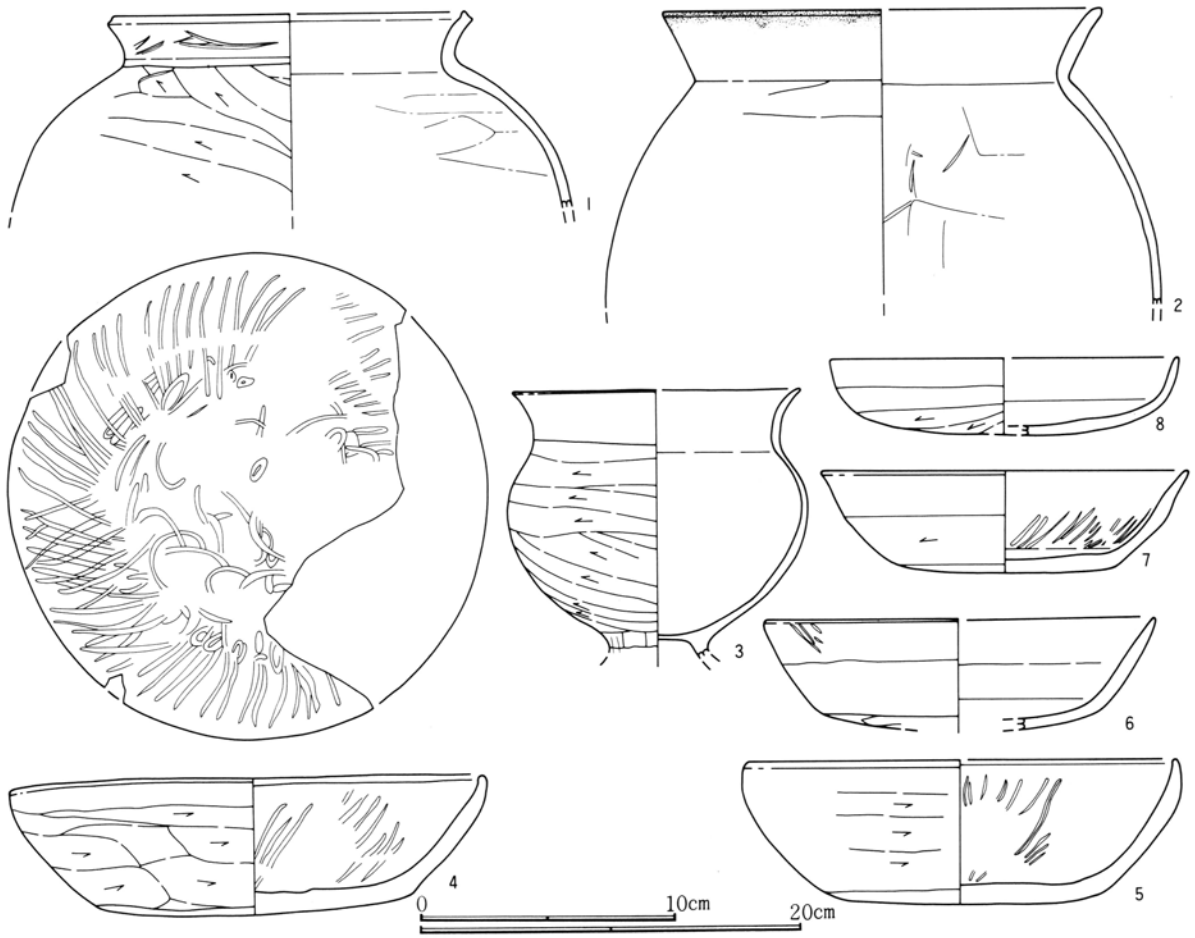


竈

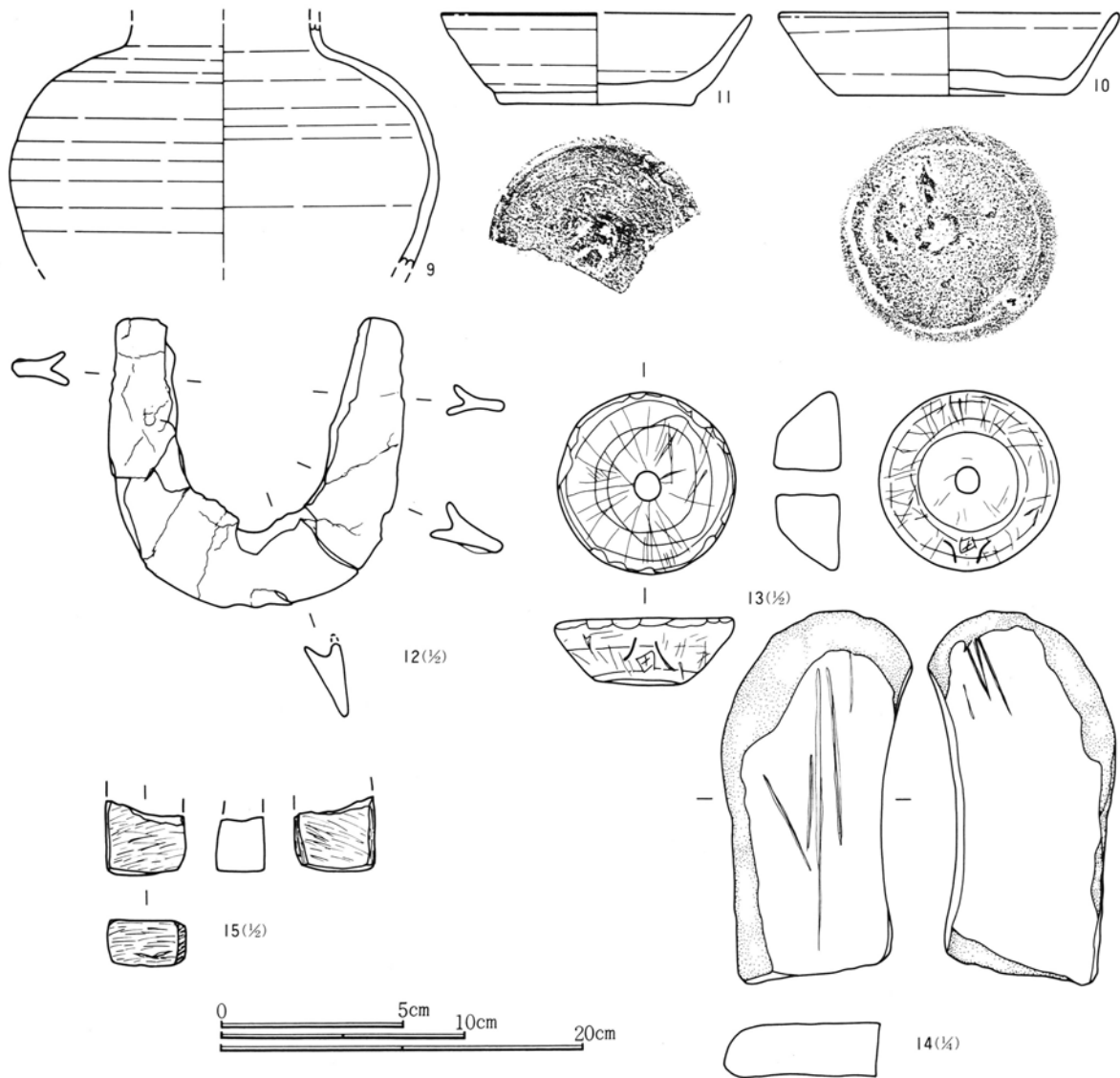
- ①褐色土層 多くのローム粒と少量の炭化物を含む。
- ②暗褐色土層 少量のローム小ブロックと焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 少量のローム粒を含む。

- ④暗褐色土層 少量のローム粒とローム小ブロックを含む。
- ⑤黄褐色土層 地山のロームを主とする。
- ⑥暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。

第481図 728号住居跡竈実測図



第482図 728号住居跡出土遺物実測図(1)



第483図 728号住居跡出土遺物実測図(2)

728号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
482-1	土師器 甕	床面+11 口~胴破片	口(18.5) 高— 底—	①密、1mm前後の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へら削り、砂粒の移動は少ない。 口縁部上端は細く摘み上げている。
482-2	土師器 壺	床面+11 口~胴破片	口(22.8) 高— 底—	①やや粗、1~3mmの赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へら削りと思われるが、器表面がやや粗れており削りの単位不明。内面ナデにて器表面密。 口唇部に黒斑あり。
482-3 109	土師器 小型甕	床面+3 口縁部1/2 胴部3/4	口(15.0) 高— 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へら削り。 内面ナデ。 器表面の多くが斑点状に剝離している。
482-4 109	土師器 坏	床面+2 口縁部3/4 底部1/2	口18.8 高5.3 底12.0	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部へら削り。 内面に放射状と一部格子状と螺旋状の暗文あり。
482-5 109	土師器 坏	床面+23 口縁部1/2 底部1/2	口(16.8) 高5.6 底—	①密、1mm以下の赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部外面へら削り。 口縁端部がやや内傾している。 暗文の痕跡が多く残る。
482-6 109	土師器 坏	床面+22 口縁部1/2 底部1/2	口(15.2) 高— 底—	①密、1~2mmの赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部外面へら削りと思われるが、器表面が粗れており、削りの単位不明。

第4章 奈良時代の遺構と遺物

728号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
482-7 109	土師器 坏	床面+8 ほぼ完形	口 7.3 高 4.0 底 -	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部外面へラ削り。 体部内面に多くの放射状暗文あり。 全体にていねいなつくりである。
482-8 109	土師器 坏	覆土 1/2残存	口(13.4) 高 - 底 -	①密、少量の角閃石を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。 器表面やや粗れており、削りの単位は明瞭でない。 黒斑は認められない。
483-9	須恵器 壺	竈掘り方 胴上部1/2	口 - 高 - 底 -	①密、2~3mmの長石粒を含む。 ②還元焰、硬質 ③暗青灰色	内外面ナデにより器表面密。 叩きによる整形痕は認められない。
483-10 109	須恵器 坏	床面+20 口縁部1/2 底部完形	口(14.0) 高 3.4 底 9.0	①密、1mm以下の小さな長石粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰色	底面へラ削り、切り離した後ナデ等によりわずかに再調整。
483-11 109	須恵器 坏	床面直上 口縁部1/2 底面1/2	口(12.9) 高 3.7 底(4.0)	①粗、1~2mmの長石粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③表面灰色、断面灰赤色	底面へラ削り後回転へラ調整。 底部が厚く口縁部との境に段を持つ。
483-12 114	鉄製品 鋤	床面+25	長 8.1 幅 8.1 厚 0.5 重 50.3		鋤の完形品である。錆化が著しく残りが悪いが、先端部は鋭利に作られている。
483-13 119	石製品 紡錘車	床面+7	径 5.0/2.6 孔径 0.7 蛇紋岩。 厚 1.7 重 62.1		広面に同心円状の細い線刻。側面に「八田」の刻書、一周している2本の線刻と多くの細い放射状線刻あり。
483-14 121	石製品 砥石	床面+3 完形	長 (19.6) 幅 9.4 厚 2.9 重 850.0		砂岩。砥石の完形品と思われる。 3側面が砥石として使用されている。
483-15	石製品 不明	床面+3	長 2.0 幅 2.3 厚 1.4 重 8.2		表面全体が砥石状のものにより削られており、ほぼ平らな面を呈している。用途及び名称不明。

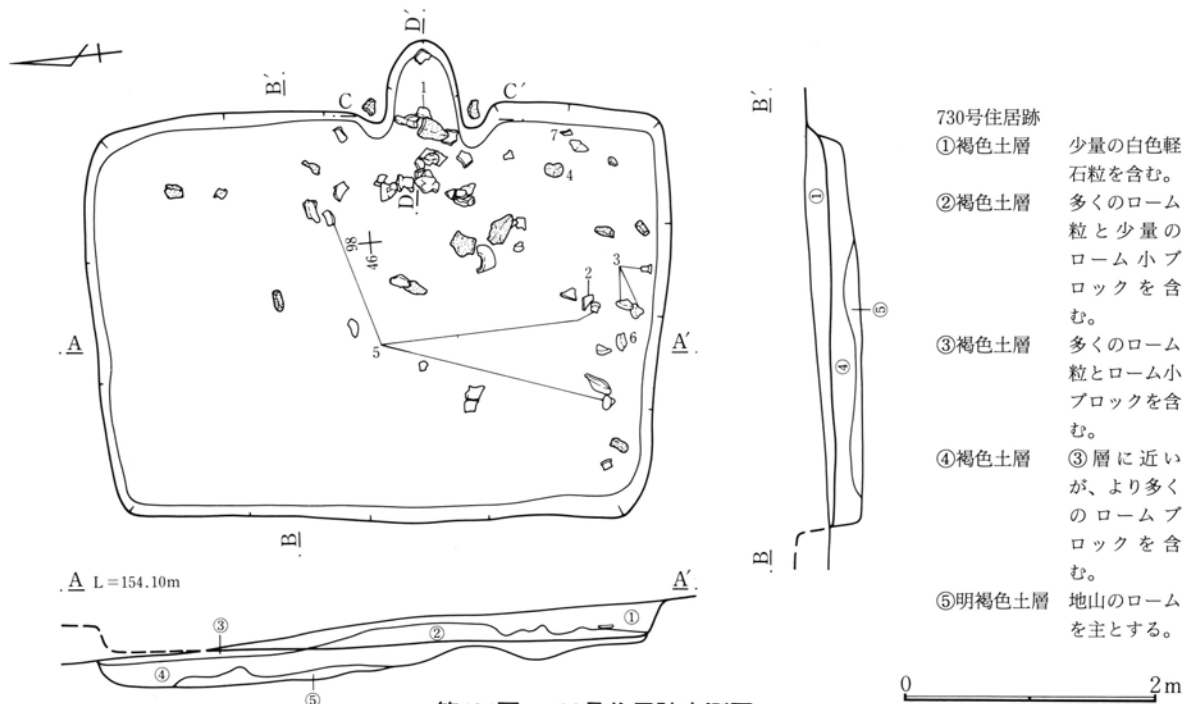
730号住居跡 (第484~488図、図版69・110)

位置 本住居跡は第11次調査区にあり、46・47-98・99グリッドに位置する。

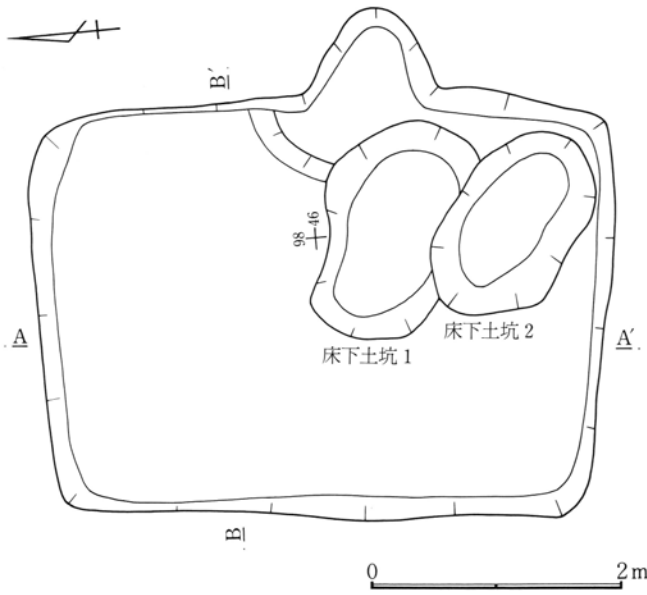
概要 北西部分に向かって低くなる傾斜面に位置する。そのため低い北壁面部分の残りが悪い。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。床下土坑が2本掘られている。

規模 東西3.10m、南北4.58mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で45cmである。床下土坑1は床面からの深さ18cm、床下土坑2は床面からの深さ20cmである。

遺物 破片が大量に出土している。







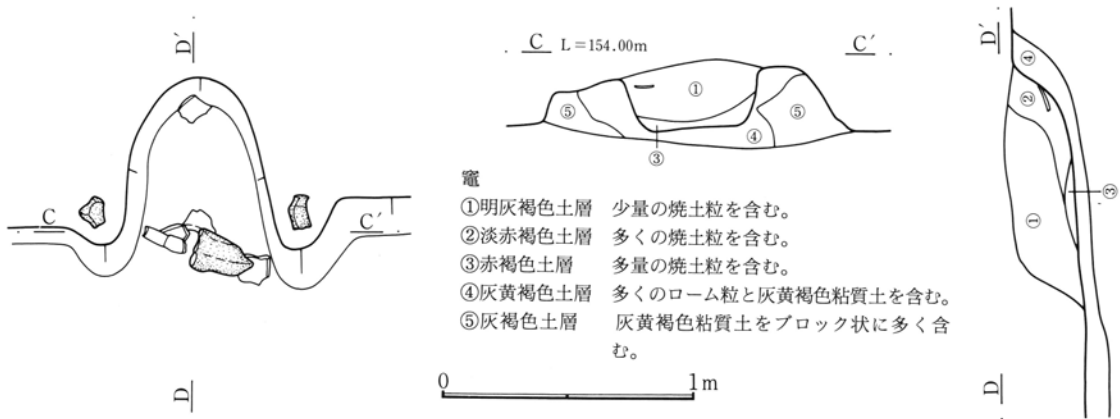
第485図 730号住居跡床下実測図

(竈)

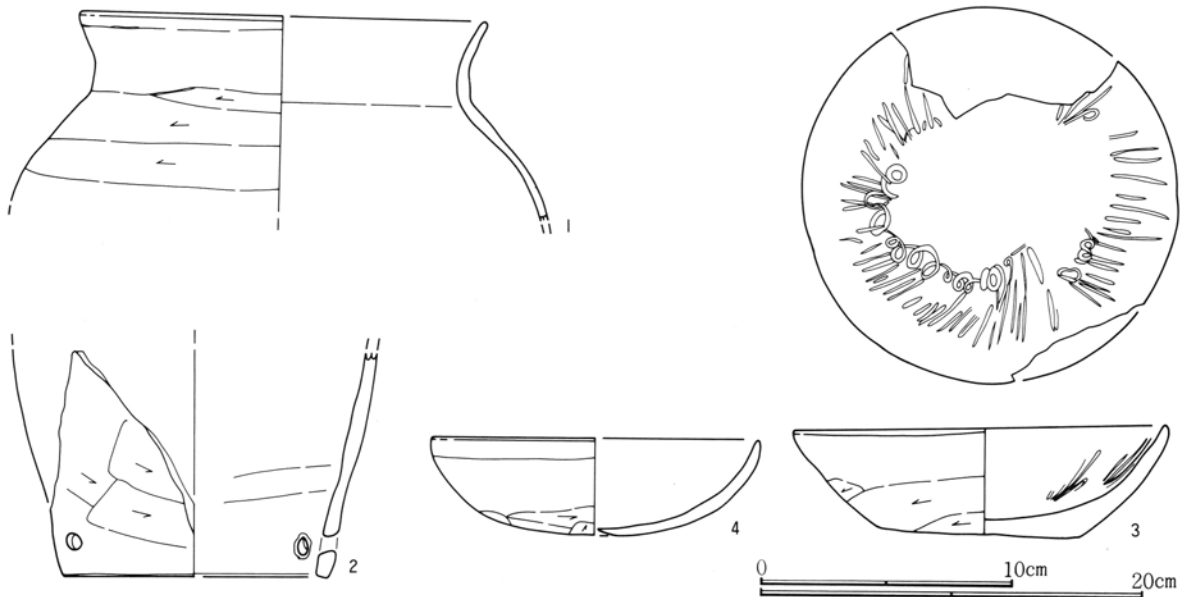
位置 東壁面に造られている。住居が小さいためか燃焼部の多くと煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

構造 焚口部分の覆土上面から割れた天井石の約半分が出土している。その天井石が載るとされる左右の袖石はなく、燃焼部分の左右に細長い石があたかも袖石のように埋められている。2個の石は75cmと離れているために袖石ではないと思われる。土で造られた袖部分は灰褐色粘質土が多く用いられている。燃焼部付近の覆土中から多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向88cm、燃焼部幅48cmである。

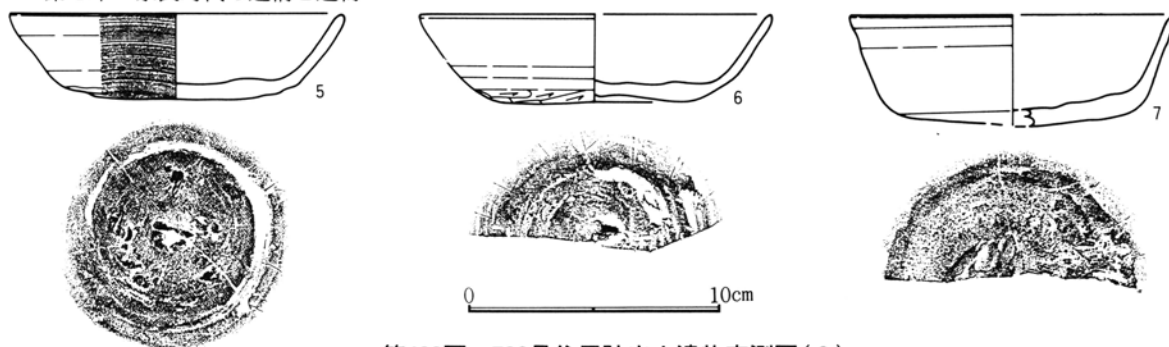


第486図 730号住居跡竈実測図



第487図 730号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 奈良時代の遺構と遺物



第488図 730号住居跡出土遺物実測図(2)

730号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
487-1	土師器 甕	竈内 口~頸破片	口(21.2) 高— 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へら削り、削りの単位不明瞭。 口縁部横ナデ。
487-2	土師器 甕	床面直上 胴下部小片	口— 高— 底(14.0)	①やや粗、1mm前後の砂粒を多く含む。②酸化焰、軟質 ③橙色	甕の胴下部の小片と思われる。 小穴が1ヶ所穿孔されている。
487-3 110	土師器 坏	床面+5 口縁部 $\frac{3}{4}$ 底部完形	口14.4 高4.2 底7.7	①密、1mm前後の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部外面へら削り。 内面に放射状と螺旋状の暗文あり。 少しゆがんでおり、やや雑なつくりである。
487-4 110	土師器 坏	床面+5 口縁部 $\frac{1}{2}$ 底部 $\frac{3}{4}$	口(12.8) 高3.8 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。体部ナデ。 底部中央に径3mmの穴が内側から穿孔されていた。
488-5 110	土師器 坏	床面直上 口縁部 $\frac{1}{2}$ 底部完形	口13.0 高3.3 底9.0	①密、1mm前後の砂粒をほとんど含まず。②還元焰、硬質 ③灰色	底面へら切り。切り離した後へらにてわずかに再調整。 口縁部外面にカキ目状の文様あり。
488-6 110	須恵器 坏	床面+5 口~底 $\frac{1}{4}$	口(13.8) 高3.5 底(7.2)	①密、砂粒ほとんど観察できない ②還元焰、硬質 ③灰色	底面へら切り後、底面周辺と体部下端手持ちへら削り。
488-7 110	須恵器 坏	床面+16 $\frac{1}{2}$ 残存	口(12.9) 高— 底9.2	①密、1mm以下の石英粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③外面灰色、断面灰白色	底面へら切り、切り離した後へらによりわずかに再調整。

731号住居跡 (第489~491図、図版69・110・119)

位置 本住居跡は第11次調査区にあり、48・49-98グリッドに位置する。

概要 南側で736号住居と重複し、本住居が736号住居を床下まで深く掘り込んでいる。床下土坑は掘られているが、貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模 東西2.90m、南北2.84mである。壁高は残りの良い竈左袖付近で27cmである。床下土坑は径100cm深さ26cmである。

遺物 紡錘車の出土が目される。

(竈)

位置 東壁面に造られている。住居が小さいためか燃烧部の多くと煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

構造 右袖部分に袖石と思われる石が、やや竈内に傾いたような状態で出土している。左袖石は出土していない。袖部分は多くのローム粒とロームブロックを含む土を用いて造られている。燃烧部右側壁面が焼けており多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向58cm、燃烧部幅38cmである。

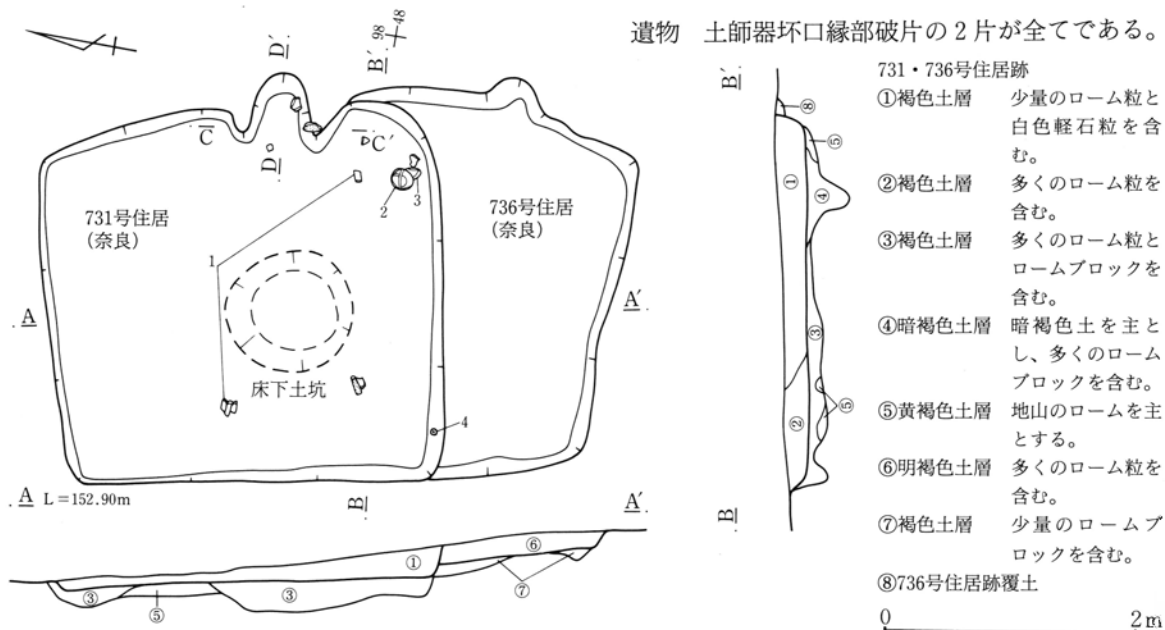
736号住居跡 (第489・490図、図版69)

位置 本住居跡は第11次調査区にあり、48・49-98グリッドに位置する。

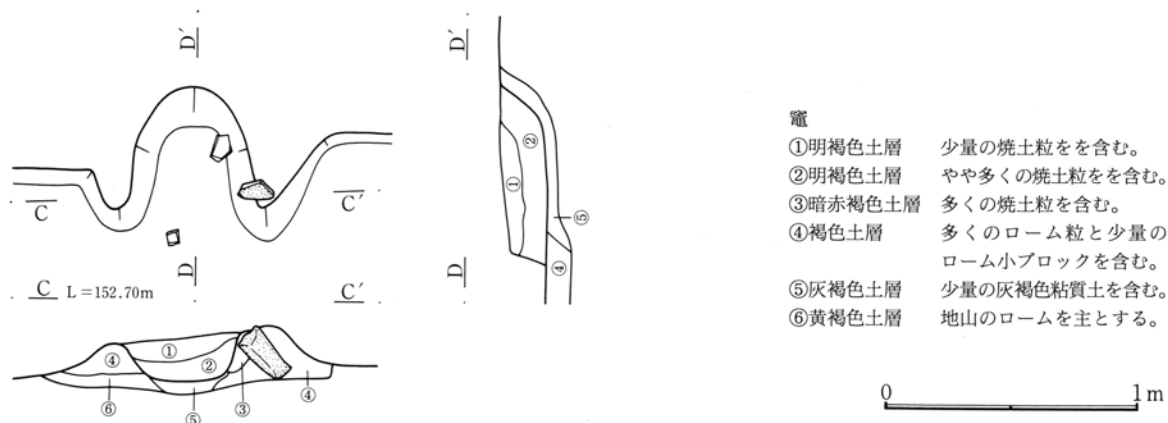
概要 北側で奈良時代の731号住居と重複しており、731号住居により本住居の北側の大部分を床下まで深く

掘り込まれている。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。東壁面に竈と思われる痕跡が確認された。その部分は僅かに壁面が削られ少量の焼土粒が出土している。出土遺物が少なく時期の確定ができないために、時期不明の住居として扱った。図示できる遺物はなかったが、破片より8世紀前期の遺構と判断した。

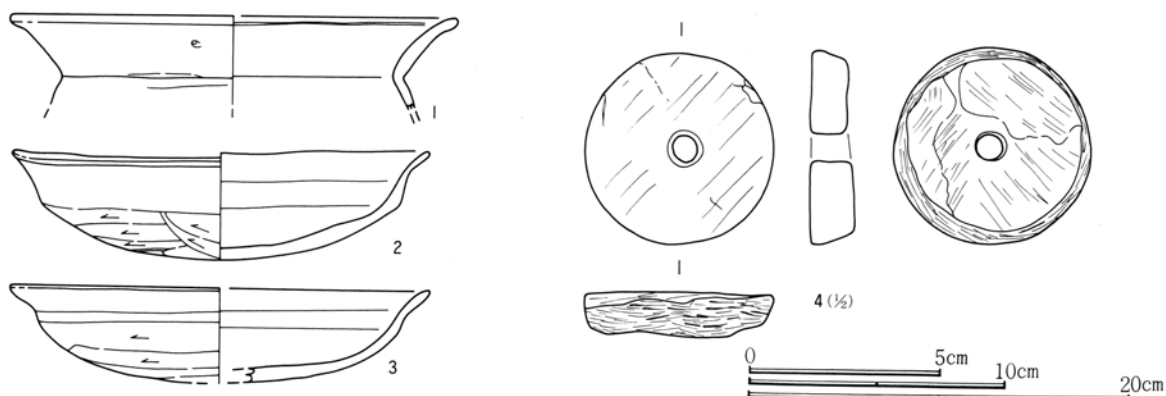
規模 東西2.66m、南北方向不明である。壁高は残りの良い南東コーナー部分で52cmである。



第489図 731・736号住居跡実測図



第490図 731号住居跡竈実測図



第491図 731号住居跡出土遺物実測図

731号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
491-1	土師器 壺	床面-4 口縁のみ $\frac{1}{4}$	口(23.6) 高— 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
491-2 110	土師器 坏	床面直上 完形	口 16.6 高 4.2 底—	①密、角閃石を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、削りの単位は比較的明瞭である。 内外の器表面斑点状に剝離。少しゆがんでいる。
491-3 110	土師器 坏	床面直上 $\frac{3}{4}$ 残存	口(16.6) 高— 底—	①密、少量の角閃石を含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。小さな砂粒が移動し、器表面がやや粗い。口縁部が大きく外傾する。
491-4 119	石製品 紡錘車	床面+11	径 5.0/4.6 孔径 0.7 厚 1.1 重 53.9		滑石片岩。広面は自然面。側面荒砥削り。 狭面わずかに荒砥削り。大部分剝離された自然面。

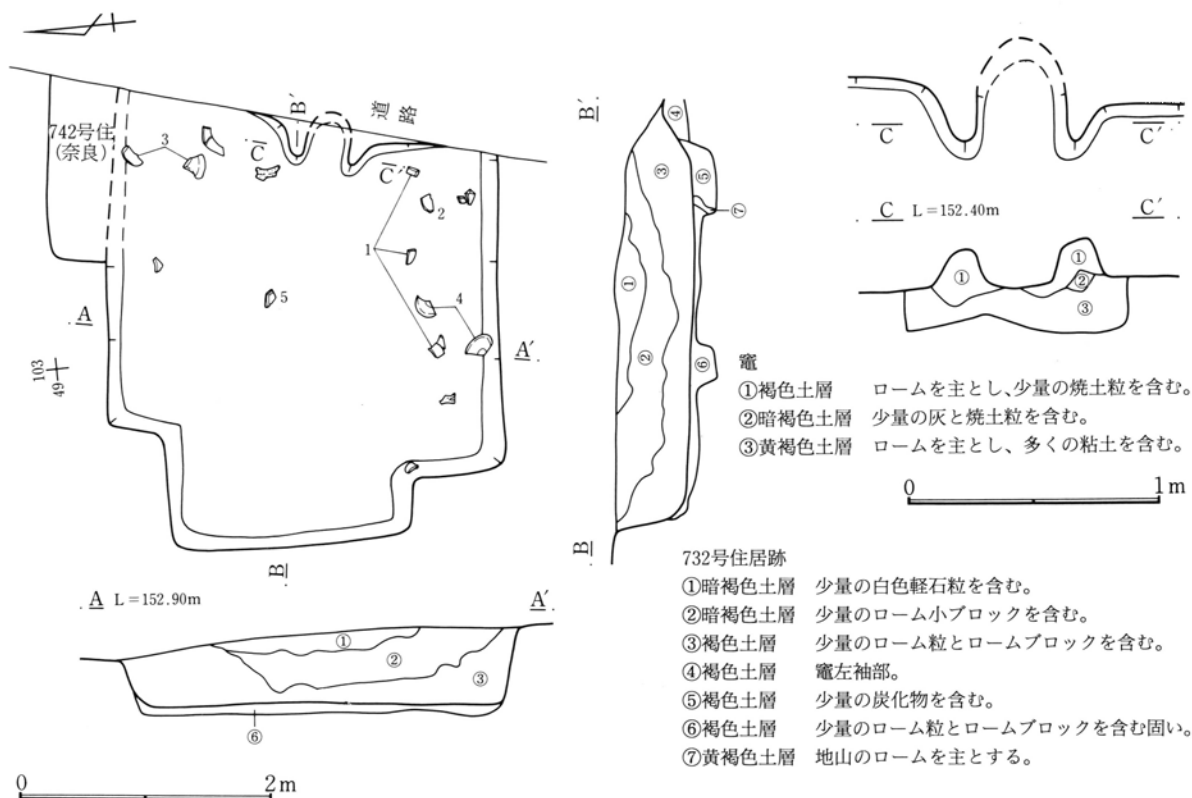
732号住居跡 (第492~493図、図版70・110)

位置 本住居跡は第11次調査区にあり、49-103・104グリッドに位置する。

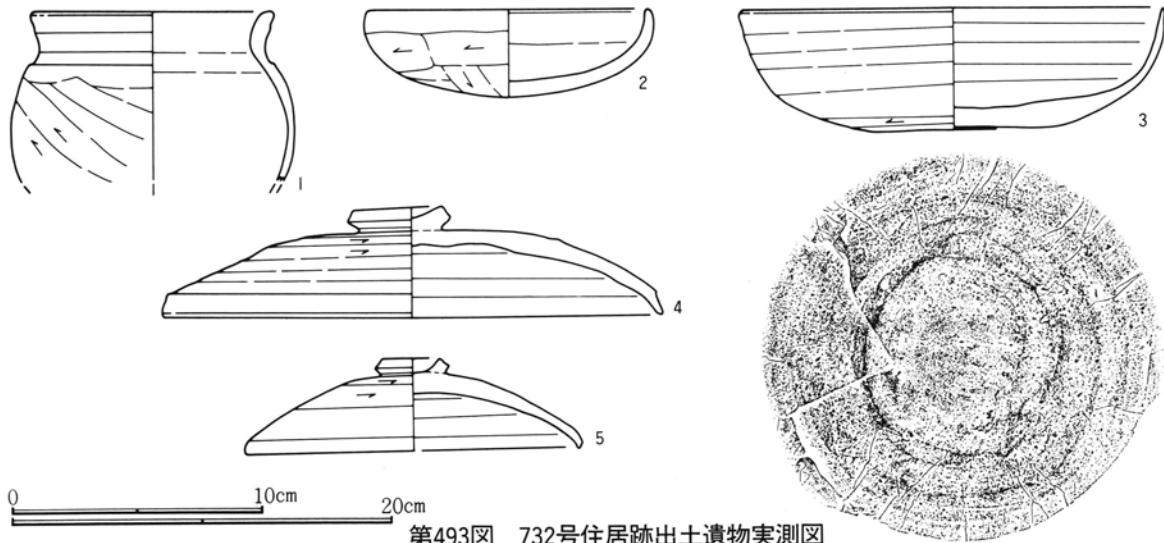
概要 調査区の最も東側に位置し、本住居より東側には第12次調査区の743号住居1軒が造られているだけである。住居の東側は道路により削られて残っていない。東側で742号住居と重複しており、本住居が742号住居の床面付近から上の部分を掘り込んでいる。西壁面に張り出し部分が存在するため当初、他の住居と重複していると理解した。しかし土層観察の結果、住居と同時期に埋没している事が明らかになった。矢田遺跡内では他に類例がないため他の遺構と重複している可能性も残るが、当住居に伴う張り出し部分と理解した。道路西側に辛うじて竈の袖部分が残っている。竈部分から少量の焼土粒が出土している。本住居に伴う貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模 東西不明、南北3.12mである。壁高は残りの良い南西コーナー部分で66cmである。

遺物 出土量は少ない。



第492図 732号住居跡・竈実測図



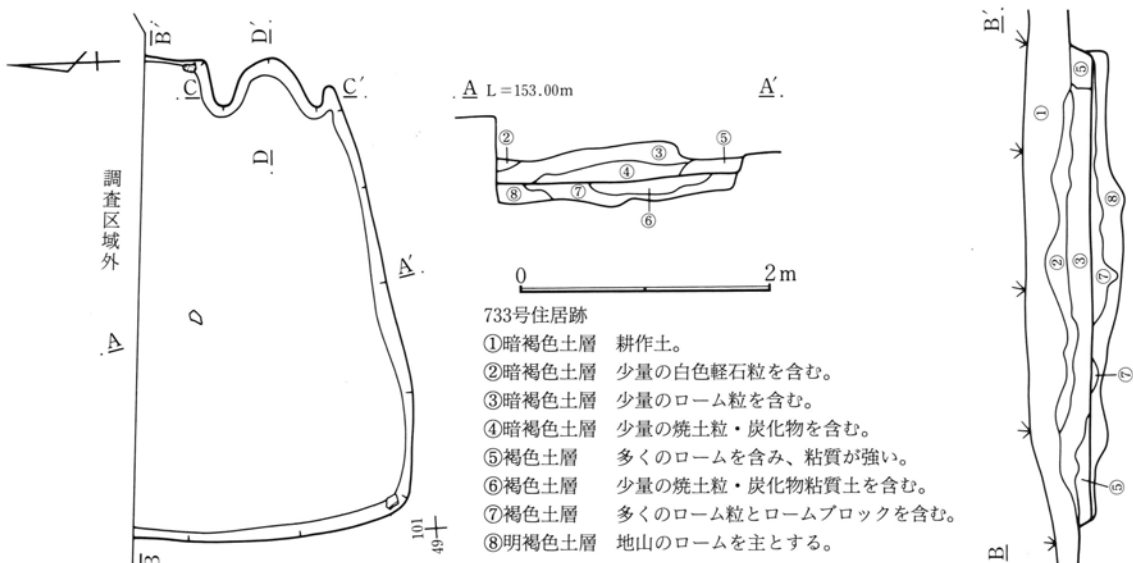
第493図 732号住居跡出土遺物実測図

732号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
493-1 110	土師器 甕	床面直上 口縁部完形 胴部1/2	口 12.4 高 — 底 —	①粗、1~2mmの砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③明褐色	胴部外面へら削り。多くの砂粒が移動し、器表面が粗い。 胴部内側器表面が剥離している。
493-2 110	土師器 坏	床面-4 1/2残存	口 11.0 高 3.5 底 —	①密、少量の角閃石を含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。小さな砂粒が移動し器表面がやや粗い。 内側器表面も粗れている。
493-3 110	須恵器 坏	床面+13 口縁部1/2 底部完形	口 16.3 高 4.8 底 —	①密、1mm以下の石英粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰色	底面中央部へら切り、切り離した後右回転へら削り。 底部周辺部ナデ。
493-4 110	須恵器 蓋	床面直上 完形	口 19.8 高 — 底 —	①密、1mm前後の長石粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰色	天井部右回転へら削り。 摘みは円板を貼り付け端部を作り出している。
493-5 110	須恵器 蓋	床面直上 1/2残存	口(13.4) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰色	天井部右回転へら削り。 摘みは輪状の粘土を貼り付け端部をていねいに作り出している。

733号住居跡 (第494・495図、図版70)

位置 本住居跡は第11次調査区にあり、50-102グリッドに位置する。



第494図 733号住居跡実測図

第4章 奈良時代の遺構と遺物

概要 調査区の最も東側に位置する。小さい住居でありさらに住居北側は調査区域外となっている。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模 東西3.82m、南北不明である。壁高は残りの良い南壁面部分で23cmである。

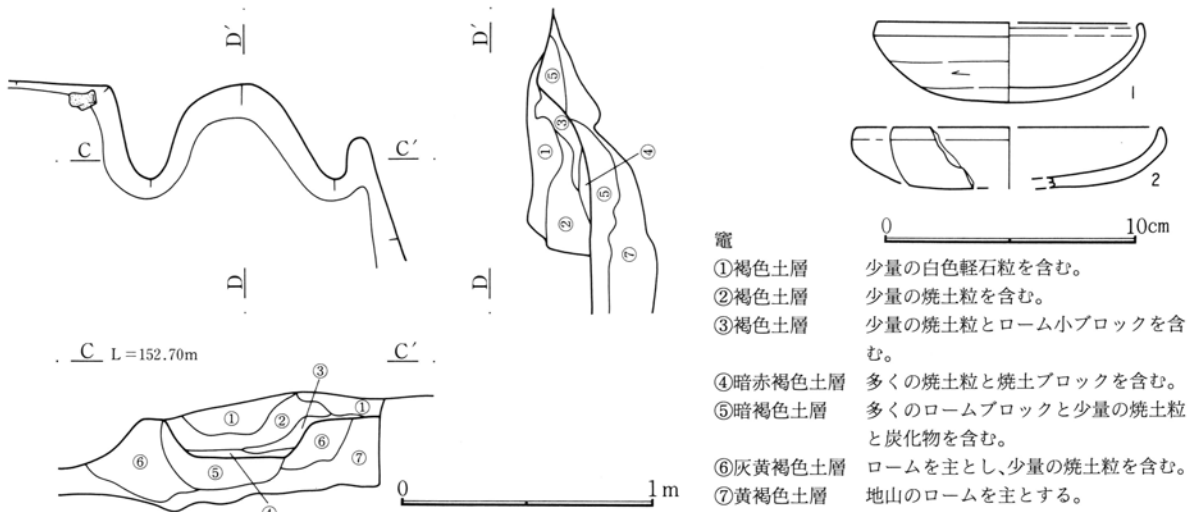
遺物 破片の出土量が多いが、図示できたのは土師器の坏2点である。

(竈)

位置 東壁面残りの南寄りを掘り込んで造られている。袖部や燃焼部の多くは床面上に造られている。

構造 残りの悪い竈である。袖部分はやや粘性の強いロームを用いて造られている。袖石等は使われていない。竈内から多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向46cm、燃焼部幅約46cmである。



第495図 733号住居跡竈・出土遺物実測図

733号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
495-1	土師器 坏	覆土 片残存	口(10.6) 高 3.1 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り、削りの単位不明瞭。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
495-2	土師器 坏	覆土 小破片	口(12.6) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多 く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削りと思われるが、表面が剥離しており不明。 内面ナデにて器表面密。

737号住居跡 (第496~498図、図版70・110・119)

位置 本住居跡は第11次調査区にあり、47-97グリッドに位置する。

概要 北西部分の低くなるなだらかな傾斜面に位置し、低い北西部分の残りが悪い。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。床下に土坑が掘られている。

規模 東西2.20m、南北2.38mである。壁高は残りの良い南東コーナー付近で34cmである。床下土坑の床面からの深さは図上に示した。

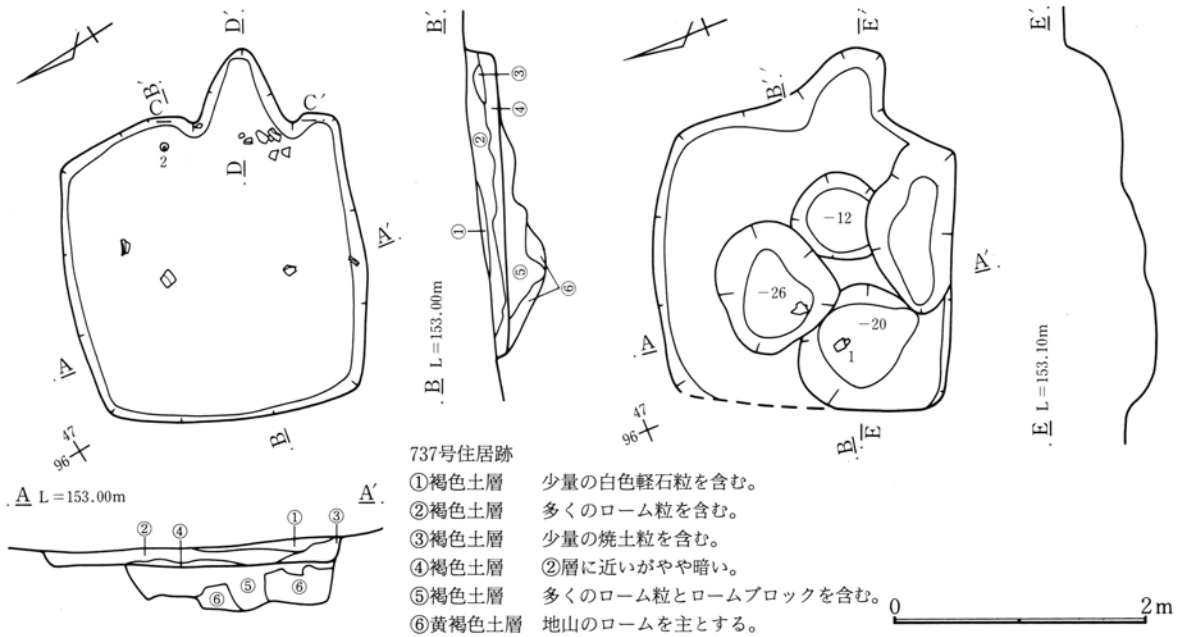
遺物 紡錘車の出土が目される。

(竈)

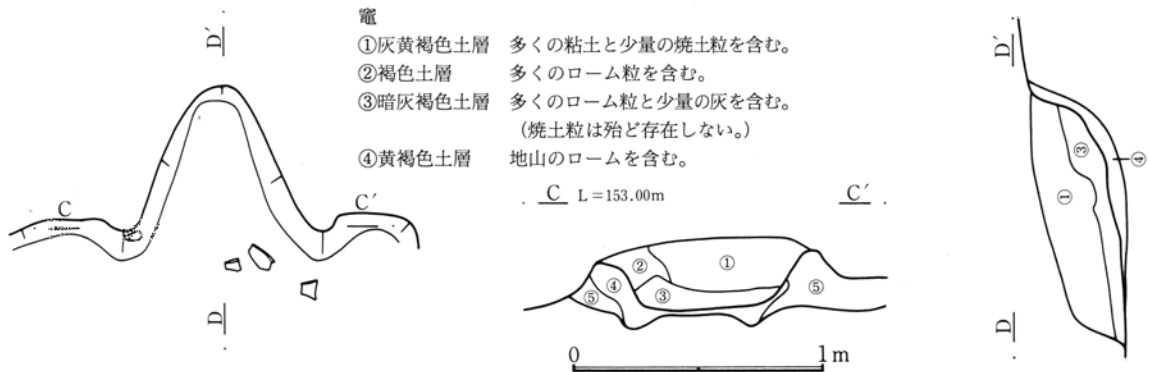
位置 東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。住居が小さいため袖部分以外は壁面を掘り込んで造られている。

構造 残りが悪く袖部分はほとんど残っていない。竈内から焼土粒の出土はほとんど認められない。

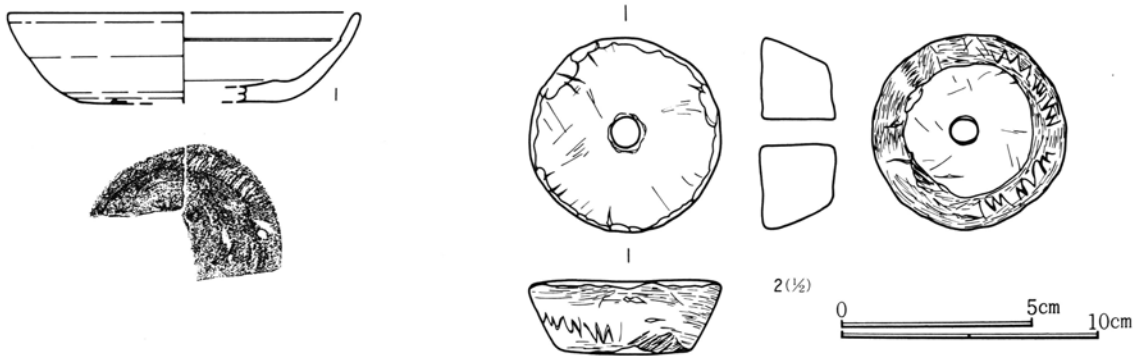
規模 煙道方向68cm、燃焼部幅は残りが悪く不明である。



第496図 737号住居跡・床下実測図



第497図 737号住居跡竈実測図



第498図 737号住居跡出土遺物実測図

737号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
498-1 110	須恵器 坏	床面-15 2/3残存	口(14.0) 高— 底(8.0)	①密、1mm以上の砂粒はほとんど 含まず。 ②還元焰、硬質 ③灰白色	底面右回転ヘラ削り。体部下端も右回転ヘラ削り。
498-2 119	石製品 紡織車	床面+3	径 5.1/3.5 厚 1.9	孔径 0.8 重 56.8	滑石片岩。広面、狭面とも磨かれて光沢を持つ。側面 荒砥削り後磨かれている。その後鏽菌文状の文様。

第4章 奈良時代の遺構と遺物

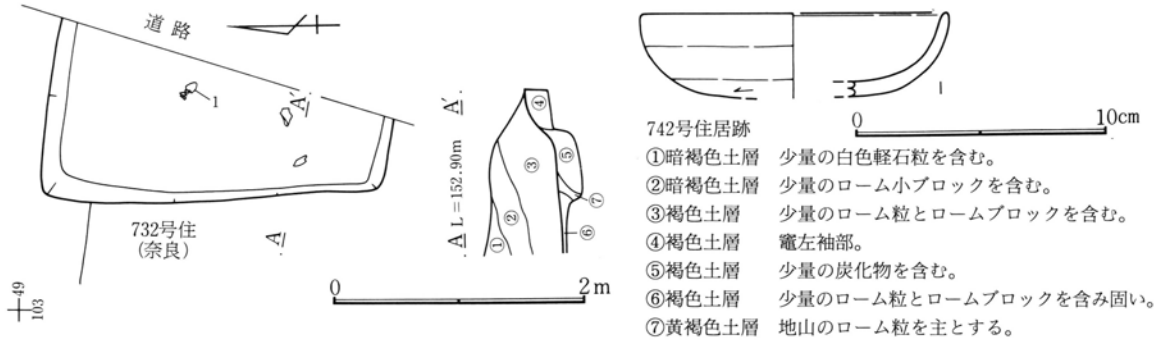
742号住居跡 (第499図、図版70)

位置 本住居跡は第11次調査区にあり、49-104グリッドに位置する。

概要 住居の東側は道路により削られて残っていない。西側で奈良時代の732号住居と重複しており、732号住居により本住居の床面付近から上の部分は掘り込まれている。調査できた部分が少なく不明な部分が多いが、本住居に伴う柱穴は掘られていない。

規模 東西不明、南北2.78mである。壁高は残りの良い北壁面部分で45cmである。

遺物 出土総数はわずかに3片である。



第499図 742号住居跡・出土遺物実測図

742号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
499-1	土師器 坏	床面-17 破片	口(12.0) 高— 底—	①密、黒色の雲母粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③明褐色	底面ヘラ削り。体部ナデ。 口縁部横ナデ。 内側器表面の多くは剝離して粗れている。

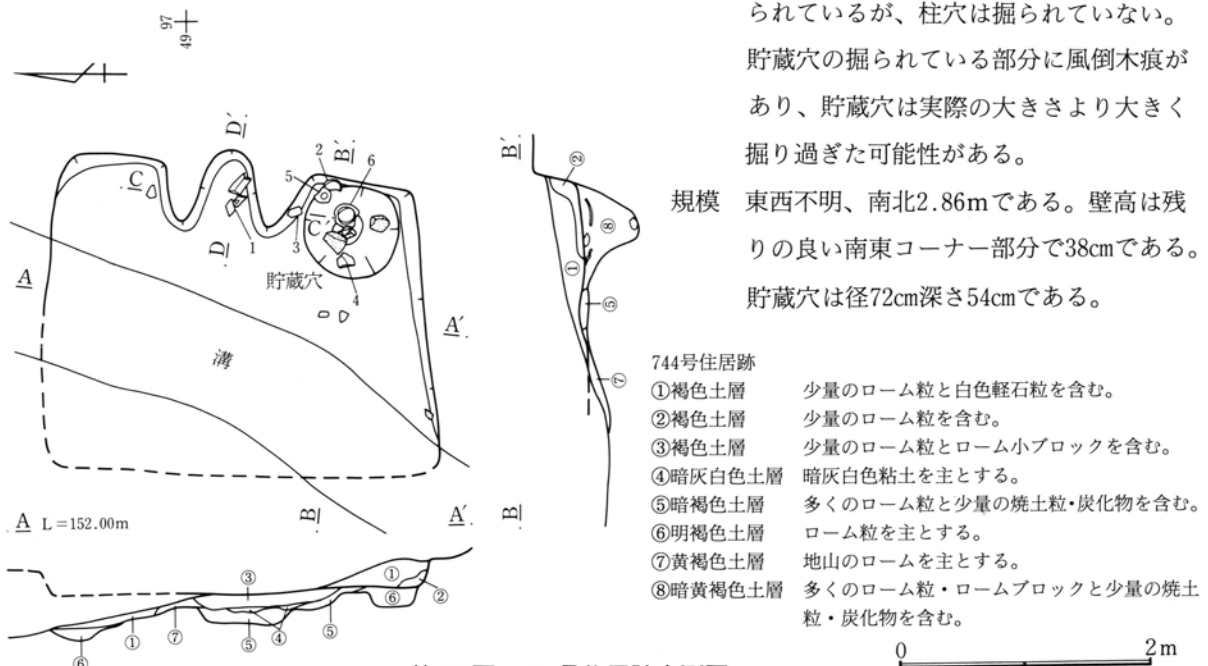
744号住居跡 (第500~502図、図版70・71・110)

位置 本住居跡は第11次調査区にあり、49・50-97グリッドに位置する。

概要 北西方向の低くなるなだらかな傾斜面に位置し、低い北西部分の床面と壁面は削られて残っていない。

住居中央に溝が掘られており、その部分は床下部分まで削られている。竈の右側に大きな貯蔵穴が掘られているが、柱穴は掘られていない。貯蔵穴の掘られている部分に風倒木痕があり、貯蔵穴は実際の大きさより大きく掘り過ぎた可能性がある。

規模 東西不明、南北2.86mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で38cmである。貯蔵穴は径72cm深さ54cmである。



第500図 744号住居跡実測図



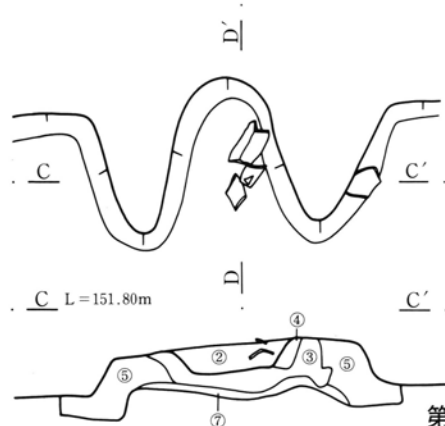
遺物 土師器の甕や坏、須恵器の坏や蓋が出土している。

(竈)

位置 東壁面を掘り込んで造られている。袖部分や燃烧部の多くは床面上に造られている。

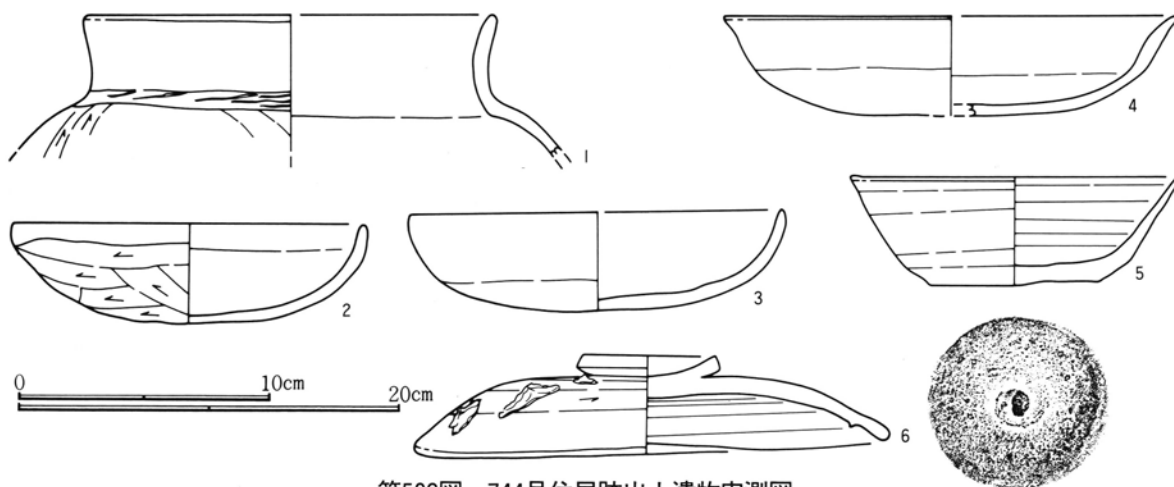
構造 袖部分はロームと灰黄褐色の粘質土の土で造られている。全体に残りが悪く竈内から焼土粒の出土は少ない。

規模 煙道方向68cm、燃烧部38cmである。



第501図 744号住居跡竈実測図

- 竈
- ①褐色土層 少量のローム粒と焼土粒を含む。
  - ②褐色土層 少量のローム粒と焼土ブロックを含む。
  - ③褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒・粘質土を含む。
  - ④灰黄褐色土層 灰黄褐色の粘質土を主とする。
  - ⑤褐色土層 灰黄褐色の粘質土をブロック状に多く含む。
  - ⑥暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
  - ⑦黄褐色土層 地山のロームを主とする。



第502図 744号住居跡出土遺物実測図

744号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
502-1 110	土師器 壺	竈内 3/4残存	口(21.6) 高・底—	①密、1~2mmの片岩粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	肩部へら削り。口縁部横ナデ。内側器表面の一部が斑点状に剥離している。
502-2 110	土師器 坏	床面直上 3/4残存	口 13.8 高 3.9	①密、少量の角閃石を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削りであるが、器表面の多くが剥離しており、削りの単位不明瞭。底面吸炭により黒色。
502-3	土師器 坏	床面直上 1/2残存	口(14.8) 高 3.9 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部外面へら削りと思われるが、表面剥離しており不明。内面の多くの表面が剥離。全体に雑な感じの坏である。
502-4	土師器 坏	床面— 5/4残存	口 17.8 高 3.9	①密、少量の雲母粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③明黄褐色	内外器表面の多くが剥離して、ひどく粗れている。
502-5 110	須恵器 坏	床面— 6/3残存 他完形	口 13.0 高 4.2 底 6.7	①やや粗、1mm前後の長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面へら切り、切り離した後ナデ等によりわずかに再調整。多くの長石粒が目立つ。
502-6 110	須恵器 蓋	床面— 9/口縁部3/4 他完形	口 19.0 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質、焼締 ③表面灰色、断面灰白色	天井部へら削り。摘みは円板状の粘土を貼り付け端部を削り出している。カエリは小さく鋭利である。外面に窯体の一部が付着。

745号住居跡 (第503~505図、図版71)

位置 本住居跡は第11次調査区にあり、50-89グリッドに位置する。

概要 北東方向の低くなるなだらかな傾斜面に位置し、低い北東部分の床面と壁面は削られて残りが悪い。

75号溝により南西コーナー部分の壁面を一部削られている。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模 東西3.70m、南北3.40mである。壁高は残りの良い南壁面部分で43cmである。

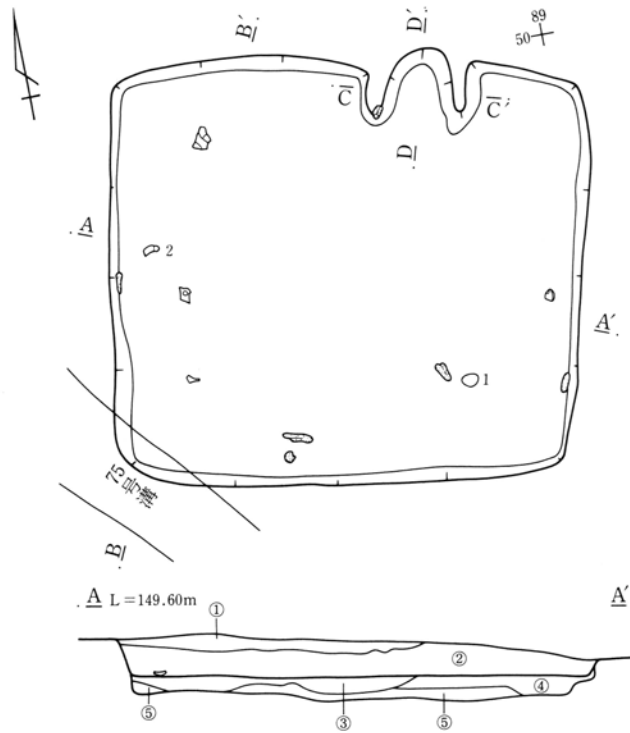
遺物 土師器甕の破片等出土しているが、図示できたのは坏3点である。

(竈)

位置 北壁面を掘り込んで造られている。袖部分や燃焼部の多くは床面上に造られている。

構造 袖部分は灰黄褐色粘質土で固く造られている。 燃焼部壁上面や覆土中から多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向63cm、燃焼部幅45cmである。

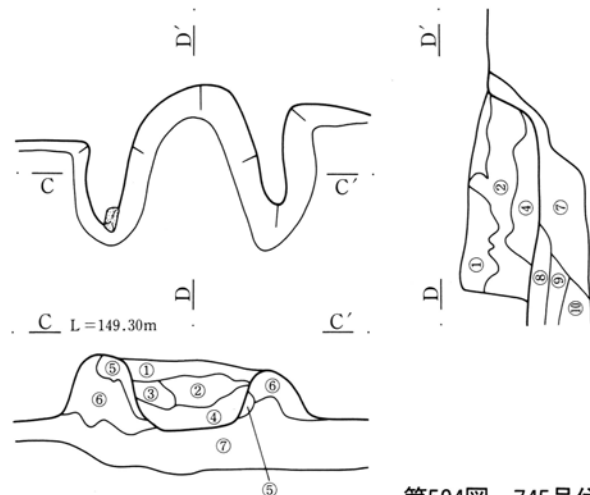


745号住居跡

- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量のローム粒を含む。色調が暗い。
- ③褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ④暗褐色土層 多くのローム小ブロックと少量の炭化物を含む。
- ⑤暗黄褐色土層 ロームを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ⑥75号溝

0 2m

第503図 745号住居跡実測図



竈

- ①褐色土層 多くのローム粒と少量の白色軽石粒を含む。
- ②赤色土層 焼土粒を主とする。
- ③暗褐色土層 多くの炭化物と少量の焼土粒を含む。
- ④暗赤褐色土層 多くの焼土粒とローム粒を含む。
- ⑤暗赤褐色土層 焼土粒を大量に含む。
- ⑥灰黄褐色土層 地山の粘質土を主とし固い。(竈袖部)
- ⑦暗褐色土層 多くのローム粒と少量のローム小ブロックを含む。
- ⑧暗褐色土層 少量のローム粒と焼土粒を含む。
- ⑨褐色土層 ロームを主とする。
- ⑩褐色土層 ローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。

0 1m

第504図 745号住居跡竈実測図



第505図 745号住居跡出土遺物実測図

745号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
505-1	土師器 坏	床面-1 1/2残存	口(16.4) 高— 底—	①密、1~2mmの砂粒と赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③赤褐色	底面へラ削り。削りの単位は比較的明瞭である。内面ナデにて器表面密。
505-2	土師器 坏	床面+3 1/2残存	口(10.6) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。体部ナデ。内面ナデにて器表面密。
505-3	須恵器 坏	覆土 1/2残存	口(11.1) 高— 底(6.2)	①密、1mm以下の長石粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面は回転へラ切りの痕跡が残る。口縁部に明瞭なロクロ痕はない。

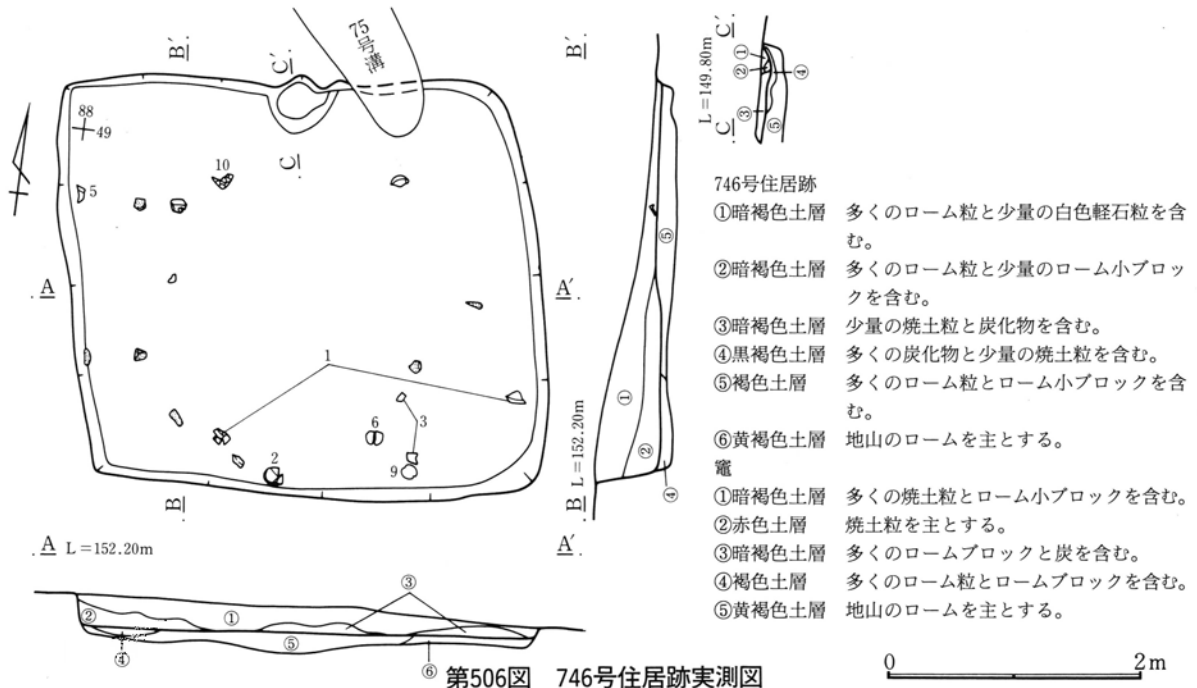
746号住居跡 (第506~508図、図版71・110)

位置 本住居跡は第11次調査区にあり、49-89グリッドに位置する。

概要 北東方向の低くなるなだらかな傾斜面に位置し、低い北側部分の床面と壁面は削られて残りが悪い。竈の右側部分を75号溝により壁面と床面の一部が削られている。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。ロームを掘り込んで造られている残りの良い南壁面の一部が、風倒木痕により掘り込まれている。覆土は黒褐色土である。その部分から本住居とほぼ同じ時期の土師器や須恵器の坏が出土している。当住居に伴う遺物であるのか明確でないが、時期がほぼ同じであることや軟弱で崩壊し易い黒褐色土を一部掘り込んで土器を置いていたことも考えられるため、本住居に伴うものとして扱った。床下には床下土坑が掘られている。床面からの深さは図上で示した。

規模 東西3.51m、南北3.20mである。壁高は残りの良い南西壁面部分で54cmである。

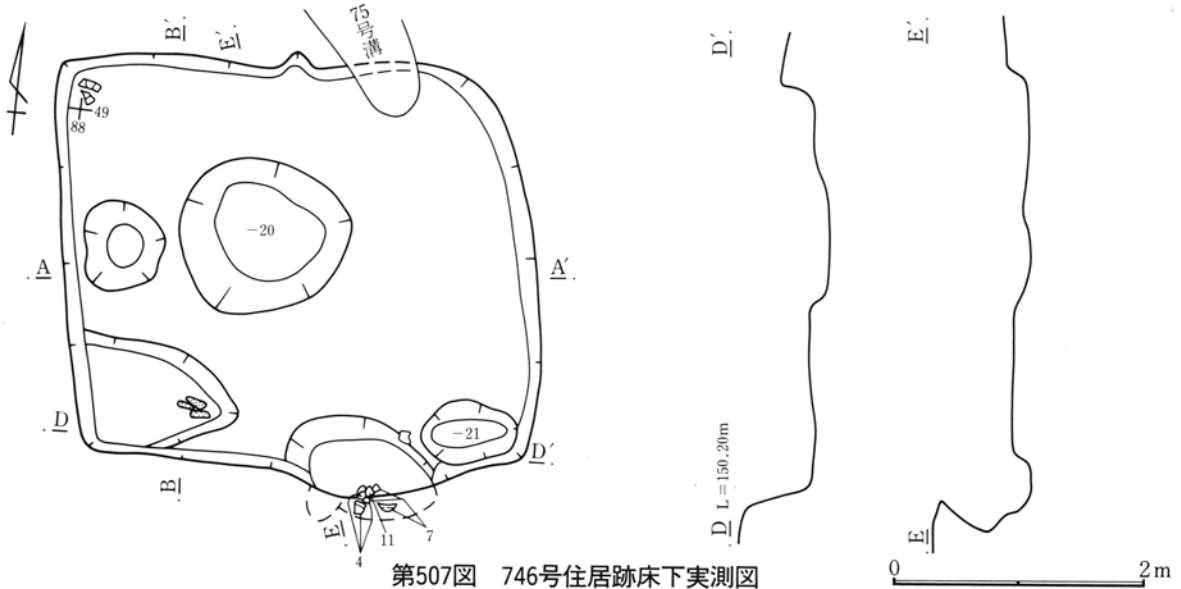
遺物 風倒木痕の床下から土師器や須恵器の坏が出土している。



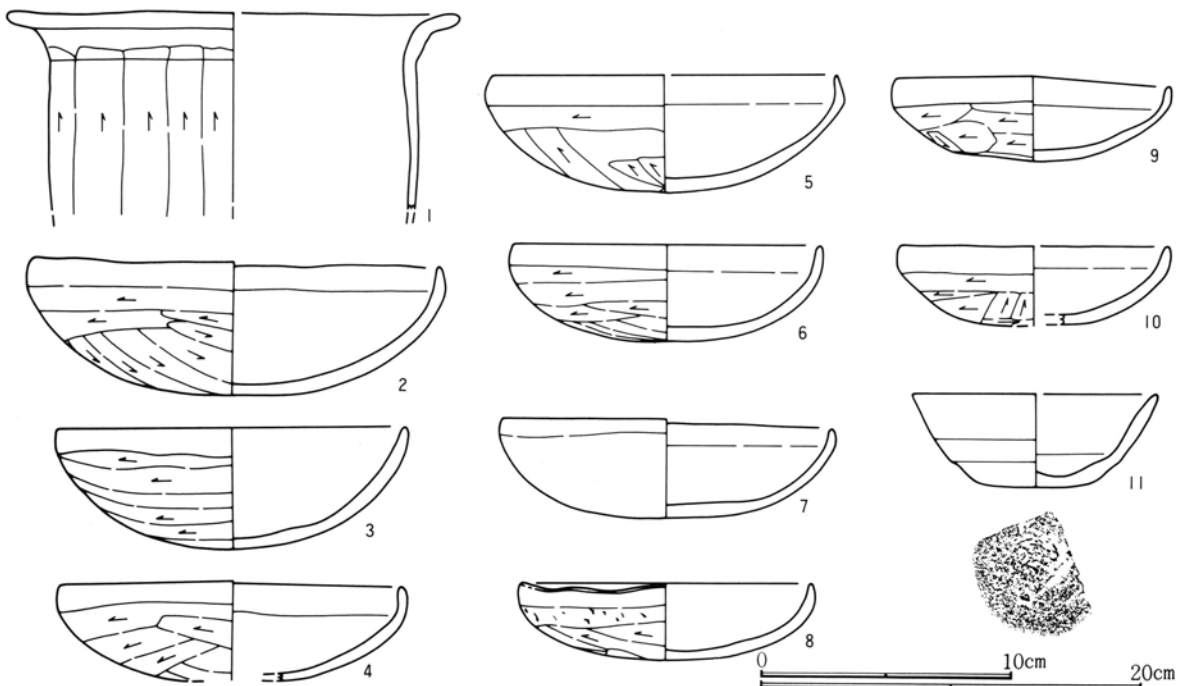
(竈)

位置 北壁面を掘り込んで造られている。残りが悪く明らかでないが袖部分や燃焼部の多くは床面上に造られているようである。

概要 大部分は削られており、燃焼下部が僅かに残っている。その部分から多くの焼土粒が出土している。規模は不明である。



第507図 746号住居跡床下実測図



第508図 746号住居跡出土遺物実測図

746号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
508-1	土師器 甕	床面直上 1/3残存	口(23.5) 高・底—	①粗、2~4mmの砂粒と片岩粒を多く含む。②酸化焰、硬質③橙色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。口縁部中央に輪積痕が残る。内面ナデにて器表面密。
508-2 110	土師器 坏	床面+7 完形	口 16.2 高 5.3 底 —	①密、角閃石をわずかに含む。②酸化焰、硬質③橙色	底面ヘラ削り。胎土が硬く削りの単位は明瞭である。内面ナデにて器表面密。黒斑全く認められず。

746号住居跡出土遺物観察表

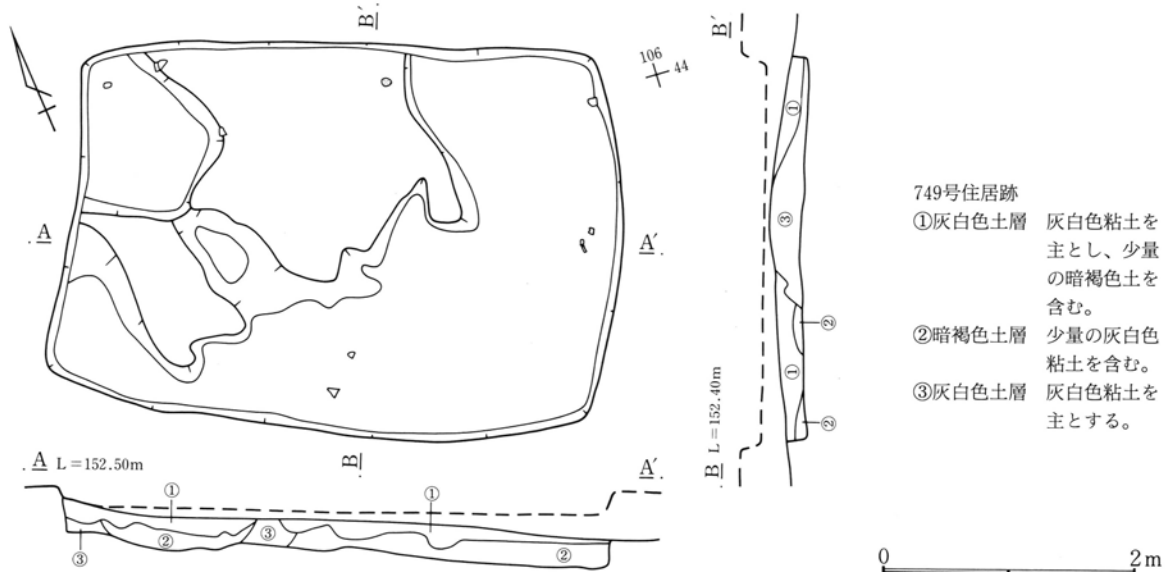
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
508-3 110	土師器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 13.8 高 4.8 底 -	①密、1mm以下の赤色粒を多量に含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面密。器表面全体がやや粗れている。黒斑全く認められず。
508-4 110	土師器 坏	床面+4 口〜底 $\frac{3}{4}$ 残存	口 13.2 高 - 底 -	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。内外面の器表面が斑点状に剥離して粗れている。
508-5	土師器 坏	床面+2 口縁部 $\frac{3}{8}$ 底部 $\frac{1}{8}$ 残存	口(13.7) 高 4.6 底 -	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面の粗れ少ない。内面ナデにて器表面密。黒斑全く認められず。
508-6 110	土師器 坏	床面+8 ほぼ完形	口 12.2 高 3.8 底 -	①密、角閃石を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。器表面全体が粗れている。黒斑は全く認められない。
508-7 110	土師器 坏	床面+4 口〜底 $\frac{3}{4}$ 残存	口(13.0) 高 3.9 底 -	①密、わずかに角閃石を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	器表面全体が剥離しており、整形方法不明。
508-8 110	土師器 坏	覆土 口〜底 $\frac{1}{2}$	口 11.4 高 3.0 底 -	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ、内面ナデにて器表面密。黒斑認められず。
508-9 110	土師器 坏	床面+7 完形	口 11.0 高 3.3 底 -	①密、少量の片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、削りの単位明瞭である。全体にややゆがんでいる。黒斑全く認められず。
508-10	土師器 坏	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口(10.5) 高 - 底 -	①密、1mm以下の砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③黒褐色	底面ヘラ削り。削りの単位比較的明瞭。内面ナデにて器表面密。
508-11	須恵器 坏	床面+4 $\frac{1}{2}$ 残存	口(9.6) 高 3.7	①やや粗、1~2mmの長石粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰色	底面ヘラ削りと思われる痕跡がわずかに残る。

749号住居跡 (第509図、図版71)

位置 本住居跡は第11次調査区にあり、44-106グリッドに位置する。

概要 本遺跡の中で最も東側に位置する住居であり、土地問題の解決が遅れ最後に調査された住居である。西側の低くなる傾斜面に位置し、住居の南東北側は耕地にならないため山林となっている。残りが悪く竈も不明であり住居としての根拠に疑問も残るが、方形の掘り込みと少量の遺物が出土していることにより住居として扱った。床面は削られて残ってなく貯蔵穴や柱穴は掘られていない。床下部分から多くの粘土が出土している。図示できる遺物はなかったが、破片により8世紀前期の遺構と判断した。

規模 東西4.38m、南北3.10mである。壁高は床面がほとんど残っていないため不明である。



第509図 749号住居跡実測図

## 第5章 平安時代の遺構と遺物

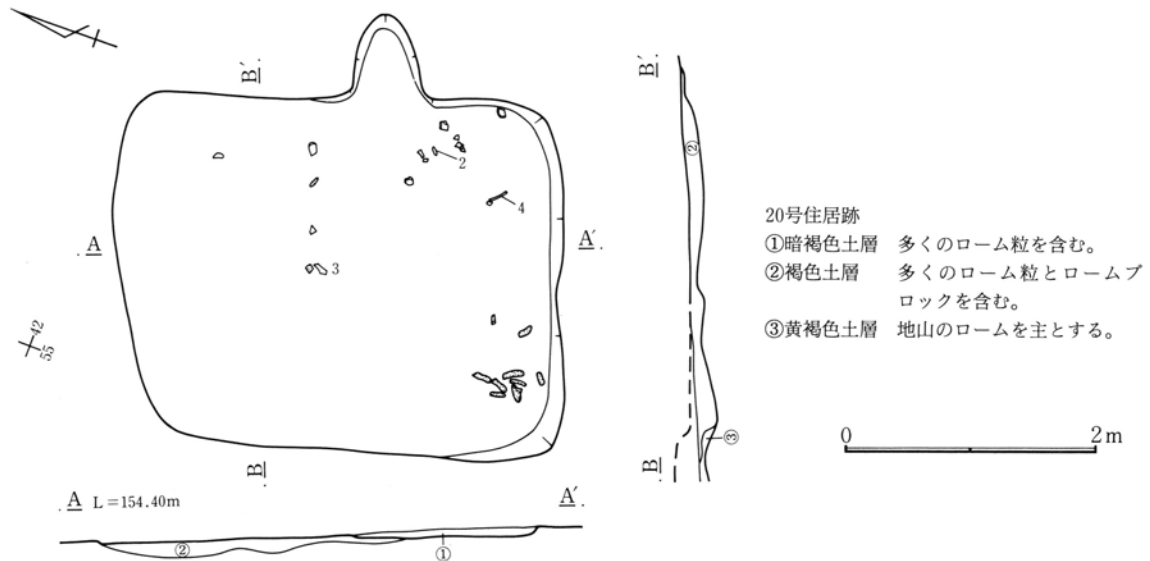
### 20号住居跡 (第510～511図、図版72・114)

位置 本住居跡は第2次調査区にあり、42-56グリッドに位置する。

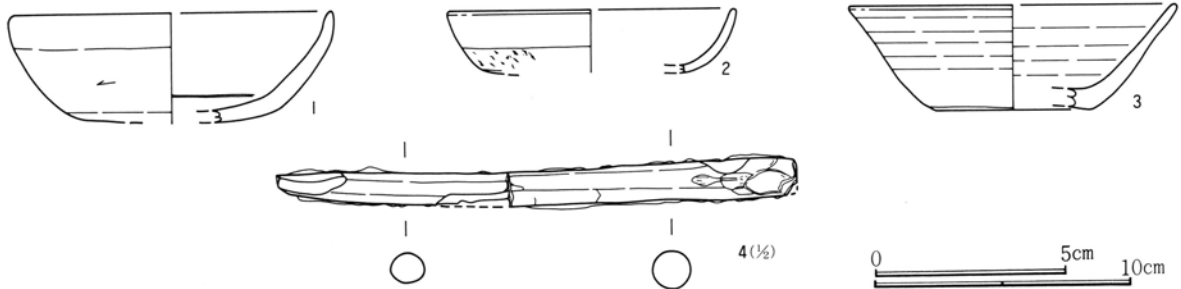
概要 全体に残りが悪く、特に北西部分の壁面は残っていなかった。柱穴や貯蔵穴は掘られていない。竈も少量の焼土粒が残っていたが、非常に残りが悪い。

規模 東西2.78m、南北3.56mである。壁高は残りの良い南西コーナー部分で18cmである。

遺物 出土量は少なく、破片を含めて総数57片である。



第510図 20号住居跡実測図



第511図 20号住居跡出土遺物実測図

20号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
511-1	土師器 坏	覆土 口縁破片	口(12.6) 高— 底—	①密、少量の砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面と胴下半へら削り、砂粒の移動少なく器表面密。 内面の暗文は描かれていない。
511-2	土師器 坏	床面+9 小破片	口(11.2) 高— 底—	①密、小さな赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り、口縁部横ナデ、口縁部と底部の間ナデ。
511-3	土師器 坏	床面+7 口縁破片	口(12.6) 高— 底(6.0)	①密、粉状を呈する ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面糸切りと思われるが、残りが少なく不明。
511-4 114	鉄製品 不明	床面+11	長 13.7 厚 1.0	幅 1.3 重 26.0	左端部が刃部で、右端部がやや袋状を呈している為ノ ミの可能性も考えられるが不明。

213号住居跡 (第512～515図、図版72・111)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、31・32—25・26グリッドに位置する。

概要 南北方向の3本の耕作溝により床下部分と竈の煙道部分まで掘り込まれている。住居全体の残りも悪く南壁面と竈右側部以外の壁面は残っておらず、床面も一部残っていない。柱穴や貯蔵穴は掘られていない。

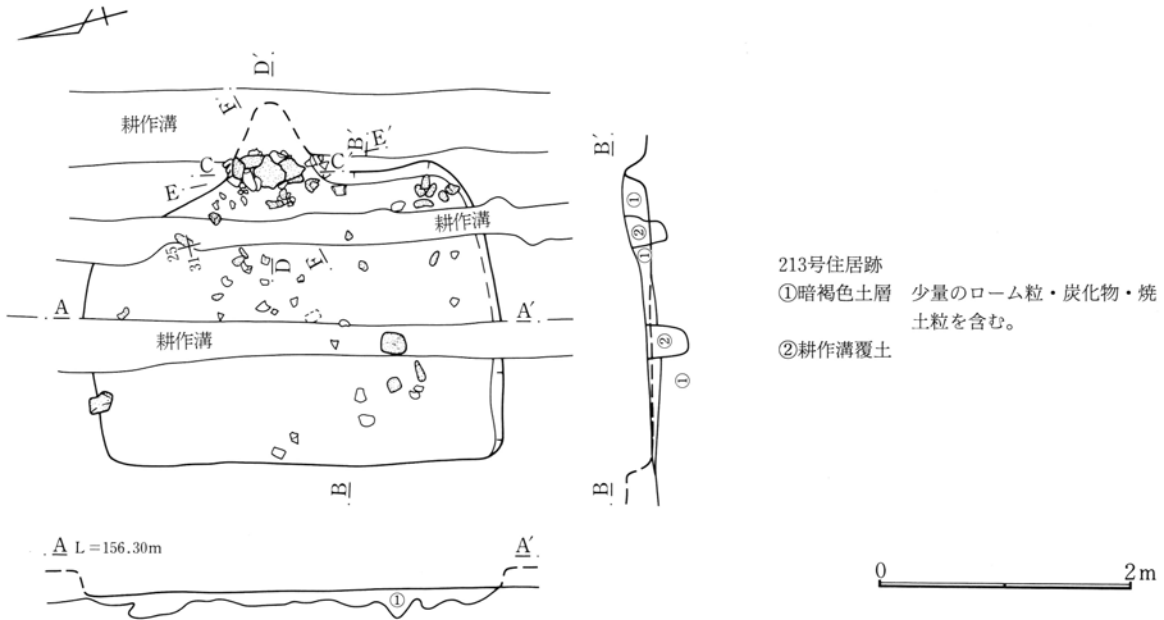
規模 東西2.39m、南北3.19mである。壁高は残りの良い南壁面部分で6cmである。

遺物 竈内から多くの石とともに甕や坏が出土している。

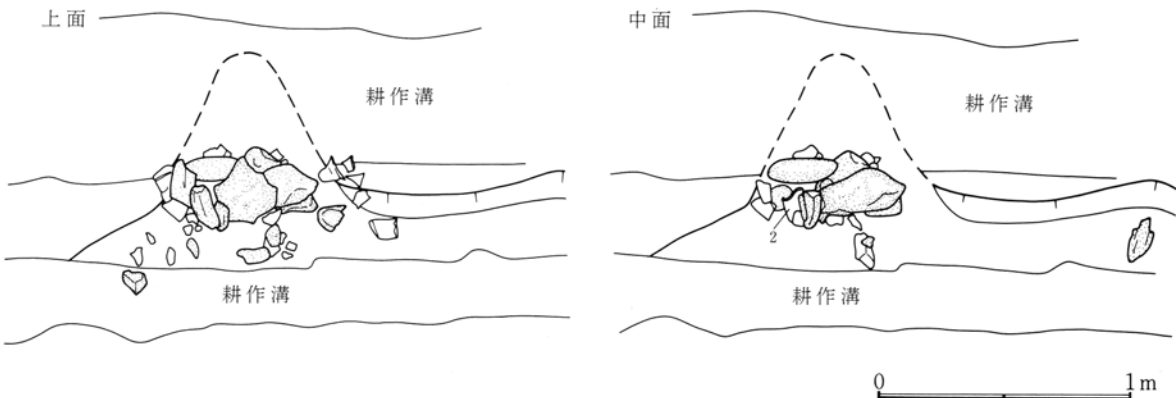
(竈)

位置 東壁面南寄りを掘り込んで造られている。燃烧部と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

概要 竈内より多くの石が出土しているが、明瞭な袖石や壁面の石の区別はできなかった。使用時の位置にあるものは少ないようであり、多くの石は動かされている。石の中には竈に関係なく周辺から集められた石も含んでいるようである。竈内から出土した焼土粒は少量である。多くの部分の残りが悪く規模は不明である。

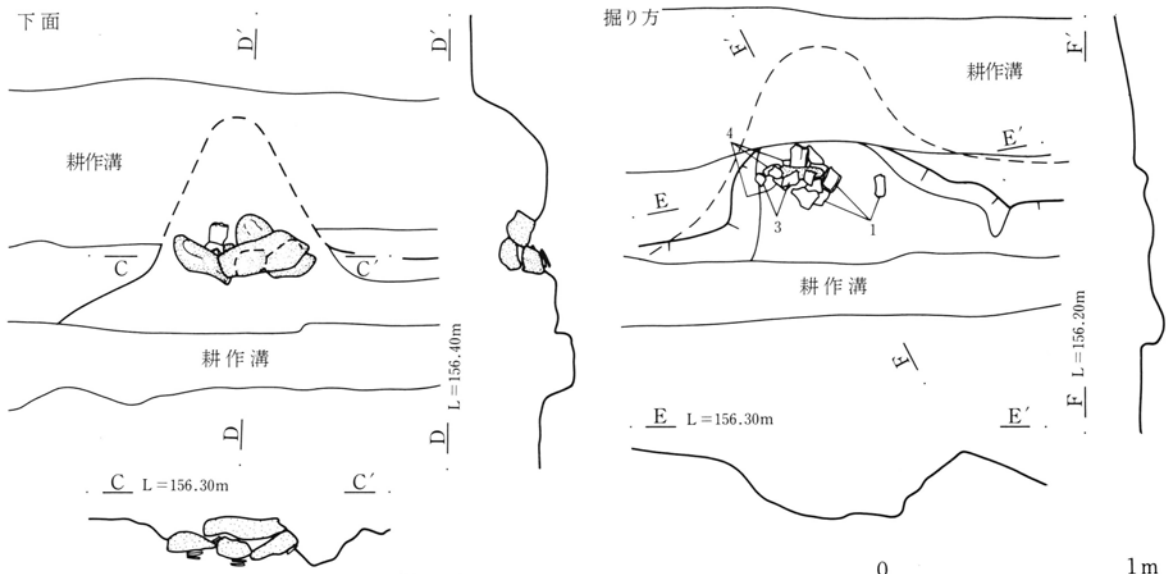


第512図 213号住居跡実測図

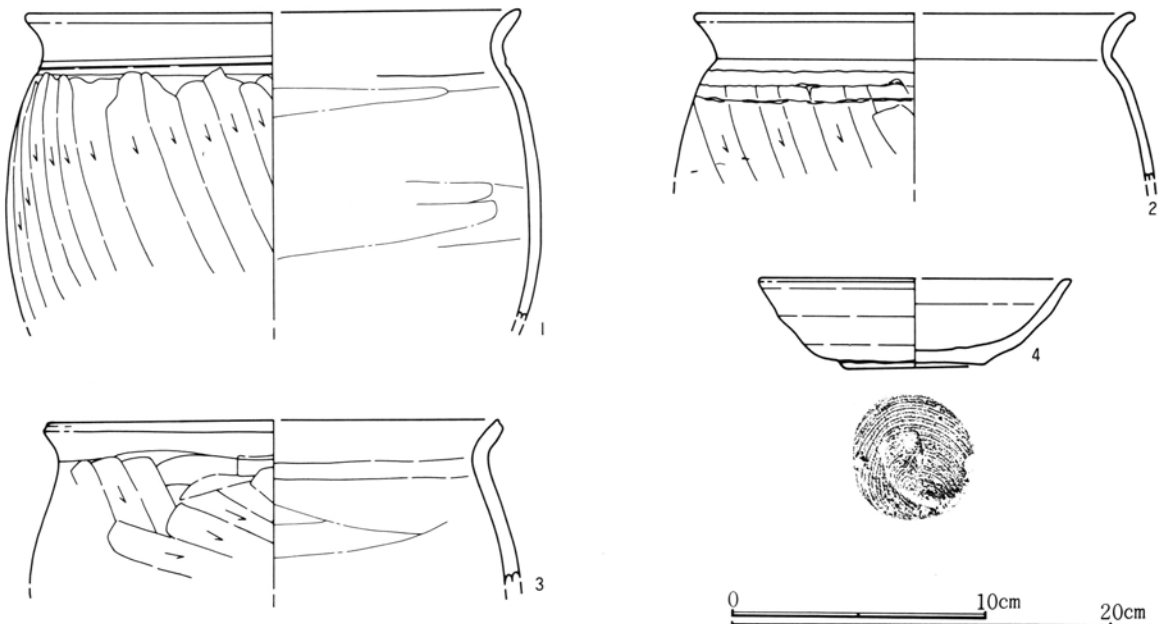


第513図 213号住居跡竈実測図(1)

第5章 平安時代の遺構と遺物



第514図 213号住居跡竈実測図(2)



第515図 213号住居跡出土遺物実測図

213号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
515-1 111	土師器 土釜	床面+1 1/2残存	口(26.0) 高— 底—	①粗、1~3mmの長石粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へら削り、多くの砂粒が移動し、器表面が粗い。 内面ナデにて器表面密。
515-2	土師器 甕	床面+14 破片	口(23.0) 高— 底—	①やや粗、少量の片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄褐色	胴部へら削り。 胴部と口縁部に輪積痕が残る。 須恵器に近い色と固い焼土である。
515-3	土師器 土釜	床面+4 小破片	口(23.6) 高— 底—	①粗、1~3mmの長石粒と片岩粒を含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へらナデ。砂粒の移動少なく器表面比較的密。 内面ナデにて器表面密。 全体に雑なつくりである。
515-4 111	土師器 皿	床面+2 3/4残存	口(12.1) 高 3.5 底 5.2	①密、わずかに片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面右回転糸切り痕。 底部中央が凹状となっている。



366住居跡 (第516~520図、図版72・111・129)

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、24-15・16グリッドに位置する。

概要 小さな住居であるが、残りの良好な住居である。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。貯蔵穴が竈の右側に掘られているが、柱穴は掘られていない。

規模 東西3.25m、南北3.84mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で32cmである。貯蔵穴は径72cm深さ26cmである。

床下 竈手前部分と北東部分に床下土坑が掘られている。

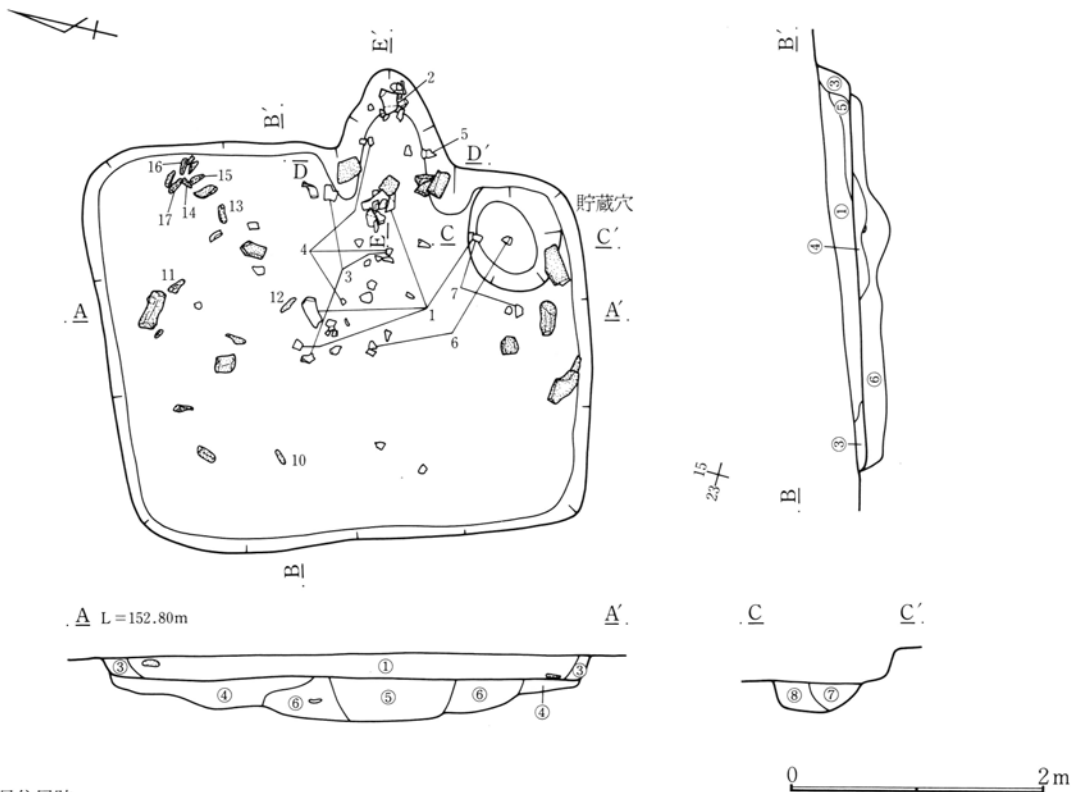
遺物 竈内から住居中央にかけて甕や坏が、また東壁北寄りにまとまってこも編み石が出土している。

(竈)

位置 住居東壁面に造られている。住居規模が小さいためか、この時期の住居では珍しく燃烧部の多くは壁面を掘り込んで造られている。

概要 左袖石がほぼ据えられた状態で、右袖部分には3個の石が重ねた状態で出土している。また甕を中心に多くの土器も出土している。このように比較的残りの良い竈である。燃烧部を中心に多くの焼土粒も出土している。

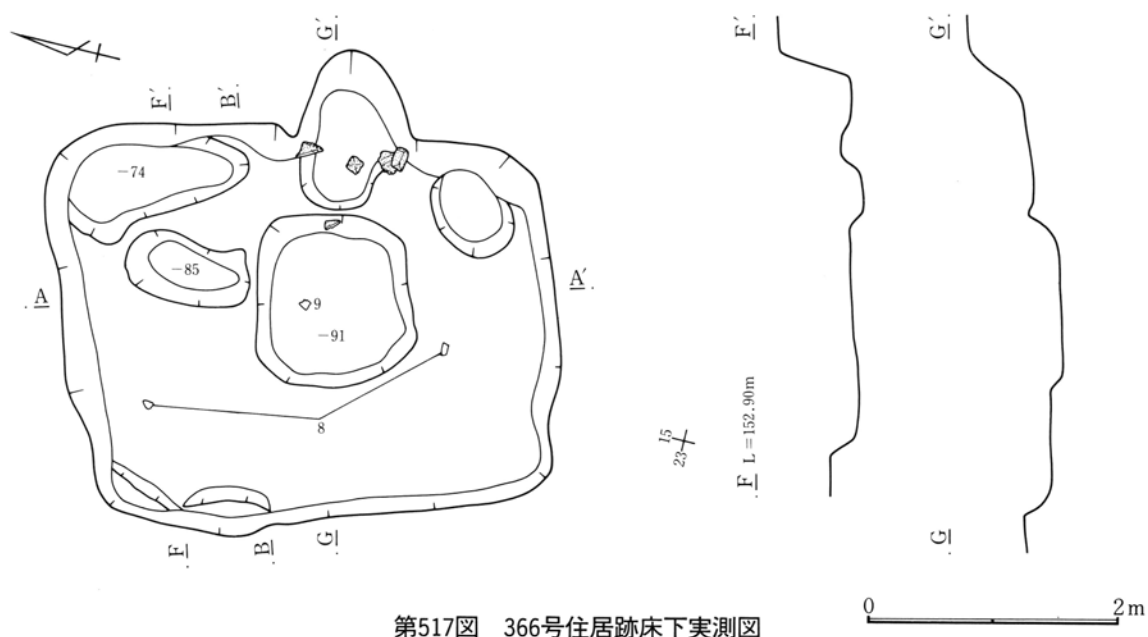
規模 煙道部方向105cm、燃烧部幅54cmである。



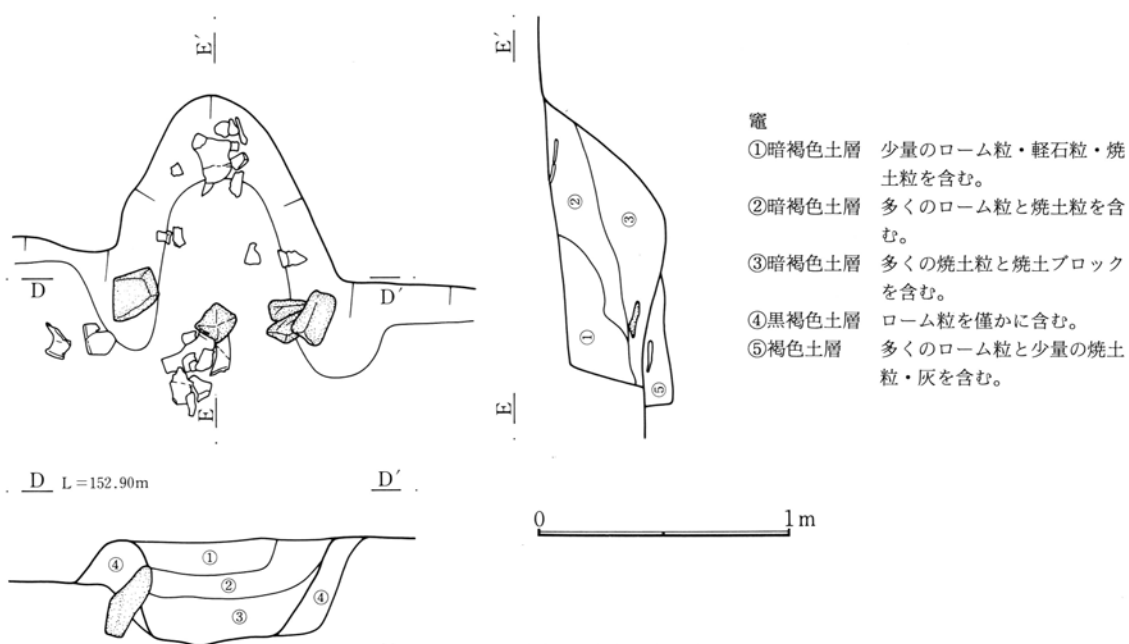
366号住居跡

- |                               |                                |
|-------------------------------|--------------------------------|
| ①暗褐色土層 少量のローム粒と白色軽石粒を含む。      | ⑤暗褐色土層 多くのロームブロックと焼土粒を含む。      |
| ②暗褐色土層 多くのローム粒を含み、白色軽石粒を含まず。  | ⑥褐色土層 大量のロームブロックを含む。           |
| ③褐色土層 多くのローム粒を含む。             | ⑦暗褐色土層 多くのローム粒と少量のローム小ブロックを含む。 |
| ④暗褐色土層 多くのローム粒と少量のロームブロックを含む。 | ⑧暗褐色土層 少量のローム粒とローム小ブロックを含む。    |

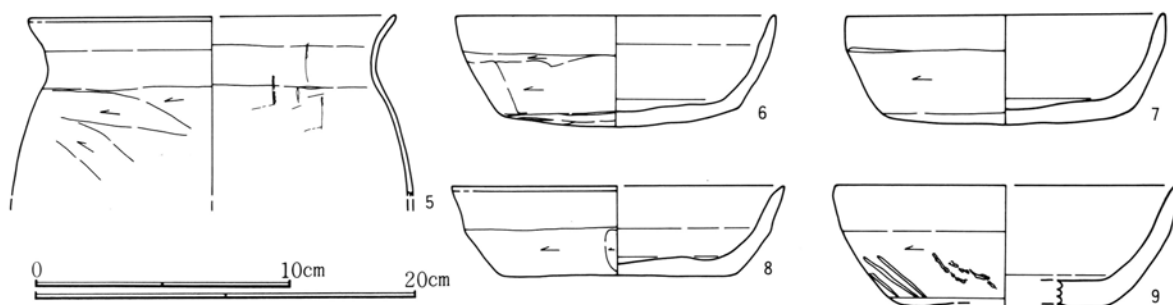
第516図 366号住居跡実測図



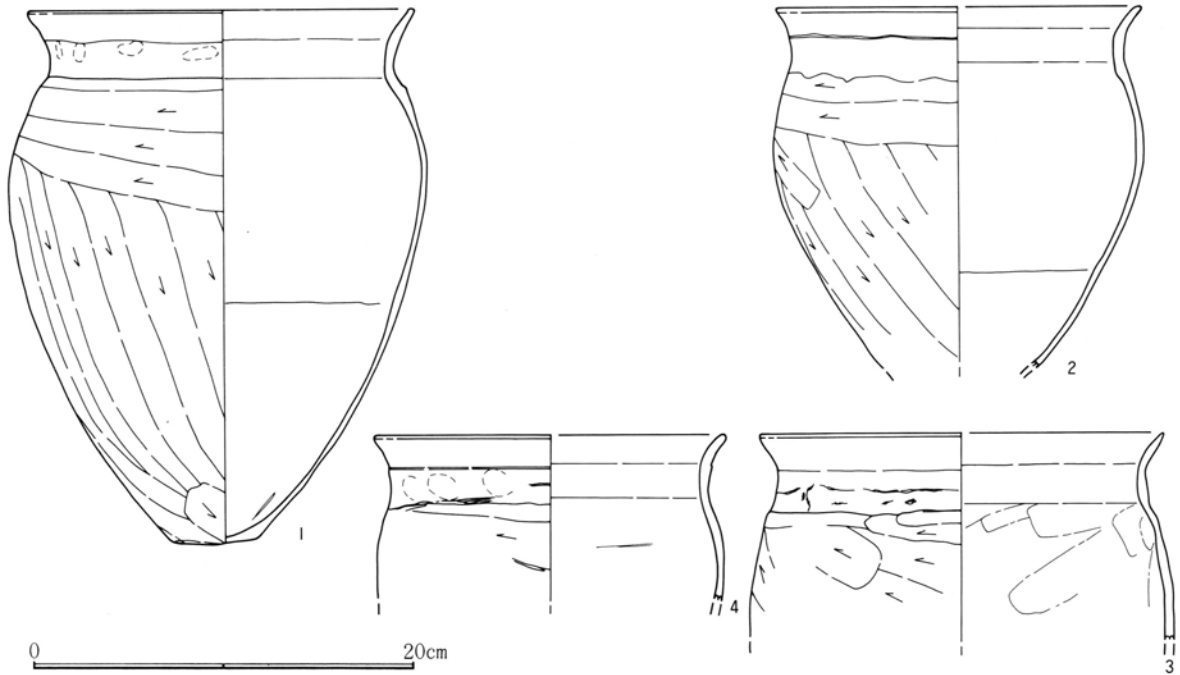
第517図 366号住居跡床下実測図



第518図 366号住居跡竈実測図



第519図 366号住居跡出土遺物実測図(1)



第520図 366号住居跡出土遺物実測図(2)

366号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考		
520-1 111	土 師 器 甕	床面直上 胴下半1/2 他ほぼ完形	口 20.2 高 27.8 底 4.3	①密、1mm以下の砂粒と赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③口縁部橙色、他暗赤褐色	底面と胴部外面へら削り。 口縁部に多くの指頭圧痕。 胴部内面ナデにて器表面密。		
520-2 111	土 師 器 甕	床面+37 口縁1/2、胴 部1/2残存	口(19.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へら削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。		
520-3 111	土 師 器 甕	床面+2 口縁部1/2 胴部1/2残存	口 23.2 高 — 底 —	①密、少量の角閃石を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へら削り。小さな砂粒が多く移動している。 内面ナデにて器表面密。		
520-4	土 師 器 甕	床面直上 1/2残存	口(18.4) 高・底—	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③明褐色	頸部外面に指頭圧痕あり。		
519-5 111	土 師 器 甕	床面+29 口縁部1/2	口(19.0) 高・底—	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へら削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。		
519-6 111	土 師 器 坏	床面直上 3/4残存	口 12.4 高 4.4 底 9.1	①密、2~3mmの砂粒と赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部へら削り。 口縁部横ナデ。 暗文は全く描かれていない。		
519-7 111	土 師 器 坏	床面直上 3/4残存	口 12.2 高 4.3 底 —	①密、少量の片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部外面へら削り。 底部内面中央部がやや凹状を呈する。 内側口縁部と底面に暗文なし。		
519-8 111	土 師 器 坏	床面-10 1/4残存	口(13.0) 高 3.4 底(9.0)	①密、少量の赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へら削り。体部へら削り。 口縁部横ナデ。 内面に暗文は認められない。		
519-9 111	土 師 器 坏	床面-35 1/4残存	口(13.3) 高(4.6) 底(9.0)	①密、少量の赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へら削り。体部へら削り。 全体に雑なつくりである。 内面に暗文は認められない。		
遺物番号	図版番号	器種	法 量(cm)(g)				石 材 ・ 備 考
10	129	こも編み石	長 11.8	幅 3.0	厚 2.3	重 140	点紋緑泥片岩
11	129	こも編み石	長 9.7	幅 4.6	厚 3.0	重 220	絹雲母石墨片岩
12	129	こも編み石	長 12.9	幅 3.2	厚 2.5	重 130	緑簾緑泥片岩
13	129	こも編み石	長 14.3	幅 4.7	厚 1.5	重 150	点紋絹雲母石墨片岩
14	129	こも編み石	長 14.0	幅 3.7	厚 2.3	重 180	点紋絹雲母石墨片岩
15	129	こも編み石	長 15.1	幅 4.5	厚 2.5	重 270	絹雲母石墨片岩
16	129	こも編み石	長 12.7	幅 2.9	厚 1.8	重 100	緑簾緑泥片岩
17	129	こも編み石	長 13.6	幅 4.0	厚 1.5	重 105	絹雲母石墨片岩

405住居跡 (第521～523図、図版73・111)

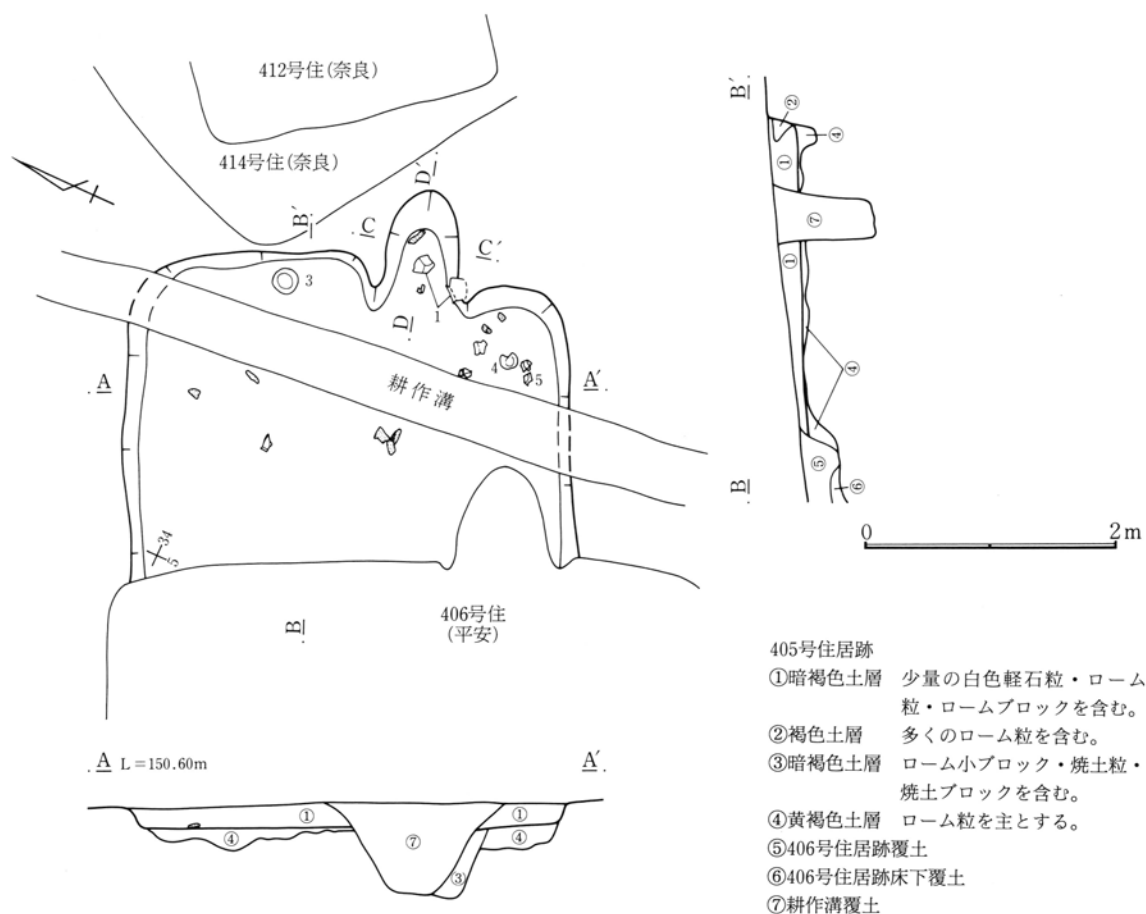
位置 本住居跡は5次調査区にあり、34・35・一6グリッドに位置する。

概要 西側を平安時代の406号住居と重複しており、その部分は406号住居により床下部分まで掘り込まれている。東側で奈良時代の414号住居と重複はしていないが近接している。また南北方向の耕作溝により床下部分まで深く掘り込まれている。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。貯蔵穴と柱穴はいずれも掘られていない。

規模 東西不明、南北3.51mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で26cmである。

遺物 土師器の甕や須恵器の坏等が出土している。



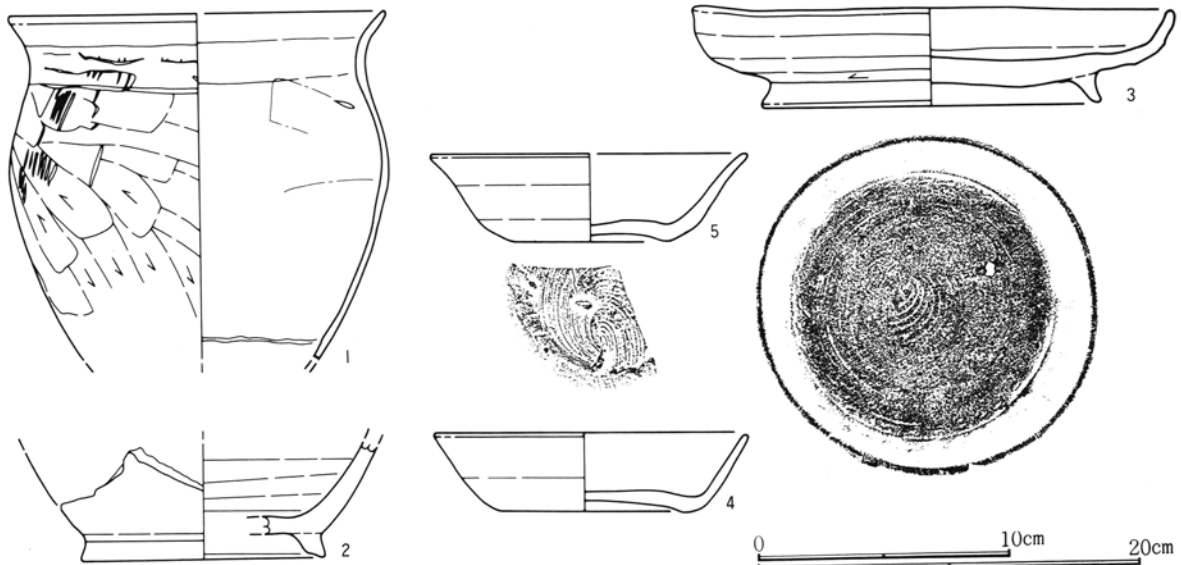
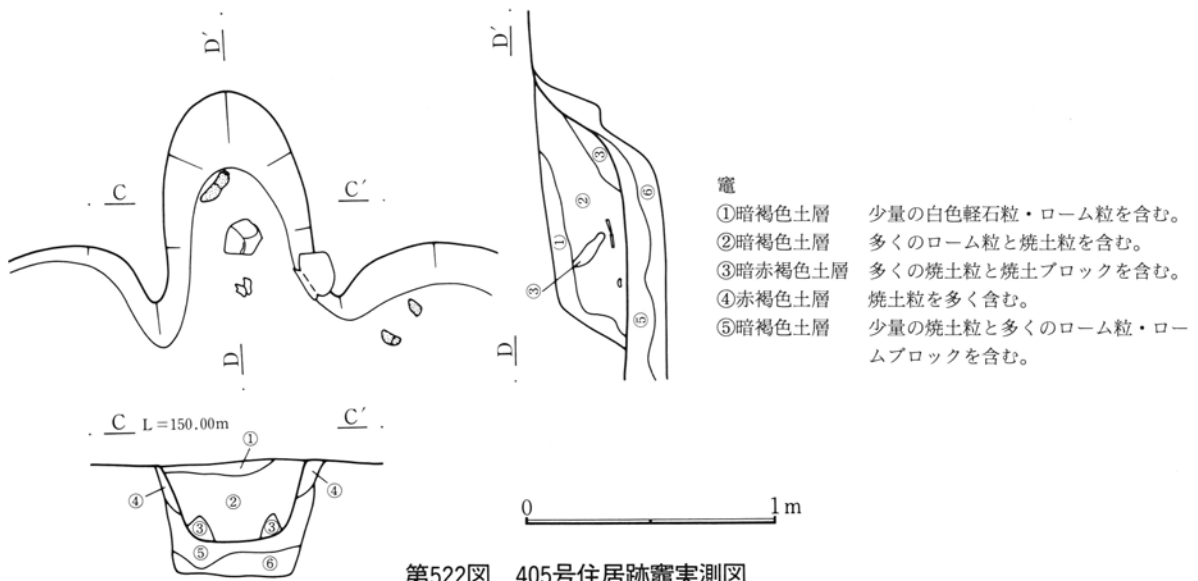
第521図 405号住居跡実測図

(竈)

位置 住居東壁面に造られている。住居が小さいためか燃烧部の多くは壁面を掘り込んで作られていた。

構造 竈内より少量の甕の破片は出土したが、袖石や天井石等は出土しなかった。燃烧部奥壁部分や側壁上部分から多くの焼土粒が出土した。

規模 煙道方向101cm、燃烧部幅57cmである。



405号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
523-1	土師器 甕	床面+7 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{4}$	口(20.1) 高— 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面へら削り。 1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 内側胴部下半に接合痕あり。
523-2	須恵器 瓶	覆土 小破片	口— 高— 底(12.8)	①密、1mm前後の長石粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③表面灰色、断面にぶい黄橙色	高台下面は平らで内傾し、中央部がやや凹状になっている。
523-3 111	須恵器 盤	床面+21 ほぼ完形	口19.1 高4.0 底—	①密、少量の片岩粒を含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底部へら切り後、底面中央部以外全面回転へら削り。 口縁部下端へら削り。
523-4 111	須恵器 坏	床面-11 口縁部 $\frac{1}{2}$ 底部完形	口12.6 高3.0 底7.6	①密、1mm以下の小さな長石粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③暗青灰色	底面右回転糸切り痕、周辺部に薬の圧痕が少し残る。 底面が盛り上がっている。
523-5	須恵器 坏	床面+4 口縁~底部 $\frac{1}{4}$ 残存	口(12.6) 高(3.5) 底(6.0)	①密、2~3mmの長石粒を含む。 ②還元焰、硬質 ③表面灰色、断面灰赤褐色	底面糸切。 口縁部がやや外反する。

480号住居跡 (第524～526図、図版73)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、68・69—28グリッドに位置する。

概要 残りの悪い住居であり、覆土の多くは削られて残っていない。本住居を含めて4軒が重複しており、本住居が最も新しい。北東コーナー部分で古墳時代の481号住居の覆土を掘り込んでいる。南西部分で古墳時代の469号住居と奈良時代の468号住居の覆土を掘り込んでいる。また住居中央部分を耕作溝により東西方向に床下部分まで掘り込まれている。重複関係については第94図を参照。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。床下土坑が2本掘られているが、貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模 東西4.57m、南北3.54mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で7cmである。

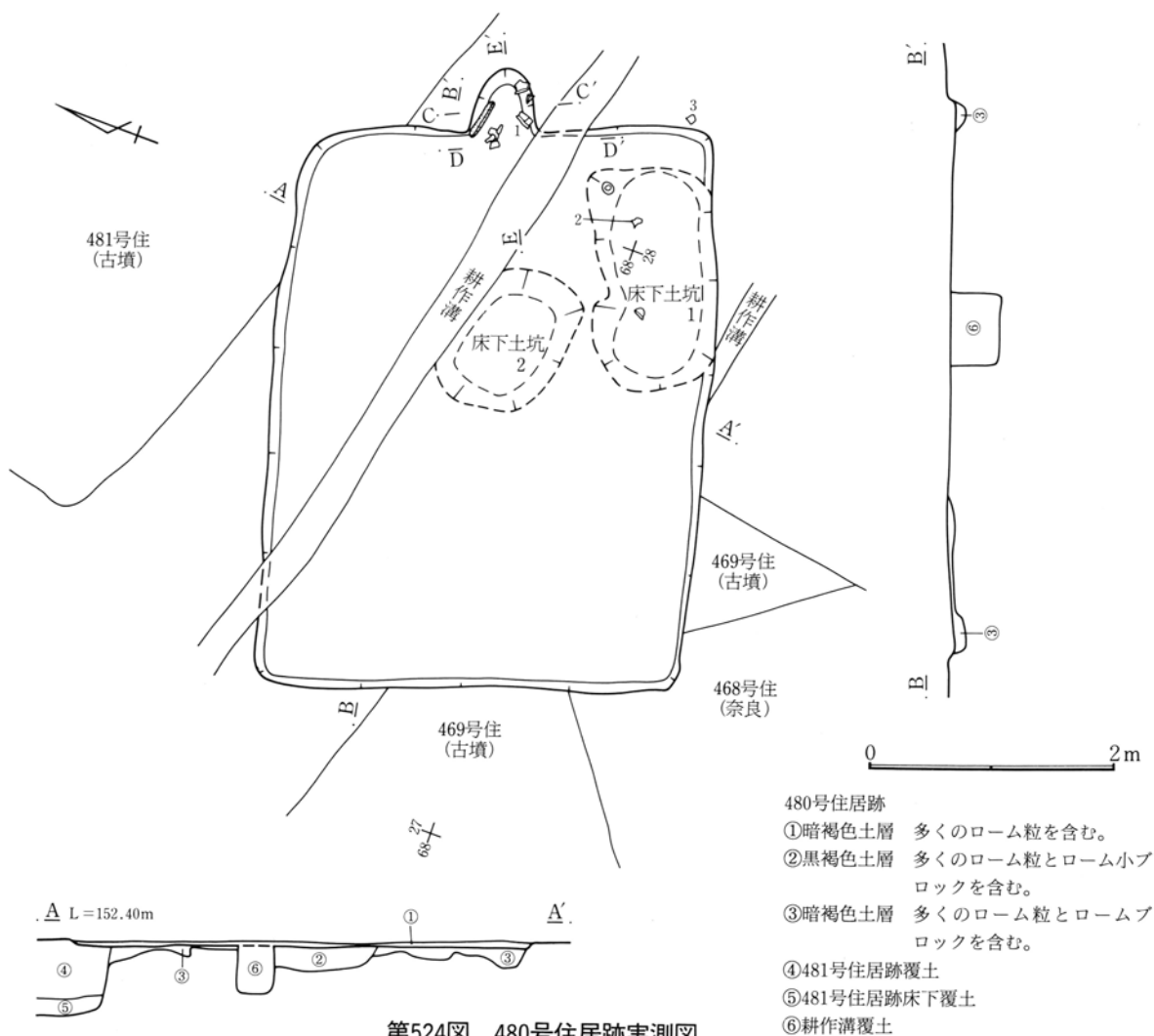
床下 床下土坑が2本掘られている。床下土坑1は深さ17cm、床下土坑2は深さ19cmである。

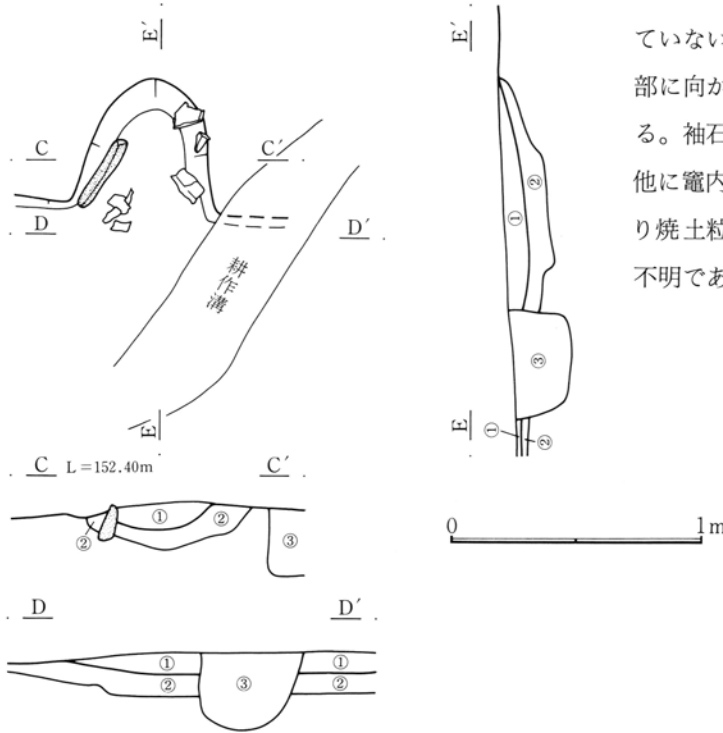
遺物 竈内より破片が出土している。

(竈)

位置 東壁面を掘り込んで造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置し、燃焼部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

概要 住居同様に残りが悪く、上部分の多くは削られて残っていない。右袖部分は耕作溝により削られて残っ

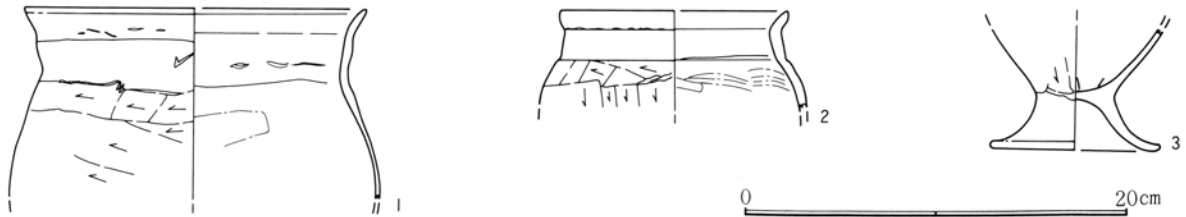




第525図 480号住居跡竈実測図

ていない。左側壁部に長さ32cmの細長い石が煙道部に向かって倒れかけたような状態で出土している。袖石である可能性も考えられるが不明である。他に竈内やその周辺から石の出土はない。竈内より焼土粒の出土は少量である。規模は残りが悪く不明である。

- 竈
- ①暗褐色土層 少量のローム粒・焼土粒・炭化物を含む。
  - ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒・灰を含む。
  - ③耕作溝覆土



第526図 480号住居跡出土遺物実測図

480号住居跡出土遺物観察表

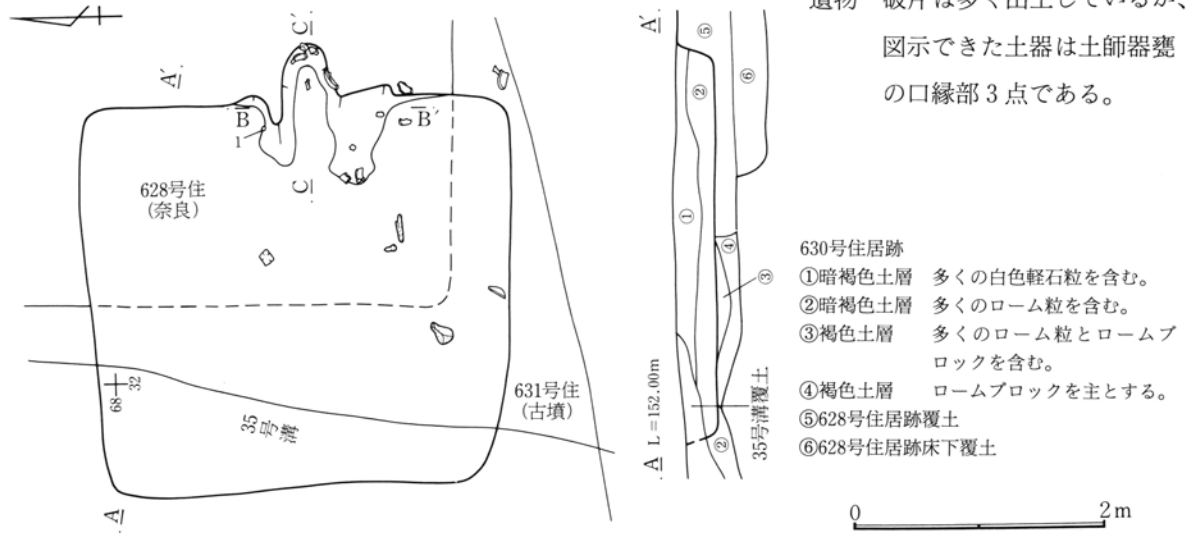
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
526-1	土 師 器 甕	床面+1 小破片	口(18.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へら削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
526-2	土 師 器 台付甕	床面-17 1/4残存	口(12.2) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面へら削り。 へら削りの単位は明瞭である。
526-3	土 師 器 台付甕	床面-11 1/2残存	口 — 高 — 底(9.0)	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へら削り。台部外面ナデ。 胴部内面～底面ナデにて器表面密。 台部内側の器表面が粗れている。

630号住居跡 (第531～533図、図版73・114)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、68-32・33グリッドに位置する。

概要 2軒の住居を掘り込んで造られており、残りが非常に悪い。住居全体が古墳時代の631号住居の中に造られており、床面下部分まで掘り込んでいる。また東側では奈良時代の628号住居を床面に近い覆土部分まで掘り込んでいる。また西側では35号溝により床面近くまで掘り込まれている。竈手前部分から環状に粘土が出土している。床面は明瞭でなく貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模 東西3.08m、南北3.42mである。壁高は残りの良い南壁面部分で14cmである。



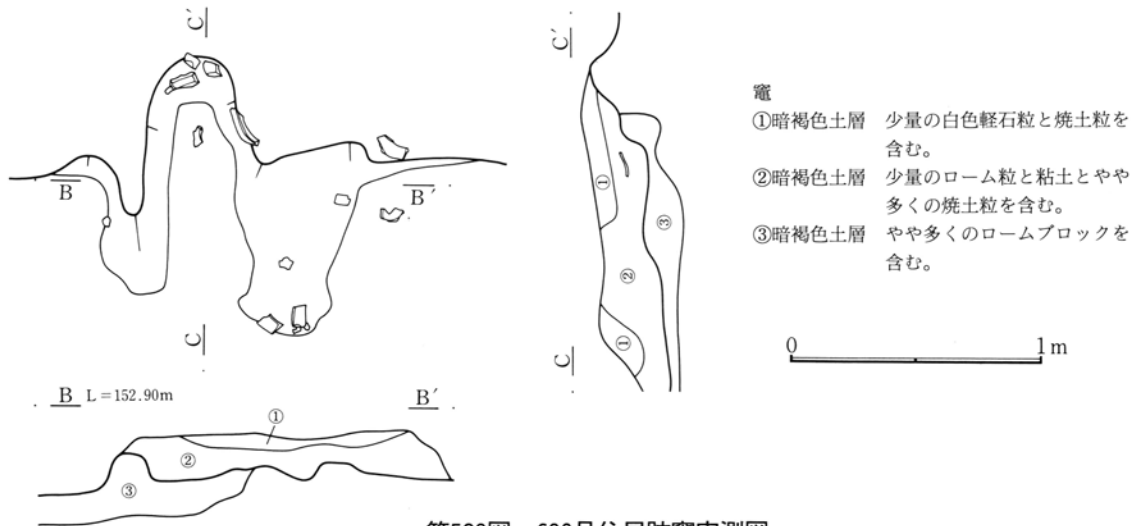
第527図 630号住居跡実測図

(竈)

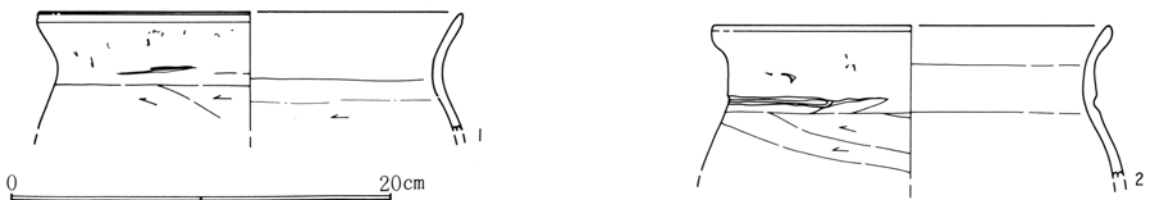
位置 東壁面南寄りを掘り込んで造られている。袖部分は床面上に位置するが、燃焼部と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

概要 628号住居の覆土を掘り込んで造られている。残りが悪く右袖部分は外側に崩れている。粘土を少し使用して造られており、竈手前の粘土は竈に用いたものの一部とも思える。袖石は使われていないようである。焼土粒の出土は少ない。

規模 煙道方向約93cm、燃焼部幅約33cmである。

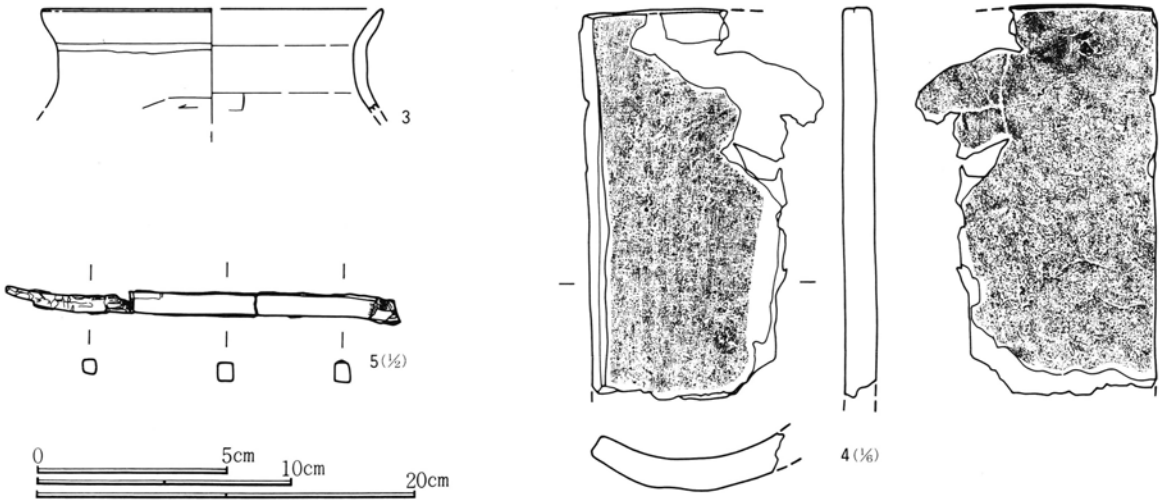


第528図 630号住居跡竈実測図



第529図 630号住居跡出土遺物実測図(1)

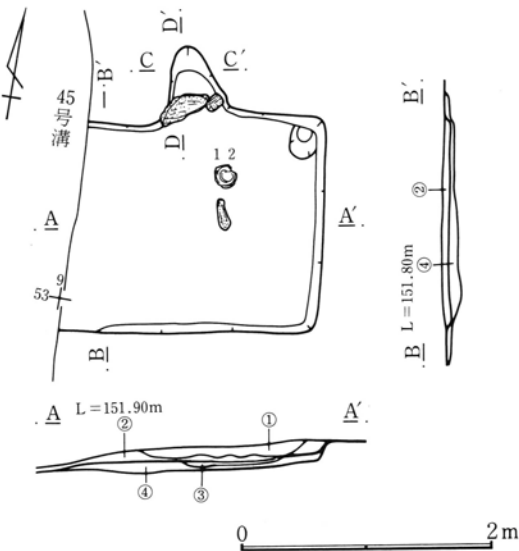




第530図 630号住居跡出土遺物実測図(2)

630号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
529-1	土師器 甕	竈覆土 口縁 $\frac{1}{2}$ 残存	口(22.0) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部ヘラ削り。口縁上端部外側に一条の凹線が一周している。
529-2	土師器 甕	竈覆土 小破片	口(20.6) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部ヘラ削り。 口縁部にヘラの削り痕が深く残る。
530-3	土師器 甕	竈覆土 口縁 $\frac{1}{4}$ 残存	口(17.8) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部ヘラ削り。
530-4	瓦	覆土 破片		①粗、1~2mmの長石粒を大量に含む。②還元焰、硬質③黒褐色	凹面に模骨痕。側面ナデ。 凸面縦方向のナデ。
530-5 114	鉄製品 鉄 鉄	覆土	長 10.5 厚 0.5	幅 0.6 重 6.1	鉄鍔の茎部分と思われる。 残りは比較的良好である。



688号住居跡

- ①暗褐色土層 少量の白色軽石粒を含む。
- ②褐色土層 多くのローム粒を含む。
- ③褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ④黄褐色土層 地山のロームを主とする。

第531図 688号住居跡実測図

688号住居跡 (第531~533図、図版74・111)

位置 本住居跡は第8次調査区にあり、54-10グリッドに位置する。

概要 非常に小さな住居であり、全体に残りが悪い。西側の45号溝によって本住居の西側部分は削られて残っていない。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模 東西不明、南北1.72mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で32cmである。

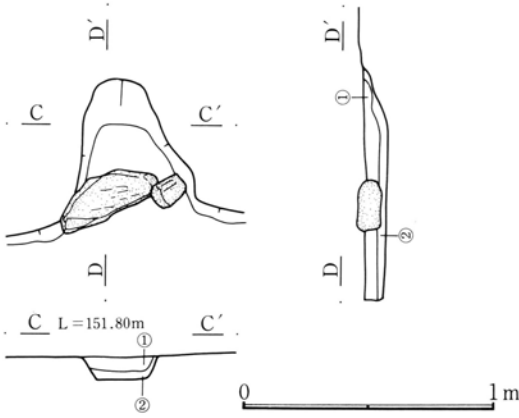
遺物 坏が2点出土しているのみである。

(竈)

位置 北壁面を掘り込んで造られている。燃烧部の多くは壁面を掘り込んで造られている。

構造 残りが悪く全体の様子は不明である。天井石が焚口部分に落ちた状態で残っている。右袖石としては疑問であるが、短い石が右袖部分から出土している。左袖石は残っていない。燃烧部からの焼土粒の出土

第5章 平安時代の遺構と遺物



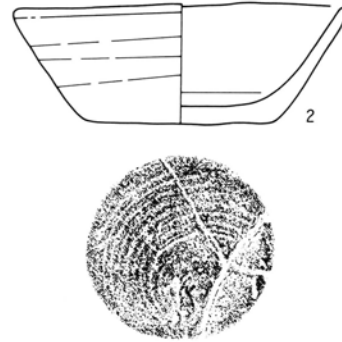
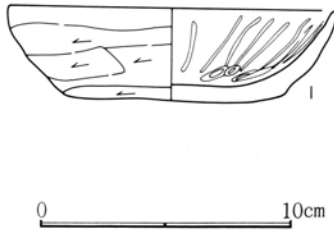
第532図 688号住居跡竈実測図

はわずかである。

規模 煙道方向約55cm、燃烧部幅約48cmである。

竈

- ①褐色土層 多くのローム粒と僅かな焼土粒を含む。
- ②黄褐色土層 地山のロームを主とする。



第533図 688号住居跡出土遺物実測図

688号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
533-1 111	土師器 坏	覆土 ほぼ完形	口 13.0 高 3.6 底 8.4	①密、1~2mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部外面へラ削り。内面に多くの暗文あり。全体に器肉が厚い。 雑な感じのつくりである。
533-2 111	須恵器 坏	覆土 1/2残存	口 13.1 高 4.7 底 7.5	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、軟質 ③橙色	底面右回転糸切り痕。 表面が磨耗しており糸切り痕明瞭でない。 胎土がやや粉状を呈している。

## 第6章 その他の遺構と遺物

### 第1節 時期不明の遺構と遺物

遺構や覆土の状態は明らかに住居であるが、遺物を出土していないか出土していてもわずかな量と小さな破片であるため、時期の特定ができない住居が21軒調査された。この住居をまとめてこの第1節で報告する。

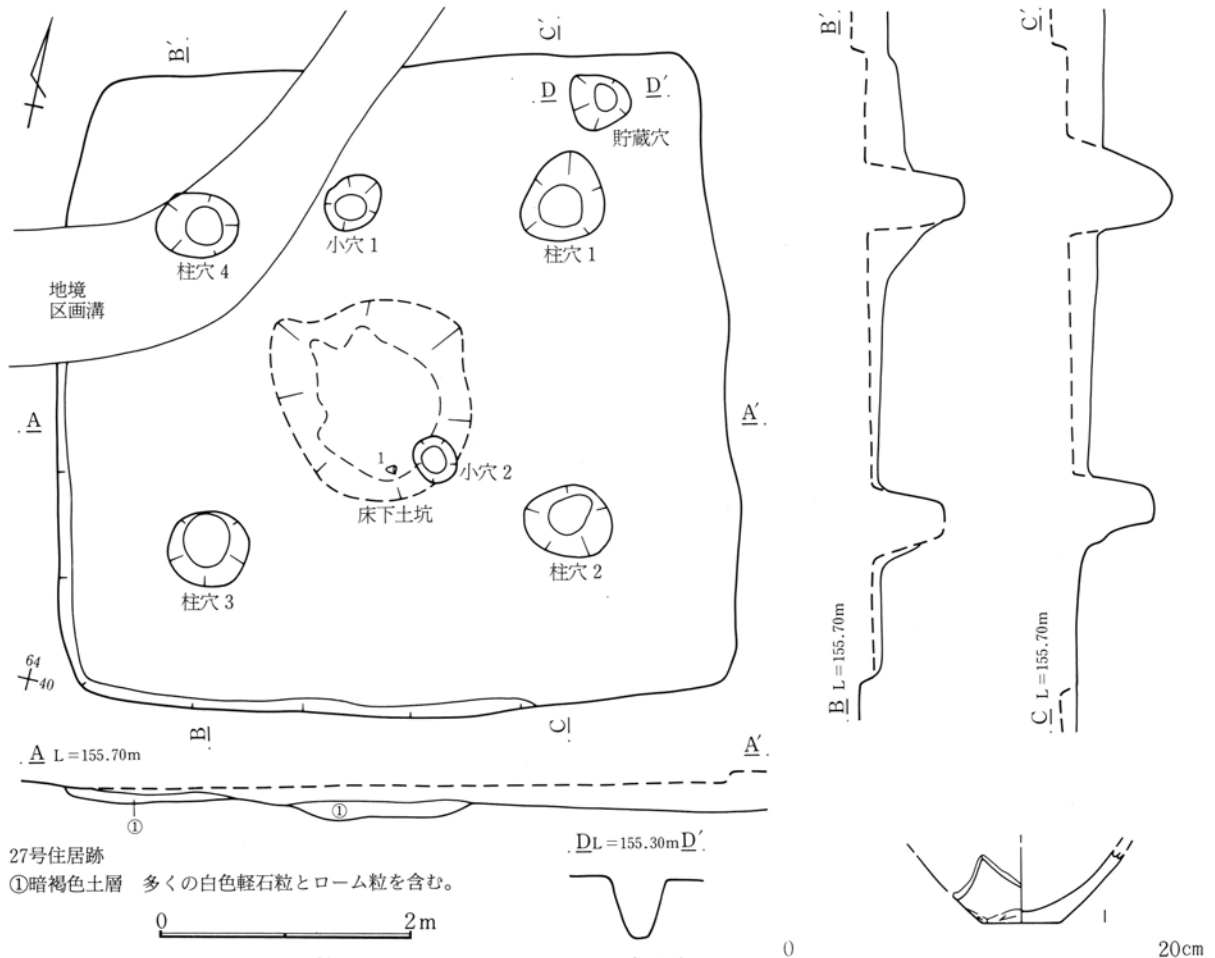
#### 27号住居跡 (第534図、図版74)

**位置** 本住居跡は第2次調査区にあり、41—65グリッドに位置する。

**概要** 全体に残りが悪く、床面はほとんど残っていないため床下部分の調査となった。南西部分は地境の溝により床下部分まで掘り込まれている。竈は不明であるが、貯蔵穴とも思える掘り込みが北東コーナー部分に掘られているため北壁面に造られていた可能性も考えられる。

**構造** 柱穴が4本、小穴が2本、北東コーナー部分に貯蔵穴と思われる小穴が掘られている。床面中央に床下土坑が掘られている。

**規模** 東西5.43m、南北5.13mである。柱穴1は径65cm深さ83cm、柱穴2は径66cm深さ63cm、柱穴3は径60cm深さ58cm、柱穴4は径70cm深さ77cmである。小穴1は径48cm深さ36cm、小穴2は径36cm深さ32cmである。貯蔵穴は径46cm深さ88cmである。



第6章 その他の遺構と遺物

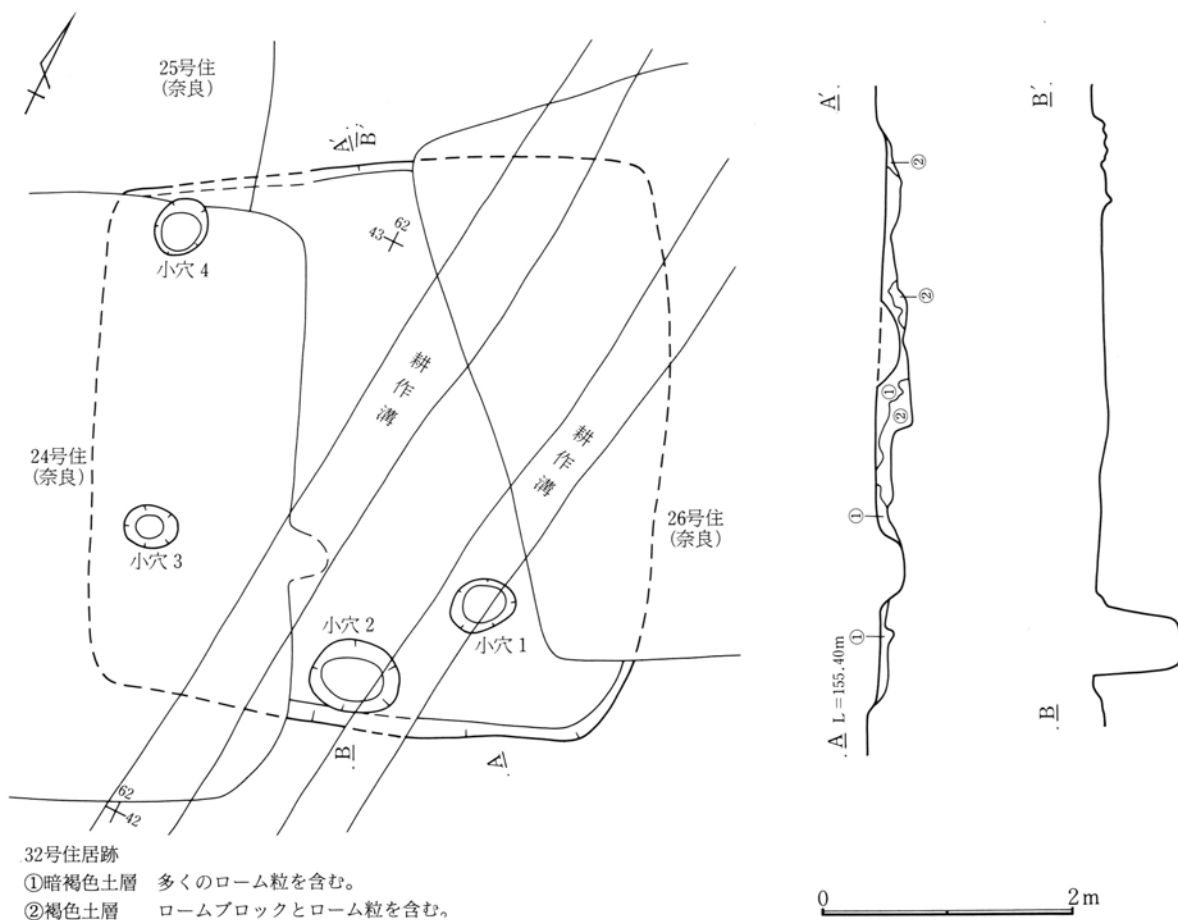
遺物 図示したのは土師器甕の底部である。橙色を呈し、底面と胴下部ヘラ削り内面ナデである。ほかに土師器の坏口縁部2片と甕胴部2片が出土している。

32号住居跡 (第535図)

位置 本住居跡は第2次調査区にあり、43—62グリッドに位置する。

概要 5軒の重複する住居の中の1軒である。掘り込み面が浅く南北方向の多くの耕作溝により床下部分まで深く掘り込まれ、残りが悪い。本住居は西側部分を奈良時代の24号住居と25号住居により、東側を奈良時代の26号住居により削られている。出土遺物も全くないため時期決定はできない。新旧関係は32→25→24号住居、32→26号住居である。竈・貯蔵穴・柱穴は不明であり、小穴が2本掘られている。

規模 東西南北とも不明である。壁高は残りの良い南壁面部分で27cmである。小穴1は径46cm深さ60cm、小穴2は径70cm深さ60cmである。

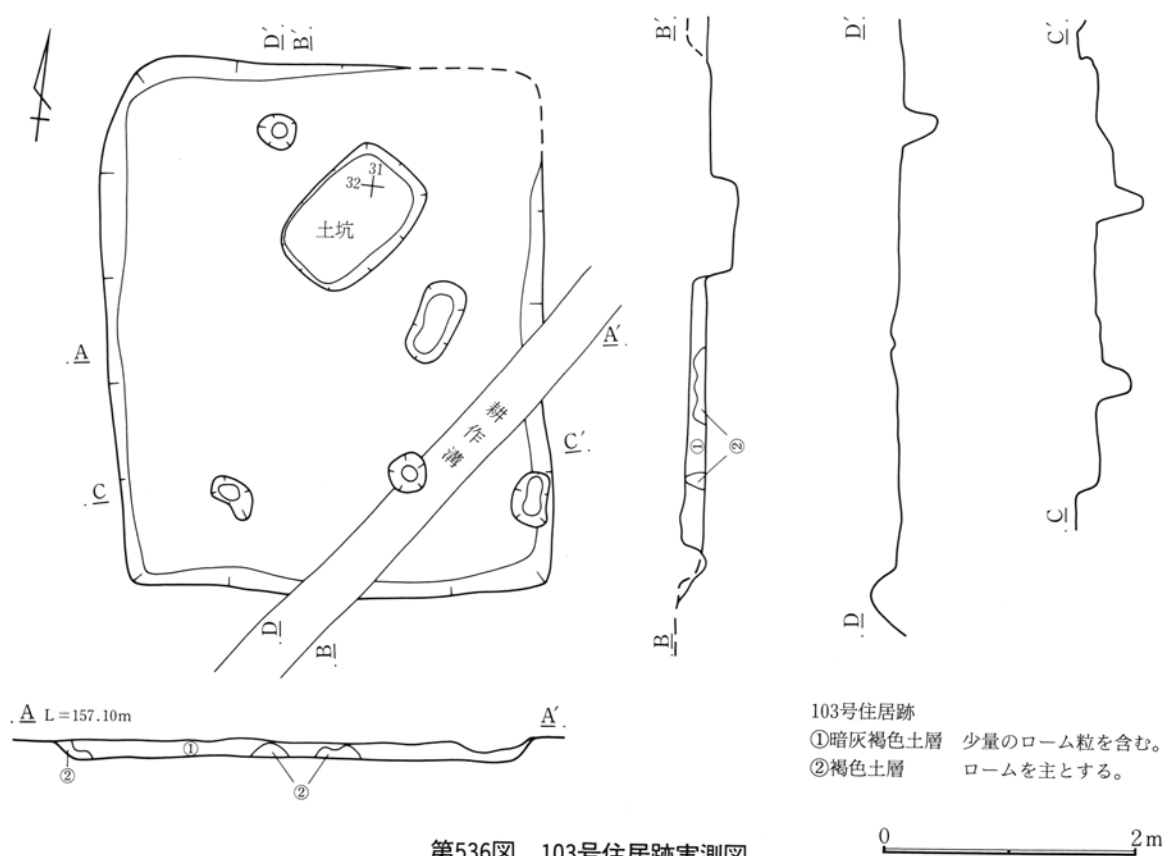


103号住居跡 (第536図、図版74)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、32—31・32グリッドに位置する。

概要 住居のように長方形に掘り込まれているが、柱穴や竈は造られていない。南東部分を耕作溝により、また中央北側部分を最近掘られた土坑により床下部分まで深く掘り込まれている。小穴が多く掘られているが、住居の残りが悪く、本住居に伴うものかについての確認はできなかった。遺物は全く出土していない。

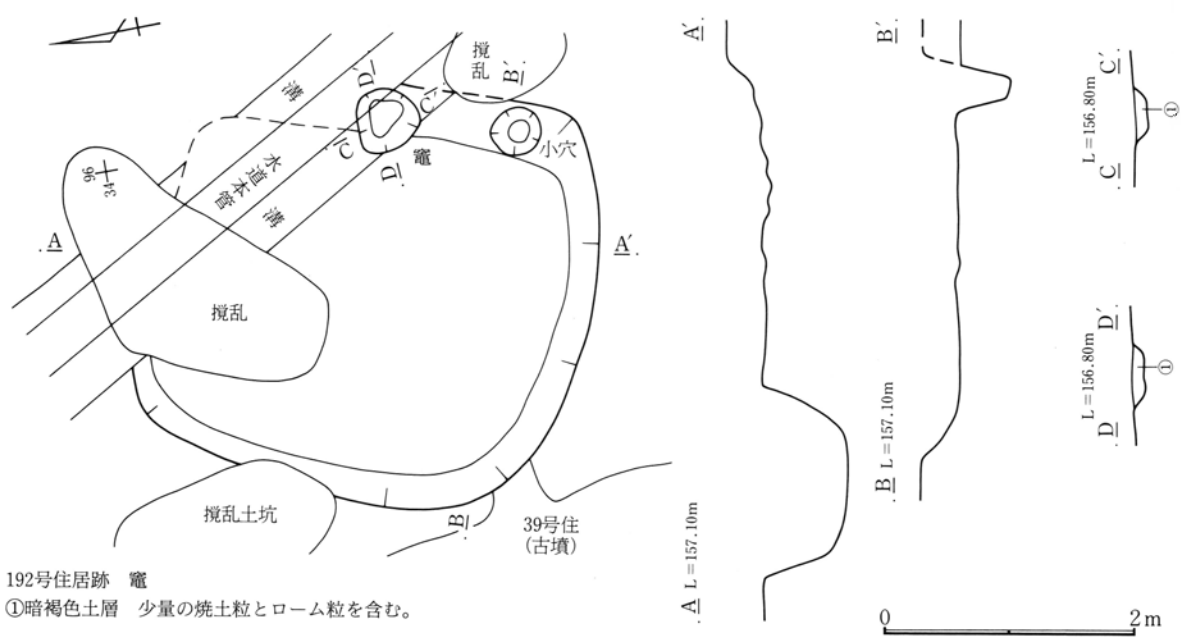
規模 東西3.50m、南北4.20mである。壁高は残りの良い西壁面部分で15cmである。



192号住居跡 (第537図、図版74)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、34—36グリッドに位置する。

概要 6～8号住居調査時において三角状の遺構を検出した。住居としての状況に疑問があるためその時点では住居跡として扱わなかった。その地区の調査終了に近い時期に農業用水のパイプを取り除き再調



第6章 その他の遺構と遺物

査を実施した。床面は残っていないため床下面で調査を行った。その結果竈の残骸と思われる遺構が僅かな焼土粒とともに確認された。そこで住居プランが三角状で疑問も残るが、192号住居として扱った。北東部分は水道管理設に伴う掘り込みと溝により、北側と西側は攪乱土坑により削られている。西側では古墳時代の39号住居の竈部分で一部重複している。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。住居規模も不明である。遺物は全く出土していない。

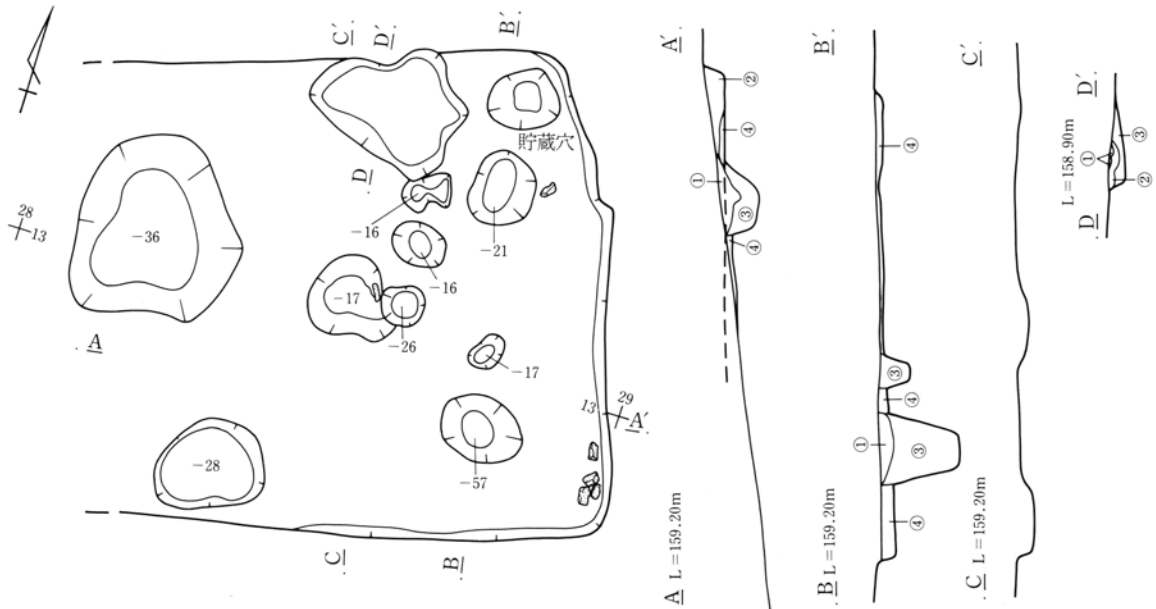
195号住居跡 (第538図、図版74)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、14-29グリッドに位置する。

概要 西側の低くなるなどらかな傾斜面に位置し、低い西側の床面と壁面は残っていない。床面はほとんど残っていないために調査は床下面で行った。調査の結果、北壁面に竈の下部の残骸と竈の右側に貯蔵穴が、また床面下に多くの小穴が確認された。竈内の一部から多くの焼土粒が出土している。

規模 南北3.86m、東西は不明である。貯蔵穴は径58cm深さ54cmである。小穴の床面からの深さは数字で示した。

遺物 石が6個出土しているが、土器は全く出土していない。



195号住居跡

- ①暗褐色土層 少量のローム粒を含む。(攪乱層)
- ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ④黄褐色土層 地山のロームを主とする。

貯蔵穴

- ①赤褐色土層 焼土粒を主とした層。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒及び炭化物を含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒と僅かな焼土粒を含む。

第538図 195号住居跡実測図

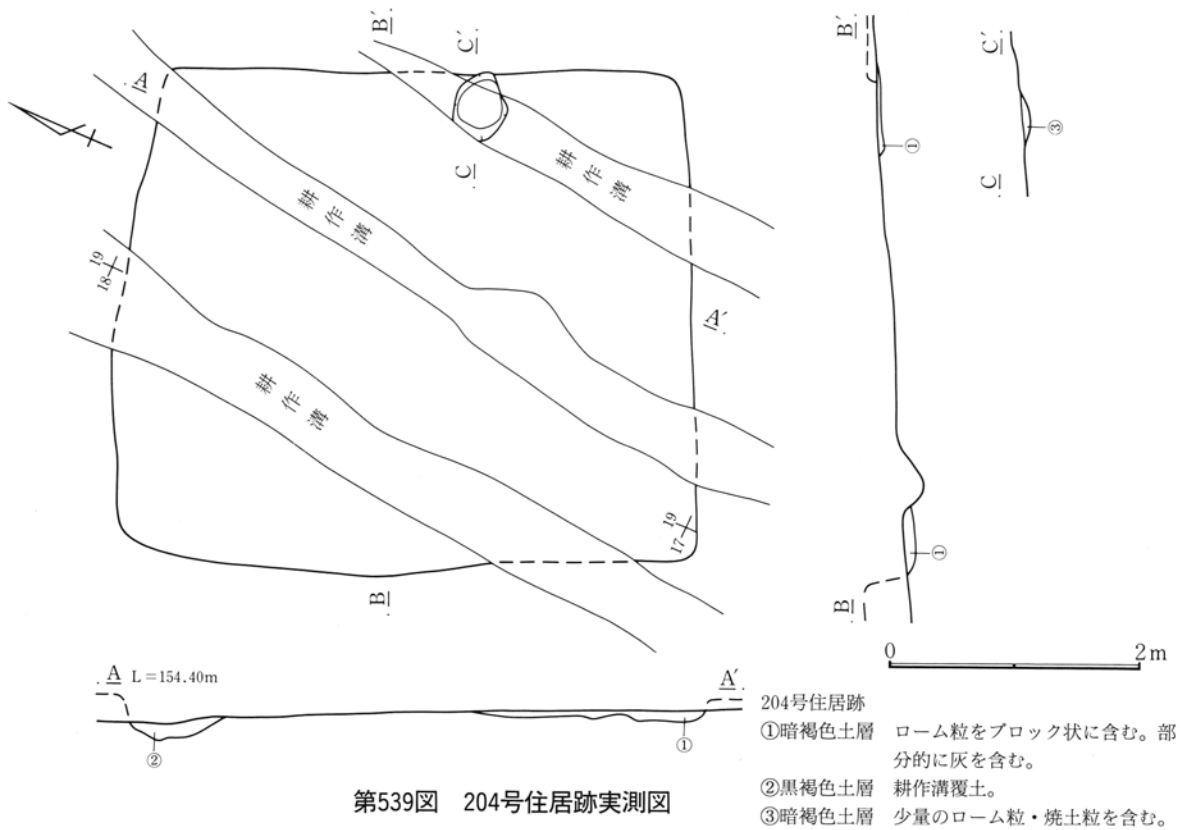
0 2m

204号住居跡 (第539図、図版74)

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、18-19・20グリッドに位置する。

概要 大部分は削り取られて、住居と竈の痕跡が僅かに残っているだけである。また3本の耕作溝により床下部分まで掘り込まれている。竈部分から僅かな焼土粒が出土している。柱穴や貯蔵穴等は掘られていない。遺物は全く出土していない。

規模 東西3.98m、南北推定4.56mである。

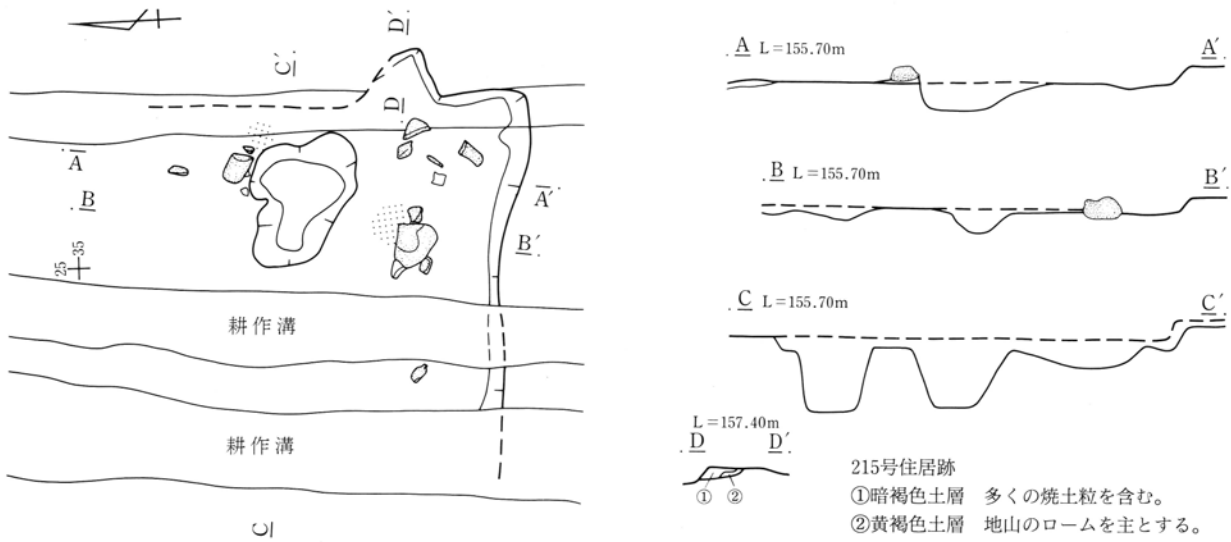


第539図 204号住居跡実測図

215号住居跡 (第540図、図版74)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、35-25・26グリッドに位置する。

概要 大部分は削り取られて、住居と竈の痕跡が僅かに残っているだけである。また多くの耕作溝により床下部分まで掘り込まれている。このように残りの悪い住居であるが、竈内から多くの焼土粒が出土している。柱穴や貯蔵穴等は掘られていない。住居規模も不明である。住居内より多くの石が出土しているが、土器は甕の破片が4片出土しているだけである。



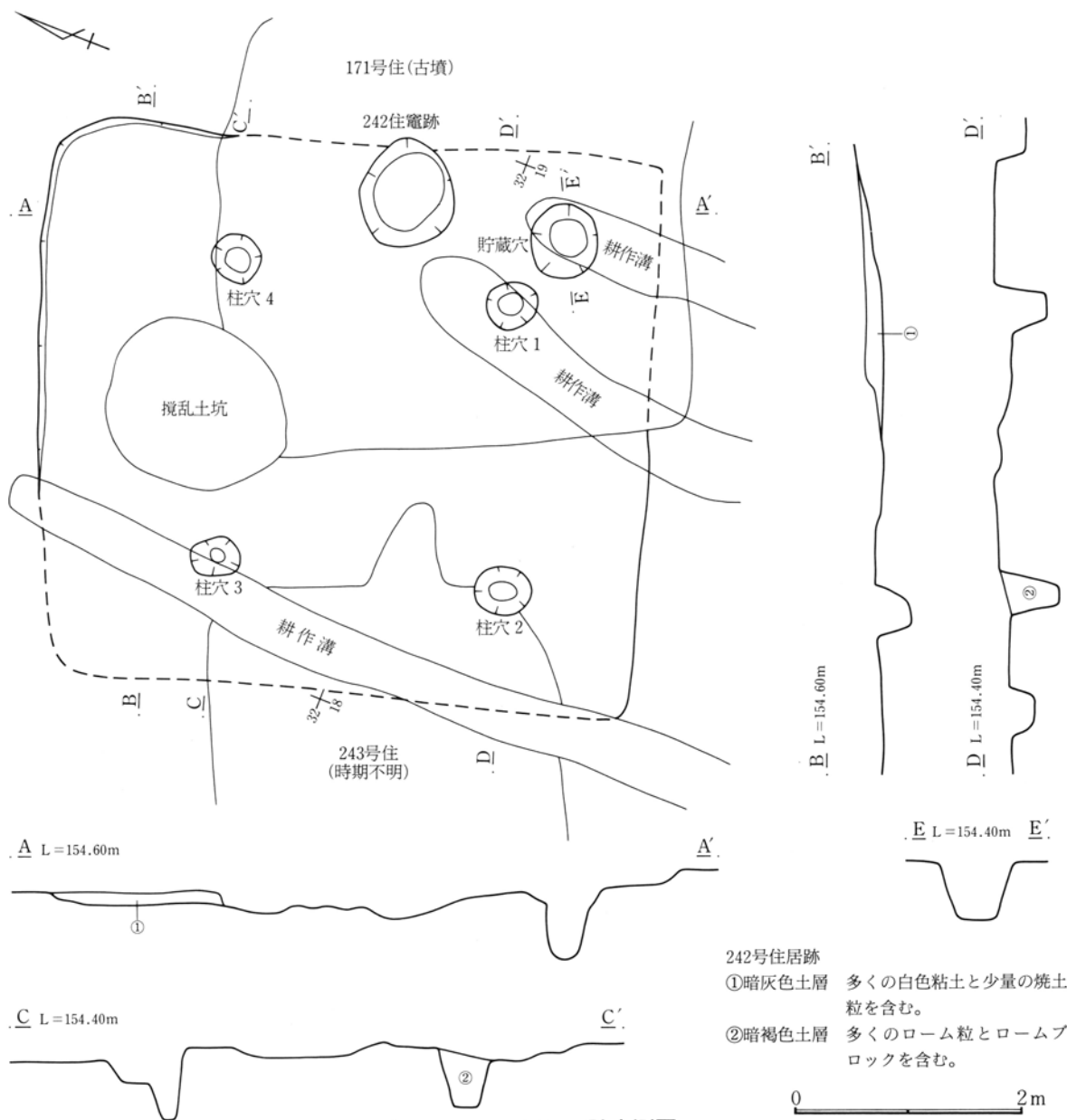
第540図 215号住居跡実測図

242号住居跡 (第541図、図版75)

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、32・33-19グリッドに位置する。

概要 東側部分で古墳時代の171号住居と、西側部分では時代の明らかでない243号住居と重複している。いずれの住居とも残りが悪く重複関係は明瞭でないが、調査の結果、本住居が最も古い時期に属するものと判断した。床面はほとんど残っておらず、西側部分の住居範囲は明確でない。北側で土坑に、また耕作溝により床下部分まで掘り込まれている。竈は明らかでないが、貯蔵穴とも思われる掘り込みが南東コーナー部分に掘られているため、171号住居により深く削り取られている東壁面中央部分に竈が造られていたことが考えられる。柱穴は4本掘られている。遺物は全く出土していない。

規模 東西約4.86m、南北5.20mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で13cmである。貯蔵穴は径66cm深さ55cm、柱穴1は径50cm深さ51cm、柱穴2は径42cm深さ65cm、柱穴3は径44cm深さ49cm、柱穴4は径42cm深さ42cmである。



第541図 242号住居跡実測図



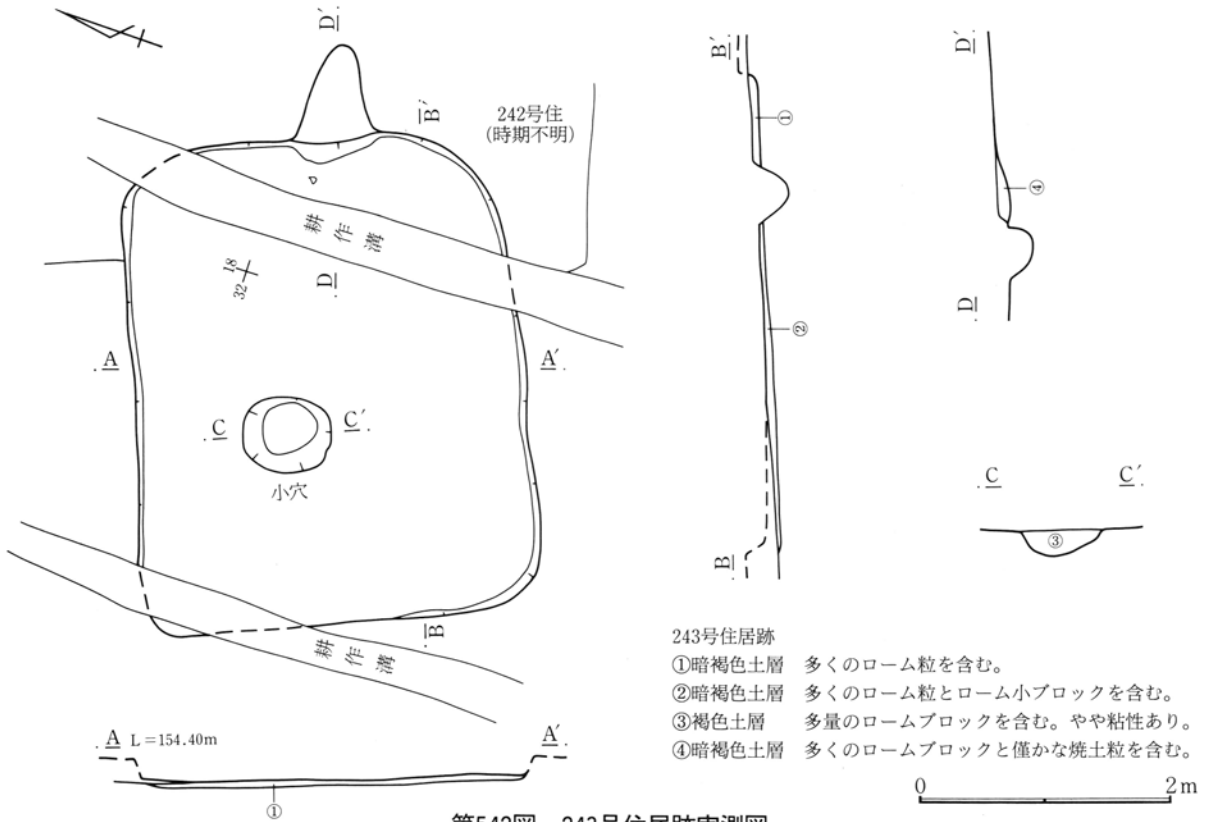
243号住居跡 (第542図、図版75)

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、32-18・19グリッドに位置する。

概要 東側部分で時期の明らかな242号住居と重複しており、本住居が242号住居を掘り込んでいる。2本の耕作溝により床下部分まで掘り込まれている。残りが悪く、床面はほとんど残っていない。竈が東壁面に造られているが、大部分は削られて下部分が残っているだけである。焼土粒の出土もわずかである。柱穴は掘られていない。床面中央部分に小穴が掘られている。

規模 東西約3.82m、南北3.10mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で11cmである。小穴は径69cm深さ35cmである。

遺物 甕や坏の破片が6片出土している。



第542図 243号住居跡実測図

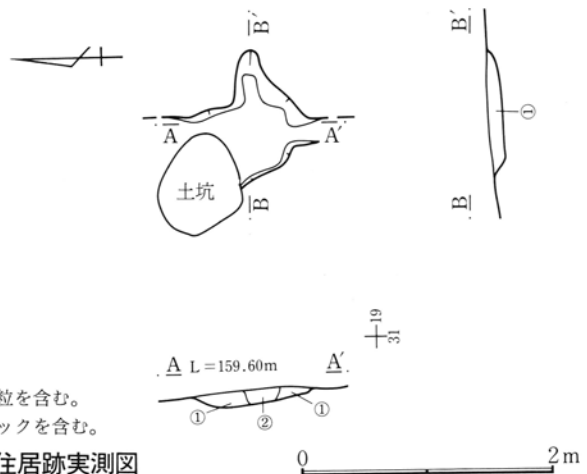
279号住居跡 (第543図、図版75)

位置 本住居跡は第4次調査区にあり、20-32グリッドに位置する。

概要 西側に低くなる傾斜面に位置し、住居の大部分は削られて竈の痕跡がわずかに残っている。竈内から出土の焼土粒もわずかである。左袖部分は土坑により床下部分まで深く掘り込まれている。住居規模不明であり、遺物も全く出土していない。

279号住居跡

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。



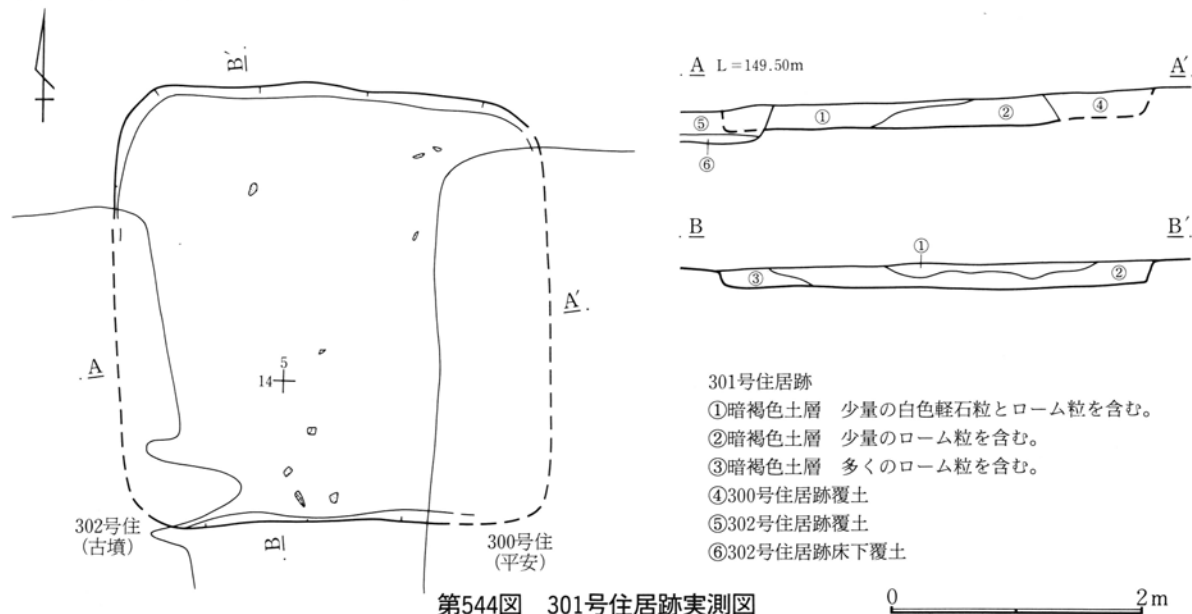
第543図 279号住居跡実測図

301号住居跡 (第544図、図版75)

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、14・15—5・6グリッドに位置する。

概要 西側で古墳時代の302号住居と、また東側で平安時代の300号住居と重複しており、その部分はいずれも床下部分まで深く掘り込まれている。竈や柱穴は造られていない。土器は土師器の甕の破片が1片と須恵器の坏の破片が2片出土しているが、図示できる大きさではなかった。遺物から奈良時代の可能性もあるが、小破片のため時期不明とした。

規模 東西不明、南北3.45mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で21cmである。



第544図 301号住居跡実測図

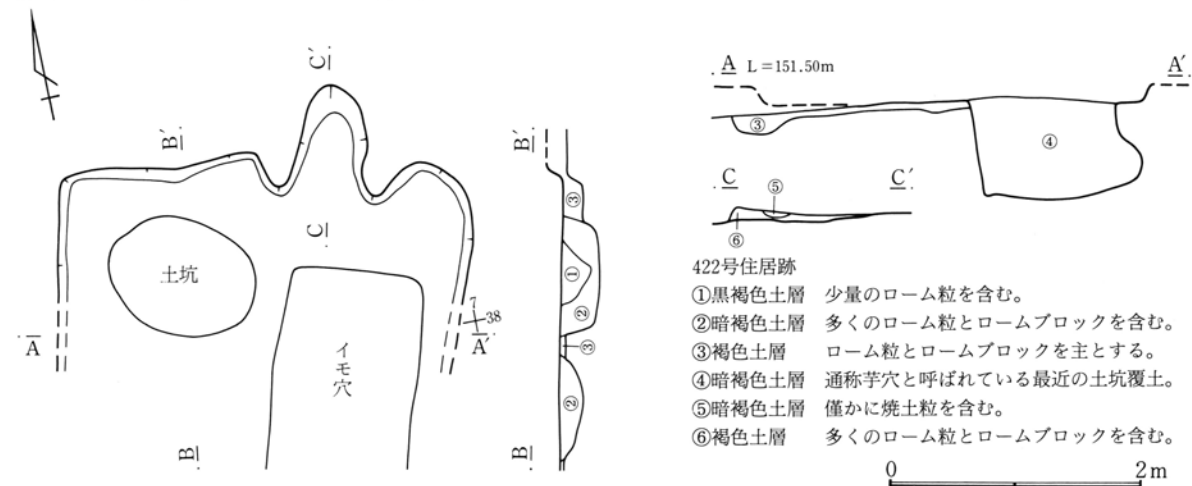
422号住居跡 (第545図)

位置 本住居跡は第5次調査区にあり、38・39—7グリッドに位置する。

概要 竈を含む住居北側が少し残っているが、南側は削られて残っていない。西側に土坑が掘られているが、覆土の状態から本住居に伴わないものと思われる。東側に通称イモ穴と呼ばれている深い土坑が掘られている。

規模 東西3.28m、南北不明である。壁高は残りの良い北東コーナー部分で13cmである。

遺物 土師器の甕と坏の破片が6片出土しているが、図示できる遺物はない。



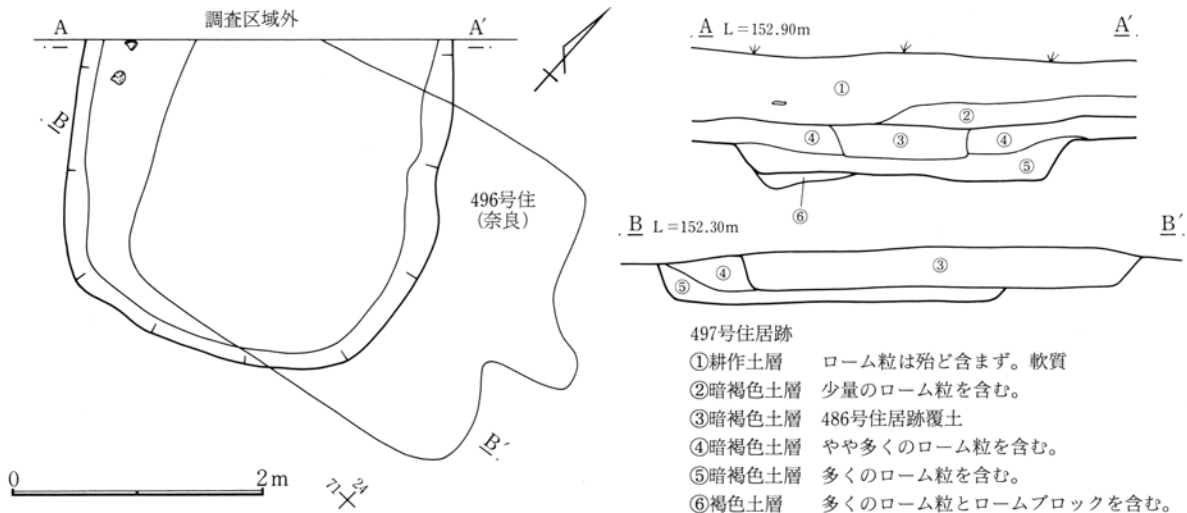
第545図 422号住居跡実測図

497号住居跡 (第546図、図版75)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、72-24グリッドに位置する。

概要 北西部分は調査区域外となっており、住居北西の多くの部分は調査できなかった。中央から東側にかけて奈良時代の496号住居と重複しており、床面に近い覆土と東側の壁面を深く掘り込まれている。このように残りの悪い住居であり、竈や貯蔵穴また柱穴等も確認されていない。さらに遺物もほとんど出土していない。そのため時代の特定期もできなかった。

規模 東西約3.00m、南北不明である。壁高は残りの良い南壁面部分で39cmである。



第546図 497号住居跡実測図

569号住居跡 (第547図、図版75)

位置 本住居跡は第7次調査区にあり、72・73-24・25グリッドに位置する。

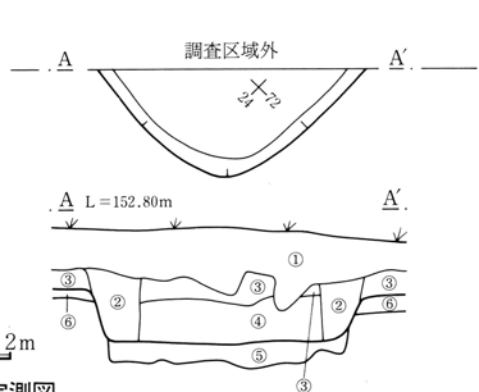
概要 北東部分は調査区域外であり、調査できたのは住居の南東部分と思われる掘り込みだけである。竈や柱穴はなく、遺物も殆ど出土していないために住居としては疑問も多いが、調査時点の判断に従い住居として扱った。

規模 南北東西とも不明である。壁高は残りの良い南壁面部分で28cmである。

569号住居跡

- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。耕作土
- ②暗褐色土層 少量のローム粒とローム小ブロックを含む。
- ③暗褐色土層 少量のローム粒を含む。
- ④暗褐色土層 多くのローム粒と大きなロームブロックを少量含む。
- ⑤褐色土層 ローム粒とロームブロックを主とする。
- ⑥黄褐色土層 地山のロームを主とする。

0 2m



第547図 569号住居跡実測図

597号住居跡 (第548図、図版75)

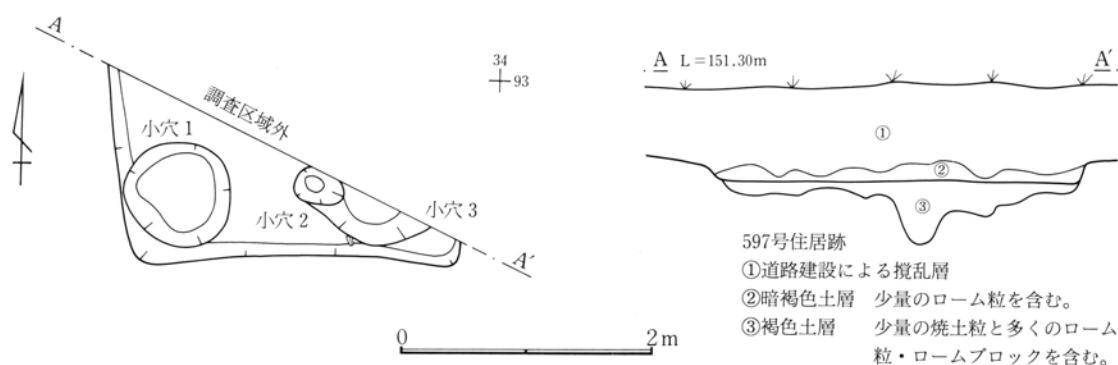
位置 本住居跡は第7次調査区にあり、93-34グリッドに位置する。

概要 北側部分は調査区域外であり、調査できたのは住居の南側部分がわずかであった。竈や柱穴は不明である。床下調査により小穴が3本確認された。

規模 東西2.68m、南北不明である。壁高は残りの良い南壁面部分で22cmである。小穴1は径90cm深さ27cm、小穴2は径28cm深さ51cm、小穴3は径不明深さ42cmである。

遺物 甕と坏の破片が6片出土している。

第6章 その他の遺構と遺物



第548図 597号住居跡実測図

712号住居跡 (第549図、図版76)

位置 本住居跡は第11次調査区にあり、45・46—88・89グリッドに位置する。

概要 北側の低くなる傾斜面に位置し、北側の壁面と床面は残っていない。貯蔵穴が竈の右側に掘られているが、柱穴は掘られていない。

規模 東西3.08m、南北2.60mである。壁高は残りの良い南西壁面コーナー部分で34cmである。

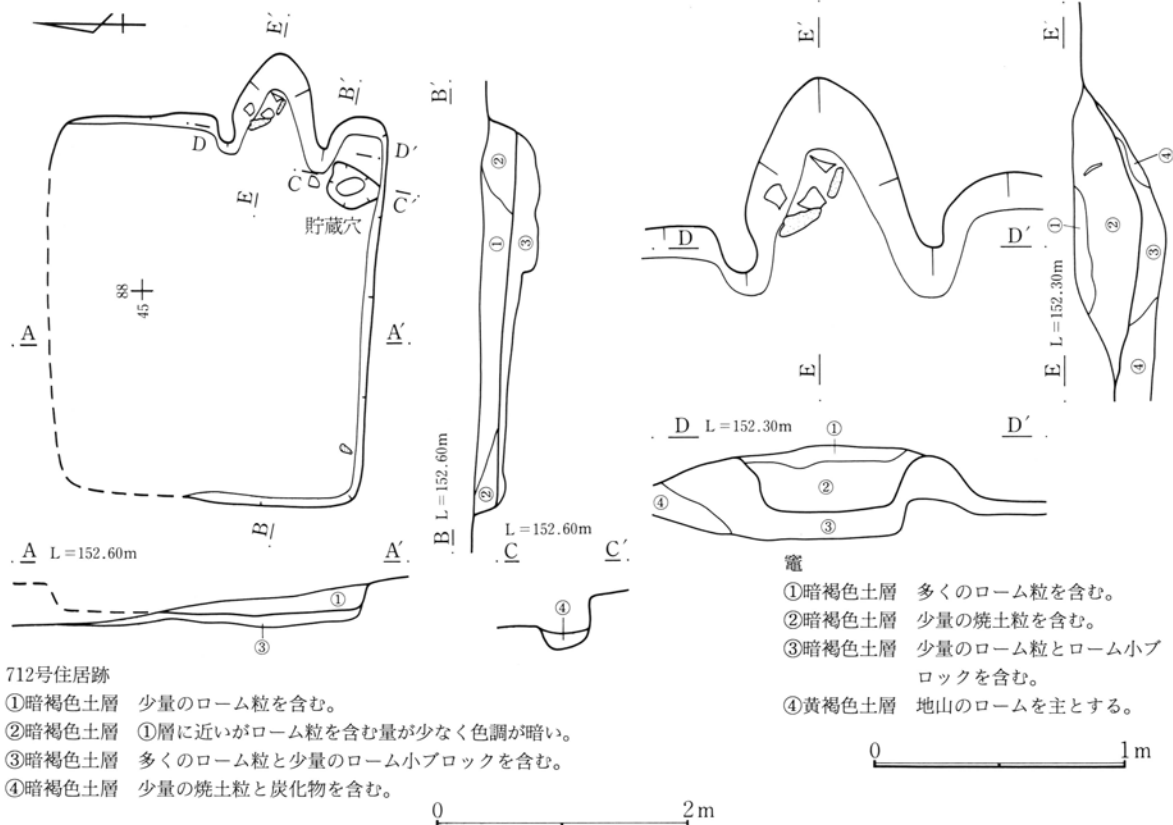
遺物 図示できる遺物はないが、甕や坏の破片が総数99片出土している。

(竈)

位置 東壁面を掘り込んで造られている。燃烧部の多くは壁面を掘り込んで造られている。

構造 竈内から2個のこも編み石に似た石が出土しているが、袖石や天井石は出土していない。燃烧部からの焼土粒の出土はわずかである。

規模 煙道方向88cm、燃烧部幅54cmである。



712号住居跡

- ①暗褐色土層 少量のローム粒を含む。
- ②暗褐色土層 ①層に近いがローム粒を含む量が少なく色調が暗い。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒と少量のローム小ブロックを含む。
- ④暗褐色土層 少量の焼土粒と炭化物を含む。

第549図 712号住居跡・竈実測図

735号住居跡 (第550図、図版76)

位置 本住居跡は第11次調査区にあり、50—103グリッドに位置する。

概要 確認面から耕作面までが浅く、残りが悪い住居である。北西部分は調査区域外である。南東部分に竈が掘られているが、柱穴は掘られていない。遺物は全く出土していない。

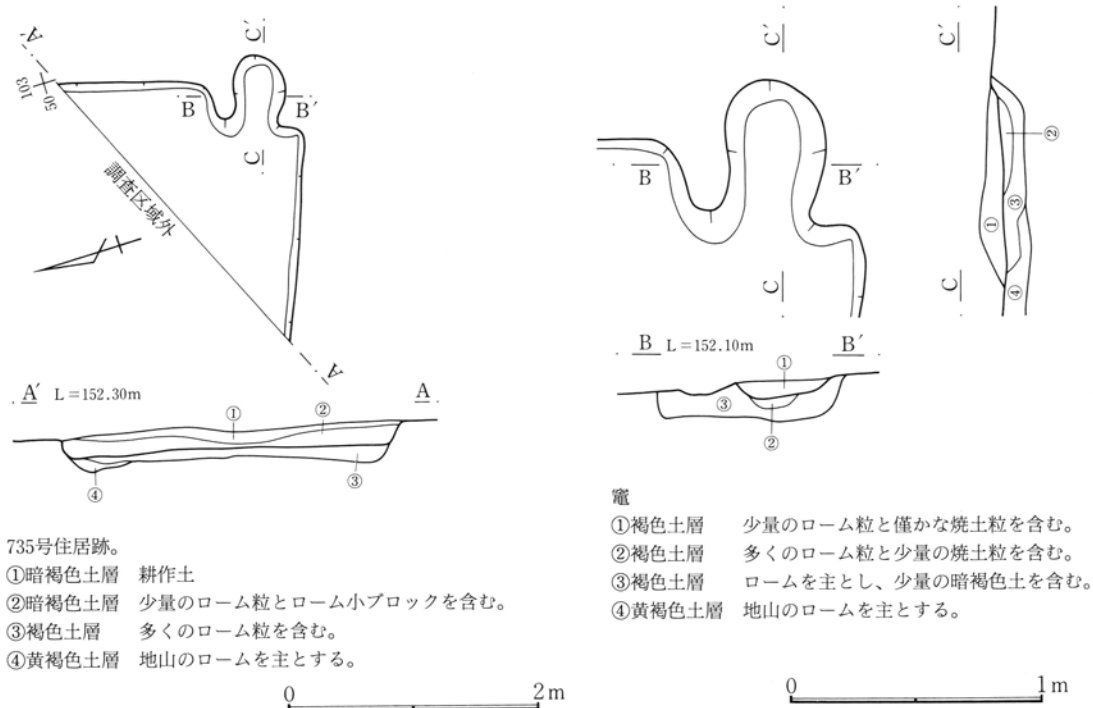
規模 東西南北とも不明である。壁高は残りの良い南壁面部分で10cmである。

(竈)

位置 南東コーナー部分に造られている。燃烧部の多くは壁面を掘り込んで造られている。

概要 全体に残りが悪く、竈内より焼土粒の出土もわずかである。

規模 煙道方向63cm、両袖方向38cmである。



第550図 735号住居跡・竈実測図

740号住居跡 (第551・552図、図版76)

位置 本住居跡は第11次調査区にあり、40—84グリッドに位置する。

概要 東側で67号溝と重複しており、壁面と竈の一部が掘り込まれている。南側で土坑と思われる掘り込みを、また西側で風倒木痕を掘り込んで住居が造られている。

規模 東西2.76m、南北2.85mである。壁高は残りの良い北壁面部分で20cmである。

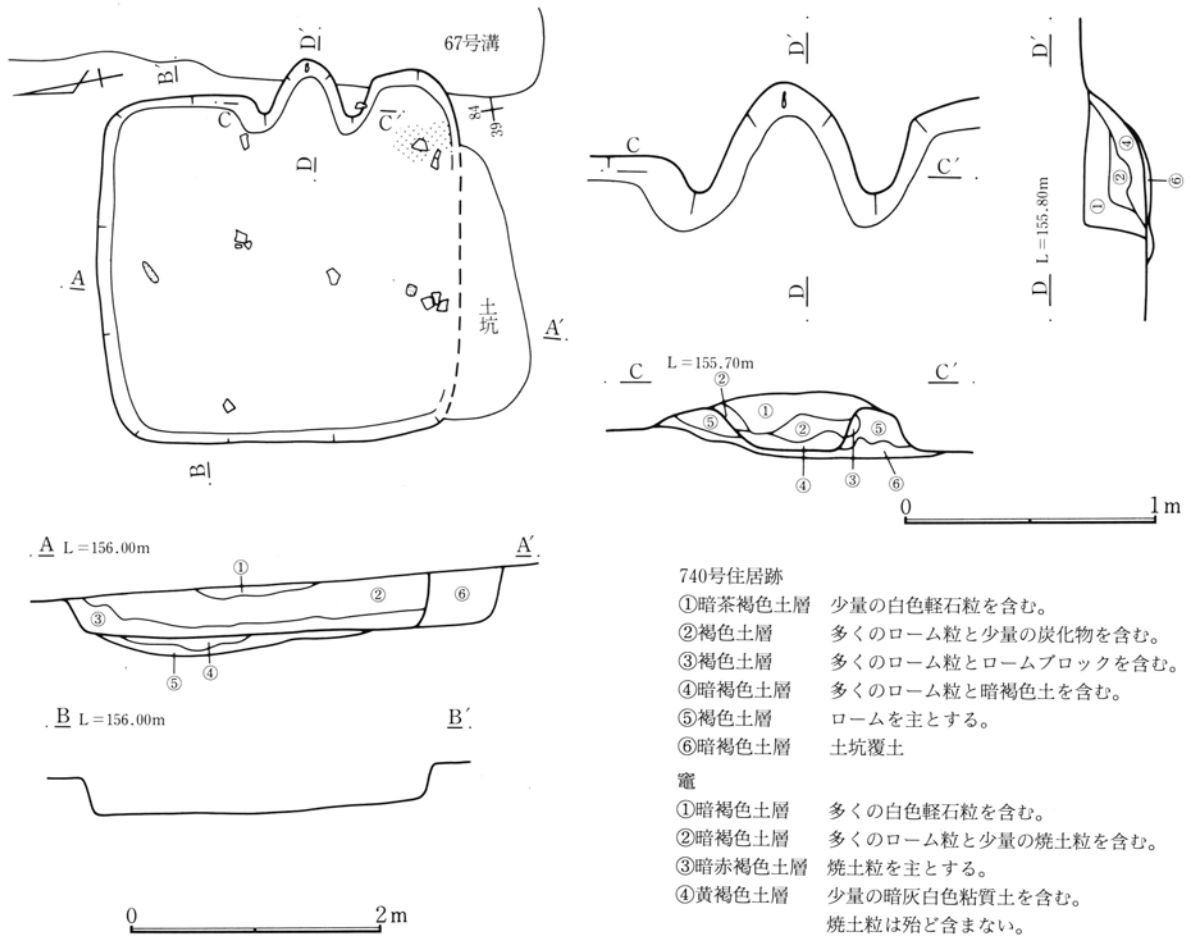
遺物 破片は多く出土している。図示したのは須恵器の甕胴部片である。胴部内外面ナデで、外面に多くの自然絨が付着し、内面に青海波文の痕跡がある。

(竈)

位置 東壁面の南よりを掘り込んで造られている。住居が小さいためか袖部分以外は壁面を掘り込んで造られていた。

構造 袖部分は残っているが、全体に残りが悪く壁面の一部が焼土化した部分が残っているが、燃烧部覆土から焼土粒の出土はほとんど認められなかった。

規模 煙道方向56cm、燃烧部約48cmである。



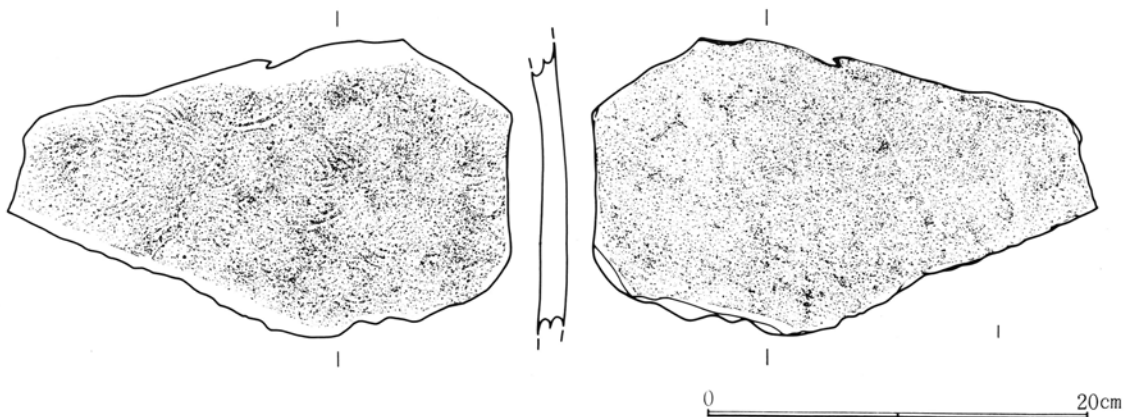
第551図 740号住居跡・竈実測図

740号住居跡

- ①暗茶褐色土層 少量の白色軽石粒を含む。
- ②褐色土層 多くのローム粒と少量の炭化物を含む。
- ③褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ④暗褐色土層 多くのローム粒と暗褐色土を含む。
- ⑤褐色土層 ロームを主とする。
- ⑥暗褐色土層 土坑覆土

竈

- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ③暗赤褐色土層 焼土粒を主とする。
- ④黄褐色土層 少量の暗灰白色粘質土を含む。  
焼土粒は殆ど含まない。
- ⑤茶褐色土層 少量のローム粒と焼土粒を含む。
- ⑥黄褐色土層 地山のロームを主とする。



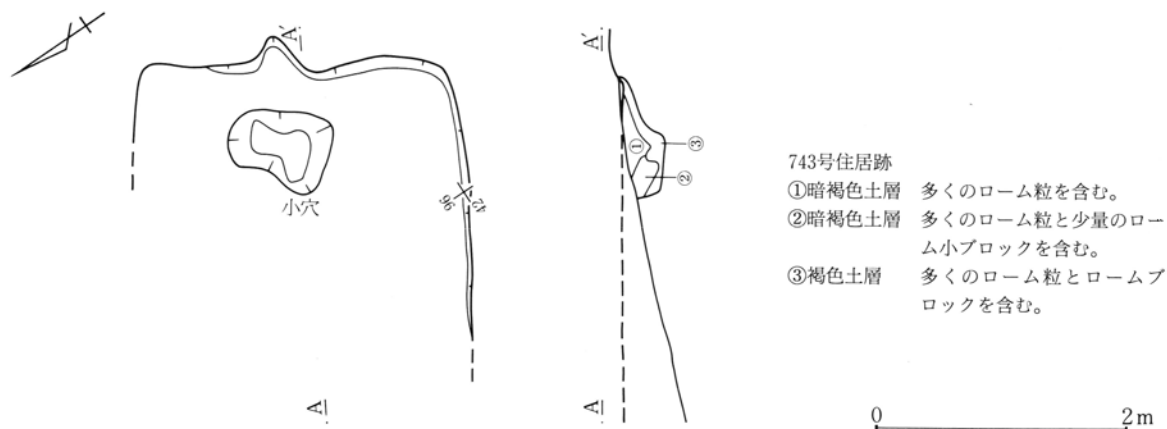
第552図 740号住居跡出土遺物実測図

743号住居跡 (第553図、図版76)

位置 本住居跡は第11次調査区にあり、43-96グリッドに位置する。

概要 北西方向の低くなる傾斜面に位置し、住居の大部分は削られて残っていない。東側の壁面、床部分の一部、竈の下半部分が僅かに残っている。竈手前部分に小穴が掘られているが、貯蔵穴や柱穴は掘られていない。竈も僅かに焼土粒が出土している程度でほとんど残っていない。出土遺物は奈良時代と思われる土師器坏口縁部の小破片が出土しているだけであり、時代の特定はできなかった。

規模 東西南北とも不明である。壁高は残りの良い南東コーナー部分で5cmである。小穴は径81cm×66cm深さ33cmである。



743号住居跡  
 ①暗褐色土層 多くのローム粒を含む。  
 ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量のローム小ブロックを含む。  
 ③褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

第553図 743号住居跡実測図

## 第2節 住居状遺構と遺物

遺構や覆土の状態から住居の可能性が高いが、竈が確認されないことや遺構の残りが悪く住居としての根拠が充分でない遺構が24基確認された。その中で自然地形の変換地形を壁面と誤認した例や、攪乱されている遺構を住居状遺構として取り扱ったものを省いて、住居としての可能性のより高い遺構13基を住居状遺構と呼称してこの第2節で報告する。

### 1号住居状遺構 (第554・555図、図版76・112・121)

位置 第5次調査区にあり、28-7・8グリッドに位置する。

概要 竈や柱穴を持たないが、小さな住居のような方形の掘り込みをもつ。北東部分で2号住居状遺構と重複している。東・西部分を土坑により、東部分を耕作溝により床下部分まで掘り込まれている。

規模 東西2.44m、南北2.46mである。壁高は残りの良い北壁面部分で25cmである。

遺物 覆土中より土師器甕と砥石が出土している。

### 2号住居状遺構 (第554図、図版76)

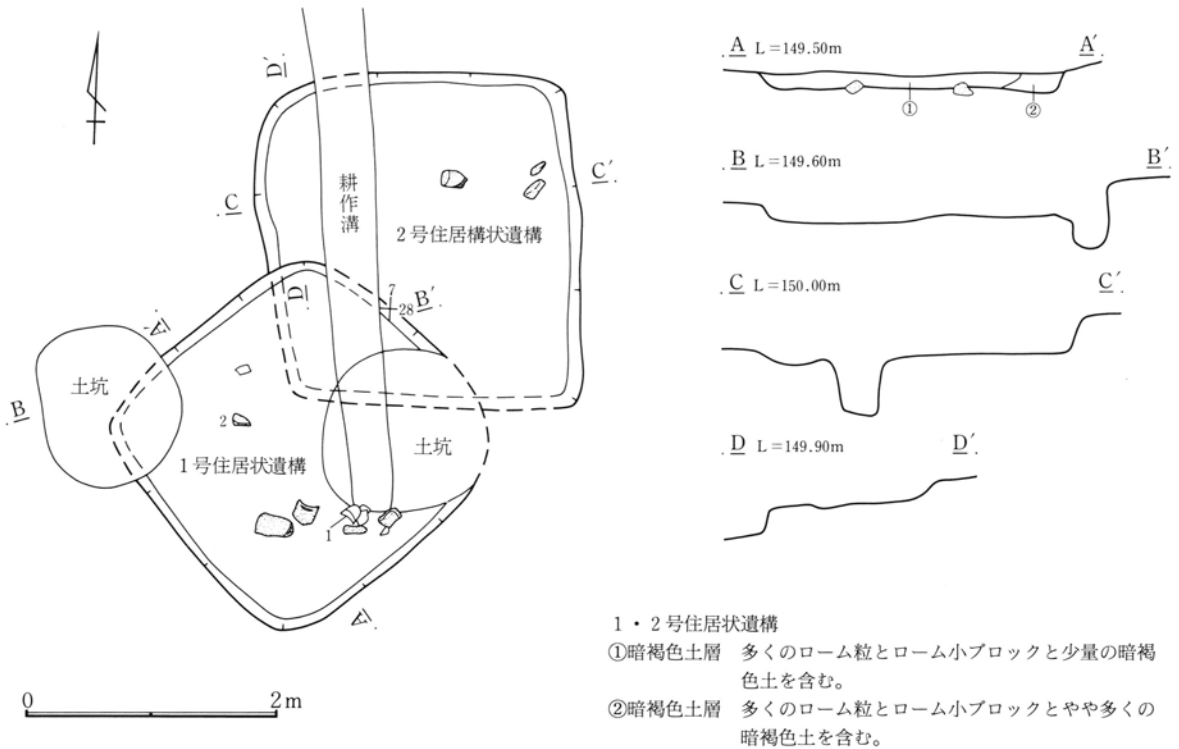
位置 第5次調査区にあり、29-7・8グリッドに位置する。

概要 竈や柱穴をもたないが、住居のような方形の掘り込みをもつため2号住居状遺構とした。南西部分で重複している遺構があり、その遺構もほぼ同様であるため1号住居状遺構とした。西側を耕作溝により床下部分まで掘り込まれていた。

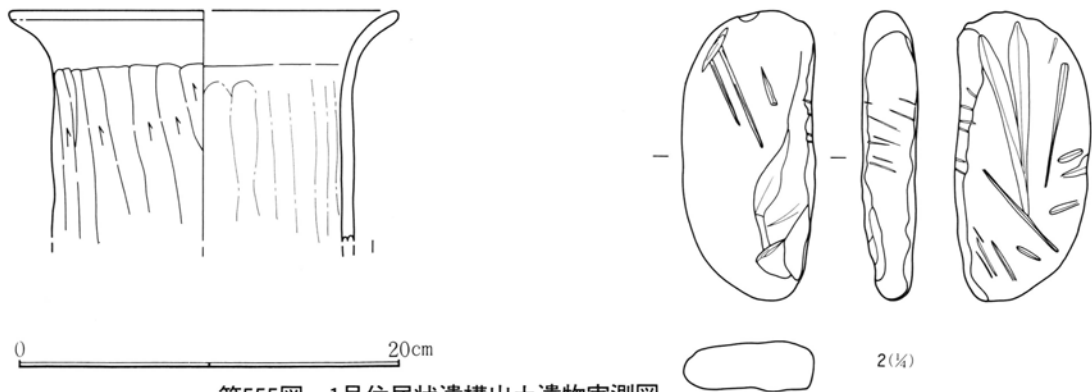
規模 東西2.5m、南北2.68mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で40cmである。

遺物 床面付近より多くの石は出土しているが、土器は全く出土していない。

第6章 その他の遺構と遺物



第554図 1・2号住居状遺構実測図



第555図 1号住居状遺構出土遺物実測図

1号住居状遺構出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
555-1 112	土 節 器 甕	床面+4 口~胴上部 1/3	口(20.5) 高 — 底 —	①粗、1mm前後の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラナデ、砂粒の移動はほとんど認められない。 内面ナデにて器表面密。
555-2 121	石 製 品 砥 石	床面+3	長 15.1 厚 2.4	幅 7.0 重 390.0	砂岩。 表面に多くのV字状の刻みあり。

4号住居状遺構 (第556図、図版76)

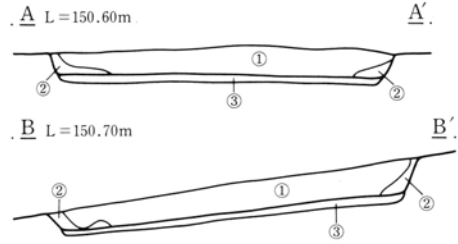
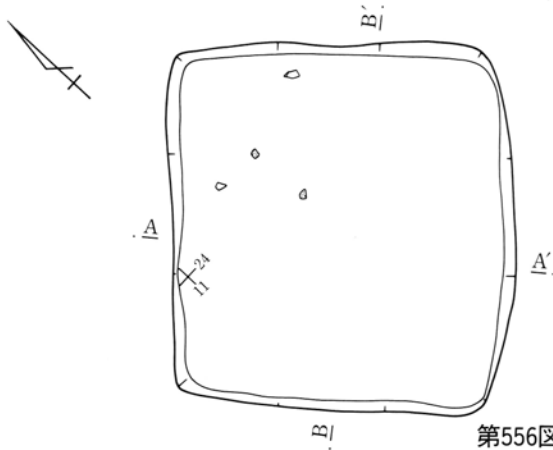
位置 第5次調査区にあり、24・25-12グリッドに位置する。

概要 竈や柱穴を持たない小さな住居のような方形の掘り込みを持ち、ほぼ正方形に近い均整のとれた遺構である。

規模 東西2.88m、南北2.76mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で55cmである。

遺物 覆土上面から少量の石と須恵器の破片が出土しているが、図示できるものはなかった。





4号住居状遺構

- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒と少量のローム粒を含む。
- ②褐色土層 多くのローム粒を含む。
- ③褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

第556図 4号住居状遺構実測図



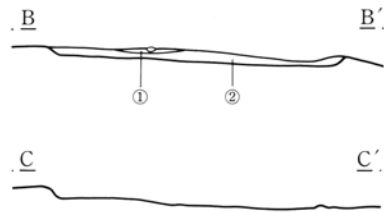
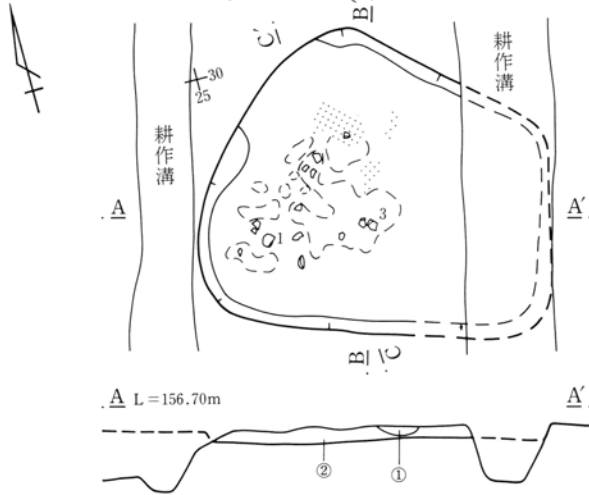
6号住居状遺構 (第557・558図、図版77・112)

位置 第4次調査区にあり、30-26グリッドに位置する。

概要 浅い方形に近い掘り込みがあり、中央部から多くの須恵器の坏や碗が出土している。覆土の中には多くの炭化物が含まれている。竈や柱穴はないが、住居の可能性が高いと考えられるため6号住居状遺構とした。

規模 東西南北とも不明である。

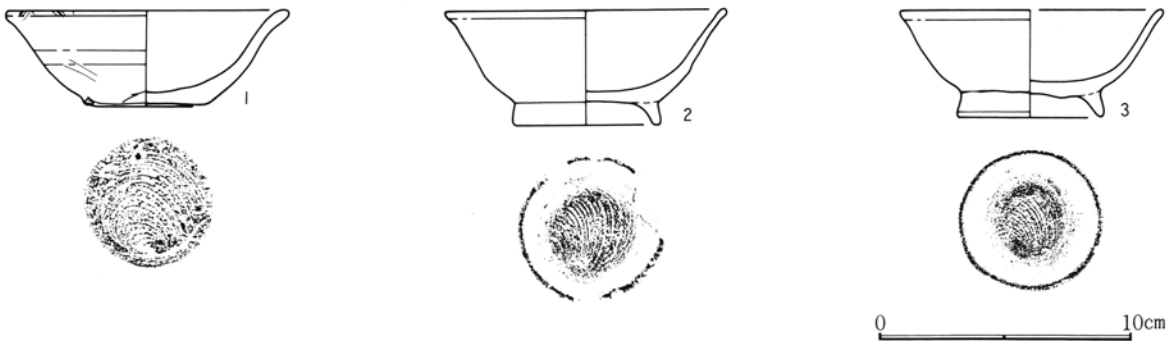
遺物 破片とともに完形に近い須恵器の碗類が多く出土している。



6号住居状遺構

- ①暗褐色土層 砂質であり、多くの白色軽石粒を含む。
- ②黒褐色土層 多くの炭化物とローム粒を含む。

第557図 6号住居状遺構実測図



第558図 6号住居状遺構出土遺物実測図

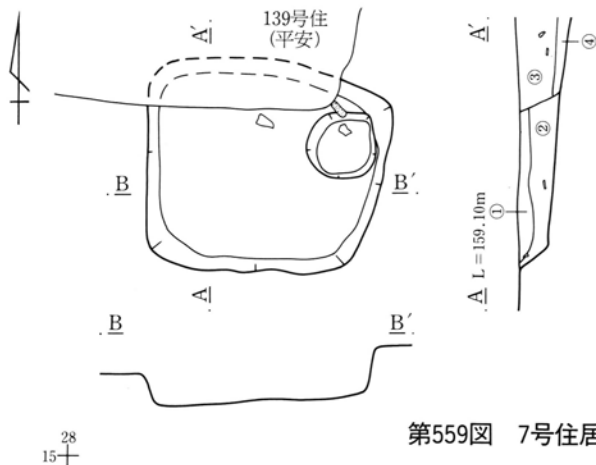
6号住居状遺構出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
558-1 112	須恵器 坏	床面+4 ほぼ完形	口 10.2 高 3.7 底 5.0	①密、少量の片岩粒を含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面右回転糸切痕。 口縁部は肉厚でやや外反する。
558-2 112	須恵器 塊	覆土 ½残存	口 11.1 高 4.5 底 5.7	①密、少量の赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③外面にぶい黄橙色、内面黒褐色	底面糸切痕。 全体に均整のとれた形を呈している。
558-3 112	須恵器 塊	床面+6 ½残存	口(10.3) 高 4.2 底 5.7	①密、2~3mmの砂粒をわずかに 含む。 ②還元焰、軟質 ③灰白色、外面一部黒色	底面糸切痕、高台は高く、いねいに貼り付けてある。 口縁部はわずかに外反している。 全体に均整のとれた形をしている。

7号住居状遺構 (第559図)

位置 第4次調査区にあり、16-29グリッドに位置する。

概要 小さな方形を呈しており、掘り込みは約40cmと深い。北側で平安時代の139号住居と重複しており、139号住居により床下部分まで深く掘り込まれている。北東コーナー部分に貯蔵穴に似た掘り込みがあるが、本遺構に伴うものか確認はできなかった。



規模 東西1.88m、南北約1.44mである。

遺物 覆土中から4個の石が出土しているが、土器の出土はない。

7号住居状遺構

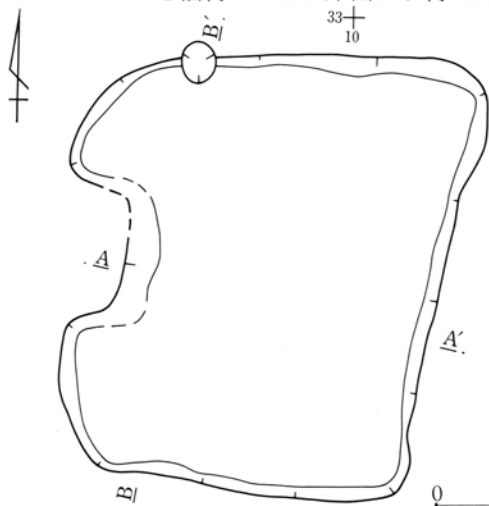
- ①暗褐色土層 少量のローム粒と焼土粒を含む。
- ②暗褐色土層 ①層に近いが、やや①層より多くローム粒を含む。
- ③139号住居跡覆土
- ④139号住居跡床下覆土

第559図 7号住居状遺構実測図

10号住居状遺構 (第560図、図版77)

位置 第5次調査区にあり、33-10・11グリッドに位置する。

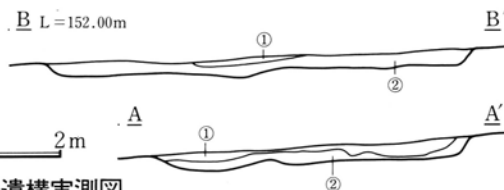
概要 竈や柱穴を持たないが、小さな住居のような方形の掘り込みをもつ遺構である。西壁中央部分に地山のロームを幅約98×60cm床面より約10cmほど高く掘り残している部分が確認された。遺構の多くが削られているため、本来この掘り残された部分はずっと高かったものと思われる。出入口に関係した遺構と考えたい。遺物は全く出土していない。



規模 東西3.14m、南北3.50mである。壁高は残りの良い北西壁面部分で29cmである。

10号住居状遺構

- ①暗褐色土層 少量のローム粒を含む。
- ②褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。



第560図 10号住居状遺構実測図

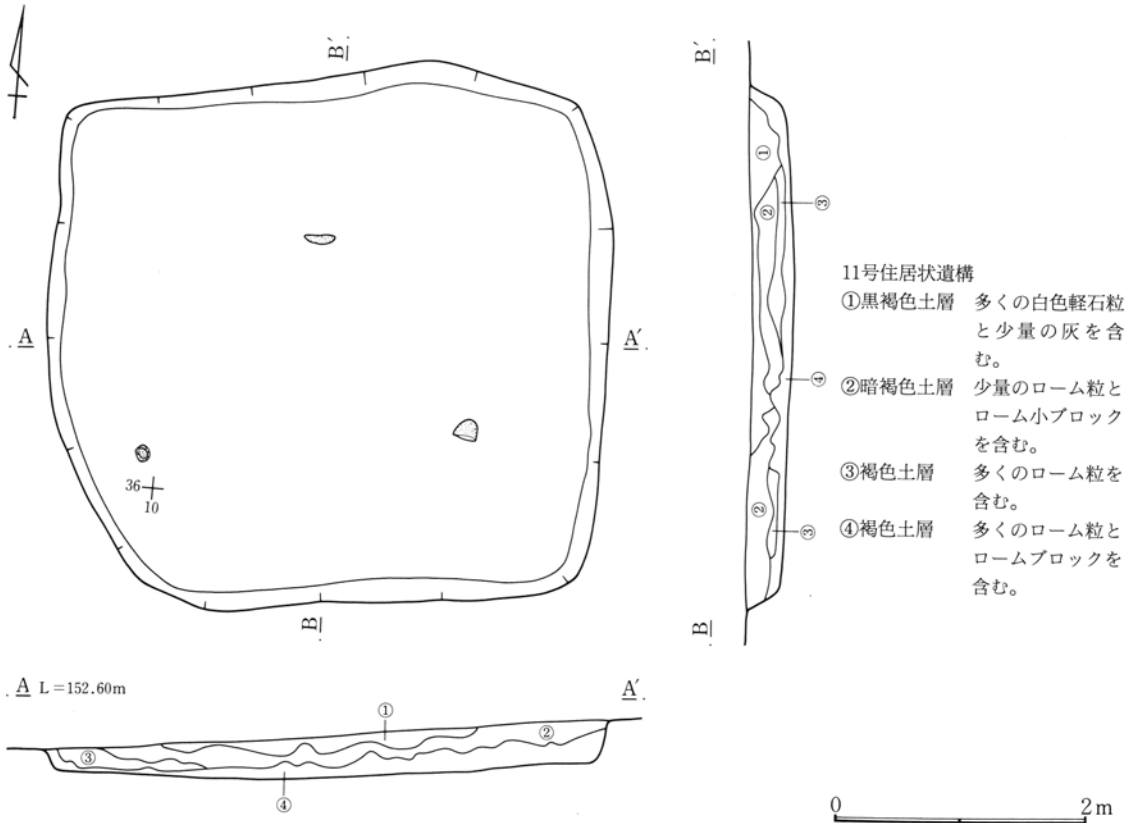
11号住居状遺構 (第561図、図版77)

位置 第5次調査区にあり、37-11グリッドに位置する。

概要 規模や形から見て竈があれば住居として扱ったが、竈が無いため住居状遺構とした。柱穴も掘られていない。

規模 東西3.48m、南北約4.10mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で51cmである。

遺物 覆土中から4個の石が出土しているが、土器の出土はない。

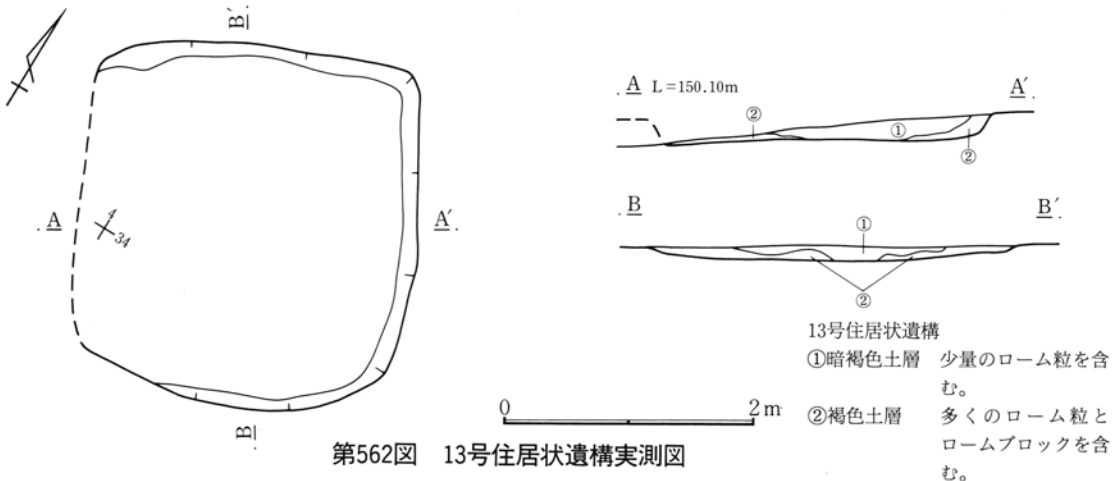


第561図 11号住居状遺構実測図

13号住居状遺構 (第562図、図版77)

位置 第5次調査区にあり、35-5グリッドに位置する。

概要 西壁面部分の床面と壁面は残っていない。竈や柱穴は掘られていない。



第562図 13号住居状遺構実測図

第6章 その他の遺構と遺物

規模 東西2.70m、南北2.88mである。壁高は残りの良い東壁面部分で25cmである。

遺物 覆土中から土師器坏の破片2片、甕の破片13片、須恵器胴部破片1片の計16片が出土しているが、図示できるものはなかった。土器は奈良時代前半に属するものが多い。

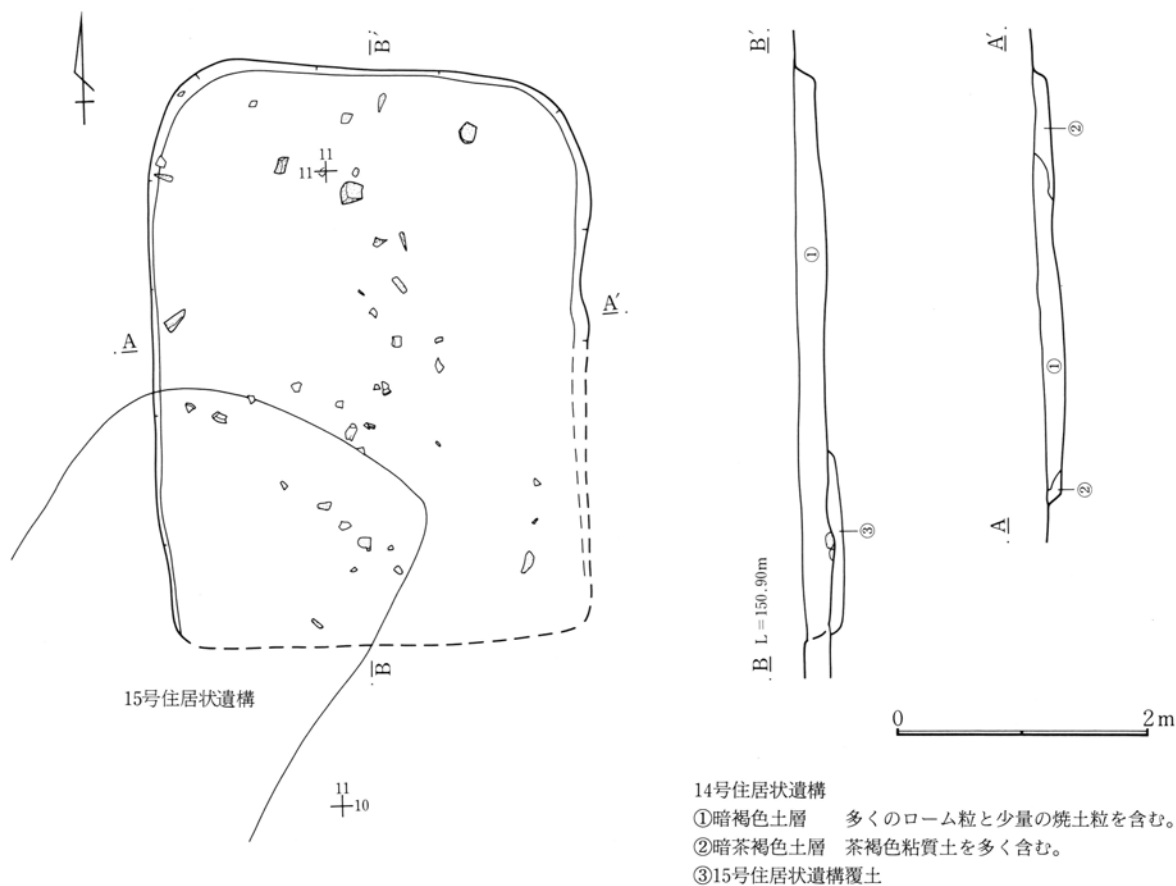
14号住居状遺構 (第563図)

位置 第5次調査区にあり、11-11・12グリッドに位置する。

概要 竈や柱穴は掘られていない。南西コーナー部分で15号住居状遺構と重複しており、本遺構が15号住居状遺構の覆土を掘り込んでいる。東側部分に317・267号住居の竈があり、床面部分で重複していると思われるが、残りが悪く重複関係は不明である。

規模 東西3.50m、南北は不明である。壁高は残りの良い北東コーナー部分で26cmである。

遺物 覆土中から土師器の坏や甕、須恵器の甕の破片及び石が出土しているが、図示できるものはなかった。



第563図 14号住居状遺構実測図

15号住居状遺構 (第564図、図版114)

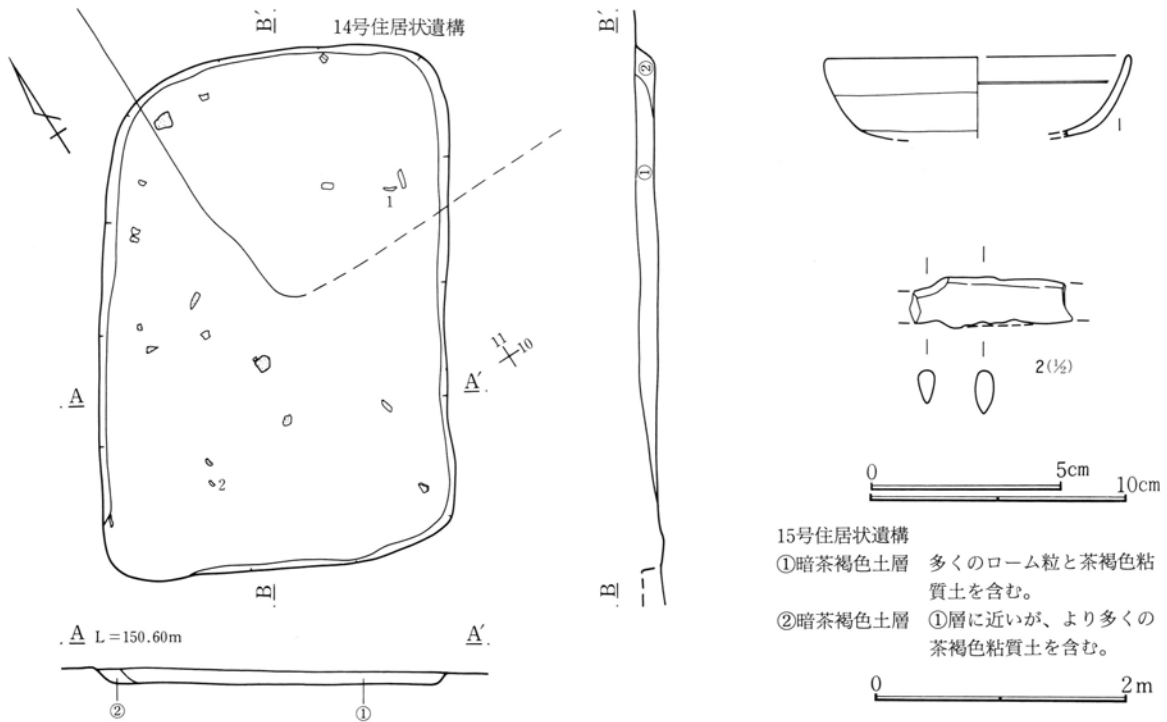
位置 第5次調査区にあり、11-11グリッドに位置する。

概要 竈や柱穴は掘られていない。北東コーナー部分で14号住居状遺構と重複しており、15号住居状遺構により覆土を掘り込まれている。

規模 東西2.74m、南北4.10mである。壁高は残りの良い西壁面部分で28cmである。

遺物 覆土中から坏や甕の破片及び多くの石が出土しているが、図示できたのは土師器の坏と刀子の2点である。

第2節 住居状遺構と遺物



第564図 15号住居状遺構・出土遺物実測図

15号住居状遺構出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
564-1	土師器 坏	床面+10 破片	口 (12.0) 高 — 底 —	①密、1mm前後の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。 口縁部横ナデ。
564-2 114	鉄製品 刀子	覆土	長 (4.3) 厚 0.4~0.5	幅 3.3 重 5.4	刀子の茎と刀身部分である。 残りが悪いが、棟区と刃区が確認できる。

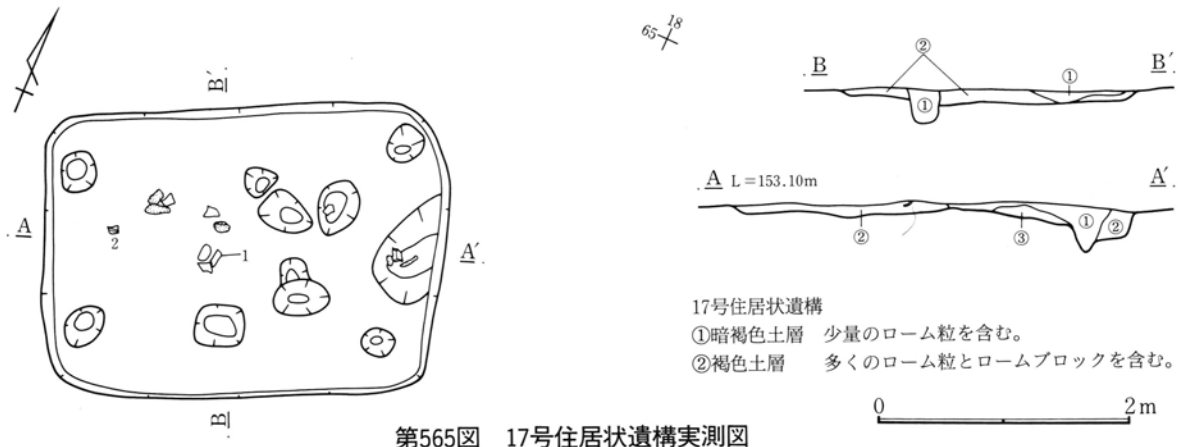
17号住居状遺構 (第565・566図、図版77)

位置 第7次調査区にあり、65-18グリッドに位置する。

概要 住居の床下部分に似た遺構である。小穴は掘られているが、竈や明瞭な柱穴は掘られていない。

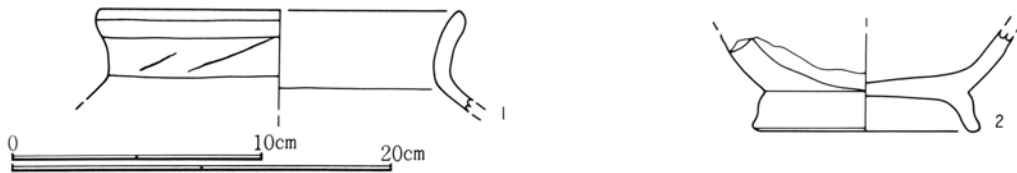
規模 東西3.20m、南北2.30mである。壁高は残りの良い南壁面部分で11cmである。

遺物 覆土中から土師器の壺と甕の破片や須恵器の甕の破片が出土しているが、図示できたのは少ない。



第565図 17号住居状遺構実測図

第6章 その他の遺構と遺物



第566図 17号住居状遺構出土遺物実測図

17号住居状遺構出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
566-1	土師器 甕	覆土 小破片	口(19.0) 高— 底—	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③明褐色	口縁部横ナデ。
566-2	須恵器 高台付坏	覆土 小破片(底部)	口— 高— 底(8.4)	①粗、2~4mmの片岩粒を少量含む。②還元焰、硬質 ③灰色	底面中央に糸切痕が残る。 高台貼り付け後でいねいに整形。

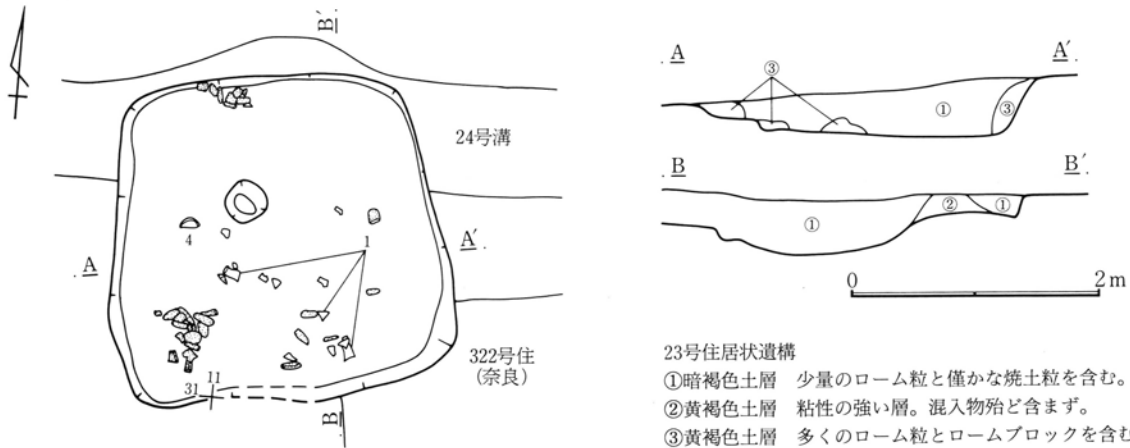
23号住居状遺構 (第567~568図、図版77)

位置 第5次調査区にあり、32-11・12グリッドに位置する。

概要 北側で24号溝と南側で奈良時代の322号住居と重複している。調査時において250号住居として扱ったが、明瞭な床面が残っていないこと、出土遺物が重複している24号溝覆土に属すると考えられること、住居規模が小さすぎること、竈がないこと等の理由から住居と認定するには無理がある。そこで23号住居状遺構と名称を変更して報告する。

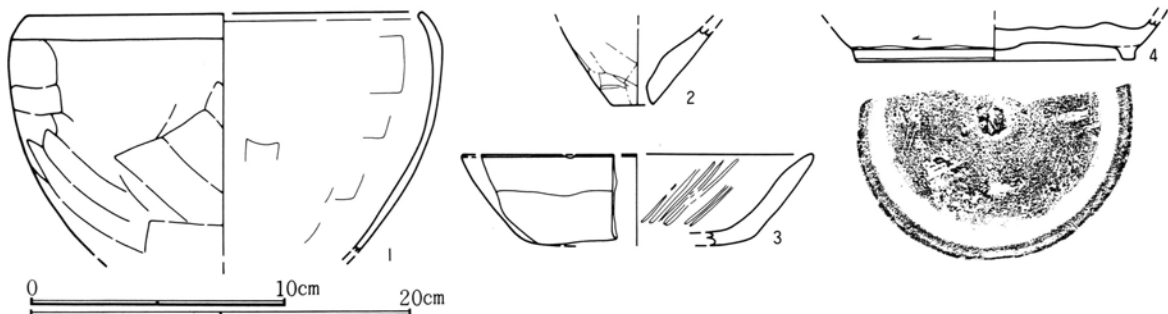
規模 東西2.61m、南北2.56mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で14cmである。

遺物 覆土中から土師器の坏・鉢・甕の破片や須恵器の坏や甕の破片が出土しているが、図示できたのは少ない。



23号住居状遺構  
①暗褐色土層 少量のローム粒と僅かな焼土粒を含む。  
②黄褐色土層 粘性の強い層。混入物殆ど含まず。  
③黄褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

第567図 23号住居状遺構実測図



第568図 23号住居状遺構出土遺物実測図

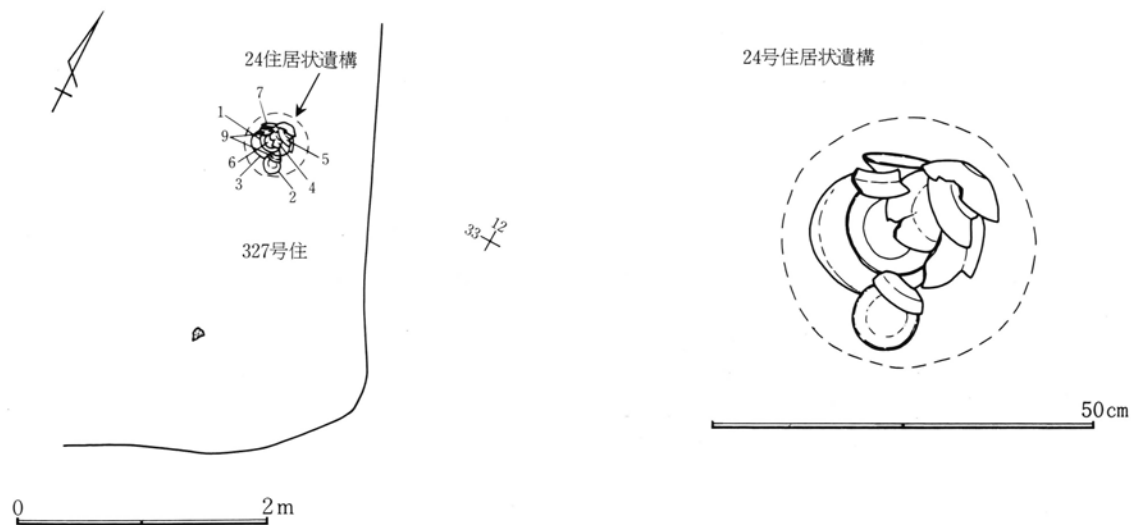
23号住居状遺構出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
568-1	土師器 鉢	床面-2 口縁部 $\frac{1}{8}$ 胴部 $\frac{1}{4}$	口(24.0) 高— 底—	①密、1~2mmの砂粒と赤色粒を含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へら削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。 短い口縁部が内傾している。
568-2	土師器 甗?	覆土 底部のみ	口— 高— 底(2.3)	①やや粗、1~3mmの赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	鉢形を呈する。甗の底部分と思われる。 へら削りではなくナデで整形している。
568-3	土師器 坏	覆土 $\frac{1}{8}$ 残存	口(14.0) 高— 底—	①密、1mm以下の赤色粒をわずかに含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部下半へら削り、へらの単位不明瞭。 内面に多くの暗文あり。
568-4	須恵器 高台付坏	床面+13 底部のみ $\frac{1}{2}$	口— 高— 底11.0	①密、少量の片岩粒を含む。②還元焰、硬質 ③灰色	高台貼り付け後高台周辺と底面ナデ。 へら削りによる再調整はなし。胴下端へら削り。 外側底面中央にへら削り時の凸部を持つ。

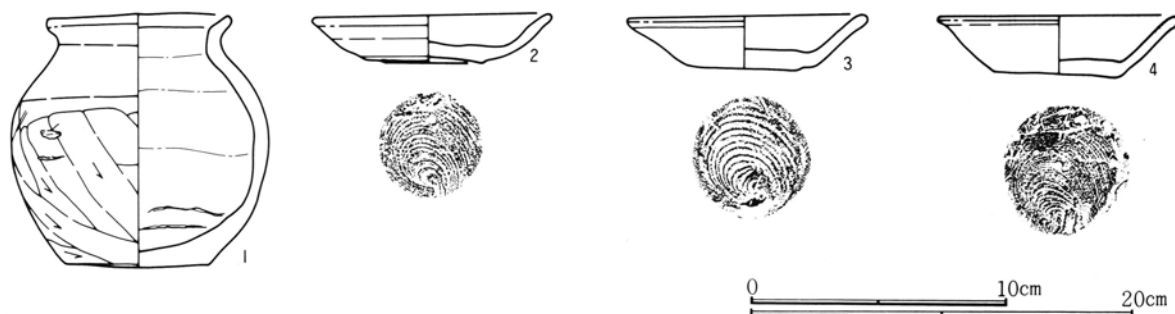
24号住居状遺構 (第569~571図、図版77・112)

位置 第5次調査区にあり、33-12グリッドに位置する。

概要 古墳時代の327号住居の覆土中から、ほぼ完形の土師質土器の皿8点、埴1点、小型壺1点の計10点が重なり合うような状態でまとまって出土している。おそらく小穴や貯蔵穴に似た遺構であるものと思われる。この遺構は住居のような遺構の一部なのか、あるいは小穴が遺構のすべてであるのか確認できなかった。ここでは住居状遺構として扱い報告する。

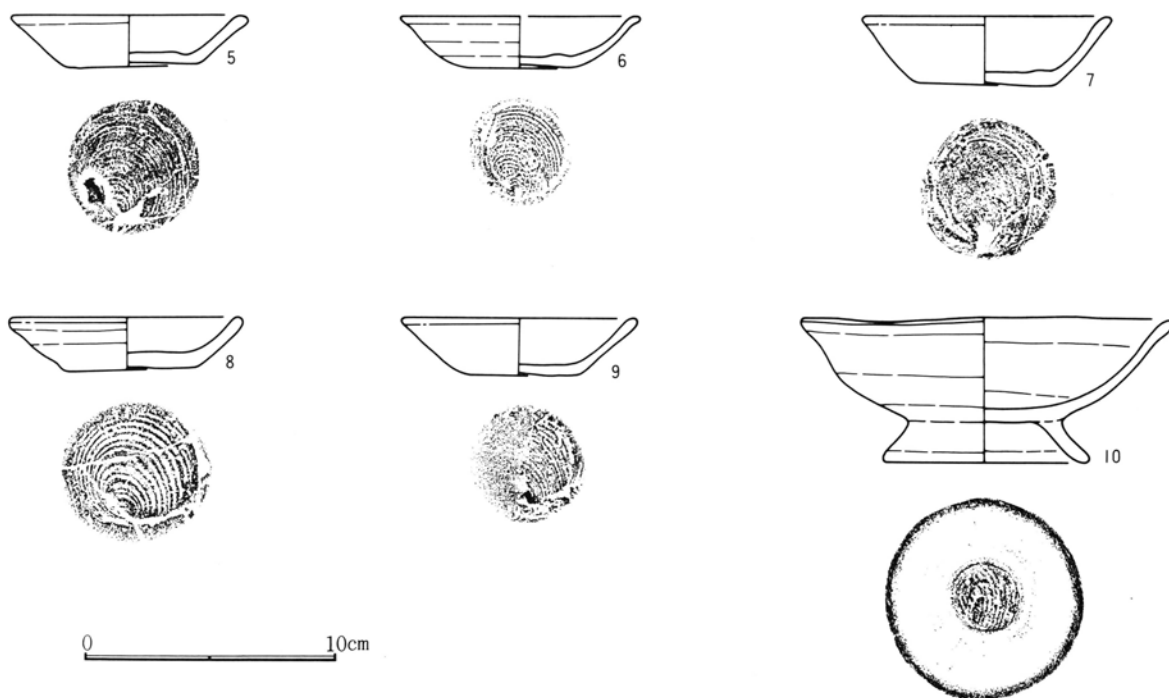


第569図 24号住居状遺構位置図・遺物出土状況図



第570図 24号住居状遺構出土遺物実測図(1)

第6章 その他の遺構と遺物



第571図 24号住居状遺構出土遺物実測図(2)

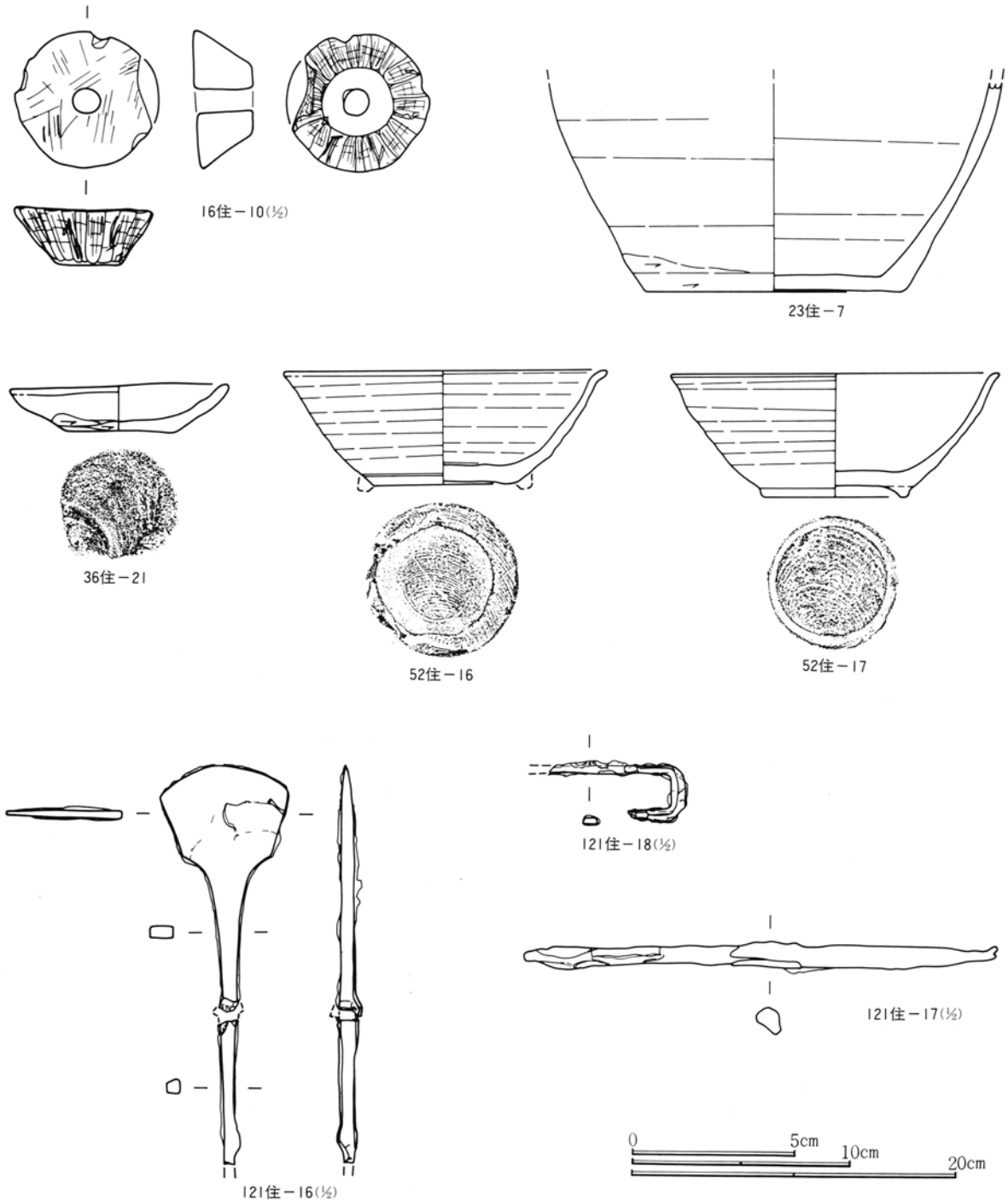
24号住居状遺構出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
570-1 112	土師質 壺	床面+14 完形	口 9.4 高 13.3 底 7.5	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ナデ。胴部外面ヘラ削り、砂粒の移動ほとんどなく器表面密。器肉が厚い。 黒斑全く認められず。
570-2 112	土師質 皿	床面+24 完形	口 9.2 高 1.8 底 3.8	①密、2~4mmの片岩粒をわずかに含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面右回転糸切痕。 全体に器肉が厚い。 黒斑なし。
570-3 112	土師質 皿	床面+13 ほぼ完形	口 9.4 高 2.2 底 4.8	①密、1mm以下の砂粒を含む。 ②酸化焰、軟質 ③橙色、一部黒色	底面右回転糸切痕。 全体に器肉が厚い。
570-4 112	土師質 皿	床面+24 ほぼ完形	口 9.4 高 2.2 底 4.9	①密、1mm以下の砂粒を含む。 ②酸化焰、軟質 ③橙色	底面右回転糸切痕。口縁部がやや外反する。 底部の器肉が厚い。 黒斑全く認められず。
571-5 112	土師質 皿	床面+29 口縁部一部欠 他完形	口 9.2 高 2.0 底 5.2	①密、1mm以下の砂粒を含む。 ②酸化焰、軟質 ③橙色	底面右回転糸切痕。底部の器肉が薄く中央部がわずかに持ち上がっている。 黒斑全く認められず。
571-6 112	土師質 皿	床面+25 3/4残存	口(9.2) 高 2.0 底 2.0	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面糸切痕。 口縁端部はやや肉厚となり丸く仕上げている。
571-7 112	土師質 皿	床面+22 口縁部3/4 底部完形	口 9.8 高 2.6 底 5.2	①密、1mm以下の砂粒を含む。 ②酸化焰、軟質 ③橙色	底面右回転糸切痕。 口縁部の器肉がやや厚い。 黒斑全く認められず。
571-8 112	土師質 皿	覆土 口縁部1/2 底部完形	口 9.1 高 2.0 底 5.1	①密、1mm以下の砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面右回転糸切痕。 底部中央がやや持ち上がっている。
571-9 112	土師質 皿	床面+28 1/2残存	口 9.2 高 2.2 底 4.6	①密、1mm以下の砂粒を含む。 ②酸化焰、軟質 ③橙色	底面右回転糸切痕。 底部中央がやや持ち上がっている。
571-10 112	土師質 塊	覆土 ほぼ完形	口 14.4 高 5.6 底 8.1	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面にわずかに糸切痕。 高台は高く外側に開く。 黒斑全く認められず。



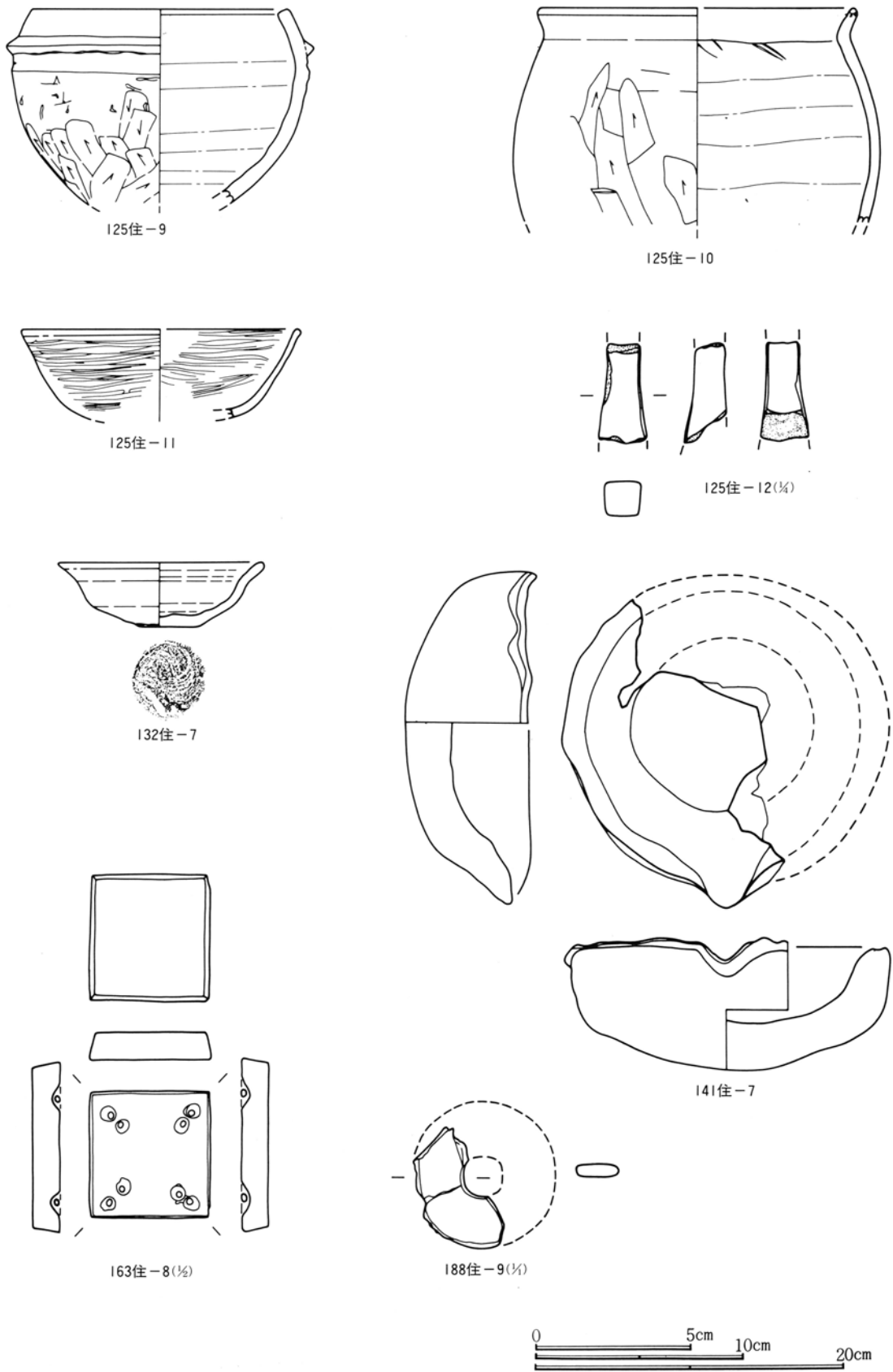
### 第3節 報告済住居の記載漏れ遺物

膨大な資料の中でこれまで、住居編として6冊の報告書を刊行してきた。その中で整理段階で所在不明であり報告できなかった遺物があった。「矢田遺跡Ⅲ」において「矢田遺跡Ⅰ」と「矢田遺跡Ⅱ」での記載漏れの鉄器2点を報告した。今回その後明らかになった遺物を住居編最後となる「矢田遺跡Ⅶ」の中でまとめて報告する。(第572～574、図版112・114・120・121)



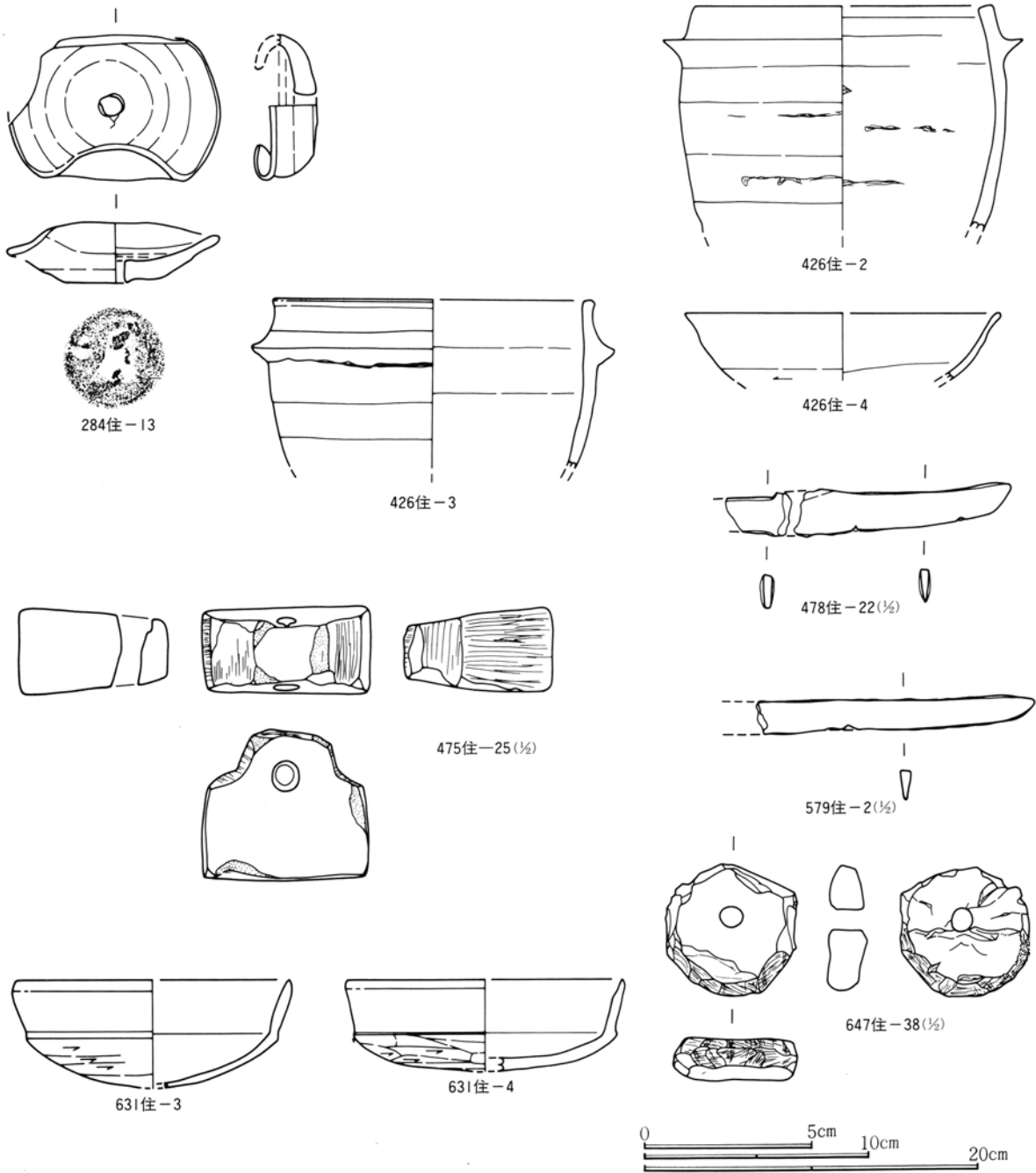
第572図 報告済住居の記載漏れ遺物実測図(1)

第6章 その他の遺構と遺物



第573図 報告済住居の記載漏れ遺物実測図(2)

第3節 報告済住居の記載漏れ遺物



第574図 報告済住居の記載漏れ遺物実測図(3)

報告済住居の記載遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考	報告書
572-16住-10 120	石製品 紡錘車	床面+11 完形	径4.2/2.2 厚 1.9	孔径 0.8 重 40.5 蛇紋岩。	広面と狭面は磨かれ光沢を持つ。側面は鉄製工具により細長く削られている。	II
572-23住-7 112	須恵器 甕	床面-10 胴下半部% 底部完形	口 — 高 — 底 15.6	①密、1mm以下の砂粒わずかし か含まず。②還元焰、軟質 ③灰色	底面中央ナデ。周辺部回転ヘラ削り。 胴部下端回転ヘラ削り。	II
572-36住-21 112	土師質 皿	床面+3 ほぼ完形 (口縁一部欠)	口 9.9 高 2.1 底 4.9	①密、1mm以下の砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部下半ヘラ削り。 全体に器肉が厚い。 中世代の皿の混入品か。	I

第6章 その他の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考	報告書
572-52住-16 112	須恵器 高台付埴	床面直上 高台部欠損 他ほぼ完形	口 14.6 高 5.2 底 6.2	①密、2~3mmの片岩粒を少量含む。②還元焰、硬質 ③灰色	底面右回転糸切痕。 高台はすべてはずれている。 体部~口縁部に多くのロクロ目あり。	III
572-52住-17 112	須恵器 高台付埴	床面+7 口~底 $\frac{2}{3}$ 高台部欠損	口 14.8 高 — 底 —	①密、1~2mmの片岩粒を少量含む。②還元焰、硬質 ③灰オリーブ色	底面右回転糸切痕。 高台の大部分は欠損しているが、一部分かろうじて残っている。	III
572-121住-16 114	鉄製品 鉄 鏃	床面直上	長(12.3) 厚 0.4	幅 0.4~4.1 重 24.8	鉄鏃の茎部、関部、頸部、鏃身部である。 鏃身の刃部は鋭利である。	I
572-121住-18	鉄製品 不明	掘り方覆土	長(4.4) 厚 0.6	幅 0.4~1.8 重 3.1	名称及び用途不明。断面形は長方形である。 錆化が著しい。	I
572-121住-17 114	鉄製品 不明	掘り方覆土	長(14.6) 厚 0.7	幅 0.8 重 20.0	名称及び用途不明。細長く断面形が丸い鉄製品である。錆化が著しい。	I
573-125住-9 112	土師器 羽 釜	床面直上 口縁部 $\frac{2}{3}$ 胴部 $\frac{1}{3}$	口 16.8 鏝径20.0 底 —	①密、1mm前後の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③内面にぶい橙色、外面黒褐色	胴部外面下半へら削り、上半ナデ。 口唇部は平らで内傾している。 鏝はていねいに貼り付けてある。	II
573-125住-10	土師器 土 釜	床面+13 $\frac{1}{2}$ 残存	口(20.4) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②還元焰、軟質 ③浅黄褐色	胴部ナデ後一部へら削り。 内面ナデ。 内面口縁部にへらの圧痕。	II
573-125住-11 112	土師器 坏	覆土 口縁部 $\frac{1}{3}$	口 13.3 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を少量含む。②還元焰、硬質 ③表面黒色。断面灰色	内外面密な横方向の磨き、その後吸炭により黒色。吸炭は断面全体に及ぶ。	II
573-125住-12 121	石製品 砥 石	床面+6	長(6.4) 厚 2.2	幅 3.1 重 57.5	砥石の中央部に近い部分と思われる破片である。4側面を砥石として使用。	II
573-132住-7 112	土師質 皿	竈内 完形	口 10.0 高 3.1 底 3.0	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面右回転糸切痕。 口縁部がゆるやかに外反する。	II
573-141住-7 112	土師器 とりべ	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口(15.8) 高 — 底 —	①粗、1~2mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③底面橙色、内面暗青灰色	ナデにより整形されている。断面内側~内面は暗青灰色で部分的に溶けてガラス状を呈する。	I
573-163住-8 120	石製品 巡 方	床面直上 完形	長 2.0 厚 0.9	幅 2.0 重 39.8	完形品。4箇所かがり孔を持つ。かがり孔を持つ面以外磨かれて光沢を持つ。	II
573-188住-9	鉄製品 古 銭	覆土	径(2.2) 厚 0.2	重 1.1	古銭の破片と思われるが、残りが悪く文字も残っていない。	I
574-284住-13 112	須恵器 耳 皿	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口(9.5) 高 2.7 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②還元焰、軟質 ③灰白色	底面ナデ。糸切痕は確認できない。 底部中央に穴が1つ穿けられている。	I
574-426住-2	土師器 羽 釜	床面+8 口~胴部	口(17.7) 高 — 底 —	①やや粗、2~3mmの片岩粒を少量含む。②還元焰、軟質 ③灰黄色	胴部ナデ。輪積痕が残る。 口唇部は内傾し中央がわずかに凹状を呈する。	II
574-426住-3	土師器 羽 釜	床面+10 口~胴上部	口(19.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	口唇部ほぼ水平。 鏝上部はていねいに整形しているが、下部は貼付時の痕跡を残す。	II
574-426住-4	灰釉陶器 (高台付)埴	掘り方 口縁片	口(14.0) 高・底—	①密。②還元焰、硬質 ③灰色	体部下半へら削り。釉は内面のみで外面には認められない。	II
574-478住-22	鉄製品 刀 子	床面+13	長(8.4) 厚 0.2	幅 1.5 重 8.1	刀子の棟区・刃区付近と刀身部分である。 錆化が著しく残りが悪い。	IV
574-475住-25 120	石製品 分 銅	床面直上 完形	高 4.5 孔径0.9	広横 5.0 狭横 2.5 重 89.5	分銅型の石製品。鈕部分を削り出している。 穿孔は両側から行なわれている。	III
574-579住-2 114	鉄製品 刀 子	床面直上	長(8.3) 厚 0.4	幅 0.9 重 5.3	刀子の刀身である。残りは良好である。 わずかに湾曲している。	VI
574-631住-3	土師器 坏	床面+20 $\frac{1}{2}$ 残存	口(12.2) 高 — 底 —	①密、多くの赤色粒を含み、粉状を呈す。②酸化焰、硬質 ③橙色	胎土が粉状のためへら削りの単位は明瞭でない。	IV
574-631住-4	土師器 坏	床面+14 $\frac{1}{2}$ 残存	口(12.2) 高・底—	①密、絹雲母を含む。 ②酸化焰、硬質 ③黒褐色	口縁部外面~内面に黒漆。	IV
574-647住-38 120	石製品 紡 錘 車	覆土 完形	径3.8/3.5 厚 1.2	孔径 0.7 重 23.1	蛇紋岩。広面、狭面は自然面。側面はノミを使用した削り。不均整で雑なつくりであるが、完成品と思われる。	III

## 第7章 調査成果の整理とまとめ

### 第1節 古墳～平安時代の住居について

矢田遺跡では古墳・奈良・平安時代を中心とし、時期不明や住居の可能性の高い住居状遺構と呼称した遺構を含めて750軒が調査されている。住居を対象とした報告は『矢田遺跡』以降順次報告書が刊行され、今回の7冊目となる『矢田遺跡Ⅶ』をもって終了する。住居以外の遺構や遺物については『矢田遺跡Ⅷ』でまとめて報告される。以下が今回の報告書を含めてこれまで刊行されてきた報告書の概要である。なお従来平安時代として報告してきた住居の一部を編集者の考えにより今回奈良時代に変更して扱った住居もある。

次に750軒の住居がどの時代や時期に属していたのかを整理したのが次の表である。

約25年間隔での時期区分を試みたが出来なかったために、約50年の時間軸を基に筆者の編年観に基づいて区分した。750軒の中で約50年の時期に区分出来たのは662軒であり、50年以上の時期幅の中でしか判断出来ない住居が52軒、時期不明の住居が21軒、住居状遺構が14軒となっている。

次に約50年幅時期区分で明らかな住居軒数の変化を示したのが、次の表でありそれを図示したのが第575図である。集落は4世紀から始まるが、6世紀前半まではわずかであった。それが6世紀前半の10軒が、後半になると125軒作られている。細々としていた寒村に突然大規模な住宅団地が造成されたような状態である。このような増加は自然な成り行きではなく明らかに強大な力により移住が行われた事を想定させる。このように6世紀に集落数が増加している例は県内では多く、その極端な増加が余りにも不自然な状況から、従来の土器編年がおかしいのではないかと<sup>(1)</sup>の指摘がなされている。筆者もそのように考え矢田遺跡の場合、6世

報告書名	報告書副題	報告住居の時代と軒数	備 考	報告書刊行年
『矢田遺跡』	平安時代住居編(1)	平安時代住居 91軒 奈良時代住居 3軒	平安時代住居として報告した94軒のうち今回3軒を奈良時代に変更した。	1990
『矢田遺跡Ⅱ』	平安時代住居編(2)	平安時代住居 80軒 奈良時代住居 5軒	平安時代住居として報告した85軒のうち今回5軒を奈良時代に変更した。	1991
『矢田遺跡Ⅲ』	平安時代住居編(3)	平安時代住居 89軒 奈良時代住居 2軒	平安時代住居として報告した91軒のうち今回2軒を奈良時代に変更した。 『矢田遺跡』と『矢田遺跡Ⅱ』での報告済住居12・145号住居出土の鉄器2点を追加報告	1992
『矢田遺跡Ⅳ』	旧石器・縄文時代と古墳時代住居編(1)	縄文時代中期 3軒 古墳時代前期 4軒 中期 3軒 後期 47軒	旧石器時代 石器ブロック 1群 礫群 1群 縄文時代中期 埋壘 7基 縄文時代中期 土坑 3基 『矢田遺跡Ⅲ』での報告済住居595・660号住居出土の墨書土器2点を追加報告	1993
『矢田遺跡Ⅴ』	古墳時代住居編(2)	古墳時代前期 1軒 後期 72軒		1994
『矢田遺跡Ⅵ』	古墳時代住居編(3)	古墳時代中期 3軒 後期 138軒	53号住居は『矢田遺跡Ⅴ』で報告された。その後多くの未報告遺物が確認されたので『矢田遺跡Ⅵ』で遺物を追加し再報告した。	1996
『矢田遺跡Ⅶ』	古墳時代住居編(4) 奈良時代住居編 平安時代住居編(4)	古墳時代中期 3軒 後期 40軒 奈良時代 125軒 平安時代 7軒 時期不明 21軒 住居状遺構 13軒 合計 750軒	『矢田遺跡』『矢田遺跡Ⅱ』『矢田遺跡Ⅲ』『矢田遺跡Ⅳ』『矢田遺跡Ⅵ』で報告済の16・23・36・52・121・125・132・141・188・284・426・475・478・579・631・647号住居出土の遺物26点を追加報告	1997